南紀德川史

第十二冊

南紀徳川史巻之百九

財政第二

目次

南紀徳川史巻之百十

財政第三

目次

南紀徳川史巻之百十一

財政第四

目次

南紀德川史卷之百十二

財政第五

御仕入方 一

目次

南紀德川史卷之百十二

財政第六

御仕入方　二

目次

南紀德川史卷之百十四

軍制第一

目次

南紀德川史卷之百十五

軍制第二

目次

南紀徳川史卷之百八

臣 堀内信 編

財政第一

緒言

按するに財政之事往古漢焉就中歳出入經濟之事は從來之成規最秘密を主とし司職之府と雖も長官及一二屬官之他は預り知る事不能況や他官他局之得て窺ひ知るへき處に非す之を御家中に公示したるは明治二巳年正月津田又太郎へ國政大改革御委任之際同人より願之上納拂大凡見詰調書を示したるを國初以來未曾有之事とす加之維新之際帳簿散逸故に此編を草する材料殆と皆無にひとしく烈祖以來之法制歷世歳出入の消長經濟之綱紀等連續經理之如何を今に於て調査纂述の方なし唯僅かに殘餘之書類乃至嘗て其職に在し一二古老之覺書記憶等に據りしに止まれは頗る闇中物を探るの憾なき不能亦不得止處也

一財政之事通して御勘定と唱へ其局元會所と稱し後若山にては評定所江戸にては御勘定所と稱す（一に司農府とも云是民政上よりの稱にして公文等にも事宜に依て稱することあり）長官は則ち御勘定奉行（元奉行と稱す寛政五年改）總轄して歳出入經濟は勿論民政收税金米出納土木營繕（山林池沼殖産備荒運輸）遞郵上下之俸祿內外之調度人夫役卒（所謂御中間在夫等之事）等及ひ一切金穀出納之事を掌る譬は今の大藏農商務遞信拓殖務諸省と地方官とを合併したるものゝ如し御勘定奉行之下に（元御勘定頭あり頭役也欠役になりしか不詳）御勘定組頭御勘定（內御勝手方（奥座と云）在方當番方（口座と云）公事方諸渡り物方御貸物方等の區別ありて在方は地

方ハ事當番方は雜務課公事方は罪人逮捕斷獄諸渡り物方は御切米御扶持方御貨物方は蠟燭之役羽織看板其他物品貸與之事をつかさとる）處し歳出入經濟之要融通之秘は組頭及ひ御勝手方與座之を擔任して最勢力あり又御作事奉行御代官（民治收税を司る御勘定在方と自から別なり在方は專ら地方池川築造修繕等をつかさとる）御金奉行御臺所奉行二歩口奉行御藏奉行山奉行御材木奉行大納戸御中間頭之類各部主任之長官別局に司職して奉行に屬し其制裁を受けたり又御勘定吟味役（元諸奉行と稱す寛政（一本永）五年改）あり頭役祿三百石高にして局外に立ち經濟之事を監督す蓋し今之會計檢査院の如きものなるへし會計官吏之組織大略右の如しとす

一會計局即ち會所設立は左之記に據れは　龍祖之時明暦元年に創る會所と稱するは寛文六年揭示之定書に因てみれは諸役人寄合場之義にて往昔事簡易執政初諸有司一同爰に出勤互に公務を議し或は事務を執りて後世之如く殿中役々別局を構へたるに非るへし故に會所とも寄合場とも又評定所とも稱したるならん若山にては會所評定所と稱し來りたれ共全く會計局の事にて諸有司會集議政等ありし事を不知又いつ比より單に會計局となりしやも不了頗る古き事なるへし唯近世も斷獄又は處罰宣告には御勘定奉行御用人御目付其支配頭等立會申渡たるなり該局和歌山にて評定所は丸の内に在り（上野七大夫の東隣海野兵左衛門邸の西隣今の德義社の前に當る）江戸にて御勘定所は赤坂邸の山屋敷に在りて奉行初日々出局殿中には奉行等之詰所のみありしなり維新前迄然りとす

御勘定所と稱するもの若山にもなきには非す西丸御勘定所御門ありて其内に一局を構へ御勘定人相詰專ら硯合調御切米手形等之事を取扱たりと也是小部分之一局にて御勘定奉行出仕は無之由今の中學校運動場之邊なりと云

御勘定根元覺帳に

丸之内會所明暦元年（未年（一本ナシ））より初り候由御勘定所帳面に相見へ候由此節より會所坊主被　仰付

書院方と唱候趣にて明暦比之帳面于今吟味方に有之候右會所坊主より吟味役被　仰付候は九十年も以前享保年中に初て被　仰付候事に相見へ申候

但書院方と唱へ來り候を吟味方と唱替候は朝倉三之丞殿奉行役勤之比より改替り候事

按するに書中吟味方とは近世公事方の事なるへし檢查官たる勘定吟味役は頭役にして坊主等輕輩之比にあらさるなり

寛文六午年八月

會所へはらせ候定覺

一寄合場へ罷出候諸役人朝五つ時分に出揃可申事

一年寄中御用相談の内次之間にて高聲仕間敷事

一御用相談の内に無用の雜談仕間敷事

一年寄中以公用何も近寄候へとの時唯私の時宜及辭退事還て尾籠之儀なり此等之輩本より不可有とはいへとも彌遠慮不可仕事

一御用相談之節指當り存寄之儀有之は無遠慮可申達事

一諸役人勿論怠慢陰所に退くへからす各夫々の座に相詰諸事に付御用の妨に不可成事

一御用有之ものは當用相濟次第早々退出可仕事

以　上

歷世經濟之大略

歷世經濟之紀綱歲出入之消長等統轄瞭然視る可きの材料なし依て今歷世に於ける平時臨時を不論歲出（寬祖以下歲入之事蹟に更に不存）上總して大費を要したるものと思考すへき條目（平常の吉凶典禮例規逍瑣細雜は擧るに堪へす）及節儉奬勵之類經濟に關する事項乃至諸公族之多寡御嫁娶之數江戶御參府御歸國初御旅行將た城閣殿邸災燒大土木之囘數等を略叙し御一世毎經濟之體面を示して末に卑見說明を付す固（一本ナシ）より揣摩臆測を不免之憾なきに非れ共以て彼此對照考察せは粗歷世之大概を推見するに足らん（か）

南龍公　元和五年八月紀州御入國　寬文七年五月御退隱　同十一年正月御逝去

慶長八卯年十一月常州水戶二十万石御拜領翌九辰年十二月五万石御加增同十五戌年春改て駿河遠江東三河之地を合五十万石御拜領水戶御拜領之節より御附人被　仰付又　神祖に御隨從度々江戶京都へも御往來大坂兩度之御出陣等ありと雖も御幼年中に付幕府之御賄ひなりしならんか駿（一本遠）御拜領後は或は御獨立之經濟なりしや不可知と雖も固より記錄なく不分明也依て元和五未年紀州御入國以前之事に省除す

元和五未年八月紀勢五十五万石御拜領紀州へ御入國

同六申年九月和歌御宮御造營七年十一月落成

同七酉年和歌山城を闢修す　幕府銀二千貫目を賜ふ

同十子年正月廿三日兩將軍江戶邸へ御成諸大名御饗應

後寬永三年三月同五辰年三月同七年二月にも同斷同十七年二月に將軍臨邸前後五回なり

元和十年二月京二條城御普請御手傳

同年九月大坂城修築に付槻材及江戸御作事の材木を御獻上

寛永五辰年二條城修築に付材木獻上

同年十一月江戸城外郭大土木助役

同十四年江戸本城土木助役

寛永四年八月日前國懸兩宮を新修す

同九年大智寺建立

同廿年粟林八幡宮を修す

慶安二年十月和歌妹背山寶塔建立

同三寅年二月甲州大野本遠寺佛閣僧舍一切建立

承應三午年和歌浦養珠寺建立

明暦元未年　大猷公之御靈牌所を和歌御宮之邊へ建立

一寛永十四年十一月嶋原一揆起り軍人を派遣す

一同十七年十一月廿三日御家中死去跡目御切米物成被下之制及御家中へ貸金之法を令す

一辰年暮（蓋寛永十七年）新參人可被　召抱御知行も無之に付牢人共一圓御抱被成間敷を令す

一寛永十八年二月振廻之節金銀彩色之木具堅停止音信禮式之制を令す（條目四十二條之内）

一同廿一年十月万端奢侈之儀禁制之旨を令す（教令數條之内）

一同年十二月五日御家中嫁娶之節差上物之制を令す

一同月御家中數十人幷與力等暇を賜ふ

　御壯年之時幕下万一之御役を御勤被遊んとの御志にて浪人ともを數多被召抱により國々之浪人皆望を懸故に夥敷聞へ　公儀御疑もかゝりしよし其上國用乏に付御暇出とあり

承應二巳年八月　養珠院樣御逝去御送葬のため甲州大野へ御越

一明暦三酉年江戸城炎上に付米參千石獻上

一同年江戸麹町上邸建築　公深意あつて結構宏麗を極む大久保彦左衛門評して二心なき普請と稱せりと(云)（一本ナシ）

　此前江戸赤坂邸建築あるへしと雖も記載不見

一寛文二寅年紀州大地震

一同三卯年十一月諸事儉約に可仕事前廣より被　仰出候通彌以可相守其上此度從　公儀御法度如此有之時は一入可愼事嫁娶之儀衣裳之品音信贈答之禮參會膳部の程其外諸事に付懈怠不可仕旨令あり法令十五條之内

一寛文六午年正月　御簾中樣御逝去紀州へ御還葬

一同七未年四月吹上新堀川堀被　仰出

一公御工夫を以て碁盤之圖と申繪圖を被成五色七色八色に彩色御領國納米之總高を擧免を四つ五つ六つ七つと極め第一御家中知行扶持方米第二に江戸御參勤上下の入用金第三在江戸中之入用第四

所々之御普請御作事第五御武具御馬具之入用第六所々御臺所入用第七御鷹野御能御宿鷹何樣之品々を分つて御普請御作事可有時は外之入用を減し又御加增御金可被下年は又御普請御作事を止こなたを入合ゆつうせし故勝手に增減之手品有て總ての御身体はすわりしと宮地久右衞門物語りけると云々久右衞門算勘に妙を得奉行職被　仰付候なり

一丹羽鄕左衞門御勝手の事を上申奉行共も御爲を大事に致し候と申上候へは　賴宣公諸士下々民百姓のいたまぬやう上に思ひ附するか御爲なり諸人の迷惑かゝる事をいたし御爲といふは大成誤なり大名之すり切滅亡したるは不聞なりと被　仰付たり

一御勝手御不如意にて御家中知行四つ物成の上を御借被成三年目に御赦免可有と被　仰出候時今二三年も其まゝ被　召上候はゝ御勝手に能候と奉行申上る　御意には三年と定たる處少しも不可違其子細は明日にも合戰に及時士足輕迄も一命を輕んし働き候へは手柄次第に加恩褒美可有と下知する時に上け米三年にてゆるすへしとの約束も僞なれはまた是も僞ならんと諸人下知も不聞一大事を取失ふなり僞りは天道に背くなりと被　仰御免有けるとそ

一今村小兵衞御家中（諸士[一本ナシ]）知行之內を被　召上候樣との主法を考へ書付を以て申出候付年寄衆番頭衆奉行衆を召此位之上け米にては諸士之勝手痛不申と小兵衞申出候如何可有之と御談之處長門守を初め皆々可然と申上大樣極候處へ加納五郞左衞門罷出無勿躰事候必す御無用に可被遊と長門守を面折遂に御止め被遊と云々

一御勝手御不如意之御沙汰有之砌雲蓋院にて宮地久右衞門之話に　神祖御讓之金銀幷御道具等の事

は不存候へ共大判金五千枚御拜領之儀は我等存居候其節は十兩替にて五十万兩に相成候然るに近來御不如意に相成候事寔に御時節にて候と咡(さゝやき)候久右衛門は初め九郎太郎と稱し炮術幷算術宜候付段々御取立にて後奉行職相勤 祖公外記

一頭役へ御示し之内に

無用之伊達道具遊山酒盛珊瑚樹三味線琵琶琴古筆すき造り庭花すき道具とり賣唐物やすき者町人ごせ座頭榮曜の藝者女事若衆あつかひに物を入或はかけ物之勝負に物を入候事又は家は表向人並にて雨さへもらされは能にいらさる作事普請等に費をいたす事是皆實之心掛なきしるしなり中略左も右も調ひ金銀事かけさる樣には誰人之上にも不成義なれは一方をは捨候て武士之作法に身をなしかため可申事なり

一万治之比は御儉約にて衣服之奢かつてなかりしとて口すさみにいつ見ても久しくなりぬふる羽織と戯けれは貴樣の袴いく世へぬらんと答へし程之事なりとそ

一同比備後表之疊を敷たるものありけるに人々珍らしかり見物に行けるとそすへて節儉なりし事おして知るへし

一寛文七年冬湊有田屋町へ御隱殿御新築之處繩からけ手塗之荒壁なりしと云々

御治世　四十九年元和五年御入國より

御退隱　二年一ヶ月

内

江戸御參勤　廿一回　内蒲原まて御越直に御歸國一回　小田原まて御越熱海御入浴御歸國一回

御歸國　十九回　内日光甲州大野久能山伊勢御參宮一回

御隱居後之御參暇も籠る以下同し

御上洛　三回

日光御社參　七回

攝州有馬御入浴　三回

熊野へ御入浴且御巡視　二回

熊野之他國内之事省く以下同し

（勢州御巡視（一本ナシ）　二回

鎌倉野島へ御塩浴　二回

御滯府中大宮御放鷹等略す）

御籠中江戸御下向

養珠大夫人公之御看病として江戸より紀州へ御往來

世子光貞公御籠中京都より紀州へ御入輿後江戸へ　御下向

若山城火災　一回

江戸邸殿同斷　一回

御簾中

養珠大夫人

公子六方内二姫他へ御緣組　二姫早世　御末男御分家

御代により御生母或は御由緒之御方御部屋樣御内證樣と稱し公族同樣御待遇之分乃至公女御緣組之後御賄御仕送り之分有之といへとも頗る錯雜且詳ならさる處あるを以て省く以下是に倣ふ

按に　烈祖菲猶日盛之法を以て量入爲出の大本を被爲立二百七十年之昔既に經濟之原理に則らせられし事は實に千古之御卓見と稱し奉るへし歷世之を國家經濟之憲法とす則近世之日盛且納拂大凡積りは正く其遺法なり夫れ建國之初め國防軍備民治休養殖產起業興廢繼絶等施政百端悉く巨費ならさるなし就中一に天下に忠ならんと四方之俊傑徵辟に汲々又頻りに群下之子弟に分祿新家を起さしむ是れ百石之勇士百名は千石之士一人に勝るの義ならん然れとも祿之世襲を許さす父死すれは子忽ち滅祿幼弱は童子組に入て扶持米を給せられ嗣子なく及ひ十七歲以下にて死するもの家を絶ち以下役諸士以下御徒の類は一代限り而して必賞必罰罪あれは斷然削祿放逐小過も許さす是を以て黜陟活潑士氣相奮て新陳更迭專ら箝藏平均權衡を得さしむ然れ共國自つから分度あり安藤直次は時として徵士之事を諫止し又可給俸祿も無之故浪人一圓御抱へ被成間敷或は國用欠乏により御家中數十人及與力等御暇被下等之事又御家中知行四つ物成之上御借入之事等ありて財政可に窮乏を告く是に依て儼に崇儉節用を奬勵御自奉之如き莨裘之別殿繩からけ手塗壁之菲薄を極め又諸士之風俵は某の破產を許して彼れは三日に一度汁を喫せし故也我等は五節句ならては汁はたかすと語れりと云ふ上下之儉素今より追想せは更に實事とも察せられ難き程な

るにも不拘富饒充實之果を見さりしは抑所以あるへし屢幕府之大土功を助役し兩將軍之臨邸は五回に至り（偃武簡易之世後世臨邸の如きには非さりしならんと雖も孝公崇敬は　龍祖之最盡し給ふ處尊嚴慇懃到らさる處なかりし歟）日光廟參は七回に及ひ追孝又奉仕之爲め頻りに社殿佛閣建立特に江戸邸之大建築又嶋原之事等經費の多事際限あることなし國用之不給亦宜哉

清溪公　寛文七年五月御家督　元祿十一年四月御隱居　寶永二年八月御逝去

寛文八申年正月御舍弟賴純公へ於紀州五万石御分知

同年四月より八月まて若山大旱

同年九月好宴遊溺醉色欲等深く可愼又無用之道具を好み私の奢不可仕嫁娶之式衣服音信贈答參會膳部其外諸事兼て定之通り彌儉約可守旨令あり法令二十四條之内

同年十一月十六日　幕府より金十萬兩御拜借

同十年正月　南龍公御逝去

同年十月　賴純公紀州御分知之內三万石上り二万石被進

本年二月幕府より於豫州西條參万石御拜領に付てなり

同年報恩寺建立二百五十石御寄附

延寶六年岡崎御坊建立

貞享二丑年二月二十(三)(一本二)日　將軍常憲公姬君鶴姬君を世子綱敎公へ御緣組御入輿

右に付御守殿新築御入輿之節三万石以上之大名賞襲之具を　將軍に獻呈御三家以下諸大名總
登城賀を上る崇敬鄭重を極め費途莫大と云ふ

元祿四未年紀州大に蝗虫生す

同五申年七月高野山僧徒蜂起橋本驛へ出兵す

同八亥年二月九日金二万兩御拜領江戸御中屋敷炎燒に依てなり

同十丑年四月十一日　將軍常憲公江戸御中屋敷へ御成本年二月御成御殿營繕御饗應濟て御老中初
め御譜代大名等御招請あり

同十一寅年　頼純公紀州御分知二万石を御藏米二万俵と御振替

一公或時諸公子への御教訓に我身飽食暖衣すへからすいかにも節儉をなし一飯をも家人に分ち一衣
をも家人に分つへしと心掛へしと云々

御治世　三十一年
御退隱　七　年
内
御參勤　廿二回　内御巡路御參宮一回
御歸國　廿四回　同同斷一回
右世子中及ひ御退隱後御參暇も籠る且世子諸公子にも度々御隨行熱海御入浴等あり
江戸御中屋敷類燒三回

公　族

御父公御在世　廿一ヶ月

御　簾　中

諸　公　子　九方　内公女江戸御下向二 御緣組三　三姫早世

一清溪公最　烈祖之遺訓を堅守崇儉嚴肅と雖も御家督間もなく五万石を　賴純公へ御分知引續き大旱五ヶ月に渉り十万金之大債を　幕府に仰か（一本る れ）又江戸邸之炎上三回に及ひ加之凶歉乃至高野騷擾出兵あり時漸驕奢を競ふの際　鶴姫君御入輿　將軍臨邸之如き爲に御守殿御成御殿新造其鄭重想ふへく巨費豈に量るへけん哉財政之缺乏不待論へし

高林公　元祿十一年御家督 寶永二年五月御逝去

一元祿十二卯年正月廿九日御勝手御不如意に付年頭歲暮之外方々樣御音信御贈答暫之內御止

一同十三辰年七月十九日若山市中大火

一同十四巳年三月十八日　將軍常憲公御成

五之丸樣御同道濟て御老中初御譜代大名御招請

一同十五午年正月銀札發行

一同十六未年八月六日近年御勝手別て御不如意に付二三年之間堅御簡略年頭歲暮之外御餞別御土産物等に至る迄御音信御贈答御止被遊

御祝儀に付御膳抔被進候節御附屬へ時服被下も御互に表向御内諚共止

一御祝儀に付御使勤之向へ時服白銀等被下も右同斷御音信物御省略之員數書あり

一同年十一月十九日　公儀より金二万兩御拜領江戸御中屋敷類燒に依てなり

一同年同月廿二日江戸大地震慶安二年以來之大地震なり

一寶永元申年四月十二日　御簾中御逝去

御治世　七年

御參勤　七回內四回は世子中

御歸國　七回內三回は世子中

江戸御中屋敷類燒　一回

公　族

御父公

御簾中

御舍弟　二方

深覺公　寶永二年六月御相續　同年九月御逝去

一元祿十丑年越前國丹生之內新地參万石御拜領

一寶永二酉年五月高林公御逝去

一同年七月十三日（御拝領之〔一本ナシ〕〔殿カ〕御知行參万石御相續に付差上

一同〔一本ナシ〕八月八日）　清溪院樣於若山御逝去

御病氣不輕御左右により御看病して江戸より晝夜御兼行にて御歸國

御治世　　八十日許

御參勤　　三回庶公子中

御歸國　　四回内三回は庶公子中

大喪　　三度當公共

公族

御簾中公子共無之

御舍弟　　一方　三万石御所領

按に　高林公に至て財政益窮乏を告る如く御繼統直に節儉勵行典儀且廢するに至るも治世僅に

七年何の暇かあらん

深覺公治世八十日許其間大喪三回嗚呼大厄之極に達せる哉

有德公　寶永二酉年九月御相續
正德六申年四月　公儀御相續

一元祿十丑年四月十一日於越前國丹生郡鯖江新地三万石御拝領御十四歲の時

一寶永二酉年御相續に付御領三万石公收

一同三戌年十一月伏見姫君御縁組

一御相續(被遊)[一本ニ無]兼て之御繰合之上格別之不時御出方有之必至と御差支可有御座處御勝手向格別御世話被爲在寶永四亥年先御代より通用之銀札御止被遊御家中末々まて二十分一差上金被　仰付

一同四亥年十二月　清溪公御簾中御逝去

一同五子年坊主手代小役人等合八十人程御暇出有之

一同七丑年四月左京大夫様御合力米一万俵御増都合三万俵被(進)[一本遣]

一同七寅年四月初て御入部御着城之日小倉織之御袴木綿之御羽織御馬上也御迎に(出)[一本入]たる面々美々敷著飾りたる人々は面目なく夫より士民儉約を嚴敷いたしたり

一同年六月　御簾中御逝去

一同年九月御簡略被　仰出候間費ヶ間敷事一切仕間敷夫に付御用濟之ものは早速退出可致當番之もの計り殘り朝は左時揃晝は早速退出可仕旨

一同年御家中差上金　御免亥年以來之上金をも翌年迄に御返し被遊先年より　公儀御拜借金同年三分一御返納

一正德四年凶作にて紀勢帳尻總高二十一万三千百三石と相見へ格別の御減に候餘は是程の事無之候へ共一体不作にて御收納相減と云々

一凶作にて御家中免不足にて難澁に及候節夫々割合を以て御足米被下

一正德四年年四月御政事御改革御家中十ヶ年の儉約嚴敷被　仰出

按に御自記政事草政事鏡に當年より十ヶ年儉約申付云々とあり此二書卷末に正德四年とあるにより本記の如く掲くと雖も御記中簾中云々とあり御簾中の君には正德四年より五年以前寶永七年に御逝去後御再緣なし又正德四年は　公儀御相續の前々年にして御相續之當年即ち正德六年正月への越金十四萬八百兩米十一萬六千石余僅十二ヶ年にてヶ樣に御積金米出來云々と云一書の記あり且該御二書の跋に是迄致辛勞書記置たるを子孫の爲め書記申候ヶ條不順の儀は段々心付次第書加へ候との御文ある等に依て考ふれは十ヶ年の儉約令は必定御家督間もなく寶永三四年比被　仰出たるへし然らされは前后の記撞着する處ありて事實符合せさる也兎に角御二書中御經濟に關する分を摘要集錄す

政事草に

諸役人近習其外の小役人共に小身たる者申付合力役料を遣し勤仕候者數人有之候此度十ヶ年中の儉約申付候に莫大の費成る事故人數改の上不殘指免し可申候尤是迄相勤候役筋遠近により相應の褒美可遣候併右數人の內數年實体に役功者にも指働き候者有之候はヽ得と吟味の上勤功書付を以可申出候儉約中と雖も加増可遣候是迄之通役義に可申付候右跡役之者合力役料なしに相勤り候身帶之者吟味可申付候又城下懸はなれ候諸役所之役料等は先例の通りたるへく候間向々へ可申達候

一自分儉約之儀は勿論簾中宰相ともに十ヶ年万事格別の儉約可被相用候右懸役人江戶國元共に可申付候遊興慰等之儀は一ヶ月三度に限り可申候衣食等之儀は是迄の通可申付候雖儉約中諸役人近習抔の者勤功有之者へ紋付等遣す時は別て難有と存何れも勤仕に進み有之時は忠義也又簾中端下共に可成程は減し可申候美々敷事勿論万事費無之樣に其向々へ支配頭を以得と可申付事なり

一江戶屋敷常府の者余慶有之候此度儉約申付候間常府之者不殘國元へ指下候間當年より來春迄の內出立可申付候尤御城附之者計り指置可申候

一領內の收納一ヶ年の出金高を以公私共に可相勤處不足之由にて指掛り不行屆時は町人百姓共へ才

覺金申付諸役人共の指働にて當用間を合候事粗相聞候無程相返し候儀は格別永く借取候事は相違也領内に有之金銀米錢は城中へ納置候も同意なるへし治世に亂あり今にも聊の事有之は領内中に有之者は用意可相成事也兼て取揚候ては無油斷内々取隱し置へし又家中抔には少たりとも貸上等決て申間敷候万一にも申付る時は兼て不如意の者共勤仕成兼病氣の者余慶可有之大勢の家中所持と云共用に立者多く有間敷也末々に至ても家中へ貸上は決て不可申付候

一儉約といへとも祈禱料并法事料諸祝儀等は格段重き事故任先規之例是迄の通たるへし

一神事祭禮等の諸入方是迄之通り任先規之例可申付事

一領内の神社佛閣及破損候はゝ修復又は造立無斷絶樣に可取計事

一音信贈答は是迄よりは格別減少に可申付事

一諸役人并小役之者共迄役料合力之儀は儉約十ヶ年相濟候はゝ先年之通小身たる者へは役料合力可遣候彌實躰に指働候はゝ末々は加增等可遣事也

政事鏡に

一三家之儀は（一本 公儀の御威光を以威勢ある事なれ共是を末代と心得候ては甚以不覺悟なり今にも乱世と成る時は平大名も同様の事也誰有て尊敬する者有間敷なり時に運には寄へきなれ共勢よきとて奢は勿論諸大名へ無禮等致間敷候）同様之事に候得共尾張殿水戸殿は如何被致候共於當家は子孫に至る迄決て奢り不可致候三家と御譜代大名は同様の事也三家の内不行跡の時は　公儀より隱居蟄居等も被　仰付事也

一當代は金錢を以寶とする時節なり（一本アリ 段々末世に成程金銀に計眼を付忠孝は末に成と見えたりしかれは是か爲に大困窮不仁のものも出て）貴賤共に金錢の爲に善惡可有事也依て主人たるもの別し

て奢無之様平日心掛專一之事なり勿論家中の儀は無益之費無之様可心付候然れとも町人百姓には
構無之事也

一儉約の筋は先衣食住の三つ是を兼て物入少に可致事也一つには衣服は宰相簾中方共に美服は相扣
可被申候二つには平日美食相扣可申候三つには諸普請立羽に致候義無用に可致候江戸表は別て屋
敷所々に有之事ゆへ[一本ナシ]（一ケ）年中之手入普請斗りも莫大之物入に候間已來念入候作事は相扣へ候て
唯丈夫一通にて可然候萬事物入少に爲取計可申候也[一本ナシ]（追年勝手向難澁之時は無據町人百姓共へ用
金申付候ては不得心之者も有之上を恨る時は爲國主之調伏も同前なり
儉約に三段可有事也大名の儉約旗本の儉約陪臣の儉約此か儉約筋とくと勘弁可然事也片事に心得
大名儉約過候ては却て不相續成へし）
儉約は隨分可致儀なれ共家格抔落し候様成儉約は致間敷儀也[一本アリ]（家の下格になる事は大不吉なり）門
外之儉約は諸人へ目立ぬやうに可致事なり[一本アリ]（唯無益の費無之様に儉約申付る事に候）
家中の儉約[一本ナシ]（筋）は稠敷可申付候[一本アリ]（無益の費無之候はゝ假勢に相續可致儀也自然と）少々つゝも物入
有之時は年中には塵も積りて山に成といへは不奉公も可致事なり
儉約に付ては平日夜は五つ時に限り相仕廻可申候夜中の出會可爲無用候不斷の出會暮六時に限り
可申候[一本アリ]（夜中見廻りの者差出候間其旨心得可申候）
町人百姓共へは儉約筋は決て申付間敷候[一本アリ]（如何となれは）彼等は銘々一分切にて家屋敷田地相求夫
々の家業致商賣者なれは[一本アリ]（國主の用にも相立者も有之候）國主よりの厄介無之者共故心任に致置可

然事なり（〔一本有り〕別て下々は隣國の學風儀をもの故幕方は豐凶に依て可致事なれは儉約筋申付候儀は無用の事に候尤も可申付儀は他領の家中侍分上の者へ乘打無禮法外の儀不致樣稠敷可申付候

一當家相續之儀は先領内之有高何萬石其内より家中へ何万石遣し其外寺社領寄付何程の高殘て藏入何万石と云事を改め右之内より金成玄米幷足輕小人仲間給金給分等迄引落し殘る何萬石より出金高（〔一本ナシ〕何程納米）何程の收納と勘定して右に向て侍分幷小人仲間女共迄も召抱候筈之事なり然る處代々新規之取立家中一代之內には十人二十人或は三十人も召出候樣に相見へ候大身は不見得候得共代々左樣に召出候ては家中許大勢にて藏入收納は次第に不足に相成又附屆は先祖より餘慶相成事故此度十ヶ年の儉約も格別に申付候間此末新規取立は不申付候（〔一本アリ〕間夫とも諸人に爲勝所有之か申立の上召出可申候前々召出候者內々吟味の處差て爲勝藝能も無之もの向々より申立の上にて召抱候樣相見え候總て物には間樣可有事吟味第一なり）

一大名たる者身分威勢と計り心得不斷に金錢をあらく遣ひ無益の費無之樣心得可申候（〔一本アリ〕先第一に町人共を賴辜所を致相談事なれは數年の內には返濟筋不勘定にては役人共及度々申譯計致す由左すれは歷々大名金錢の爲に下々へ手を下ると云ものなり外聞にもかゝる事有時は誠に心外の事なり依て是を思ふに金錢は大切に心得無之樣常々心得可有事なり）

一治世には爲金錢立身も可有又罪にも沈み或は家をも失ふ事可有也（〔一本アリ〕然は平日心掛油斷不可有事なり善惡二つの物の先立をは金錢にてする事なり）眞の寶にては無之候得共自由と不自由とを分つものなれは一錢も無益の遣方無之樣第一に候

一入の奢にははてしなきもの也唯粹と野夫との差別迄也古歌に

上見てははてしなき身の世なれとも我をうらやむ人もあるへし

此歌の心を能心得候はゝ可然事なり政事の破れは奢より發り猥りに成と知へし

（以上（一本アリ）政事草政事鏡之内）

一大島伴六奉行役相勤此人御勝手御繰合に妙を得て御勝手を充實にし御金藏之根太折たりと世に云得ふ

按に伴六は元祿七戌年六月御用達（初大御番三百五十石（後御供番）（一本を頭す）御普請奉行御目付に歴任御用達となる）より御勝手御不如意に付會所へも罷出諸事致吟味存寄之儀申達候樣被　仰付同九子年二月的場門左衞門跡奉行被　仰付正德五未年八月十五日依願奉行役を被免たり廿年間財政を統理し郡治をも兼務祿千石大御番頭格に累進す經濟に長するの聞へ高く嘗て加州侯人を使し敎を請れし事等　有德公本記及武術傳に詳也

一納拂帳を奉行淺井忠八差上候節さらさらと御覽被遊其内御船方拂大分之入越を御思惟の上緩急節用の事種々御沙汰の品あり

御勘定筋に付算術を付し御答書差上候に御附紙を以て御下け其誤謬御吟味之事あり

一按に淺井忠八は元祿十五午年八月御勘定頭拜命（忠八は淺井駒之助善成の三男にて初二十石大番組に召出され名草奥熊野白子等の郡奉行に歴止三十石に御足米三十石たりし駒之助は玄番と號し長保寺夢物語を筆したる罪により円丸へ幽囚せられ遂に正服端座食を絶て死す事は名臣傳に詳也）　八十石に御加增御足米四十石を賜り寶永三戌年九月御切米を地方二百石に被成下同八卯年正月三百石に御加增正德四午年十一月町奉行に轉し同五未年九月大島伴六跡奉行を命せられ四百石に御加增御勝手方在方元に成勤むへき旨を拜し追

々昇進八百石大御番頭格に至り享保十六亥年九月奉行役を免せられ同十八丑年隱居延享四卯年四月八十九歳にて病死す會計官に在る三十年間也二十石よりして一代に八百石大御番頭格に累進其能吏たる知るへし　大慧公亦能く親任し給へり

一此比奉行役に田代七右衛門あり寳永五子年九月淡輪新兵衛跡奉行を被命四百石に御加增（初伊都郡御代官八十石にて元祿六年十月御勘定頭に拜任同七年二月添奉行打込勤三百石と成り後　主税頭公御勝手役又御本家御勝手奉行を經て如本記）同七年閏八月江戸詰中病死會計在職十八年也（七右衛門養子を田沼專左衛門と云　有德公御供にて　公儀へ被召出則田沼玄蕃頭の祖先也）又三上兵之右衛門は元祿十一年七月添奉行を被命八十石に御加增御足米四十石を賜ふ（初三十石御用部屋詰諸役所見廻り御勝手之儀心を付可申旨被命元祿十一年六月御勝手向之儀能相勤る旨にて六十石に御加增御勝手御用只今迄之通との事）同十七年正月知行二百石に增秩寳永三年二月三百石に御加增同五年勢州役に轉し享保二酉年五十九歳にて病死す此外奉行添奉行に井澤彌惣右衛門赤堀與七兵衛等屬官に石川又右衛門下村傳大夫如きありて任用人を得財政郡治共整齊の美をなせし由なれ共其傳記等詳ならす彼の有名なる伊都郡小田藤崎の兩堰を新鑿し所在の荒蕪を拓き千歳の國利民福を振起したる大畑才藏を民間に拔擢したるも大島伴六田代七右衛門輩の功といはさるを得す才藏の事は郡制の部に詳記す

一雨天之節御庭へ御出被遊候御足駄鼻緒自今天鵞絨を止め竹之皮に可仕旨被　仰付

一御膳黑飯にて蔬菜之御料理常之御帷子も殊之外太布にて冬の御膚着は木綿にて長福樣にも綿衣のみ被爲召候

一御臺所御用は御重御燒飯唐辛子味噌昔許御膳御吸物一種計御肴無之御酒被召上若し急に飯を御好み被遊候儀も可有之候間晝御膳之御鉢を殘置候樣御冷飯を可被召上儀も可有之と被　仰出其通仕

候處每夜御好み云々之事言行錄節儉之部にあり

一紀伊國にて横目二十人を定められ朝夕城下をめぐらせ士民の風俗をたゞされけるたまたま藩士之家にて小兒に絹布着せしものありしかは速に其よしを言上すやかて其父をめされ汝いまた武士之子をそたつる道をしらす幼きときよりきぬを着すれは温暖にすぐるによりその兒成長して多くは虛弱になり物之用に立さるものぞ今より構て木綿のみを用ゆへしと教諭し給ひけるこれより紀藩之士は美麗之服を着するものなかりしとぞ

一御國は天和元祿之御入越御難澁にて諸願如何とも可被遊御事無之候然れとも上より押て諸願御取上無之事を御不快思召或時町奉行中を密々召して被　仰付候は諸向より先例等之品を以て都て奉願るを御捨置難被成逐一に願之義は叶候樣被遊度御本意に思召候然れ共御勝手御不如意之御事に付多少に不限御物入有之儀は思召に難被任候得共上之思召にて願之通不相調旨被　仰出候ては人氣惡敷相なり國政之害に相成候依之願取次之ものへ右願は奉行共へ談候樣にと可被　仰付候間いつれも奉行共へ談可申候其節誰談候とも物入候儀は多少に不拘一向不相成候との儀其方共心得にて可申聞候上より被　仰出候事のよし申もの有之候とも　御意にても不罷成候と堅可申聞旨被　仰付候其後諸向之願　御前相濟候ても前段之品に付奉行所にて業難成由にて少も不時御物入無之依之年月を不經して御勝手御取直出來夫々段々御貯之金銀米錢夥敷出來候事其後奉行衆之威光之御國中へ行渡りたる事前代未聞なり自是して郡奉行御代官於在中耕作出精し正道を守り村々立行事を致候ものは奉行中へ其人物を可申達候若油斷して朝も遲く作方へ懸り晝も油斷或は博奕仕候

ものは早速奉行所へ注進可申聞との儀を申聞候

一正德六申年正月へ越金若山元方御金藏有高

金十四万八百八十七兩餘

米十一万六千四百石

御初年は　御先代樣より之不時御物入にて御勝手向必至と御差支之處格別に御世話被爲在僅十二ヶ年の間にヶ樣に御積金米出來其上凶年も打續在中免合も格別に御用捨被遊候由件之通にて御藏入も夥敷相減す

一（以下三本ナシ）右數條既に世史に記する處と雖も尙爰に蒐錄す此他經濟の事質素節儉は永く御家中の憲法とすへし若之に反違せは當家破滅の基たるへしとまて御通論之御遺訓等は御自著之紀州政事鏡及紀州政事草に詳なり

御治世　　十二年中

御歸國　　六回　內三回は公子中

御參府　　七回　內四回は公子中

日光御參詣　一回

熊野御巡廻　一回

公　族

淸溪公御簾中　　御在世三ヶ年

御簾中　　　御在世五ヶ年
公　子　　　御三方

按に經國理財之要は量入爲出節用勤儉に在るは千古不易之定理と雖も封建君主專制之世態に在ては人君自ら率先躬行之盛德あるに非れは假令房社の良弼ありとも力及ひ難しとするは古今の通歎なり

有德公大厄の後を繼せられ首に御自奉之大儉素を率先衆に示され而して着々經濟の大計を經綸せられ良吏大島伴六淺井忠八等を御拔擢經理之任に當らしめ以て十年の節儉を令し諸士俸給二十分之一を徵し事簡易を旨とし勉めて冗雜を禁し力を溝洫殖產に盡して偏へに斯民休養の大仁政を行はせらる誰か感泣風靡せさらんや故に凶年歲入數十万の劇耗ありしにも不拘御治世僅に十一年余に諸士の上け金幕府の負債を還付し加之金十四万八百餘兩米十一万六千余石を蓄積し金庫の根太陷落すと國帑の富實如此は歷世年唯公之時に見るのみ豪奢驕侈は家國を轉覆するの酖毒節用勤儉は永世不拔の御家憲たるへしと淳々孫謀を御自著之兩書に遺し給ふ豈悚然省察せさるへけん哉）

大慧公　正德六申年五月御相續　寶曆七丑年七月御逝去

一享保七寅年十一月十六日　公儀へ米二千石年々御獻納但享保十五年まで
右は近年諸國風水損毛打續御藏入不足臨時御物入多く御旗本初へ給米金渡し方も差支之旨にて

嚴敷御儉約御觸有之御三家方よりも被　仰立之上尾紀御兩家は米二千石つゝ水府は米千石と御
差圖によりて也

一同年御家中儉約之儀嚴重に被　仰出
衣服之制音信贈答吉凶事下男下女給銀衣類之事に至るまて巨細被　仰出役人打廻り相改め可申
との事委曲當年の本記に詳なり

一同十六亥年二月朔日御城下金銀遣停止諸色紙錢にて通用
同十八丑年六月八日に至り右紙錢通用停止

一同十七子年十月紀勢御領分の内虫害損毛左之通
田高三十一万五千五百十石程
當秋西國四國中國筋作毛夥敷虫害損毛甚敷未曾有之凶荒にて西南國々にて餓死するもの九十六万
九千九百人と云ふ

一同年十二月二日　公儀より御金拜借
右金額記載なしと雖も此凶荒に付万石以上一同へ拜借被　仰出三十万石以上は金二万兩之割合
に付御家に於ても同斷なりしならん返納は來る寅年より五年賦上納と被　仰出

一同十八丑年二月十二日御領分損亡に付當年より三ヶ年の間獻上物減少　公儀より被　仰出

一享保十八丑年紀勢御領(一本分)(内)困窮人へ米穀三千七百四十石余被下

一元文元辰年八月朔日若山にて鑄錢

熊野よりの出銅を以て鑄錢出願之者有之　公儀へ御達の上被　仰付

按に若山北新金屋町の東邊の地を錢座趾と云ふ宇須市太夫錢座を命せられ元文二年巳正月より寛保五年丑二月迄錢を鑄たる所也と紀伊國續風土記にあり

一寶暦元未年三月廿五日此節御勝手甚御差支に付嚴敷御儉約被　仰出

一寛保二戌年十一月　左京大夫樣御合力米一万（俵）（一本石）御減都合二万（俵）（一本石）被進

一同四未年六月世子宗將公へ　伏見順宮を御緣組

役々御締方掛り被　仰付

一同二申年正月六日　公儀より金二万兩御拜領

一同年十月御嫡孫岩千代樣重倫公へ　有栖川姫宮を御緣組　御引移りなし

昨五日江戸御中屋敷御燒失に付てなり

一同六子年九月十六日若山暴風雨紀之川出水御城下浸水勢州御領分も風雨損毛　公儀へ御達しあり

一是歳御家中水難者へ金二千二百五兩余銀二十八貫九百目余被下町在へも米五百石余被下

一同七丑年五月　世子宗將公　御簾中富宮樣御逝去

御治世中　四十一年余

御參府	十七回	御歸國	拾七回
日光御參詣	一回		
伊勢御參宮	二回		
甲州大野本遠寺御參詣	一回	御歸國之節	

熊野御參詣　一　回
江戸御殿燒失　二　回

公　族　方

諸公子　十六方（外に御庶子御內室一方）
內御卒去　六方　御緣組　八方
御　孫　十三方
內御卒去　五方　御緣組　一方
（御養ひ）左門樣　頼雄公　享保三年御卒去

大慧公御繼統之七年始て御家中節儉之嚴令ありて衣服音信之制を勵行せらる是を享保の被　仰出といふ蓋し公先世富實之蹟を永させられ國家幸に無事といへとも有德公之遺憲を深く御遵奉扃戸綱紀の傳旨なるか故に十有六年の間財政に關するの一記事なし其無爲想ふへし然るに享保十七年關西大凶荒を來し紀勢封內田三十一万五千石余之虫害を蒙り歳入殆と皆無に類し加之窮民賑恤の事あり而して御家中半知之事もなかりしは尙其豫防之蓄積有て然りしか今之を知るに由なし且公多福公子公孫三十君あり所謂方々樣と稱す各々別殿に御住居御附屬之役々御臺所御賄ひ吉凶典儀御音信贈賄區々之規定體裁最細雜嚴肅に渉り他へ御養子御緣組あれは男女役々隨從爾后之俸祿は無論或は御臺所をも御里方より御仕向に成り又は時々御里方之御請求も不得止御姻戚は益增加隨て御誕生初吉凶寒暄の御交誼等一朝一夕にあらす總して公女御緣組之御資裝は京都（攝宮家方）尾水兩

卿（田安一橋）諸侯との三級あつていつれも壯麗善盡し美盡す剩へ侍女之下婢則はしためと稱するものゝ水盥足履に至るまて一切官之準備に係り恰も一女公子の嫁し給ふに數十女之嫁装を治する如し是等悉く成規あつて詳細は記して公家典範にあり其鄭重到底今日想像の及ふ處に非す又概して諸士之家譜を按に駿河越旧家將た　清溪公御代の他は　當公之世に新進するもの多しとすされは士籍之増殖は概略此時に著しかりしならん是等之影響結局財政に及へきは當然にして寶曆元年には國帑大に疲弊し節儉勵行の令あり續て江戸殿館の災御嫡孫の御縁組紀勢洪水之難世子簾中の大喪並臻る財政之窮亦宜ならすや

菩提心公（寶曆七丑年八月御家督　明和二酉年二月御逝去）（江戸にて）

一寶曆九卯年閏七月四日一條姫君を御再縁京都より江戸へ御入輿

一同十三未年四月御勝手御不如意に付御嫡子樣御定銀御減し

　方々樣御定銀も御減しの事と察すれ共筆記不見

一明和元申年四月　左京大夫樣御合力米五千俵御減し都合一万五千俵被進

　御治世　九ヶ年中

　御參府　一　囘

　御歸國　一　囘

　熱海御入湯　世子中　一　囘

永隆院樣江戶御住居新御殿燒失

公族方

御簾中　　御再縁

諸公子　十三方　内　御養子 御縁組 五　御卒去 一

御弟妹　四方　内　御養子 二　御縁組 二

公御治世僅に九年御參暇兩囘に止り永隆大夫人の新殿火災之他臨時大費なしと雖も　簾中初諸公子十九君在せられ歲費亦先世に不讓へく彌縫之策に汲々たりし如し

觀自在公 明和二酉年三月御家督 安永四未年二月御隱居後御在國

一明和六丑年御勘定奉行筑紫久左衛門松(平)甚五左衛門申上候趣御用被遊候處右之比先御收納差入御借用取計諸役人一統先納調達而已に相掛り居必至と差支相成右兩人申上候趣相達相成候故に哉御成敗被爲在以後福田儀左衛門申上候趣御用ひ被遊以前之借用金百七十万兩余御斷延に相成其後全御收納許を以御繰合相立候に付凶年并差湊ひ御難澁には被爲在候得共格別之御借金も無之先納等は不被　仰付候

併し夥敷御斷延に付一統難澁不一方在中も聚斂苛酷之取計にて大に傷み候事の由

一按するに筑紫久左衛門松本甚五左衛門御成敗は明和六丑年二月廿六日之事なり久左衛門は知行千石大御番頭の上御勝手御用頭取當分御用役勤松本甚五左衛門は知行千石大御番頭格助御用役

御用申談助なり兩人とも家斷絕す委細　當公之世史に詳なり

一明和六丑年八月　御簾中樣御緣絕未た御引移り御婚姻無之なり

一安永二巳年二月　左京大夫樣御合力米五千俵御増都合二万俵被進

御治世　十年

御歸國　四回

御參府　三回

熊野御巡行　御隱居後　四回

伊勢御參宮　同　二回　内 一回は伊都郡橋本驛より御歸着 一回は大和山城へ御立寄

江戸御殿燒失　一回

公族

明脫院樣菩提心公　簾中

諸公子　九方　内五方早世

御弟妹　四方

一公天資英剛急劇時之奉行二人激怒に觸れて御手刄に遇ふ是れ歳入先ん納を差入負債以て目下之急を彌縫經理之大本を忘れ嘗て言上する處に背戻したりといふに因ると傳へたり後之奉行斷然先ん納を停め年度之出入調理を得といへとも其實先世よりの負債百七十万兩を斷延に取計たり斷延とは債主に對し財政困迫之故を謝斷返還之期を延引せしむるなり官之嚴命拒非するものなしといへ

とも遷延際限なく随て聚斂苛酷郡中痛苦すと計吏寒心の時と云ふへし

香巖公　安永四未年二月御相續　寛政元酉年十月御逝去

一安永四未二月廿八日御勘定奉行服部八郎右衛門へ御勝手御用久々勤馴候付此上御勝手御取締精入取扱存寄候儀は無遠慮書付を以て可申上樣被　仰付

一同年四月廿七日兼て御勝手御不如意之處當春來別て御物入多く御繰合難澁之趣此以後若　大殿樣御初め明脫院樣永隆院樣菩提心公御生母清信院樣觀自在公御生母御用向等御差支相成候ては御心外に思召候將又前々御家中渡り者御扶持方不滯り其上惡米等相渡し候儀も有之たる趣此上右等之儀無之樣被遊度候間御儉約之儀堅く相守可申旨被　被出

是節江戸にて御救御貸方と申事始る是は近年小祿之向貧窮に及ひ町人より借銀し每月の高利に追はれ勝手取續き難き事を御察し此御貸方にて町人よりの借用を濟せ候樣との思召なりと云

按に此御貸方は維新前迄も御金藏內に役所ありて難澁之向は御切米諸渡り物等差入安利を以金子借用勝手取續便利にせしものなり

一同年六月十五日御家中御儉約之儀彌堅く相守家作衣服質素に致し御役替幷仲間寄合等之節料理等諸事手輕に可致旨被　仰出

一同年七月四日御勝手御取締り方之儀長門守丹後守惣左衛門申合行屆可取計不依何事細雜に右三人了簡承り其上了簡難成儀は可伺出旨御用役御用達へ被　仰聞

一同年十一月廿八日岩千代様（舜恭公御事）御袴着御祝儀有之一同へ御酒被下御囃子有之是迄終に不覺御賑敷其夜殿中諸番諸役末々迄御小姓共どうに上候迚追廻し不怪賑々敷有之候總て御儉約之御時節に候へとも　若君様の御事に付てはヶ様に御祝ひ被遊御嫡子に被　仰出候節も右同様の御祝被遊候

御嗣君の御上に付ての御祝（抔）[一本杯]之御費は露厭はせ給す候

一安永五申年六月九日　公儀より金三万兩御拜借

御領分打續き御損毛其上御物入差湊ひ御勝手向御差支に付御願に依てなり

一同月廿六日諸頭役へ儉約之儀追々被　仰出之趣堅く可相守旨被　仰出

一同年七月七日奉行へ左之通被　仰出

御城中御小座敷疊損し飛繕之節より表へりとも位下候様御小座敷御椽疊繕之節より近江表木綿へりに同御次疊同斷之節より琉球表へりなし

御座之間御次御三之間疊右同斷　御膳所内琉球へりなし奥之部屋同斷

御座之間障子美濃紙繼手に不（搆）[構カ]御小座敷幷御次土佐半紙張九月三日にも奉行御用達御薬込頭へ被　仰聞

諸役所にて御儉約先々よりの仕來りに不拘省略可致旨

一（[一本アリ]安永七戌年十二月十日　御勝手御難澁に付御拜借被　仰立之處不相濟格別之譯を以先達ての御拜借御返納當冬より七ヶ年御差延被　仰出）

一安永八亥年七月　明脱院様御逝去（[一本ナシ]紀州へ御葬送）

一同年十二月江戸御家中諸渡り物滞り有之趣御默止難被遊候付渡り不足之處浮置米之内正米にて相渡し若山勤之者共役料其外滞り筋も同様に取計可申旨

一同九子年三月兼々御勝手御難澁之上打續不時御物入差湊ひ御償之方便も無之思召之趣　大殿様へも被仰上五六年之間万事御先格に不拘御減方被　仰出諸役所勤之者も御用之株減候ても御締り方肝要に心得取計候様被　仰出

又四月に

御家中猶又儉約可致は勿論の儀總て世上風俗華美になり分限不相應に成行候間都て虚禮を省き實義なる風儀を第一に心掛儉約可致旨

此節御家中普物贈答餞別土産品嫁娶葬禮佛事家作普請衣類食物饗應參會等節儉之制被　仰出

一天明元丑年二月坊主諸手代組足輕末々兎角衣類背きの品着用音信贈答等いたし候趣相聞候間自今堅く相心得可申旨

男女奉公人過分之切米を望み候もの有之不屆に候以後右躰之者は召捕入牢可申付事

一天明元丑年四月御參府之節御供増渡り金暫く相止候へとも前々之通渡し方取計候様被　仰出

一同二寅年二月　公儀より金二万兩御拜借

三月廿八日右御拜借被　仰出心得違御締り方ゆるみ不申嚴重に取扱ひ可申旨奉行御用達へ被仰出

此節種姫君様（将軍浚明公御養女）御入輿に付御中屋敷御守殿御普請あり尤御拜借金は外御用之品有之ての

由と云

（一本アリ）（一同年十月廿八日紀州勢州御領分御損亡の儀月番御老中へ御達）

一同三卯年追々御物入差湊ひ去年は度々の風水にて作方不熟御收納夥敷減少當年御繰合差支候付御普請當年は御延引諸役所向万端手を詰御用の品にても來年に差延候樣被　仰出

一同四辰年五月疫病流行天下飢饉御領分一饑民なし

（一本アリ）（一同五巳年十月廿七日紀州御領分内にて當年十七万四千十九石余御損失有之旨　公儀へ御達）

一同六午年二月廿一日　公儀より金五万兩御拜借

種姫樣（一本ナシ）（將軍浚明公御養女）　岩千代樣（舜恭公）へ御緣組御入輿御手當に付てなり

一同年凶作打續き末々の者難澁に付中橋邊ゟ西丸邊之外堀浚被　仰付相應之夫錢被下窮民惠を蒙る

（一本アリ）（一同七未年七月十三日　種姫君樣當冬御入輿に付御入用相增候處兼て御勝手向御不如意の上去年不作にて多分御損亡旁にて御願之品有之候付御勝手向直り候迄格別之思召を以今年より三ヶ年の間金七千兩つゝ　種姫君御手當として可被進旨從　公儀被　仰出）

一同七未年九月十九日御家中半知被　仰出

去寅年（天明二年なり）凶作以後年々不熟收納取劣不時御物入差湊ひ去年冬凶作御高夥敷減し當春作不熟必至と御差支御家中諸渡物御扶持方も相後れ江戸若山町人共御拂去辰年以來相滯り外に被遊方も無之故御家中知行御切米之内是迄の浮置米御用捨當年より六ヶ年の間一同半知被　仰付之旨

知行百五十石御切米六十石以上一同半知之筈

右以下小祿之面々は歩合御用捨之筈

江戸常府常詰一ヶ年詰勢州上方詰とも歩合御用捨

一知行御切米に準し被下候金銀一同半減之筈

女中一同歩合輕く差上米有之筈

御藥込以下の者共右同斷

御家中上米之外諸上納幷若山御貸方瀧谷借用寺社方借用祠堂金貯町人借諸町人差入借共都て

年限之間浮置之筈

一九月十一日御勝手御不如意に付公邊御獻上物等御省略之事御達被　遊

一右半知被　仰出候節御直書を以てヶ樣に勝手成り下り候事我等不德故之儀と後悔不少云々の仰あり是は御守殿御入輿大奥向は万事　公儀の御式に准せられ莫大の御物入且は此時に當て十八九ヶ所之御方々の御臺所入用有之尋常の御物入にては御賄難成且此兩三年凶歳饑饉にて御國用不足依て半知被　仰出しと云々

半知被　仰出し一日御自身にも御半知とて御袷召され終日御寒を御忍ひ被遊しよし鮓は甚御好物なれ共半知被　仰出後はすきと御止め被遊朝夕の御膳御湯漬を被召上御常服は木綿御着用にて不斷御身之御不德を被仰諸士之難百姓之困窮を歎かせ給ふと云ふ

一天明七未年十月廿七日　種姬君樣御入輿　常陸介樣舜恭公御婚姻

御中屋敷御守殿御普請九月出來同廿七日に　常陸介樣御引移りなり御守殿御普請之疊七千疊余

は若山へ被　仰付江戸廻りに相成候故御國大に潤ひ候よし右御普請上棟之節は例よりもよろしくと被　仰出大夫を初め諸有司末々あるは諸職人車力のやうの賤きものともゝ强飯御酒肴被下總計千八百人許人々謳ひかなてつゝ終日賑ひ中々言語には述かたしと云

一天明八申年大澤文左衞門へ奥向幷諸役所御用向御省略之元に成規矩相立御勝手御取直し有之樣取計可仕不限何事文左衞門委相談御入用減方可仕旨被　仰付

一寛政元酉（一本アリ年七月九日　種姫君樣御入用向當年迄御手當之儀猶又別段の　思召を以て來戌年分より寅年迄五ヶ年の間金六千兩つゝ　御守殿御入用御手當に被進旨被　仰出）

一同年冬に至りては御病ひ次第に重らせられ　公儀より御拜領之大人參も日あらすして用ひ盡させ給ひけれは同し品を求めて奉りけるに御家御相續之爲にこそ越させ給へ御國用不足之折からかゝる高價之品は御服し給ふましとて更に用させ給はさりけるに彥坂儀左衞門御側近く寄りて召給はすは恐なから御口へ込み奉るへしと思ひ入て申上しと云々

一御自著、五愼敎解、童子訓に

美服を好むへからす厚味を嗜むへからす分限を守る事家を治るものは金銀米穀之事知らて叶はぬ事なり抔懇々御敎誨之事詳なり

此他御自奉極めて御節儉に被遊我は紀州之味噌用人と御自稱唯日夜財政回復に汲々御苦心被遊候事は世史御言行錄節儉勤政之部に詳記あり爰に略す

御歸國　四回
御參府　四回
日光御社參　一回

公　族

大眞公　觀自在公
明脱院大夫人　菩提心公簾中
御養君　舜恭公
種姬君　舜恭公簾中
菩提心公公子　六方　内　御養子一　御緣組一
觀自在公公子孫　十方　内　御緣組三　早世四

合二十方

外に永隆院（菩提心公御生母）清信院（觀自在公御生母）の二（大）（一本ナシ）夫人も在ませしなり

古老之言に曰く凡歷世財政之至難を指摘せは　香嚴公の時に勝るものなしと夫れ先世よりの國債百七十万金而して公族廿有余君御身は御妻妾なく公子なし御養嗣と云を以て特に御孝悌を被爲盡苟も老君世子の上には百難を排して優奉慈遇に御余念なし反て御自奉を顧れは臣子の口可憚程之菲薄を極めさせられ御小座敷之疊琉球表へりなし抔とは空前絶後予は紀州の味噌用人に來りし也と御自稱ありて一に節儉を群下に御訓誨日夜財政之回復に汲々維日も足らさるの御苦惱は既に記

載の如し然るに旻天不憐天明の大凶荒を降し止むなく御家中の半知を令せらる令出るの日は御衣を薄ふして責を御不徳に歸し給ひ俸米之下付遲緩と聞召して御朝餐を被爲退或は御病中有司に仰事ありしも御舌釣り伺ひ兼たるに御手もて空中に米の字を書し示し給ふなと嗚呼其御心裏はいかゝありしや百世之下吾儕の腸將に裂けんとす夫れ天明の凶歉は前後六年に渉り天下の餓死數十万と云ふに反し我紀勢封内一人の餓莩なかりし仁恩は永く天壤と共に朽へからす悲哉御治世十五年終始御逆境のみに一日の御寧處もなく憾を財政回復に被爲遺衆庶を棄させ給ふこそ是非なけれ公か御遺愛と傳ふる硯筐今寶庫に藏す當時之御儉素目前に拜する如し又長保寺廟之尊塔御歷世に比し短少なるは御遺命に因といへり蓋御謙德を後昆に垂れ給ふものか

舜恭公

寛政元酉年十二月御相續
文政七申年六月御隱居
嘉永六丑年正月薨

一寛政二戌年七月御勝手御難澁に付　公儀へ御願於大坂米五万つゝ五ヶ年の間御取替被　仰出

一同三亥年五月七日御勝手御繰合至て御難澁に付嚴敷御締り方被　仰出

　御家中儉約之儀も被　仰出

一左京大夫樣御合力米一万俵御斷り被遊

　但同年十二月に至り御回復合二萬俵被進

一同四子年三月御勝手御難澁に付格外御取締り　大殿樣御初め方々樣御定銀半減に御減し　左近將監樣には今一歩通り當年御減し

一寛政四子年十月　公儀御献上物其外万端御省略之儀尚又五ヶ年間年延
　御勝手御不如意に付去る未年より六ヶ年間御省略之處尚來る巳年まて年延御達し被成
一同月九日御家中半知當年にて六ヶ年年限相立候に付來丑年より半知御免以前之通浮置米歩増被
仰出
　方々樣御定銀は來年より五ヶ年の間元高之内二歩通り御減し
一同五丑年十二月廿八日御貸付金一万兩御廻し被遊
　蓋し公儀より御貸付金ならん事實不詳
一同六寅年正月　御簾中樣御逝去
一同九巳年十二月　公儀へ御献上物來午年より以前之通御献上
　右之通なれ共御手前には猶又來年より十ヶ年是まて之通御省略
一享和二戌年熊野本宮御再建
一文化三寅年二月朔日御用御取次を置堀江平藏を御拔擢之に任せられ御國政を改革財政之儀御委任
被遊
一同年九月廿八日御家中浮置歩増上け米幷借財有之筋割濟除米之法被　仰出
　右は御勝手困難御家中生計も難立通例の主法にては規矩可立道無之に付當年より御勝手及ひ御
家中勝手充實に至る迄之間又々浮置歩増幷御家中借財濟方の主法被　仰出たるなり委細は同日
之史に詳記しあれは煩を省て爰に掲けす然れとも浮置歩増新古割濟といふ類其當時に在ては方

言之如くにて一言以て事のわけを能く識別し得と雖も後世實際を不知ものゝ上よりは何等之事たるや更に解し得かたきものあらんか依て聊か之れか解釋を下し發布主法之大略を述へん世史に記するものと參照を要す

一浮置とは諸士俸祿之內幾分を除け置き授付せさるの儀なり步增上け米とは從來財政補助の義を以て俸祿之十に對する一步八厘を官へ納米しつゝあり然るに此度尙又其步合を增し加へて納米す故に之を浮置步增し上け米と云なり又借財割濟とは從來御家中勝手難澁のものは知行御切米夫金御扶持方其他被下金銀引當差入れとなして官より借用金を許され或は賄町人等より用立をなす依て終年之祿は悉く夫れに差押へられて余す處なきのみならす二年三年と先ん借り先借りと喰入て到底負債の淵を脫する不能勤務も不成人馬を持つ事も不叶疲弊に至り太平驕奢之流弊獨り此時に止らす近時尙此体なりし此負債者の爲に步增上け米の外尙幾分つゝを除き官に積置き是を以て年々負債方へ割賦返濟せしむるを割濟除米といふ此負債に新旧あり故に新古割濟の稱あり新古之區別いつれによるや不了と雖も蓋し天明半知之時既に借財棄捐乃至年賦等にて片付たる以後再ひ負債の分を新割濟と稱したるにもあるへし

一浮置步增之法は

知行百五十石御切米六十石以上

浮置步合　三分五厘內　一分八厘從來よりの浮置上け米
八厘五毛此回步上け增
八厘五毛古借是迄之通割濟

但新古割濟有無者之差別江戸常府勢州上方詰女中等の事委細あり略す大體三分五厘を標準に

立てたるものなり

約言すれは從來俸祿之内一分八厘を官に納付の處今回二分六厘五毛に增納而して古借あるものは尙八厘五毛を收めらるれ共是は官之有に歸せすして其ものゝ負債を辨償せしむるといふ所謂上下兩得之策に出たる主法なり尤古借なきものは八厘五毛は無論本人に下付せらるゝものとす

一新借あるものは右二分五厘の外に尙八厘五毛をは賄方役所と云にて差押へ置き之を以て新借の辨償に充しむ故に新古兩借あるものは約り俸祿之内四分三厘五毛は己か有に歸せす殘り五分六厘五毛を以て家産を可立わけなり

一割濟除米之法は

新古借財有之向は浮置歩增割濟米三歩五厘又外には八厘五毛を引

殘り所務米之内

五ヶ一　除米　非常手宛として賄方役所へ預け貯蓄す

殘り　暮し宛米（之を家產とし賄町人へ渡し賄町人より賄ひ受る筈賄町人出來まては賄ひ方役所にて取極候筈）

右之通新古借有之者は五ヶ一除米をなし都て自分差配不相成新古借辨償濟たるものは除米定額之半額つゝ除米し自分賄勝手次第除米所務一ヶ年分に詰たる上は除米に不及との主法なりたとへは現米百石取りのもの新古借あるものとすれは其割

現米　三十五石　浮置歩增上け米古わり濟に宛

仝　八石五斗　新わり濟に宛

合四十(二)石五斗

殘り

五十六石五斗所務米

此五ヶ一　十一石三斗　除け米

全く殘て

四十五石二斗　本人一家の暮し宛とし賄町人より賄を受く

大率如此割にして之を半知に比すれは負債あるものは一層之減削を不免と雖も天明之度半知之節は官に收むる處多きに似たるも諸士負債あるものは負債棄捐年賦等不思之僥倖に從來之窮迫一時に變して余裕あるの境遇に逢ひ却て怠慢を生し又しても負債を重ぬるに至り恩か仇になりし如く加之貸し方に在つては爲に大に迷惑を感するの次第也し故に之か匡正之術を講し專ら重きを諸士家計の整理上に置き此主法を立てられたりされは無借之ものへは心掛の奇特なる旨褒詞を與へられ有借者へは之に反し痛く懲戒を下し飽まて質素節儉を勵行主法の制限中を以て家產を立て尙五ヶ一除米に依て不慮に備へしめ再ひ負債の道を禁止せられたるなり

一是と同時に御家中幷在町衣服節儉の事享保度發令及ひ追加之新條と共に嚴守すへく其他巨細發布の事あり

右段々の主法は堀江平藏經濟の大本を熱心に討究精査以て立案建言之旨を御採用ありしと云數千万衆祿之高下職の尊卑免之差等乃至面々各々負債の有無其負債公私之別等錯雜万緒名狀すへ

からす調査之苦心實に追想し不及處か平藏不幸にして此發令に先ち八月に歿す御拔擢より僅に
七閲月也天若し平藏に年を假し信任替らす永く在職せは財政之中興敢て難にあらさりしならん
嗚呼可惜哉

一文化六巳年十二月　將軍家之御十男虎千代樣を御聟養子に被　仰出
一同七午年八月　將軍家之思召を以て金一万兩御拜領
虎千代樣御聟養子被　仰出に付てなり
一同年十月虎千代樣御逝去
一同八未年二月　將軍家より金二万兩御拜領　赤坂御本殿燒失に依てなり
一同年三月　公邊御勤向年中御献上物之儀六ヶ年御省略之儀御達
右文化十三子年十一月尚又年延被　仰出
一同十二亥年十二月御直書を以經濟之事及ひ御家中衣食宴會之奢に長し儉約の趣意を廢し風儀不宜
旨御目付へ被　仰聞
一文化十三子年六月淸水式部卿樣御聟養子被　仰出　將軍家齊公の御七男なり
右御用途として金一万兩御拜領尚來年より十ヶ年の間爲御手當米一万俵つゝ可被進旨
一文政元寅年八月　將軍家より金二万兩御拜領赤坂御殿燒失に依てなり
一同年九月　公儀へ上納殘金四万五千兩之分當年より五ヶ年間御差延被　仰出
文化十四年十月にも年延被　仰出さ　實鑑にあり

一文政二卯年二月若山西濱へ御隱殿造營
一弘化三午年二月　將軍家より思召を以年々金千兩つゝ御拜領
一同年閏五月　將軍家の思召を以て年一万兩御拜領且つ御一生之間年々一万俵つゝ可被進旨被
仰出

御治世　　三十四年六ヶ月中
御歸國　　十四回
御參府　　十三回
熊野御巡視　　一回
江戶赤坂御殿燒失　　二回　此他邸中類燒二回あり
同麴町御殿燒失　　一回
若山城大奥殿同　　一回
觀自在公御隱殿燒失　　二回

公族方

太眞樣　觀自在公
御簾中樣　種姬君樣
式部卿樣　顯龍公
豐姬樣　顯龍公御簾中

公　女　七方 内 御縁組 一 御早世 六

菩提心公　公子孫六方 内 御養子 一 御早世 四

觀自在公　公子孫七方 内 御縁組 三 御早世 四

合二十四方

一舜恭公御家中半知之中央に御繼統財政之困難は論を不待故に夙に年々取替米五万石つゝを　幕府に仰き給ひ續て上下の節儉を一層勵まし西條御合力米及ひ　太公初の御定銀をも減略被爲在しは御不本意なからも止を得玉はさりしならん此際と雖も信不可失と期限に及ひて半知を免せられしも尚諸公子御定金之定額二分通りを收め給ひしは御苦心之程察し奉るへし時尚先世にひとしく多公子被爲在國費の多端夫れ幾許そ此　公英資明察經濟の釐革は我好む處と御自稱博く讜言を嘉納し遂に堀江平藏を外臣より樞要に拔擢し財政整理の重任を一任せられしは文化之美政と後世永く感戴し奉る處なりされは上下經濟之術時弊匡救の策周到緻密なる浮置歩增割濟除米之良法を發布維儉維約勉めて能く其分度を確守以て人々向ふ處を知らしむ是平藏量入爲出の大本に基き深く狀勢を咀嚼塩梅献策する處に出ると傳へたり　香嚴公之後財政に於る御事蹟の傳ふるものは唯　當公のみ盛德之至といひつへし然と雖も昇平二百年世澆漓を極め典儀尊肅威嚴鄭重是競ふの時　將軍家よりの御養子二回諸公子の他家御養子御縁組八回江紀殿閣等祝融の災に罹るもの六回御參暇御旅行等二十八回皆一として非常之大費ならさるなし且　觀自在公には御壯年に御退隱常々和歌山に御在住頗る御喜怒常なく御晩年には日に月に新進徵辟せらるゝもの舉て數へかたく昨日の賞

萊魚丁は今日歷々の侍臣祿士に列し時としては可驚寵遇を蒙るものあり嘗て樞府に　觀自在院樣方御片付帳と題する一卷ありし是文政十二年同公薨逝之時彼の新進の徒を悉く免職復籍せしめたる人名辭令を記載せしものにて信等常に点檢せしなりその人衆は記し得されとも該簿の紙丁凡三百枚許なりその過多思ふ可し國家有限之歳入以て如此無限之歳出を支持せさるを得す財政經理之難思ふへきなり

顯龍公　文政七申年六月御家督　弘化三午年閏五月御逝去

一文政七申年十二月天明之度御拜借殘金四万五千兩　棄捐大坂御藏詰籾二万俵御拜借被　仰出
右は近年度々御火災不時御出方嵩み其上去年四五月の候旱魃にて御入納減し御勝手差支に付御取替米之儀　公儀へ御願之處難被及御沙汰格別之思召を以本文之通被　仰出たり
一同十亥年九月　公方樣赤坂御屋敷へ御立寄
一同十二丑年三月廿一日八丁堀邸類燒御藏米不殘燒失に付嚴敷御取締被　仰出
一同十二丑年四月御願之上　公儀より米五千俵御拜借
此時八丁堀御藏屋敷類燒貯米燒失に付てなり廻米次第御返納之筈
一同年六月　太眞樣於紀州御逝去
一同年六月當丑年より五ヶ年の間年々金二万兩つゝ公儀より御取替被　仰出
當年の御取替は此節被遣來寅年春御返納可有之來寅年より四ヶ年之御取替金は春御渡に相成候

間其年の暮に至り御返納可被成との旨

一同十三寅年閏三月和歌

南龍院様御靈屋御造營

右御仕入方へ被　仰付頭取井上兵次郎一手に畏る

此年大智寺　台德院様御靈屋御修復も被　仰付たり

一同十三寅年四月十九日江戸常府之面々へ御貸方被　仰出知行三百石已下是迄借用之內年賦に相成

一天保二卯年十一月十八日來る申年迄五ヶ年之間猶又御儉約被　仰出

一同三辰年十二月和歌山湊村へ新御殿造營三年にして成る

一同四巳年二月西濱御殿大奥御普請御仕入方へ被　仰付此又井上兵次郎畏る

一同年十月御勝手難澁に付去る丑年より五ヶ年年々金二万兩御取替金尙又來午年より五ヶ年の間年々春一万兩つゝ御取替金相濟

一同五午年九月三季御献上物之外御献上物來未年より六ヶ年の間御省略

一同年十二月廿二日嚴敷御取締被　仰出

一同六未年三月　公儀より金二万兩御拜領赤坂御本殿燒失に付てなり

一同年四月三日此度燒失代り御道具類諸役所渡し道具向も相成丈減し諸品位下の儀被　仰出

一同七申年十二月當時諸物高直に付此度限り常府三百石已下難澁之向へ下地借用に不拘石一歩借用被　仰出

右石一歩とは御家中祿高一石に付金一歩つゝのわりを以て御貸方役所に於て知行御切米をさし
押へ貸金取計をなす也之を石一とも稱せり
一同八酉年五月夏貸之内五歩通り秋渡り之事尤二歩通り御貸方に於て無利足借用之筈返納之儀は秋
渡之内にて引取候事と被　仰出
一同年諸國飢饉紀の川浚の土工を起し窮民を救助す
夏貸とは知行御切米暮に可渡内を便宜上六月に貸渡之義なり
一同九戌年三月西丸炎上に付御普請御手傳被　仰出御出金高凡八万三千二百五十兩と云
外に江戸御園米及檜大材三百五十本御献上あり
一同年四月去る未年以來作方不宜御收納夥敷相減御米拂底に付御家中當夏貸之内五歩通り秋渡之事
尤常府之筋は去年之通り二歩通り丈御貸方於て無利足貸渡之旨被　仰出
一同年八月十三日御家中當年より五ヶ年之間浮置歩増被　仰出
一同年十二月五ヶ年之間年々金二万兩つゝ　公儀より御取替被　仰出
一天保十亥年十月三季御献上物之外御献上物御省略尙又來丑年より六ヶ年間相濟
一同年十二月若山御仕入方にて御貸方被　仰出候付江戸常府二千九百石已下之面々高割之通り借用
被　仰付
一同十三寅年十二月御拜借金當暮上納延期被　仰出來年日光御社參に依てなり
翌卯年十一月右同樣延期相濟日光御參詣に付てなり

一同十四卯年十月新規二万兩御取替之儀御願之處是迄之通り二万兩つゝ來辰年より來る申年まで五ヶ年の間御取替被　仰出

一弘化二巳年　公儀へ檜板割等御献木昨年五月御本丸炎上に依てなり

但し此度は御普請御手傳は不被　仰出

一同年六月江戸御家中勝手難澁之趣に付此御時節には候得共格別之譯を以て石一歩借用被　仰出

一同年八月　御簾中樣御逝去

一同年十月　公方樣赤坂御本殿へ御立寄

一同三年年三月廿四日御勝手追々御六ヶ敷候付以來　香巖院樣一位樣御代之通御取締被　仰出

御治世　廿年

御歸國　八回

御參府　八回

日光御社參　一回

赤坂御殿燒失　一回　外に八丁堀濱町築地三邸も類燒す

公　族

太眞公　御在世五年

一位老公　舜恭公

御簾中　鶴樹院夫人

按に御勝手御難澁節儉取締云々は殆と歷世通規の如くなるに　當公之世（一本別に節倹の發令其記ある）を不見は財政餘裕あつて然るか蓋し決して然らさるへし敢て　當公の時より然りと云には非れとも昇平打續き偷安苟且に流れ祖宗制定之紀綱も自然不振に傾き易きは數の不免處今少しく前後に通して解說せん抑　龍祖以來之法は諸士死し嗣子十七歲以下なれは童子組に入りたとへ千石之知行取も四五十口の扶持方に減し又十七歲以下にて死し及ひ嗣子なき者は家斷絕諸子若し家產を落し格祿相應之勤ならされは自ら進んで辭職を請ひ乃至扶持方取りに下り家產回復之後職祿舊に復するあり而して以下役（御目見以下也）は一代限りとす總して苟も過失あれは斷然職を剝き祿を減し或は賜暇追放に處せらる（江戶勤番の士一夕邸門の制限を犯し其明日不行跡と云を以て御城下より十里の外へ追放せられしあり享和寶曆之比までは嚴肅大躰此如）必賞必罰新陳交迭自然之數は以て俸祿流通平均之法を得たるに似たり然るにいつとなく優柔不斷因循姑息を馴致し漸次重賞輕罰之風に傾き次第に削祿賜暇之數を減して新進昇祿之者多く死して嗣なきものも婉曲强請末期名跡允許之道をひらき果ては十七歲以下にて家督のものも十七歲以上と僞り三尺之童前髮を拂て成人を裝ふも默許に付す既に一例生すれは百件之に傚ふ或は刀筆の賤吏坊主手代の輕輩より往々顯職高祿に傾進のものも不尠自然出知行增殖せさるを不得加之所謂門閥家又は四五百石以上に至れはたとへ寂寥を不辨も依然として尸位素餐大過なき以上は世々續らす世は益澆季外患內憂夢にも不知唯驕奢淫逸遊戲歡娛靡然風を成し殊に舜恭公は頗る威儀體裁を好ませられ殿房宮職之名稱等槪して　幕府に模擬せらるゝより諸士の邸宅草門とへ玉垣には長屋門海鼠

壁江戸大名小路の雛形然たる観をなすに至り若山にて千石以上を領すれは大名と唱へ殿様御前と崇称す此大名の子弟教育を問へは文武の師を其家に招かるゝの先生は吾こそ誰殿の御出入と得色欣然其門に拝趨所謂殿様藝を教授す此一事他を推知すへし唯虚飾空威を弄して田舎武士國侍と云ふを恥るの体獨我藩のみに限らす外様國主之外は大半然らさるはなしされは君上に奉するは唯御大事御大切と鄭重に鄭重を重ねされは不忠不臣の憚りあるものゝ如し就中文政天保年間は太平の最　幕府盛世の極　當公は　將軍文恭公の至親以て我藩御繼承故に御威嚴無比又幕府之關係最親密度々の御取替米御拜借金も畢竟是等に因するあらん　將軍の臨邸は　常憲公以来無之特典も兩度まて臨邸あり是を御立寄と稱するは如何に親藩大諸侯たりとも　將軍を私邸へ招請は當時に在ては不叶典儀故に吹上御庭へ御成之途次風と思召御立寄といへる名義にして其實二三年前より我有司々々へ掛り役を被命舊儀典故を調査殿房之修飾庭園之風致進膳献品饗宴遊興之計畫準備善盡し美盡の費は實に幾百万を不知なり何さま三家親藩の威嚴は益々赫々彼の溜塗御挾箱御召駕虎皮鞍覆塗棒總網代御駕籠皆將軍に擬せられ湊村新造の別殿は其結構江戸大城に模し近侍奉仕（御小姓御小納戸頭取初御小姓御小納戸なり凡て御側向と云ふ）は百数十人に及ひ寵臣の威權は如旭日恩賜の物品積て山をなす（信幼稚の時御小姓某の家に寄載す某隔日の非番毎には夜に及て殿中より美菓珍膳佳肴之重組を齎り来るた目撃せり是御余多と稱して進御の余た皆侍臣に下賜せらるゝものなり又信か姻戚某御小姓頭取勤務中恩賜の珍品佳什長持九棹に納め貯蓄しありたりこの他察すへし）嘗て聞く進膳之時御燒物と稱する尺有余の鯛一回之進膳に七代して而かも寸箸も御せられす一夕白玉（寒晒の粉を玉に製し砂糖にて食用するもの）御好み出たるに其費二十五兩なりしと（御臺所奉行目付山崎（淺右〔一本養吉〕衛門の話なり如何なれは如此といふに第一御膳番御臺所奉行同御目付御風味々々々と稱するに加へ當番近侍は勿論坊主膳掌に至る分まて調進之例規なるよりなりといふ）　御臺所用途之鰹節は一ヶ月三

百兩を要す又鶴樹大夫人嘗て目黒不動尊へ御參詣之時石階急にして乘輿を昇登りかたしとて仁王門樓を傍へ移轉し其邊より階上へ棧橋を仮架し勾配を緩ふし昇上け後門樓を原位置へ復置したりとは口碑に存せり江戸後宮の官女は上下四百人計皆常に綾羅錦繡を飾り老女若年寄の如きは帶襪をも自着せす頭髮は枕に着きなから梛らしむ其倨傲贅澤到底今日より追想之及ふ處に非す上下の爲體既に前述の如し歲費の濫出夫れ如何そや如何に明相良吏ありとも共に時勢に制せられ匡濟之術施す處なきなり加之赤坂本殿炎燒再築數年に涉り經費十三万兩に至り又江戸大城は万世燒ぬものと童謠にさへ唱へ居しに俄然炎上未た數年ならさるに再ひ炎上爲に八万三千余兩及巨額の木材御献納又天保之凶歲ありたとへ公族多く在らせさるも常時臨時之支出如此なれは財政之余裕を得さりしは明也

憲章公　弘化三午年閏五月御相續　嘉永二酉年三月御逝去

一弘化三午年十月十九日御勝手御繰合六ヶ敷追々御借財相嵩候付半知をも可被　仰出之處格別之思召を以て不被　仰出候付難有出精可致旨被　仰出

一同年十一月御献上物猶又來未年より六ヶ年御用捨被　仰出

一同四未年六月江戸常府三百石已下之向へ築地御貸附所に於て一石に付金二朱つゝ之割を以て借用被　仰出

一同年八月　將軍家芝御屋敷へ御立寄　濱御庭へ被爲成より御立寄

一同五申年二月知行二百石御切米六十石以上浮置歩增有之候處格別之思召を以て當申年より御免被仰出

右は天保九戌年五ヶ年間浮置歩增發令後遂に年繼となり本年に及ひたる也

一同年八月十二日若山大風雨洪水近在人家流失橋々陷落八十年以來之水害と云

一同年十二月五日當秋若山近在大風洪水にて所々堤破壞田畑水込となり御收納夥敷減し御繰合六ヶ敷により嚴敷御取締被　仰出

御治世　　満三年弱

御歸國　　一同

若山城天守閣雷火

公　族

一位老公　　舜恭公

御簾中

菊千代公　　慶福公

公　子　　三方　内早世二方

公亦將軍の至親より御繼承其三月天守閣雷火之災あり時に上下頗る前世の驕奢に飽き諸政の釐革を希望し御入國之上は　舜恭老公の旨を奉し給ひ安永天明の故に復し大に節儉を施し文武を奬勵あらせられんするにも開へしか僅に三年にして薨逝何の暇かあらん

昭徳公　嘉永二酉年閏四月御相續
安政五午年六月　公儀御相續

一嘉永三戌年四月　公儀へ御願二万兩つゝ五ヶ年御取替相濟天保六七兩年に二万兩御拜借筋御返納年延被　仰出
一同年六月　公方樣芝御屋敷御通り拔
一同年七月文武諸有司へ海防之儀を令す
一同年(十一月)[一本ナシ]一位老公の思召により在町救助のため和歌御旅所々替普請被　仰付
一同四亥年八月大炮製造を令す
一同五子年十一月御献上物御省略尙又六ヶ年々延相濟
一同六丑年正月　舜恭公薨去
一同年二月觀如大夫人御逝去
一同年七月武官初武術師範家へ武備充實の爲め手當金を賜ふ其額江紀合七千六百兩なり
一同年十一月執政初諸有司へ海防御用掛り被　仰付
一同(月)[一本無]御家中上下一同へ祿高に應し武器手當金下付
十二月水野土佐守へ海防に付新宮與力知上り高千六百石御下け被下尙上け地高七千石余下付安藤飛騨守へも上け地高五千石余御下け被下あり
一安政元寅年五月御家中世祿被　仰出
武備整備の爲當時之本祿を世祿に被成下家督跡目之節減祿不被　仰付以下役跡目も向後輕く可

被　仰付との旨なり

一同年八月御家中衣服省略被　仰付式日には継上下平日は袴羽織着に相成る

一同月西洋流大炮鑄造及中軍船製造を御勘定奉行御仕入方頭取へ被命

一同年九月若山近海へ異國船渡來大御番頭初武官警固人數出張す魯西亜船大坂近海へ來りたるなり

一安政元寅年十一月諸國大地震若山劇震潰屋死傷多し

一同月初て友ヶ嶋奉行初を置友ヶ嶋御番同心等同嶋に在住海防に備ふ

一同月大船製造費として在町へ日錢を賦課徴收す

右日錢は大に人心を失ふ處あるを以て万延元年七月に至り還付せられたり

一同年十二月來卯年より二万兩つゝ三ヶ年の間御取替　公儀より被　仰出

一同二卯年正月水野土佐守安藤飛驒守の浮置上け米を被免城付に不限都て之村々手前限り仕置取計諸物成運上等所務可仕旨被　仰出

但二歩口は是迄之通り且以來御參暇御供は兩家にて引受道中并詰中渡り金御扶持方は不相渡是迄被下候御扶持方差上火消之儀も自分にて可相勤旨被　仰付たり

一同年三月水野土佐守依内存有田日高那知行所之奥熊野之内本宮組之内村々と村替被　仰付

此件に付村民暴動を起し其配下たるに不服後遂に沙汰止みとなれり

一同年五月江戸赤坂邸中へ文武場を一郭に新築

一同月友ヶ嶋砲臺建築を炮術佐々木流一手に被命

一同年六月御勘定奉行御用人御廣敷御用人へ大奥向御取締向取計巨細之儀迄も行屆御減し相立候樣にと被　仰付

一同年八月若山洪水

一同月安藤飛驒守田邊領浦々口銀之儀是迄五厘減にて受負之處內存之品に付向後五歩通りにて受負被　仰付

一同年十月二日江戸大地震御本殿御長屋向其他破損す
右に付江戸御家中三千石以下一同株付に至るまて一石に付金二朱之割を以て於御貸方貸金可取計旨令あり

一同月於江戸文武藝術御手當金四千兩御用人へ下付右利子を以て藝道引立可申旨被申付

一同年十一月御家中衣服省略諸事簡易之御制度に被爲復嚴敷儉約可相守旨被　仰出
此回於　公邊衣食住初諸事省略被　仰出に付てなり

一同三辰年八月紀州加太浦備船としてばつていら船二十艘新造之儀　公儀より被　仰出

一同八月廿五日江戸大暴風殿邸破損夥し
右に付御家中家屋損所出來難儀たるへきを以て大寄合以下末々に至るまて銘々御役々並高之割石に付金一朱之積を以て御金被下あり

一同年十月君澤形船一艘浦賀奉行へ御賴製造

一同四巳年七月年々二万兩御取替金當年限之處猶又年繼被　仰立三ヶ年年繼相濟

御治世　九年三ヶ月

常御在府　御入國なし

公　族

一位老公　御在世三年

觀如大夫人　憲章公簾中　御在世三年

憲章公御子　一方早世

公御歳四歳にして御繼統十三にして幕府を繼せ給ふ一位老公薨逝之後は政全く大夫に在りし　憲章公以來大喪頻に續き天主閣雷火の如きは國初以來未曾有之珍事之か再建之經費亦巨大也し嘉永癸丑亞國軍艦入港以來は天下形勢一變し國費の費す處は唯海防振武の一途に歸す築く處之砲臺製する處の艦船練る處の兵制甚幼稚徒勞の觀を不免と雖も時勢に在ては不然を不得而して能く一藩振武の氣象を喚發せしは土州大夫の力なり

龍祖以來の舊法を改めて世祿となし又新宮田邊與力除籍の如きは國庫の得る處果して失ふ處を償得しや人心得失の点に至ては未た信する不能時人頗る其專横を慷慨に付したるものありき

當　公　安政五午年六月御相續　明治二巳年六月版籍御奉還

一安政五午年六月此度御相續に付御家老より御經濟之儀段々申上從來兎角　公邊之御風儀に押移隨て總体御失費多く元來御不如意之處彌御負債相嵩辨償之手段も無之上二十年來は別て臨時之大費

差湊御負債莫大に及ひ心痛に不堪就ては此度御初政に當り御經濟の筋斷然御改革万事　香嚴院樣御例に被爲傚暫く御艱難被爲忍格段之御節儉奉願御手元御用初諸事御質素御簡易に被遊御側向も御減少之儀等願上候處願之趣被爲聞召分何分にも御儉素に可被遊との御事により右主意厚く遵奉上下一致御儉約筋行屆可相勵旨六月廿八日を以て御家老より御役人向一同へ申達す

一安政五午年十一月來未年より子年迄六ヶ年の間御獻上物是迄之通御省略被　仰立通相濟

一同七申年正月　伏見宮姫宮御緣組京都より赤坂御本殿へ御着輿

一同年三月三日御大老井伊掃部頭於外櫻田殺害せらる

右に付和歌山より武術者五十名許江戸へ召下し供奉警衛且武藝研究せしむ

一万延二酉年嚴敷御儉約に付當年より諸役所向被下二歩減被　仰付

一文久元酉年十月　公儀へ御願の上金三万兩御拜借

一同二戌年十二月御郡代金之內金二万五千兩御拜借

一同三亥年正月尙又御郡代金之內金一万兩御(一本拜借)(借增)相濟

近年不時莫大の御物入差湊御繰合六ヶ敷再應御願に依てなり

一同年二月紀淡邊海防嚴整可致旨　勅命被　仰出

此節　幕府よりも海防之儀被　仰出

一此比芝三山方貸付方より御勝手方へ金二万兩立用す

一文久三亥年三月御簾中樣若山へ御發駕　中仙道御旅行

右は昨年幕府諸侯參勤之制改革夫人内室國邑へ引取可申旨布達に付てなり當節京都より攘夷決行之　勅使下向浪士暴行事目下に可起に迫りたるを以俄に御歸國被　仰出たるなり

一同年三月十六日御上洛廿五日御歸國

一同年七月攘夷監察使加太浦へ下向

一同年八月十八日大和天誅組一揆爲追討一の手二の手三の手中軍副軍共總軍三千四百人出兵九月に至り平定す

一同年八月廿二日大坂へ御出馬廿五日京都二條城へ御入城

京都騷擾に付守護職より申上るに依て也

一同年十月七日京都御發駕大坂御入城廿四日若山へ御歸城

一同四子年正月二日大坂へ御發駕同十六日御上京

將軍御上洛に付てなり

一同年三月廿二日御下坂大坂御守衛被　仰付に付てなり

五月廿三日大坂御入城翌年四月に至り御守衛御免

一同年八月　公儀より米五百石御拜領

此節の御用途に被進との旨なり

一同月堺表海岸南の方臺場警衛　公儀より被　仰出

一同月長州御親代御旗本御後備被　仰出

十二月長州服罪解兵被　仰出

一同年九月廿二日大坂御發駕一旦御歸國
公方樣御進發の節大坂御入城に付てなり
一同年十月　御簾中樣江戸へ御下向
御三家方御參勤復舊諸家妻子共早々江戸へ呼寄候樣被　仰出に付てなり
一慶應元丑年二月御上京御參内夫より江戸へ御參府
一同年五月長州再征に付御先鋒御總督御拜命
一同年閏五月四日江戸御發艦一旦御歸國
一同五月十八日若山御出陣大坂御着艦
一同年六月石屋村御影村住吉村取締被　仰出
同年十一月に至て御免
一同年八月御家中世祿を廢以前の御處置に復古被　仰出巨細は祿制の部に詳なり
一同年八月芝三山方御貸付方より御勝手へ金三万兩立用す
一同年九月十四日節儉の儀を令す全文如左
此度御出陣被遊候處不計數日御滯坂未た動靜御一定無之に付ては此上如何程御滯陣可被遊哉難計日々の御費用夥敷候處御勝手御繰合は必至と御六ヶ敷候得共御家中御宛行減少等も不被　仰出而已ならす御出陣に付度々御金被下等種々御配慮御軍用途之御都合御取計せに相成候は畢竟御家中初御國民一統御憐恤之思召にて奉恐入候儀に有之右之通難有御趣意一統奉恭承軍用之外都て之浮費を省如何躰御長陣相成候共被下金拜借金抔目當に不致勵忠勤候樣不心掛候はては難

相成事に付當時御供に出有之向は申に不及御國に罷在候向も此後御樣子次第交代被　仰付儀も可有之事に付一統日々之暮方等万端手を詰分限に應し多少共蓄財軍用に用ひ候樣心掛可申候右に付向後左之ヶ條書之通堅相守可申候

一衣服之儀軍裝の外は一際麁物を用ひ可申家内婦女子の衣類は兎角華美に相成不可然候間縫或は染模樣等大造成品且少女之振袖抔は無益之至に付相止祝儀事等之節も家格跡方抔と唱候儀は廢し質素を專一に可心掛事

一嫁娶（の儀は〔一本ナシ〕）衣類諸道具等過半省略手道具等日用を欠不申候はゝ可然程に可致事

一飲食は家内諸共陣中同樣之心得にて飢渇を凌候はゝ可然儀と相思ひ可申平生酒宴抔は勿論不相成事

一居宅の儀雨露を凌候はゝ可然儀と相心得際立候普請造作等可爲無用事

一音物之儀懇切之情を表し候抔と申候得共音物取遣より自然惡弊を生し且親類より他人之方懇意に取遣致し候向間々有之人倫之本意を失ひ不可然儀に候間旁以來親類且仲間之外他人へ音物取遣一円可爲無用事

親類たり共出生之小兒へ初衣幟雛人形抔遣候儀自然高價を費し相互に無益の儀に付可爲無用事

一海山川殺生事且遊藝に多金銀を費且武器書籍之外諸道具書畫類幷翫弄物好事に高價を不厭買求候向抔は甚心得違に候乍去一円難相成とは不申分限相應程よく可致は其通之事に候得共成丈け時節を弁へ不益に不費武備に心を用可申候たとへ富有之者たり共輕輩者無益之品買求候儀一切

不相成事
右之條々於相背者屹度可被　仰付儀も可有之候間心得違不申樣可致との御事
前記雛幟之儀慶應四辰年三月廿三日尙又左之如く布令
一上巳端午之飾物之儀向後麁相成紙雛幟之外都て飾り人形之類は一円可爲禁制事
但初雛初幟等親類より相贈儀不相成品は去る丑年被　仰出之通堅相守可申事
右在町へも相觸（させ）（一本候樣御勘定奉行町奉行へ申聞）紙雛幟之外飾人形等賣買差止之儀町奉行へ申聞る
一慶應元丑年十月住吉村大坂市中取締被　仰付
一同年十一月征長に付石州路へ御人數出兵
一同年二月御勝手從來御難澁之處近來度々　御上京大坂御守衞多人數相詰折柄征長御先手總督御拜
命尙ほ堺浦守衞石州路へ出兵御領分數十里の海防等万端の入費莫大是迄用金又は借金等にて繰合
候得共此上術計盡果粮米取續も難成（旨にて）（一本必至の困難に付）金十万兩御手當被下付候か又は御藏米三万石御取替
相濟候樣にと　公儀へ切迫御願立之處御繰合御都合も有之難相整旨指令ありたり
一同年三月四日御家中節儉之事尙又左之通布令あり
武器書籍之外諸道具書畫類幷翫弄物等買求候儀分限不相應に無之樣との趣去年被　仰出候得共
兎角御趣意を不弁今以茶事專ら致流行高價之品を取扱中には風儀不宜筋も可有之趣相聞如何之
事に付右等之向此節御取調之上嚴敷　御沙汰之品も可有之候間猶心得違無之樣夫々へ可相達事
一同年六月三日大坂御發艦（御先鋒御總督として）（一本アリ）藝州へ御出陣

同年八月　將軍薨去に付休兵被　仰出同九月四日廣島御陣拂同六日大坂御着艦

一同月於藝州閣老へ粮米月々二千石程つゝ拜借か乃至於大坂米一万石御渡し置相成候樣にと御申立之處三千俵御取替相濟

一同年八月　公儀より御滯陣爲御待米千石金千兩被進

一同年九月五日御家中半知被　仰出

諸事天明度の通りなり

征長御出陣莫大之費途を要し國用給しかたきに依てなり　巨細祿制之部にあり

一同年十月國札近國五ヶ國へ通用の儀御願立相濟

委細は貨幣の部にあり御勝手彌疲弊切迫に付御助勢之儀　公儀へ御願立之處御沙汰無之依て本文御願立に成りたるなり

一同月七日天幕より被　仰出により御上京御參内同廿八日御歸城

一同月芝三山方御貸方より御勝手へ金二万兩立用す

［一本アリ］（一同年十二月五日兵制改革に付從來の御役々廢止一般銃隊に編成

江戸にては翌年三月）

一同三卯年三月百文錢札を銀札に取交通用許可　貨幣の部に詳なり

［一本ナシ］（一同月兵制改革に付從來之御役々廢止一般銃隊に編成）

一同年十一月當四月明光丸長崎へ航海中土州藩いろは丸と衝突該艦沈沒依て金七万兩を同藩へ辨償

此件御勘定奉行茂田一次郎土州の後藤象次郎と談判遂に金八万三千五百兩余を可償に結約之處

後岩橋轍輔出張再談をひらき本額の如く減削したるなり

一同年十二月九日　朝廷幕府より召により御病中押て御上京之筈にて御着坂之處京都の模様一變

上様御下坂に付暫く御滯坂同月廿六日御歸城

一同月江戸御家中西洋銃所持無之者へ年賦返納を以て同銃を下付す

一同月於江戸佛蘭西式歩兵練兵傳習を小谷老之助初めへ被命

右は幕府練兵傳習隊より教授を受たるなり爾後追々擴張遂に騎砲兵傳習をも受たり

一同四辰年正月八日幕府之潰兵若山へ亂入皆之を近郡又熊野浦へ避けしめ勢三等へ送致す

一同年二月御親征被　仰出に付東海道先鋒被　仰付國力相應出兵可致旨にて大隊長中隊長等隊中引卒出兵す

一同月御所有之蒸汽船奥羽鎭撫使乘艦御用被　仰出

閏四月にも同樣御用被　仰付

一同十三日　御上京として若山御發途御病中に付御途中御療養九日振にて御着京

一同月准后新殿御造營に付國役金獻納被　仰出金三千六百兩獻納

一同年三月　御親征行幸御留守中京都警衞被　仰出

閏四月廿九日に至り　御免

一同月貢士三名を　朝廷へ御差出す

一同月關東先鋒二の手援軍出兵被　仰出銃隊三百十四人出兵す

一同年四月下京中取締被　仰出

一同年閏四月長崎浦上村切支丹宗信徒二百五十人御預け被　仰出

一同月陸軍編制に付徴兵及高一万石に付金三百兩の割を以て軍資金徴收被　仰出

　但徴士兵員高一万石に付十人つゝ差出可申との事翌年二月に至り東北平定に付一と先歸休被
　仰付

一同月金札製造被　仰付列藩石高に應し一万石に付一万兩つゝ拜借被　仰出

一同年五月江戸御家中常府之者悉く江戸引拂被　仰出十二日より男女四千人許十四五日間に紀勢之內へ移住す

一同年六月十九日　御簾中樣若山へ御移住

一同年八月軍資金十五万兩獻納被　仰出

　右は春來諸藩出兵戰勞不少處御家に於ては無其儀との旨を以てなり

一右に付御手元初諸局嚴重に節儉を守り御都合可取計旨度々布令あり

一右本額之內九月廿一日に二万兩同廿四日に二万兩十月廿三日一万兩獻納す

一慶應四辰年十一月兵隊五百人奥羽之間へ出兵千人は國所に備置不時の出兵相成候樣に被　仰出依て軍資金殘金獻納は暫時御猶豫被　仰出

一同月伊勢正遷宮玉垣之荒垣材御獻納

一同月御家中知行六十五石御切米二十五石以下末々まて來巳年より歩增御用捨之旨

　文武藝術御引立之折柄小祿之むき難澁に及ふへきとの事に依てなり

一明治二巳年正月朔日御歸國御暇御願之上本日京都御發駕三日御歸城御滞在十一ヶ月余に渉る尙常備兵員百五十人を在京せしめらる

一同月國内限り錢札通用許可あり貨幣之部に詳かなり

一同月松平若狹殿及伯母初男女四十二人御預け被　仰出

一同年二月御勝手困迫如何共難被遊に付向後御領知高二十分の一一万石を以て御手元御暮し方御立其余は悉く治國の用に可被供旨被　仰出

一同月大坂爲警衛精兵一大隊急速可差出旨軍務官より布達

一同月國政大改革一切從來之職祿を廢し府藩縣之制に基き文武官を置き職俸の外無役高を給せられ平均の法を以て一万六千三百石以下五百五十石以上は十分の一其以下二十五石以上は一般五十俵二十四石以下は從前の通と定めらる委細は職制祿制の部に詳なり

一（明治二巳年二月）（一本同年四月）神戸警衛として豫備兵隊の内三小隊至急出張被　仰出

一同月廿八日東京へ御參勤して御軍艦にて若山御出發（七月に至り御歸國）

一同年六月紀勢御領分一円當年の年貢一歩通り御用捨

一同月版籍奉還被　聞召和歌山藩知事御拜命

版籍奉還は本年二月御建白被遊たるなり

以下は全く藩治之經濟に係り御會計に屬せさるを以て爰に閣筆す

御歸國　　二回

江戸御參勤　　二回

御上京　　六回　内一回は四十二日一回は十一ヶ月御滯京

御上坂　　三回　内御守衞して六ヶ月御滯坂　征長にて一ヶ年同斷

藝州御滯陣　　三ヶ月

御簾中江紀御往返　　五回　内京都より御下向一回

公　族

御簾中

公　子　長福丸君　　一方　御早世

抑當公に在ては形勢全く一變實は亂世を以て評すへきの時なり故に物々軍國之事ならさるはなし苟も非常に臨みては經濟亦常時を擲ち実差非常に應すへきは無論なり然るに國既に空耗上下頓に疲弊したるにも不拘國家之大事は變幻百出危機皆一髮之間に迫る此急遽に處せんとする我財政之至難は今に至て到底眞想を寫し出す事不能なり夫れ　照德公には御幼冲御參暇初め奉公の費なかりしも代ふるに海防武備の用年一年に複雜多事續て　當公に及ふ尊攘之説益盛に災害並臻ること共に國用多端多難於是大奥取締諸局省略御家中儉約之事等朝令暮布當路之有司は掛り掛りを被命各苦心焦慮すと雖も如何にせん數百年來の慣習姑息は頑として破れす約り些々たる鎖末の省略取締に流れて終に根本的一大革新之英斷あるを不見故に口辯之御取締御儉約は表面規式的之一通言之

如く成行亦意とする者なし歸する處は會計官の苦心に一任す有限之財源何そ歲々無限之巨費に當るへけんや他なし紀勢京攝之豪富に說き所謂御立用融通を調理すると藩札增發之二途により一時彌縫の急策に不出を不得是れ時に或は操縱彌縫の途ありとするも何そ無際限然るを得んや彼の櫻田の變以來は彌天下亂靡之勢をなし文久三年君夫人俄に若山へ御移住之如き勅使は攘夷を迫り暴徒は恣に外人を暗殺し公使館を焚き外人皆國旗を卷て橫濱に退去今や都下大亂之街とならんとするを以て大小侯伯の室家一時に爭て國邑に就く故に宿驛人馬給せす四十五十の長持は數日路傍に遺棄するの場合要は唯金力の一策あるのみ又同時の御上京は寬永以來の大典擧行之御上洛供奉殊に幕威回復之秋と各藩周旋方と稱するもの交互宮堂上に說き激徒有志に結ひ其交際は妓樓杯盤之間に千金を擲ち豪放を極む不然は國事を誤ると濫費恰も決河の如し續て大和一揆起る亦三百年來見し事なき椿事なれは上下臍之緒を切ての初陣剩へ寬永の軍制其儘にて六具の戎裝に貝鐘旗差物押し立無用の雜卒在夫浮塵子の如く從へ僅々百四五十の賊に對し二十倍餘の大軍（外に諸藩之出兵擧て數ふへからす）馳向ひ漸く渠か自潰を待て事平くの始末之に伴ふ浪費亦推知すへし事若し慶長元和の時に在らしめは一隊の小軍能く鏖盡に付するは朝食前の事ならんも武道の衰運如何ともすへからす前後頻年御上洛六回御上坂三回常時に非れは其大衆殆と三軍に擬す征長出征には此大軍空敷滯坂曠日彌久一ヶ年を過く斯る長陣なれは大平偷安之固習士氣何そ壞敗せさるを得んや安閑娛樂平日に異ならす故に一日所給の軍資金米千万を以て數ふも皆無用に屬す而かも事甚單純ならす恰も平時と戰時とを備具す之を履物の上に譬ふれは靴も草履も草鞋雪駄下駄駒下駄もなければならぬと云ふの有さ

まなり豈図費之支ゆる處ならんや備藝州發向と云ふに至るも同筆法を不免加之君上の御出征は大坂役以來未曾有之最大事殊に將軍前軍の御總督たり總軍合して凡六千人（夫卒從者を除く）滯陣三月費す處實に米六千三百四十七石餘金十二万三千三百餘兩と云ふ糧盡き策極て幕府に訴ふも幕府敢て不顧休兵若し一月を緩ふせに唯自潰あらんのみ何ぞ戰を論せんや嗚呼危哉役畢るや御家中半知を令するも固より深創の寸分を療しかたし加之實戰經驗の結果從來の兵制斷然改革せさるを不得を發覺し遂に面扶持等の大改革決行あらんとするに田中善藏の變起て紛擾蹉跌荏苒數月又いろは丸の難あり爲に七万兩を償ふに至り此際亦大艦購入銃砲買收の事あり續て伏見戰爭敗兵亂入爾來大に京師の嫌忌する處となり無量の難詰滿面敵視せらるゝ地位に至るも勢ひ不得止爲に君上は京師に御抑留一年東海先鋒の出兵奥羽之援兵軍資の十五万兩各所の警備常府移住等の大件續々突起悉無量無限之國費ならさるなし頻年の財政夫れ何に由て維持する處ありしや彼の國札五ヶ國通用銀札發行將又金札高割拜借の事ありと雖も所謂焚石に灌水の謂ならん幸に上下内外供給の杜絶を不見は不可思議と斷するの外なし宜也明治二年國政大改革に當り歳入之不足金三十四万八千兩米三千三百九十石國債之額百四十一万六千兩餘と云於是大英斷被爲行御自奉は御封祿二十分の一に削減藩士は平均祿に定め門閥を廢し人才を登用官制兵制を初め百般革新以て量入爲出の大經濟を被爲立事漸く緒に就しも未た幾干ならすして遂に版籍御奉還天下府藩縣の三治に歸して能事全く終へ給ふ夫れ財政の至難は　香巖公之時に在りと雖も之を當公之時に比すれは豈に日を同ふして語るへけんや聊信か實歷目睹の想を贅言以て前記略項の參照に補す

南紀徳川史巻之百九

臣　堀内　信　編

財政第二

一歳入出

總御收納總出知行出扶持及御旅行費

御高總合

一六拾二萬四百三拾四石　御領分押合免平し四つ八歩三厘二毛四絲

右取米直して

二拾九萬六千四百七十三石

外に金四百三拾五兩程

二夫米納高

一六百六拾六貫六百目程

二分口銀納高

一二萬八千六百八拾兩程

內千九百八拾五兩程つゝ年々勤人給扶持造用に入用也

茶口銀納高

一二百六拾八兩程

御普請金納高

一凡千七百九拾兩程

右は御家中より出し候分

御家中へ總出御知行米

一御高二拾五萬七千五百五拾八石(餘)(一本也)

右取米に直して

拾三萬三千六百二拾石也

内
一萬七千八百三拾三石程　浮置有
五萬五千八百卅七石余　御切米渡り
五千七百五拾六石余　金銀渡り(一本る)
一萬八千百廿五石程　御夏貸出(し)

外に金八百五拾兩程つゝ

御扶持方出米

一四萬三千七百石程つゝ

内
二萬六千三百五拾石程つゝ　若山傳法
一萬三拾八石程つゝ　江戸築地
千二百八拾九石程つゝ　京伏見大坂
千四百八拾五石程つゝ　紀州在渡り
二千五百八拾五石程つゝ　勢州在渡り
千八百石程つゝ　御馬飼料

内　千八十石程　江戸
　　七百石程　若山

御旅行極　天保二卯年二月御旅行之節より御極

御定銀

一一萬三千二百五拾兩　外に金八千兩程つゝ

右は江戸御詰年御入用

一一萬四百兩　外に金千四百兩程つゝ

右は若山御在年御入用

一八千六百五拾兩程

右は片御道中之御入用

一四千二百八拾兩程

右は片御道中御家中へ渡り金尤浮置より出る事なり

右の一書は伊都郡橋本孫三郎家藏之舊記中より抄錄歳入出の分原書年號を記さされはいつ比との事判し難し御旅行極に天保二卯年云々とあれは或は其前後と見做し大差なかるへし

目盛（慶應二寅年調）

目盛

從來御勘定所御勝手方に目盛と稱する法有て歳入出之豫算額を一紙一目瞭然之表に製し量入爲出

の基本となす蓋し　烈祖の基盤目盛に基きたるものと雖も是そ正しく御工夫の目盛也と傳へ來れるものなし中古以來平常は一ヶ年の歳入出即ち大積りを以て處理し來り若し非常歳出增過財政上執政之英斷を要する如き際に當ては必す此目盛を調製以て協議の材料に供す左に掲くるものは慶應二寅年御家中半知發布の時之調査に係る其調査法は古今一定と云には非す單に一目瞭然を旨となすよし而して會計局中と雖も秘中の秘とし御勘定奉行同組頭御勝手方奥座と稱する他は堅く他見を禁したりと云ふ

一森部好謙（市之丞事元御勘定奉行組頭也）云く御財政必至困難の極は明和之度にして　香巖公御苦心あらせられ後文化之度には　舜恭公堀江平藏を御拔擢御財政上御委任あり同人は日々の出納之如きは敢て顧る所なく積年延滯の計算を整理御分限之調査に數日月を消し漸く一ヶ年度之分堺を見認め夫より量入爲出之法規を立之を嚴密に確守初めて釐革の端緒を得たるよし度支之要量入爲出に在るは古今同一にして支出の緩急を加減し財政を經營する最も須臾も不可離は此預算表に在り此十ヶ年平均の目盛調査には大に刻苦せし所也と語れり

表中藍字（本書ハ印）は原書藍紙張紙朱字は（本書〇印）同赤紙張紙藍紙張紙墨字ハリシとあるは白紙張紙なるなり今其色を以て傍書し原書の趣を示す蓋し出納之平均を取らんと二三樣に調査以て政府の判裁を受くる爲の表なるへし

一右次項円角形の歳入表は蓋し弘化元辰年の目盛大計表なるへし某氏の秘藏を得たるを以て附記す

高六拾二萬九百拾四石

米二十八萬千五百二石

取金千二百三十五兩

銀　二　百　目

取米安政三辰より慶應元丑まて拾ヶ年平し

畑米初御拂米等石金五兩積銀方兩百目積

納

紀勢御收納米方 米二十五萬八千三百廿二石	浮置 米二萬三千四百八十八石 金二百三十二兩	見取 米三拾七石 金二百八十五兩
同畑米代 金十一萬千三百十五兩 此米二萬二千二百六十三石	免過 米一萬三百四十二石	口金 金三十七兩
新町井原町等定銀納 金四千五百八十五兩 此米九百拾七石	差口 米六千三百十七石 金四千百五兩	種貸利米 米三千九十八石 金三千六十兩
勢州川俣谷定納 幷有田小峠定銀納 金千二百三十七兩	糠藁 米四百六十八石 金十兩	二夫米代 金七千五百三十四兩

二分口茶口
金四萬二千兩

小物成
米百三拾八石
金一萬八千七百六十九兩

御普請役銀
金八百九十一兩

御拂米代
金十一萬八千五百兩
〔ハリシ 金十二萬九千百十五兩〕

御買米
米一萬四千四百九十三石
米二萬三千三百四十二石
○米一萬九千七百七十三石

臨時納
米六百二十五石
金三千七百三十九兩

諸返納
米千八百四十九石
金四千三十四兩

納合
米三拾一萬九千百七拾七石
米三十二萬八千二十六石
○米三十二萬四千四百五十七石
金三十二萬千三百三十三兩
〔ハリシ 金三十三萬千九百四十八兩〕

御定金米

御簾中樣御定金米
米二百七十石
金三千兩

同御不足被進
金五千兩

伏見樣へ被進
金二百五十兩

左京大夫様御合力
米八千石

千万君様へ被進
金百両

小以
米八千二百七十石
金八千三百五十両

御家中
御宛行

出知行
米十三萬二千百九十二石

御切米
米八萬三千二百二十五石
金千二百五十両

御扶持方
米四萬千四百十石

御合力
金五千九百両

給分給米代
金七千三十五両

御馬飼料
馬扶持
米五百二十三石

元二分口役人給扶持
金一万両

小以
米二十五萬七千三百五十石
金二萬四千百八十五両

御参暇御入用宛并非常宛御備金米等

御参暇御入用宛
金三万両

〔ハリカケシ〕
非常宛御備金米
米八千石
金五萬五千両
〔カケシ〕金五千両
〔ハリカケシ〕

閏月増除置
米千五百石
金三千三百両

米四千五百石
米千五百石
小以 金八萬八千三百両　〔カケシ〕〔三萬八千三百両〕
金三萬三千三百両

「此所の三線外黒中赤内藍の三色にて書す

諸

御年寄衆御入手形 御小姓頭取入手形共 金二萬二千七百七十七兩 △金一萬三千六百九十八兩 ○金一萬七千八百廿三兩	御腰物方 金九十兩二歩 △金五十四兩二歩 ○金七十(一)〔一本ナリ〕兩三歩	御作事方 金三千四百二十五兩三歩 △金二千六十兩一歩 ○金二千六百八十兩二歩	小買物方 金四千五百十兩五歩 △金二千七百十二兩三歩 ○金三千五百廿九兩二歩
御年寄衆御判帳 金千二百七十一兩一歩 △金七百六十四兩二歩 ○金九百九十四兩三歩	御納戸呉服 金二千七百二兩三歩 △金千二百四十六兩二歩 ○金千六百二十二兩	御疊方 金八百六十一兩一歩 △金五百十八兩 ○金六百七十四兩	小普方 金五百九十一兩二歩 △金三百五十五兩三歩 ○金四百六十二兩三歩
御勘定奉行判帳 金九百三十五兩一歩 △金五百六十二兩(一)〔一本二〕歩 ○金七百三十一兩三歩	大納戸呉服 金五百四十二兩一歩 △金三百二十六兩 ○金四百廿四兩一歩	御馬入用 金二千五百四十八兩一歩 △金千五百三十二兩二歩 ○金千九百九十四兩	大川除御普請 金千七百六十九兩 △金千六十三兩三歩 ○金千三百八十四兩一歩
御用人判帳 金六千二百五十九兩一歩 △金三千七百六十四兩一歩 ○金四千八百九十七兩三歩	大納戸紙代 金四十四兩二歩 △金二十六兩 ○金三十四兩三歩	馬求 金五百七十兩一歩 △金三百四十三兩 ○金四百四十(六)〔一本八〕兩一歩	大普請方 金二百六十九兩三歩 △金百六十二兩一歩 ○金二百十一兩
御武具入用 金三十八兩 △金二十二　三 ○金二十九兩三歩	御臺所 米二千六百八十九石 △米千六百十七石 ○米二千百四石 金四千四百五十七兩三歩 △金二千六百八十一兩 ○金三千四百八十八兩	御船入用 金八百十兩二歩 △金四百八十七兩二歩 ○金六百三十四兩一歩	御仕着 金六百九十兩 △金四百十四兩三歩 ○金五百四十兩

○印は赤　△印は藍　次頁も同斷

拂

旅籠
金三百六十四兩一歩

駄賃
金四百七十八兩二歩
△金二百八十七兩三歩
○金三百七十四兩二歩

日雇
金二千九百八十九兩三歩
△金千七百九十八兩
○金二千三百四十三兩二歩

木錢
金二百五十二兩二歩

渡り金
金一萬千四百七十四兩二歩

夫金路銀江戸詰被下
金三千二十一兩三歩

張附方
金九十一兩三歩
△金五十五兩
○金七十一兩三歩

御鷹入用
金七十一兩二歩
△金四十二兩一歩
○金五十五兩

猿樂配當米代
金百十一兩

玉川弁地子代
金三百五十八兩一歩

萬小拂
米四千九百二十六石
△米二千九百六十二石
△金一萬五千三百四十九兩三歩
金二萬六千八百八十九兩三歩
（二萬六千八百五十七兩）（カケシ）
○米三千八百五十四石
○金二萬二百廿一兩一歩

在々御普請
米二百三十五石
金二千四十一兩

臨時拂
金五千二百五十七兩三歩
金三千百六十二兩
○金四千百十四兩

諸貸方
米二百八十八石
△米百七十三石
○米二百二十五石
金六千八百九十四兩
△金四千百四十六兩
○金五千三百九十四兩二歩

御廻米運賃
金六千兩

路銀拂
金八百四十九兩
△金五百十兩二歩
○金六百六十四兩一歩

御救下
金四百五十兩
△金二百七十兩二歩
○金三百五十二兩

祠堂敷金利
米二百四十八石
金千五百二兩

御寄附金利
金二百九十一兩

(御)役米不足貸方宛（一本御）
米三千五百五十六石

傷毛代御藏米被下宛
米五千四百四十四石

田邊上ケ知之内
徹福丸殿へ御下ケ筋
米三千八百四十八石
金八百十兩

歩兵入用
米二千石
金五千兩

御軍事方
金七百十七兩三歩

御買米代
金七萬二千四百六十五兩
△金十一萬六千七百十兩
○金九萬八千八百六十五兩

上方ノ外
御立用元利
金五萬九千四十兩

御拂米
米二萬三千七百石
カケシ
米二萬五千八百廿三石

農兵宛
△米三萬石 カケシ
△米一萬五千石
○米一萬石

小以
米四萬六千九百三十四石
金二十六萬千九百五十五兩一歩
△米六萬九百六石
△金廿六萬六千百十三兩
カケシ
米四萬九千五十七石
金廿六萬千百十二兩三歩
○米五萬七千三百三十七石
○金廿六萬六千百十三兩

拂總合
米三十一萬七千五十四石
金三十八萬二千七百九十兩一歩
△米三十二萬八千二十六石
△金三十三萬千九百四十八兩
○米三十二萬四千四百五十七石
○金三十三萬千九百四十八兩
カケシ
米三十一萬九千百七十七石
金三十三萬千九百四十八兩

差引米二千百二十三石
金一萬千四百五十七兩一歩

御除米
御不足

白紙ハリシ　ナシ
藍紙ハリシ　ナシ
赤紙ハリシ　ナシ

□　△

「△印處へ下け紙にて」

本文藍掛け紙之通農兵宛三萬石
除米候得(共)(一本は)非常宛御備金米潰
し候ても諸役所入用宛七千兩余
ならては無之候に付右を以て諸
向へ別當難出來事
但諸役所御入用掛け紙の株々
十三萬兩余候事

「□印の處へ下け紙にて」

藍紙掛け紙歩合六歩一毛四糸余
此三分九厘八毛六糸程減
赤掛け紙歩合七歩八厘二毛五糸余
此二分一厘七毛五糸程減

表中浮置宛過差口初小目之性質理由は皆郡制乃至職制の部に解説あり唯祠堂敷金と云は諸寺社等より請願又保護法により其資金を會計局へ預り元方御金藏入にし年々利子を下付するものにて預之名稱と雖も其實一種の立用金にひとしきなり

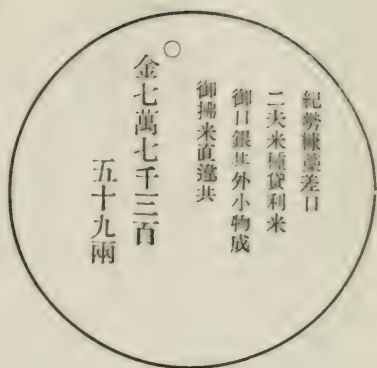
一弘化元辰年目盛

紀勢新田
高五萬六千八百六十九石
御拜領
御高五十五萬五千石
平し免四つ八分三厘五毛余
合高六十一萬千八百六拾九石
○
元米二十九萬五千八百八十一石

文政之度より弘化元辰九
月迄年々御不足御立用を以て
御凌相成候總立用高
金四十二萬四千六百兩
外に弘化元辰十月より同三午九月迄
十三萬兩余御不足積り
御座候得共御勘定出來
不申眞劍難分御座候事

〇
紀勢御藏差口
二夫米種貸利米
御口銀其外小物成
御拂米直違共

〇金七萬七千三百
五十九両

「〇二口」

金三拾七萬三千二百四拾両

（御收納并御立用高
□御暮し方御入用

「」

御家中御宛行出知行
高廿五萬九千四百六十石
元米九萬三千五百八十六石

「」

御家中御切米御扶持方
米十二萬千五百八石
此高三十萬三千七百七十石

御收納高
但米一石一両積

「二」

金五萬千六百七両
九千二百三拾石
一萬四千二百十両
三千五百両
二千三百十七両
二萬二千百五十両

御臺所御用米
在中貸米等
御參暇御入用
公邊拜借金
御返納
祠堂敷金利拂
御立用利拂

「按に　九千云々以下四項は五萬千六百七兩之內譯と察すれ共之を積算するに二百兩少數也誤脱あるへきか暫く本書之まゝに記す」

「□」

御方々樣御定金米并不時被進

金一萬三千廿九兩　一位樣

金二千九百四十八兩一歩　御簾中樣

金二百兩　一位樣被進

米八千石　左京大夫樣御合力

金千七百八十八兩　御部屋樣

金千百四十四兩二分　御內證之御方

金一萬三千六十二兩一歩　一位樣御初御定米御不時被進

合四萬百七十二兩

「□」

諸御役所御入用定金不時共

金八萬七千五百三十兩

「□印五口」

合三十九萬四千六百三兩　御暮し方 但米一石一兩之積

差　引

二萬千三百六十兩餘　天保十四卯納御不足

慶應元丑年十月より同二寅年九月迄

御納拂大樣積　丑十一月調

御收納此節迄相極り不申株には前納見當に有之諸拂は勿論前納取計大凡見積の儀に付

納拂とも追て増減可仕事

米二拾九萬九百八拾六石
金千二百三十八兩

内

米二萬九千九百拾六石

此金拾三萬二百二拾六兩

内

一萬九千百六十二石

此金八万二千五百九十九兩

四千七百五十一石

此金二萬三千二百八十八兩

九百十三石

此金三千九百七十九兩

五千九十石

此金二萬三百六十兩

成替

米二十六萬千七十石

紀勢御收納

金銀納

畑米

但 石四百九匁五分 兩九十五匁

勢州冬金

但 金十兩に付 五俵一分

新町井原町等定納

但 石四百十三匁五分 兩九十五匁

紀勢貢附米 但石四兩積

金十三萬千四百六十四兩　浮置免過小物成

一米五萬二百五十三石
一金六萬八千七百四十九兩　諸運上等口々諸納

内

二萬三千七百一石
三百三十五兩　浮置上け米

一萬三千九百四十一石　免過上け米

百三十八石
壹萬六千百十四兩　小物成

七百七十兩　御普請役銀

六千四百二十石
三千二百八十四兩　差口

四百八十一石
八兩　糠藁

九千四百七十五兩　二夫米

三千九十八石
二千四百五十二兩　種貸利米

臨時納類
六百二十五石
三千七百三十九兩

諸返納
千八百四十九兩
四千三拾四兩

二分口茶口
二萬八千五百三十八兩

小以如高

御拂米代
金七萬四千四百四十兩

但石四兩積
此米一萬八千六百十石

內

三領在々切手繼納
三千石

紀州在々右同兩熊野銀納共
八千石

紀勢殘米銀納
六千石

御仕入二步口仕込米臨時役所立御扶持方等
千六百十石

小以如高

御買米
米一萬九千六百二十五石
大豆五百二十三石

內

江戸常(用)[一本府]御切米　九千石

上方町人御扶持方　千三百六十石

左京大夫様御合力の内差引銀成　千二百五十石

知行御切米之内諸役所金銀押割返し米　千百二十五石

右同割濟米　四千五百四十石

江戸御扶持方の内御買上け　二千百五十石

刺田彦社領米其外口々　二百拾石

御馬飼料并御家中馬扶持　大豆五百二拾三石

小以如高

合

米三拾三萬九百五拾八石

金二拾七萬四千六百五拾三兩

大豆五百二拾三石

内

田邊上け知之内御下け　三千三百四拾九石

三百十六兩

新宮上け知皆御下け　二千六百九拾六石

千二拾八兩

残て

米三拾二萬四千九百十三石
金二拾七萬三千三百九兩
大豆五百二十三石

内拂

米八千二百七拾石　方々樣御定金米幷被進金共
金一萬七百十兩

内

二百七拾石
三千兩　御簾中樣御定金米

五千兩　同御不足被進
三百六拾兩　去る戌年分御不足被進 殘寅ゟ五年賦御返納筋
八千石　左京大夫樣御合力
二千兩　實成院樣御分料
百　兩　千万君樣被進
二百五拾兩　伏見樣へ被進
小以如高

米二拾五萬五千九百三拾石
金一萬四千百八十五兩
大豆五百二十三石
内
拾三萬千八百十八石
八萬三千二百二拾五石
千二百五拾兩
五千九百兩
七千三十五兩
四萬八百八拾七石
大豆五百二拾三石
小以如高
米一萬千九百四拾二石
金拾六萬四千二百三拾五兩
内
拾四萬千八百二十二兩
二千六百八十九石

御家中御宛行
出知行
御切米幷御合力（米）一本アリ
御合力金銀
給分
御扶持方
御馬飼料御家中馬扶持
諸役所定不時等御入用
諸役所定不時
御臺所御入用米

（二百三十五石
三千四百二兩
（二千百九十六石
二百十五兩
三千二百七拾九兩
（一本ナシ八百五十七兩
千八百七拾三石
三千兩
（二百四拾八石
千五百二兩
二百九拾一兩
千四百拾五兩
五千四百五十九兩
三千五百五十六石
四百五十兩
（二百八十八石
三千四百兩

在々本計御普請
在々難澁所御手入御藏米被下
在々へ貸方
在扶持雜用扶持）
萬小拂
御廻米運賃
祠堂敷金利
御寄附金利
路銀拂
臨時拂
鄉役米不足貸等宛兩熊野不足渡共
御救米
御家中初諸貸方

小以

金一萬八千百六十兩　割濟米代

此米四千五百四十石　但石四兩積

金八千六百兩　前納より追送りの割濟米代

金六萬二千四百七拾二兩　御買米代

此米一萬五千六百十八石　但石四兩積り

米一萬八千六百拾石　御拂米

米三百五十石
金五千兩　地場海防筋幷大不時御入用宛

金三千兩　公邊御拜借筋年賦御返納分

金二萬五千八百五十六兩　御郡代金元利

內

一萬七千五百兩　元

八千三百五十六兩　利

金三十八萬三千二百八十七兩　御立用元利

內

三十一萬二千二百七十五兩　元

七萬千十二兩　利

外に

二萬兩　此御立用の譯は別紙に有之通に御座候　大坂町奉行所御立用有之

二千六百兩　京都御入用宛御出陣中御入用積

金三千兩　御國所々御固場御入用

金三萬兩　御參府御入用宛

米三千百石余　傷毛代り御藏米被下筋

米一萬石　御囲米除置

小以
米三十萬八千二百二石
金七拾三萬二千百五兩
大豆五百二十三石

差引

米一萬六千七百十一石　寅十月へ越積り

金四拾五萬八千七百九拾六兩　御不足積り

此御償

三千兩　公邊年賦御返納追送り

二萬五千八百五十六兩　郡代金元利追送り

一萬四千二百八拾五兩　三山方御立用元金追送り
一萬四千兩　三山方御用納り積り
　外に一萬六千兩也　子納へ入
四萬五千百十五兩　三領在町御立用
（外に六萬二千七百五十五兩子納へ入（一本ナシ）
七萬三千六百兩　上方御立用積り）
　外に九千七百兩　子納へ入
拾八萬二千九百五十兩　上方御立用の内元金追送り
三萬兩　若山新札御立用
千五百兩　松坂銀札方加入金御立用
六千兩　同所新札金成筋御立用
小以三十九萬六千三百六兩
　差引
○六萬二千五百兩程　御不足積り
　　外に
○米金　御出陣御入用宛

大坂御滞陣御入用

御出陣に付若山にて御入用

中國路へ御人數御差向に付
同所并紀坂にて御入用

御不足積

内

○印二口

合 米金

「右は古來より御勘定御勝手方に於て來年度の歳出入豫算を年々取調る事にて是を御積りと唱ふ前年の十月より翌年九月迄を會計一ヶ年の年度と定め其年度を何納 丑納寅納 と稱す拂とは即ち歳出なり非常歳出多端の年柄は六ヶ月間或は三ヶ月間と度々に調査すと云

一年中御立用とは御出入町人爲替組等の豪商又は御仕入方三山方役所等より借入以て國用に立つるの義なり

一三山方とは江戸芝邸熊野三山御寄附金貸付方の事にて　有徳公より三山へ御寄附金を利倍之爲め諸侯初廣く世上へ貸附を以て三山修補維持に供するの主旨にて公認を得滞金あれは町奉行へ出訴裁許を受くるの特權ありしなり

一田邊新宮上け地御下けとは嘉永六丑年十二月水野土佐守へ海防に付新宮與力地上り高千六百石御下け被下尚上け地高七千石余御下け安藤飛騨守へも上け地五千石余御下け被下たり是等の計算によるものなるへし」

「三」

慶應二寅年六月より九月中迄御納拂大凡積

一七萬千三百兩　地場若山諸拂積
一二萬二千兩　江戶かへり込
一九千兩　京大坂堺御入用積
一六千五百兩　步兵筋御入用宛
三十萬四千兩　御出陣筋金米
一萬四千二百兩　御入用
但大樣內譯別紙二印之通「二印とは前記御出陣百日大凡見積を云」
一二萬五千石　御扶持方若山にて諸拂
內三千石　十月分見込
小以　米二萬九千二百石
　　　金四拾一萬二千八百兩　程
內
三萬七千八百兩　銀札幷諸役所預り金等御有物
二萬七千兩　御備金御封解
一萬二千兩　銀札方備金御立用
二萬五千兩　勢州より廻金
內二萬二千二百兩　御立用納之內

二萬五千七百三十兩　賣附米代
三千兩　追傳法入切手代
六萬兩程　畑米代先納
一萬二千五百兩　若山御用達共より御立用
二萬四千五百兩　新札出來
一萬七千七十五兩　諸納諸色納
六萬九千八百兩　勢州御立用納積
一萬八千二百二十石　傳法御藏御有物
千五百十五石　大坂幷神戸御有物
三千三百石程　御拜借米一萬俵
二千七百七十五石　三領御囲米積取之積

小以
米二萬五千八百石余
金三十一萬四千四百兩

差引
米三千四百石
金九萬八千四百兩
程　御不足
此皆金十三萬二千四百兩程　但石十兩積

右之通

慶應二寅年十月より同十二月迄金方御納拂大樣差引

若山寅冬〆三

「四」

一六千五百四十七兩　諸納諸返納

一四千四百六十兩　爲替納

一五千三百兩　二夫米代

一七千兩　繼納切手代

　此千石程　但石七兩程

一八百六十七兩　冥加運上臨時納

一七千百兩　二分口茶口

一十三萬三千兩　畑米代

　此米一萬九千石　但石七兩積

一二萬六百六十兩　諸小物成

一三千七百兩　種　貸

一二拾兩　路銀納

一百　兩　御役銀

一千兩程　殘米代
一三萬兩　勢州より取寄
一三千五百兩　諸役所取替米代
此米五百石程　但石七兩積
小以金二拾二萬三千二百五十四兩
內　拂
百二十五兩　伏見様へ被進金
金八千五百五十八兩　金銀給御合力等
二萬七千五百兩　諸役所定不時
八百三十八兩　渡り金
七千二百十八兩　御入手形三判帳御小姓頭取入手形とも
四百九十三兩　路銀拂
五千百十兩　爲替渡し
百四十六兩　御救下浮置下共
千五百四十六兩　臨時拂
六百五十兩　御馬飼料馬扶持
六百五十兩　本計御普請

御廻米運賃	四百五十兩
御軍事方	千百兩
海防筋	千百六十兩
所々御固場入用	六百兩
諸賃方	千五百兩
御靈屋 御佛供料	百十五兩
祠堂敷金利	五百八兩
割濟米代	一萬五百兩
但石七兩積	此米千五百石
左京大夫樣御合力差引代	七千兩
但石七兩積	此米千石
武備筋利分	六百兩
御寄附金利分	二百九十兩
諸役所預り金立用返濟	三百二十兩
御仕入方御立用元利	二萬九千四百兩
元 利	内　二萬二百八十兩 九千百二十兩
在町御立用諸役所とも元利	一萬六千九百九十兩

内　元 八千九百十兩　利 八千八十兩

上方御立用元利　九萬五千九百二十八兩

内　元 五萬六千三百八十兩　利 三萬九千五百四十八兩

上方町人御扶持方代　九千百兩

但石七兩積　此米千三百石程

京坂堺諸拂繰込　九千兩

江戸繰込　拾一萬六千六百兩

畑米代先納筋差引拂　六万兩程

御用達町人より當座御立用差引　一萬三千百兩

内　元 一萬二千五百兩　利 六百兩

小以金四十五萬八千七百七十五兩

差引

御不足　金二十三萬五千五百二十一兩

外に

御出陣御入用　金十九萬兩程

總御人數御賄入用積　十六萬兩

鑑札被下其外臨時御入用宛　内 三萬兩

慶應三年十月より同四年九月迄紀勢卯納金方大様見詰

「征長御出陣は慶應元丑年五月十六日　將軍江戸御進發　君上には御先手御總督御拜命にて五月四日江戸御發艦九日若山御着城同十八日若山御出陣大坂御着翌同寅年五月まで御滯坂同六月三日大坂御發艦同五日藝州廣島へ御着同年九月三日まで御滯陣四日廣島御出發六日御着阪十月三日御歸國也

一書中御影村初三ヶ所とは慶應元丑年六月十九日攝州石屋村御影村住吉村御取締被　仰出十一月十一日まで御警衛あり」

慶應三卯年十月より
同　四辰年九月まで
紀勢卯納金方納拂大様見詰

一金十三萬六千七百兩　卯九月より越物

一金十八萬二千四百兩程　寅納殘米幷卯納切手拂御拂米代共

一金十七萬二千五百兩程　畑米代幷二夫米代小物成賣附米代等

一金四萬九千七百兩程　二歩口幷運上諸返納等

一金二十六萬九千兩程　在々御立用幷種貸筋共

一金二萬八千六百兩程　御不用之銃御拂代等

一金二十萬九千兩程　若山通用銀札摺立

一金三萬兩　金札御拜借

一金三萬兩
一金三萬三千百兩余
一金四萬二千兩程
一合百拾八萬四千兩
内
拾七萬六千八百兩
拾六萬兩程
一萬五千二百兩程
拾九萬八千六百兩程
八萬六千兩
九萬三千兩程
七萬兩程
六萬千七百兩程
三萬兩程
一萬三千七百兩程
二拾八萬兩程
外に

若山御封解
江戸御有米之内四千七百石余御拂積并
同所御有物且御勝手方別段筋御貸方出金等
江戸御封解
諸役所定不時御入手形三判帳御合力給米給分
御役料稽古料祠堂敷金利拂其外諸拂
畑米代先納戻し并上方初在町
諸役所等御立用元利下
左京大夫樣御合力の内且上方町人
御扶持方御買米成代
卯十二月御上坂京阪諸御入用
辰五月まで江戸地場繰込
御簾中樣御歸國に付江紀御出方并常府
移住に付江紀勢并海陸諸入用大樣見詰
關東へ御人數御繰出に付御入用宛
五ヶ國札引替宛
紫裏天神橋御屋敷御小休御入用九條殿初大坂御旅宿御入用鷲尾殿初
御入用ニホール攘御貸上元幕兵等罷越候節御入用等口々臨時拂大樣
軍資金并大宮御所御造立國役金
外國筋御拂并土州借船いろは丸筋

拾一萬八千兩程　寅納にて御拂

一萬四千三百兩程　いろは丸船代の内當暮幷來暮兩度に御拂分

七萬九千五百兩程　コロールへ注文小銃破約幷ニードルゲン銃破約積り

二萬三千七百兩程　いろは丸一件外國御拂等御減し分

二萬八千兩程　洋銀相場引下けに付見詰減し分

合五拾四萬三千兩餘　外國一件見詰總高

下ケ紙

五十四萬三千兩餘　外國筋御拂見詰

內

三十九萬八千兩程　全く御拂積り

一萬四千三百兩程　當暮幷來（暮）［一本脱］兩度に御拂積

七萬九千五百兩程　破約積

小以四十九萬五百兩程

差引

五萬千五百兩　土州一件等御減筋且洋銀相場違減し

二萬千兩程　勢地にて辰十月へ越物積

小以百二十萬六千兩餘

百十三萬三千兩程　去卯十月より辰八月まで御拂濟大樣
内五萬二千兩程　九月中御拂積大樣
二萬千兩程　勢地にて辰十月へ越積
差引
二萬二千兩程　御不足積
此御償の儀金札再度御拜借相濟候はゝ右之内を以御凌相立候見詰に御座候事
（一本アリ 右之通）
九　月

「按に右拂の部合計差引共計算齟齬の點あり何等の誤謬なるや今知るに由なし暫く原書の儘を掲く唯大体を諒察すへきのみ

一御封解とは御勘定奉行主管の他に政府にて特種の利金を直轄し執政直封貯蓄以て非常に備ふるものを御封金と唱ふ從來如何なる事變にも決して解封する能はさる成規の處國家興廢に關する大非常に遭遇せしを以て遂に開封に至りし也江戸にては專ら三山貸付方純益金を年々封領せられたり

一土州いろは丸件とは慶應三年四月明光丸艦長崎へ航海の途中備中沖にて土佐藩のいろは丸と衝突該船沈沒乘組の御勘定奉行茂田一次郎長崎にて土佐藩の後藤象次郎等と應接頗る脅迫せられ薩州の五代才助に中裁を托し遂に我より償金八萬三千五百廿六兩余支出すへき旨を結約の處後

御勘定奉行勤務岩橋轍輔長崎へ出張更に再談を開き七萬兩に減額償出したるなり該償金に係る計算書岩橋轍輔手簿に記載のもの發見により次項に抄出す本記納拂大樣見詰書に照らして符合せす事由漠然の觀ありと雖も實際に至ては種々變動出入を免れさりしならんいろは丸衝突事件は　當公當年の本記に詳なれは併せ見るへし

一外國筋御拂乃至コロール注文小銃ニードルグン銃破約云々とは征長實戰の結果兵制改革一般西洋銃隊編成に至りしを以て慶應三年六月御仕入方須山藤左衛門初於長崎外人コロール商社より短ライフル銃二千挺英商オールドより長短ライフル銃千挺獨逸人レイマンよりニイドルグン銃三千挺購入の結約をなしたる趣亦岩橋轍輔手簿中に記載あり即ち左に掲くる如し而してコロール商社之銃二千挺と及ひニイドルグン銃三千挺の內破約の事と察せらる如何なる事由なりしかは詳ならす其該銃炮之外生金巾一萬五千反上官沓千足黑羅紗十五反フランケット三千枚及ひ雜品若干とを外商より購求を結約したる事次記の如くなれは是等を合して外國筋御拂筋と稱したるなるへし」

長崎方御拂入筋見詰　慶應三卯年四月岩橋轍輔長崎へ出張の際手簿所記以下同し

コロマンドル船主意金筋

一洋銀五萬五千枚　但來る九月切洋銀百枚に付八十三兩替積

此金四萬五千六百五拾兩程

一本朱書 本文賣主コロウルへ即金渡之談決に相成候付蘭人ホートインにて立用を以渡方相濟み候に

付右商人へ來る九月限にて返濟之筈候事

一金八萬三千五百拾六兩　土州いろは丸沈没救助金

　永百九十八文　但來る十月切

一洋銀二萬千枚　オールド商社へ參着有之候
長短小銃千挺代

　此金一萬七千四百三十兩程　但一挺に付胴乱共十七兩一歩三朱程
來る十月廿六日切利足月一割

一同二千八十二枚　右銃之玉々袋合薬共六萬九千四百發代

　此金千七百三十五兩程　但千發に付二十五兩程
前同斷

一金三千四百三十一兩一歩　オールドへ注文上官沓上中下千足代
但一足に付平し一兩二歩程可相成
早々參候筈約り來る十一月切

一金二萬七千兩　コロウルへ注文小銃短二千挺代
但一挺に付胴乱なし十三兩二分替

　內

　　四千百五十兩　長崎表にて渡方相濟

　　四千八百五十兩　七月八日切

　　四千五百兩　八月切

　　一萬三千五百兩　來辰正月切

一金九千百三十五兩
洋銀二千七百九十二枚七合五勺　オールドにてフランケット三千枚并
黑羅紗等品物色々代

　此金二千三百廿兩程　但來辰三月切

一洋銀十五萬七千五百枚　オールドにてニポール船代

此金十三萬七百三十兩程　但來辰四月切

合 金十二萬三千九十二兩一歩
　 永百九十八文

洋銀二十三萬八千三百七十四枚七合五勺

此金十九萬七千八百五十兩程

皆金三十二萬九百五十兩程

外に八千百七拾兩

內 七千四百七十兩　ホートウインより買入品賣損
　 七百兩　オールド小銃代利足

右當七月八日より來辰四月迄八回に切り渡の計算あり略す

外に

洋銀拾萬二千枚　獨逸人レイマンへ注文ニイドルグン

此金八萬四千六百六十兩程　三千挺代一挺に付金廿八兩一歩程

內一萬五千兩　前金渡方相濟

殘り六萬九千六百六十兩　年內中又は來辰二月比品着之上相渡候筈

皆金合三十九萬八千七百八十兩

御出方總差引畢竟

一金三十四萬二千百二十兩　コロマンドル艦主意幷ニボール艦代其余御買上物諸雜費共
一同六萬九千七百兩　ニートルグン三千挺代金之内
　外に一萬五千兩　手附金
一金七萬千九百兩　堀内六郎兵衛横濱にて約定銃六千三百挺代
一同三千兩　同人見請外買入物代仮拂筋
一同六千兩　岩橋轍輔横濱幷長崎へ往返諸雜費見當
　〆金四十九萬二千七百二十兩程
　　内
　二萬二千三百五十兩　八月迄長崎へ拂
　一萬二千兩　横濱銃六千三百挺代金之内
　三千兩　同所買物代之内
　三千兩　ニッポール諸雜費幷横濱行
　小以金四萬三百五十兩程　此節迄御拂高

差引
　金四十五萬二千三百七十兩程
　　内

五萬七千二百七十兩	九月限り
十萬三千三百九十兩	十月限り
三千四百三十兩	十一月限り
一萬三千五百兩	來辰正月限り
六萬九千七百兩	同　二月限り
一萬千四百五十兩	同　三月限り
十三萬七百三十兩	同　四月限り
五萬九千九百兩	横濱銃代
三千兩	岩橋轍輔長崎往返諸費見當

小以右之通

「記中コロマンドル船主意金筋ニポール船代とは慶應二寅年秋長州征討之時戰爭の必要により蒸氣船購入之事を御仕入方へ被命其九月該吏谷口惣十郎水野刑部於長崎外人コロウル商社より蒸氣艦コロマンドル號を洋銀十一萬九千五百元にて購求歸國之處紛議湧出翌年四月御勘定奉行茂田一次郎御仕入頭取須山藤左衛門等役々長崎へ出張コロマンドル船を賣主コロウル商社へ返還の事談判を遂け爲に洋銀五萬五千元辨償を結約すコロマンドル主意金とは之を云也而して更にオールド商社より蒸氣艦ニッポール號を洋銀十六萬七千五百枚（本記に十五萬七千五百枚とあるは直引したるにや不詳）にて購入したり蒸氣艦購求之事は御仕入方へ被命しゆへ都て同局の負担に係り御勘定局計算とは別派なるへし故に前記納拂大様見詰書にも見る處はなし（三萬兩程と云條にニポール艦御買上とあるとは該艦代の外司農府計算に屬する小部分の費なるへし不詳）依てコロマンドル返還ニポール買入の約定書及ひ船目錄等は財政第六卷御仕入方の部に揭け爰に畧す

一堀内六郎兵衛か横濱にて約定の銃六千三百挺と云は一時其議あつて見積計算となしたるも實行に至らさりしならん納拂大樣見詰

書及明治二年正月御經濟調書にも見へす信叢共當時に在ても記憶せさる處なり」

伊呂波丸衝突件

丁卯六月以呂波丸積込荷代價土藩より申出候目錄寫

一綿　三千斤　代金六百七十五兩二歩也

一大豆　二萬斤　代金四百三十兩二朱と永九文

一氷砂糖　四千斤　代金五百二十兩也

一白砂糖七千六拾五斤三合七勺七才　五十七丸　代金四百九十四兩二歩（一）[一本二]朱

一同　九千九百九十三斤　八十三丸　代金九百七十四兩一歩一朱

一同　七千五十七斤二合五勺　六十丸　代金四百廿九兩一歩二朱

一同　一萬二千二百六十一斤二合五勺　百丸　代金千四十二兩三朱永六十五文

一同　九千九百一斤八合七勺五才　百丸　代金七百八十二兩二朱永廿五文

一奧縞四百反也　代千四百兩也

一皿紗貳百反也　代六百五十兩也

一金百五拾兩也　但右品物積込の日雇往來船賃五厘銀共一切也

一同六兩也　但諸運賃金如此

一金四千兩也　但用物箱五つ高之內

一同三萬五千兩也　　但右同し五つ高之内

一同八百兩也　　土佐屋英四郎へ船中入費用金として渡有之

一同二百五拾兩也　　但いろは丸借受損料

一同二百五十九兩一歩一朱　　但船中乗組之者着用手道具共別紙廉書之通

一同三十二兩二歩一朱　　但大洲稽古人右同斷別紙廉書之通

右合四萬七千八百九十六兩也

　永百九十八文

　　以呂波丸代償土藩より申出候目録寫

一銀錢四萬トル　　船買入直段

　内八千枚寅年ニ割入

　　此金六千二百兩　　百枚に付七十七兩二歩替　但終年迄同斷

卯の元

三万二千枚　　利三千二百枚

　〆三萬五千二百枚

　元入一萬三千二百枚（一本ナシ 利共）

　　此金一萬二百三十兩

辰の元

二萬二千枚　　利二千二百枚

〆二萬四千二百枚
元入一萬二千二百枚（利共）（一本ナシ）
此金九千四百五十五兩
巳の元
一萬二千枚　　利千二百枚
〆一萬三千二百枚
此金一萬二百三拾兩　皆濟
當年皆濟致候はゝ　　二萬七千二百八十兩
〆

覺

一金六千二百兩　　寅年二わり入銀錢八千枚代
一同五百十兩一歩三朱　　右六千二百兩一割之利十月分
本文不公平と相考へ相除く
一同五千二百五十兩　　船買入に付通辭其外謝禮幷船道具代共
〆一萬千九百六十兩一歩三朱
右は是非船代一同に申請度趣意にも無之入用相掛候段御含迄申述置候事

以呂波丸船代目錄必用筋

本文に付

洋銀四萬枚　　内八千枚　　金〆六千二百兩

右大洲方へ相請取分

三萬二千枚

外に利銀三千二百枚　　但當十一月迄之算當

〆三萬五千二百枚

此金二萬七千二百八十兩　　但百枚に付七十七兩二歩替

又外に五千二百五十兩　　右一行船買（一本入受）之節雜用

〆三萬八千七百三十兩

内 洋銀四千枚　　但百枚に付七十七兩二歩替

金〆三千百兩

右は船買入代銀より一割直引

差引 三萬五千六百三拾兩

右之通取扱候はゝ公平之事歟と相考候事

卯六月　　五代才助

土州いろは丸沈沒一件に付土州藩へ渡たる証書

証書

一金八萬三千五百二十六兩　永百九十八文

内

三萬五千六百三十兩　いろは丸沈没艦代

四萬七千八百九十六兩　右に付　積荷物等代價

永百九十八文

右金高來る十月限於長崎表無相違相渡可申候已上

慶應三年丁卯六月　紀伊殿家來　茂田一次郎

土州侯御内
後藤象次郎殿

衝突一件金子差引尻畢竟　岩橋轍輔出張處分したる畢竟書也　茂田一次郎證書高

一金八萬三千五百二十六兩　永百九十八文

内

四萬二千七百二十兩　土州家へ全く渡し高但拂方相濟

二萬七千二百八十兩　イロハ丸代價引受

内

二千七百十兩　　本行船代應接を以爲負高

一萬四千三百三十四兩程　　別紙ボーディン入手形前

此年賦

六千四百五十七兩程　　來辰十二月渡

七千八百七十五兩程　　來々巳十二月渡

一萬二百三十七兩　　當節金にて渡し高(一本アリ 但し渡し方相濟)

差引(一本ナシ 減高)

一萬三千五百二十六兩餘　　土州家正渡之内減

二千七百兩程　　船代之內減

外に

三十兩程　　無利足年賦相成候に付利違

小以一萬九千二百三十六兩程

伊呂波丸代價引受に付ボーディンへ差入候手形

一札之事

洋銀一萬八千二百枚　　但時相場

內

八千二百枚　　來辰十二月限

一萬枚　　來々巳十二月限

右は伊呂波丸代價引受筋殘銀賜書之通無相違可相渡者也

紀州

慶應三年卯十一月十一日　岩橋徹輔

ボーディン商社中

「右賠償差引畢竟書簡略にて事由解し難しと雖も試に解釋を下せは土州藩よりの要求八萬三千五百廿六兩餘に對し積荷代損害辨償して四萬二千七百二十兩を土州藩に渡しイロハ丸代辨償は二萬七千二百八十兩の直立を以徹輔引受となし合七萬兩に減省以て土州藩之方を落着せしめ而して元いろは丸を大洲藩へ賣たるボーディンへ直接談判右船代價の殘金たる二萬七千二百八十兩に對し當金一萬二百三十七兩を渡し二千七百十兩を直引せしめ殘金一萬四千三百三十四兩を無利足二ヶ年賦に返濟之事に取極めたるならん則さし引一萬六千二百二十六兩を減省したるは徹輔手腕の敏活によりしなり

短銃炮コロウルより請取代價渡樣約定書寫

一方は紀州役人山本弘太郎須山藤左衛門速水秀十郎清水半右衛門上田孝左衛門尙一方は長崎居住之商人コロウル商社にして双方之間に慶應三年卯六月十日（千八百六十七年第七月十一日）取結ひし約定書

此度紀州國用に付短エンフイル、ライフル、二千挺致注文居置候尤一挺に付附屬品共代金十三兩二歩にて當六月より八ヶ月目日本來正月中請取候筈（右）（一本ナシ）に付代價二萬七千兩之內左之通り金子相渡候筈約條取極候儀相違無之候

四千五百兩　當六月相渡

四千五百兩　七月八日兵庫表にて相渡候筈

四千五百兩　同所にて八月中相渡候筈

一萬三千五百兩　右銃着之上受取候節皆相渡候筈

右之通條約取極候に付ては聊相違無之もの也

上田孝左衞門

清水半右衞門

速水秀十郎

須山藤左衞門

山本弘太郎

茂田一次郎

前書之通り致承知候

英商オールドにて長短銃買取之證書寫

一長ライフルインヒユール筒　九百六十二挺

但一挺に付　背負革胴亂　皆具

拾挺に付　鑄形一挺　三つ叉一組　掃除棒一挺

一短同筒　三十八挺

但前同斷

合千挺

此洋銀二萬千枚　但附屬品共一挺に付二十一枚

一長短筒玉合藥　六萬九千四百

此洋銀二千八十二枚　但數千に付三拾枚

右鉄炮合[illegible]等著具共其商社へ預け置日本來る十月迄之内代價へ利足月一歩相添洋銀拂入之時相場を以相渡右品と引替之儀致約諾候右鉄炮等追て引替之節萬一手本に違候儀有之候はゝ取替之儀も致約諾候依て一札如件

慶應三年卯六月廿五日

須山藤左衛門印

上田孝左衛門印

オールド商社へ

右致承知候

茂田一次郎印

下紙に

本文之内長短筒二挺附屬品共手木さして請取候儀相違無之候

一生金巾一萬五千反

オートインにて生金巾買入　約定名義清水半右衛門　速水秀十郎山本弘太郎

慶應三年卯六月廿三日約定

此代洋銀六萬九千枚

來る九月中代金渡

オールドへ注文約定　慶應三卯三月十二日須山藤左衛門水野刑部上田孝左衛門名義にて結約

第一
一彈力之沓　二百五十足

一足に付代一歩十六片半替
但底革二重に有之事

第二
一同　三百足

同代一歩十四片替

第三
一同　四百五十足　同代一歩十二片替

右約定日付より八九ヶ月又は可成早々持渡筈

第四
一右沓三着直に受取代拂可致尤時之一歩銀を以相渡す事

第五
一背負革袋二十相渡し手本通之品可（相[一本ナシ]）成安價にて持渡候事

一金九千百三十五兩也　當卯四月より十二ヶ月を限り拂入可申事

オールド商社より買入約定約定名義前三人

一洋銀二千七百九十二枚七合五勺

此黒羅紗十五反　代千三百三十五枚七合五勺

但四百十一ヤール

ゴム合羽四十五　但一つに付十二枚かへ

同　袴　六つ　代二十四枚　一つ四枚かへ

鞍　二つ　代八拾枚　附屬品共

六挺込短筒三つ　代七十五枚

同　二十　代六百枚　一挺三十枚かへ

針　差　十　代三拾枚

明治元年十月より同二年九月迄納拂大凡見詰

腰　掛　十二　　代百八枚

〆二千七百九十二枚七合五勺

フランケット三千枚　　代九千兩　　一枚三兩かへ

大炮引管　二千　　代百三十五兩

〆九千百三十五兩

（一本アリ「〇」）明治二巳年正月廿七日津田又太郎より御經濟調書爲心得御家中へ相示候書付

辰十月より巳九月まて御納拂大凡見詰

納拂共取極不申大凡見詰を以仕出之株々も有之且諸物價貴騰の折柄に付御拂向自然御入用增に可相成儀に付追々取極次第相犯候儀に御座候事

米二拾二萬六千四百九十八石
金千二百三十五兩程
銀二百目　　紀勢御收納

內

二拾萬五千七百五十五石　　米　方

一萬九千八百六拾三石　　畑方銀納

此金七萬九千四百五十二兩　　但石四兩積

内 一萬五千百九十八石 紀州
　 四千六百六十五石 勢州

二百五十七石　和州三ヶ村銀納

此金千二十八両　但石四両積り

五百九十石　新町井原町右同

此金二千三百六拾両　但右同断

拾四石　有田山保田定納

二百目

此金五十七両　但右同断

十九石　口熊野古座屋敷年貢

此金七十六両　但右同断

千二百三十五両　川俣谷定納

成替

米二十萬五千七百五十五石

金八萬四千二百八両

米二萬二千二百石　浮置

金四拾両

本文之内

二十五石以下當年より上ヶ米御用捨被　仰出候に付當夏かし分御用捨米大樣

千五百六十石程
外に二千六百三拾石程　御切米分御用捨
小以五千百九十石程　一ヶ年分

一米三萬二千三百石
　金七十八兩　米知上け米

一米四千九百七十石　免過

一米五千七百九十八石
　金二千七百四十八兩　差口
　此米六百八十六石

一米四百七拾四石　糠藁

一米三拾六石
　金二百四兩　見取
　此米五十一石

一金三十七兩　口金

一金五千十兩　二夫米代

一金二萬二千兩　二分口茶口

米九十一石
金二萬千六百七十六兩　小物成

一金四十五兩　御普請役銀

米百六十三石
金二千百兩　臨時納

米千三百石
金二千六百五十兩　諸色納

一金十三萬三千八百四十兩　御拂米

此米三萬三千四百六十石　但石四兩積

本文御拂米

二萬六千百五十石　紀勢切手拂殘米銀納共

五千九十石　紀勢賣付米

千五百二十石　御仕入方紀勢所々出張役所役人御扶持方取替拂等

七百石　役拂方三山方町人御扶持方取替拂

小以三萬三千四百六十石程

一米一萬四百五十石　御買米

内

五百二十石　　大豆

本文御買米

千二百五十石　　左京大夫様御合力の内御取替米差引残り御買米

八千六百八十石　　上方町人并御屋敷勤御扶持方其外御買米

(一本ナシ)(大豆)(一本アリ)(但大豆)五百二十石　　御馬飼料馬扶持とも御買入

小以一萬四百五十石

米二十八萬四千十七石
大豆五百二十石

納合金二十七萬四千三百三十二兩程

内拂

米八千二百七十石　　方々様御定
金一萬六百五十兩　　金米出

内

二百七拾石　　御簾中様

三千兩　　御定金米

七千兩　　同御定金不足

八千石 — 左京大夫様御合力

百　両 — 智月院様へ被進

五百五十両 — 伏見様へ被進

小以

（米二十二萬千二百三石
金二萬三千七百九十四両程 — 御家中御宛行等

内

九萬二千五百三十六石 — 出　知　行

外

千六百六十九石 — 免不足右被下無之分

千五百貳十七石

（八萬千四百石
九百六十両 — 御　切　米

（二萬二千四百四十四両
九百六十両 — 御合力給米給分御役料等

（一本ナシ）（四萬四千七百石 — 御扶持方）

本文之内

九百石程　奥詰御扶持方御出方増去十二月より當巳九月まで大様

外に
　百八十石程　十一二ヶ月分大様

以小
　千八十石程　一年分大様

大豆五百二十石　御馬飼料馬扶持共

千四十石　元常府夫金

三百九十兩　御扶持方十月より十二月まで被下筋

米一萬六千五百六十石

金九萬四千三百八十兩　諸役所定不時

内

八千八百兩　執政衆御入手形御小姓頭取入手形共

千百兩　執政衆御判帳

千　兩　御勘定奉行判帳

三千三百五十兩　公用人判帳

二千五百兩　御勘定奉行 御軍事方 判帳之内

千五百八十兩　右同断學習館方

二千兩	元御納戸呉服
四百兩	元大納戸呉服
二千六百八十石 一萬三千七百兩	御臺所
九千兩	御作事方
千六百兩	御疊方
四千百兩	御厩方
五千五百兩	小買物方
千八百八兩	御普請方
百五十兩	御仕着
九百五十石	大普請方
四十兩	旅籠
四百九十兩	駄賃
二千八百兩	日雇
八十兩	木錢
八千六百五拾兩	渡り金

萬小拂	二千五百兩 一萬二千兩
本計小	四千三十兩
普請	二千四百五十兩
臨時拂	千五百兩
御廻米運賃	六千兩
路銀拂	七百五十兩
御救下	四百三十兩
御寄附金利	二百三十兩
祠堂敷金利	二百五十石 千四百三十兩
在扶持	千二百石
郷役米不足	八千石
御手入御救米被下且貸下け共	千五百石
勢州へ執政衆御初新規御詰且相詰候向後渡金御扶持方等	米三百三十二石 金三千六百兩

本文渡り金御扶持等は常府移住之向御扶持方渡し外に有之事

金八百七十六兩　丑寅卯辰年分新古割濟渡

金一萬八千八百兩　畑米代先納元利下け

金六萬四千三百六十兩　御立用元利下

内

二萬千五百兩　紀州

三萬五千百八十兩　勢州

五千八百八十兩　上方

千八百兩　東京

米三萬三千四百六十石　御拂米

金四萬千八百兩　御買米代

金六萬六千兩　京都御入用宛

本文見詰之儀は去辰十月より十二月迄一萬三千兩當正月より九月迄大凡三千兩程と見詰候事

金八千兩　大坂御入用宛

金二萬六千八百兩　御先鋒御入用

本文御先鋒御入用十月より當正月迄御入用見詰

金九萬兩　奥羽へ出兵御入用宛繰込並諸入用

本文御入用見詰之儀は御國より往來幷滯陣大凡二百日の見詰に付右日數より長陣に相成

且御入用等之模樣に寄金高相増可申事

金二萬兩　　　　　　　　東京地場御入用宛

金一萬四千四百兩　　　　軍資金上納宛

金一萬兩　　　　　　　　軍資金十五萬金之内京都にて本計より上納

本文軍資金高一萬石に三百兩の割を以て御上納積

本文之外に

金二萬兩　　　　　　　　大坂商法方より上納

本文と合三萬兩

外に

一萬兩　　　　　　　　去十一月納め筋御下けに相成候事

金五萬兩　　　　　　　　大不時宛

金七千百七拾兩　　　　　いろは丸艦代の内夷人拂

金三萬千八百兩　　　　　ニードルグン銃千四百挺御買上代

米八百石　　　　　　　　三山社家願筋御下け積り

此二千俵

金三千八十兩　　　　　　金札割合御返納

金千兩　壽榮君御方女御御入内に付御助成一條樣へ被進筋

金千六百兩　大坂新港御入用御献木代

金五千兩　伊勢兩宮玉垣荒垣御手傳御入用

金三萬兩　御參府御入用宛

本文ニッポール御艦にて御往來東京にて一ヶ月程御逗留被遊候積を以て大凡見積り

拂合

（米二十八萬六百二十五石

金六十二萬三千百十兩程

大豆五百二十石

差引

米三千三百九十石　巳十月へ越積

金三十四萬八千五百兩　（一本アリ 御不足積り）

本文之外に京都御屋敷御普請被　仰出候はゝ此上御不足相増可申事

一金十七萬千八百八十兩　京都

内

十三萬兩　金札御拜借筋

（金五萬八千六百七十兩

銀五萬三百二十貫目　大坂

一金三拾一萬五百七十兩　東京

一金三拾五萬六千七百九十兩　勢州

内

（二拾五萬六千七百兩　松坂町

（十萬九十兩　三領在々

（金八萬六千九百八十九兩　紀州

（銀三萬五千九百二十六貫目

内

（七萬三千六百五十兩　町方

（二萬二千八百貫百目

（一萬三千三百三十三兩　在方

（一萬三千百二十五貫九百目

合

（金九十八萬四千九百兩

（銀八萬六千二百四十六貫目

此皆金

百四十一萬六千兩餘　但兩二百目積

廢藩置縣に付明治五壬申年六月度會縣三重縣奈良縣へ金米引渡し調書

高五十四萬八千八百九十石七斗四升五合五勺　紀伊 伊勢 大和 國内
大繩場高七升八十五町一反五歩八厘五毛

米二十五萬三千十三石六斗四合
金三萬二千七百二拾九兩三歩
錢百七十三萬千三百三拾七貫三百十二文　舊和歌山縣辛未納見詰

但雜税之内當九月に至税高取極候筋は凡見詰を以相籠有之候に付同月に至り決算の上増減御座候事

内

米二萬四千五百五十一石二合五勺　大坂租税寮納

米四十石一斗九升七合五勺　元刺田彦社領朱印上り地
金四十八兩三歩三朱　貢租半高
錢三百七十五文　大坂租税寮納

米二十一萬九千五百九十七石二斗八升一合七勺
金二萬二千九百十六兩三歩
錢百七十二萬七千八百二貫二百三十二文　和歌山縣にて仕拂

一米八千八百二拾五石一斗二升二合三勺
金九千七百六十四兩一朱
錢二千四百九十四貫七百五文

度會三重奈良三縣へ引渡

小以如高

右分割

高十九萬六千七百八十四石七升六合五勺
大縄場三町八反五畝二十四歩
米八萬千百九十二石二斗六升九合
金三万千七百五兩二歩一朱
錢五萬八千三十五貫五百十九文

度會縣

内

米七萬二千八百五十六石九斗五升一勺
金二萬千九百四十一兩二歩
錢五萬八千三十四貫九百六十七文

和歌山縣にて仕拂

一米八千三百三十五石三斗一升八合九勺

金九千七百六十四兩一朱
錢五百五十二文　度會縣へ引渡

高三萬二百八十七石三升七合
大繩場四反三畝六步
米一萬五千四百四十七石九斗六升
金千二十四兩三朱　三　重　縣
錢二貫二百七十一文
内
米一萬四千九百五十八石一斗五升六合六勺
金千二十四兩三朱　和歌山にて仕拂
錢二貫二百七十一文
米四百八十九石八斗三合四勺　三重縣へ引渡

高千十五石一斗三升七合
大繩場高七升

奈良縣

米二石八斗三升九合三勺
錢一萬六千八十貫百七十一文

內

米二石八斗三升九合三勺
錢一萬二千五百八十六貫十八文　和歌山縣にて仕拂

錢三千四百九十四貫百五十三文　奈良縣へ引渡

和歌山縣

高三十二萬八百四石四斗九升五合
大繩場八拾町八反一畝五歩八厘五毛
米十五萬六千三百七十石五斗三升五合七勺
錢百六十五萬七千二百十九貫三百五十一文

內

金四拾八兩三歩三朱
此錢五百六十六貫六百九十六文
但兩十一貫五百八十文

內

米二萬四千五百五十一石二合五勺　大坂租稅寮納

米四十石一斗九升七合五勺　　元刺田彦社領朱印
金四十八兩三歩三朱　　上り地貢租半高
錢三百七十五文　　大坂租税寮納

右之通

米十三萬千七百七十九石三斗三升五合七勺
錢百六十五萬六千六百五十二貫二百八十文　　仕拂

歳入

勢州三領御收納帳尻山道形

是は往古より年々の御收納高の多少を高低表に示し財政上且つ農業殖產等之參考に供したるもの也會計府之を山道形（ヤマミチカタ）と稱す高低恰も山路之如くなるに取る紀州領之分も同樣年々調査之處維新後廢藩引繼の際逸失今存せす

勢州三領帳尻

一　寛文元丑　拾萬二千百七十五石
／　享保十二未　九萬五千百五十石
／　延寶元丑　九萬三千四百六十五石

／寛政十二申 九萬千百六十石

／同十午 九萬千七石

／皆定免 九萬四百九十三石

／文化二丑 八萬九千六百三十四石

／同三寅 八萬九千五百五十五石

／同四卯 八萬六千七百九十四石

／同五辰 八萬五千九百八十八石

／同六巳 八萬二千二百三十一石

＼同七午 八萬八千百九十三石

＼同八未 八萬八千二百四十二石

／同九申 八萬七千九百九十九石

＼同十酉 八萬九千七百六十六石

＼同十一戌 九萬六百二十四石

／同十二亥 八萬九千六十八石

＼同十三子 八萬九千九十九石

同十四丑
八萬八千六百八十四石　外に千二百三十五兩川俣定納

文政元寅
八萬九千六百十九石　外に右同斷

同二卯
九萬三百五十石　外に右同斷

同三辰
九萬三百九十石　同　同

同四巳
八萬千六百七十四石　同　同

同五午
九萬四百七十八石　同　同

同六未
八萬二千九百九十九石　同　同

同七申
九萬三百五石　同　同

同八酉
八萬六千七百五十一石　同　同

同九戌
八萬九千五百六十六石　同　同

同十亥
八萬六千五百十七石　同　同

同十一子
八萬八千三百一石　同　同

同十二丑
九萬百十一石　同　同

天保元寅
八萬九千六百七十一石　同　同

同二卯
八萬九千七百四十五石　同　同

同三辰 ／八萬九千百八十六石　同　同

同四巳 ／八萬八千五百一石　同　同

同五午 ＼九萬八(千)[一本十]二石　同　同

同六未 ／八萬千九百三十八石　同　同

同七申 ／七萬八千五百八十六石　同　同

同八酉 ＼八萬千二百五十七石　同　同

同九戌 ＼八萬九千百四十七石五斗八升　同　同

同十亥 ／八萬三千三百五十一石二斗九升七合　同　同

同十一子 ＼八萬三千九百六十五石二斗四升二合　同　同

同十二丑 ＼八萬六千五十四石二斗四升六合　同　同

同十三寅 ＼八萬八千六百八十石三斗四合　同　同

同十四卯 ＼八萬九千二百八十石二斗八升九合　同　同

「弘化元辰」 ／八萬八千百六十四石九斗七升五合　同　同

同二巳 ／八萬八千百三十六石六升五合　同　同

同三午 ／八萬八千百三十一石九斗一升四合　同　同

＼同四未　八萬九千二百四石　同　同

／嘉永元申　八萬四千六百三十石　同　同

＼同二酉　八萬八千三百五十石　同　同

／同三戌　八萬千百六十二石　同　同

＼同四亥　八萬九千九百九十一石　同　同

／同五子　八萬二百五十三石　同　同

＼同六丑　八萬千八百九十七石　同　同

＼安政元寅　八萬九千百九十七石　同　同

／同二卯　八萬五千四百六十六石　同　同

＼同三辰　八萬六千四百三十二石　同　同

＼同四巳　八萬七千二百六十二石　同　同

／同五午　八萬二千百九十九石　同　同

／同六未　八萬二千四百六十六石　同　同

／萬延元申　七萬五千二百三十石　同　同

＼文久元酉　八萬七千六百九十七石　同　同

同二戌　八萬七千七百五石　同　同

同三亥　八萬七千七百六十石　同　同

元治元子　八萬二千七百五石　同　同

慶應元丑　八萬七千六十二石　同　同

同二寅　八萬八百六十七石　同　同

「内

四萬七千九百四石　御藏入

三萬二千九百六十三石　出知行」

租税

○二夫米　保元覺

一江戸御下向之時高百石に付人足一人宛可召連

　但扶持方の事地頭より可出寛永二丑年より高百石に二石つゝ米納

　　但御藏入

「慶安元子年より相止右之通り米にて納さす様に相成候云々」

承應二巳より高百石に付銀百目つゝ寛文十戌より子迄三年は米納に候得とも石五十目替米勘定候様證文（一本他出）

「承應二巳年より米一石に付六十目立之積に極郡々より毎年十月十日までに御金藏へ納さす樣に相成候事なり」

和州吉野領二夫米口役米取不申事

二夫米

一役高百石に付米二石宛納　但新田よりは不納

御入國之砌りより御藏所は勿論諸士知行所共百姓高百石に付人夫二人宛之積を以在々にて割賦仕江戸御用幷諸士も百姓を夫々召連候由右之以後人夫を出す儀相止高百石に二石つゝ米納被　仰付江戸詰其外御使に參り候夫金路金馬代を夫金藏より相渡候但延寶元丑年より米一石六十目替に極銀にて夫金藏へ納申候

（「○」）糠　藁　根元覺　一本アリ

一古來給人方御藏入共高百石に糠五升入拾俵藁一束に付稻たは十抱結ひ十八束つゝ百姓手前より出右代米糠五升入一俵一升藁一束に付五合御年貢御勘定に立可申候元和七證文寬文十七辰口六郡糠藁にて納則御馬屋へ渡す不足分は買渡し勢州三領熊野は前々より米納同十八巳年より紀州勢州共不殘米納糠二升束五合替

糠藁代米　在方覺

一役高百石に米一斗九升宛納　但新田よりは不納

馬飼料藁代として高百石に付米一斗九升宛御代官所へ納申候諸士知行所も同斷に納申候御厩入用の糠藁は御厩にて買調諸士馬の飼料の糠藁諸士手前にて買調申候

「是に御入國之砌より御藏所給所の村共高百石に付糠五石つゝ藁十八束つゝ納來候處慶安元子年より糠五石之替米一斗つゝ藁十八束の替り米九升つゝ納さす樣に相成云々」

「○」指　米　根元覺

一納百石に　二石五升　但新田五町定納

大杉谷檞年貢
北滝濱年貢　指米なし

元和六申年諸文給人方米四斗俵に一升可入と有り御藏方は指米を小物成御勘定一所に仕上け

但寛文六巳迄同七より本斗御勘定目録之内に仕上けあり

指　米　在方覺

一御年貢米百(石歟カ)に付二石五斗宛納御年貢米一俵へ米四斗つゝ入納所仕候を度々持なやみ又は米の善惡を見改候に付米減申候右減代に一俵へ米一升宛入候筈之米を俵へは不入申別段に御代官へ納させ申候由申傳へ候夫故歟納米士用過候て御藏へ納候分は一俵に付米一升迄の缺は百姓に足させ不申候一升より上之缺米は百姓足し申候

「〇」口　米　根元覺

一納米百石に付　紀州は二石 勢州は三石

右は元和五未より慶安元子迄は口米渡し切に相見へ慶安二丑より口米御勘定仕上け有

但手代一人に十八石六斗つゝ所々人數不同元祿十丑より不殘手代直抱に成元〆十石二人扶持平

手代八石二人扶持

一江戸にて毎年地子入用二十兩つゝ　御渡下け

是は松平源五郎殿組同心屋敷權田原御借り地

口　米　在方覺

一紀州は御年貢米百石に付二石つゝ納め

勢州は右同斷三石宛納め

口米の儀は御代官納所料に納來候由申傳候得共慥成品は相知不申候紀州勢州違有之段は先領城

主より仕來の通之由に御座候

「田畑を百姓にわたして作らせ候故田畑の口米之樣に申傳候得共慥成事は誰も相知不申候

云々」

「〇」郷役米　但一分三厘米共唱申候 在方覺

一役高百石に付米一石三斗宛納　但新田より不納

在々池川御普請に入用なり先年は百姓を遣ひ申候處六十三年以前承應二巳年より高百石に付郷役米一石三斗宛在々より納させ人足を召抱普請に遣ひ候然れとも人夫多入候の節には今にても其村の百姓共に賃米相應に遣(し遣)〔一本ナシ〕ひ申候但し米は村々に取立置御普請入用に遣ひ申候

「御領分(御)〔脱カ〕役米納高」

「四百六拾八石二斗九升一合　伊都郡」
「六百二十四石六斗四升八合　那賀郡」
「五百七十八石二升五合　名草郡」
「四百二十二石五斗九升四合　海士郡」
「四百六十石四斗二升三合　有田郡」
「四百二十五石五斗四升八合　日高郡」
「二百二十五石三斗一升二合　口熊野」
「二百四十六石二斗七升六合　奥熊野」
「七百三十四石四斗九升七合　田丸領」
「八百二十二石五斗三升一合　松坂領」
「五百七十三石六斗一升九合　白子領」

「〇」種借米　在方覺

一高百石に元米四石宛種米として寛永十五年寅年初て利分三割にて御借し正保四亥年利分一割御用捨二割に成唯今に利分二割にて利米は年々傳法御藏へ納申候有田日高兩熊野勢州三領山中は霜月米直段相極銀納に申付候

「利分三割にて永世相納候はゝ御貸下け致し候との御儀に付村々百姓共無滯相納可仕候と決定書村へ一統調印いたし候上御貸下けに相成後又利分一割御用捨二割は永世村々地面付にいたし御年貢同樣に無滯相納候樣に相成云々」

但種借米望不申所へは借不申候と相見へ種借米無之村も御座候田邊新宮下は御藏より種借米無御座候口郡之內安藤帶刀水野對馬守久野備後守知行所之內右三人より種借米借渡候處も有之又右三人知行所の內御藏より貸渡候村も御座候

種貸元米利米　根元覺

元米一萬八千七百八十四石四斗二升九合

利米三千七百五十七石三升七合

正德五年納を記す

寛永三寅より御藏所分高百石に四石つゝ借取分三割かし同十七辰より給所之分御藏同前に成正德四年より御藏給所共二割に成種貸元米不借所々重て可閙

享和元酉納

三千百四石

内

二千三石　紀州
千百一石　勢州

七百八十八兩二分

内

四百七十一兩三分二朱　紀州
此米三百七十一石五斗七升

三百十六兩二分二朱　勢州
此米二百七十二石三斗四升四合

年々直段相究る

一種貸利米上納之儀所々にて違ひ申候總高割にて上納仕候所も有之又は所に寄り利米へ銀子を添難濟者へ(遣)[ミカ]利米一合付候田畑も有之一合も利米無之田邊も有之候右之通に付勝手兎も角も暮候者共所持仕候田邊利米少く兎角難濟者所持田邊幷村地に多利米有之是等も年々村地迷惑に相成申候右利米筋にても自ら取立高差支難濟潰人も出來候道理にて御座候尤利米と申候得は幾の樣に有之候得共御免合之儀は其年々立毛相應の免合御極高に付候免に候得は村地等は位高田畑又は畝不足等之田畑故少々利米にても免外之入米に付甚難濟仕候右之通田畑に寄利米有無御座候處御年貢取立帳等甚入組難相分候右は當年より一等總高より上納仕候樣被　仰付候得は少々は難濟御手入替りにも相成潰村地迷惑等も相減村地片付方幷御取立方手行にも相成可申旨在方より相違候付役所

より附紙左之通
本文種貸利米上納之儀村々に寄不同有之に付當年より一同總高より上納致候樣申付候はゝ難澁之者共御手入替りにも相成候者品申見候處種貸之儀は寛永之比高百石に米四石つゝ借渡年々右株より相納候當尤所に依り村平し致候所も有之趣に候得共是は納得の上に付彼是は無之候得共左（一本も）（に）無之前々より利米を同地直買の節相對を以て讓り合候所も有之趣にも相聞其所を以申見候時は難澁成る百姓之殘高には利米附無之右は利米無之積を以て價を致買請候品候處此節改正總高割に申付候儀は畢竟百姓之身代平均之道理にも相見上より申付候儀は不當には有之間敷哉前段之通高割に致候筋も有之趣に候得は其積を以て郡奉行中勘弁之上大庄屋幷村役人之心得を以高割に取扱ひ方にも可有之哉の事　以上根元覺

「〇」小物成　在方覺帳に

一小物成は淺野紀伊守殿時代より田畑年貢之外に口銀運上等之類品々納筋幷　御入國以來田畑御年貢之外新規の御納筋の分は小物成と相極其内加子米二分口茶口佐八山方銅山等は其役所々々より御勘定別段に仕立輕き筋は御代官御勘定にも相添其外役所々々より別段に納申候且又年々員數極納り候分は定小物成と申年々納高增減有之或は一年切に納候類之分は不定小物成と申候て筋々役々より納申候

小物成の品々　同上

加子米　帆別米　諸漁之口　山方仕出物之口
茶口　銅山　大工木挽運上　諸職人役米
大杉山方　海士貝取運上　有田日高鮎川　山年貢
野年貢
右之類は年々有之候右之外一年切にて不時に納候筋も御座候

帆別　根元覺に

一五端より上六端帆　一端に米八升つゝ
四端帆以下帆別無之
奥熊野に
四端より七反迄帆八升取
口熊野は
六端帆　五升　五端帆　四升　七端より上一反一升つゝ
湊　岡町　和歌は　御免

床銀

一海船加子役町中共大概　一艘に付銀二匁つゝ
小滯　一艘銀一匁つゝ
鯨轆　油銀

鯨一本に付　　　　銀八十目

太地は一本に付銀二十目つゝ

二分口

按に二分口とは河海によつて輸出入する山海産物に對し其二分の品物乃至代價を稅納せしむるものにて二分口奉行同役人手代有之御勘定奉行に屬し紀勢封内津々浦々河流等の要所々々に百二三十ヶ所の役所を構へ役人共在勤物品を改め他領他方の分と雖も均しく物品の二歩口銀を徵收或は受負と稱し地方の者へ定額を以て負擔納付せしむ故に口銀とも通稱せり皆會計局へ收納則ち歲入の一部とす其額大凢茶口と合一ヶ年三四萬圓と云此制慶安の昔に創設年歷久遠在方覺帳根元帳にも所記なく他の筆記亦存せす局規章程の詳なる今考ふへからす唯二分口役所扣と題するもの及ひ御仕入方大帳に口銀の定額等記するあり依て二三散見の筆記を加へて別卷となし爰に省く

諸運上一ヶ年分納高

一五兩程　　俵物問屋運上

一五十兩程　　吉野問屋運上

一百二十九匁　　寺領紙問屋運上

一八兩程　　魚問屋運上

一六十目程　伊都上田七郷御留山松茸運上

一四　両　奥熊野武那山松茸運上

一百十八両　諸郡鮎川運上

一一歩程　伊都妙寺村市運上

一三両二歩程　町毛綿札運上

一二両程　所々石切手運上

一一両一歩二朱　内大工町所持家五軒役分運上

一二歩程　松坂古田蔵原御持山松茸運上

一一両程　樟脳運上

一二貫五百目　鱲運上

一三十両一歩　勢州綿運上

〆惣金二百六十八両三朱程

右相高候様兵左衛門㕝ニ申出候事の由　[illegible]

「〇」諸役引高　[illegible]

一加子米納候浦々傳馬所并番所大工職多其外品有之役引も有之候有之内諸役引さ申候は二分米[illegible]

郷役米引申候　昔諸役引さ申候は郷役米斗引申候

但諸役引高の所は在々小入用組割郡割の懸り物も受不申候郷役米計引候役引の所は在々の普請入用の割を請申候

「役引と申所は二夫米糠藁差口郷役米等引事を云なり又三役引と申は二夫米糠藁差口はかり引事を云なり」

大工引高運上　同上

一大工役引は紀伊守殿時代には無賃にて工役相勤候由の處御入國以來運上に被　仰付本役大工一人十五匁七分つゝ半役大工七匁つゝ運上被　仰付本役大工は居村にて高五石御引被下候半役夫々には引高無御座候

但右極の外寛永十七正保二明暦二年（一ニ明暦三酉トアリ）にも大工人數御改增減有之由且又和歌山大工は町役御免の由

「ロ六郡大工之人數合七百十二人有るあり內　十八人棟梁　九人肝煎

岩出渡場

高四百六石二斗二升

右は岩手組西の村高諸役御免許なり」

御年貢米運送

(「○」)御年貢米運送

一在々御藏入諸士知行所共に御年貢米道法五里の間は百姓持屆五里より上之道法之所は五里分は百

姓夫より上之道法の駄賃運賃は御藏幷諸士より出し候法にて御座候

但御家中へ被下候御切米右同斷　以上在方覺

一日高は石に付一升有田は五合一勺四才遣候事に御座候

両熊野伊都右之譯左之通に御座候

一箕島より若山へ七里にて運賃一升八合之割寛永二丑年より二里分は被下其外は百姓より出す

一有田五合一勺四才被下

一一匁六歩六厘六毛（五匁）　粉川組

一一匁八分三厘三毛（五匁六匁）　名手組

一二匁（六匁）　下の町組

一二匁三歩三厘三毛（七匁）　中上組

但畑米直段にて割返し米にて下り候事

右は拾石積運賃肩書銀之三ヶ一にて御座候事

一石に付一匁八歩　口熊野

一石に付二匁五分　奥熊野

右之通

定

一日高より若山へ米廻し海賃之儀半分　公儀御勘定に立候て半分百姓共より出不申事幷給方も右御藏なみ同前之事　下ケ紙一石に付一升

有田之儀は二里の海賃御勘定に立殘は百姓前より可出事幷給所同前　下ケ紙一石に付五合一夕四才

寛永元子霜月廿一日　彦九兵
水淡路
安帶刀

運賃

一從伊都若山へ御年貢下り候運賃三ヶ二は百姓より出し三ヶ一は御藏より可致也給所方切米も御藏同事

慶安二丑二月　若狹長門

加(世カ)(也)田瀨之山より下の町迄十石船賃　六匁
名手中飯降より　六匁
舟手より　五匁五分
粉川より　五匁
竹房より　四匁
岩手より　三匁
橋本禿　七匁

中仮降より上风まで
妙寺よりは　六匁
一従日高若山へ米廻り運賃の儀半分　公儀御勘定に立半分は百姓郷出し給所方も同前
一従田邊廻米二升
一従新宮々々廻り船中定書付を以て船賃拂
一勢州は其時々役人中吟味之上極奉行裏判
新銀極戌霜月廿日
一若山より橋本まで登艜　一艘に付十二匁
一同所より粉河まで登　八匁
一同所より岩手まで登　五匁
一同所より山口まで登　四匁
一有田は二里の海賃御勘定に立殘り米分百姓より可出事給所も同前
右に付五合一勺四才御藏より可出
江戸廻米難船之節運賃渡方極
文政四年若山にて極　御勘定所書付留七十番に
定

一江戸御廻米遠州相良より上之浦々にて難船濡米澤乎有之其所にて入札御拂ひに相成候石數半減の運賃相渡候筈

一右同所御前崎より下浦々にて同斷之儀有之候節は跡運相渡候筈

一海中へ刎捨米之儀は右境の無差別運賃無之事

一江戸御廻米所々にて難船有之同所より濡米積廻候節船頭より増運賃願出候共増無之事

參考　寛永十三年八月二日
　　　公儀御定之趣

難船之節上り荷物歩一御定

一浮荷物は二十分一沈荷物は十分一川船は浮荷物三十分一沈荷は二十分一其取上け候者へ可遣事

一難船之節乘組不埓にて盜取候荷物をはね荷に申立後日露顯及候節は船頭は勿論申合候者死罪其浦々之者は爲過料家毎に鳥目十疋つゝ可出事

右歩一は勿論上り品拂立代金高之一歩に候事濡米不殘積廻し之節は米揚高に應し割合取極候事

(一〇七)御年貢御藏入　在方覺帳

一御藏入之村々は手代取立納所へ出村々にて米を改納所藏へ納庭帳と申候納所帳へ百姓名々に納候員數を書記手代判形仕納米は庄屋肝煎に預け紀州口郡は御切米夏借或は傳法御藏へ納勢州は在々納所藏へ納候上松崎大口小俣御藏へ納夫より江戸和歌山へ段々廻し或は賣拂申候右何も御代官手形を以て段々に納翌年六月迄に渡仕廻候法にて御座候紀州諸士知行所は納所藏無之に付米出來次

第百姓共直に諸士へ納所仕候勢州同斷にて諸士知行支配之者納所仕候

　但諸士知行所々により百姓とも寄合納所藏を拵米を納置候て諸士へ納所仕所も有之候

御領知租稅調之事

明治二巳年六月八日　朝廷へ呈出書

先般被　仰出御座候租稅錄蕭々取調出來仕候に付則別帳三冊奉差上候以上

六月八日　徳川中納言公用人（名前略す）

辨事御役所

（上ハ書）領知租稅錄

徳川中納言

幷領高五十五萬五千石

内

三萬四千八百七十九石七斗二升三合　水野大炊頭所領

三萬六千六百八十二石三斗三升二合　安藤飛驒守所領

合七萬千五百六十二石五升五合

本文兩人へ宛行御座候處慶應四年辰正月藩屏列被　仰付候に付自然高減に相成御座候事

殘て

四拾八萬三千四百三十七石九斗四升五合

外

新田改出高

高六萬四千八百十八石四斗一升六合六勺

元治元甲子より
明治元戊辰まて五ヶ年平均

正租納高

一米二十四萬八千五十四石五斗七升五合

一金千二百三十五兩

一永五十七文三分

內

米十六萬四千二百六十三石八升一合

金千二百三十五兩

永五十七文三分

右定免の分に御座候得共凶年には見分の上免歩引下け之儀も御座候に付永世に無御座候

此外年々不同御座候

元治元甲子より明治元戊辰まて五ヶ年平均

雑税納高

一米千四百三十七石七斗八升一合八勺五才

一金百八十二兩三朱

一永六十四文二分

一錢七百五十文

内

千百三十一石五斗五升一合九勺

右定納之分

此外年々不同に御座候

剌田彦社租税錄

徳川中納言管轄之内

岡本虎橘所領

受領高二百石

外新田無御座候

一米七十三石二斗九升三合

一金七十八兩
一永四十文五步六厘
右定免に無御座草免に御座候收納之內年々高七十石宮內爲修復料被積置候事
右者附屬之社取調候趣書面之通に御座候以上
明治二己巳四月　　德川中納言

租稅調

此調書は明治二巳年六月府藩縣三治の制被　仰出に付同年十月　朝廷へ提出之ものなり

和歌山藩

紀伊國伊勢國大和國之內支配地租稅調帳

外
高九千百五十九石三斗四升　社寺地幷其外萬引高

元治元子年より明治元辰年まて五ヶ年平均免四つ六分二厘六毛內　紀伊國伊勢國大和國之內

一高合五十三萬九千四百六十九石四斗七升七勺本新田高
內
三百七十二石四斗四升九合一勺　天保二卯年以來新開
取米平均二十四萬九千五百五十五石九斗七升九合

一米六千百八十九石七升四合　差　米

此取米二十四萬七千四百五十九石四斗四升六合

内

取米二百五十八石六斗五升四合　大和國分　取米二百石に付　三石五斗

同二十四萬七千二百石六斗五升二合　紀伊國伊勢國分同百石に付　二石五斗

外

取米二千九十六石五斗三升三合　差米用捨之分

是は爲指米增納致させ候筋

一米五千八百五十八石三斗四升四合　口　米

此取米二十四萬九千五百十七石五斗七升三合

内

取米十六萬二千七百十八石三斗五升二合　紀伊國大和國分　取米百石に付　二石つゝ

同八萬六千七百九十九石二斗二升一合　伊勢國分　同二百石に付　三石つゝ

外に

取米三十八石四斗六合

是は爲口米右同斷

一米八百三十五石三升九合　糠藁代米

此高四十三萬九千四百九十四石七升七合六勺　新田幷寺社地其外引高

但高百石に付一斗九升つゝ

是は糠藁納させ候代り米にて納させ候筋

一米五千六百六十六石九斗一升六合　鄉役米

此高四十三萬五千九百十六石五斗八升六合六勺

外

高十一萬二千七百十二石二斗二升四合一勺　右同斷萬引高　但高四百石に付一石三斗つゝ

是は在中池溝等水利營繕入用宛爲相納候筋尤右を以營繕取計不足は領主より償來候事

不定田畑

一米八十二石八斗七升　見取米

一同一石九斗九升五合　右差米

此取米七十九石八斗七合　但取米百石に付二石五斗つゝ

外に

三石　差米用捨之分

一同一石六斗八合　右口米

此取米七十九石八斗七合

內

七十八石六斗七升九合　石に付二升つゝ
一石一斗二升八合　石に付三升つゝ
外三石口米なし
一米二百三十五石六斗七升三合　小物成田畑稅
一同五石八斗九升二合　右差米
此取米二百三十五石六斗七升三合　但取米百石に付二石五斗つゝ
一米四石七斗一升三合　右口米
此取米二百三十五石六斗七升三合
金四千五十五兩一歩二朱と永六十一文　二夫米代
此米九千五十六石三斗五升六合五勺七才
此高四十五萬二千八百十七石八斗二升八合六勺
外
高九萬五千八百十石九斗八升二合一勺　萬引高
但　高百石に付　二石つゝ前々より米一石に付　銀六十目に
相立有之　五ヶ年平均石に付　金一歩三朱と　永十文三歩
是は參勤等入用人夫共差出し代り納來候筋
右收納

合｛米二十六萬八千四百三十八石
　｛金四千五十五兩一歩二朱と永六十一文五歩

外に

雜稅幷諸產物運上共

｛米三百七十三石九斗四升二合六勺五才
｛金一萬三千三百三十九兩一歩三朱　　雜　稅
｛永二十九文八歩
｛塩千十五石五斗八升一合

內

米三百七十一石一斗六升二合六勺五才　　山　年　貢

金三千七百二十六兩一歩と永六十文五歩　　山年米代とも

塩千十五石五斗八升一合　　塩　濱　稅

紀伊國分

金七千五百三十兩一朱と永二十文九歩　　水主役米代

此米千四百五十五石三斗一升三合五勺五才　　但　平均石に付金五兩二朱と永四十九文二歩

外

米千四百七十七石五斗八升六合五勺五才　　難澁に付取立浮置分

金四百三十兩二朱と　永三十四文七歩　同

此米二百五石八斗　但 金十兩に付 米三俵二斗三升九合替

金九十七兩と　永五十四文六歩　船床税

金四百五十二兩一歩一朱と　永二十文　職人役米代

米二石七斗八升

金十九兩二分と　永二十七文　古來進納

金八十三兩三歩三朱と　永五十二文一歩　諸色小雜稅

小以如高

金二萬八千七百四十三兩三歩一朱と

永四文五歩　産物諸運上

内

金一萬千六百六兩一歩一朱と　永五十文　魚漁運上

金二百八十一兩二分一朱と　永九歩　蜜柑運上

金千百八十一兩三歩と　永六十文五歩　茶運上

金一萬千四百六十八兩三朱と　永三十六文七歩　村木運上

金八十九兩三歩一朱と　永四十七文四歩　大工運上

金十四兩一歩三朱と　永五十八文八歩　木挽運上
金十三兩三歩三朱と　永二十一文　左官運上
金七十四兩三歩二朱と　永五十五文二歩　川漁運上
金九十四兩一歩三朱と　永十五文　炭運上
金三千九百十八兩二朱と　永三十三文　山海諸品小運上
小以如高
右之通御座候以上
明治二巳十月
右調帳中塩千十五石五斗八升一合の直段米高に引直し現米升數にて可申出旨明治三午年八月二日辨官傳達所にて書取を以て被達依て左之通調書同月日欠差出す
管內海士名草兩郡の內塩濱税現米成り等
一塩合千十五石五斗八升一合　（一本ナシ一ヶ年　塩濱税）
兩に付銀百三十四匁替
代金七十兩三歩一朱と永三十二文八歩余
此金九貫四百九十三匁二分八厘餘
兩に付十貫文替
此錢七百八貫四百五十文八分八厘餘

但

元治元子年より明治元辰年まで五ヶ年平均

石に付

金一朱と永七文二分五厘餘

此銀九匁三分四厘七毛六糸余

此錢六百九十三文餘

此現米積八石八斗五升五合六勺六才　　但石に付金八兩替

田畑潰地年貢之事

明治三午年左之通辨官へ差出置候處翌四未年二月附札之通差圖有之候旨東京より申來候付名草出廳へ申合候事

諸藩支配所之内潰地代米永之儀是迄依舊慣御渡相成候處自今被止候條高内引に可致云々先般被仰出候右潰地と申は田畑高之内郷藏所又は堀墓場其外用所に田畑を潰し就ては右潰地高之年貢諸掛り物等村方へ下け遣し來る筋自今村高にて荒引に取計可仕儀に御座候哉但書は右田畑を潰し候付ては地主へは相當ニテ欠宛可被下との儀之奉察村方にて溝手池床其外有用荒に他村之地面を潰し候代り地代差出來候分は從前之通り取計可仕儀に御座候彼是疑惑仕候に付此段奉伺候至急御差圖被成下候樣奉願候以上

庚午十二月十八日　　　　　　和歌山藩

辨官御中

御附札

都て潰地代米永官より相渡來候分は相廢し高內引に可相立地主他德米下渡し來候分は相應之手當下け渡他村の地所下方相對を以て借請地代差出來候分は是迄の通下方より地主へ可差出事

歲出

一金一萬二千四百十七兩　天保十四卯年日光御社參の節御入用

內

一萬二千三百二十九兩三分二朱　江戶

九百八十兩三分二未　御老中判帳

三百五十六兩二分三朱　御勘定奉行判帳

千六百六十二兩三朱　御用人判帳

百五十二兩三分一朱　御臺所

三千四百六十五兩　御作事

御疊方	一兩三分二朱
御納戸呉服	二十兩三分二朱
大納戸	三百二十七兩三分
渡り金	千九百三十三兩三歩一朱
駄賃	七十八兩三分二朱
旅籠	百七十七兩三朱
日雇	三十二兩
御馬具	九十四兩二歩
御駕籠	二十八兩
御仕着	二兩
御鎗	六兩一分
御腰物	五十二兩三分二朱
御屏風	十九兩二分二朱
御貸物	五百三十八兩三歩二朱
小買物	三百十六兩一分
御勝手方	二十五兩一分
飛脚賃	二朱

二千四十六兩三朱　　小　拂
八十七兩二朱　　若　山
三分二朱　　御老中判帳
三兩一分一朱　　御用人判帳
三兩三分　　御　臺　所
七十五兩三分一朱　　御　納　戸
三兩一分二朱　　大　納　戸
小以

「○」猿樂米　根元覺帳

五十五萬五千石
一百六十六石五斗　一萬石に付三石つゝ
　此金百十一兩　兩に一石五斗つゝ
每年八丁堀御藏奉行より　公儀淺草御藏へ相納右之通御高掛り往古より御納被成候萬石以上御
出し之趣上國三石下國二石六斗又は二石二斗も有之由國々にて相極有之趣に相聞申候猿樂共入
用大名方へ高掛被　仰出候筋と相見申候　左京樣は二石二斗の由なり

慶應元丑年閏五月より
同二寅年四月まで
御出陣御入用幷藝州表へ御人數出張に付御入用大樣見詰

一　米五百八十一石
　　金六萬六百八十七兩　　若山

　内

二萬九千七十七兩　鑑札渡諸被下共
四百三十七兩　御鉄炮方御入用
九千三百六十六兩　御作事方初諸役所御入用
千三百六十九兩　貸方幷用意金當分取替共
三千五百兩　明光丸御入用筋
一萬三百七十九兩　在夫賃銀
六千五百五十九兩　御勝手方にて出來物幷御廻米等荷物運賃とも
五百八十一石　粮米御藏出し賃初雇水主賃米且在夫獎出等

小以

　米一萬四千二百四石
　金十三萬四千六十七兩　　大坂

　内

十三萬二千九百十三両　御家中自炊料鑑札被下其外とも

千百五十四石　御馬弁馬飼料

一萬四千二百四石　兵粮米共湯漬米且在夫焚出し米共

小以

金三千五百九十二両　堺詰御入用

米三千八百二十八石
金四萬四千八十三両　藝州にて御入用

米五百四十四石
金三千二百五十両　御影村初三ヶ所

内

三千二百五十両　御家中自炊料弁鑑札被下其外共

五百四十四両　兵粮米弁湯漬米在夫へ焚出し米共

小以

合

米一萬九千百五十七石
金二十四萬五千六百七十九両

外に　米千五百石
金一萬九千両　程　五月より御發向迄之御入用大凡見詰

尙合　米二萬六百五十七石
　　　金二十六萬四千六百七十九兩　程

藝州御出陣百日之積を以金米御入用大凡見詰

一（米一萬四千二百石
二口（金十六萬兩

但總御人數御家中并市在夫諸職人坊主陸尺等まて都合
一萬六千人と見詰
一日分　米百四十二石
　　　　金千六百兩　程

一金四萬兩　在夫賃銀百日分　但一日一人十匁
此在夫四千人
外に二千人　在夫課役

一金五千兩程　與向其外臨時諸調物宛等

一同二萬五千兩　御貸向に付大坂并若山共鑑被下
其外諸入用且藝州にて被下共

一同四千五百兩　明光丸御入用之内相渡す

一同三萬八千九百兩餘　ミニーヘル二千二百五十挺小道具共御買上代積

一同三千六百兩餘　口火管鉛等品々御買上け代

一同一萬五千兩程　御幕幷在夫香板出來其外干艸梅干蠟燭等品々調物代共

一金七千兩程　陸地廻り御人數其外往來旅籠代

一同五千兩　蒸汽船御借入相濟候はゝ御入用

小以　米一萬四千二百石程

金三十萬四千兩

皆金四十六萬六千兩　但石十兩積

外に　米二萬六百五十七石程

金二十六萬四千六百兩

去丑閏五月より當寅五月中まて大坂　御滯陣御先備御人數藝州出張且堺詰御入用共

合　米三萬四千八百五十七石程

金五十六萬八千六百兩

右之通り御座候得共此度　御發向御入用積りは五月末より百日分之見詰に付九月差入迄　御凱陣無之候はゝ猶又右之割を以御入用高相增し可申事

「右は慶應二寅年六月征長御總督として藝州廣島へ御出陣に付ての大凡積り」

藝州御出陣中米金指引書　九月三日調

「是は慶應二寅年六月五日より九月三日まで征長御總督として藝州御出陣中支出の金米差引を従軍の御勘定組頭森部市之丞日々取調米金両御藏奉行職掌不差支樣取計たるものなり」

米方

	元受	拂	差引越
發日より七月廿二日迄	四千六百二十二石二斗七升一勺	三千百九十石九斗四升一勺	七月廿三日へ 千四百三十一石三斗三升
七月廿四日	四千六百二十三石一斗六升五合一勺	三千三百八十九石一斗五升一合	同廿五日へ 千二百三十三石七斗五升
同廿（五）日迄（一本六）	四千六百二十七石〇二升二合六勺	三千五百七十三石九斗〇八合五勺	同廿七日へ 千〇五十三石一斗一升四合一勺
同　廿八日迄	五千二百十三石九斗五升二合六勺	三千八百四十九石九斗二升八合五勺	同廿九日へ 千三百六十四石〇二升四合一勺
同　晦日迄	五千三百五十七石〇一升〇一勺	三千九百三十九石二斗二升六合	八月朔日へ 千四百十七石七斗八升四合一勺
八月五日迄	五千三百六十一石三斗五升九合六勺	四千二百二十二石二斗五升五合五勺	同六日へ 千百三十八石〇八升四合一勺
同　六日迄	五千三百六十一石七斗八升四合六勺	四千三百五十二石三斗七升〇四勺	同七日へ 千九百石四斗一升四合二勺
同　七日迄	五千三百六十三石〇二升四合六勺	四千三百八十六石一斗五升〇四勺	同八日へ 九百七十六石八斗七升四合二勺

同 八日迄	五千三百六十四石四斗七升二合五勺	四千四百五十一石四斗四升七合九勺	同九日へ 九百十三石〇二升四合六勺
同 九日迄	五千三百六十四石九斗五升七合五勺	四千五百〇三石六斗五升二合九勺	同十日へ 八百六十一石三斗〇四合六勺
同 十一日迄	五千三百六十五石二斗九升七合五勺	四千六百〇九石九斗六升二合九勺	同十二日へ 七百五十五石三斗三升四合六勺
同 十五日迄	五千八百〇一石一斗一升七合五勺	五千〇九十八石四斗八升二合九勺	同十六日へ 七百〇二石六斗八升八合五勺
同 十七日迄	五千八百〇二石〇四升五合	五千二百十七石一斗四升四勺	同十八日へ 五百八十四石九斗〇四合六勺
同 十九日迄	五千八百〇八石二斗六升二合五勺	五千三百七十八石一斗七合九勺	同廿日へ 四百三十石一斗五升四合六勺
同 廿一日迄	五千八百十一石六斗四升五合五勺	五千五百〇二石四斗一升九勺	同廿二日へ 三百〇九石二斗三升四合六勺
同 廿三日迄	五千八百十二石八斗三升五合五勺	五千五百八十一石三斗二升〇九勺	同廿三日へ 二百三十一石五斗一升四合六勺
九月二日迄	六千五百九十〇石一斗四合	六千三百四十七石九斗三升	九月三日へ 二百四十六石〇八升四合

金方

	元受	拂	差引越
六月五日より 七月廿三日迄	大判 五枚 金 十萬三千三十八兩一歩一朱	五萬四千四百一兩一歩二朱	七月廿三日へ 四萬七千八百二十四兩一歩二朱

	正銀 錢	十一貫四百三十目 二萬二千八百七十三貫七百八十文	一貫三十二匁 六千四百九十三貫百五十三文	十貫三百九十八匁 一萬六千(三)[一本二]百八十貫六百二十七文
七月廿四日迄	大金		五萬六千二百九十一兩二歩	七月廿五日へ 四萬五千九百三十四兩二歩
	銀錢		一貫三十二匁 六千六百五貫九百一文	十貫三百九十八匁 一萬六千(三)[一本二]百六十七貫八百七十九文
七月廿六日迄	大金		五萬八千三百二十一(匁)[兩カ]二歩一朱	七月廿七日へ 四萬三千九百四兩一歩三朱
	銀錢		一貫三十二匁 六千九百六貫八百二十二文	十貫三百九十八匁 一萬五千九百六十六貫九百五十八文
七月廿八日迄	大金		六萬四千百二十四兩三歩	七月廿九日へ 三萬八千百一兩一歩
	銀錢		一貫三十二匁 七千百七十四貫二百九十文	十貫三百九十八匁 一萬五千六百九十九貫五百六十一文
七月晦日迄	大金		六萬五千二百十一兩三朱	八月朔日へ 五枚 三萬七千十四兩三歩一朱
	銀錢		一貫二十二匁 七千三百二十六貫七百三十三文	十貫三百九十八匁 一萬五千五百四十七貫四十七文
八月五日迄	大金		七萬三千八百六十一兩三歩三朱	八月六日へ 五枚 二萬八千三百六十四兩一朱
	銀錢		一貫三十二匁 七千八百七十二貫四百十二文	十貫三百九十八匁 一萬五千一貫三百六十八
八月六日迄	大金		七萬四千四百六十五兩一歩三朱	八月七日へ 五枚 二萬七千七百六十兩二歩一朱

日付	種	高	翌日へ繰越
	銀錢	一貫三十二匁 七千九百四十三貫八百二十八文	十貫三百九十八匁 一萬四千九百二十九貫九百五十二文
八月七日迄	大金	七萬五千二百十二兩一歩	八月八日へ 五枚 二萬七千十三兩三歩
	銀錢	一貫三十二匁 八千二百二十六貫二百七十四文	十貫三百九十八匁 一萬四千六百四十七貫五百六文
八月八日迄	大金	七萬六千三百七十兩三歩	八月九日へ 五枚 二萬五千八百五十五兩一歩
	銀錢	一貫三十二匁 八千二百九十四貫六百五十文	十貫三百九十八匁 一萬四千五百七十九貫百三十文
八月九日迄	大金	七萬八千百四十六兩一歩三朱	八月十日へ 五枚 二萬四千七十九兩二歩一朱
	銀錢	一貫三十二匁 八千三百七十二貫四百四十九文	十貫三百九十八匁 一萬四千五百一貫三百三十一文
八月十一日迄	大金	七萬九千二百二十二兩二朱	八月十二日へ 五枚 二萬四千五百三兩一歩二朱
	銀錢	一貫三十匁 八千五百四十六貫七文	十貫三百九十八匁 一萬四千三百廿七貫七百七十二文
八月十五日迄	大金	八萬四千五十二兩一歩三朱	八月十六日へ 五枚 一萬八千九百八十(三)(一本五)兩二歩二朱
	銀錢	一貫三十二匁 一萬千八百二十貫九百十一文	十貫三百九十八匁 一萬千五十二貫八百六十九文
八月十七日迄	大金	八萬五千七百九十五兩三歩二朱	八月十八日へ 五枚 一萬七千二百四十二兩一歩三朱

流日	種	元帳の部下ヶ紙に本文内譯左之通り	挿ミ部下ヶ紙に本文之内所々へ綴込左之通り	
	銀銭		一貫三十二匁 一萬二千六十九貫六百七十六文	十貫三百九十八匁 一萬八百四貫百四文
八月十九日流	金大		八萬九千〇〇四兩一分	八月廿日へ 五枚 一萬四千三十四兩一朱
	銀銭		一貫三十二匁 一萬百四十三貫四百六十六文	十貫三百九十八匁 一萬二千七百三十貫三百十四文
八月廿二日流	金大		九萬三百七十一兩三歩三朱	八月廿三日へ 五枚 一萬五千二百六十（一朱三）(三)兩二歩二朱
	銀銭		一貫三十二匁 一萬三千二百十四貫九百七十六文	十貫三百九十八匁 九千六百六十九貫三百二十二文
八月廿三日流	金大	五枚 十萬五千六百三十四兩二歩一朱		
	銀銭	十一貫四百三十目 二萬二千八百八十四貫二百八六文		
大晦日流	金大	五枚 十四萬八千三百二十二兩一歩三朱		
	銀銭	十一貫四百三十目 二萬五千百三十四貫五百七十九文		
九月二日流	金大		五枚 十二萬三千三百九十二兩三歩三朱	九月三日へ 二萬四千九百廿九兩二歩
	銀銭		二貫四百五十目 一萬九千九百六十六貫五百五十文	八貫九百八十目 三千百六十八貫七十四文

大判五枚 金三萬兩　發足	三千兩六月十一日藝州に御先手 二千兩同十四日可部御先備
金一萬二千二百廿六兩六月十四日 錢二萬二千七百七十三貫七百八十文	三千兩同日大欸頭殿御手へ 二千兩同廿五日石州御先備
金二萬兩　七月朔日 同八百十二兩一歩一朱同七日	五千兩同廿八日右同斷 五千兩七月廿一日御先備
金四萬兩 是は道中跡拂御入用殘り	千兩同廿二日已斐村 三千五百兩同廿八日尾野道
正銀十一貫四百三十目同十六日 錢百貫（八）文但一文錢（一本アリ）	三千兩八月五日　大野 五百兩同　八日　草津
金二千五百九十六兩一分 錢十貫五百十八文　八月廿三日	内 千五百兩出戻り　八月十二日
是は御先備御後備より持込廻若 山江戸大坂へ爲替代り其外諸方	千五百兩　八月廿二日草津へ 千兩　同晦日江波へ
より預り筋共此度木計入取計の筋 金四萬三千兩　同廿九日	二千兩　九月朔日右同所 千兩　同三日右同所

「原書は備便の爲め仙歌紙二つ折にし金米之部を分ち元受拂越高を日々附箋結付を以て積數差引を示したるものなり大數一覽には簡易の如しと雖も頗る錯雜迂遠且謄寫の法なき故本記之通表面に更正謄寫す前記御出陣百日積大樣見詰且實納拂大樣差引書に比しては差違ひ多しと雖も彼は御出陣前後一切之大費見詰是は全く御出陣中丈けの支出に係る一部分なるへし此他之御出陣に關する全部實際總費額は今知るへからす」

一ヶ年總經費之事

是は維新後明治二巳年六月藩治被　仰出之際公廨一ヶ年之費用取調可差出旨　天朝の命令により同年十月提出之調書なり

一卯十月より戊辰九月まで公廨入費調帳

和歌山藩

一金二萬七千八百十八兩　手許初奧向諸入用

（千三百三十兩
（金九千三百五十八兩　臺所向諸入用

一金十五萬千七十兩　西京及大坂滯留中諸入用

米二千四百九十三石
大判十三枚　他向贈答及藩士初市在のもの共
金二萬六千八百四十六兩　賞與筋其外社寺へ備物等諸入用

（米七千三百十四石
（金二萬二千二百二十三兩　諸營繕入用

（米千四百五十九石
（金十萬千八百九十四兩　藩士他邦及領內へ出張之節往返且滯留中諸入用

一金十八萬千六百三十兩　立用金之內元下及利息拂

米二百九十四石　收納米運送船賃及用物等諸人足賃入用
金三萬五千八百五十九兩

一金三十五萬三千兩　乘馬及兵品且蒸汽艦幷書籍買入修覆料等諸入用

金千四百九石　他向へ貸金及藩士初市在のもの等へ貸下け且救助筋
金二萬七千三百三十二兩

米五千七百六十八石　馬飼料及役所向手紙墨料初役仕着せ料其外諸雜弊品々入用
銀錢十文

一金九萬千三百兩　徵士兵軍資金辰五月九日上納分

一金九千六百兩　攝河泉和播五ヶ國元通用銀札引替入用

一金三萬二千五百兩

合
米二萬六千七石
大判十三枚
銀錢十文
金百七萬四百三十兩

右之通御座候以上

「右は慶應丁卯年十月より同四戊辰年九月まて滿一ヶ年の經費にして則維新前紀州藩御自治一ヶ年の國費なり類年天下騷擾國步艱難を極め随て臨時非常の國費を要せしは蓋し長州征討以來引

續き此際を以て未曾有の事と判すへし歴世御自治の程度は帳簿散逸調査の材量なく今知るに由なし唯本紙の存するを以て爰に編するのみ御家中宛行の祿高は無論此外たるへし」

國役金獻納

一慶應四辰年二月晦日左之通金穀役所へ上納受領證受取之皇后新御殿御造立に付紀伊中納言領分國役金當二月中上納可仕旨先達て被　仰出の趣奉拜承早速篤取調罷在候得共巨細之取調難行屆折柄御限月相立ち仕候ては奉恐入候に付先金三千六百兩上納仕置候猶取調次第過不足之儀は可申上候
以上

紀伊中納言内

二　月　　　久　野　丹　波　守

ニツホール艦奥羽へ御用往返入費

一慶應四辰年閏四月二日太政官會計局へ左之書付出す
此度奥羽御鎮撫御總督御初御乘組御用立候紀伊中納言手艦ニホール艦紀州へ往返運用入費取調太政官會計御掛りへ差出可申旨在奥會計御掛り平坂信太郎殿林馬太郎九殿被申聞候に付右運用中表立候入費別紙兩通之通相成候旨右船長役人共より申越候に付御屆申上宜御取扱御座候樣奉願候以上

紀伊中納言内

中嶋三郎右衛門

大橋左衛門

四月

會計事務

御役所

奥羽鎮撫就

御用ニツポール艦運轉中乘組士官初水夫火役給金賄料幷石炭其外諸入用左之通

一金三百十三兩一歩二朱

是は乘組士官俗事方醫師水夫火役等人數九十五人分當辰二月廿五日より四月十日まて御用中四十六日分給金

一金五百四十六兩一分

但一ヶ年高〆二千六百十兩餘閏月とも三百八十三日割一日分金六兩一朱つゝ

是は右同斷乘組九十五人四十六日分賄料　但一人前一日二朱つゝ

一同三千九百五十六兩二歩一朱

是は運轉中石炭其外諸入用高別紙内譯之通り

合金四千八百十六兩三朱

右一通

曹叢

ニッポール舩運轉中石炭初諸入用内譯

奥羽鎮撫就

御用ニッポール舩運轉中石炭其外諸入用内譯左之通

一金三千九百五拾六兩二歩二朱

三千六百六十一兩二歩　石炭六十萬斤代

内

二千四百七十五兩

此石炭四十五萬斤　但一萬斤に付五十五兩

千百八十六兩二歩

此石炭二十一萬斤　但一萬斤に付五十六兩二歩

十一兩二歩　右石炭積入人足賃

七十兩二歩一朱　白絞油四石二斗　但一石に付十八兩

四十五兩　苧三百斤　但百斤に付十五兩

四十七兩一歩　豕油四百二十斤　但百斤に付十一兩一歩

十三兩二歩三朱　火焚用手袋七十三組　但一組に付三朱つゝ

二十三兩一歩三朱　蠟燭百五十斤　但十斤に付一兩二歩二朱

一兩三歩二朱　白毛綿五反

二兩二歩　　　　　生龐五反　但一反に付二歩
二十二兩二歩　　　燈油一石五斗　但一石に付十五兩
十一兩一歩　　　　罐焚付用薪五百貫目
此錢百十二貫五百文　但　十貫目に付二貫二百五十文
拾五兩二歩　　　　罐付火焚道具損并物修覆料
二十五兩　　　　　草鞋さぼん針金綱原銅　修覆入用共外筆紙墨
右

軍資金獻納

慶應四辰年閏四月十九日被　仰出
一陸軍編制に付高一石に付金三兩年分三度に上納兵員の給料に充つ
同年閏四月廿四日軍防局より達
一軍資金上納之儀は三分一つゝ正月五月九月に可納事
一五月分金納之儀廿日までに守護職屋敷へ持參可致事
同年五月十一日軍務局より布告
一軍資金上納之節向後爲替座封印を以相納可申事
右御布告全文は同年月日之譜に詳なり

同年五月七日

一右依　仰出に付當五月分上納御金繰之儀左之通和歌山御勘定奉行より京都御留守居へ申遣したる處次第の通り回答申來る

此度於

天朝陸軍編制被爲立候に付兵員差出軍資金上納被　仰出候段政府より被　仰聞候御書付寫御差越右は追々臨時の御大費差湊其表年寄衆にも不一形御配慮被成下候趣等委細御申越致承知右御金繰之儀は種々可致勘考候得共御察しの通り御繰合追々御差詰有之就夫先比九條殿初奥州へ御發向之節御貸上け相成ニッポール艦入費御取替并大宮御所御造立に付相納候國役金納過とも左之通御下け可相成分有之候に付右此節早々御下け被成下候樣其筋へ分けて御達可相成は右を以前段軍資金當月分上納相濟候樣いたし度右之段宜御取計有之樣致度此段譯て御談申進候以上

五月七日　　三木五郎兵衛

一本作(方)出平左衛門

小林文八樣

外に軍資金上納分以高差引別紙の通有之候に付右之處を以宜御取計有之樣いたし度存候以上

一金四千八百十六兩三朱　　ニッポール艦奥州運轉入費御取替

一金三百四兩二歩一朱　　國役金納過

永二十五文

〆金五千百二十兩三分
永二十五文
右之通
御拜領高
一五十五萬五千石
内
三萬五千石餘　　大炊頭殿
御領知
與力知共
三萬七千石餘　　徹福丸殿
御領知
與力知共
外に
二百石餘　御藏米渡し
差引
金四十八萬三千石程
右之通御座候
五月　　御勘定所
下ケ紙　本文徹福丸殿分御高先達て國役筋に付御直達には三萬八千八百石と御認させ候趣にて御

普請方にて調之御達し高差引にも右にて殘高仕出有之候得とも內二石は口熊野瀨戸村御藏下に相成代りは與力上け知にて御下け有之候に付外見せに仕舖又千六百石は御預り同心給扶持を高に積り候に付本文高には相省き御座候事

右之通

京御留守居

此度陸軍御編制に付軍資金上納被　仰出候處御繰合甚御六ヶ敷候に付先達て御貸上け相成候與羽行ニッポールル御艦往返之御入費御取替幷大宮御所御造立國役金過の分とも合五千金餘御下けに可相成此分早々御下けの儀申立右を以前條軍資金相納候樣之都合に相成候樣周旋之儀御申聞之趣承知仕厚申盡候處春來夥敷御入費に付御繰合必至御六ヶ敷御尤之御儀御座候へともニッポールル御艦又々今度御用被　仰出不輕御急之趣分て被申聞候處未兵庫へ廻し方の日限は不申達甚不都合之折柄に付前條御入費御取替之分御下け之儀此節申出兼可申とも不存候乍併兵庫港へ相廻し候日限相極候は丶右申達に出候機會に與羽行之御入費御下けの儀可申立候於
朝廷も不輕御繰合御切迫の趣に相聞申候將又國役金納過の分是は荒引役所高之內譯等巨細に申出候樣先比被申聞其段相達有之候處今以右荒引等內譯差越不申候に付急々御廻し越候は丶納過御下の儀相働可申候右之通の手續柄に付軍資金當月廿日納之差繼には迚も相整兼可申付右御金廻し方の儀は宜御取計御座候樣奉存候事

五月

慶應元辰年五月廿日

一軍資金上納

軍資金四千八百兩　　但一萬石に付百兩之割辰五月納

此高四十八萬石餘

但右金は

古二朱にて千八百四十四兩三歩也

此貨四千七百九十九兩三歩也

外に新銀一歩なり

合如高

右當五月納分水野十大夫を以軍務官へ上納陸軍局受領証受取之

同年八月廿六日

一軍資金十五萬兩獻納被　仰出　行政官より

當春干戈騷擾以來諸藩出兵戰勞不少當藩に於ても同樣可被　仰付の處無其儀今度御評議の筋有之軍資金として金十五萬兩獻納被　仰出委細同日之世史に詳なり

同年九月十九日

右一時に調達仕兼申相整候儀に付明廿一日二萬兩上納仕度猶精々盡力調達次第上納可仕との旨辨事御役所へ請願之處願之趣聞届辨官へ可致上納段上ヶ紙を以指令有之委細同年の世史に記す

同年九月十四日
一軍資金上納
　金四千八百兩　　一萬石に付百兩之割辰九月調
同年九月廿四日
一軍資金二萬兩上納　　十五萬兩之内
　右伺之通り片山武右衞門を以辨事御役所へ上納
同年十月廿三日
一軍資金一萬兩　　十五萬兩之内
　前同斷之手續を以上納
同年十一月十四日　　行政官より被　仰出
一今般箱館表出兵の儀被　仰付付ては去日　御沙汰有之候軍資金殘金獻納暫時御猶豫被　仰出候間
　右之通被　仰出候處翌十五日件之通御猶豫被成下候處既に右金子一昨日致獻上は尤御猶豫申達候以前には候得共出兵被　仰付候後の事に付一先被返下候猶金子は會計官より受取可申旨久世宰相中將殿より書付被相渡
此旨相心得へく旨
　文中一昨日とは即ち十〔二（一本二日とあらん）日と申て〕同日獻金の事欠記にて員數分りかたし
明治二巳年正月廿八日

一軍資金上納
金四千八百兩　　一萬石に付百兩の割巳正月分西京軍務官納
同年三月十九日
一徵兵一と先歸休被　仰付候得共軍資金は是迄の通り上納被　仰出
兵制御變革の儀も有之に付徵兵一と先歸休被　仰付候得共右高に應し差出候軍資金之儀は是迄
の通り上納可有之候此段更に申達候事
但徵兵歸休被　仰付候付ては未た徵兵差出無之藩々は先つ差出に不及候事
三　月　　行　政　官
右於非藏人口辨事中被相渡
同年五月廿七日
一軍資金上納
金四千八百兩　　一萬石に付百兩之割巳五月分西京軍務官納
同年十二月廿八日
一軍資金上納
金四千八百兩　　右同斷巳九月分東京大藏省納
明治三午年二月三日
一軍資金上納

金四千八百兩　右同斷午正月分東京大藏省納

同年三月廿七日

一軍資金是まて南京へ上納之譯書取調可差出旨大藏省より達に付前記六ヶ度の譯書於東京同省へ差出す

上納六ヶ度にて

合金二萬八千八百兩也

同年十二月廿六日

一海軍資金上納御猶豫願

左之通於東京辨官へ請願之處附札之通指令有之

但海軍資獻納之布告文傳記委細不詳

海軍資金當十二月より上納可仕段兼て被　仰出の趣奉敬承候然る處先達て詳細御屆申上候通今秋再度之大災にて管内田畑甚敷荒廢高毛十二萬石餘も有之歳入不足用度殆と缺乏加之右各荒に付て差當の窮民救助且難捨置堤防營繕之入費等種々繰合を以て精々年先取計仕居候折柄に付所詮前件上納筋調達難相成甚恐懼之至に御座候得共右歳入多分の不足且無據出筒多端の情實御洞察被成下前件上納筋何卒暫御猶豫被成下候樣仕度此段御許容の程分て奉懇願候以上

庚午十二月廿六日　和歌山藩

辨官御中

附札

當正月限可上納事

明治四未年二月十二日

一海軍資金上納御猶豫再願

左之通於東京辨官へ御願之處附札之通り差圖有之

今般海軍資金上納可仕旨被　仰出之趣奉畏候然る處當藩の儀は昨年來三治一致之御旨趣を體し知事參事の子弟を始農工商に至るまて年齡に應し身體强幹なる者は三ヶ年之間都て兵役に服せしめ來候に付既に昨年兵則御改正被　仰出候節右規則書相添委細申上奉願候處至當之儀に付是迄之通編制可致旨　御沙汰に付即午年々齡に當候ものは悉皆編籍屯集仕候儀に御座候就ては右人員に應し銃砲器械を初他集所一切の什具營繕等新規調整之費用巨多に有之必竟後年の分をも繰越し運用仕候儀に付假令屯集之人員を減し候とも内手の用度に於ては聊か相替候儀無御座候間此節頓に右金高上納可仕手段難相立尤二年目又は三年目等に相成候はゝ年々用度之見留も相立候儀に御座候間何卒夫迄の處御猶豫被成下度此段譯て奉懇願候以上

辛未二月十二日　　和歌山藩知事　德川茂承

辨官御中

南紀德川史卷之百十

臣　堀　内　信　編

財　政　第　三

貨　幣
銀札紙幣
及鑄錢

一貨　幣

銀錢札及鑄錢之事

曩に御國内に於ける貨幣之制度は正金銀貨は　幕府之制度に從ひ流通無論と雖も古く元祿之（一本廿年より）度）紙幣（銀札）は既に發行せられしか寶永四年に至り停止となる又享保十六年には正金銀を停止して換ふるに銀札を發行し同十八年又之を停止し爾來正金銀通用となりしならん其間元文元年鑄錢之擧ありしも熊野人民より請願全く私鑄に屬せしや又は藩之を官許せしにや事實成行其詳ならす文政度勢州御領内にて銀札通用の事御願立と雖も一旦中絶之譯を以て許可ならさりしを同五年再ひ御願立遂に十年間允許せらる爾來滿期毎十年つゝ繼年期許可以て維新に至りし也該勢州札は松坂札と唱へ信用確實勢州一圓（他領も）は勿論熊野迄諸郡中若山一般に及ひたり又若山にては天保六年　幕府へ請願若山札を發行す（從來は茶屋封所にても銀札を取扱たれ共銀札方と云を置き分離したるは蓋し此時よりならんと云）兩札共に租稅徵收俸祿支給物品賣買一切に流通餘は正錢と丁銀粒銀通用せり

一從來若山本町五丁目角に茶屋宗味之店あつて茶屋封所と唱へ長屋門隅櫓玄關構にて嚴然官衙の躰

をなし（今は小學校になれり）御勘定奉行の支配に屬し元〆手代等同府より出張都而公金を取扱ふ事今の國庫金取扱所の如くにて金銀改め且封緘の手數料の如きは左の如し

（茶屋入目判賃極り）（一本ナシ）

入　目

銀拾五匁迄	五　厘	同拾六匁より五十目迄	壹　分
同百目迄	貳　分		

判　賃

同十五匁迄	四　文	同三十匁迄	七　文
同四十五目迄	十　文	同六十目迄	十三文
同七十五匁迄	十六文	同百目迄	十八文
金百兩に付	百二十一文	同拾兩迄	壹兩に付貳文つゝ
同拾兩より上	壹兩に付壹文貳分		

右之故を以藏入は皆之に納しめ歲出は手形にて振り出し御家中俸祿諸渡り物も手形を切出し受領人は其手形を以茶屋へ取付をなす事恰も銀行の如し（江戸邸にては御金藏内に茶屋の手代日々出張同樣の扱ひなしたり）茶屋より仕出す金銀封は常是包（じやうぜ）と稱し此印證封は公私共に開緘する事なくして封之儘流通他の兩替屋等之印封にては公私授受は成りかたき也若人心得すして之を開緘すれは特に茶屋之撿査を受け手數料を徴せらる人亦開緘したる物を好ますされは假令瓦礫を封緘したるや否を不知も如何に封紙腐穢磨爛した

るも茶屋の印形存する限りは其儘流通したる也扱丁銀と云は形ち　如此長さ三寸許の棹銀にて目方通用即ち銀壹枚と云は此棹銀壹個也俗に海鼠と稱せり又此銀五百目包なるを俗にごんかめと稱す是は茶屋包に限れり粒銀は小圓形にて大小數種あれ共蚕豆小豆大の間に出ず故に小玉銀とも稱せり

封銀は茶屋のみならす信用ある兩替商の印封丁銀も同しく封の儘通用の慣例なりし兩替商は一定の規則とてはあらさりしか七八十年前より願濟にて同商十家と定まり一戸廢業すれは其株式を他へ賣買す其價百兩位也と又金銀を車に載せ運輸する事は兩替商之他者禁せられ貸金不納又手形不渡りの時者直接付立之特權の制あり是兩替商保護の特典なりと云

一兩替商に錢屋と兩替屋との區別ありたり錢屋とは小兩替商の事にて小玉銀の小包は此錢屋の印封も其儘通用をなす又茶屋封と雖も兩替商に持行けは皆目方を改むる也其改方は兩天秤にかけ百目五十目二十目の分銅重りにて秤量する也

一正金銀貨通用ありしと雖も銀札發行後は他國の取引乃至國外旅行等に非れは絕て用なく偶々用ゆるものは眞偽の判定に苦しみ却て不便を感する有樣にて或は畢生正金銀の形狀をさへ辨知せさる者さへありしなり故に普通銀札を至便とするの習慣文政度以來既に五十年深く人心に固執自然の便益を與へたり尤近世之形勢獨り我國のみに非す天下大小の侯伯其領知々々藩札を使用せさるの地なく既に小諸侯領地犬牙相接する大和地方の如き僅に三五里間領知代る毎に紙幣の種類員數相場ともに變轉殆と煩に堪へさりし

一說に曰く和州田原本（交代寄合平野權平陣屋）は近國諸方の通貨集散の處にて少額の銀を兩替したるに二十三種の諸藩札混合ありしと其煩思ふへし又同地方の評に諸方の銀札中紀州の札は最も體裁よく且便法を得たり四國西國邊の如きは不格好を極め殊に四國札の內には壹匁札の厚さ紀州札の四枚掛けもありて過大なりしと云ふ

貨幣之事文政度以前偶々記載あるものも極めて簡短茫漠制度之如何事實の沿革理由都て知るに由なし加之司局の簿册散逸し今や調査之術なし依て唯歷世の記中僅に記載ある分及ひ二三筆記之者を左に列叙し其概略を示す或は年月前後之ものあるは類に依て集錄見易からん爲なり

有德公御代

一寶永四亥年　先御代より通用の銀札御止被遊

按に先御代より通用の銀札とは末に揭くる元祿札標本に據れは蓋し　高林公の元祿十五年壬午正月發行之銀札を停止せられしならん元祿札之事仁井田模一郎上書中に記載之旨　有德公正德四年の條に記する如し

大慧公御代

一享保十六亥年二月朔日御城下金銀遣停止諸色紙錢にて通用被　仰出

此儀先達て　公儀へ御達之上被　仰出

按に享保札の板面に享保十五年九月とあれは此の前年の九月より既に發行せられ是に先ち　公儀へ御達しありしならん

一享保十八丑年六月八日先達て被　仰出たる紙錢札通用の儀停止被　仰付

是に付て無情の一話あり廢札の令出るや何人とも知れす山の如き廢札を長持三棹に入れ三浦長門守殿の藏札をなして京橋の橋下に遺棄したるものありしと又當時山東組境原(ヨカハラ)村なる一庵室に居住の比丘尼あり可也の貲財を有したるか所持の田一町歩程を相應の代價にて他へ賣拂し代金札にて受取りたる折から廢札との噂に打驚き直さま茶屋へ馳付たるにはや引替叶はす尼は苦惱之余り遂に病ひの床につき日ならすして札を枕にして死失せたり後該田地を買ひ入たる家も間もなく倒産して分散しぬ爾來此田地何人の手に渉るも相續せす遂に諸人嫌忌し永年荒廢に歸し于今比丘尼田と綽名して誰知らぬ者もなし當時に至ては毛付せさるには非れ共他に比し特別低廉にあらされは作り人も買人もなき次第也と傳ふる由

一國之通貨を頽廢し引換をもなさす民の疾苦を顧さる如きは有ましき業なれは恐らく(牽)強附會之誣なるへし大石良雄か名望高きは復讐の義のみに非す赤穗城明渡しに際し分配論の起りし時良雄は國内流通之紙幣を引換終らされは何一つ着手に無用と主張して動かさりしといへる說ありさもありぬへき事そかし

一元文元辰年八月四日若山にて鑄錢被　仰付

熊野山より出る處の銅を以て鑄錢仕度段願之者有之に付　公儀へ御達の上被　仰付候也

按に紀伊國續風土記に若山北新町廣町の東邊の地を錢座跡といふ宇須市大夫錢座を命せられ元文二年巳正月より寛保五年丑二月迄錢を鑄たる所也とあり

又御仕入方大帳といふに名草御代官より差出たる書付のよし

口上覺　　　　　　　　　　　　　　　中野嶋村

當村先年鑄錢致し候年歷等委細取調候樣との御通詞之趣奉承知候右者寛保元酉年土屋市太夫より地面借り受鑄錢致候由に御座候仍て御尋に付奉申上候以上

庄屋　善大夫　印

酉二月十八日　　　　　　肝煎　源次郎　印

外二人略す

一宇須村地士土屋市太夫所持致居候鑄錢屏風文政八乙酉三月御買上けに相成御表方御道具にて御仕入方へ相渡候樣被　仰出候に付文政九戌正月廿日御仕入方御預に相成候事

右之記載あるに依て考ふるに鑄錢願人は中野嶋村の者にて元文二年に始業後寛保元年に至り宇須村土屋市太夫の所有地を借受け鑄錢を營みしを市太夫は記念として其圖を書かしめ屏風となし置たるを御買上けとなり御仕入方は理財の局なれは御預けありしならん風土記市太夫に錢座を命せられしといふは混したるならん

舜恭公御代

一文政五午年勢州に於て十ヶ年間銀札通用御願

紀伊殿勢州領分にて銀札相用被申度段申達候處中絶之儀に付難被及御沙汰旨被　仰聞候然る處

同所の儀は他領人會の場所にて就中神領藤堂和泉守領分差挟年中旅人夥敷致通行候處山田表にては先年より銀札相用倚又和泉守領分にても前々より相用候處近年相改め山田表同様の銀札に相成候由に付同所の銀札領分にても專致通用候に付收納向へも粗右銀札取交候趣にて收納米拂代紀州へ取寄候に付差支就ては家中宛行の地も多一統致難儀候品にも有之甚便利不宜候付右銀札遣領分通用差留可申と存候得共左候ては下々旅人に至迄決て可致難儀右等の差支も有之紀伊殿にても勢州領分にては銀札相用候得は萬端都合も宜候に付再應被申達候右は新規の儀にも無御座候間當年より十ヶ年の間相用候樣被致度被存候宜御評議御座候樣被致度此段可申達旨被申付越候

申添之積にて可差出書付

紀伊殿勝手向之儀兼て御承知被成下候通近年非常之儀打續候付繰合甚六ヶ敷此上無據出箇も差見へ必至と差支可申に付拜借被相願度候得共

公邊御世話に相成候儀彼是心配被致候別紙被申達候銀札遣の儀相濟候得は融通に相成候儀も有之万端都合宜御座候間何卒被申達候通り宜御評議御座候樣仕度候

指圖上け紙

格別の譯を以て當年年より十ヶ年の間銀札遣御願の通り被成候樣可申越候

一天保二卯年勢州銀札通用滿期に付繼年期御願

紀伊殿勢州領分の儀は他領入會の場所にて從前々隣領山田表幷藤堂和泉守領分にては專銀札致通用候付領分にても銀札爲相用度との儀去午年委細被申達候處彼是厚く御取扱有之從同年十ヶ年の間札遣被相願候通相濟其節より爲相用候處至極便利宜万端都合能被致大慶候儀御座候然る處當卯年にて年限に相成候得共前段之通り都合宜融通有之此節通用差留候樣に相成候ては領分の者共及難儀候間何卒來辰年より來丑まて十ヶ年の間是迄の通り銀札相用候樣被致度尙又被相願候宜御評議御座候樣賴入被存候此段申達候樣被申付候

指圖上け紙

來辰年より來丑年迄十ヶ年の間尙又銀札遣御願の通り被成候樣可申上候

右差圖月日不知同年八月廿五日に取扱之　公邊御勘定奉行初へ御金被遣あり

一天保十二丑年勢州銀札通用繼年期御願　第三回目

紀伊殿勢州領分の儀は他領入會之場所にて從前々隣領山田表幷藤堂和泉守領分にては專銀札通用致候付領分にても銀札爲相用度との儀文政五午年委細申達候處從同年十ヶ年の間札遣御取扱相濟其節より爲相用至極便利宜尤去る天保二卯年限に相成候付翌辰年より猶十ヶ年の間是迄の通り銀札爲相用度との儀被申達候處被相願候通相濟都合能被致大慶候然處是又最早當丑年にて年限に相成前段之通都合宜融通有之此節通用差留候樣相成候ては領分の者共及難儀候間何卒猶來寅年より來亥年まて十ヶ年の間是迄之通銀札相用候樣被致度被相願候間宜御評議御座候樣賴

入彼存候此段申達候樣被申付候

差圖上け紙

來寅年より來亥年まて十ヶ年の間猶又銀札遣御願の通被成候樣可申上候

右同年十一月差圖ありたる者と見へ同月廿五日

公邊御勘定奉行初役々へ御應答白銀被遣之儀御勘定奉行にて取計白銀代金二十三兩一歩銀札方立に可致旨御家老より同役へ達しあり

昭德公御代

一嘉永四亥年勢州銀札通用繼年期御願 第四回目

勢州銀札通用本年にて十年滿期に付尚又來る酉年まて十ヶ年間年期繼御願前の通り相濟たる處御願文等欠失分りかたし

跡々の通御勘定奉行初役々へ御應答白銀代金二十六兩一歩被遣たる旨筆記あり

當公御代

一文久元酉年勢州銀札通用繼年期御願 第五回目

紀伊殿勢州領分の儀は他領入會にて從前々隣領山田表幷藤堂和泉守領分にては專ら銀札致通用候付領分にても銀札爲相用度との儀文政五年年委細被申達候處至極便利宜尤其後年限に相成候付是迄の通銀札相用させ度との儀天保二卯年以來年限の節々年繼之儀被申達候處被相願候通相

濟都合宜被致大慶候然處當酉年尚又年限に相成候得共前段の通四十年來融通都合宜候付何卒猶來戌年より來る未年迄十ヶ年の間是迄の通銀札相用候樣被致度候旨宜御評議被成下右相濟候樣被致度此段申達候樣被申付候

右之通同年四月　公儀へ御達之處御勘定奉行竹內下野守より是迄通用の銀札員數幷何匁より何程迄と申儀內譯書付可差出旨申來依て左之通及答

御書面當時銀札員數高內譯共先年被及御達候通り增減之品無之左之通有之候此段及御答候樣役人共申候

四　月

一銀札五万五千四百兩

內五万五千四百十兩	一匁札	百八十兩	五分札
百十兩	三分札	七十兩	二分札

後七月に至り御老中久世大和守より前段御願上け札を以差圖左の如し

御願の通來戌年より來る未年迄十ヶ年間是までの通被成候樣可申上候

右に付跡々の例により　公儀御勘定奉行初め役々へ御應答として白銀代金二十三兩一分銀札方立以被遣たり

銀札流通高　文久三亥年調査

一金十六万六千兩　　松坂札通用高

外に　二万五千兩　子九月中出來高

一金四十万八千六百兩　　若山札通用高

此銀札三十二万六千八百八十貫目　但兩八十目立

合五十七万四千六百兩

内

二十六万四千五百二十四兩　壹匁札　此札二万八千三百六十一貫九百目

壹万四百九十四兩　分札　此札八百三十九貫五百八十目

四万三千五百八十一兩　百目札

小以外に

壹万兩　壹匁札　是は枇汚札貫切代り當亥四月松坂より新札相廻させ候筈

壹万兩　壹匁札　右同斷當亥六月松坂より新札相廻させ候筈

壹万兩　壹匁札　右同斷亥十二月松坂より廻る

二万二千五百兩　子春より同八月迄松坂より廻る

七千七百兩餘　子八月迄出來松坂銀札方預け

三万兩　來丑正月中出來之筈

右内譯高符合せす傳寫の誤りなるへし

国札攝河泉和播五ヶ國へ通用之事

文久慶應之比國費多端其極度に達し就中長州御出陣に付ては國初以來未曾有の大費財政の困迫絶言語たる義　公儀御助勢も毎々御願立と雖も　公儀にも御同樣之事依て左之兩條の趣　公儀へ御願立相成たり文言等は當年の譜に詳なれは略して其畢竟を示す

一慶應二寅年十月四日閣老板倉伊賀守へ提出

紀伊國内商人共より近國へ買用取引銀之内へ時宜に寄銀札取交爲相渡度(最[尤カ])引替の儀は大坂表紀伊殿出入町人身元相應之者へ申聞聊無差支引替方爲取扱可申付無危踏請取候樣和州河州泉州攝州播州へ御達有之樣被致度事

但し引替町人名前は追て御達し可申上候事

一右銀札追々摺増候ては此節の融通に相成候得とも追ては弊害も可生右豫防之爲め元文之度鑄錢御免の先例を以此節當百錢鑄造之儀領分へ爲御請負被成下鑄製雜用引去り益高の内五歩通り上納五歩通りは拜借被成下候樣仕度旨

十月廿二日板倉伊賀守より差圖

御願立之趣無餘儀御次第に付時宜に寄り和州河州泉州攝州播州國中へ銀札取交通用の儀は當寅年より十年の間御許容相成候間大坂表町人共之内引替方取扱候名前早々被仰立右引替方豫防の爲め當百錢鑄造之儀は難相整尤大坂表鑄錢出張所に於て吹立當百錢御益高の内より追て拜借被仰付候儀も可有之との趣

右に付大坂表町人左の名前の者共に引請爲取扱猶爲便利江戸堀四丁目兼て用所に有之儀に付引替方爲致役人共相詰させ候間右之趣前段國中へ御觸達之儀を津田監物を以て板倉伊賀守へ御達相成

三井八郎左衛門　山中善左衛門　長田作兵衛
米屋平右衛門　平野屋五兵衛　鴻池屋善五郎
辰巳屋久左衛門　加島屋作五郎　米屋喜兵衛
錢屋勘左衛門

右御達書へ上紙にて御挨拶左之通

書面之趣大坂町奉行奈良奉行堺奉行へ相達尤御料所の分は御勘定奉行より御代官へ相達し候間其段可申上候

御勘定奉行

一同年十二月四日左之通被命

御國銀札此度和州初五ヶ國へ通用候様　公儀御許容相成候付右御用各元に成行届相勤可申との御事候

一御勘定組頭銀札方頭取等高松柳右衛門杉山房五郎國澤(新)[一本親]三郎木村五(一)[一本ナシ]郎輩右御用筋相勤可申旨御勘定奉行より申渡し尚御勘定組頭へは紀勢銀札方御用筋引受相勤可申段を相達す

一十二月十日於若山元二歩口役人左之者共へ左之通申付る

尾崎紋之助　瀘路増之右衛(門)[一本ナシ]　吉村辨左衛門

原　伊三郎　　田中時三郎　　秋月久助

右判改方に

和田正左衛門　　上田熊助　　津田直太郎

岩井楠左衛門　　湯川源之助　　日置小太郎

薗村覺次郎　　川口嘉太郎　　三宅市左衛門

青木要助

右判摺方に

上田八輔　　財田正藏　　小上留市

田井仲〔一本助〕（輔）　　池田繁吉

右銀札引替方に

一諫川三郎平事五ヶ國通用の銀札筋に付格段盡力此上弘通振爲働之都合も有之旨にて同年十二月十九日於京都水野大炊頭左の通り申渡す

諫川三郎平

御融通筋格段骨折相勤候付十八扶持年々銀五十枚被下置之

一左之通御勘定奉行より申渡之　同日

諫川三郎平

御國銀札和州初五ヶ國通用の儀於　公邊御許容相成候付右御用筋をも行屆相勤可申候

大坂表引替所總頭取相勤可申候

一京住彫刻師松田儀十郎ヽ申者當時三都にも稀なる職工の由に付五ヶ國通用銀札判彫刻且磨滅彫替申付の爲め十二月廿一日於京都左之通り申渡す

京住彫刻師　松　田　儀　十　郎

願之通御出入申付銀札方御用相達可申年々銀十枚被下置之

五ヶ國通用銀札へ百文錢札取交通用

五ヶ國通用銀札へ百文錢札取交通用の件

一五ヶ國通用銀札大坂表にて捌方宜く此上百文宛の錢札取交候はヽ便利により讃川三郎平へ御達書取組せ御勘定奉行服部筑前守へ三郎平より内談爲致候上雛形迄添左之通慶應三卯年三月四日御城附を以て板倉伊賀守へ差出す

去寅十二月御許容被成下候大和河内和泉攝津播磨五ヶ國通用銀札の儀此節銀高一匁つヽを以取扱試候處當時世上金銀通用專ら有之候に付銀通用のみにて下々取扱不便利相聞候間向後錢札百文つヽの高をも取交取扱被爲成度候此段御讃申上候樣紀伊殿被申付候事

同月十一日左之通挨拶有之

御書面之通被成候樣可被申上候事

右錢札五ヶ國通用を講せし時の情況は初め大坂にて有名の兩替商則三井、鴻池、加島屋、天王寺

屋五兵衛辰巳屋久右衛門百足屋又右衛門米平殿村其他三名合十八個有力なる取引多き豪商に説き銀札流通之事を托し各自の引受高を定めしめたり（三井は百貫目鴻池は七十貫目といふ如し）而て銀札方役所を大坂は高麗橋堺に甲斐の丁兵庫は北仲町奈良及ひ越部等に設置し夫々へ若山より役人出張銀札の用紙は松坂より輸送該役所にて印刷而して引受商人へ約束額の銀札を渡し支出の上は正金を受取の法にて或は札引替に正金を出したる筋もありしと其引受たる各商人は該札の裏面上の處へ家々の小印を捺印以て其引受の証とす（たとへは加島は㋕とか三井は㊂とするか如し）之を稱して受札と云ふ此受札を面々にて取引用に支拂へは其受取人は該札を役所へ持參し正金と引替を乞ふや役所は此引換へたる札を前記合印により各商人の分々を仕分け再ひ其受札者に戻して正金と交換す中には受札人の印にて更に引替へに來らさるものありし故全く氣配能く流通しあることと察し受札人に就き支拂先きの景况を尋ねたるに其家にては受札は其儘長持に藏め置き一枚も使用は不致也との答に役人も汗を流してかへす辭もなかりしと流通の概况は右之受札者より振り出せは直ちに役所へ取り付に來る如きの觀ありて流通は扨置き却て手間費の姿なれは兵庫の方然らんと同所北仲町に役所を設け神戸は俵屋といふを出張所とし土地不案内とて北風庄右衛門より手代二人を雇入れ札の鑑定をなさしめたり流通少しく大坂に勝りし如くなれ共兎角右より出て左に受取るの狀にてはかはかしからす折柄時勢は次第に切迫幕府の威力行はれかたく德川氏の信用地に墜んとするに隨ひ銀札の引替へ群集混雜を極む（寧極り）三井へ謀り同家の手代二三名を借り入三井印の金筐（千兩箱）數十個を役所の正面に積み重ね三井組出張所の大看板を掲けて何程の引替も毫も恐れさるの躰を裝ひて一時を彌縫し荏苒之内終に伏見の

江戸於深川鑄錢

一戰となりて危殆いふへからす就中紀州の不評[illegible]取付の群集は門前山をなして制止すへからす於是引替番號札を付するに人々寸刻を爭ひ其の日引換なし得さる者は門前に夜を明して拂曉を待に至り雜沓混亂筆紙の盡すへきにあらす大坂兵庫皆如此にして官軍の威勢は猛烈を加へ到底紀州の看板にては危險いふへからさるより兵庫の役人共は銅錢を穴藏に隱し正金二三万両を携へて山分に難を避けたり其内若山より役所引拂の訓令に接したれ共陸行はならす船はなしと云始末漸く北風の周旋により漁船にて出帆なさんとする矢先若山も危しとの急報（蓋し大坂の敗兵入込みし時か）ありければ幸くも加田浦に漕付け上陸して樣子を窺ひつゝ漸く無事に引揚けを遂げたりといふ

一銀札五ヶ國通用開始は慶應二寅年十二月下旬より之事にて其翌三年十二月末に瓦解僅に一年間也加之時勢騷擾人心恟々の際何ぞ信用を得るの暇あらんや然れ共錢札發行の補助策により失敗なからも幾多の收利も亦ありしなりとぞ

右は銀札方にて兵庫に出張したる田中芳次郎なる者未た若年なから目睹の現狀を語りしまゝを筆記す

江戸深川邸に於て鑄錢之事

慶應三卯年八月十五日より　公儀へ御伺濟之上深川御屋敷御仕入方に於て頭取山崎主馬担當にて當百錢（即天保錢也）鑄造を開始す是頻年臨時之御國用濫出若府より廻金は殆と杜絶し江戸に於ても武備練兵初め非常の用費多端不得止の策に出し也然るに忽然維新之變起て一旦廢業に及ひしか官軍

東下の後大原卿へ請願し僅に認許を得しを以て再び起業の處同卿上京の跡に他の官軍入來て撿閱の上悉く封印に及ひたり依て既に大原卿の允許を得たる事由等巨細開陳辯疏すと雖も不貫徹のみならす遂に鑄錢器械は不及論荒吹の錢四十かます其他殘る處なく麁暴沒收の難に陷りたり

國內限錢札通用

一明治元辰年十二月廿三日於京都左之通り御願之處同二巳年正月七日上け紙の通り許可あり

德川新中納言領分內にて金札弘通の儀便用至極に御座候處右金札の內十兩五兩札等金高の儀に付下民日用不便利の趣にて兎角引替申立候に付一兩以下之小札（並札）に引替遣し候得共何分國內には右兩品甚拂底にて引替難行屆且銀目廢止被　仰出候付ては兼て國內にて通用爲致來り候銀札之儀も專ら引上け方手當爲致有之夫是引替手當に彌ゝ差支此儘にては自然金札の通塞にも關係仕候付當分國內限り錢預り書取計右を以て引替遣し候はゝ便利能弘通可相成と奉存候付右之通り取計仕度此段御聞屆置被成下候樣仕度奉願候

德川中納言公用人

十二月廿三日

辨事御役所

上け紙

願之趣聞置候事

一右に付明治二巳年三月十八日會計知局事より左之通諸向へ布達す

先達て　天朝へ御願相濟候錢札左雛形之通此節より金札同様通用爲致候筈候事
但し引替等の儀は兩替共可承合事

覺
錢九貫六百文也
右當分預り置申候以上
己巳正月　錢預所
朱判にて
金壹兩ニ
可引替

覺
錢貳貫四百文也
右當分預り置申候以上
己巳五月　錢預所
朱判にて
金壹歩ニ
可引替

覚

銭六百文也

右當分預り置申候以上

己巳正月　銭預所

朱判にて
金壹朱ゝ
可引替

銭預り書は全く従前之銀札を銭札に引替たり

一明治三年年正月二十日於東京左之通大藏省へ届出之處上け紙の益有之

當藩支配所通用爲致來候銭預り書の儀に付此程別紙之通御届申上候處御附紙を以　御沙汰之趣にては全く御届文面不都合にて趣意貫徹仕兼候儀と奉存候元來右銭預書の儀は先達て銀目廢止被　仰出候付去辰十二月於西京願濟の上銭預書を以引替取計仕候儀に御座候右は全く従前の銀札を銭札に引替候迄にて其數を増益仕候義に無御座候間此段尚又御届申上候尤従前製造總高之儀は兼て被　仰出の期限迄に御届可申上候以上

正月廿日　和歌山藩公用人

堤　正己

岡田清右衛門

上け紙

書面之趣聞届候事

銀札製造高

明治三年三月五日大藏省へ届

右は去明治二巳年十二月五日諸藩に於て舊幕府より許可を受け從前製造之楮幣以來其數を増益いたし候儀難叶候　御出候間是迄製造總高取調來午二月中迄に大藏省へ可届出且御一新後府藩縣に於て楮幣製造之向は以來通用停止被　仰出候旨布告により左之通公用人を以て於東京届書提出せり

從來當藩管内限り通用の紙幣高取調當二月中御届可申上旨先達て御布令も有之則取調候處左之通御座候尤現數之儀は一時に製造仕候儀には無御座舊幕府願濟以後追々製造仕現今の全數に相成候儀に御座候尤御一新後増數仕候儀には無之猶向後聊増仕間敷段御達の趣敬承仕候此段和歌山表より申來候付御届申上候以上

三月五日

金百三十九万千六百兩

右提出の處同月八日に左之高條同晦日限取調可差出旨指令依て口印之通り調書差出す

於舊幕府願濟の年月日并紙幣數何程摺立候との願濟之事

一從前銀札高之事
　但大中小札品書幷小分け高相積總高之事
一當時錢札高之事
　但大中小札品書幷小分け高相積り總高金に引直し何程との事
ロ印
　紀州通用札
右天保六未十二月舊幕府へ申屆發行す去々辰年迄追々製造高左之通
　本文中屆には限數無御座候
一銀三十四万二千四百八十一貫目
此錢千三百六十九万九千二百四十貫文
此金百十四万千六百兩
　但銀百目　錢四貫文
　　　　錢十二貫文金壹兩の割
　勢州松坂通用札
右文政五午八月舊幕府より許可を得て發行す去々辰年まて追々製造高左之通
　本文許可限數無御座候
一銀一万六千貫目

此金貳拾五万兩

但六十四匁を金壹兩の通用

紀州通用札内譯

銀二十万五百二十貫目　　錢札を以引替

此錢八百二万貫文

此金六十六万八千四百兩

内

五百貳万貫文　　十貫文札

百三十九万貫文　　五貫文札

六万貫文　　四貫文札

九拾六万二千貫文　　壹貫文札

五十七万六千八百貫文　　百文札

壹万二千貫文　　端錢札

銀十四万千九百六十一貫目　　引替殘銀札

此金四十七万三千貳百兩

内

七万七千八百十九貫七百目　　百目札

六万三千九十貫目　　壹匁札
千五十一貫三百目　　分　札
勢州松坂通用札內譯
壹万貫目　　壹匁札
六千貫目　　分　札
總合金百三十九万千六百兩
右之通

松坂銀札印板之件答

明治三年年五月四日大藏省より松坂書に三井組御爲替組との印板有之右は三井の書に候哉和歌山藩の書に有之哉との尋に對し左之通答書差出す

當藩管內勢州松坂に於て從前より通用爲致來候紙幣に三井組爲替組等の印制有之候付今度其筋町人共の內へ御尋に相成候處右は全く名目を當藩へ貸し候までにて內實右名前町人共之紙幣には無御座候旨御答申上候付其旨相違無之哉との儀去る四月御尋之趣奉拜承候右紙幣の儀は文政五午年舊幕府より許可を得製造仕管內出入町人共の名を印し三井組爲替組等の板印を据へ候得共製造に付ては少しも町人共關係無之則紀藏元と申文字丸印を据へ有之候尤御一新後聊も增製仕候儀には無之既に當春管內通用の楮幣高御取調之節御屆申上候現數之內に籠り有之其節も申上置候通追々

錢札と引替哉斷仕候筈御座候御尋に付此段御答申上候以上

和歌山藩公用人
筒井治兵衛
津田兵彌

庚午五月七日

大藏省
御役所

金錢引替布達

一明治三午年八月廿三日政事廳より達

此度金錢取引の儀別紙の通被　仰出候間向後錢預役所張出し相場を以て諸向無滯取引可致候金錢引替手間料は壹兩に付錢二百文受取可申事

但金錢引替手間料を以て渡世に致度者は士農工商とも其段錢預役所へ申出鑑札を受日々定相場を店先へ張出し置公平に引替可致候是迄兩替渡世いたし居候向も向後右同樣相心得可申事

別紙　朝廷被　仰出之趣

金錢引替之義昨年被　仰出候天下一般御定之通金壹兩錢十貫文を以取引可致更に被　仰付候事但近來上方に連れ金錢相場相立候處假に一定致し候ては他方取引差支可申付本文定價に引下け候まて月々錢預役所張出相場を以て當分取引可致事

八月廿三日

右一通

一管內通用の錢札近來損傷等有之下々迷惑の趣相聞猶又國札取締嚴重之御趣意も有之付此節より別紙雛形の札を以引替候間其段可相心得事

但去る辰年引替被　仰出候元百目預り四貫文札殘りの筋より先つ追々引替可申事

八月廿三日

一大坂通商司金札管內通用布達

政事廳より

大坂通商司受之金札於御管內も通用致し御收納にも相立筈候間是迄之金錢札同樣此節より無滯取引可致事

五月十一日此年號不分明通商司創設の時なるへし

銀錢札引替

一明治四未年五月廿四日左之通り於東京辨官へ屆書出す

藩札銀錢引換之儀及雛形等齟齬之件屆

當藩製造札昨午三月御屆仕候簡條の內銀錢引換の儀幷雛形等齟齬の廉有之候段先比於大藏省御得に付藩地へ申遣置候所則別紙之通り申越候此段御屆申上候以上

辛未五月廿四日

和歌山藩

辨官
御中

別紙

一銀札追々引換候筈既に百目札は悉皆引換相濟斷裁致し小札に至り候ては僻地へ發札相成居自然引替後に相成候得共當節專ら行屆引替中に御座候事

一錢札 三十二文 二十四文

右は昨年御屆申上候通り從來の銀札追々錢札と引換候筈にて分札引換の爲め製造致し尤昨年御屆面の端札員數之中に相籠り是亦增加に相成候譯には無御座候事

一銀 五分札 三分札 二分札

右昨年御屆申上候節藩地よりは唯分札と束高を認越候付其儘御屆申上候處分札の區別認入候樣於大藏省御申聞に付此表にて認直し三分二分と相心得五分は全く認落し候儀に御座候尤右五分札は和歌山表に無之勢州管内之製造札に付此表詰之者にては更に相心得不申候故誤脫に相成候得共全く勢州管内通用の二分三分の員數中に相籠り候儀に付決て增加いたし候譯には無御座候事

一四貫文札

右は昨年御屆後相止め追々引揚今後五ヶ月間に悉皆引揚候筈に付雛形には差出不申候事

一銀札 十二文 八文

右は昨年御屆申上候後前條三十二文二十四文製造に付ては十二文八文は製造相止め候付雛形には

差出不申候事

紀勢銀錢札種類圖標

若山札

一元祿札標本の板面によれは　高林公の元祿十五年に發行と察せらる爾來五ヶ年間通用寶永四年に至て停止

一享保札享保十五年九月發行同十八年六月停止

享保十六年二月紙錢通用之布令あり蓋し此時　公邊御達し濟により布達ありしならん

一若山銀札　松坂札は文政五年幕府の允許を得て發行漸次若山へ廻り流通之處於若山は引換ずとの趣意を以天保六年若山銀札方役所を設け引換所となし其實一種別に和歌山札を印刷し其年十二月より專ら松坂札と混淆發行通用す

種類は銀壹匁同三匁青色同貳分赤色の三也共に松坂札よりは巾少しく廣くして銀札と稱す

百目札も發行流通すと雖も年代事由共不詳標本亦傳はらす頗る贋造之ものありて取引兩替店之撿印点々頻敷交互之授受不便也しと嘗て銀札方に勤務せし某の記憶に左の如くありしと語れり

橋本之東に掲ぐる銀札百目と云は普通發行之百目札には非す是は伊都郡橋本驛土屋（某）之宗に傳（一本[illegible]）へ同郡小田邑藩橋架設之當時工費仕拂便宜之爲一時地方にて流通之ものと古老よりいひ傳へたりと也壬子とは享保十七年ならんか不判明也兎に角（近代のものに非す）（一本一寄こもの數參考に備ふ）

一銀壹匁札におかめの面印あるは百貫目に壹枚つゝ押印のものにて受渡の印に非す此札手に入時は福來る吉兆となし人皆珍重せり

一壹匁札表に朱にて三厘大藏省印とあるは廢藩の後相場下落時價に引直したる印なり錢百文預り札の朱印八厘とあるも同斷

一銀一匁又銀壹匁此錢百文紀州銀札會所とあるは慶應二寅年冬五ヶ國通用之國札なり

一銀百文同三十二文同貳十四文預り札は明治元辰年十二月太政官金札發行之處壹兩以下の小札國內に拂底引替難行届且銀目廢止に付從來之銀札引上け弁理之爲發行したるなり

一若山銀札方役所は元本町五丁目紫屋之隣に在り後福町に移り又本町三丁目に轉し次て廢藩に至る

一銀札の原紙は勢州白子附近の村にて小瀧の水を利用し製出せりと云伊勢にて製造したるもの若山へ送致し銀札方にて調查捺印發行したる由

一松坂札

三井組とあるは三井八郎右衛門三井宗十郎三井則右衛門三人の名義御爲替組と云は長谷川次郎兵衛長井嘉左衛門小津清左衛門坂田五郎兵衛殿村左五平の名義也之を兩組と唱へ兩組とも名義は發兌より一定原板磨滅更に彫刻の時と雖も絕て變換する事なし印刷は兩組に委任し兩組より各代勤

の者日々銀札會所へ出頭銀札方元締手代立會印刷の上御勘定御勝手方へ領收し印刷額も兩組平均に印刷せしめ並行流通

一發旦よりの定則右の如しと雖も印刷年々増殖し兩組申立之次第も有之不得止事情よりして一種別に銀札會所と題し兩組名義なきもの發行流通せり

一松坂札は都て壹匁預と題す（若山札よりは巾狹し）六十四枚を以て金壹兩となし金札と唱へ相場毫も變動せす所謂兌換紙幣也故に若山にて此札混合しある時は兩替屋にては撰み拔き勢州へ送付し以て其利を收得するも素人は是を知らさりしなりといふ

一松坂に五分三分二分札ありたり未た標本を不得

一享保札に付て再考するに淺井忠八（奉行職）の家譜に享保十六亥年六月四日札方（一本ナシ）（數字不明）元役可被仰付思召之處札之捌も爾々無之付森兵助此度札方被　仰付紀州へ被遣候札方之儀付ても可申談筋は勿論無遠慮相談可仕旨被　仰付と記せり忠八は　有徳公の御時よりの奉行にて御信任淺からす明吏の聞へあり林兵助の事詳ならす札之捌も爾々無之との文面によれは兩人等工夫を凝らせしも兎角不捌にもありしか僅三年に滿たすして停止の事とは察せらる

銀錢札標本

（原本欠）

銀札相場之事

一若山札相場は時々變動あり最高の時は銀壹匁は錢百十二文に當る百中銀錢二三割眞鍮錢七八割の釣合也し少しく下落して丁百（錢通用は總而九十六文を以て百に當る丁百とは百滿數の事とす）替へなり又九十六文乃至八十八文替位にて數年維持し後八十文に至る信か元治元甲子の年若山在勤之比は壹匁は錢八十文なりし當時物價の一端を揭けて參考に供す

米一升　銀壹匁四分　麥壹升　銀八分
大豆一升　同一匁六分　小豆一升　同貳匁
鹽三升　同壹匁　水油一升　同十五匁
炭壹俵　同八匁（一本二）五分（熊野炭一俵七匁）　薪一把　同三匁
柴壹把　同壹匁　酒極上一升　同四匁
白木綿一反　同廿四五匁　無地紅染木綿切れ一尺同一匁四分
紺足袋一足十文　同四匁六分　手拭一つ　銀二匁二分

右は同年之二三月頃にして五月初旬には米下直にて船入津ありて闔米御買上あり左之如し

有田米日高米　壹石に付　上銀百六十目　中同百五十九匁五分　下同百五十九匁

他米亦之に准し百五十九匁内外也御本紙拂直段は百五十一匁より百六十目位とす米壹石銀百六十匁は當時に在ては下落也とて津留ありし程なれ共之を天保弘化の頃に比すれは莫大之高價にして石一信か若年之頃には米一石凡金三歩（七十五錢に當る）替位にて御家中御切米拂立之下直を歎きせめては石一一石代一兩を云になれかし然らは赤飯を炊て祝ひをなさんものと悔みたりき或若山人士の談に某十二三歲當時五十歲以上の比と覺ゆ武術稽古場通ひの木綿袴痛く損し新調を父に要求したるに御切米か一石六十目

以上に成りたらは求め得させんとの事ゆへ若し其以下なる時は如何と問ふに叶ひかたしと拒絶せられて失望せし事今に忘れす其時小倉之袴銀三匁五分にて得られし也と語れり時世之變遷想ふへし爾後物價之騰貴は漸次に嵩み隨而銀相場益下落し維新前後最甚敷銀三百二三十匁を以て金壹兩に當るに至り果は一匁札か錢八文となり廢藩頃には遂に三厘に下る時之大變遷に際し政綱自つから廢馳姦詐恣にして贋札盛に出弊害を蒙る者尠からす爰に一奇話あり廢藩後明治四五年之頃か或士族一策を案し俄商法の手初めにと田舍祭禮を目的に玩弄の覗き興行を思ひ銀一匁つゝの見料を取りしに收入は非常十ヶ所にて兩掛一荷半に充滿之札を得たれは歡喜踊躍若山へ携へ歸り之を三井店の白樫庄三郎と云に因みて金札に引かへんとするに七八割は贋札にて沒收せられ失敗地に塗れたり是有田郡の方面にて受取しもの也と若山には贋札少く多く田舍に行はれしとそ然るさへ嘗て若山奥山の下堂形に於て贋札を山の如く積み重ね火を放ちて焚捨し事數日に渉りし事ありしといへり

松坂銀札高度會縣へ引繼

一明治五申年二月土地人民共度會縣へ引渡の際松坂銀札をも左の如く引繼たり

通用紙幣目錄

金貳拾五萬兩也

内

一匁札	二十四萬八千九百五兩貳分
五分札	五百六十六兩二朱一匁五分
三分札	四百八十四兩二分二朱六匁一分
二分札	四十三兩二分二朱四分

但金一兩に付六十四匁替

右は伊勢國の內元管轄地通用紙幣御屆高如斯候也

明治五年壬申二月　　和歌山縣

度會縣

是に依て之を見れは幕府允許の發行高と文久三亥年調査高に比して莫大の增加なり其理由の如何は今之を知るに由なしと雖も發行以來既に五十年の久しき利便民心に慣染流通の聲價は却て山田津札を凌駕するの勢なれは永年の間漸次增加を來し或は國步艱難の度を嵩むるに隨ひ時々の政略上不得止增加に至りしか若山札と雖も亦然りしならん嘗て時の大威たりし森部好謙語て曰く勢地に在て廢藩置縣の大變革に遭遇し版籍を度會三重の兩縣へ引渡しの任に當り其刻苦の次第實に名狀に不堪しか就中藩札の件に付ては既に戊辰一月には時勢忽ち藩札の上に布及し人心動搖訛言百出殆と竹槍蓆旗の珍事何時も不可量の危懼におちいり隨て引替請求の者四方雲集一大凶慌月下に突出せしを百端依持救護の策を執り竊に豪商と謀り突差に正金引換を結了民情を孚撫せしか該引渡の際には流通額非常の超過により處分方を和歌山へ諮詢中時日遷延三重縣よりは屢々督促然るに指令は遲々談判は

彌切迫竟に不慮の嫌疑を受け法廷沙汰となり最後之訊問特に係員を替へ従來我下風に立ち鼻息を仰きたる久居藩より刑法課へ出仕の某なる者に聽訟課に於て訊問を受くる始末實に切歯憤悶に不堪既に斯よと覺悟にも及ひたれ共萬一已れを潔し却て國辱を醸生するも量り難しと苦忍痛堪の內漸く若府より超過の分は本藩へ廻送裁斷に可及との指令に接し初て無事に完結したりと云へり嗚呼其苦心は追思の及ふへからさる所なるへし

金相場之儀に付建議

「是書は文久元酉年十一月御勘定見習御勝手方助兼勤（本役は熊野三山貸付方出役なり）森部市之丞（後好謙）於若山政府へ提出之意見書也蓋し財政困迫自然銀札增發の結果札相場下落物價騰貴の弊害を救護するの獻策也」

御國內近來正金銀不融通に相成上方よりは金相場格外高く相成自然諸物の直段へも相響下々困窮仕候趣に御座候右は金銀札之御高相增候故にも可有御座哉と奉存候何樣正金拂底に付ては上にも年々江戸御繰込を初め諸拂金にも御差支に相成候趣に御座候得とも御定相場にては御買上相整不申候付銀札を以正金成の儀御取計せに付ては當夏以來種々入組候取扱を以漸聊つゝ銀札方にて入替等の名目にて金成せヶ成御用の御間は詰可申哉に御座候得共向後之處如何可有御座哉と乍恐心配仕候儀に御座候若御同樣之御事にて年增金子拂底之御樣子見込候はゝ一己の利欲に迷ひ心得違不束成儀願立候もの可有之も難計追々入混候取扱ひに相成候ては勤人共に於ても萬一不行屆之儀有之間敷とも申上兼自然右樣之儀御座候節は第一奉對　上奉恐入且は勤人とも全く御奉公も相成

兼候樣成行候ては誠に以歎敷奉存候就ては何卒入混候御用の御元を御省きに相成都て一と筋に御手行能精勤仕度一同所存に可有御座と奉存候右に付ては第一金相場彌御定之通に爲致不申ては相成不申其場に至らせ候ては先銀札の高を御減し被遊候樣仕度此儀は是迄追々御厚評も被爲在候御事と奉存候付ては昨今の私何の見込も無御座容易に奉申上兼候得とも唯日々取扱筋に深く心配仕候付乍恐愚意之趣密に思召まて左に奉申上試候事

一銀札引替宛にて上方より利分を計り御立用等を以五萬金六萬金の銀札御定相場を以御引替に相成候ても昨今の人氣殊に夥敷銀札故迚も戻り札防き切れ申間敷其上右御立用金も永く居置には相成不申右から左と申位に御返濟宛に引替戻り札を以入組候取計にて金成せ上方へ相廻し候事に付直達に御損金等不少事に御座候付右は先暫御見合被遊候御方可然と奉存候事

一銀札之高減切之儀は中々速に參り兼可申候付此節何とか御趣意を附け在町へ御觸達の上身元宜ものへ分けて申諭し先二十萬金程の銀札年限を以て御預り被成遣右銀札は町方或は御仕入方等にて別段御封印に相成候はゝ年限中は通用高減し居候付自然金相場の御制度も被遊やすく相成可申と奉存候尤右差出候銀札へは相應の利分御下け被遊遣元銀札は別段御封印に相成居候事に付年限中たりとも無餘儀品願出候はゝ何時にても不殘御下け被成遣候樣被遊御趣意から論振に寄り候はゝ強て人氣に障り候儀には有之間敷哉と奉存候右利分は前件引替か御立用利金幷直違ひ御損金等見込候はゝ御償に相成可申候へとも左候ては矢張本計臨時御出方に相成候付別段御凌宛は口上にて可申上候乍併右之通り御世話振被爲在候とて金相場引下け候見當は無御座候へ共元來正金も拂底

之儀に付正金計にても融通差支候付以前銀札の御高寡き時分は正金銀と札兩替仕候得は少々打銀出し不申ては兩替店にて銀札は相渡し不申位の事に付銀札少く相成候はゝ以前へ復し候儀も可有御座哉と奉存候事

下け紙

本文二十萬金之儀は近來御摺立之內本計へ差出切に相成候高を見當候儀に御座候右は全く近年の不時御出箇差添無御據御間詰に相成候御事と奉存候得共右御摺增無御座候はゝ是非とも御立用を以て御用辨に相成可申處銀札にては差當り利分の御出方も無之一時の御凌至極の御儀には御座候得共昨今の通用振に相成候ては利分代り何角に付ては年々御損金夥敷此後之處は實に難量儀と奉存候利息拂は大造成金高相顯れ候へとも高之見當も有之事に付御繰合向御過き御不足とも見詰を附可申と奉存候付右二十萬金は御立用と思召本文之通り御封印に被遊候はゝ年々難見留大造之御損金も自然薄く相成且は金相場も御定之通り相成候はゝ諸物直段も引下け人氣も立直り御仁惠の程猶々難有かり潤澤之場に至り可申付右等見平し候處の御得失は如何可有御座哉萬一見込通り參り不申共二十萬金は御立用を以て御用辨に相成有之儀と見通利拂相增候處にて御納拂目盛相立候はゝ夫迄の事と愚意仕候儀に御座候事

再建議

「前同斷の儀を尙再ひ同人より建議す原書日段を欠く尤文久元二兩年間の事と云」

一金相場引下け振之儀に付被　仰聞之儀も御座候付乍恐愚考仕候處昨年嚴重之被　仰出御座候得共兎角御趣意相背き斯迄に高直に相成候儀は全く　御國内一体之人氣にて兩替共計りの所爲とも相見不申候付急々引直之儀は余程六ヶ敷儀と奉存候併先年銀札少き時分は正金銀を以銀札を望み候はゝ少々打銀出し不申ては銀札手に入不申位之事に御座候處近來新札御摺增に連れ追々金相場引上候哉之趣に御座候付ては右打銀出候頃之銀札高に一旦御引戻し試被遊候ては如何可有御座哉乍去夥敷高に付此節正金銀を以て御引替之上休札に御取計せと申樣にも相成兼可申付在町にて身元宜敷者へ趣意申聞銀札精々差出させ御封印に相成候はゝ通用高は忽相減候事に御座候尤差出候銀札へは相應の利分御下け被成遣候はゝ下々强て難澁に及ひ候儀も有之間敷と奉存候併御用全体に相聞御差支に相成候はゝ受札に申付極印を打引けさせ候方可然哉に御座候得共受札にては通用高の減しには相成不申其上上方にて御引替させ同樣二厘引に被成遣候はゝ兩七十目と見壹兩に付一匁四分つゝ十萬兩一度御引替させ候はゝ百四十貫目之御損金有之矢張煩敷奉存候付利分は右御損金見當前件の通り御封金に相成候方可然歟受札にては二厘引之あやも御座候付引替方に付奸曲之業致し候もの出來可申も難計奉存候何分兩樣之内　御明政を以人氣動搖不仕樣被　仰出御座候はゝ自然金相場も引下け可申哉と奉存候事

右之通り認差出候處今一通差出候樣との御事に付猶又酉十一月十（原文欠）差出す尤も左之趣下け紙取計候事

本文御封札之儀相整候はゝ現に利分拂御出方に御座候へとも自然金相場引下け候はゝ年々江戸

上方繰込宛御買入金之直違ひも有之且は是迄の通金相場高く諸物直段等へも響き冥々の中にて難量上下の損亡を見込候はゝ爲差事にも有御座間敷哉兎も角も御封印に相成居候はゝ　御國内之御備にも相成可申儀に奉存候尤受札二厘引のみにて十萬金一ヶ度引替之御損金纔百四十貫目に御座候へ共年に寄何十萬の引替高に相成可申も難計其上相場の狂ひにて損益難見留奉存候事

御家中勝手賄商人を廢し勝手取締方建議

御家中勝手賄商人を廢し勝手取締方建議

「是亦森部市之丞政府へ提出する所前同時の事なるへし」

質素節儉之儀に付兼々被　仰出之品も御座候處猶又此度御家中風儀を初め下々衣類等之儀に至るまて御取締被　仰出誠以難有御趣意に付追々質素の風に相復し可申と奉存候就夫御家中勝手向取置しの儀第一に心掛け近來異船渡來に付非常に御備も有之儀に付銘々手元にても手當心得振も可有之と奉存候得とも年來勝手不如意之向は不任心底急々充實の場には至兼可申哉と奉存候先年より賄方役所御立させ御家中勝手賄之儀御世話振被爲在候儀は勿論深御趣意も被爲在候御事と奉存候へとも右賄を渡世に仕候町人ともは兎角高利を貪り又御家中にも難澁差迫り候向は物成不殘差入色々手を盡し多分に借出候筋抔も有之趣に御座候右に付是迄も折々割濟等被　仰出御家中は差入米相弛み可申候得共町人共は年來の利德を不申無利息割濟を相難し人氣にも障り候趣に御座候處近來は右損金をも欠込雜用等相掛け別て高利に相當り候貸方いたし候ものも有之趣に御座候御大國の儀御家中も勝數事に付賄方役所を御立置融通手廣に無差支御取計せ被遊候御儀は御趣意

と奉存候得共近來の風儀を以て懸考仕見候處　御城下町人ともの内聊貯金有之ものは手船を厭ひ一と通りの高ひ向に骨折不申兎角御家中貯等を好み約る處夥敷御家中之上町人とも迄も御收納之內を以て暮方相凌き候姿に相當り商家之本業薄く相成候付ては他所よりの入金も自然相減し可申道理に有之且は御家中も夫々身分相應之暮方仕候には先御宛行の物成を元に立年分の諸入用相凌候樣勘弁仕候はゝ相應之場へも至り可申候へ共貯掛りにては融通の道も御座候付自然借越に相成其年の物成丈の暮しと申樣にも參り兼自分手延に相成却て不相應に相成可申哉と奉存候就夫御家中諸手取締り其外町人ともの御家中の押米等を宛に不致御國產品手廣に通商出精いたし他所の金子を請け取　御國內潤澤いたし候樣仕度奉存左に奉申上候事

一御家中高貴の御方には格別輕き向は何分其年々の頂戴物を以て暮し方相立て成丈け借財不致樣心掛不申ては勤向は勿論倅族養育も出來かね候事に御座候是迄とても何れも同樣相心掛け候儀には可有之候へとも無據品差萠貯掛差向高借に相成致難澁候向も不少事と奉存候右借財も不取締にて及高財候向は不及論候へ共中には勤向其外不時の儀打續所務不殘町人ともへ振向け高借に相成候節は無據儀に付於町人は心痛も可仕候得共右借財を引受候二代目よりは知行米藏付けは如何なるもの哉御切米御本紙は何れにて如何樣受取もの歟不存樣成行可申唯所務は貯町人より月割金にて可受取ものと心得種々品を附銀主ともより借出し間を請候付ては自然借越に相成手延にて百石は百石の暮しに參り不申向も可有之哉と奉存候萬一右体の筋御座候ては如何にも無勿体次第且は相應不相應の境も相立兼可申候付可相成は以來は一と通りにて町人ともへ勝手向爲貯候儀御差留被

遊他所勤其外實に無據不時入用丈けは其趣願出候はゝ御吟味之上融通を附け爲御凌被遊其餘は都て手賄に相成候はゝ自分質素儉約相守身分相應之場に至り可申と奉存候是迄の姿にては格別の御恩賞にて父へ被下候祿を子の代に至り心得違一時の入用凌に永く町人へ差入等に相成父の勤功空敷却て町人の爲に相成候樣成行可申も難計誠以奉恐入候儀と奉存候事

件の通り御改正に付ては一旦借財の根絶し不被成遣候ては難相濟乍去御家中借財夥敷高に可有御座候付銘々借財高取調候上元高四歩六歩或は七歩三歩位にて爲濟切右濟切金は銀札にて御家中へ御貸下被遣押へ米も割濟同樣に被成遣返納は銀札にて爲相納直に御裁切に相成候はゝ年限中には右一條の銀札御引上切に相成萬端片附に可相成と奉存候尤向後他所勤等にて難澁致し是迄賄町人共より出金致させ候向は矢張前同樣銀札にて御貸し下け被成遣候はゝ融通も相整可申と奉存候右貸下に付ては爲冥加元銀返上納之外に銀札摺立等之入用割合丈爲御納元銀は別段御家中御救宛に御除置に被遊外御用に遣ひ不申候はゝ入用等都て本計御出方に相成不申業合相整可申と奉存候尤右体借願出候向は内手有体に願立候筈御通し置願出候節は篤と御吟味之上御貸し下けに相成候はゝ心得違多分借財には相成申間敷と奉存候

一町人共近來風儀不宜通商誠實に不仕聊貯金有之者は賣買手數掛り候儀を厭ひ兎角御家中賄等を專ら家業にいたし高割を貪り衣食住ともに身分不相應之奢りを極め其上難澁の諸士より厚く頼談を受候ては心得違ひ不作法のものも有之哉に相聞言語同斷成事に御座候元來町人共は諸產物手廣に他邦へも致取計右利潤を以て渡世にいたし質素に相暮し得意先等へは隨分禮儀を相盡し尊敬第一

に心掛可申筈之處追々本業を忘れ手近にて高利を貪り候手段のみ相考へ弊風増長いたし候段甚如何之儀と奉存候一体御產物多く其上大坂へは近く通商至極便利宜御國に乍住先年より拔群之金持町人出來不申儀は全く御家中貯等にて乍居ヶ成渡世出來候付產物仕出候等手廣に骨折不申他所を相手にいたし利德無量事を不存都て御家中の風を見習ひ不相應の奢侈に至り如何にも不束の儀と奉存候付右貯渡世相止候はゝ自然他所掛引等實の者の爲方にも相成往々全　御國益相增可申と奉存候何分他邦の金子を持込せ　御國內潤澤致候樣相成候はゝ上下の御爲と奉存候事

因て申上候當時藩之內肥後は武備も嚴重に有之殊に財用充實之上格別に節儉相守諸士之服拵も極麁物を相用ひ居候へとも武威相備り諸人感服仕候儀は素々小國と違ひ萬端世話振厚第一國用不足なく家中扶助行屆候付末々まて家事も相整ひ相應に備相立有之故の儀に可有之と奉存候御家中の儀も此度被　仰出付ては類て諸事充實の場に至り可申儀は勿論の事と奉存候へ共何卒熊本藩同樣質素にて士風厚く相成候樣仕度奉存候付ては御家中勝手向取直しの儀一と際厚御世振無御座候ては從來之風習急に御趣意之通御改正相立兼可申と奉存候折角斯迄御苦勞被爲在候處表のみの質素にて勝手向取直しの規矩相立兼候ては外樣小藩とは違ひ格別の御國柄に御座候處假に衣類目立候位質素に相成候儀に付他邦の者には勿論末々にて　上之御深慮を不辨者共は彼銀札の一條にて金拂底　上にも格別御配慮被遊候儀は能存居候折柄に付木綿服等にて嚴重の被仰出も約る處卿の銀札且は金拂底等に付一時爲御凌之趣意之樣心得違ひ候もの於有之は以の外恐入候儀に御座候付此度嚴重の被　仰出は全く近來の弊風御改正諸士を初め末々に至る迄勝手

取直し候樣との御趣意乍恐下々迄貫通仕候樣仕度奉存候事

銀札引換に付主法意見書

「文久二戌年正月廿三日森部市之丞より政府御右筆白井忠次郎へ提出之書面」

一銀札金相場之儀舊冬御改革被　仰出下々　御仁惠之御趣意末々迄難有狩追々諸物之直段も引下け候趣は御承知被爲在候通に御座候猶又銀札高を減し金相場も內證にて高直之取引致し不申樣との御趣意にて在町にて身元宜き者より薄利にて銀札御立用取計ひ御封印之儀も舊冬愚意も奉申上試候事に御座候右は御改革後戻り札之模樣且當時の人氣を以て猶熟考仕候處身元宜もの共大金を出し田宅を求め約る處幾年二三朱の利益ならては無之とも先一家督搢候心持にて安心の上出金いたし可申又は質渡世御家中賄其外商ひ向元廻しに致候ものは御國恩乍辨も愚昧之者に至り候ては人情兎角に高利には迷ひ易く薄利之御立用には多分の銀札差出候ものは進み兼ね可申候尤金相場の響きに不相成人氣にも拘り不申戻り札之防方出來候はゝ强て御立用の名目を以理解にも及ひ申間敷且引替方に付ても彼是糺し方六ヶ敷速に取計不申ては何の辨も無之者等心得違不束之儀申觸し人氣に障り候程も難計旁右引替振も上より强て不及御糺申出次第引替の策とも乍恐愚意左に奉申上候事

在町身元宜者へ申諭振

前書云々此度鴻池善右衛門へ銀札御融通の御藏元被　仰付他所取引等無據分は無滯引替させ候

事に候付ては其方共も　御國恩を辨へ引替御備金之内へ身分相應に差加金取計可申候尤此節出金には不及追て御用の節に差出可申候右は御立用金とは違ひ全く下々救合爲致候御趣意にて厚く御世話振に付猶更心得違ひ不申樣銘々力限り金高引受可申事

件之通りに候得共出金に付ては彼是失却も可有之付爲雜用差加へ引受金百兩に付年々金二兩或は三兩賦下け渡し可申候尤も御用之節々金子差出候はゝ其節々時相場を以代り銀札下け渡し可申候雜用金之儀は引受高に應し出金に不拘年々被下候事

右之通被　仰出口六郡一郡五千兩つゝ市中より二萬兩都合五萬金程引受させ在中は組々大庄屋幷村役人町方は大年寄幷町役人ともにて組を分け夫々掛り申付置小前より引替申出候節は右掛りの者にも奥書の書付差出させ申出次第速に引替遣し候はゝ右書付にて組々の戻り札高能相分り候付右戻り高を直樣引受人へ高割に取計ひ掛りのものより金子持參にて銀札を受取出候樣致させ候はゝ御手行も可宜右之通相成候はゝ小前の者一己之利欲に迷ひ不束之儀申立度々多分の引替申出候ても上より分て御糺には及ひ不申自然下にて倶吟味に制度いたし往々は引替方不申出互に上方相場を以て正路に取引致し正銀同樣の札遣ひに相成引替方御苦勞無御座候樣相成可申哉と奉存候事

下ケ紙に

本文之通相成候はゝ銀札方へ先繰に正金相廻り候付五萬兩の外に鴻池店へ御渡しの三萬金を別段引替賦御備に相成候はゝ戻り札丈けの御手當は十分に可有御座と愚考仕候得共可相成は今二三萬金も引受け出來候はゝ暮に至り上方へ御返金等之宛に繰込之節金子御買入取計には及ひ不

申至極の御都合と奉存候引受に付雑用被用被下金と引替歟に上方にて御立用此節鴻池店へ御預けの二萬金の利子と差引左之通りに御座候事

一金千九百五十両　二萬両月七朱半當年分利金

内

千両　五萬両引受の者へ百両に付年二両つゝ被下一ヶ年分

掛紙　千五百両　但年(二)[一本三]両つゝ被下候はゝ掛紙之通り

差引

九百五十両　掛りの大庄屋并大年寄共へ被下歟に相成り候事

掛紙

四百五十両

右之通

銀札高削減策に付田畑質所裏判賃可爲納仕法建議書

「是又森部市之丞より政府へ提出す原書年月を欠く前同様文久一二年間之事の由」

銀札御融通之儀に付受札等取計振愚意之趣先達て密に奉申上試候處正金銀を以て銀札に引替させの儀此程御料簡相濟候付人氣も宜敷趣にて追々金高御受申出候付頓て氣配も立直り引替方御手行

宜正金繰の御都合能く相成可申と乍恐於私共も難有奉存候乍去猶此上人氣の模様難計御座候付連々に銀札高御減の御主法も相立追ては兎も角一旦引上け切の御趣向をも下へ知らせ候はゝ猶更氣受も宜相成可申哉と愚考仕候右札高御減しに付ては在町にて身元宜きものより銀札を以て御立用取計御封印にて休札之儀も先達て申上候品も御座候得共此度受札致させ候上は右御立用の儀申付候て却て氣配に障り可申哉付ては引替戻り札の內を以て休札取計候より外に手段も有之間敷候得共右樣取計候はゝ休札代りの納金見當無御座候ては銀札方の事も難ひ申間敷と奉存候何れにも一時に金高の休札は出來兼ね可申付聊つゝ成とも年々別段御收納に可相成御廉を殖右納り金丈つゝ年々古札にて休札に取計ひ候樣仕候方と愚意仕候就夫在中にて是迄銘々所持之田畑差入相對を以銀子立用の節は都て本銀返し証文に取計來り候趣に御座候得とも右にては返濟相滯り候節兎角質流れ切之規矩相立兼銀主共及迷惑約る處出訴等に相成

下け紙　本文田畑之儀は町方の家質同樣の譯には可難參候へとも何と歟其筋へ差支に不相成樣唱候はゝ業に於て家質同樣の取締りに相成可申哉と奉存候尤是迄の筋を以て此節一時に改め候樣相成候ては若二重質等の筋有之間敷も難計程には參りかね可申候付向後之處は仕法の通りと申樣に相成候はゝ可然哉と奉存候事

上之御苦勞も不少事とも粗御座候よし既に三山方にても元兩替彌助より質物に差入させ御座候田畑の儀に付昨年來彼是入纏にて埒明不申御貸附方に於ても大に相難し罷在候事に御座候然處町方にては家質を以て銀子立用之節右証文へ町會所裏判取計ひ若相滯り候節は同所にて作略之上銀主

へ速に質所相渡し候趣に付是迄於町方は家質之儀に付在中程に入繼れ候儀は無之趣に及承候儀に御座候尤右裏判取計ひ候に付ては銀主人受取候利銀之内を以て判賃銀相納させ候趣に御座候間在中之儀も右之振合に相成候はゝ銀主共致安心猶更手廣に融通仕自然安利にて貸渡し候ものも出來却て百姓共之爲方にも相成且は入繼之出訴等も寡く相成可申付ては　上の御苦勞も薄く相成兩全の儀と奉存候右樣相成候はゝ當時一郡より凡二千貫目つゝの借貸有之と見て口六郡にて一萬二千貫目に相成此判賃一朱方相納させ候はゝ自分二百二十貫つゝ可相納見詰に御座候間右判賃丈けつゝ年々右札にて休札且裁切等に相成候ては如何可有御座候哉判賃壹朱かた納めさせ候迚別段借用人の痛みに相成候譯には無御座銀主へ納り候利分之内より相納めさせ候事に御座候是迄之通り質所今一息不締りにては高利ならては融通も附兼候處　上より御取締り被成下候付ては自然安利にて貸出し可申候付却て下の爲にも相成可申と奉存候

下ヶ紙

本文一ヶ年に百二十貫目程之減札にては果敢取不申候付在町共他所取引不致金廻り無之受札難出來商賣いたし候ものともの內身元宜ものも冥加を辨へ受札代り利足年三朱位にて銀札を以て御立用申出候樣相成候はゝ右百二十貫目を利拂賦に取計ひ候得は五萬兩餘の御立用相整右之分休札に相成候見詰に御座候事

右之通相成候はゝ兼て在中百姓之身元厚薄も相分り御都合に相成候品も可有御座尤一体に裏判取計ひ候譯には無之銀主之心任せに致させ是迄の振合にて貸附いたし候ものは其通りの事に付强て

人氣にも障り申間敷と奉存候乍併業に至り差支の程も難計御座候得とも先つ内々其筋へ申合試候樣可仕哉と奉存候此段各思召迄一應審に奉申上置候事

森嶋市之丞は十四歲の時より銀札方へ出仕藩札の事には實地經驗習熟故に機會に當ては紙幣增發の弊を矯め壹百四萬圓立用負債の根を斷て年々下附の利子金は御手持方を以し漸次紙幣裁斷十ケ年を出せ候て財政回復すへき根治策の見込の處此頃財政之儀は專ら練川三郎平擔當にて此策の如き隨分影響を來すの嫌ひあるにや爲に納られす遂に採用に至らさりしと云三郎平は鴻の池等の豪富に親密所謂御融通を得意としたるによるなるへし

一 國債

公儀より御拜借金調

寬文八年十一月十六日

一金拾萬兩御拜借　理由不詳　是歲四月より六月まて若山大旱あり

一右返納不詳　有德公寬永七年の[illegible]に先年よりの　公儀御拜借金三分一御返納さありて其餘記載なしさ雖も同　公の正德六年正月へ[一本ナシ]御金藏有高十四萬八百（八十）七兩餘米十一萬六千四百石云々さあるに依て察すれは幕府の負債な差置如此蓄積せらるへき道理なけれは既に完納の事なるへし」

享保十七子年十二月二日

一金貳萬兩御拜借　是歲紀勢御領分虫害にて田高三十一萬五千五百石餘の損亡あり當秋西國四國中國虫害にて未曾有の凶荒により幕府より萬石一同へ拜借被　仰出三十萬石以上は金二萬兩の割合にて來る寅年より五年賦上納さ被　仰出

「右返納の事記載不見と雖も蓋し預期の通り返納ありしなるへし」

安政五申年六月九日

一金三萬兩御拜借　御領分打續き損亡其上御物入差湊御勝手御差支に付

天明二寅年二月

一金二萬兩御拜借　是歳　種姫君樣御入輿に付御中屋敷へ御守殿御普請あり尤御拜借金は外御用の品有之の由とあり

「右兩口亦返納之事不見と雖も近世の調査に顯はれ無之故完納濟と察せらる」

天明六午年二月

一金（五）[一本三]萬兩御拜借　種姫君樣御入輿御緣組御手當に付てなり

「文化十酉年十月返納年延被　仰出
文政元寅年九月上納殘金四萬五千兩當年より五ヶ年間御差延」

文政七申年十二月殘金四萬五千兩弃捐被　仰出

寛政二戌年七月

一米五萬石御取替　於大坂五ヶ年間年々御取替　御勝手難澁に付てなり

「御取替の事故年々返納尚又先繰り取替下付の事なるへし別に返納の事見へす」

文政七申年十二月

一籾二萬俵御拜借　大坂御藏の分

近年度々御火災其上旱魃にて御入納減し御手（藏の）[一本ナシ]分差支御取替米御願の處本記の通被　仰出

但此時天明度御拜借殘金弃捐になる

文政十二丑年四月

一米五千俵御拜借　八丁堀御舂屋敷類焼御貯藏米燒失に付てなり　但御米次第返納の筈

同年八月

一金二萬兩年々御取替　御滯下濟に付五ヶ年の間相濟當年の御取替は此節後追案寅年春返納來寅年より四ヶ年の御取替金は春御渡に成且の歳の暮にいたり返納の筈

天保四巳年十月右御取替を當年切の由御文來午年より五ヶ年の間年々金壹萬兩つゝ御取替金相濟

「右三口返納濟切の筆記見へす然れとも安政二卯年十月調書に掲記なけれはいつれも其當座及ひ年限通り完納と察す
則元覺帳の内安政二卯年十月調によるゝ」

天保六未年

一金二萬兩御拜借　江戸赤坂御殿類燒に付

天保八酉年より弘化三午年まて十ヶ年に上納之筈

天保十三寅年より同十四卯年弘化三午年の三ヶ年上納差延嘉永元申年にて上納濟

天保九戌年十二月　「右同斷」

一金二萬兩つゝ御取替五ヶ年の間

以來五ヶ年毎に御願出御取替相濟嘉永七寅年年限に付同年十二月御願之上安政二卯年より同四巳年まて三ヶ年御取替相濟

同四巳年七月嘗又年賦御願三ヶ年御取替相濟

「以後記載不見然れとも元治元子年八月御立用之調の内　公邊御取替金二萬兩
元治元子年一ヶ年季置御取扱濟子暮御返納の筈とあれは引續き年々繼濟來りたるなるへし」

天保十亥年　「右同斷」

一金壹萬五千兩御拜借　天保十一子年より十ヶ年賦上納之筈

内

金七千五百兩　天保十一子年より弘化四未年まて八ヶ年の内天保十三寅同十四卯
弘化三午年三ヶ年上納差延に付五ヶ年分上納高

金四千五百兩　右七千五百兩上納の殘金十年浮置の儀嘉永三戌年御願の處同五子年より
五ヶ年賦上納に相濟則同年より安政元寅年まて三ヶ年賦上納高

殘て

金三千兩　安政二卯年同三辰年兩年に上納之筈

文久元酉年十月

一金三萬兩御拜借　文久二戌年より無利足十ヶ年賦上納

内

金六千兩　文久二戌年同三亥兩年分銀札方より相納

文久二戌年十二月

一郡代金二万五千兩　近時不時莫大の御物入差湊御繰合六ヶ敷再應御願に依て

文久三亥年正月

一郡代金壹万兩御拜借

慶應二寅年六月

一米三千俵御取替　征長御總督として藝州へ御出陣に付粮米月々二千石つゝ拜借か乃至
於大坂米壹萬石御渡し置相成候樣にと御申立之處本記之通り御取替相濟

「右之通口々返納既濟未濟之事記錄不連續にて今調査之材料なしと雖も最近慶應元丑年十月より同
二寅年九月まて一ヶ年の納拂大樣調には左之記入より無之然らは先前の分は既に完納其當時に係
るの殘額之に止りし事知るへし

金二萬四千兩　文久元酉年十月金三萬兩御拜借之殘金

金一萬七千五百兩　　郡代金返納殘り元金

金八千三百五十六兩　郡代金滯利分

合計金四萬九千八百五十六兩

之に慶應二年六月之御取替米三千俵を加へたるものを　幕府末年に對するの負債とす續ひて瓦解に歸したるなり」

御立用高
祠堂金預り敷金預り高

御　立　用　高

祠堂弁敷金預高

元治元子年八月再調　但銀方兩七十目積

一金貳拾二萬千四百四十七兩〆　　江戸 御立用

内

七千八百兩　　御廣敷

嘉永二酉年元壹萬兩利息年三朱の處同六丑年より無利足年々二百兩つゝ行濟外に趣意金五兩つゝ相渡し候筋子年へ殘元

六千兩　　御廣敷御封金之内

文久元酉年無利足元金居置

貳萬兩　　公邊御取替

元治元子年一ヶ年季継御取扱済子暮御返納之筈（六月取扱済廻る）

芝三山方

二萬四千兩

文久二戌暮二萬兩借用利足月七朱半同三亥年より五年賦返済筋子年へ殘元

貳千七百兩　　亥年分利足相渡す

六千兩　　同元下

江戸　御備金之内

二千五百兩〆

嘉永六丑年より元金居置利足月五朱

「右同年十一月より文久三亥十二月迄分利足渡る千五百六十二兩二分」

御勝手方別段

八千八百九十二兩

六千八百九十二兩　　安政二卯年より追々御立用高利足月五朱

「下げ紙に」

安政二卯年より追々御立用高月五朱利済

三千百二十二兩　　卯より文久三亥迄利足渡高

文久二戌年元金居置利足月三十兩壹歩
此八朱三分二厘餘に成

二千兩

「下げ紙に」

二百兩　　亥年分利足

御貸方

四千兩〆

二千兩　　嘉永七寅年元利足月五朱利済

「下け紙に」
千八十兩　　卯年より亥年まで九月分利足

二千兩　　文久元酉年元利右同斷

「下け紙に」
二百四十兩　　戌亥兩年分利足

三萬兩〆

郡代金

一萬兩　　文久三亥二月元利足六朱二分五厘亥より十年賦

二萬兩　　文久二戌年元利足右同斷亥年より來る申年まで十年賦

亥年返濟分一ヶ年追延りに相成候事

御勝手方融通講

(一本六)
(四)千六百兩〆

嘉永二酉年元一萬兩利足月五朱年賦割戻し筋同六丑年より元金居置當時利足年二朱

七百三十九兩　　酉年より丑年迄利拂

五千四百兩　　同元下高

千五百十一兩　　丑年より亥年迄利拂高

四百兩〆

御用部屋

嘉永三戌年六百兩當分御立用の內貳百兩元下殘本行之通丑年より元金居置利足年三朱

壹萬二千七百兩〆

江戸出稼幷出店持等より立用

嘉永六丑年より元金居置當時利足年三朱

八千兩　　郡代金

文久二戌年一萬兩同年より十年賦御返濟筋利足六朱二分五厘子年へ殘元

貳萬千四百三十兩　　芝三山方

文久元酉年三萬兩利足月七朱半同二戌年より七年賦返濟筋子年へ殘元

貳萬兩　　芝三山方

内

一萬五百兩　　亥暮納

九千五百兩　　五六七三ヶ月納

文久三亥冬新規御立用利足月七朱半子年より五年賦

貳萬五千兩　　郡代金　　利足月六朱二分五厘

内

一萬兩　　子十二月七日限り御返濟之筈

一萬五千兩　　子暮より十年賦

貳千八百兩　　（一本同上 右同）亥暮可相渡利分御借用増

文久四子年より五年賦返納の筈

貳萬四千兩　　公邊より御拜借

文久元酉年三萬兩同二戌より無利足十年賦戌亥兩年分銀札方より相納子年へ殘元

小以如高

一金十七萬三百十二兩一歩貳朱〆

内

七萬七千四百六十(三)[一本二]兩一歩貳朱　　三領幷御爲替御用立町人より御立用

嘉永六丑年より午年迄元金居置利足年貳朱午年より三朱

七千兩　　松坂新町　御仕入方

文久二戌年より元金十ヶ年居置利足年七朱

三萬四千三百五十兩　　松坂銀札方加入金之内

文久三亥暮御立用利足年七朱

三萬九千六百二十七兩二歩　　三領在町御爲替組等より

元治元子春御立用利足年五朱子暮より五年賦

千五百兩　　松坂銀札方加入金之内

元治元子三月元利足年七朱

追　入

壹萬兩　　返納振未決　　子四月　西村三郎右衛門

五千兩　　利足月六朱

五千兩　　利足月八朱

來丑年より十年賦返濟之儀掛合中

一金五十六萬八千五百五十七兩〆　　大坂京都

内

十五萬五千七十三兩　　上方御出入町人より御立用

嘉永五子年十二月元利足月五朱同六丑年より元金居置當時利足三朱

九千七百八十五兩　　講　金

天保十二丑年取(詰)(結カ)嘉永六丑年まて十三ヶ年の間割下け相止年賦調達無利足年々百貫目つゝ

下け渡子年へ殘元六百十五貫目(元高銀千六百十五貫目)

七百十四兩　　三山方

安政二卯年元金居置利足七朱

七千百四十三兩　　右同斷

安政元寅年より巳年まて四ヶ年元銀二千貫目居置利足三朱午年より八年賦文久三亥より月五

朱利に成子年へ殘元

五萬千四百二十八兩　　元御融通方

文久元酉年五千貫目同二戌年より七年賦利足月七朱半子年へ殘元

一萬八千五百七十一兩　　右同斷

文久元酉年元銀三千二百五十三貫九百十匁同年より五年賦利足月七朱半子年へ殘元千三百貫目

二十七萬五千二百兩　　大坂御出入町人

文久三亥冬當座御立用利足月七朱半子幕元利返濟之筈

八千五百兩　　　京都講金

天保十二丑年取結嘉永六丑年まて十二ヶ年割下け同七寅年より相止年賦調達無利足十六年賦
返濟

百四十三兩　　此銀十貫目　　伏見様より御預金

文久三亥年より當分預り置利足年八朱

三　萬　兩　　　大坂　町奉行所

文久三亥冬御借用御返濟振未決

本文借用の件に付ては岩橋轍輔森部市之兩人町奉行及與力（内山）[一本山内]彦次郎大須賀謙次郎等へ數度談判漸く調達したりといふ借用証の副紙存するあり事由の一般察知に足るへし

覺

一銀貳千三百九十九貫七百目金三萬兩代
　但壹兩に付　銀七十九匁九分九厘替

右は此度紀伊殿大坂表御守衛被　仰出候付過急用度銀爲御繰替當分借用申候處尤返納の儀は岩橋轍輔を以て及御談候通り相違無御座候依之右銀高證文を以て請取申處仍如件

紀伊殿勘定奉行

文久三亥年十月　　垣屋十郎兵衛

松平大隅守殿
有馬出雲守殿

鴻池幷外山より

一萬二千兩
文久四子春御立用利足月七朱半
小以如高

若山

一金貳十四萬四千六十四兩三歩二朱〆
内

御用部屋

貳千兩
嘉永六丑年貳千五百兩預寅年より年貳朱之利分積を以て五十兩つゝ五十年賦子年へ殘元

右同斷

百八十一兩
嘉永七寅年元金居置利足年二朱

御廣敷

千三百五十兩
嘉永三戌年元二千兩同年六十兩相渡同四亥より寅迄四ヶ年間三十兩つゝ相渡安政二卯より未迄五ヶ年の間七十兩つゝ相渡万延元申より三十兩つゝ尤無利足行濟子年へ殘元

御仕入方

千七百十四兩
安政二卯年六百貫目利足月七朱辰年より丑年まて十年賦子年へ殘元

一萬九千八十八兩　　右同斷

文久二戌年元千六百七十貫二百目利足月七朱半同三亥年より五年賦子年へ殘元千二百三十六貫百六十目

七萬兩　　右同斷

此銀五千八百六十貫四百目　但子年より五年賦返納之筈利足月七朱半

文久三亥御備金御仕入方にて政府御封印に相成候筋當時元方御金藏御立用に成る

三千九百二十九兩　　右同斷

前々より御立用相束六千七百八十七兩一歩二朱と一貫四百七十一匁三分七厘安政元寅年より年二朱積を以て元金行濟筋子年へ殘元

六百十七兩　　町奉行所

嘉永四亥年元六十貫目利足月五朱之株安政五午年より年三朱積り元金行濟子年へ殘元

千五百六十九兩　　賄方

安政六未年より文久元酉年迄文武場御普請御入用當亥年より五年賦返濟之筈　一分さ百九貫八百十五匁八分六厘

一萬八千六百四十四兩　　口六郡兩熊野在々より立用

嘉永二酉年利足月四朱十五年賦之處同六丑年より元金居置利足年三朱

元高六千八百九兩
二千三百二十貫九百四十二匁九分七厘

六千七百五十八兩三歩二朱　　若山町人

嘉永二酉年一萬二千兩利足月四朱十五年賦六丑年より元金居置利足年三朱

二百九十二兩　　右同斷

安政元子年元四百兩と千二百三十四貫四百三十二匁利足年五朱十年賦筋子年へ殘元

八百二十七兩　　口六郡兩熊野在々より立用

安政元子年元一萬五百五十一兩と千七百十一貫六百二十四匁一分六厘同年より十年賦利足五朱子年へ殘元

百二十八兩　　保田作之右衛門初五人より立用

文久二戌年元十五貫目利足年六朱同年より五年賦返濟子年へ殘元

千四百二十八兩　　銀札（一本所方）

安政二卯年御立用百貫目利足月三朱年々利濟

六千二百四十兩　　武備御手宛御下け金

嘉永六丑年元金居置利足月八朱

八千三百七兩　　銀札方

嘉永七寅年元金居置利足月三朱

八百兩　　右同斷

安政三辰年元金居置利足月三朱

千八百五十七兩　　右同斷

安政六未年元金居置利足年五朱
五百兩　　　　　　　　　　　　　　　德田鎌助
去る辰年より元金居置利足年三朱
壹萬兩　　　　　　　　　　　　　　　銀札方
文久三亥冬新き御立用七百七十貫目利足年五朱當分立用利濟
五百兩　　　　　　　　　　　　　　　寺社奉行所より預り金
文久四子年二月元利足年五朱
二萬二千七百六十三兩　　　　　　　　若山町人
外に
三千六百三十九兩　　　　　　　　　　永上
文久三亥冬新規御立用利足年五朱同四子より十年賦返濟之積
三萬五千兩　　　　　　　　　　　　　紀州在々
一萬二千七百二十八兩三歩
千八百九十七貫五百四十目
文久四子春新規御立用利足年四朱同年より十年賦返濟之積
三萬兩　　　　　　　　　　　　　　　御仕入方
文久三亥冬新き御立用銀二千四百三十六貫目利足月七朱半子より五年賦返納之筈
千兩　　　　　　　　　　　　　　　　若山 三山方

文久四子三月元七十貫目利足月七朱半子十一月限り元利返納の筈

合百二十萬四千三百八十一兩一歩

「此原書は文久三亥年六月の調査を翌元治元子年八月の現在に再調の草稿と察せらる故に亥年の原書へ毎項附箋を以て訂正しあり而して口に小以締高不喰合又　公儀拜借金郡代金之如きは錯誤ある如き觀あり蓋し未た精算を遂けさるものか暫く原書の儘にし妄に訂正を加へす」

祠堂金預り敷金預り高

一金七萬八千三百九十五兩三歩二朱　祠堂敷金高

内

貳萬千八百五兩二歩　紀勢寺社祠堂金幷永上金共

是は天明寛政の頃より追々預り且永上等いたし候筋年々利分相渡且利足代り被下も有之候筋尤最初は年七朱又は五朱六朱の殊も有之候處追々利分引下け當時五朱六朱のは無據筋聊ならて無之多分年三朱の利足下渡候事

五萬六千五百九拾兩一歩二朱　松坂御爲替組初上方御用達町人若山正米問屋等敷金

是は金米受拂御用相勤候ものとも爲敷金元方御金藏へ預り置候筋利足元年三朱當時貳朱

松坂引拂の節債主へ達書

廢藩置縣管轄に付松坂引拂の節御爲替組初債主へ達書

別紙の趣宜御取計有之度候也

壬申六月廿九日　　森部元權大屬

橋本彌七郎殿　金兒仙次郎殿　小宮柳三郎殿
松浦丈右衛門殿　小泉實藏殿　長野章次殿
佐々木政六殿　中村甚之亟殿　角谷三郎右衛門殿
堀内利右衛門殿　增田專藏殿　久留清義殿
加藤甚太郎殿　藤井市八殿　三谷悅之助殿
下里雄次郎殿　松坂元市長中

尙々乍御手數御廻達有之樣致度候以上

「外に西村三郎右衛門へも返達取計候事」

舊和歌山藩諸役所へ當市在より調達金弁講金等之預り筋共先般被　仰出に付悉皆於和歌山本廳に取纒夫々証劵寫等相添委詳大藏省へ御達に相成候趣は先達て相達候通りに有之候處尙又此節右寫を以度會縣へ打合相成候付ては此上消却振厚く取扱有之樣尤從前調達之節々返濟振（一本ナシ等）約定之廉々兼て取調書も有之事に候得共追々の事實無遺漏詳細和歌山縣へ篤と可申達候此段金主之面々へ各方より懇切に傳達有之度候此度當所出張引拂候付右之趣一應申達置候也

六月

元御爲替組
貳拾人組　へ口達

舊藩へ調達金之儀に付別紙之通り元鄕市長中へ相達候付傳達可有之候得共各方には從前格段被致盡力有之儀に付爲念申達候間此段宜領承有之度候也

六　月

朝廷より金札拜借

慶應四辰年六月十五日左之通金札拜借願會計局へ提出

此度金札御製造之上は列藩石高に應し內借被　仰付旨被　仰出之趣難有恭承候然る處紀伊中納言領內之儀山海場廣田畑荒地等多金米貸下にて物產仕出し爲相稼戶口相凌居候場所多分御座候得共兼々勝手難澁之上近年來臨時之入費夥敷必至切迫に至候付右產物仕込金米貸下け難行屆國民共追々難澁出願深心痛仕候付何卒此度　御沙汰の金札拜借被　仰付候樣仕度奉願候御取扱相濟候はゝ右遣ひ振之儀は御趣意厚相畏屹度爲取締返納之儀も御仕法通相納候樣可仕候尤御都合次第にて何卒少々つゝにても內借之儀宜御取扱ひ被成下候樣奉願候以上

紀伊中納言內

六月十五日

中島三郎右衞門

大橋左衞門

會計御役所

右は本年閏四月十九日金札製造十三ヶ年間通用被　仰出列藩石高に應し萬石に付一萬兩つゝ

拜借可被　仰付之旨太政官代より布告に依てなり御布告全文は同日の譜に詳なり

六月廿七日巳刻會計局より呼出に付久野丹波守小林文八大橋左衛門中島三郎右衛門印鑑持參出頭之處金札御拜借御願高之內三萬兩御貸下け被成候筈に付兩替丁元銀座會計司御用所へ罷出可承合旨被相達候付同日同所へ左衛門罷出候處楮幣御貸付掛玉置逸之亟面會左雛形之通り證文持參明廿八日五つ時比同所へ差出受取に罷出候樣申聞之

拜借仕金子之事

合金何萬兩也

但當辰年より來る辰年まて十三ヶ年の間毎暮一割つゝ上納之事

右は今般金札御製造に付列藩石高に應し萬石に金一萬兩宛拜借被　仰付候段奉敬承候然る處無據譯合も御座候に付急々御貸渡被成下候樣奉願上候處金札御都合に寄り未た諸藩へ御貸渡無之候得共無據譯合御聞屆之上此度金何萬兩引揚內借被　仰付難有奉請取候返納方の儀は御趣法通り無遲滯上納可仕候爲後日證文差上申候處仍如件

何の誰

留守居何の誰印

年號月日

用人何の誰印

家老何の誰印

金札方御役所

一慶應四辰年八月廿日金札拾萬兩拜借請願

先般奉願金札三萬兩拜借被　仰付國中產物仕込等爲相稼追々都合に相成誠以難有仕合奉存候就ては此上國產仕込之儀手廣く爲相勵候付此後金米とも取續貸下け仕度候間何卒此節金札拾萬兩拜借被　仰付被成下候樣奉願候尤當年は度々の暴雨にて國中水損も夥敷收納等も相減可申と深心配仕候年柄に付此上產物一入相稼窮とも淩方手當精々行屆申度奉存候間此段御垂憐被成下右拜借之儀宜御取扱被成下候樣仕度譯て奉願上候以上

紀伊中納言內

八月廿日

中嶋三郎右衛門

水野十太夫

會計御役所

一明治元辰年十月五日拜借之金札月割上納被　仰付

金札石高拜借御渡方遲速之違にて上納方均しからす候に付一ヶ年一割の算當を以拜借の月より月割にて每年十一月限上納可致候事

但十月後拜借の分は翌年正月廿日限上納可致候事

一年割上納之分兼て御布告の通會計官にて破札に相成候に付當辰年より府縣にをひて雛形の通印判押切上納可致候事

黑印　竪二寸五分

横一寸

年割上納　何　府藩縣

十月　行政官

一明治巳年正月十日金札石高割拜借之殘金悉皆御貸下け請願之處金六萬兩拜借相濟

此度中納言儀願之通被　仰出歸國仕候に付國政改革兵備充實乾度藩屏の職掌相立候樣可仕候然る處近來勝手不如意之上昨年は別ての凶作にて收納も多分減少仕領民とも救助の手當に心配仕居候程之儀に付前件改革に付ても兎角不如意に有之彼是焦慮仕候段申運越候事に御座候然處領內之儀は山海許多の國柄に付諸產物も相應有之右產物相開候はゝ果る利益可有御座見込に付開業爲仕可申と奉存候得とも是亦費用不少候に付大に相開候場合にも難立至苦心仕居候事に御座候右に付先達て被　仰出の石高割當金札拜借の內既に十三萬兩は拜借仕有之候得共尙殘金之分悉皆此節御貸下被成下候樣奉歎願候然候はゝ右を以兵備且國產開業續て領民共賑恤之道をも相立可申奉存候間此段可奉懇願旨中納言申付越候右無據情實何卒御洞察被成下願意通御聞濟被成下候樣仕度奉伏願候以上

正月廿日　德川中納言公用人

加地市之亟

會計御役所

右に付證書左之通

拜借仕金子之事

合金六萬兩也

但當巳年一割上納之内月割上納之分

當十一月限上納來午年より來る辰年迄十一ヶ年の間拜借高之一割宛毎年十一月限り

上納之事

右は今般金札御製造に付列藩石高に應し萬石に付金一萬兩宛御貸渡被成下候段被　仰渡候に付德川中納言知行高に相當る拜借高之内追々御貸渡相成候に付此度右の金高御貸渡し被成下難有奉請取候返納方の儀は御趣法之通無遲滯上納可仕候後日證文差上申候處依て如件

德川中納言内

公用人　加地市之亟

明治二年巳二月

同　中川審六郎

執政　加納平次右衞門

金札方御役所

一明治二巳年三月十九日金札石高割拜借殘金之内十萬兩拜借願出す

此度國政改革仕候付ては兵備充實乾度藩屏の職掌相立候樣可仕候然處兼々勝手不如意昨年は別て凶作にて收納等も減少仕內實困窮仕居候次第に御座候然處弊領之儀は山海許多の國柄に候得共產物等相應に有之右產物相開き追々盛に可仕と奉存候得とも是亦費用不少候付大に開業の場合にも難立至右に付先達て被　仰出之石高割當金札拜借の內既に十九萬兩は拜借仕有之候得共尙殘金之內此節十萬兩御貸下被成下候樣奉歎願候はヽ右を以兵備且國產開業尙又領民救助の道相立可申と奉存候間此段可懸願旨中納言申付越候右等無據情實何卒御洞察被成下願之通　御聞濟被成下候樣仕度奉伏願候以上

三月十九日

德川中納言公用人

井　關　孫　四　郞

津　田　眞　太　郞

會　計　御　役　所

一明治二巳年十月廿日金札拜借高取調書於東京大藏省へ出す

弊藩にて昨年來於西京拜借仕候金札之儀拜借之趣意幷年月等取調候樣御沙汰に付早速和歌山表へ申遣候所左之通に御座候旨申越候此段御屆申上候以上

十月廿日

和歌山藩公用人

堤　　正　　己

大藏省御役所

津田兵（彌一本齋）

一楮　幣　　三萬兩
　右石高御貸下筋昨辰六月廿八日拜借
一同　　三萬兩
　右同斷同年十月廿日拜借
一同　　七萬兩
　右同斷同年十二月二日拜借
一同　　六萬兩
　右同斷當巳二月十四日拜借
一同　　拾萬兩
　右は國產仕入宛當巳五月十五日一時に拜借
　　但右十萬兩は當十一月限上納之譯札共節差上有之候得共追て石高御貸下金へ差繼御取計被成下候等共節會計官掛り御役人衆被仰聞御座候事
右之通御座候以上

外國債

一明治二巳年三月十一日左之通被　仰出

諸官府藩縣共外國より諸品代金拂殘幷借入候金高拂返濟方期限等早々取調來三月中外國官へ可屆出事

二　月　　　　行　政　官

右に付翌明治三午年七月廿二日辨官傳達所へ左之通り屆書差出す

但文中去月四日御屆申上云々と有之屆書欠失故に此他尙外國債の有無詳かならす

於當藩外國人より借財約定之始末去月四日御屆申上候內荷蘭トレーデン組合ボーデイン商社へ負債の入質して所持之バハマ艦同社へ引渡御座候處右負債償却相濟候付今般請戻し申候依之御屆申上候以上

庚午七月廿二日

猶以右バハマ艦請戻し後於大坂表左之者共へ賣拂申候以上

大坂新難波西之町　紀伊國屋萬藏

同江戸堀二丁目　麥屋卯兵衛

右當藩所持之外國形船艦之內明光丸（原名バハマ）都合により兵庫縣免許を以去辰七月より荷蘭トレーデン組合ボーデイン商社へ負債之入質して同社へ引渡有之候處右負債償却相濟候付今般請戻し於大坂表左之者共へ賣拂申候依之御屆申上候　本文之趣兵部省へも屆候事

名前前の通

庚午七月廿二日

外務省御役所

廢藩置縣に付勢州三領版籍他縣へ引渡書

廢藩置縣に付元勢州三領版藉安濃津渡會兩縣へ引渡書

目録

伊勢國 奄藝郡 三重郡 川曲郡 の内四十三ヶ村

一従舊幕府舊領主へ引渡郷帳寫　一冊

但本紙は度會縣へ引渡し候

外に撿地帳　七十冊

一郷村帳　一冊

一御高札場ヶ所書　一冊

一官（一本林）（村）帳　一冊

（小物成
正税外收納物方法
糠藁郷役米掛り高）　三冊

一人口戸數及社寺調帳　三冊

但舊官員幷士族卒姓名録一冊添

一鍬先等荒地調帳　一冊

一正税免帳　一冊

一穀倉ヶ所書　一冊

但社倉積置金貸下調帳一冊添

一官　舎　一冊

但圖面并附属雑具内譯帳一冊添

一諸帳面類

但内譯帳一冊添

造酒人
質屋調帳　三冊
船　数

一獄　舎　壹ヶ所

但圖面添

一囚　徒　三　人

但囚徒并番人名簿一冊添

右者當縣管轄之内此度其縣管轄被　仰出候付引渡候事

明治五年壬申二月　元和歌山縣 □

安濃津縣

目録

飯高郡
一志郡
飯野郡　の内四百三十ヶ村
度會郡
多氣郡

一従舊幕府舊領主へ引渡郷帳　一冊
　但右之内奄藝郡三重郡川曲郡分寫を以て安濃津縣へ引渡し候
外に撿地帳　八百五十二冊
一郷村帳　一冊
一御高札場ヶ所書　一冊
一官林帳　一冊
一人口戸數及社寺調書　十七冊
　但舊官員幷士族卒姓名録二冊添
小物成
正税外收納物方法調帳　三冊
糠藁郷役米掛高

一鍬先等荒地調帳

一養水池所調帳
　但普請所附器械帳添　二　冊

一正税免帳

一穀倉ヶ所書
　但社倉積囲調帳一冊添　一　冊

一出張所
　但圖面并附屬雜具内譯帳二冊添　一ヶ所

一諸帳面類　下げ紙　本書帳面之内未貢租等納方明細帳并右に屬する書類取揃兼候に付右取揃次第御渡可申筈に付此度は御渡不申候事
　但内譯帳一冊添

一官舎
　但圖面并軒別内譯帳五冊添　三十三ヶ所

一郷學所
　但圖面并書籍目錄等三冊積金預證券一通帳面共添　二ヶ所

一元管轄地之内勢州通用楮幣目錄
　但會所圖面并附屬器械内譯帳等四冊添　一　通

一鹽漬植桑箇所圖面并器械内譯帳　二　冊

造酒人
質屋調帳
冊數　三冊
一徒刑所（番人居所付）　四ヶ所
但圖面添
徒罪人　十九人
徒場入の者　一人
但徒罪人并番人名簿品書帳一冊添
獄舍　三ヶ所
囚徒（外に禁獄入女一人）　三十五人
牢番人總廻居所　三ヶ所
但圖面三枚并囚徒及番人總廻名簿二冊添
一馬　貳疋
但青毛
右者當縣管轄之内此度其縣管轄被　仰出候付伊勢國分引渡候也
明治五年壬申四月四日　元和歌山縣
度會縣

「右安濃津へ引渡目錄には壬申二月とあれ共引渡の日段不判然なり恐らくは度會縣へ引渡と同時ならんか且つ其比に三重縣と改稱せし時の如くにも見ゆ度會縣へは四月四日元權大屬森部好謙より此目錄を以て土地人民共引渡を了せり

一和歌山藩より和歌山縣へ引渡目錄も同樣之れありしならんか今其詳なるを知りかたし」

右土地人民引渡は權大屬森部好謙一切擔任調査之上毫も支障なく兩縣への引渡しを結了したるなり好謙は御持弓同心安右衛門の長男始め市之丞と稱し後安右衛門と改む幼弱より若山銀札方に出務同手代となり後熊野三山貸付方手代に轉し江戸に在勤遂に同頭取に進み文久元年六月より御勘定所へ勤務後同御帳手方となり征長御出陣に從軍廣嶋に在て三軍輜重の大局に當り管理功を奏す慶應三年二月より松坂へ在勤續て御勘定組頭兼鉄之間席並松坂民政判局事となり後和歌山藩少屬を經明治四年權大屬に任したり好謙實直才幹あり少壯より常に經理之職に熟するを以四方に奔走財政之事に執掌官と重叢なし夫れ國家多事財政困難に當ては適切其痛苦を感するは百司中會計吏に積る者なし若山に在て僚屬之しからす責任亦分るゝ所あり好謙單獨勢州に在て國初以來藩治の大變役に遭遇す抑勢地は他領と犬牙素軋轢の內情なきに非りしも二百七十年の久しき制御自然の風をなし千歲不動と上下固執のもの一朝舉て他へ讓與に際會人心頓に疑懼浮說百出屬官小吏は朝夕を安んせす所謂逆足となれり元より他へ關する引渡し飽まて緻密精確を要すれは調査數閱月容易に成らす他より從來如何なる壓制横政い稍るありしや猜疑苟も釁隙を發き難詰を試んと注目動もすれは枝梧逕庭を生せんとす殊に藩札發行高の如きは實に不可止の勢あつて殆と亂痲の狀を呈

す好謙飽迄責を一に負ひ誠意交陟明説快辨既に死を決せんとせしも一ならすと云ふ如此影響忽ち藩札の上に布及訛傳恂々て引替請求之者四方雲集瞬間山をなして一大恐慌を湧出す好謙奮然機敏の一奇軸を運らし二三の豪商と密議突差迅速悉く正金と引替を完了し爲めに民情復舊急激忘れたる如し又松坂は三井小津長谷川長井を初め土豪多く從來御爲替組と稱し數十人口の俸米を給して銀札之事を負擔せしむ

松坂之近國之聲價を占むるは畢竟此の組織によるなり且つ往古以來各自國用に資給の金額實に數巨萬加之頻年臨時之立用多端なり故に之に關する吏は爲に懇到親密苟も其歡心を失はさらんを務る恰も貴重の華主の如し然るを忽然新舊交替昨日に反して今日は其義務を他へ讓付するの逆境に立つ固より制度之大革に因ると雖も好謙之衷情夫れ如何そや唯君恩と公誼を骨髓に銘し熱涙を呑んて至誠愷切の利刀能く債主之盤根を切斷快然其説諭に心服せしむ其結末即ち下文に掲くる如し於是舊藩政中の大段を判然全結以て兩縣引渡を畢り永く遺算なからしめしは偏に好謙の力と云ふへし同く引渡といへとも若山に在ては其驪其土地固より官吏は多くは舊藩士繼續勢州とは主客情勢同日之論に非す而して是等の情況人知らす空々度外に付するなきに非す財政編纂の末段爰に一言せさるへからさる也

南紀德川史巻之百十一

臣　堀　内　信　編

財政第四

二歩口

緒言

二歩口の事諸税の部に粗ほ解說の如く税目小物成の內にして歳入の一分也紀勢封內津々浦々河流の要所に役所を置き河海によつて輸出入の物品を檢査し之に對する二歩の代銀を税納せしむ故に御口銀或は口前と通稱せり此制遠く慶安の昔に創り紀律嚴格國の內外を問はす物の公私を論せす苟も輸出入に關する物は必す徴收し犯す者は其物品を沒收す御勘定奉行の下に二歩口奉行あつて一切を統理し役人手代と稱する小吏各所に駐在監査徴收に服事し收納之銀兩は皆國庫に致す其額異同あるも大凡一歳金貳萬八九千兩より四萬餘兩に及ふ遺存之筆錄不完全なれは隔靴の感を免れされ其甲乙關連のものを摘錄し以て大概の考察に備ふ

一記中口銀定額は多くは御仕入方大帳に據る御仕入方は官設と雖も二歩口役所の定法に從ひ一般と同しく納税す故に其筆記幸ひに存せる也然れ共遺漏なきを保しかたし

一二歩口役所扣なるものは恐らく手代輩の手簿なるへし各役所の所在地物品の種類船舶漁具の數口銀の定格乃至受負の大略等見るに足るへし受負とは地方財産を有する者を撰み物品出入の多寡平

均の豫額を定め以て口銀を負擔稅納せしめ荷主等より直接徵收せさるをいふ是等之地には役所を設けさる也

一紀州封內二步口役所の數一百二三十ヶ所役人手代亦數百人皆薄給の輕輩也二百年來之慣行に馴致肯吏數年之練熟により百般之物品々質箇數價格鑑定の識別等一目厘毛を誤らすして荷主舟子敢て眩惑し得す又能く國法たるに服從せしといふ

文化十二亥年十月御側方へ進達

二步口役所　元役所は若山丸之內評定所內

一貳步口御取立之儀は慶安年中紀勢元高新田等御改
公儀へ御達之節二步口取立方も御達有之既に　公儀御用物にても町人百姓取次を以仕出候節は
公儀御勘定奉行衆より元斷有之口銀定之通取立の儀御入國より御定法に候處佐八御仕入天野川右三役所仕出し材木板小割物炭其外品々口銀之儀夫々定法之通二步口取立之處寶永七寅年御仕入方より出候色物其所にて船手へ直賣之儀は口銀半分は船手より取立候樣是迄船手より口銀出し來候分は壹分口に取立申候

一勢州佐八役所より仕出し候材木類宮川へ出候筋無口にて有之是は先年下初の節口銀定之通出候筈相成候所其節は色々上品物も多出此類直段格別積難く其上江戶幷所々へ手を重圍置候に付時々口銀出し難き出を以二步口所へ取立之儀相止右役所御勘定表にて口銀顯し候趣に候處其後寶永五巳

二歩口役人品附申立極

より又々口銀二歩口ハ取立候筈相成候處山支配より色々相違候品も有之無口に相成御座候右三役所之儀賣買差引を以御德用御勘定仕上候儀に付御國法之口銀半減或は無口等にて御勘定相立候ては班々にて全く御德用も相見不申候に付右三役所口銀先規之通り定法直段も商高同樣相改口銀取立不申候ては双方御勘定御改正にも差支年中御取立方之規矩も相見不申候に付自今三役所仕出候材木板小割物炭其外品々口銀の儀二歩口より直に取立に致させ可申と奉存候依之御談申達候

一二歩口役人品附申立極　御勘定所帳

文化之度申極此甚合を以勤人共精功取調申立候事

給銀六十目一人半扶持　年數に應し給扶持其儀並役人代数に申付

並役人代数　同斷給扶持其儀並役人代に申付

並役人代　同斷給銀二十目增並役人に申付

並役人　年數に應し給銀二十目相增役人に申付

役人　同斷給銀二十目增並手代に申付

並手代　同斷給銀三十目增手代に申付

手代　帳場勤之筋は年數に應し給銀三十目增に相成

金役勤之筋は年數に應し都而給銀四十目增に相成金役勤にて給銀二百目已上之筋又は大役所にて精勤之者等浦廻り手代格に申付尤其節半扶持相成二

手代　人扶持に被成下

金役之外平手代にても四五十年も相勤候者は半扶持相增貳人扶持に申立取
扱之筋も夫是有之
浦廻り手代格より　都て給銀五十目又は御切米一石增被　成下尤金役之筋等
浦廻り手代格金役
給銀二百五十目又は又は三百目にて二人扶持被下有之筋　御切米五石
又は三百目よりは六石に被成候事

文政九戌年八月極　同上

一貳步口勤人實に病氣に付難相勤旨願出悴等入替之儀願出候節は二十年已上相勤候者は給銀附に相
調御達申上候事

口　銀

安永元辰五月

一有田蜜柑方口銀若山直納之筈申付候處小前とも難澁候に付江戸納に被成下候樣願出候左候はゝ極
月廿日限江戸御金藏へ相納候樣申付候處去暮不相納　上を欺候姿に付急度御咎被成可然との事

天明三卯二月初　御仕入方大帳

一小色川役所口銀定新宮領高芝口前所改

板類尺〆壹枚に付八厘　九の割
小割物一束に付一分五厘　九の割
炭壹俵に付代貳分　九の割

一周參見役所
板類尺〆一枚に付八厘替　九の割
小割物一束に付壹分五厘替　右同
炭壹俵代二分替
右寛政元酉十二月小野藤右衞門殿證文

天明五巳年十一月極　同上
所々御仕入方仕出色物御口銀定

一高津尾役所　炭一俵に付代六分替九の割判代百目に五分
一大野役所　右同斷六分元代九の割判代百目に八分
一江住役所　炭一俵に付代三分替九の割判代百目に八分
一高川原役所　炭一俵に付代四分替九の割判代百目に八分
一宮戸役所　炭一俵に付七分五厘替小俵一俵代四分替四の割判代百目に六分
右は當分本宮役所仕出幷に口銀月々右之通相納候等

寛政四子年七月丹羽傳四郎殿證文　同上

一本宮役所

炭一俵に付代五分五厘替　　板尺〆一枚代貳分替

貫大小二丁掛　一丁代一分二厘替　　松二寸角一本代一分替

檜縄柿杉　一把代一分八厘替

右何れも八の割判代百目に六分

一同所

材木二間百材に付八の割代壹匁

伊丹丸一丸に付九の割代二匁四分三厘

一木本役所

板百間に付代百四十七匁　　大貫百丁代二十二匁

中貫百丁代十九匁　　小貫百丁代十一匁九の割判代

一寺谷役所

炭一俵に付代三分五厘替　　板間に付代(四)[一本一]匁四分七厘替九の割判代百目に六分五厘つゝ

一新鹿役所

炭一俵代三分五厘替　　板尺一枚代二分五厘替

貫大中一丁代三分二厘五毛替　　小貫一丁代一分五厘替九の割判代百目に付六(分)[一本匁]つゝ

一尾鷲役所

炭一俵代三分替　　板一間に付代一匁五厘替九の割判代

外に杉丸皮共口銀見付九の割

寛政五丑年五月佐野彦太夫殿證文 同上

伊丹一丸御口銀二分五厘見付口

一長島役所

炭一俵代五分五厘替　　小炭一俵代八厘替

貳村千把代三十日替　　椎木千把代十二匁替九の割

一江住役所

板類尺〆一枚に付八厘替　　炭一俵に付三分替

貫小割物類一束に付一分五厘替　　苫百枚に付五匁六分六厘替九の割判代

寛政六寅年二月佐野彦太夫殿證文 同上

一直砂役所仕出物御口銀定

炭一俵代二分替　　板尺〆一枚に付八厘替

小割物一束に付一分五厘替九の割

文化十二亥年四月三日貳歩口奉行より申來る　同上

口熊野在々難澁所御仕入方より取計候場所々々左之通口銀相納候等

一椎　皮　十貫目に付　　口銀三分六厘五毛
一桃梅皮　十貫目に付　　口銀六分六厘七毛
一抹香皮　十貫目に付　　口銀二分九毛
一紙　草　十貫目に付　　口銀一匁三分三厘四毛
一杉　皮　十貫目に付　　口銀一分四厘三毛
一苫　　　百枚に付　　口銀一匁四分二厘三毛
一檜　繩　十　把　　口銀三分五厘六毛
一茶　　　一本に付　　口銀五分三厘四毛
一しゆろ皮　百枚に付　　口銀一分七厘八毛
一蜜　　　一貫目に付　　口銀八分
一諸木流材木　百材に付　　口銀一分七厘八毛
一杉丸太　一本に付　　口銀六厘一毛
一掛木　　十貫目に付　　口銀五厘四毛

文化十二亥年八月

一天野川役所仕出し村木丸太御口銀定法左之通　同上

諸木角物貳間百（才）一本附に付壹匁八の割壹本此口銀一分二厘五毛

諸丸太山代銀一分八の割一本此口銀一厘二毛五糸

伊丹一丸に付山代銀二匁四分三厘九の割　壹丸此口銀二分七厘

下け紙

吉野分仕出し候丸太十本床以上は角物割合を以御口銀相納候様拾本床以下は天野川定之通

相納候様致度伊丹御口銀之儀者本文之通相納候様致度候

文化十三子年七月六日　同上

一南熊野在々椎茸仕出し御仕入方にて取計に付口銀納定

椎茸一斗此山元代銀二匁五分但九の割

文政五午年六月廿五日　同上

一櫓木他御仕出し御口銀納二歩口役所承合候所左之通

一櫓木

壹丈より一丈三尺迄　賣方口銀一匁取　御仕出し口銀三分六厘取

壹丈四尺より五尺迄　賣方口銀一匁三分五厘取　御仕出し同四分八厘取

壹丈五尺余より六尺迄　賣方口銀一匁八分取　御仕出し同六分四厘取

壹丈七尺より二丈迄　賣方口銀四匁取　御仕出し壹匁四分三厘取

一漁船梶　賣方口銀二匁取　御仕出し同七分二厘取

一廻船梶は見附取賣方口銀高へ法三五五四七を掛けて御仕出口銀取立候事

右者口熊野古座川丈けに限り御仕入方へ仕出し之儀者都て難澁所之儀に付分けて御達も有之候故

此通り相極候事に御座候以上

文政九戌正月廿七日　同上

一此度印南御仕入方にて炭仕出し方取計候に付御口銀納方之儀左之通相極候事

一炭六貫目俵　六分かへ　九の割　一同五貫目俵　五分かへ　九の割

天保十三寅年六月十二日　同上

一新鹿御仕入方新規仕出し伊丹底共口銀左之通り納候筈

伊丹壹丸に付新規仕出し　元代二匁四分三厘　九の割納

底壹束に付　先年仕出し候跡方通り　元代五分四厘　九の割納

弘化元辰年十二月廿二日　同上

一松山方仕出し木口銀取立方向後左之通之筈
松山方御留山受負仕出筋は貳歩口極之口銀受負之者より取立候筈
一松山方御留山直仕出之内御用木に相成候分は勿論無口之筈
一御用之外殘木等御拂に相成候分は在々御仕入方定口銀松山方より相納候筈
此時松山方は御仕入持なり

弘化四未年十二月十二日　同上
一四番組在々より御仕入方仕出し筋
松煙一俵二〆目入　此口銀五分八厘取
右之通極候旨二歩口方掛合同所より日置田邊口前所へ通達す

嘉永四亥年　同上
一御趣意之品有之砦出番所口前之儀向後御仕入方へ引受役人爲詰萬端行屆取計候筈
是迄一ヶ年上納高　銀四百十三貫目也

嘉永五子年五月　同上
一寺谷大俣御仕入方役所を二歩口役所へ引渡に付是迄御仕入方にて仕込貸等銀高左之通御仕入方へ

受取

銀百四十八貫四百六十七匁一厘　寺谷分

同八貫六百九十六匁四分九厘　大俣分

嘉永五子年十二月御仕入方より二歩口奉行へ　同上

一口熊野高川原へ出候炭和深浦へ持出候はゝ村方稼方相増辨利可相成旨依願同所へ持出させ候筈就ては口銀之儀高川原同様相納させ候様可被申付事

浦方へ出候炭に限り高川原並口銀に取計炭之外御仕出之色物之儀は定法通り納りに相成候様仕度事

嘉永六丑年十月　同上

一日高郡三尾御仕入方より勢州佐八御材木所に積廻させ之紙草口銀先年口熊野極之趣を以左之通り納させ候筈二歩口奉行へ掛合相濟

一紙　草　拾貫目に付　口銀一匁三分三厘四毛

嘉永七寅年五月二日二歩口奉行へ　同上

一口熊野和深御仕入方仕出し炭場所に寄江田浦へ持出候はゝ村方稼相増辨利可相成旨依頼同所へも

水野土佐守安藤飛騨守都て手前仕置被仰付候へ共二分口は是迄之通

紀の川筋材木二歩口銀廢止被仰出右に付願二件

持出させ候筈就ては口銀之儀和深浦同様相納させ候筈宜可取計事

和深御仕入方　炭一俵に付代四分　九の割百目に八分

一安政二卯年正月水野土佐守安藤飛騨守の浮置上け米を被免城付に不限都て村々手前限り仕置取計諸物成運上等所務可仕旨被　仰付候節二歩口は是迄之通りと被　仰付

一同年八月安藤飛騨守田邊領浦々口銀之儀是迄五厘減にて受負之處內存之品に付向後五分通にて受負被　仰付

紀の川筋材木貳歩口銀之儀維新後廢止被　仰出に付願

一明治二巳年九月左之通願立候處下ヶ紙之通り指令有之當藩支配內於岩手村紀の川筋通行之材木口銀從來收納仕來り御座候處右は廢止可致候樣被　仰出之趣奉畏候則此節より廢止可仕候然る處元來口銀は敢て材木之稅と申儀にも無之當藩支配川筋十三里間兩岸の堤防幷普請等の爲めに收納仕候儀に御座候間尤夫迚も廢止被　仰出候上は決て異議有之間敷は勿論に御座候得共去る辰年古來未曾有の大洪水にて堤防川底多分之破損所有之一時修覆難出來候得共川筋他領にも入組有之候事に付口銀引當にて國內人民より借入金等致し漸く普請落成仕候樣之次第柄に御座候間右口銀明年一ヶ年中是迄の通收納仕度候間此段御許容被成下度奉願候以上

九　月　　和歌山藩

大坂

民部省御中

下ヶ紙

本文難承屆儀に候得共事實難澁之趣にも相聞候間當巳年一年收納可致候事

十月　　民部省

一同年十二月八日左之通於東京再願之同月廿七日上ヶ紙之通指令有之

當藩紀の川筋通行材木岩手村にて從來稅金收納仕來り候處向後廢止可致旨被　仰出之趣奉畏候元來右稅金之儀は川筋通行に因り妄りに致收納候稅には決て無御座木材川下けに付ては用水堰の害も不少且堤防初川底破損營繕等の爲に取來候儀に付是迄の通り　御許容奉願度差當り年延之儀大坂府出張之民部省へ出願仕候處當巳一ヶ年收納可致旨御聞濟被成下難有奉存尙又奉願候も恐入候得共前顯の通り二百年以來仕來候儀に有之且各藩內にも水利或は港に寄り他方之船稅取立候儀も有之哉の趣に付ては向後右樣之稅金都て御廢止被　仰出候御儀に御座候はヽ敢て再願可仕筈無御座候得共同所に限り廢止可致との御儀に御座候はヽ既に今般藩內稅租悉く取調申出候中に相籠り有之筋にも御座候付矢張從前之通り居置候樣仕度此段可奉願旨本藩より申越候に付何卒願之通　御許容被成下候樣仕度奉懇願候以上

和歌山藩公用人

十二月八日　　堤　正己

井關孫四郎

民部省
御役所

上ヶ紙

書面伺之趣追て御取調可相成候に付御差圖有之迄從前之通於其藩取立可申事

巳十二月

二歩口役所扣

○雑賀崎　　庄屋　玉置六太夫

竈数　　二百六十軒餘

漁船　中高　四帖　網船　二艘

しばり　四帖　同

釣船　手繰　合百艘程

日々沖立人数凡四百人餘春の内四五十日の間魚嶋へしばり網に二百人程行八十八夜比より役所

四間に三間半補葺魚嶋行しばり一帖に十八匁五分四厘運上納

ム○田の浦　　庄屋　十藏

漁方手繰はかりなり網舟合二十艘但一艘に四人乗日々沖立人数百十二三人

家數　百五十軒餘　　役所　　四間半に三間(半)[一本アリ]瓦ふき

△○出　嶋

一出月判代　　百目に付八分

内

四分七厘　茶屋納　　三分七厘　役所納

一手繰の分は一日に二十文つゝ役所へあつく

一大網之方は仕入方へあつく

一しばり　七帖　　△地引　六帖　　△小網地引　十帖ほと

△手繰　三十三艘ほと　　△日々沖立二百三十八ほと　　△家數　二百二十軒ほと

△魚嶋行しばり　五帖　　右人數百九十八ほと

△魚嶋行株銀しばり一帖に付十八匁五分四厘つゝ相納

△他所より此浦へ諸魚持込賣立候由右に付四厘口取立候由右他所魚之申は日方邊浦にて口役相濟來候得(共)[一本は]當浦漁師共願に付二十七八年以前より初り候由右は當所商人多他浦之諸魚賣取稼不申候ては立行不申候由

但し賣場にて一割之口錢出し内四厘役所へ納壹厘浦方へ出し五厘問屋体之者へ納

○日方浦

△棕皮其外山方物此近在より出申候右は若山へ持出候へは口役も入不申に付其通可致筈候得共

口銀も軽く候得は此所にて賣買し舟積に成候事ゆへ諸色一分口取候由
△神文問屋日永屋兵七土佐や長七茶屋佐太郎問屋にて役所口役改之筈立合賣買致候由
△役所　貳間に四間瓦ふき也　△此所甚取立少き場所之事　勤人三人にも及間敷との事
△取立方難解事
△藤白に出張番所有之此所より打廻り口役等も有之候へは晝夜壹人つゝ相詰候由
宿ちん　二匁　灯油　三合つゝ

○冷水浦

一地引網　七帖
外に小網　九帖
一中高　一帖
網舟　二艘　手船　二艘
一かゝり網　一帖
一此所急度漁事に掛居者もなく作方或は小廻し舟等にも乗網方沖立之節は網持之方へ雇れ稼候事
一家數　百四軒程　一役所　貳間半に三間半瓦ふき

○塩津浦

一しばり　四帖　一中高　二帖

一地引大網　七帖　一手繰　八九帖

一敷網　村中持

右之通有之候得共漁事有之節計沖立いたし不漁之節は外之稼いたし日々幾人沖立致候とも難決場所にて候戸(一本坂)と申所家四五軒有之右は大方漁事に掛り居候へ共差ての漁も無之由

一山方も少々有之候へ共重に木柴計にて上方酒一ヶ月十二三樽つゝ參候是は御仕入方物に付運上一樽二匁つゝ取立御仕入方へ相納候よし

一みかん口銀一籠に付近國行四厘江戸廻り五厘

○大崎　受負

一受負人　田中又七

一當所之儀は山方一切無之漁事義も少候由地引網七帖有之手繰も有之候得共年中漁稼に掛り居候と申義にも無之釣舟等も仕入致候へ共爾々無之定銀に年中取立不足致候へ共其内にはほら漁有之候へは是は大漁之義に付夫のみ待居候由いわしも少々なり

一此所役所無之居宅にて取扱候

旅の漁舟參居其漁事當所にも賣立候に付一分口取立漸相凌候事

○下津浦　受負

一受負人　助左衛門

一役所　三間に三間　わらふき

一地引　十帖　　一中高　四帖

一しばり　二帖　　一手繰　三帖

一當所に作方を稼漁方は手薄毎日何人沖立致すこともなく漁事有之候節罷出其間〳〵に作方を働候事

一山方物は切木柴はせなど少々出申候

一方浦少々漁稼致候みかん之方重に造候由

一みかん方之義取立方定銀へ不足致し當浦方より相賄候由

○桝浦　受負

一受負人　丈右衛門

一地引いわし網六帖　はまち大あみ三帖　作間之稼に漁方相勤

一番所無之外より受負有之節に役所出來候由

○北湊　（田村[一本ナシ]へ壹里）

一四村山一ヶ年に四百目つゝ永々上納定口場所

内

三百二十匁　楠部又十郎より納　　五十五匁　山下源右衛門より納

二十五匁　二澤村より納

四村山之內　三浦城之助殿

分仕遣し人　（粟）（一本粟）生　新七
一　同　繁右衛門
一修理川山願濟見下け場所一歩口　庄屋　理助
一宇井谷村願濟子年より辰年迄五ヶ年之間初川にて銀二百五十目納其外無口撫木
一遠井山願濟一歩口亥年切　山保田組大庄屋　前嶋藤左衛門
仕出し二川村　源助
一小松彌助所持撫木二百拂に付銀五枚つゝ年々願濟其餘は右割合を以取立候筈
一役所　三間半に五間瓦ふき
一矢櫃役所出張一人つゝ四五ヶ月替り
一逢井浦　若左衛門へ預け
一高田浦　權八へ預け　（手繰三帖其外居浦）
一廣浦とも申す宮崎浦　善十郎へ預け
善十郎一軒屋にて居浦取立
一みかん口役改所冬計用る役所は疊敷別之所に立有之年貢地
○田村浦　栖原へ十八丁
一役所二間に三間瓦ふき年貢寺へ納但壹年に六匁

一地引あみ　二帖　　一しばり網　貳帖　　一はまち扣き網　三帖

一日近經取しくり貫網　三帖　　一はまち地引網　三帖

大樣日々五十人ほと沖立百姓も兼候に付先大樣之處なり

一山方物もみかん初諸色出る

〇栖原浦　　湯淺へ八丁

一役所　三間四方瓦ふき

一地引網貳帖　其外一切漁稼無之由みかんは少々出其餘山方物も無之

〇湯　淺　　廣へ十二丁廣尾へ壹里（一本考）(廣)尾より三尾川へ壹里

一役所四間に五間瓦ふき

一鹽藏壹ヶ所貳間に三間瓦ふき

一南村番所一間半に貳間瓦ふき

一廣役所四間に貳間半かわらふき

一（一本無）(廣)尾役所四間に貳間半わらふき

一地引二帖内壹帖は不遣

一大地引三帖　地引七帖

一みかん口六厘取之事

一魚貳分貳厘ざこいわし貳分旅魚賣り一分一厘

一觸番一人ふち七厘五毛つゝ遣す常雇

一初文問屋　　但二十目被下あり

一鹽切文問屋

一廣にて同

一沖廻り番舟貳百五十六日にて出來候由

一當所は諸品多き場所之うへ取扱之致しにくき所に付金方も人を撰候事

一(廣)[一本書]尾浦地引二帖　　しばり一帖　　山方も木柴少々出候事

〇三尾川浦　　受負　　衣奈へ二十五丁

一受負同村九郎兵衞同人居宅にて取扱浦方漁師無之山方計是以去々戌年困窮に付諸木伐盡し當時は柴計出候に付定銀ほと取立無之難儀之由窮村なり

〇衣奈浦　　戸津井へ十三丁

一役所四間に四間半茅ふき

一(網數大網)[一本しばり網](しはり共六)三帖　　たゝきはまち網九帖　　扣きほら網　一帖　　一地引小網九帖

一漁船都合三十六艘漁師人數三百人程但重に作方をも致す

内開

大網三帖　魬(はまち)網八帖　鰡網一帖　同小網一帖　漁舟三十六艘　漁師二百人程

旅稼開運上之義人計稼きに參候に付取立不申

一山方物木柴出候事
一ざこいわし等は二歩口其外大魚は二歩貳厘口
　○戸津井
　○小　引　　　　　　　　　　戸津井より小引へ八丁
一受負人　　　　　　　　　　　三　右　衛　門
一此所双方共小き處にて地引網等は相成不申候漁師南浦にて六十五人程
一旅より居浦に參居候へは一艘に付八匁つゝ取立候山擔口は一分七厘口に取立候由
一魚類何によらす二分二厘口に取立候よし
一戸津井役所二間に二間半わらふき
一家數三十軒程
一小引には役所無之
一鰮網一帖　一小網二帖　一扣網二帖　一舟四艘　一かけ網貳艘 網は數々
一小引にて(鰮)網一帖　一扣き網二帖半　一小網二帖　一かけ網二艘 網は數々
一南浦家數四十七軒
　○大　引　　　　　　　　　　神谷へ五丁
一受負人　　　　　　　　　　　榮　次　郎
　但當所居住

一鮋網三帖　　　ほら網二帖　　　一はまち網　十八帖　　一夜引網　一帖

一立網　四艘張　二帖

一家數七十五軒不殘沖立もいたし作方之稼山方も致出候高百八十三石餘

一役所三間に二間半年貢地

一手繰一帖貳艘運上一ヶ月二十三匁つゝ

一釣一艘七匁二分

一鹽口定法は一分七厘取之處此度受負となり候に付當所給鹽定口にして二十五匁致くれと申義も（一本のめ）有之候事

一磯草も少々出候事

一神谷當所取立同樣に心得候得共當所之方は山方も少し多先當所宜き方に有之由

一内聞漁舟三十艘釣舟八艘漁師百四五十人境より居浦三十艘ほと

〇神谷　　　　　　受負

一いわし網　二帖　　一ほら網　一帖　　一小網　二帖　　一立網五六はい　　四艘張二帖

一漁舟　二十三艘　　一漁師　四十人ほと

一居浦前に同し

一家數四十軒程高七十石餘大引同樣之稼方

一役所三間半に貳間半死ふき

一泉州境より矢櫃へ居浦に參候處近年不漁に付當所居浦致候由右者あみ四帖有之一帖二十五〔匁〕つゝ致運上都合百目榮次郎別段に納候事

一吹井浦附糸谷浦先年漁方無之候節受負相渡候處當時はほら網一帖鯔網一帖出來に付臨時口銀榮次郎より取立別段に相納候事

○吹　井

一役所無之受負藤之助居勤に致候由此處は木柴出候斗にて浦方物は無之候此所之附浦に糸谷浦有之前に記しあり

○網　代　　附浦横須　阿戸柏

一受負

一大中鯔網　五帖　一ほら網　一帖　一四艘張　五帖　一小網　八帖　八駄共云

一釣舟もあり　一まかせこのしろ大網　一帖

一舟數　四十艘　一漁師　七十人程

一家數百軒程

一神文問屋板名惣兵衞壚問屋之事

一生魚問屋も初文に付大坂屋部次右衞門と申候事

一役所四間に五間わらふき

一楊梅も小舟二三艘出る

一阿戸いわし網一帖　一番所一間半四方

一柏　あみなし番所ホキ（本のまゝ）糖や柴口計百四十目に預け

一いとや四十目に預け有之木柴斗

一横濱には漁師無之山方木柴少々出候事

○方杭浦　　受負

一役所なし堀元右衛門方にて勤

一村高十六石餘家數三十二軒

一地引一帖　一夜引二帖　一鮐網一帖　一四艘張一帖

一漁師二十人漁舟手舟とも六艘

一山方木柴出る百石舟に壹艘荷二十五（匁）（一本ゆ）取はした荷銀積り一分一厘取諸魚貳分口旅より居浦

一分口いつれも魚にて取

○小　浦

一役所八疊敷瓦ふき

一高七十石ほと家數六十五軒

一いわし網　一帖　一はまち網　一帖

一漁師　三十人程

一旅居浦十八艘人數九十人程

一地漁二分口旅漁壹分口木柴帆別にて一反壹(一本ゎ匁)つゝはした荷は千把に付一(一本起匁)五分取

一旅漁大引網谷同斷鹽も一分七厘口

○附野浦

一役所無之青五郎宅にて勤此所下け釣計廻舟多し磯草も少々出る家數三十七軒釣舟五艘阿州堂々浦より釣舟十四五艘來る

一旅漁一分一厘口

一鹽其外諸事前に同し夏は銀積り一分一厘口

一高二十六石餘

○比　井

一役所二間に三間瓦ふき

一旅居浦春之內計釣舟二十艘

一銀積り一分一厘口山方柴も出る西口六浦同樣御銀舟へ責薪は二分五厘口其外干物生藥如法

一此所漁師は無之廻舟計

○阿　尾

一役所無受負兩人當所居勤

一四艘張三帖　一鯛網 二帖　一いさき網 貳帖ふりこきの事　一はまち網 一帖　一手繰 三帖

一漁舟四十艘　漁師百人

一家數百軒ほと
一持網　十三帖
一高六十石餘
一附浦に產湯あり家數五十軒地引網あり
一右同樣田杭あり家數二十一軒海士あり磯草ありはまち網あり

〇三　尾

一役所三間に四間瓦ふき
一家數百五十軒ほと
一いわし網　八帖　一ほら網　二帖　八手之事　一はまち網　二帖　一持網　二十六帖
一鱶網　一帖
一蛇口五百目　一壚口二百目　一大魚網　八帖　一しばり　二帖
右之外持網海老網數々有之是は至て小網にて數も知れかたし
一男海士三十人ほと漁舟五十艘ほと村の人數不殘漁稼其間には作方も致し候村方高三百石余近年漁事有之繁昌之浦なり
御仕入方大帳に
日高郡三尾御仕入方より勢州佐八御村木所へ積廻させ之紙草口銀先年口熊野極之趣を以左之通り納させ候等掛合濟

一紙草　拾貫目に付

口銀一匁三分三厘四毛

嘉永六丑年

一本〇吉原　田井　濱の瀬　和田　元の脇　和田出村　伏木

〔〇和田　元の脇　和田出村 薗村の出村

〇吉原　田井　濱の瀬〕　伏木と云ふは役所ある地を云なり

御坊　森下榮次

受負　藤井　瀬戸佐市

御坊　龍田吉右衛門

神文問屋　薗村　岡屋與助

和田役所五間に貳間半わらふき

伏木役所五間に四間程

塩藏一ヶ所四間に二間半

一大あみ　十二帖　一小あみ　同しばり　一帖

一漁舟六十二艘夏の内かけ網舟十艘余

右大あみ一帖人數三十五六人ほと小網一帖に人數十六七人ほと材木切木等口銀三歩増に付少々取立方相増候風聞之事

一和田高七百石余家數三百程漁事之節は漁師不足に付村方一統あみ引に出

一山方物切木材木生藥其外諸色出る舟積之節は口役相改二分口或定法口切木は舟百石積之壹艘
二十目九分取
一川口番所先は川南にあり川瀨北之方へ改り候に付北之川端へ假番所拵南端之番所あき但瓦葺
一川又山材木口銀半分通り七ヶ年之間御用捨御證文付之事

○北南塩屋浦

一役所三間に二間わらふき
一地引あみ　九帖　一四艘張　八帖　一かけ網共漁舟三十二艘

○野島

一役所無之　受負半之右衞門居宅勤

○上野

一片手廻り地引　二帖　一大魚掛あみ　三帖　一海老かけ網少々　一此浦小浦なり
一役所二間に三間ならへ瓦
一小地引あみ　四帖　一大魚あみ　四帖　一飯網　二帖　一海老あみ少々
常式漁師七十人ほと　一いさば　五艘　一漁船　五艘　家數百五六十軒

○楠井

一役所小き所あり木柴少々出る
一片手廻り地引あみ　二帖　一飛魚かけあみ少々　海老かけあみ少々　一漁舟いさは都

合十一艘

○津井　　　　　　　　　　　　　　　　　印南之附浦

一役所無之　一片手廻り地引あみ　一帖　　一漁舟二艘　至て小き在所也　受負之者あつけ口に致有之由

○印南

一役所三間半に四間半瓦ふき酒井次右衛門　再建之由至極宜敷致あり

一大魚あみ　七帖　一四艘張　四帖　漁舟　十八艘　一漁師　五十人

○切目

一役所四間に三間半わらふき

一鰛あみ　一帖　一大魚あみ　二帖　一小あみ　四帖　一漁舟　十艘

一漁師作方南様稼く山方物木柴出る　一家數百三十程　但山方物一分口塩口二分

一此山奥にほくき山と云あり四里四方程の山なりかけ村庄屋取計にて仕出す右は撫木之由

一なくい山長六里ほと　坂手小山長四里ほと　右両山よりも數多撫木仕出す

一勤人脇田專助帶刀殿家來足輕体之者之由

○東西岩代

一役所往還の右畑之中に小きわらふきなり勤人安藤家來足輕体の由平岩和助

一家數二百五十余

一鮋網　二帖　一漁舟　四艘
一此所より薪多仕出す一歩取此より田邊下なり

○南　部

一役所八間に三間ほど瓦ふき
一鮋あみ　四帖　一大魚あみ　三帖　一飯あみ　四帖　一夜引あみ　一帖
八手あみ　一帖　一漁舟　二十五艘　一旅漁二十四五艘毎度入込
一家數大様千軒程薪幷炭多出る其外諸色も出る　炭口銀〆目によつて定りあり山方薪壹分口其外浦方貳分口
隣村に八子村あり家數百ほど　一いわし網　四帖　一漁舟　八艘

江川元〆　安藤家來　田中順右衛門

南部元〆　右同斷　田中彦次

○境　南部附うら

一役所無之あつけ口に致あり
一家數三十五軒余
一いわし網　四帖　一小網　四帖　一さこあみ　一帖　一漁舟十艘外に海老あみ少々

○芳　養

一役所三間半に四間ほどわらふき

一勤人佐藤茂一郎擔幷魚類共二分口
一此處芳養浦いはらき浦二ヶ村ありつゝきなり
一地引あみ　二帖　一飯あみ　二帖　一しはりあみ　二帖　一大魚あみ　四帖
一海老あみ　少々　一漁舟　二十艘　一鰹釣舟　六艘
一芳養浦に松原と云處あり
一魛あみ　五帖　一大魚あみ　七帖　一飯あみ　二帖　一海老あみもあり
一漁舟二十五艘
一夏之節に二十三十人つゝ熊野へ稼に行所也都て漁師百五六十人もありと
目良是は芳養の向ふなり漁方稼無之旅より居浦來る計なりあつけ口有之
一受負（江川の事なり）　谷屋忠左衛門へ銀三十目被下　山科屋六之右衛門へ銀壹兩被下
右之通にて受負名前に致有之との事

○江　川

一役所みくるし勤人五六人あり田邊城下の内なり
一鰆（さごし）あみ　八帖　一きびなこあみ　十六帖　一飯あみ　四帖　一しばりあみ　五帖
一漁舟　五十六艘ほと　一海老あみもあり
一此所川あり川上より材木切木等數多出る

○新　庄

一役所五間に三間半瓦ふき勤人一人あり
一此所漁師は無之山方物切木生薬出る重に作方塩濱相稼く
一あさ鳥巣と云は漁師無之山方切木仕出す計なりあつけ口に致有之

○夙

一役所三間に二間半わらふき一人相詰有之
一鮪あみ　二帖　一鯿あみ　二帖　一まかせ　二帖　一しばり　二帖　一中高　二帖
一小あみ　三帖　一海老あみもあり　一漁舟　二十艘　一家數五十五軒ほと
一此所漁方稼第一に致作方山方は少し計りなり
一初子濱は夙之前磯邊にて山方木柴等少々仕出す小船二艘家數十四軒あつけ口に致なり
一朝來歸瀬戸より北東に當磯邊にあり　一家數四十軒ほと　一地引あみ二帖漁舟二艘其外
山方薪出る是もあつけ口なり

○瀬　戸

一役所無之　一受負南楠左衛門　地之漁方無口旅より居浦口銀取

○鴨　居　富田(浦)之附浦(一本ナシ)

一役所無之　一家數十五六軒　一漁師計網も品々有之いつれも小きあみなり

○堅　田　右同

一役所無之　一家數十軒ほと　一漁師無之柴切木少々重に耕作

○安久川　右同

一役所無之　一漁師は無之作方計作間々少々切木柴仕出す

○富　田

一役所五間に三間瓦ふき宜き番所なり勤人池永彌惣左衛門川口も有之其狹し川上より田邊御手山村木余程出る買木には村木出不申切木流し重に出候計也流し木口銀百石舟一艘に付二十六匁取候由　一家數二百軒ほと

一鰮あみ　四帖　一小あみ　六帖　一鯫あみ　二帖　一漁舟　六艘

旅居浦之内釣舟計は田邊御手前へ取立候筈但一艘一日二分八厘つゝ其外は口前所へ取立候筈也

○袋　富田之附浦

○かせき

一役所無之　一家數十四五軒　一漁師無之重に作方折々柴出す預口也旅居浦稼き來り候事

○水　草　右に同

一役所無之　一家數十四五軒　一耕作漁事柴等之稼居浦は不來あつけ口なり切目より此迄瀨戶は除き其外いつれも田邊下なり

○市　江　日置の附浦

一役所三間に二間わらふき日置より一人つゝ二ヶ月代りに相詰候事　一家數四十八軒

一作方漁事山方木柴等　一網　六帖
右は磯にて諸魚取候あみなり至て小きすち

○笠　甫　右に同

一役所無之　一家數　八軒　一磯稼之小網二帖山方物切木柴等作方も致す同所五郎兵衛と申者へ口役取立之儀申付有之に付致候節は日置役所へ申參り手代役人之内罷出立合相改候事
右に付五郎兵衛一ヶ年銀二十五匁つゝ被下候事

○志原浦　日置之附浦

一役所無之　一家數二十四五軒計有之　一磯取小網　二帖　一地引網　二帖
一山方物木柴も出作方もあり同村助八口役所改方申付あり立合日置より出る年々助八へ二十目被下事

○日置浦

一役所
一磯取あみ　六帖　一地引あみ　二帖　一飯あみ　一帖
一日置　志原　笠甫　市江の四ヶ所にて漁舟三十二艘
但し大小あり
内間　一鮪あみ　二帖　一飯あみ　一帖　一大魚あみ　四帖　一夜引あみ　六帖
一まかせ　六帖　一漁舟　十艘

一家數二百程漁方近年不漁に付網數も減候由川口もあり川上山奥深けれ共村木は折々押さりなさ出候得共稀之由日々切木柴計也切木口銀百取柴も同斷壹口貳分川向に番所あり晝夜共二人つゝ詰る二間に一間半杉皮ふき

○名　立　　上の附浦

いこき

右兩村共役所無之家數一ヶ所に五六軒ほどあり木柴仕出し作方も少々つゝ致し候事

○周參見浦

一役所七間に四間瓦ふき　　一家數二百軒余之內

平松　六十軒ほど　　大泊　十三軒ほど　　本村　百三十軒程　　朝來　七軒ほど

一鰤あみ　六帖　　一目近あみ　十帖　　一地引　五帖　　一鰮あみ　六帖

一川魚あみ　八帖　　一大魚掛あみ　九帖　　一磯魚かけ網少々　　一鰹釣　十六艘

但一艘に十二三人のり　　一小漁舟　五十艘

內關　一鮎あみ　六帖　　一鰮あみ　六帖　　一大魚あみ　九帖　　小網　十六帖是はえさあみ也

一漁舟　八十艘ほど

一苫百枚に付三匁とり切木百石舟一艘二十日とり　　一柴帆一反に付一匁とり　但松葉は壹匁五分とり

一附浦に口和深あり同村原柳三郎と申者へあつけあり定銀一ヶ月六百五十目納椎茸口銀一斗に

付一匁二分はかり　大地角右衛門鯨方先達て願相廻り候通鯨舟十二艘まとひ當所へ參居

一役所なし　一家數三十軒程あり木柴多仕出す外の品はなし

○口和深

○見老津

一受負　海野大郎右衛門　片山芳松

一役所四間に二間半杉皮ふき　一家數六十軒ほと

一鮭綱　二帖　一えさあみ　八帖　一さいらあみ　三帖　一釣舟　八艘 釣舟小舟一艘に付欠

一中漁船四艘是はさいら漁事時計用作方無之漁師計毎日百二十人ほとつゝ沖稼致候由

一五反帆いさは　二艘　但し廿五六石積

○須江の川　江住の附浦

一役所無之　一家數十四五軒

一漁師　三十六人　一漁舟　大小四艘　一鰛あみ　一帖　一細魚あみ　二帖

一釣舟　大小六艘　一いさは　一艘

内閘　一えさあみ　三帖　一さいらあみ　一帖

○江住浦

一受負　酒井利右衛門　岡崎爲八

一役所四間に五間杉皮ふき

一家數七十軒ほと　漁師百八十人ほと
内聞　一えさあみ　十一帖　一鰮あみ　一帖　一細魚あみ　四帖
一釣舟　大小二十二艘　一漁小舟　五艘　一いさは　二艘
一山方物杉丸太同小わり物苫等出る是等は少々計也御仕入方有之同所御仕入炭少々出る

〇里の浦　受負前段兩人

一役所三間半に二間一小間杉皮ふき
一高百石ほと　一家數五十（間カ）余　一山方物切木出る前方は多出候得共近年仕入人も無之由
一釣舟　大小十六艘　一中船　一艘　一小舟　十艘　一鰮あみ　一帖
一杉丸太二間より三間迄同板短横類小割物舟板苫松材木等出る

〇和深浦　受負　片松芳松

一役所五間に三間半　一高五百石余　一家數二百軒余　一家建間ばらにして壹里計の間
和深也阿差と申すも附浦も和深に引續あるなり重に切木柴仕出す右口銀舟百石積貳十八（艘）[一本缺?]
取杉丸太小割物横苫舟板其外板類紙草
一釣舟　大小十六艘　一小網　八帖　一鰹あみ　半帖　一細魚あみ　半帖
右附浦阿差分共
内聞總体喰合宜敷漁師阿差共百二十人ほと　阿差家數三十軒ほと

口熊野高川原へ出候炭和深浦へ持出候はゝ村方稼相増弁利可相成旨依願同所へ持出させ候筈就ては口銀之儀高川原同様相納させ候様可被申付事

浦方へ出候炭に限り高川原幷口銀に取計炭之外御仕出之色物之儀は定法通り納りに相成候様仕度事

右嘉永五子年十二月二歩口奉行へ

〇田子浦

受負　當所住　高尾吉左衛門

一役所無之高百三十石余　一家數二十七八軒　一山方稼致候得共奥山深く候ゆへ木柴も出方少く苫を拵候事重に業とす總体難澁村と聞ゆ漁舟も近年右之通仕出す

一釣舟　大小貳艘　是は內聞漁師三十人ほと

〇江田浦

一受負　當所地士浦儀左衛門

一役所無之　一高百石ほと　一家數二十軒余

一釣舟　大小四艘　一中舟　壹艘　一細魚あみ　壹帖　鮏あみ　半帖

御仕入大帳に

口熊野和深御仕入方仕出し炭場所に寄江田浦へ持出候はゝ村方稼相増弁利可相成旨依願同所へも持出させ候筈就ては口銀之儀和深浦同樣相納させ候筈宜可被取計事

和深御仕入方

炭一俵に付

代四分　九の割百目に八分

右嘉永七寅年五月廿五日二歩口奉行へ

○田並浦

一受負　名草岡崎村甚兵衛

一役所四間三間半杉皮ふき　一高二百五十石ほと

一家數百二十軒ほと川向に三十軒程奥谷に六十軒ほと都合二百軒

一釣舟　大小十艘　一中船　一艘　一えさあみ　五帖　一鰹あみ　一帖

一飛魚あみ　二帖　一細魚あみ　二帖　一磯打あみ　二帖　一毎日漁師八十人程

内聞　漁師九十人ほと旅漁船三艘入込此人數四十五人ほと此口銀二分口之由

一山方物切木柴等少々出る菊目石在灰焼候へは是は運上筋に付地方取扱之由松村板類舟板小割物槇苦杉丸太苦紙草出る

○有田浦

一受負　海野太郎左衛門

一役所六間に三間半　一家數六十軒ほと　内聞　一漁師百四十人ほと

一えさあみ　十帖　一釣舟　十艘　一沖舟　六艘　一細魚あみ　四帖

一鰹あみ　三帖　一飛魚あみ　三帖

松材掛木杉玉幷丸太苫草紙小割物椎皮舟板檜繩等も余程出る

右浦方近年はんしやうの様子に相聞へ都て此近浦漁事と申すは重に鰹をつり候事業とす右は二月下旬より五月迄第一とす夫より初冬迄も釣鰹致候由汐御前汐下り候へは無計鰹喰候由登り汐に成候へは一切喰不申候由

有田の附浦

○二部　家數三十軒ほと

○錦　同　十四軒ほと

○袋　同　八九軒ほと

此袋浦に番所あり

右三ヶ所漁師は無之作方計作間之稼に木柴仕出す口役所も取立少く候由有田浦受負太郎左衞門より袋浦庄左衞門と申者へあつけ口に致候

○串本浦

一受負　鈴木佐次兵衞　森本榮次

一役所四間半に四間ならへ瓦ふき

一村高百九十石ほと　一家數二百軒ほと　一濱前後に有之尤乾之方うけの濱白砂はまにて別て宜き浦なり向は大嶋にて此海上十四五丁

一漁舟　二十一艘　一小舟　二十七艘　一中舟　二十艘　一いさは　五艘

一鰮あみ　五帖　　一えさあみ　廿一帖　　一小鰹あみ　十九帖　　一地引あみ　九帖
一鮫あみ　七帖　　一飛魚網　十八帖　　一細魚網　七帖
内間　一初魚あみ　十帖　　一目近網　三十帖　　一八手あみ　六帖　　一鮭あみ　八帖
一かます地引　十帖　　一沖あみ　三十帖　　一鯵あみ　十帖　　一釣舟　大小五十六艘
一細魚舟　廿五艘　　一中舟小舟共　五十艘　　一いさは　十艘　　家數二百五十軒程
一常式漁師百人程旅漁師二百人ほと　一旅より居浦四五艘來運上一ヶ月六匁つゝ取立候旨
壚口壹分八厘取立此所漁方重にして近年繁昌取立宜き所と聞ゆ

○上野浦

一役所三間に二間　　一高二百石ほと　　一家數七十軒ほと
一細魚あみ　三帖　　一目近あみもあり　　一えさあみ　七帖　　一鰹取あみ　一帖
内間　一漁師百四五十人　　一さいらあみ　二帖　　一鰹つり船　七艘　　一漁舟大小十四艘
一中舟　四艘　　一いさは　四艘　　漁事には重に釣を稼候然とも（欠文）

○出雲浦

一役所四間半に三間半杉皮ふき　　一家數六十軒程村高欠
一漁舟　九艘　　一中舟　五艘　　一小舟　十五艘　　一細魚あみ　三帖　　一鰡あみ　一帖
一えさあみ　九帖　　一目近あみ　十一帖　内間　　一漁師九十人旅より漁師三十人
一鮭あみ　三帖　　一旅田邊舟　五艘　　一勢州舟　壹艘

右漁師九十人ほと此所漁事計之浦重に鰹をつる

此近浦々六本鰹と申事有右は先年此邊之者勢州へ釣舟に參り候處綱代錢として百本に付六本つゝ口銀の外にあの村方へ取候由然る處其後勢州釣方不けいきになり御前釣方繁昌にて此方へ釣稼參り候に付勢州之通取立村方の所務に致す其後上へ上り候樣に相成勢州釣舟參り候へは二分口の外に六厘取立六本鰹と號別段に上納致候事大嶋浦なとは取分釣舟多參候付古座浦より同所へ取立に參候由

○須　江

一役所三間半に二間杉皮ふき

一高四十石余　一家數四十五六軒　一漁舟　六艘　一同小舟　六艘　一中舟　五艘

一細魚あみ　一帖　一片手鯇網　一帖　一片手えさあみ　六帖　一敷あみ　六帖

一目近あみ　三帖　內閘　一細魚あみ　二帖　一目近あみ　二帖　一鯇あみ　二帖

一えさあみ　八帖　一釣舟　八艘　一渡海舟　三艘　一小舟十一艘　一漁師七八十

中舟小舟共五六艘　當所漁事も爾々無之山方物小女中少々苦少々一步口也

○樫　野　須江附浦

一役所無之　一村方高六十石余　一家數二十八軒ほと　一漁方釣等無之敷網少々有之苫等仕出し作方を重に致候所なり同村助右衞門へあつけ口一年百六十目つゝ相納候事

○大　嶋　受負　酒井平右衞門　酒井新次郎

一役所四間半に三間半杉皮ふき　一高五十石余　一家數六十軒余
一鰹つり舟十一艘　一同小舟十一艘　一中舟十五艘　一細魚あみ五帖
一目近あみ五帖　一同艘張五帖　一任せ網二帖　内閏　一えさあみ八帖
一さいら網五六帖　一目近あみ六帖　一釣舟八艘　一同小舟八艘
一中舟小舟共十五艘　一しばり一帖　一旅釣舟十二艘
右漁師二百人余
此處諸国廻船掛り場所にて繁昌之所なり漁事も宜き仕入等有之地漁舟の外に此節勢州よりも鰹釣舟十一艘入込有之日方よりも二艘入込有之勢州釣舟入込有之に付古座役所より役人一人此所へ出張居六本鰹運上取立候事
但六本鰹運上取立候儀に元来勢州舟計にて候處先年勢州阿曾浦之者串本雇に相成串本舟のつもり致漁事候處右を差留六本鰹運上出させ可然處其後は奥熊野浦々の雇に相成奥熊野名代にて罷越釣稼致候て其紛候に付若山へ相達取扱候上新宮下より下の部は勢州迄何れも運上出させ候筈相成有之旨古座役人共申出候付其品帳面等も有之哉と相尋候へは帳面は無之覺をり之由に付預とも致不申候右之通候處此節奥熊野遊木浦之釣舟一艘當所へ參稼致居候作古罷越候節運上出し不申に付運上之義は御免被下候様願出候へ共元究り預とも不致候義に付先當年は取立候様若山へ參り元究り相糺運上不入義に候はゝ追て戻し可遣段申聞候事

〇橋杭浦　串本附浦

一役所二間に二間杉皮ふき　一高三百石余　一（戸）七十軒ほと

一山方物少々出漁事も少々致候由甚取立少き所なり

一細魚網片手えさあみ一帖　一釣舟一艘　一同小船一艘

右之外古舟四五艘

一内間漁稼之者外々へ稼に參重に作方計を稼候由役所より一漁舟一艘　一小舟五艘

一地引三帖　一細魚網片手飛魚あみ一帖　一手くり五帖　一小鰹網三帖

○姫　浦　古座附浦

一役所三間に二間　一家數四十軒　一山方物杉丸太少々木薪等出る作方重にして漁方少し

古座より手代役人之内一人炊一人つゝ相詰

一鰹舟二艘　一同小舟二艘　一地引網五帖　一鰤網三帖　一いわし網三帖

同小網一帖

內間　一鮪地引三帖　一かます網三帖　一えさあみ三帖　一鰹舟二艘　一同小舟二艘

一中舟小舟共六艘ほと

○伊　串　古座附浦

一役所無之家數三十軒ほと　一姫より兼勤山方物杉丸太少々木柴少々重に作方計也

一鰹舟三艘　一同小舟二艘　一鮪網二帖　一鰤網二帖　一沖えさあみ一帖

內間　一かます網二帖　一漁舟大小六艘

〇神の川

〇西向い

西向いに役所あり二間四方古座より出張　一家數百軒余

一西向い漁舟三艘　一えさとり舟三艘　一鰤あみ一帖　一鮪あみ一帖

一神の川鰹舟五艘　一小舟七艘　一鰤あみ一帖　一鰤小あみ四帖

一中湊分神野川出　(鯽〔鰹カ〕)あみ一帖

内閘　一地引二帖　一えさ網五帖　一釣舟六艘　一同小舟六艘　中舟小舟十艘ほと

一此處山方物少々出漁様も有之候へ共重に作方

〇浦　地

一役所二間四方古座より一人つゝ出張尤古座川の邊なり

〇古座浦

一役所六間に四間半其外物なき等あり若山より此迄第一の地なり

一濱番所と中役所之裏に一ヶ所あり川向い渡場に番所一ヶ所鯨網屋之所に同一ヶ所元役所より
晝夜出張

一釣漁舟十二艘　一小えさ取舟十一艘　一えさあみ・さこあみ十帖　一飛魚網四帖　一細魚網二帖

一地引あみ一帖　一打あみ二帖　一しはり一帖　内閘　一漁師二百人ほと

一えさあみ二十帖　一細魚あみ三帖　一鮭網六帖　一(鯽〔鰹カ〕)網六帖　一目近あみ六帖

一縛り一帖　一八手あみ一帖　一釣舟十三艘　一小舟十三艘　一鯨舟十二艘
一津荷あつけ之者へ銀二十目遣候事
内聞　一家數三十軒程舟九艘當所山方より出候材木色々有之候總体直段見附下直候事
一鰹釣えさあみ近年當所にまかせて揃いわしをとり他浦の釣舟へ賣候由右は一籠と申はいわし
三升計を生籠へいけ代銀三十目にて商候右之口銀に付二匁つゝ當年より取立可申旨網取長左
衛門へ申付候事
〇下田原
一役所四間に三間半　一村高五百石ほと　一家數百三十軒程　一漁船六艘
一同小舟六艘　一細魚あみ三帖　一四艘張二帖　一地引二帖　一磯打あみ六帖
内聞　一餌網九帖　一鯕(はまち)あみ二帖　一かます網二帖　一細魚網一帖　一釣舟九艘
一小舟九艘　一漁師百二三十人
一當所重に作方にて漁事は作間に相稼山方も川上深さ差ての木材等も出不申候尤近年山追々切
荒候に付此節材木出方少きとの事　磯運上と申し左之通例年無口に上納有之候
米四斗　下田原村より
同六升　上下田原村より
同四升　佐邊村より
〇浦神　是より新宮下

役所四間に三間杉皮ふき　一家數百軒余　一深き入江にして廻船多掛り候湊なり入江之
南方に家あり向側に番所有之
一諸漁船十二艘　一同小舟三十二艘　一細魚網六帖　一えさあみ八帖　一いさは一艘
外に下田原へ當分かし舟二艘但漁舟小
内間　一細魚網二十帖　一鮫あみ四帖　一餌網十二三帖　一八手あみ二帖
一釣舟十三艘　一小舟十三艘　一鮫細魚追舟小舟共三十二艘ほと　一細魚時分には伊勢
より細魚あみ五帖ほとつゝ廻る此人數九十人ほと

○粉の白　下里の附浦

一役所無之　一あつけ口に致有之漁師は無之山方物少々出る

○下　里

一役所四間半に四間杉皮ふき　一(村方)[一本ナシ]家數二百五十軒ほと　一才木并材木等多漁方少く
重に作方也川は宜き川にて川上南村有之山も宜山に有之との事總体宜所と相見へ
一えさあみ八帖　一細魚網六帖　一諸漁舟十二艘　一同小舟三十二艘
内間　一家數七十軒　一細魚あみ一帖　一漁舟五艘　一小舟三艘　一山方材木才木
等多く出る板も少々出る

○太　地

一鯨方役所五間半に四間半杉皮ふき

一鯨舟二十五艘角右衛門支配

內　勢子舟十三艘　持左右舟二艘　山見舟一艘　網屋（小[一本ナシ]）舟一艘　樽舟一艘

乘替舟七艘

外に　鯨網舟九艘　鯨網百八十帖

內間　一家數四百軒ほと　一鯷網十五帖　一舟大中小五十艘程　一鯨舟十二艘

一新宮下受負人支配方村方附役所一間半に二間ほと甚小き役所なり

一漁舟十四艘　一小舟二十四艘　一いさは一艘

二十石

一小前の網三十六帖　一餌網九帖　一大敷あみ一帖　一網代網十帖

一大前網二帖　一磯立網六十四帖

右磯立網六十四帖之內四十帖海士仲間別に冥加銀差上候由に付先年より無口之由

外に細魚網四帖

○森の浦　大地附浦

一あつけ口に致有之役所無之杉小丸太松壚木薪等少々出る漁事無之　小舟二艘

○二河　勝浦附浦

一役所無之あつけ口に致有之出物森の浦同斷通り舟三艘

一當所温泉泊壺二ヶ所あり

○勝　浦　　那智

一役所六間半に五間瓦ふき　一村方家數百四十軒余　一此處奥深き入江にして諸廻り舟多
掛り候所也宜き湊と相見へ候は作方重して漁事をも致す所なり
一細魚網船二十艘　一小漁舟七艘　一細魚網四帖　一海老網三帖
一通ひ小舟三(帖)〔艘カ〕　一むら敷網一帖

○天　満　　勝浦附浦

一役所四間に三間半杉皮ふき　一家數百四十軒余　一此所重に作にして山方物小割物幷す
くり小丸太松擅木薪其外木地物も少々出る漁事は少し計稼候
都て那智谷より出候品は此所へ出す川も有之　(一地引網二帖　一漁小舟四艘)
内間　一地引二帖　一漁舟五六艘　一山方物杉桧榑杉皮等類出る

○濱の宮　　勝浦附浦

一役所無之　一あつけ口家數百七八十軒ほと　一作方計相稼候所也山方も少々小割物松擅
木等出候由　一通ひ小舟三艘

○宇久井

一役所五間に四間半杉皮ふき附浦に湊と云所あり同し村續きにて役所も無之諸事宇久井同樣取
計
一細魚船三十艘　一小漁船八艘　一細魚網五帖　一鮪網一帖　一ひら敷網三帖

一地引網一帖　　一通り小舟十二艘
外に海老網六十帖是は先年より御朱印にて無口
内聞　一鰹舟二十八艘　但小舟共　一細魚網九帖但壹帖に付舟大小五艘つゝ
(鯽)鮋網二三帖　鮋任せ一帖　一漁舟大小二十艘
村方家數双方百五十軒余湊は近年迄家數も少く甚家作も見苦し(く)所にて候處近年家數相増
家作も殊之外宜き所に相成
○三輪崎
一役所六間に四間半杉皮ふき　家數二百五十軒余　一漁事稼き重にして作方は少し
一諸漁船六十五艘　一同廻り小船二十五艘　一地引網五帖　一さいら網十三艘
内聞　一鰹舟大小三十二艘　一(鯽)鮋網七帖　一細魚網十四帖(少し)但し壹帖に舟五艘
つゝ　一鯨舟二十二艘　一漁舟大中小十八艘　一鮋任せ一帖
一山方より松才才木苫少々つゝ出松爐木も仕出し候由
○新　宮
一役所建前甚廣く諸事都合よし奥山深く川筋も宜材木板類諸品多く出る元〆兩人手代八人役人
十七八人有之受負兩人湯淺九右衛門中根(重)右衛門勤人は新宮役所より出し給ふちは預り方
より出し候由手代は三百目役人は二百八十目位かしき百目其外人々善惡により出候由ふち方
は何れも一人ふちに一分五厘之雜用出し候樣

内聞　一手代は六百目より八百目迄役人は三百目より四百目迄遣候由

あつけ口定銀

四〆六百目　浦神　六〆目　下里

二〆五百目　太地　五〆五百目　勝浦

二〆五百目　天満　十二〆目　宇久井

九〆目　三わ崎

〆四十二〆百目

右受負定銀共新宮下一等之取立十年平し一ヶ年に三百五十〆目には請不申候由尤御城主へ一ヶ年四十〆目つゝ差上若山へ之定銀相納都合納方三百十〆目入之由

○鵜殿浦　新宮附浦

一役所三間四方杉皮ふき新宮川口勤人新宮より詰

一地引網二帖　一漁舟四艘

○井田　右同

一役所無之同所五郎左衛門と申者あつけをく鵜殿より兼勤

一地引網九帖　一漁舟十四艘

内聞　一西井田家数百軒右同地引五帖　小あみ一帖　飯あみ一帖

漁舟十八艘重に作方稼

（一本ナシ）（東井田家數三十軒地引四帖　小あみ二帖　漁舟八艘）

○阿和田　右同

一役所四間半に二間半杉皮ふき　一家數百五十軒ほと　一地引網十三帖

一漁舟二十六艘　一網主十一人

内聞　一家數二百軒ほと　一地引十三帖　一大魚網五帖　一漁舟十八艘但重に作方

○市木浦　木の本の附浦

（一本ナシ）（小き番所有之山方物も出る）

一地引網二帖　一舟二艘

内聞　一家數五十軒程網は無之木の本より出張漁

○志　原　右同

一役所無之網も無之作方一通り也山方物少々出る

内聞　一家數五六軒　一漁舟五艘　一網舟五艘　一地引網四帖

○有　馬　右同

一小き番所有之漁事有之節は木の本より出張相改候由網も無之山方物少々出る新宮より木の本迄一圓之濱にて是を三濱と云七里之間に湊無之地引網引に宜き場所なり都て木の本の漁事は右之濱へ出張地引致事なり

内聞　一家數七十軒程　一地引網四帖　一漁舟五艘　重に作方

○木の本浦　　　　受負　西川松藏

一役所五間に六間瓦ふき借家にて一年金三兩　一高三百石程　一家數九百軒程

一漁事地引計に候へ共濱大きく宜き場所なり山方物北山筋より板類多出舟積出す川は無之片浦なり炭も多く出る

一網數大六帖　小二帖　漁舟二十九艘

内聞　一漁師二百人ほと　一地引八帖　一小網七八帖　一大魚網七帖

一漁舟三十艘程

一當所定銀百〆目に近き所去亥年八百五〆目程上り候事

○大　泊　木の本附浦

一役所三間に二間半杉ふき　一家數四十軒程　一漁師無之山方計板類多出る作方を重に稼所也受負より勤人一人差出あり

○古泊り

一役所三間に二間杉ふき　一高百九十石程　一家數九十五軒　一村高漸百石余之所にて漁事重に致す所に候へは浦不漁之時は違者成もの他所へ雇加子に參り候よし

一漁舟十二艘　一平敷網四帖　一細魚網一帖　一傳馬五艘

○波田須　新鹿附浦

一役所無之　一あつけ口に致有之一ヶ年あつかり人甚六へ銀二十五匁遣す山方物少々出る漁

事無之家數四十三軒程

○新　鹿

一役所四間半に四間杉ふき

一網三帖　一小船三艘　一さつは三艘

一當所浦方は少々にて山方計也板類小割物杉丸太木地物諸事多く出る

内聞　一家數二百軒程　一地引網三帖　一小網三四帖　一漁舟三艘

一小舟二艘　山方杉丸太杉板類薪出る

　右は三四里も奥より仕出す

（一本アリ 御仕入方大帳

天保十三寅年六月十二日新鹿御仕入方新規仕出伊丹共口銀左之通り納筈

伊丹一丸に付　新規仕出し　元代二匁四分三厘　九の割納

底　一束に付　先年仕出し候跡方通九の割納　元代五分四厘）

○遊　木　受負　當所久左衛門

一役所四間に三間杉ふき　一家數九十軒余近年不漁

内聞　一家數百軒程　一漁師百二十人程　一細魚網三帖　一餌網三帖

一釣舟九艘　一山方物少々出る　一細魚舟四艘

○二木島

一役所四間半に四間杉ふき　一家數百五十七軒程　一高百十石余

一山方浦方共出候へ共近年山々代出し此節出物少々之由

○里　浦

一鰹舟六艘　一同小舟六艘　一細魚網三帖　一地引一帖　但餌あみ平をき網三帖

奥

一鰹舟四艘　一同小舟四艘　一地引一帖半　一平引網三帖　一細魚網二帖

甲浦内間　一細魚網五帖　一鰮網一帖　一鯷網三帖　一釣舟十二艘　一小舟八艘

○須　野　梶賀附浦

一役所無之　一家數十軒計　一山方薪少々出る漁師も有之候へ共旅へ出候計也右は二木嶋

之東に中り立之崎之番所わきなり

○甫　母　受負　片岡彦左衛門

一役所二間に二間半杉ふき　一家數二十軒余　一高二十石余　一山方無之漁師計五六十

人有之近年不漁

一漁舟六艘　一小舟九艘　一細魚網二帖

内間　一家數三十一軒　一漁師七十八　一細魚網二帖　一漁舟十二艘

一小舟七八艘　一山方物杉丸太薪等出る

○曾　根

一役所無之　一嘉田浦受負彌三兵衛より當所定吉へあつけ口山方杉丸太など出漁師も有之家數八十軒余高百四十石余取立少き所也

一名(古)網一帖（一本吉）　細魚網一帖　漁舟二艘　小舟七艘　傳馬一艘

內聞　一漁師百人程　一細魚あみ一帖　一鯇網三帖　一漁舟大小六艘

小傳馬共十七八艘　山方物薪丸太

○嘉　田　受負　榎本彌三兵衛

一役所無之　一高二百二十石余　一家數百軒程家作宜き所なり山方計にして材木小割物多出所也　一小傳馬十六艘　一木舟一艘但三百石なり　一同一艘八十石なり

內聞　一茶五六十本杉檜丸太多出　一傳馬十五六艘

○古　江　受負　庄屋長九郎

一役所二間半に三間程　一村高五十石程　一家數七十軒程　一山方無之漁事計也役所は入札物之時計平日は長九郎方にて

一細魚網八帖　一餌網四帖　一漁舟十五艘　一差羽二十艘

內聞　一漁師八九十人　一細魚網六帖　一鮋網三帖　一釣舟十六艘

一小舟十五六艘　一旅居浦五六艘

○梶　賀　受負　嘉田之住居榎本善左衞門

一役所三間半に二間　一村高二十六石　一家數四十軒程

一名吉網一帖　一細魚網三帖　一漁舟十一艘　一傳馬二艘
内開　一細魚網二帖　一鰮網一帖　一漁舟八艘　一同小舟七艘　一漁師五六十人
一山方物丸太薪等

○三木里　受負　大倉久左衛門

一役所無之　一昔之地あり今は家立有之寺之地面之由漁師無之薪幷杉丸太計也附浦に
名柄　家數百軒余
小脇　家數十四五軒
右之高處よりも山方物出候由是は受負之者打廻り取立候事右二ヶ所是迄は帳面には無之事
一早羽十五艘　一傳馬五艘

○三木の浦　受負　吉右衛門　平八

一役所無之昔は有之先年風に潰れ當時夫々居勤　一村高四十八石程　一家數四十二軒程
一漁事重にして山方も薪杉丸太少々出候由當時附浦に盛松と申あり右之所先年は少々漁事も致候へ共何れも潰候也當時他浦雇に參り稼き居候に付取立無之甚難澁也此邊浦々へは大舟も附也都て此内を輪之内と申也重に漁方細魚を取一冬に細魚網一帖に付二百兩位之物引不申候ては歩に合不申との事是迄上之方さいら網は三百兩より以上取り不申候ては歩に合不申候由一帖に人數三十人程
一漁舟四艘　一差羽二十一艘　一傳馬二艘　一いさは一艘　二十石　一細魚網二帖

一平敷網二帖
内聞　一漁師五十人　一細魚網二帖　一しひ網二帖　一鮋網一帖　一釣舟十一艘
一しひ網舟四艘　一小舟七艘　一山方物丸太薪等

○早　田

一受負村方總代　庄屋德太郎
一役所無之昔之跡あり其側へ番所建有之　一家數四十五軒程　一高二十三石余
一山方薪其外杉丸太少々出漁事重に稼く
一鰹舟二艘　一差羽十八艘　一名吉網一帖　一細魚網二帖　一持網一帖
一平敷網三帖　一鰹立切網一帖　一鰹取網一帖　一鰹掛網三帖
内聞　一漁師五十人程　一鰮網一帖　一細魚網二帖　一釣舟三艘
一鮋魚追舟六艘　一漁小舟十三艘　一山方物丸太薪等

○九　木

一受負地下中代　庄屋利右衛門
一役所無之受負人居勤　一高四十七石余　一家數九十七軒程　一村方より小き番所建山方物薪小丸太出重に漁稼き候所也當所は湊宜く廻船多く掛り家作等も宜取立も宜き處
一漁舟十一艘　一差羽三十五艘　一傳馬六艘　一名吉網二帖　一網代あみ五帖
一細魚網六帖　一鰹あみ十三帖　一四艘張五帖　一えさ網三帖

内開　一漁師百人程　一細魚網五帖　一四艘張六帖　一鰮網二帖

一釣舟十二三艘　一細魚網十帖　一山方物薪多

右之通網数も多候に付口銀取立も宜出来可申様子に相見へ申候

○行　野

一受負尾鷲住居地士仲新之丞

一役所三間半に二間半　一村高漸く一石計　一家数十九軒　一漁事重に稼き泉州より例年六艘程つゝ居浦も来り右壱艘に五六人乗釣り稼く　山方物薪等丸太少々出る

一漁舟差羽十二艘　一鰹網五帖　一名吉網一帖

内開　一鰹網五帖　一鰮網一帖　一漁舟十二艘　一丸太薪等

○大曾根　受負　右同人

一役所二間半に二間　一高三十石余　一家数二十二軒　一漁事重にして山方物薪小丸太少々出る下手代一人詰させあり

一差羽十二艘　一名吉網一帖　一鰹網四帖　一飛魚網四艘

内開　一鰹網四帖　一鰮網一帖　一漁舟十二艘　一山方丸太薪等

右之通に候行野大曾根取立之儀双方同様に上り候趣に相聞へ申候

○向　井　尾鷲附浦

一番所無之　一家数三十軒程　漁師一圓無之薪小杉丸太等少々出重に作方稼く口役は矢の

濱番所より相改此所柹を多植付有之也

○矢の濱　同上

一役所三間半二間杉皮ふき　一高五百二十石程　一家數六十軒程　一漁師無之作方計にして小丸太薪等少々仕出す此邊山方物多く出當所にて相改候處也川も有之候得共川上深くなく舟數は尾鷲へ籠る

内聞　一川口より奥へ三里程有之杉丸太材木其外とも多あり

○尾　鷲

一役所三間半に九間程　一村高六百石余　一家數千軒程　一總体家作宜き所なり漁師四百人程右之内他浦へ罷越稼き候由

一鰹釣舟十七艘　一同小舟六艘　一鮋網舟六艘

一差羽二十五艘　一鮋網六帖　一引網三帖　内五帖は細魚に仕替

一打網二帖　一手繰十六帖　一廻船四艘　手の濱の分 一小傳馬三艘

天滿浦の分 一さつは六艘　一山方物材木其外諸品出る

内聞　一漁師四百人　一地引四帖　一敷網五帖　一鰮網二帖　一細魚網二帖

一釣舟二十五艘　一漁舟五十五艘程　一餌網十四五帖　一山方杉檜丸太多し

○天　滿　尾鷲附浦

○古　里

一役所無之南村にて家數三十軒程　一漁事も不致少く作方を稼き山方物薪等少し出他浦へ雇
舟人に參尾鷲より少し離し所なり

○水　池　右同

一役所無之　一家數七八軒　一漁事も不致他浦へ雇舟人に罷越山方より少々薪仕出す

○須賀利

一受負村中總代庄屋吉之丞
一役所無之庄屋宅にて勤　一高四十八石余　一家數五十八軒　一重に漁事諸廻船多掛り
候所にて家作等宜き場所なり
一鰹舟七艘　一早羽六艘　一磯端一艘二十五石積　一傳馬十艘
一名吉網一帖　一細魚網二帖　一餌網二帖　一海老網五帖
内端　一漁師百人程　一細魚網四帖　一鮪網四帖　一鰡あみ一帖　一海老あみあり
一鰹舟十二艘　一早羽二艘　一中舟傳馬共廿八艘　内七八艘古舟
右は定銀よりも余計も可有之哉に相見へ山方物杉丸太板類出候由

○引　本

一役所七間に四間半其外さしかけも有之大きなる役所也　一鮪あみ五帖　一えさあみ八帖
一細魚あみ二帖　手くり二十帖　一打あみ二帖　一大あみ舟十艘
一傳馬七艘　一鰹舟二十艘　一さつは十五艘

一役所年貢一ヶ年金四兩　但渡利役所は年七匁八分

内聞　一家數三百五六十軒　一漁師三百人程　一鮋網五帖

一細魚網四帖　一手くり十帖　一鮋舟十艘　一鰹舟二十艘

一手間早羽四十艘程　内十艘計古船　川艜四十五六艘

渡り役所是は引本より少しはなれ渡利村と云有川あり村本出る相改に出役所四間半に四間瓦ふき借地之由右渡り村へ行道筋之小き番所あり引本より晝之内一人つゝ番に出る

〇長　濱　引本附浦

右は尾鷲より少々はなれ有候斗にて取扱同所より見廻る

内聞　一家數二十五六軒　一鰹釣舟五艘　一小舟傳馬共十六艘

〇矢　口　右同

一役所二間半四方杉皮ふき也　一村高百石程　一家數四十軒余　一漁事一圓不致山方物杉丸太薪等よほと出尾鷲より一人つゝ月代りに相詰候事

内聞　傳馬二艘　一艜一艘

〇白　浦

一役所四間半に四間杉皮ふき　一家數八十軒余　一高二十石余

一名吉あみ一帖　一地引一帖　一鮋あみ七帖　一大魚網五帖　一鯨あみ二帖

一南北あみ二帖　一海老網十三帖　一鰹大立あみ一帖　一鰹舟五艘

一中舟三艘　　但冬は鯨舟に用る
内關　一漁師六十人程　　外に五十人程旅働
一鮪あみ三帖　　一鰡あみ一帖　　一釣舟七艘　　一鮪舟六艘
一鯨舟四艘　　一早羽傳馬共二十五艘　　内五六艘古舟
右網數も多候へ共取立少く鯨も不取彼是不漁之事

○勝　浦

一役所四間半に四間杮ふき　　一家數八十三軒　　一廻舟多く掛りよき湊なり
一名吉網一帖　　一大立網二帖　　一大魚網二帖　　一鮪網二帖
一海老網十帖　　一([illegible][illegible])網二帖　　一小地引一帖　　一南北網三帖
一小網類五十三帖　　一鰹舟三艘　　一差羽六艘　　一鯨舟二艘　　一傳馬十四艘
内關　一漁師六十人程　　一鮪あみ二帖　　一鰡網一帖　　一鯨舟四艘
一鰹舟三艘　　一鮪舟四艘　　一早羽小舟共十九艘
右網數多候へ共取立少し

○三　浦　　　　受負　川口源藏

一役所無之宅にて居勤也
一漁舟四艘　　一傳馬小用達舟七艘　　一鰡あみ一帖　　一鮪あみ三帖
一えさあみ一帖　　一大魚あみ二帖　是は至極小網なり

一村高家數六十軒程

內聞　一鮋あみ三帖　一鰮網一帖　一漁舟大小（十）（一本ナシ）二三艘

右之通にて山方も薪小丸太等少々出漁事も近年三歩增

○道　瀨　三浦附浦

一役所無之　一家數十八軒　一漁師無之山方薪小杉丸太少々出候計

○古　里　長嶋附浦

○海　野

一海野役所有之三間に二間半長嶋より一人つゝ相詰古里をも打廻る山方物薪小丸太少々出漁事も少々致す

一鰹魚二艘　一笹葉舟十艘　一名吉あみ一帖　一（鯨）（一本鯵）あみ二帖

一鮋片手網四帖　一鮃うちあみ一帖　一飛魚網十七帖

內　打あみ四帖　かけ網十三帖　一海老網十三帖

內聞　一鮋あみ二帖　一鰮あみ一帖　一漁舟傳馬共十九艘

一家數五十軒程

○長　島

一役所七間に五間其外建物有之甚廣き宜き役所也

一鰹舟六十一艘　但差羽共　一差羽傳馬舟五十二艘

秋分より春分迄鯛諸魚縄搾小漁舟五月節句前に乗組九月末迄沖立　一地引網六帖

一鰹えさ網十四帖

一鰯網二帖　一南北網九帖　一海老掛網十六帖

内間　一漁師七百人程　一鮪網八帖　一手繰五帖　一大魚網三帖

一夏網二十帖　一鰹舟八十艘程　一鮪舟十六艘程　一早羽大小百四十五艘

一川艜十二三艘

右之通家数五百五十軒ほと村高二百五十石余

濱之番所七間に四間半位あみ屋一ヶ所　但二間半に（三）間（一本ニ）

○二　郷（長島附浦）

一番所二間半に二間長島より一人つゝ出張漁師無之作方計に候へ共此所に番所無之てはメ方不宜候に付中興出来候事

○錦　浦

一役所四間半に三間半　一村方高百三十石程　一家数八十五軒程

一鮪網二帖　一名吉網一帖　一細魚網三帖　一えさ網五帖　一鯨網二帖

一鰹舟六艘　一同小舟六艘　一網舟五艘　一海老網十二帖

内間　一漁師百六十人程　一細魚網四帖　一鰤網四帖　一鰮網二帖

一鰹舟十艘　一鮪網舟八艘　一早羽傳馬共十五艘　一山方物も出る

右之通り候へ共取立甚少き事不審申聞候事
（一本ナシ）（是より勢州田丸領）

○新　鍬　　古和へ附く

一受負庄屋善兵衛役所無之　一村家數二十四軒　高十三石六斗山方物薪出候計也（一本アリ木の名不詳）なと多有之他所へ稼に參り候由定銀（此間不詳）ならては無之趣

定銀九兩二步十一（一本把匁）

外に　三割増

○板　橋　　古和へ附

一受負庄屋彌左衛門役所無之　一高五十石余　一家數三十五軒　一諸事新鍬同樣定銀程取立無之難儀候由

定銀十四兩一歩

外に三割まし

右兩所は同所にして二つに別れ有之昔平家之落人居候所とていつれも其系圖との俗說也今も若き者兼て弓射候事を樂み神事に射藝有之と云先年之役所跡地有

○古　和　　受負　庄屋吉兵衛

一役所三間四方　一家數百六十軒程　一高百四十三石余　一山方物薪も出る

定銀百八十七兩　外に三割増

一鰹舟六艘　一早羽四艘　一天渡舟十八艘　一えさ網五帖　一舟十艘

一鮪網四帖　一舟八艘　一南北網四帖　一舟八艘

内閣　一地引六帖　一南北網八帖　一うるめ網八帖　一(石網)[一本ナシ]舟二十六艘

一鰹舟九艘　一餌網七帖　一天渡舟廿艘余

右宜き浦にて定銀より取立多き方に相聞候山方物も薪等余程出る総受負人大庄屋向井城(左)[一本右]衛門

□栃の木　古和浦　受負人　庄屋庄藏

一家数二十四軒　一村方高十石程　一漁師并舟も無之山方物薪少々出候へ共至て乏き村之趣に相見へ達者成ものは他所へ稼に参り候由定銀三歩増にも得不致外よりヨナイの筈に相成有之候事

定銀四両三歩　外に増金

□小方　神前へ附　受負人　庄屋藤五郎

一村高三十二石程　一家数三十五軒　一山方物薪少々出る

定銀八両三歩　外に増金

□方座　右同　受負　庄屋兩人　五郎右衛門

一高十石　一家数三十二軒

定銀二十四両三歩　外に三歩増し

一名吉網一帖　一平敷網二帖　一南北網二帖　一地引網二帖　一わらさ網二帖
一海老網二十帖　一名吉網舟一艘　一鰹舟二艘　一早羽二十艘
内聞　一漁師三十五人程　一鮪網二帖　一えさあみ四帖　一鰡網一帖
一鰹舟二艘　一早羽十六艘
右之通に付大様一ヶ年取立いか程との趣内聞候處不漁と申年にても五十兩位百兩位取立候年
も有之候由尤口銀一割三歩增

○赤　崎　右同　受負　庄屋勘藏
一高十三石程　一家數三十軒余　一山方物薪計出る稼方少き處外へ旅稼等に出る
定銀二兩一步十三匁　外に增金
内聞　一傳馬二艘

○河内　右同　受負　庄屋平次
一家數六十軒余　一高百二十石余　一稼き赤崎同様之所也尤在所同所にして則軒並也山方
物は赤崎より余計にして小割物板類薪等出る山奥も一里余場所有之由
定金十八兩三歩十二匁　外に增金
内聞　一傳馬二艘

○村　山　右同　受負　庄屋與三郎
一高新古二百七十石余　一家數百三十軒程　一山方物小割物板類薪等出る奥山一里余有之

仕出し候由小き流川も有之候へ共流には不相成いつれも歩行持之由

定銀三〆六百十六匁外に一〆二百五匁三分三厘増

此所宜き場所と相見へ定銀よりも余斗取立出來可申也

○神前（かみさき）　受負　庄屋　十右衛門　善之助

一高本新合三十二石余　一家合百二三十軒　一山方物無之漁事計

一名吉網一帖　一えさ網五帖　一中地引網三帖　一平石物之小網四帖

一海老網十五帖　一引網一帖　一飛魚網十帖　一鰤網三帖

一鰹舟十艘　一早羽（一本アリ 二）十四艘　一傳馬十六艘　一小傳馬三艘

内聞　一漁師二百人程　一鯔網十一帖　一鱧網二帖　一鰹舟十一艘

一早羽傳馬共五十四五艘

定金百五十七兩七匁　外に増金

一役所地下より建有之五間に二間半

内聞　一不漁と申候ても一年に五十兩位定金之余有之漁事有之候節は三百兩余も過金有之候由

○奈家（なや）　受負　庄屋惣兵衛

一高新本共七石余　一家數五十軒余　一漁事稼所也

定金二十五兩一歩三匁　外に三割増

一名吉網一帖　一四艘張一帖　一地引一帖　一南北五帖　一海老網三十五帖

一鰹舟二艘　一早羽十三艘

一浦方宜様見へ候へ共漁事無之他浦へ雇れに參り夏之間鰹釣えさ無之に付所々得釣す口銀一割八分に取立候由小漁之儀は尤人少等之稼に付一割二分に取立誠に難澁浦と相聞へ申候

○東　宮　奈家附敷　受負　庄屋常右衛門

一高七十石余　一家數七十一軒　一漁事無之山方薪計小割物類も少々出る

定金十四兩十三匁　外に三割増

○熱　受負　庄屋善左衛門

一高五十石余　一家數八十軒余　一漁事重に稼候へ共夏分鰹釣等餌網少く爾々出來不申他浦へ雇れ此所にて漁事少く冬分繩はへ等致候由

定金六十八兩　外に三割まし

一名吉網一帖　一南北五帖　一四艘張五帖　一打網五帖

一大漁網十帖　一小たけ網十二帖　一いわし網五帖

一海老網三百卅帖　一名吉舟一艘　一鰹舟四艘　一繩はへ舟十艘

一早羽二十艘

○慥　柄　熱附敷　受負　庄屋五郎兵衛

一高本七十石余　一新十五石余　一家數百二十軒余　一作間漁事計にて山方物不出

一鰡網二帖　一いなた網二帖　一鰆網二帖　一立網二帖　一鰹舟二艘

一早羽十二艘　一小傳馬五艘

定金五両二歩と十二匁　外に三割増

一當所家作り宜く富商多あり大庄屋向井城右衛門此處なり右に付稼人少く漁事爾々無之樣

○道　方　阿曾浦へ附屬　受負　庄屋喜太夫

一高本百六十石余　一新十二石余　一家數五十軒余　一漁無之百姓計にして作間稼に薪等仕出す

一傳馬舟五艘

定金十三両一歩九匁　外に三割増

一當所へ佐八役所仕入之渡木炭奥山一の瀬より差出し舟積致し候處無口に致有之候由當正月より小千俵も出候由

○阿曾浦　受負　庄屋傳兵衛

一阿曾浦里南方にて高本新共二十七石余也　一家數七十軒余　一漁事計也夏之部鰹釣等も餌少く爾々出來不申三月頃より熊野浦方へ鰹舟仕立廻り浦致候由にて爾々漁事無之旨申候へ共浦々樣子至て宜舟網も左之通り有之余程漁事有之所と相見へ

一細魚網一帖　一南北二帖　一餌網四帖　一打網二帖　一名吉網一帖　一鮗網十五帖

一海老網十五帖　一小網五帖　一鰹舟六艘　早羽八艘　一天渡八艘

一地下より役所も建有之候由

定金五十二兩一歩七匁　外に三割まし

一阿曾に浦里と二所あり其間一丁計隔誠に難澁浦と相聞廻り浦致候者よりも定銀賄せ候に付定銀は大体來候へ共余計は無之趣

〇阿曾里　　受負　庄屋十兵衛

一村高（一本ナシ）阿曾浦に籠る家數）百十七軒　一漁事計稼所也諸事阿曾浦同樣也家作宜く前後に海あり至極模樣宜き浦なり

一名吉綱一帖　一南北綱八帖　一四艘張八帖　一打綱三帖　一海老綱五十二帖

一このしろ綱十帖　一鰹舟八艘　一中舟十一艘　一差羽二十六艘　一傳馬十九艘

定金七十八兩八匁　外に三割まし

一他所へ廻り浦致候へは右之者より定銀相應に賄せ候由極別難澁には無之

但大方村定銀九十八匁　道行村定銀百二十五匁此所へ籠る

〇大　方　　受負　庄屋彌三右衛門

一高新畑二十九石余　一本十三石余　一家數三十軒余

一傳馬舟八九艘有之

一薪等作間に仕出し候由多くは旅稼に他所へ雇れ稼方少き所と相聞て此近所勢地八竈と申者有之俗說平家之落人と申習候由

大方　道行く　赤崎　小方　板橋　新桑　栃の木　相賀竈

右八竈也毎年正月十日に弓射諍くとなり二月にも上旬に同樣諍くと云大方竈元に成ると言也

○道行く　受負　庄屋左右衛門

一村高本三百石余　一新二十八石余　一家數二十五軒程　一山方物計にして重に薪仕出す折々小ち丸も出候由至極貧村と相見へ旅稼に他所へ出候由定銀阿曾里へ籠り有之候由尤百二十五匁也

○大　江　受負　庄屋喜藤次

一村高本百二十石余　一新三十石余　一家數四十五軒程　一山方物重に薪出る折には用木も出る漁事無之所也

定金六兩二歩三匁　外に三割増

一傳馬舟二十三艘あり

○押　淵　受負　庄屋兵藏

一村高本七十石余　一新二十一石余　一家數三十九軒　一山方物計薪出る

定金四兩二歩と一匁一分四厘　外に三割まし

一當村之脇に鬼ヶ城と云所あり大なる洞あり昔鬼住と云是は元暦之頃平家之落人來り右之洞に住悪業をなし其後方にて殺されしと云又大江より押淵之間六十丁の内に山あり鬼かせと云

○迫　間　受負　庄屋喜三郎

一村高本百七十石余　一新九十石余　一家數七十軒　一當所浦方に候へ共冬分このしろを取候計にて差て漁無之其外作間に薪重に出し折々杉小割物等仕出す計也眞珠少々夏分取候由是は無口にてと申す

定金十一兩三歩十二匁　外に三割まし

一綛網二十一帖　かけ網也　一ちよろ舟七十艘

○相賀竈　受負　庄屋吉郎兵衞

一村高本三石一斗　一新四十一石余　一家數二十九軒　一作間に少々薪出る口役少し重に他所へ旅稼に參り候由至極貧所と見る

定金三兩二歩八匁　外に三割增

○相　賀　受負　庄屋惣次郎

一村高本三十石余　一新八十石余　一家數七十五軒　一漁事重に稼山方物薪も少々仕出す

定金二十六兩三匁　外に三割まし

一名吉網一帖　一南北網八帖　一石持網二十一帖　一飛魚網六帖　一海老網八十帖

一たけたか十帖　一餌網一帖　一鮋鰺網一帖　一早羽舟二十六艘　一鰹釣舟二艘

一當所浦々模樣宜き所にして漁事多可有之と見へ候へ共近年不漁に付他所へ稼にも參候由

○礫（きゝら）　受負　庄屋武助

一村高本貳拾石余　一新二石四斗余　一家數五十軒　一山方物無之漁事計宜き場所と相

見⑩

一名吉網一帖　一鮪網二帖　一海老網五帖

一いさは一艘二十石程　一小舟二十五艘

定金二十五両一歩二匁　外に三割まし

一當所前後に濱あり至極宜候へ共網無之由

○内　瀬　受負　庄屋仁兵衛

一村高本百四十石余　一新十九石余　一家数五十五軒　一山方作間に薪仕出し折々椎皮も出候由

一薪肴取舟四艘

定金五十二両三歩と銀十四匁外に三割まし

○中津濱　受負　庄屋次左衛門

一村高本四十石余　一新四石余　一家数二十六軒　一山方地下より少々薪等仕出し漁事も致候へ共人江深く候間甚小漁のみ也

定金三両と七匁　外に三割まし

一早羽九艘　一名吉網舟一艘　外に丁踏舟十二艘

一名吉網一帖　一小網十二帖　一いなた網一帖

一海老網十帖　一引網四帖　一南北網二帖

○舟　越　　　　　受負　庄屋増太夫

一村高本四百八拾石余　一新一石余　一家數九十一軒　一山方之所也作間に薪仕出す

定金五兩二歩十三匁　外に三割まし

○五ヶ所　　　　浦方庄屋友七

一番所あり當時由良六左衞門詰居

一村高本百四十九石余　一新十三石八斗　一家數七十九軒　一薪小割物小丸太竹等出

定金五兩と十二匁　外に三割まし　山方

一浦方作間に漁事を稼き入江深く少漁計之浦也

定金六兩と十五匁　外に三割まし　浦方

一早羽舟十三艘　一丁路舟三艘　一鯆あみ壹帖

一鰍あみ一帖　一引あみ二帖　一かけあみ六帖

一當所總体宜き所と見ゆ

○宿　　　　受負　庄屋新兵衞

○竈　　　　二ヶ所相つゝき庄屋兼

一村高本八十三石余　一新十九石余　一家數九十七軒程　一漁事専也冬は海荒く稼間無之夏重に鰹釣也

定金五十八兩と九匁一分二厘　外に三割まし

（一本ナシ）當所は九ヶ所の入江之入口にして宜漁場也と相見へ候
　鰹釣舟六艘　えさあみ三帖　名吉網一帖
　かけ網一帖　たけ長網一帖　海老九十帖
　南北網四帖　飛魚網五帖　細魚網三帖
　引あみ四帖　早羽舟三十一艘　似たり一艘）但いさはの事

○田曾　受負　庄屋三右衛門

一村高本高也二百四十石余　一家數百軒余　一先年は鰹舟も仕立候へ共今はなし小漁計之由
　定金十六両三分十二匁七分七厘　外に三割まし
　一早羽二十三艘　一似たり一艘　一名吉網一帖　一かけ網二帖
　一地引網一帖　一南北網四帖　一海老網百九十三帖
一當所は志州界也是より一里半計磯道を廻れは志州の浦人家也

○神津佐　受負　庄屋舟越村より兼勤増太夫

一村高百四十九石余　一新十二石余外に永定筋三石　一家數四十一軒　一山方計作間に
薪少々仕出す
　定金四両一歩と九匁　外に三割まし

○下津浦村　受負　庄屋左源次

一村高木四十七石余　一新十八石余　一家數四十一軒

一當所口役改と申は作間に少つゝ薪類仕出す計にて漁事少々は有之候へ共折ふし事にして釣竿小魚計之由

定金三兩と十五匁　外に三割まし

丁路舟二十八艘あり

○泉　受負　庄屋左内

一村高本百三十一石余　一新十石余　一家數四十軒　一作間に薪出す外に口役改方無之

定金一兩三歩十四匁　外に三割まし

○飯　滿　受負　庄屋弁右衛門

一村高本九十四石余　一新四石余　一家數十二軒　一山方作間に少し薪仕出す

定銀二十二匁　外に三割増

○木　谷　受負　庄屋七郎右衛門

一村高本三十九石余　一新九石余　一家數二十四軒　一作間に山方薪仕出す漁事少々有之候へ共芋釣魚計にて口役取立候程之儀は無之由

定銀百三十九匁　外に三割増

（一本ナシ丁路舟二十二艘有之）

○檜　山　受負　庄屋新右衛門

一村高本六十四石余　一新三石余　一家數十三軒　一山方にして作間に薪少々仕出す外

に口銀取立無之

定銀二十二匁　外に三割増

○山　原　　受負　庄屋徳右衛門

一村高元百八十五石余　一新七十二石余　一家數四十七軒　一作間に薪少々仕出す外に

口(數)[銀カ]無之由

定銀七十目　外に三割まし

一當所志州境也浦邊之境は國府浦山方境は當所也

一右宿灘田方より當所迄は何れも五ヶ所村入江之東側と覺へ行程六七里も可有之と存候事

○切原村　　受負　庄屋伊右衛門

一村高本六百二十石余　一新七石　一家數八十四軒　一山方作間に薪出る外に出物無之趣

定金十四兩三歩　外に三割増

一(總)柄組是迄にて相濟候向井城右衛門總受

一是より切原越とて一里計山あり難所なり夫より人足繼場左之通

切原村より　三里斗

上野村より　一里斗

津　村より　一里斗

岩手役所へ五里か

○岩　出　　田丸領

一役所九間に五間瓦ふき甚宜き所外に納屋もあり三間に二間瓦ふき無年貢地

一當所は宮川筋へ川下致候材木其外諸物計口役致歩行持物は口役去亥年より御免

川下物

材木　諸板類　椎皮　柏　大くわん

右何れも見銀十分一口但椎皮柏大くわんは定法あり船板其外諸舟具は七分一口

(〇)[一本ナシ]佐八仕入炭

貢　炭　　九々の割にて取

御用炭　　九(九)[一本アリ]の割にて取

一佐八方御用炭當春より御代官所取扱に相成宮川へは川下無之何れ成共手向宜き浦へ出し舟積
致候に付口役致洩御益も欠候事取扱あり

佐八方枝役所

天ヶ瀬　熊内(くもち)　舟木　打見　薗　駒ヶ野　一の瀬

右駒ヶ野役所支配よりは鍛冶炭少々出る

右役所々々へ山方より炭相納川下け致候事

一當所川艜致吟味候處御領分之舟數六十三艘有候由凡積りに委く調へ候はゝ八十艘余も可有趣
相聞へ候廣瀬へ四里八足繼場田丸相賀

○廣　瀬　　　　　　松坂領
一役所四間に二間芼ふき年貢二斗七升
一口役取立候義岩手同樣也當所より大石迄道法一里半
○橋　本　　　　　　伊　都
一駄板橋本にて掛物左之通候由
一駄に付問屋入用四分八厘切手料一分
五條より送り來候筋
問屋入用一駄三分切手料一分
○岩　手
役所五間半に五間芼ふき茶口あつけ口に致しあるヶ所
亥納三百三十八匁二分五厘　被下六十目　七月十二月　前川村　文　藏
亥納三百十匁四分二厘　被下八十六匁　七月十二月　段　村　大三郎
亥納百一匁一分四厘被下四十六匁
亥納七十目三分八厘被下六十目　新田村　伊平次

粉川前　甚右衛門

受負に致し有之候條口定銀幷受負人

二十目　いさや　佐野村　角五郎　八十目　同　東家村　猶右衛門

三十目　同　橋本町　吉兵衛　三十目　同　高橋　林藏

九十三匁三分六厘　所々村々

内

十三匁八分五厘　須河村　十七匁三分五厘　只野村

二十二匁八厘　大次く村　四十目八厘　彦谷村

如〆高

右之通毎年盆前伊都郡大庄屋より當役所へ上納

百七十目　高野辻　鹿子多之右衛門

右者年中定銀高一ヶ月十四匁五分つゝ

上納

九匁　岸長原　庄屋　角兵衛

右は毎年七月に上納

茶致心附け申付有之候を被下

十五匁　井坂横渡し　弁藏

右は七月十二月兩度に被下

五　匁　　長田前横渡し　長右衛門

五　匁　　粉川同　長　七

右は十二月に被下

金壹兩　　丸須　北山惣兵衛

右は七月十二月被下

粉川前役所當分甚右衛門にかし有之候に付かしちん年々

銀五匁　　甚右衛門

茶口取立方聞書

岩手役所改上中下打込十斤に付六分五厘つゝ

右者前方は賣茶十斤に付七分葉茶十斤に付六分つゝ取立候へ共近年件之通取立候事

口銀之外
川運上

岩手より舟積致候筋は百斤に付貳分つゝ

岩手へ舟に積來候筋は百斤に付一匁二分つゝ

下市（一本無）（葉）

百斤に付四匁

是は吉野郡より出候茶口也

西の村より川邊村迄薯蕷口并塩口少々之山方物口役左之通受負に申付有之候右に付年々西の村磯兵衛と申者へ銀十匁被下候由

銀七十匁　　吐木村　平七　喜六

入目判ちん之事

材木問屋五軒并竹問屋二軒

出目銀百目に付三分七厘六毛

役所納銀百目に付三分二厘

小拂百目に付八分

是は取立候銀には百目に八分つゝ取立有之に付丸判代に納る

○松　江　　受負　太田源次郎

一役所無之源次郎居宅に勤當所口役改場所之儀相尋候處東は久三川筋を限り西は小屋境迄相改候旨當時網數跡廻し二帖計之由當所東松江中松江西松江三村にて二百軒余村高千石余有之

○本の脇

一役所四間に貳間半瓦ふき中野村あつけ口に致し有之同村六右衛門也年々十匁つゝ被下取計磯脇小屋兩村は當所より改る

一小網五帖　一縛り三帖　一地引四帖　一手繰十帖

一漁師七十人程　一中高二帖　一鮋網四帖　一柴舟三艘

一蛤突二十一艘　一生魚幷鮑受舟十艘

手繰魚冬分口銀二割二分取夏分口銀二分取

○加　太

一役所五間半に四間半杉皮ふき屋敷二十一歩　一高一斗五合外に一升六合年貢銀亥年八匁余

り入候北之濱に干鮑干場長一丁例年無年貢

一屋敷右之外に六間に五間あり是は無年貢之由

一村高千二百六十八石　一家數四百五十軒

一地引細魚網七帖　但七軒にて持居此人三十人

一いな地引一帖　此人十人　一鰯網五帖　但五軒に持居此人二十人

一八手網三壘　但し三軒にて持居此人三十人

一立網五張此人二十四人　一持網三十二張是は立網釣舟等上り皆持網に加へり申候

一いさり漁此人二十三人舟數〆百六十艘程磯端二艘

一大川役所三間半に一間半糖ふき加左衛門一人つゝ代る〳〵相詰居候事當所都て磯草和布とも

運上銀一ヶ年三百目也右は若和布宜き年は四五十貫目も取上候由之處件之通運上銀纔之儀に

付一通り申見候樣可致事大川取立之儀左之通之由右は手代役人之内一人つゝ相詰候へ共何の

年迚も大樣左之取立より通分にも無之に付受負にも相成候はゝ年少御益さ可相成哉との事

戌年中

一百八十二匁二分七厘

亥年中

一二百四十七匁八分九厘

子年二月より四月十日迄

一四十九匁八分一厘

以上

一伏木役所御手口に相成候節覺書

寛政四子六月朔日より去る申年取立覺

一拾〆八百八十四匁三分四厘　伏木元役所漁分

一二十八〆二百五十四匁一分八厘　同所　山方

寛政三亥年取立

一三十〆九百四十七匁二分九厘　同所　山方

一十八〆七十九匁一分八厘　同　浦方

一二百三十目一分二厘二毛　高津尾御仕入炭三千四百五十二俵に口銀

一七〆三百四十五匁九分五厘　伏木　墟口

一十一〆七百九匁三分一厘　和田　浦方

一三〆四百四十二匁九分三厘　墟谷　浦方

〆二十一〆七百五十四匁七分八厘

寅年伏木浦方取立

正 一〆九百四十三匁一分三厘	二 九百三十一匁三厘
三 五百三十目七分九厘	四 一〆七百五十四匁二分五厘
五 百二十九匁四分	六 七百四十一匁六分
七 一〆九百三十二匁九分二厘	八 百五十九匁七分八厘
九 一〆二百六十四匁七分六厘	十 一〆二百十四匁八分八厘
十一 三〆九百九十五匁八分五厘	十二 三〆三百八十目七分九厘

〆十八〆七十九匁一分八厘

横谷亥年分取立

正 百五十九匁三分一厘	二 二百三十六匁九分二厘
三 六百四匁六分六厘	四 二百七匁五分
五 二百四十九匁九分二厘	六 八十四匁三分三厘
七 三百六十五匁四分八厘	八 百七十五匁五分
九 六十五匁八分三厘	十 五十九匁三分九厘
十一 八百二十目七分七厘	十二 四百十三匁三分二厘

〆三〆四百四十二匁九分三厘

和田亥年分取立

正　一〆四百十三匁三分四厘　　二　七百七十七匁二分五厘
三　一〆八十六匁六厘　　四　九百目四分八厘
五　四百七十四匁六分三厘　　六　二百五十七匁六分七厘
七　八百七十九匁八分四厘　　八　九十八匁二分二厘
九　五百五十九匁三分九厘　　十　二〆四百九十八匁五分一厘
十一　二〆六百七十九匁八分四厘　　十二　八十六匁八厘

〆

伏木亥年分取立

七〆三百四十五匁九分五厘

一材木椵樅檜杉松其外何によらす角物押平し口銀一片に付一分一厘
　但一片と申は十才を云左候へは一才一厘一毛取也
　　尤四の割に付一才四厘四毛才に平し有之
一丸太板類等は見附にて取竹類はひゝろ(ホソヤヽ)其外も同斷
一楊梅皮常法は十〆目に付七匁五分かへ右直段を以二分口之筈之處一歩口に取立有之事
一炭定法は無之候總体一俵に付銀二分取

一雁皮十〆目四匁五分かへ口銀四の割定法之通紙草之事

一流し一挊に付一匁八分取定法無之

一櫨の實十〆目に付一匁取定（法脱カ）無之

一五八霜百本に付五分取定法無之

一木附子一〆目に付三分取定法は二分取

一楮皮十〆目に付四匁かへ二分口定法之處十〆目に一匁取

但是は近浦野島故歟

一棕櫚皮百枚一匁八分かへ一分口に取定法は貳分口

一軸竹百把に付七匁五分取定法不見

一欅榑一丸三匁かへ一分口取定法無之

一椿之實一斗に付七分取定法無之

一山梔子一〆目に付六分かへ四の割取定法は二分口

一澁一樽一匁五分取定法は一斗三匁かへ九の割

一蜜十〆目四匁五分かへ一分口取定法は二分口取

一わらひ繩一丸二十把〆二十目取定法は十把に付一歩七厘かへ二分口

一傘柄竹十本に付二分取定法無之

一茶一丸三分取定法無之

一黄柏十〆目一匁取定法無之

一切組家

一烟草十荷に付一分五厘二毛取定法無之

一雨戸一枚三分三厘定法無之　其外見合

一敷居一挺二分取　右同

一濱麥十〆目二匁五分取　右同

一肉桂十〆目三匁六分取　右同

以上畢

南紀德川史卷之百十二

臣　堀　內　信　編

財政第五

御仕入方　一

緒言

此編は單に御仕入方三役所の事を述す御仕入とは山間僻陬の貧民救濟の爲め産業の資を投入の義也三役所とは御仕入、佐八（ソウチ）、天の川の三をいふ佐八村は勢州田丸領度會郡に在り山田町より三里許西宮川に沿ふ所とす此に役所を置き勢州大杉山及ひ田丸領山分より仕出しの材木を管理す大杉山は大臺山に續きたる有名の深山にて巨材大木森々密稠往古より斧斤入らさるの地多く人跡殆と絶へ摩査量り知るへからすといふ恰も尾州家に於ける木曾山林の如き也　此局の創始は遠く明暦三年に在り天の川郷は大和宇智郡にして郷中入谷山の山林を購求し元祿十二年より役所を設置す亦用材を仕出さしむ口奥兩熊野は滿郡山嶽起伏坦田平圃殆と皆無道最嶮難而して古座新宮北山の三川沿岸の他は村木輸出に足るの水利なし既に田圃僅少農作は自家の食に足らす單に山業製炭に憑て生を營むの外なし深山窮谷の細民固より資料の論をおき動もすれは流離餓殍を免れすして哀れ公租も顧るの暇なき如し於是官所在に局を設け官林乃至私林をも購入金米を貸與して山業に就かしめ或は炭を焚しめ其仕出す處の物材を最寄々々の局へ負荷運搬せしめ以て工費駄賃を支給し尙他の方法により結局窮民救恤の爲に投資する之を概して御仕入といふ也　信嘗て奥熊野に在るの日目睹するに森林欝蒼の間所々白樹の聳立するあり何樹と問ふに是大樅也此樹四方へ枝を突出大に傍林を障碍す伐採輸出の方なけれは幹根へ斧を入れ熱

湯を灌き特に枯死せしむ故に白色を呈する也夫れ如此を以て檜杉角物丸太にて輸送する能はす悉く小割物挽物即ち板貫の類とし又は樽丸となす樽丸とは酒樽を作るへき材料にて長さ(二)[一本三]尺程巾四五寸に木取り竹輪にはめ一と丸にしたる者也

(如何なる大材も皆如此分伐割碎負擔に堪ゆへき様になし又は炭に焚き男は之を肩にし女は頭に戴き三五里の峻山嶮阻を越へ三々五々隊をなし日々最寄の御仕入役所へ運搬し來り賃錢を受け歸途は直ちに木の本尾鷲等市ある所にて米鹽を購ひ生を營む山に在る木挽炭丁へも皆御仕入方より米鹽工費を支給す故に若し數日の雨天あれは溪流水増し渉り來る能はす忽ち飢に迫る也)

三役所元各別と雖も享保十五年若山湊紺屋町に元役所を置き一つに統轄するに至る然れとも旧來の名稱を存して近時に至る迄も御仕入佐八天の川三役所とは唱へ來れり[一本ナシ](前記樽丸の事本宮元極に丈三丈五尺にて伊丹樽丸六つ分出來但長一尺八寸つゝ樽一つに五尺五寸程に付右丈にて六つ出來とあり)

一右仕出之物品各役所に蒐集したるは江戸大坂等の各地へ船運し以て販賣其收利の內より局員小吏雇丁の給料旅費及ひ局費を辨し餘利は之を本局に集め蓄積乃至利殖を謀る是を御備へと唱へ國家不虞の用に備具するの組織とすされは官民兩得の便法にして年久しきに隨ひ經驗周到處理宜しきを得て事業漸次に擴張收利亦尠からす創始以來明和六七年迄に國庫を補助するもの十三万七千餘金爾后時々數万金を献し數回の大土木を負擔し元治慶應間には國初以降未曾有なる蒸氣の大艦二隻を購入する等皆御仕入方の盡す所とす夫れ會計局(御勘定所)に在ては歲入出一定の成規あつて一朝年凶歉なれは國用忽ち缺乏し然らさるも臨時の國費は屢濫出帑藏常に空乏を告るを憂ふるも商賈的利殖を謀るの法なく又權能もなけれは止むなく献金を封內に募り(御立用金と唱ふ)或は債を坂勢等の豪商に仰き(御融通と稱す)以て彌縫の策に止まる然るに御仕入方は會計局以外に獨立理財を講し一方に窮民を救助し一方には國用を補益の局たれは世々最も利用せられ就中　舜恭公には愈々奬勵を加へたまひ

御晩年尚御苦慮あらせられる故に南熊野に限らす苟も救濟を要すへき僻地又は物産集散の要區及ひ江戸京攝江濃の如きへも出張所を増設し兼て貸金流通の道を開き專ら利倍殖財の方を講策せしめらる　齊恭公薨逝の後水野土州執權の時頗る改革を行ひ流弊を矯正する處あり夫れ當局ありし以來二百年に近し其間多少の變遷沿革ありしは必然なれとも其詳なるは得て知り難し唯維新革政に至て産物方と改稱續て之を廢し各地の出張所を停止して民政局に委ね更に開物局を置き知局事を命す是を最終の一大變革となす然れ其幾許ならすして廢藩置縣に遭遇せり

一各部各地の支局は五六十ヶ所内外の僚吏亦數百人頗る大局とす故に記錄の簿冊枚擧に堪へさりし也然れ其今存するものなし唯元役所の大帳と稱するもの縣廳の火災を免れて遺存す依て此簿冊の要綱以て參考に足るへきを撰抄尙他散見のものを補綴し此編を成す大帳亦一雜記に類し完備のものに非れは支離闕漏多く爲めに事由不了を免れさるあり

一各地に問屋なるものを命して物品を委託し販賣を處理せしめ定規の口錢を付與するの例也之を御出入町人といふ大坂豪商輩へ金銀貸借流通の事を斡旋せしむる者亦御出入と稱す是輩へは御紋付實章高張提灯箱提灯を貸與鑑札を下附す當時に在て紀州御用を冠すれは威權大に行はれ自己の商業上のみならす出火非常の便を得悪漢の脅劫等を免るゝを以て無二の名譽とし欣然事に服して敢て辭らす特に功勞ある者へは御道具被下と稱し室具文器等を賜ふ多くは國産の製品を用ひられたり

一問屋を命し又金銀貸與の者へは根質物と稱し其所有の邸宅地面乃至田園を擔保に徵して証券を納せしむ此時判元改めと稱して屬吏出張質物を檢査して許否を與ふ即ち今の抵當物の謂也

一本支局吏即ち見廻り役、元締、手代、役人、炊（カシキ）（炊事に服する雇丁にて兼て局務に與る）の類更互往來頗る頻煩也之か旅費人馬賃錢等の遠近街道の本（枝）（一本支）により定額差等ありて支給す之を立物と通稱す成規定立の義ならんか

元簿細雜の記あれ共略して唯大概を掲く

一在々出張所仕出の物品輸出の時所在の二分口役所へ口銀を納付す之を御口銀と唱へ竹屑片材の鎖も免るゝ能はす逐品悉く賦課の定額あつて豫め二分口役所へ告示し置也若し反則の時は物品は該局に沒收せらる二分口は國庫の歲入に屬するか故也御仕入亦官設とは雖も其間の規律は相互確守して動かす此口銀賦課の定額區別等元簿に記載多しと雖も今是を二分口役所の部へ分載類集以て該局の通覽を便ならしむ

一原簿紙數一千丁に餘り頗る冗雜を極め且年次交錯秩序不倫なり故に左の如く項目を分て類記し閲覽に便ならしむ

三役所發端

在々出張所　湊元役所

定　　銀　本支局

役　　員

規　　定　本支局

業　　務

諸仕入雜件

手　質
他所貸付
江戸産物方
總出張所損益調査
益金上納
御用村御普請
蒸汽購入
圍米々捌方
浦組備
青皮獻上
御家中御貸扶持
仕入板拂下け
維新改革
江戸御仕入方
（在々御仕入方）[一本ナシ]

御仕入
三役所發端

文化五辰年十一月進達書

一御仕入發端之儀は兩熊野之儀邊土故稼き薄く商人共へ利潤多くとられ百姓弱り御年貢も滯候付元祿十三辰年頃より仕入相初り專ら稼かせ候樣子御座候尤其節は町人抔より取計候趣に御座候

一其後在方役人抔取扱積銀も有之趣に候得共御勘定等も碇と相立無之其後二歩口奉行にて取扱享保十五戌年より湊御仕入元役所出來仕候て彌出入手厚く相成江戸大坂へ取引宜相成明和二酉年立石喜大夫初て頭取被　仰付丹精仕法令も相備り仕入向丈夫に相成御有金銀も多く御家中へ貸扶持を初在々役所湊役所等納屋藏等も普請仕明和六丑年には十三萬兩餘御繰合に相立御斷延に相成申候其後漸く相劣り近年は仕入向も手薄相成御有金銀も無之可也に取續候迄に御座候(處)[一本ナシ]去る丑年一躰御改正之御趣意に從ひ元役所在役所とも惡弊を省き諸事古來より之規矩を以相糺改革仕候處仕入向江戸大坂問屋とも手前迄も一變仕諸色物捌方も宜敷追々仕入も相增一兩年は段々御有金銀も相增御仕入役所受前之外御用にも相辨候程に相成候儀に御座候何卒此上彌手丈夫に相備り御救御手當ては勿論諸產物之交易御國益にも相成候處を目當てに仕一同丹精仕候儀に御座候

一佐八役所之儀は明曆三酉年より大杉山御材木仕出申候其以來田丸領御山地山奧野御山地山とも御救に相成候樣百姓共稼せ申候田丸山分在々枝役所之儀は百姓共へ炭仕入々燒出させ其外品々仕出させ難澁村方御救に相成候樣取計御德用銀は役所に積置申候

一天野川役所之儀は元祿十二卯年和州天野川鄉入谷山と申所買求御用之材木初て仕出し申候由にて入谷役所と唱申候由享保四亥年より天野川役所と唱申候御領分幷和州領山々買受御材木仕出し所々御作事方在々本計御普請相渡し餘木は大坂へ相廻し賣捌き御德用銀は役所に積置申候

記中御斷延とは元國庫へ貸付の金なるも返還を斷り延ふるの義にて結局呈納せしむる事なり枝役所とは作八元役所より山分在々へ出張の支部をいふ前記發旦の事尙左の記あり大同小異と雖も亦參照すへき處あり

文化十三子年四月進達書に

救御仕入發端之御趣意は兩熊野邊鄙之萬民困窮不致樣稼方を附け仕出物類者買上遣し其餘力を以積銀を拵飢饉之貯に致置鰥寡孤獨へ御慈悲を加へ給ふ爲之御趣意にて元祿十三辰年より相始其比は町人共へ仕込方被　仰付下々稼方相增積銀も多く出來御勝手御繰合にも十四五萬兩も差上仕御座候享保十五戌年より湊御仕入方御取建手代役人御召抱町手代をも御雇入御救稼方專取計延享比より町手代は追々相減明和二酉年より初て立石喜太夫頭取被　仰付手代共迄も本計方同樣之御取扱相成手代共病死等仕候得は相應に悴をも御召抱御慈悲と唱業に至兼候者迄も御召抱有之儀に御座候元來商賈之業にて利倍之才氣無之候ては難相勤候處御人撰も無之御召抱有之候付段々不功者成者多出來御用向者思召之通へは貫きかたく乍併多人數之儀に付稀には宜者も罷出差加へ在役所へ相詰させ候得者功者成者手儘に相成奸智之者之爲めに不功者は尾先に遣ひ工事に乘り御作法背候者も御座候付迷惑恐入申候付先年人之遣方を相考見候處御召抱人を撰小人數に致し其餘は能く事を馴候町人を撰み日雇に仕町手代と唱へ御用に遣ひ御用無之節は斷申候由當時も先年之通御用有之節は町人共之內能く事馴候者共を撰み日雇仕度左候得は御失却も無御便利には至極宜敷且御召抱御人數段々相減往々御爲にも可然と奉存候付內存御達申上候云々

御仕入方

一延享二丑年より鈴木次右衞門在方頭取より御仕入方御用兼勤被　仰付御座候右より已前御仕入方御用筋頭取相勤候筋何等帳面に相見へ不申候

佐八方

一明暦二申年より初り候哉右之頃より御勘定帳相見え田林茂大夫田村佐左衞門と右帳面に記し御座候得共右兩人御切米帳に姓名相見へ不申候付頭取にて有之候哉其段難相分御座候

天野川

一元祿十二卯年御傳物書より吉田次郎大夫天野川材木御用勤被　仰付
右之通帳面に相見へ夫より以前右役所帳面に相見へ不申候

八月

一大杉山御材木仕出し佐八役所支配に相成候は明暦三酉年に初る
一大内山炭方佐八方支配に相成候は延寶五巳年初る
一宮川長在々炭方佐八支配相成候は同六午年に初る
一大杉山栗ヶ谷御遷木杣入停止之儀は寶永二酉年三月極る
右之通

御仕入方
佐八方
天野川

一寶暦三酉年合併

御勘定調書に

一佐八方御仕入方天野川右三役所去酉年より一役所に相成筋々勘定は別々に仕上け申候佐八役所之儀前々より仕來之趣にては在々御救にも相成不申に付稼方仕入借し等之儀御仕入方取扱同様に取扱せ申筈に付御仕入方元〆共佐八役所も相兼勤させ申事候右之趣御勘定所へ御申越可有之候以上

寶暦六子九月二日　　小山田庄助

服部八右衛門殿

在々出張所

一享保十三申年始 有田郡山保田組　寺原御仕入方

一右同年始 日高郡中山中組　高津尾御仕入方

一天明八申年より始 日高郡中山中組　下越方御仕入方

一寶暦六子四月始 同郡南谷組　印南御仕入方

一元祿十三辰年始 享保七寅年始 正德五未年相止 口熊野周參見組　大野御仕入方

一天明八申年十一月始 右同斷　周參見御仕入方

一寶永元申年始 同九辰年始 享保三戌年止 右同組　市ヶ野御仕入方

一寶暦四戌年始 口熊野江田組　江住御仕入方

一天明八申年七月始 同　大谷御仕入方

一元祿十五午年始 同古座組　高川原御仕入方

一寶永元申年始 同三尾川組　西川御仕入方

一天明三卯二月始 新宮領色川組　小色川御仕入方

「安政二卯年三月水野土佐守領分に村替に付　御領地內へ場所替の旨達す然れとも后沙汰止となる」

一寛政五丑年十一月始 口熊野四番組　眞砂御仕入方

一享保七寅年始 口熊野四番組　近露御仕入方

「眞砂近露の兩役所一旦引拂後再興の事末に記す」

一寶永三戌年始 奥熊野本宮組　本宮御仕入方

「安政二卯年三月村替に付場所の件小色川に同し」

一元祿九子年始尤方と申別役所にて有之候 所元文五申年十月御仕入方一所に成　宮戸御仕入方

「新宮神倉社中持地當役所幷納屋建地下年々銀六十目之地賃拂にて借受有之處社中一同難澁に付地面不殘買上願書寺社奉行より
廻付仍て金三十兩にて文化七午十二月買上る」

一寶永三戌年始寶暦三酉夏宮戸役所へ 一所成相止寶暦九卯夏二度始る　成川御仕入方

「安政二卯年五月村替に付場所替之件小色川と同斷」

一元祿十五午年始 奥熊野木本組　木本御仕入方

「右同斷」

一正德元卯年始 同北山組　寺谷御仕入方

「嘉永五子年五月二歩口役所へ引渡是迄の仕込貸金百四十八貫四百六十七匁一厘受取」

一　寛永二酉年始（一本作巳）（奥熊野木本組）　新鹿御仕入方

一　同四亥年始　同北山組　大又御仕入方

（寛永九子年五月二歩口役所へ引渡す是迄之仕込貸銀八貫六百九十六匁四分九厘受取）

一　元祿十五午年始　奥熊野北山組　尾鷲御仕入方

但相賀組古本役所安永三午五月尾鷲御仕入方江引取古本止む

一　元祿十五午年始　奥熊野長嶋組　長島御仕入方

但同組中桐役所天明六午年始享和三亥年願に仍て相止む

錦役所之儀享保四亥年始安永二巳十一月佐八方へ相渡御仕入方相止

一　享保元申年始　和州　鷲家御仕入方

一　元文五申年始　和州　越部御仕入方

一　享保十五戌年始　若山　湊御仕入方

一　明暦三酉年始　勢州田丸領　久豆役所

一　同年始　同神領　大湊役所

一　初年相分不申候　勢州田丸領　駒ヶ野役所

延享元子年迄御仕入方支配にて有之候處同年より佐八方支配に相成候事

一　享和二戌年始　勢州松坂領　西之庄役所

一 安永八亥年始 同領　與津役所

一 明暦三酉年始 同田丸領　天ヶ瀬役所

一 同年始 同田丸領　瀧谷役所

一 延寶六午年始 同田丸領　熊內役所

一 同年始 同領　打見役所

一 同年始 同領　船木役所

一 同五巳年始 奥熊野　二鄉役所

一 同年始 同領　錦役所

當時崎役所附

一 享和元酉年始 田丸領　崎役所

一 延寶五巳年始 奥熊野　池坂役所

當時二鄉役所附

一 延寶五巳年始 奥熊野　金揚役所

一 延寶五巳年始 奥熊野　樋ヶ谷役所

一 延寶六午年始 田丸領　村山役所

一 明暦 若山　湊役所

右若山湊役所總曲輪之儀は一圓佐八御材木藏と唱御村木奉行西尾仁兵衛藤田彌太夫兩人被　仰付手代も二人有之候處貞享二丑年御村木奉行退役被　仰付大杉山奉行兼勤被　仰付候由御座候

右之如く記載あり此餘尚前後に増設之個所多きも記載悉く備らす唯大帳に據て摘載すれは

湊元役所

全部統轄之局にして享保十五年若山湊紺屋町一丁目御材木藏構内に設置す前記明曆若山湊役所とあるは明曆三年勢州大杉山の材木を仕出し若山へ廻送其貯藏の爲局を設けて總御材木奉行管理す依て初めは佐八御材木藏と唱へたり然るに享保十五年其境内へ元役所を設置御材木藏と區分し後御仕入頭取は總御材木奉行を兼務且統轄の局なれは自つから湊役所と單稱するに至れり而して御材木藏は旧に依て存置す中古の圖左の如し

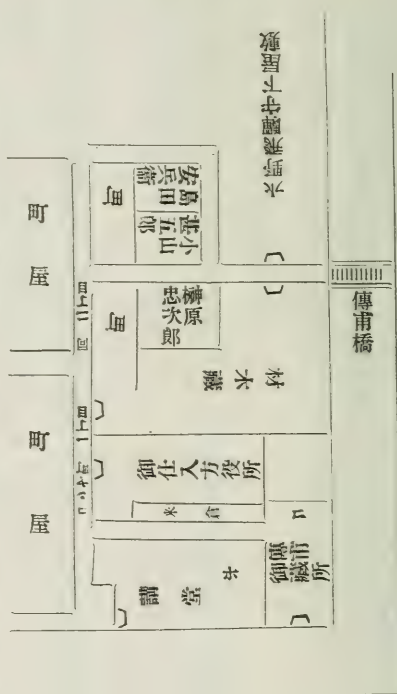
「按に當時の現在は左の如し

イ　傳甫御殿の處にて建物其儘中雀門も存し雄小學校となる

ロ　半分は元御材木方にて建物少く入堀有て材木置場當時紡績會社

ハ　元久野丹波守邸當時織布會社

ニ（當時倉庫會社）

ホ（當時造酒家南方常楠）

一事務擴張に隨ひ家屋增築地所囲入等之事不𢭏記載甚不連續にして事實不判明也暫く原簿の儘を抄出す

文化五辰年十二月三日

一御仕入方仕出之船木役所構内手狹にて置場差支に付役所構外西に瀧野角左衛門總領地十二間に十八間之地所御仕入方御同地に被成下候様政府へ伺相濟右之間に巾八尺折廻し長五十二間程之細道をも取込家作相對共金七拾兩にて用地に取計

一役所構造之躰裁如何ありしや知りかたしと雖房舍倉庫都て完備せし如く既に御長屋定と稱する

ものあり參考に掲く

　但川向ひ御村木囲場官房の如き觀あれ共詳ならす

文化十酉年十二月御長屋定之事

一百間堤御村木方役所詰之筋常居御長屋へ參候事不相成筈

一御役長屋之家内役所へ參候儀は不相成筈

一御役長屋へ常居之者共之親類は日之内罷越候儀者勝手次第夕六つ時切にて罷歸候筈

　但他役馴染之筋も一切附き合無之樣若參不申候て不叶要用有之節は其附き合之御長屋より役所へ相斷御構内へ入れ可申候

一御長屋住居は六つ切にて往來不相成筈御用にて夜渡之儀は勝手次第夜分相渡候得は役所へ斷渡舟斷候上渡可申事

一御長屋小破之儀は自分凌之筈

一湯殿雪隱垣廻り自分凌之筈

一轉役等被　仰付候得者其日より十日切御長屋開き候筈

一御長屋住居之者共役所御拂筋有之候共一切買申間敷候事

一御構内之儀は晝夜共心を附如何之品相見候得者早速可相達候

一御役所詰之筋私用に付夜分相渡候儀は不相成筈町方へ用事等有之候得は（日之内）[一本ナシ]仲間共頼合參候儀は不苦事

酉十（一本ナシ 二）月

一御材木置場に相成候（一本アリ 湊）紺屋町下より久保町下迄之向洲未た川普請は取計不仕候得共繪圖面之通取計置候得は大躰之水には相凌候付此節より普請に取掛御材木囲方取計候付御達申上候

一御材木囲方取計候付同所へ番人役所圖面之通此節取建仕候付是又御達申上候

四　月

右は文化十一戌年なるへし又湊利兵衞なる者へ湊領向洲見取畑地此度御用地に成り御代官達之品も有之旨銀十枚被下たり本記材木置場に關したる事か

文政四巳年十一月廿日進達（一本書 濟）

一御仕入方續湊紺屋町一丁目南側表口七間半持主南川德次郎家買上

御仕入方御用屋敷と唱へ上方町人共出府之節滯留爲致候事

右は大坂幸橋御屋敷御用筋彌手行能御仕入豪商等若山へ出府可致處若山に宜敷旅宿無之元來豪家に育ちたる町人共榮耀に暮し附候哉殊之外難儀狩早く引取度趣不手行之品も有之旨にて本記之賣家買入旅宿旁御用談所に取建可申との事也

本記家屋敷は表口七間半裏行町並十五間土藏二ヶ所其外建物不殘にて代銀八貫五百目にて永代賣なり

文政十亥年四月廿七日

一西濱御殿御手狹にて此度御取入地相成候付御仕入方持地面左之通御用に付差上可申旨御仕入頭取

へ被 仰出

表御門前　下々畑九畝廿四歩七分五毛

外に御殿北之方にて無高地一枚とも

一天保六未年二月に傳甫御間取之記あり局内に殿舎をも建設傳甫御殿と稱したる如し創立年月其他詳ならす

御座之間　同御次　御縁頬　御三之間

御廣間　同御次　同御二之間　同御三之間

御茶所　御同所御次之間　御同所御三之間　御膳所上之間

御膳所　御臺所　御玄關遠侍　大廊下

同次之間　同二の間　役所玄關　同中之間

同上之間　御仕入元掛り詰所　同入頬　同次之間

廣間　同入頬　同茶所

翫月亭を　燕月亭　御數寄屋

天保十一子年八月向後傳法御殿御普請御入用地場御仕入方勘定立に相成筈伺濟の事あり

一安政三辰年二月久野丹波守 御家老 傳甫中屋敷地面之内東北之方に有之空地と南隣町家地面二百七十五坪と振替に成り三百坪を御仕入方へ買上けに取計之儀兼て政府へ進達相濟永代借り込棟役間打等受不申筈証文町奉行方と取替す

右に付貫入代金三百圓丹波守家來へ渡す

傳甫（一本町記 地） 東西二十二間 東之方にて南北十五間 西之方にて南北十二間五尺 三百坪

右之意義解しかたき處あれ共元簿之儘を摘錄す

各出張所

一此分亦創設發旦年次分合廢止不判然之もの多く且遺漏もあるへし

在々出張所發旦と各出張所定銀の部と併せ見るへし

江戸八丁堀御仕入方

後濱町御仕入方等追々變遷

發旦等不明唯左の記あり

御仕入手代江戸八丁堀御藏屋敷へ相詰候儀は延享二丑年二月より始り候事

文化十五寅三月

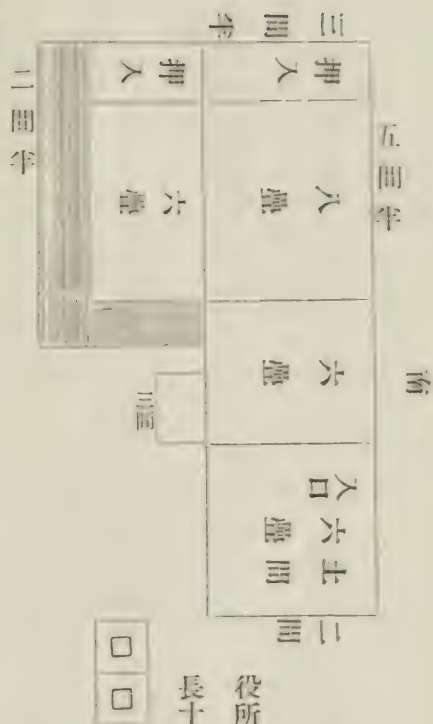
一江戸八丁堀炭方役所を以來八丁堀御仕入方と唱候等相極候事

文政二卯年三月

江戸八丁堀御仕入方役所新規出來繪圖幷材木代作料日雇賃內造作疊建具代共總御入用高左之通

一銀二貫三十四匁一分二厘

文政二卯年三月廿六日引移る

役所地面構内
長十五間横九間

文政二卯年八月

江戸八丁堀御仕入方手代共入船炭見分之節是迄雇船致し月に兩三度つゝ罷越右入用は御勘定拂に取組候得共紛敷品も有之候付同所南八丁堀松葉屋德兵衞と申者へ金二十兩貸渡し返納之儀は月に十匁つゝ相納させ品川船見分之節御用船相勤させ候筈

一文政十二丑年十二月廿一日御屋敷悉皆（類燒）（一本無シ）依て翌文政十三寅年二月濱町牧野山城守中屋敷を御相對替に成り濱町御屋敷と唱へ御仕入方引移爾來濱町御仕入方と稱す

一安政三辰年四月深川小名木澤御屋敷へ移り同六未年三月尙又深川万年橋御屋敷に移り爾來深川万年橋御仕入方と唱へ以て維新に至る

一文化十酉年三月取建　　大坂　幸橋御屋敷

同年五月より役人相詰

一天保六未年九月十日幸橋出張所同所石町に出來常詰役人一人炊一人

一天保十一子年三月大坂島町一ノ三（二）丁目御仕入方出張所御勘定奉行にて入用に付同役へ可引渡旨政府より差圖により四月十八日悉皆御勝手方へ引渡旨記あり創設發且不詳

口熊野　大川御仕入方

同　川口御仕入方

一文化十酉年新規取建

文政元寅年五月廿一日

右兩役所文化十酉年新規取建村木丸太類仕出させ候得共不時節に付年々御損亡相立庄屋共も損失之上流失も有之旁難澁相嵩仕出し方相休當時仕出し方取計もの共聊ならては無之候付右兩役所共引拂御用向は高川原御仕入方眞砂番所にて取扱致候筈依て兩役所とも五月切にて引拂候事

一文化十酉年七月設置　　伊都郡　橋本御仕入方

左之通政府へ進達之處七月六日允可

一産物交易之儀手廣取計下々御救に相成候樣橋本へ御仕入方取建吉野郷村木仕入其外御救肥手之世話等御代官內存之通手質又者肥し等貸渡遣候得共御救にも相成其外他所へ國益を取られ候品にも相考御國益御救に兩全之業に相成候樣取計可申心得に御座候乍併同所は人氣も不宜場所にて中奸之者共は勝手に不宜候得は何歟と申唱候風儀に御座候得者先御領分諸仕入之儀は跡へ廻し此節吉

野郷仕入而已に打掛其内百姓共へも業にて利害教納得候様速に取扱候様可仕と奉存候
一橋本御殿内御不用之場所御代官所に相成候通御仕入方へも御貸渡被成下候様仕度候左候はゝ御代官中合彌御救も手行宜工夫之通業相整候得は御益を以追々御殿御建前御修覆をも仕追ては御宿にも御差支無之様取計御仕入役所は別段に取建候様仕度奉存候前段之通相成候得は此度新に御仕入役所取建候御失墜も無之御手行可然奉存候付奉伺候

六　月

右許可に付御殿内へ御仕入方役所設置其後大破に付御仕入方より修繕取計御座所向は　西濱御殿へ御引取に相成然る處文政六未年六月伊都郡中一揆起り及亂妨建物不殘打崩跡御長屋其外掛塀共御仕入方より諸入用五十一貫三百五十目程損分相成同所之儀者人氣甚不宜付御仕入方出張所此節引取らせ度依て別段之御殿預り被　仰付候様にと文政七申年十月頭取より之内存進達之處翌八酉年二月許可あり依て同年三月御代官所へ引渡し詰役人共同六日に引拂

明御長屋等當分上組大庄屋共役所に貸渡したる趣御代官より申來る

一文化十五寅年　　日高郡　福井御仕入方

天保十四卯年六月上柳瀬友四郎持地を借受引移

一文化十五寅年　　口熊野　小色川役所出張番所

一同年　　船津役所

天保十亥年七月渡利村役所村方依願船津村へ引移同村彌三（次）[一本郎]と申者所持之家屋敷金廿兩にて買上の旨あり

一文政六未年十一月取建　泉州　堺御屋敷

一文政七申年十月　江州　大津出張所

近江屋專三郎抱屋敷借受

文政十亥年五月御用所出來引移

一同八酉年二月　京都出張所

烏丸三條上る夷屋新兵衛抱屋敷借受三月より役人詰文政十亥年二月御屋敷內へ御用所出來引移

一同十亥年九月取建　勢州　松坂御仕入御用屋敷

一天保四巳年十二月　攝州　兵庫御用所

發旦兵庫何町に設置せしや不明

慶應三卯年東出町御屋敷取建して左之地所買入さの記あり

兵庫東出町　土藏八ヶ所　持主　淡路屋善右衛門
金津屋富五郎

代銀二百八〆八百四十六匁

同　屋敷地　一ヶ所　同　魚屋嘉兵衛

代銀三〆五百十匁

古屋取拂賃萬端入用　銀十二〆五百目

同　屋敷地　一ヶ所　同　明石屋久次郎

代銀三〆二百四十目

同　屋敷地　一ヶ所　手操屋九兵衛

代銀六〆四百八十匁　家取拂料銀六〆百二十目

同　屋敷地　二ヶ所　同　魚屋嘉兵衛

代銀四十二〆三百六十目

右買入屋敷地切替諸入用歩一銀座頭祝儀振廻膳料張紙代筆者祝儀等掛り內

合銀十七貫七百八十三匁四分六厘

一天保九午年十二月　　　　高川原役所

此節間口三間半に二間半一ヶ所同村市右衛門より銀百七十目にて買上地年貢年々二十目つゝ下け遣す（外に空地共都合十四坪）一本ナシ

一同六未年　　　　城州　伏見御用所

一同　年　　　　勢州　伊勢路作八出張所

一同七申年七月　　　　江州　八幡出張所

八幡新町三丁目籠前屋才次郎抱屋敷借請に付き御勘定立候旨見あり

一同九戌年　　　　美濃　大垣出張所

一同　年　　　　古和御番所

一同十亥年　　　　瀧　番　所

一天保十二丑年　　　　長島組大原番所

奥熊野十二郷役所出張

一弘化三午年十一月　　　　喜角御仕入方

一同　年　　　　南部御用所

同年十二月役所出来に付来年より定銀等之事あれは已前より設置の事ならん不詳

一同年十二月　　　　松島出張所

一同四未年　　　　有田郡　箕島御仕入方

嘉永二酉年十二月八日役所地面建物共買上切取計屋敷一畝廿一歩代銀二ヶ目の旨見あり

一同　年　　　　熊野四番組　眞砂御仕入所
　　　　　　　　　　　　　　近露御仕入所

先年役所引拂之處兩村依願再び設置　御救貸米々小賣等は四番組に限り時々の相場に不拘兩替六十四匁替に定貸下取立共同相場　炭方仕入山代銀手當貸等は九六錢百文を以て銀壹匁に立る

一御仕入方已前引拂之節建物地面共村方へ被下之處此度組内依願再與に付右建物地面共役所藏等は普請取繕ひ差上仍て御年貢小入用并新規藏地賃は村方へ下け渡之筈

先年引拂之年月等不詳

一嘉永元申年　勢州　白子御仕入方

一同四亥年六月　同　松坂新町御仕入方

先達て新町に白子御仕入方出張會所さ唱へ手輕町家買請御用向取扱來り候處追々主向も立見込宜敷此度役所を構へ普請取計役人詰切らせ度旨伺濟之旨記あり

一勢州松坂仲町に御仕入役所有之文政十二丑年四月定銀取極之事あれは其以前より之事たるへきも記之存するものなし慶應四辰年(十)(一本アリ)二月御勘定奉行より政府へ伺濟取計之趣あり

勢州松坂御仕入方より三領在町貸方は此時勢に付格別上下之爲方に不相成趣にも相聞候付向後手を〆丑三領松山方年々益金此表へ積置等之義昨年御仕入頭取此表へ罷越候節爲申見候處他領へ貸付之義は融通都合も有之候付是迄之通居置御領分在町貸付之儀には此節より相止候ても何等差支無之右代り斯る時勢に付産物筋專御世話も御座候にゝ御都合可相成旨相達候趣若山より申越候付達之通取計せ可申旨奉存候此段相伺候事

右伺濟に付其通り取計左之通松坂詰御仕入頭取へ達す

三領松山方之儀向後於此表年々御勘定仕上目(達)(録カ)相達益金は當所御仕入方へ積置可申事

但目録寫年々若山へ相廻可申事

此表新町御仕入方を中町御仕入方へ引合取扱可申事

一同年八月三日取建　和歌出島浦御仕入方役所

左之通御家老より南出平左衛門へ達す

和歌出島浦近年不漁浦方難澁魚問屋共も困窮に付同浦へ近浦より積廻り候諸魚等仕切銀問屋共手前差支候付同所へ仕切所御取建被下候樣右問屋共願出雜賀組大庄屋許より天保十亥年同所へ仕切所取建同組杖突一人つゝ相詰　上より御貸下け銀之廉を以仕切銀貸下融通取計來候處近年別て浦々不漁打續其上米價高直等にて一等難澁之趣相聞右仕切所出來後同浦にて賣捌魚代之內步引も多有之且魚代錢缺等も多夫是彌以難澁之趣相聞候付向後右仕切所相止爲御救御仕入方役所同浦へ取建是迄仕切所へ爲利分代り賣捌魚代之內一步五厘通問屋共より相納させ候得共此度格別之品を以半分通り御用捨七厘五毛は漁師共幷船手へ下け遣魚代錢も聊缺無之樣夫是浦々御救之御趣意相立候樣行屆宜御取計事　八月四日出張す

岩出番所口前御仕入方

一嘉永四亥年月缺

御家老より御仕入方（小〔一本ナシ〕）頭取へ達

御趣意之品も有之候付紀の川丈け岩出番所口前之儀御仕入方へ引受させ業合取計せ候（等之〔一本ナシ〕）間役人爲相詰萬端行屆宜被取計事

岩出番所是迄之上り銀高員數も有之に付一ヶ年引受高之儀は御勝手方へ申合宜被取計事

一ヶ年上納高

銀四百十三貫目也　　岩出番所

右は一ヶ年本行銀高見當業取計候樣

一同五子年十月手初　神野々役所
一同　年　和深御仕入方
一同　年　日高郡 三尾御仕入方
一同　年　同 横濱御仕入方
一同六丑年　塩津御仕入方
一同年三月手初新規　粉河役所
一同　年　小畑役所
一同七寅年　評定所御仕入方
一安政五午年　御園御仕入方
一慶應四辰年　川端役所

定銀

定銀とは局用之筆紙墨薪炭燈油厨具等一切之費用一ヶ年分の豫算を定め其定額内にて支弁の責任を負はせ浪費を防くの法也從來此法によりしや不分明なれ共原簿定銀の記を摘載すれは概略左の如し

湊元役所定銀

一元役所定銀は文化十酉年正月より月々の定銀を定めし處文化十三子年より一ヶ年額に定む則左の如し

一十八匁四分　帳　　場
一三十一匁五分　富國方
一二十五匁八分　御囲米方
一五十五匁　炭　　方
一三十八匁　總御材木方
一十二匁　佐八方
一五十六匁　御仕入方
一十九匁　小買物
一十二匁　融通方
一三十五匁　皂　　座
一三百八十七匁九分一厘　墓　　所

内

三匁九分　筆墨紙定銀
百二十一匁八分　燈し油代定銀
二百十二匁四分　薪代定銀
三十一匁四分一厘　諸小買物雑用
一十一匁八分一厘　役所煤取入用

一六匁五分九厘

外に

一火入炭四十二俵

右帳場向は局中の分課にして當國方とは利殖課なるへく奥座は頭取の手許に在りて機密に預り尤権力ある任なり小買物と
は臺所諸具修繕桶輪かへ水ト釣瓶縄箒類雑品調達との事也當事の銀相場大凡一兩に六七十目なりしか筆一對二分墨一丁八
厘半紙十帖二匁四分鼠半切千枚四匁といへる如く物價の下直實に可驚されはこそ斯る僅少之定銀にて一ヶ年を辨し得し也
乍去後物價騰貴に隨ひ改正せり共略左の如し

天保十亥年十二月改正

銀八百三十八匁　臺所定銀

同六十一匁五分つゝ　表門番所炭改役所一ヶ所つゝ

同五十八匁五分　御金藏番

此分安政二卯年二月廿九日百五十目に改め尚万延元申年十一月百六匁増銀に至る

一元治二丑年二月在々出張所定銀従前之倍増に改正之同時に左之分倍増に定む

銀百十二匁　「元五十六匁」　金部屋

同廿九匁六分　「同十四匁八分」　仕切方

同廿四匁　「同十二匁」　佐八方

同三十六匁八分　「同十八匁四分」　帳場

同百十匁　「同五十五匁」　炭方

各出張所定銀

文化七午年三月元役所より在々出張所へ達

一在々役所にて小買物類別段に年中入用高年々頭取了簡之上濟通出し候得共平しを以役所定銀之内へ左之通相極候付別段に書付差出不申筈尤普請營繕之儀は其節々願出候筈役所々々定銀相究候事

佐八在役所々々厘掛入用并定銀共先達て改正之節割合を以相減させ候處右にては凌かね候役所々々も有之趣に付此度相調させ候處無據筋も有之候付別紙之通相定候間不紛様御勘定帳面へ取組候様夫々可相達旨御申付可被成候已上

三月廿五日

記中左及別紙と云は次記甲乙表の分也（元簿は表にあらす）本記已後新定の分亦尠からすして前後區々數十項に散記し尤錯雜を極め不堪煩依て之を摘集略記乙號表となす而して彼是照對し見るに定銀增減之沿革乃至局々存廢分合之畢竟相貫かす甚た不了多し蓋し筆記の遺脱ならんか結局元治二丑年に至て從來に對し倍增となす依て終始の體裁簡短視易からん爲め之をも表中に加へて朱書す朱書なき者は其當時廢局と察せらる全く朱書之分を輓近之有さまと見做すへし

表中炭厘掛りと云は仕出し炭一俵に對し厘毛を其局に扣除し此料を以亂俵を直し缺損を補足炭梅印の焚炭乃至道路之修繕炭竈換造等之費に充るを云

表中第四の欄增額の年次は不明也

在々出張所定銀表

甲　號

役所	一ヶ年定銀	炭運掛	増額	「元治二丑年二月倍増」
金揚桶ヶ谷	六十目つゝ	一俵に付六厘		
船木		同 三厘五毛	百九十六匁二分四厘	「三百九十二匁」
天ヶ瀬		同 三厘五毛	四百四匁八分	「八百九匁六分」
瀧谷	百五十目			
錦	百五十目			
駒ヶ野		同 四厘	二百十六匁三分五厘	「四百三十二匁七分」
村山		同 三厘五毛	百(四)十四匁一分（一本九）	「三百八十八匁二分」
奥津	三百目			
崎		同 三厘五毛	四百五十目	「九百目」
本宮	四十目	炭六十俵	百六十六匁六分三厘	「三百三十三匁二分六厘」
宮戸	二十五匁	炭十五俵		
成川	三十九匁	同	三十一匁三分六厘	「六十二匁七分二厘」
長嶋	三十七匁	同三十五俵	四百十六匁四分	「八百三十二匁八分」
尾鷲	二十四匁	同十二俵	百八十八匁五分七厘	「三百七十七匁一分四厘」
大又	二十五匁	同十二俵	百三十八匁四分八厘	「二百七十六匁九分六厘」
市ヶ野	六十目	同五十俵	二百三十三匁八分四厘	「四百六十七匁六分八厘」

村名				
周参見	四十目	同十二俵	二百三十目四分二厘	「四百六十目八分四厘」
江住	三十八匁	同三十俵	三百十五匁二分	「六百三十目四分」
木本	三十七匁	同六俵	三百十三匁七分九厘	「六百廿七匁五分八厘」
寺谷	二十六匁	同十二俵	八十四匁六分九厘	「百六十九匁三分八厘」
寺原	二十匁	同	百七十八匁四分	「三百五十六匁八分」
大野	四十五匁	同	二百六匁三分四厘	「四百十二匁(一)分八厘」（一本六）
高川原	三十八匁	同	二百五十目二分二厘	「五百目四分六厘」
西川	四十五匁	同	百七十六匁一分四厘	「三百五十二匁二分八厘」
小色川	二十七匁	同		
鷲家	三十八匁	同		
越部	四十二匁	同		
高津尾	三十五匁	同	三百八十一匁八分	「七百六十三匁六分」
下越方	二十目	同十五俵		
新鹿	午十一月十二日 廿四匁	同十二俵	二百八十九匁一分	「五百七十八匁二分」
眞砂	同日 廿三匁	同廿四俵	嘉永元申年十月より 三百二匁四分五厘	「六百四匁九分」
印南	未四月十九日 十八匁	同	二百十一匁五分二厘	「四百廿三匁八分四厘」
大湊	文化九申年より直掛り俵一俵に付一厘五毛つゝかし炭一俵に付一厘嘉永三戌年三月より白炭一俵に付二厘五毛黒鍛冶炭同断二厘つゝ		二百三十四匁五分五厘	「四百六十九匁一分」

打見	文化九申年より黒炭一俵に付一厘五毛鍛冶炭同一厘	三百三十四匁四分三厘	「四百六十八匁八分六厘」

出張役所	一ヶ年定銀	定銀定年月	増額
新役所 橋本御殿	銀百匁三分四厘	文化十酉七月晦日	
同口熊野 大川役所	同百四十八匁	同十二亥年	同年二月十五日同村仙助持畑地借用地賃年々三十目御勘定拂に取極
同 川口役所	同百四十八匁	同年	
同 瀧野	同百三十五匁	同年	同年二月八日地面狹炭納屋地に同所源兵衛持屋敷（持家）（一本ナシ）借用地賃年々三十目御勘定拂に取極
同 合川	同百三十五匁	同年	
同 廣宇井口番所	同九十目	同年	
同 廣	同百十匁	同年	
日高郡 田子	同百四十五匁	同年三月	

乙

出張役所	一ヶ年定銀	取極年月	増減	「元治二丑年二月倍増」
大坂幸橋	銀六十目 改同九十六匁七分二り	文化十酉五月 同十四丑十二月	五百九十目	「一貫（百）（一本ナシ）八十目」
日高 福井 後上柳瀬に移る	同百廿一匁八分 改二百十二匁四分	同十五寅三月廿七日 弘化二己四月改	上柳瀬 二百十二匁四分	「四百廿四匁八分」
口熊野小色川 出張番所	同百〇八匁八分四厘	同年四月廿七日		
船津	同二百廿六匁三分六厘	同年八月廿三日	二百九十四匁二分七厘	「五百八十八匁五分四厘」

號

堺	同百（　）四匁四分 改同二百四十四匁六分	文政七申年五月 改嘉永元申十二月	三百十六匁六分	「六百三十三匁二分」
松坂御屋敷	同百十一匁九分	文政十二丑四月	二百五十目	「五百目」
伏見	同百八十三匁五分	天保六未正月		
勢州伊勢路 佐八出張所	同百（　）五匁	同年四月	外に炭厘掛り一俵に二厘つゝ 鍛冶炭　同一厘つゝ	
兵庫	同百四十八匁五分	同七申二月		
幸橋調方	同二百四十目	同九戌正月		
八幡	同七十四匁二分	同斷	已後笠松に變換さみへる 笠松二百二十目	「笠松四百四十目」
大垣	同七十四匁二分	同斷		
古和番所	同六十目	同年四月		
瀧番所	同百三十五匁	同十亥二月		「二百七十目」
長島組二郷役所出張 大原番所	同百（　）五匁五分	同十二丑六月		
江戸 築地	同二百十一匁三分 外に月々炭一俵 醤油一升つゝ	弘化二巳二月		
大津	同二百五十目	同三午十月	二百九十八匁	五百九十六匁
喜角	同二百四十六匁三分	同年十一月		
南都			百九十六匁五分	「三百九十(二)[一本三]匁」
松島	同二百卅五匁四分(三)[一本五]厘	同三午十二月		「四百七十目八分四厘」
箕島	同二百七十六匁三分	同四未十二月		「五百五十二匁六分」

神野々	同二百九十四匁	安政二卯年		「五百八十八匁」
勢州松坂會談所	同五百九十五匁三分一厘	嘉永元申六月		
白子	同四百四十五匁七分五り 此金七兩一歩ト十匁七分五厘	同 年 月		
近露	一本同斷（同三百卅二匁四分七厘）	同年十月	三百二匁四分五厘	「六百四匁九分」
和深	同二百八十六匁四分	同五子十二月		「五百七十二匁八分」
日高郡三尾	同二百六十七匁三分	同 年 月		「五百三十四匁六分」
同郡横濱	同二百三十五匁三分 改二百二十八匁八分	同年月 改安政六未十二月		
鹽津	同二百三十五匁三分	嘉永六丑六月	四百廿七匁三分	「八百五十四匁六分」
小畑	同二百六十七匁	同 年 月		「五百三十四匁」
若山評定所	同七十五匁（五分）一本ナシ	同七寅七月		
和歌出島	同四百四十七匁	安政四巳五月		「八百九十四匁」
御園	同二百四十九匁九分	同五午十二月		「四百九十九匁八分」
川端	同四百十三匁	慶應四辰二月		
京都			五百五十六匁	「一貫百十二匁」
湯淺			二百六十四匁	「五百二十八匁」
瀧の拜			百五十六匁	「三百十二匁」
佐八			五百四十五匁六分四厘	「一貫九十一匁二分八厘」

東熊野 嘉田	二百四十六匁三分	「四百九十二匁六分」
同 二郷	二百九十八匁二分	「五百九十六匁四分」
七日市	二百七十四匁	「五百四十八匁」
久豆	二百九十七匁九分四厘	「五百九十五匁八分八厘」

諸出張所定銀倍増

元治二丑年二月十六日

一上方幷有田日高南熊野勢州出張役所々々筆紙墨初入用先年相定有之候處近年物價高直に至り實際難賄無據次第により諸物下直に相成迄是迄之定銀に倍増之入用立に取計度旨頭取より申立御勘定奉行より政府へ進達相濟其旨京坂初堺南都大津笠松紀勢御領分役所々々合五十七ヶ所へ達す

五十七ヶ所是迄之定銀 「内五ヶ所は元役所舍部屋料也」

合計銀十四貫四百六匁三分五厘也

「右倍増

合銀二十八貫八百十二匁七分となる」

役員

御仕入支配

支配は頭取初め一般を統轄す從來御勘定奉行兼務之處天保六未年四月左之通政府より達す

御仕入佐八天野川三役所役人共是迄御勘定奉行にて致支配候へ共向後金澤彌右衞門支配に相心得候事

右に付江戸濱町御仕入方勤之者支配之儀は若山より罷越候御仕入方勤人詰中は矢張江戸御勘定奉行取次支配致し濱町御仕入方役人之向は是迄之通同役支配之事哉と小谷作（一本内行）より政府へ伺之處兩様共先是迄之通り御勘定奉行支配可致旨差圖す

金澤彌右衞門は天保十亥年六月病死後再ひ司農支配に復し又御仕入掛りを被命たり

順次 御仕入掛り

御勘定奉行 西山與七郎

伊達藤次郎

中村九郎兵衞

南出平左衞門

平左衞門は慶應四辰年六月御用人となり御仕入方御用筋元に成可相勤旨被　仰付

水野藤兵衞

明治二巳年正月御産物方支配に

御勘定奉行より 野口太郎介

同日御産物御用野口太郎助申合勤に

松見斧次郎

同年二月十五日兩人共民政知局事となり産物方勤是迄之通

同年十月廿四日開物知局事兼帶

野口太郎介

同年五月産物方を廢止都て各郡民政局へ引渡しに相成りたり

同三年午年八月三日開物局廢せらる

一御仕入頭取

「明暦二申年　佐八　田林茂太夫 田村佐左衛門」

右之頃より御勘定帳に見へ頭取にて有之哉其段難分さ前記御仕入發見」之部にあり

元祿十二卯年　天野川　吉田次郎太夫

御傳物書より天野川村木御用勤被　仰付旨帳面に相見さの事右同斷」

元文五申　小川秀右衛門 茂田甚助

寛保三午　稻垣三之右衛門 吉村十助

「延享二丑年　鈴木次右衛門

在方頭取より御仕入方御用兼勤被　仰付有之旨前同斷」

寛延三亥　前田文大夫

同　山田甚右衛門

寶暦三酉　大橋忠大夫

同　田井元右衛門

御勝手元締在方頭取一人つゝ兼帶

同八寅　玉置彌太夫
同　小浦惣内
右同斷
明和二酉　立石喜大夫
在方勤より兼帶後に御仕入計相勤末に至り御勘定吟味役格三百石御勝手兼帶
同四亥　數見角右衛門
同七寅　松田文左衛門
磯本喜左衛門
安永四未　木村良右衛門
同六酉　吉田三郎右衛門
同八亥　松田伴左衛門
同九子　兒玉源二
天明三卯　植松次郎左衛門
同六午　磯本武兵衛
寛政四子　北村平八
田中嘉八郎
同五丑　坂部紋右衛門

同十午　池田利八郎
同十一未　田中源八
同十二申　立石喜大夫
享和三亥　井口八次郎
文化四卯　田中良左衛門
御勝手方より兼帶
同六巳　竹田槇右衛門
同八未　川口儀八郎
同十酉　數見秀次郎
同十一戌　吉田源之右衛門
同十二亥　井上兵次郎
獨禮格頭取となり天保三辰年迄十八ヶ年間に小十人頭格知行二百五十石に至る天保四巳年二月依願隱居然れとも御趣意厚心得候付病氣快き節は是迄之通役所へ罷出諸事頭取可相勤御合力百俵被下旨被　仰付
天保五午年五月九日　思召を以御合力御增二百俵被成下
天保七申年十一月五日依内存御合力二百俵差上御用向は是迄之通勤天保十亥年七月六日病死
同十四丑　中島爲藏

文政四巳　田中八郎
同八酉十月　小田數馬
天保四巳二月　南出平左衛門
天保六未閏七月濱町御仕入方御用同所頭取申合取扱　江戸御勘定組頭　岡權右衛門
同　十一子七月廿五日　森半左衛門
上野卯左衛門
西岡儀左衛門
竹村十右衛門
安政三辰年比　大橋忠右衛門
文久三亥年比より維新前迄　須山藤左衛門
貴志幾之助
速見秀十郎
御爲替組　町人　津田伊助
御扶持人並　平松孫左衛門
明治二巳年正月家業之透に會計局民政局へ罷出知局事差圖を受御用取扱
此時御仕入方を御産物方被改稱す
池田良輔

松尾三代太郎
近藤萬次郎
久下純庵
由良佐左衛門
楠見長右衛門
橋爪鍈一郎

右同年十月廿五日開物判局事試補に

同年五月産物方を廢し都て各郡民政局へ引渡に成り本日更に開物局を置かれたるなり

一同三年年八月三日開物局を被廢たり

一手代役人役順

文化六巳年三月改

元〆手代　　同々様勤　　同見習　　同元〆格

手　代　　並手代　　役　人　　並役人

炭見役人　　役人代　　炊

各出張所に金役と稱し一局之出納を掌て管理するありいつれも輕輩にして年給銀二百目前後二人扶持已下差等あり出張所の大小輕重により五七人乃至二三人つゝ在勤す炊とは炊事に従事し兼て局務の使役に服す

規　程

文化四卯年十一月

一佐八方勤人雜用日々銀五厘宛相渡候得共自今御仕入方天野川勤人同樣日々一分五厘宛相渡候筈

同年同月定三役所勤人へ達す

一都て在役所々炊宿見廻り之儀向後中一ヶ年置宿見廻り爲致候筈　但往來共日數三十日

同年十二月

一御仕入天野川兩役所勤人御用筋に付無據夕方迄相詰候筋へは自今湯漬代り粥支度致させ候筈候間人數に應し金役より見計差遣し候筈右入用之儀は兩役所御勘定拂之筈御勘定奉行衆へ伺相濟候間費ヶ間鋪儀は隨分心を附取計可申事

文化五辰年二月相究候事

一御仕入佐八天野川勤人共病氣等にて引籠有之候者共儀は自今雜用不相渡筈此段不相紛樣御達可有之事

同年同月

一御仕入佐八方在役所々々年中取扱候諸帳面不殘取集め箱入にいたし置候筈右は何帳に不寄日々帳場にて毎日受拂候下帳迄も不殘右箱入にいたし置調へ之節指支無之樣入念取計可申旨役所へ可申付事

同年三月

一御仕入佐八天野川役所御改正後都て勤借方不相成筈勿論之事に候得共以來金役は不申及其外借方
取計候にゝ金役中弁納申付急度御咎被　仰付候事

文化五辰年六月十二日御勘定奉行聞届

一　　御仕入頭取

御仕入佐八天野川三役所勤人之儀商賈へ隣候勤方之儀に付手代役人下役等迄請人を取置有之候付
金銀引込等有之節は相糺當人幷請人へ相弁させ候儀元極に御座候御勘定合如何に相見候節は吟味
之品に寄手代仲間預り等にも仕相糺候樣仕度奉存候右は外々勤人とは違商賈同樣之業を取扱候儀
に御座候得は時宜に寄御勘定さへ相立候得は相濟候儀に付右之通御聞届置被成下候樣仕度其上に
も御法令に違候場所に至候はゝ勿論御達申上御吟味之儀可奉伺候役所切御勘定調中は右之通御聞
届被成下候樣左候得は御損益にも拘り事少々相納候儀多御座候付奉伺候

六　月

但御勘定之筋合に寄糺中は役所内へ囲致させ差置候儀も御座候間此段も御聞届被成下候樣仕
度奉存候

文化六巳三月

一三役所炊病氣等にて百日引籠候得は暇遣候筈
但五十日過候得は百日迄之役所雇人は立物にて作略いたし候事
一御雇手代病氣等にて五十日引籠候得は出扶持之儀に付同日より御扶持方不相渡筈

但し出勤致し候得は其日より相立候筈且又右之通日段相定候付ては在住なとは日切前より四五日出勤致又引籠候筋は實否相糺し御雇手代御免有之候か又は實病氣にて候得は御扶持方不相渡其儘差置候へ共其時々相伺候筈

同巳十月

一金役々人所替被　仰付候節は十日之內引渡勘定相片付出立之筈

一炊所替五日之內支度出立之事

一金役々人炊等親病氣にて看病引等之儀は五十日を限出勤可致事

但極大病に候得は其品醫師容躰書相添可相達事

文化六年巳十二月左之通相極り候事

一御仕入方御勘定之儀以前より文化五辰年迄は在役所々小帳を以當りを受在八ヶ所元にて御勘定取組候得共入組不分れ之儀に付湊役所元に相成株々類寄帳にいたし頭取衆押切申受右小帳は役所へ留置一本に取組候得は御勘定合一目に相見差引等も能相分り候事に付同卯年分より右之趣を以當りを受候筈に相成候處同年之儀は下地之通在役品々小帳仕切とも小當り致候上一本勘定に取組候筈相決御證文出候事に付去辰年分も頭取衆押切帳を以湊役所にて一本に取扱出來候事

但御勘定當り之儀文化三寅年迄御勘定所へ出張り候處卯年より御勘定人御仕入方へ出張當りを受候筈に相成候處又々同辰年より御勘定所へ出張申度相達下地之通相成候事

文化九申年五月御勘定奉行より達

御仕入頭取

一　松山方御用筋是迄在方頭取相兼勤候得共向後御仕入方にて取扱之筈に付右御用筋入念取計松山方手代可致支配候

後嘉永三戌年に至り松山方御用筋御勝手方取扱に成同六丑年再ひ御仕入方取扱に復す

明治元辰年十二月廿日又々已前之通御勘定奉行取扱に成る

文化九申年二月廿日

一　御仕入方頭取へ

松山方受拂御勘定之儀是迄年々御勘定仕上け差引余銀は其年々納切候事候得共右松山筋御仕入方にて取扱候付ては猶行届候得は終には一かさ之御手當にも可相成且は御仕入仕込等も有之に付去申年分より年々御勘定殘り元相立御勘定仕上ヶ置余銀は十ヶ年相立候上納切申度旨内存之趣及取扱相濟候間右内存之通取計可被申事

同年六月廿八日

一　總御村木奉行之儀向後御仕入頭取より兼勤之筈勤方之儀御村木筋御用且又御山々幷御木材御入用取締之儀相勤可申事

同年十二月

定

一　三人扶持以上より火鉢二人扶持之筋は火入

一御用之外は酒取扱不相成事
一茶代役所入用相立候得とも以來一統へ割方取計候筈
一日雇茶わかし相止め三厘つヽ賃錢相增候筈
一木挽一通りに付一厘つヽ相增候筈
一御日待酒相止已來は酒肴代割渡し候筈
一勤人結構被　仰付候節役所にて酒抔取扱堅不相成宅にて仲間內へ酒出し候儀は勝手次第尤肴數多出し申間敷事
右之通急度相心得可罷在事
文化十酉五月相極
大坂御仕入方諸渡り物左之通
一元〆手代　一日　七合五勺七分
一手代役人迄　一日　五合六分
一炊　一日　五合五分
一手日雇賃　一日　一升に一匁五分
往來之節渡り物大坂詰之筋
一元〆手代立物　一人　三匁
此八足「一人」　「本文寅四月朱書之通直る」

一手代役人迄　　人足一人　　一人二匁五分

一炊立物　　　　人足一人　　一人二匁

一手代役人就御用大坂役所へ立歸に罷越候節雜用立方一日七合五夕に八分つゝ

　　但往來渡り物之儀は前々定之通相立候事

文化十酉年八月廿五日

一御仕入頭取出在之儀は春秋兩度役所廻り之外出在無之候處近年段々不時御用にて近在出在多く新規之御役儀に付諸渡り物定り無之自分淩にて毎々出在難之趣以來頭取近在出在之節は雜用六匁四人扶持相渡候筈

同　年

一三役所勤人給銀四月霜月兩度に相渡候筈加給之儀は四月已前に申渡候はゝ加給之通四月後申渡候得は三分二相渡候筈

　　但召抱幷暇出病死之者共月割を以差別有之筈願に仍て入代り筋は勤引候迄之受取振を以諸勤人指引有之筈

一外役所より所替にて參り候筋は元役所渡り方吟味之上相渡し候筈

文化十二亥年二月

一御仕入佐八天野川三役所共浮金銀去戌年分より年々浮金銀高除け置候筈去戌十二月御勘定奉行衆被　仰聞候事

同年五月廿二日山中作右衞門殿より

御作事奉行見分之場所々へ向後總御材木奉行も立合見分之筈奥大奥向へ入込候儀も御作事奉行之通罷越候事

御作事役人見分に罷越候節は總御材木方役人も罷越候事

同年九月二日田中良左衞門申聞

一松山方役人見分之上伐方聞屆候裏判是迄田中良左衞門印形致し候へ共向後は御仕入頭取之内より印形致し候樣

文化十三子年七月十日御家老より御勘定奉行へ

一

御作事奉行

總御材木奉行

御船々御造作之儀御繰合次第速に被　仰付筈候夫に付右取扱振之儀は跡方仕來に不拘御中屋敷御普請之御趣意を以取計候之間各申合御造作中は御船手方へ罷出御木品調方職人遣方等諸事行屆御中屋敷御普請之御趣意御船手方へ引移候樣申談相勤可申候

同年八月

一御仕入役人役人代袴着は御國にては不相成筈候へ共大坂御屋敷へ相詰候節は上下幷袴着用不苦事

一炊帶刀之儀は不相成筈候へ共右御屋敷詰之節は他所之儀に付御用筋にて罷出候節帶刀不苦事

文化十三子年十月十七日御家老より

一向後總御材木奉行へ右奉行兼帯役　御付候付御役名左之通相成候事

御材木石奉行

總御材木奉行を

一御仕入役人是迄苗字名乗せ候義は不相成候得共此度御趣意有之向後名乗せ候筈

但䑓上下并袴着用致させ候筈

同十四丑年正月

一並役人役人代之節は是迄之通苗字名乗候義は不相成筈袴着用之義は差免候筈

同年二月廿日

一佐八方勤人共往來之節定之道法歩行不致向も有之候間已來は右樣之儀無之樣御申付候樣尤出張番所へ相詰候役人共纔之道法之處往來之節人足賃相立有之候得共已來は相渡り不申筈

一佐八在役所々ゟ元役所へ賄金受取に罷出候節才領役人之外常日雇差遣來り候得共已來は相止候筈

一御用狀并月々勘定目録船積達共思ひ思ひ元役所へ相達候得共已來は向寄々之役所に申合狀日相定月々三度つゝ狀（一本ニ出）通致し）候筈日限之儀は御飛脚日に都合宜樣相定申度事

一佐八勤人之內老人若輩者はきと難御用立者共は出扶持不相渡筈候間役所々へ御申付候樣尤若輩之者共元役所へ引寄勤向見習わせ候樣

文政三辰年四月十三日

一勤人共不埒之品にて暇遣候筋は給銀月割にて相渡候儀は不相成筈相定有之候得共猶又不相紛樣夫々心得させ可申事

但病氣又は首尾能相勤暇願出候筋は給銀月割渡之筈

同年五月極る

出水之節心得之事

一定杭三尺五寸よりは掛役人罷出四尺五寸よりは一統罷出頭取衆へ早々注進之事

一定杭四尺に相成候得者六挺一艘百間堤へ指遣候事

一定杭五尺五寸よりは六挺二艘取計百間堤へ指遣候事

一弁當は人數に應し早々申付候事

一夜三尺五寸よりは裏門幷番所前へ高張燈し候事

但夜出水之儀は泊り番幷番所筋心を附居候事

弘化二巳年二月十五日

一御城松之丸内木樋御藏此度佐八奉行御預りに相成候事

嘉永三戌年三月十五日

一御仕入在役所勤人風儀不宜に付元役所總元〆より左之趣御仕入在役所三十四ヶ所及ひ佐八方幷枝役所へも達す

近頃在役所々々勤人共之風儀不宜費ヶ間鋪儀を相好候筋も有之其身之分限不顧故自然勝手向不如意に相成内借且引負等出來約る處勤方不行屆に相成候事候右は金役共心得振不宜取扱向に意味之品等有之下役人共迄も其風儀を見習規矩相崩れ候儀に有之甚如何之事候付ては金役に引直

し候筋も下地之振合を見習不宜儀を乍存相改不申風儀之様に相心得候者も有之又風儀に不拘實に奸曲之者も有之右等之儀者兼て教諭不行屆之樣に相聞甚以恐入候事候右に付夫々取調急度御取扱相成候筈候得共御用捨を以暫淨置相成候間向後旧悪を相改誠實に相勤内借等有之筋者速に相片付候樣且又節儉相守都て費弊相省家事取締をも行屆候樣改正可致候此上にも悪弊不相改如何之風聞有之候はゝ其品詰合且近役所詰より無腹藏内達可致候詰合之内に心得違候者も存なから内達をも不致含置候儀相聞候はゝ本人同樣急度可及取扱候尤以來春秋御勘定調之外に不時調等取計候儀も有之候間心得違無之樣勤人相互に心添致し諸事正路に行屆取扱可申事

一勤人交代之節出立日限取極りも有之候處近頃猥に相成及延引候段甚如何之事候間向後取極之通金役は十日渡場勤仲炊は五日限御勘定引渡出立可致候右日限過候はゝ出扶持雜用立方相省其品相糺可申筈候間此段可被相心得萬一御用筋にて出立及延引候儀も有之候はゝ何御用筋にて延引可相成之儀其品巨細相達可申候尤此節交代被申付定り之日限過候筋も有之候はゝ出扶持幷雜用共立方相除其品相達可申事

一御勘定調出役之節費ヶ間敷儀無之様毎々相通し有之候得共今以酒肴等取扱候役所も有之甚如何之事候間向後急度相改支度之節は一汁一菜之外一切不相成酒肴等決て用意致間敷候萬一心得違差出候とも差戻候間此段相心得可申事

右之趣毎々相達承知之儀には有之候得共近比等閑に相成心得違之筋も有之候付猶又相達候間右之條々相背候はゝ急度御取扱可相成候間向後心得振相改致精勤御爲筋厚心掛御益増相成候様御心得

可有之候已上

戌三月十五日　　　　總元締中

按に御仕入の屬吏は皆漸く一二人扶持銀給二三百目取の輕輩兩熊野勢州等懸隔之僻地へ散在所謂役人風を誇示して威を愚民に振ひ動もすれは私利を是謀り驕奢淫逸を恣にするの弊尠からす其一例を擧れは佐八役所の如きは私に九十間計の馬埒を設け常に乘馬を遊戯とし伊勢古市へは時々通し駕籠にて遊蕩等意外之豪放を振廻ひ又宮川出水に際し流木ある時は他領他方を問はす役人共見當り次第の流木へ悉く紀の字付の刻印を打廻りて役所に引致し以て紀伊殿の用材也といふ依て材木仕出し主等大に懼れ競て橫難を免れんと百媚を呈せしよし故に時人は御仕入小役人と云へは槪して汚俗の猾吏と排斥したる也

嘉永六丑年七月四日於江戸南出平左衞門へ御達

一御仕入方之儀土佐守殿飛騨守殿被　仰合厚御含御取扱可被成との趣御仕入頭取へ心得可被申聞との御事

同七寅年八月廿五日　　　御仕入頭取

御軍艦御製造御用筋行届相勤可申候

文久元酉年五月三日

一御勘定奉行是迄御仕入方へ月兩度つゝ出席之儀向後月一度に相成左之日段に罷出候事

八日　但兩人つゝ出席

同三戌年四月

一御仕入方勤人請狀之事左之通通達す

御仕入方佐八方共勤人請狀是迄差入有之分年久敷相立候付町役人村役人等も相替り且請人致病

死候筋も可有之右に付此度改替候筈候間來る九月迄夫々差出可申左候はゝ下地請狀さ引替可申候猶又于今差入無之向は左之通相認早々差出可申候依て相達申候以上

四月四日　　　　　　奥　座

金部屋　天野川御材木方　産物方　御貸方

松山方　炭　方　仕切方　寒天方

取次（一本ニ方）　臺所　御金藏　不寢番

兩御門

江戸幷上方勢州在中へも同斷達す

御請狀之事

一何の誰殿先達て御仕入方御役所御勤人被　仰付右被相勤候內私請人に相立申候若金銀引負候歟又は出奔被致御役所色物幷金銀其外何に不寄不足仕候はゝ私より少も無遲滯辨納可仕候依之所持之何々別紙之通り根質物に差入置申候

一右仁之儀に付若何等掛合之儀等外より申出候はゝ私引受急度埒明可申候

一私儀若請に難相立品出來候はゝ其節早速御斷申上請人立替可申候爲後日御受狀依て如件

年号月　　　　受人　姓　名　印

御仕入方御役所

差上置申根質物之事

右之通私所持仕候尤是迄根質物等に差入之儀は無御座候爲後日一札如件

年号月　　受人　姓名印

御仕入方御役所

右之通相違無御座候尤此上賣拂候歟又は質物等に差入候はゝ其節御斷可申上候以上

奥印　姓名印

慶應元丑年九月廿六日

一上方幷有田日高兩熊野勢州出張所々々に勤人往來旅宿賄之儀先年定之通り立方取計來候處近年諸色別て高直に付是迄通にては難凌無據に付諸物下直に至候迄都て倍增之立方に取計度旨頭取より申立御勘定奉行より政府へ伺相濟夫々出張所へ達す

倍增

銀六匁　「下地三匁」　元〆手代

上方　同五匁　「同二匁五分」　手代役人

同四匁　「同二匁」　炊

有田　日高　兩熊野　勢州

旅宿賄　倍增 銀三匁六分　「下地一匁八分」

元役所より口六郡在々へ出立横傳馬人足賃一人分

右百二十目替　「下地一里一升　此石六十目立」

按に　御仕入方役人は在々且上方等へ往來頻にして文化此已來旅費變更之條項も不少最複雜を極め悉く記すへからす結句本記朱書を是迄之定額となし來れる也横傳馬とは脇街道にて御定傳馬所なき宿驛をいふ

慶應元丑十月廿日

一海士名艸在々本計御普請木村是迄之証文直段に一割五歩上にて御村木方より渡し方之儀可取計旨御勘定奉行より御仕入頭取へ達す

右に依て見れは本計御普請の木材は御仕入方定價を以納めたるものと察せらる諸物高價により本記の如し

同二寅年

一御仕入方佐八天野川三役所上方向役人往來之内人足賃錢一匁に付丁百文割を以勘定仕來之處近年錢直段高直に成當時一匁六十文替若山表にては八十文割を以取引之趣に候へ共上方一躰件之通に付錢直段引下け候迄一匁に付八十文割にて勘定相立度旨頭取より申立御勘定奉行聞屆八月八日より施行其段江戸勢州向奥熊野外上方及在々出張所へ達す

同年在々役所へ達す

一役所々々之内には金役共舍を以當分貸等取計候筋も有之哉趣相聞斯る御繰合之折柄右等之取計以之外之儀に付追々取調候筈候間早々片付方取計可申候尤急々片付方難出來筋は其品内達可有之追て取調候迄不片付之筋は金役共不念之廉を以嚴重之御取扱相成候條心得違無之樣可取計事

一賄金受取に罷出候内に不當之見詰書相違候筋も有之甚如何之事候斯る折柄別て手を詰見詰取計聊

たり共不益の御金受不申樣可取計候萬一向後不束之見詰書差出候はゝ取調の上急度可被申付候條入念取計可申事

慶應四辰年閏四月十五日在々役所金役へ達す

勤人交代に付御勘定引渡之節山林等御買置有之役所には夫々見分之上引渡取計候儀は勿論に候得とも向後其品目錄へも認加相達可申候萬一故障有之候はゝ引渡し受取候勤人可爲不念候條其段相心得入念取計可申事

明治元辰年十月達

近來勤人共風儀不宜右等致一洗候樣毎々申通し候得共今以不取直御物地賣且御買置山賣拂等に付ては不正之取計有之哉に相聞以之外之事に候取調之上屹度可被及　御沙汰候

一勤人共之內多分之內借いたし候筋有之趣就中身分不相應之及大借に候筋も有之趣相聞候右者同勤之者差含候故右樣成行候事候右等早々片付方致させ可申候自然交代之節引渡等差支候はゝ差含候同勤之者へ辨納可被申付候

一右之通に付向後正路に相勤候儀は不及申內借等決て差含申間敷事

同年十二月

此度銀目廢止被　仰出に付司農府配下伊賀以下諸手代等銀給之筋金給に御引直相成候に付ては御仕入局中の儀も同樣可取計筈に候得共御仕入方之儀は商法利益之內にて給扶持相凌其余分年々御積置之御規則に候處近年諸物高價に就ては諸入用相嵩御積置之場に不至然に前顯金給等に御引直

に相成候はゝ彌以御損相立第一勤人共之働出精振不相見而已ならす次第柄は一統能相辨可罷在候得共自然本計方同樣之心得有間敷にも無之候付一應爲心得相達候諸物高價に就ては別て小給之面々難儀にも可有之候得共相互に申合前々よりの御規則相守御積立出來候樣相勵み就ては是迄取來之給は此後御品附迄に其儘御居置御品付之節々其次第に寄米金に御引直可相成候然共商法御役所之儀に付勤功に寄年數に不拘御取扱可有之候間其段も相心得何分見込之處を以厚精勤可致候此段爲心得相達置候事

向後金給に相成候分本計同樣金札渡二百二十目立五歩減之事

右之通御勘定相立可申事

辰十二月

業　務

元祿九子年四月

一新宮領山にて新宮者燒炭は不殘池田役所へ買候筈

一新宮領にて御藏下々もの炭燒申候共池田役所へ買候筈

一御藏領にて御藏領者燒候炭は不殘宮戶御仕入役所へ買候筈

一御藏領にて新宮領之者燒候炭不殘宮戶御仕入方役所へ買候筈

一和州領山にて新宮領之者炭燒候はゝ宮戶御仕入方役所へ半分池田役所へ半分買候筈

一和州領山にて御藏領之者幷和州領者燒炭は不殘宮戸御仕入役所買候筈

一尾呂志組之内栗次村御藏領之内片川村矢の川村右三ヶ所々持合山より燒出炭は御藏領之者燒候共新宮領之者燒候共宮戸御仕入役所三か二池田役所へ三つ一買取候筈

一入鹿九ヶ村持合山より燒出し申炭御藏領之者燒申候共新宮領之者燒候とも宮戸御仕入方役所へ半分池田役所へ半分買分申筈

享保十二未年十月

佐八役所手船名義之事

此度國々二百石已上之商船江戸廻り大坂廻り之品幷石數船主仲船頭之名改之義大坂廻船問屋より勢州神領大湊浦へ右改方申來る夫に付佐八役所附之荷船二艘有之是迄大湊足立次郎右衞門と申者之名代にて六七十年來江戸へ渡海し來り付ては右廻船問屋へ如何可答哉と左之畢竟書を以佐八奉行より淺井忠八御勘定奉行へ伺出

一艘 但九百石積　小伊勢丸　水主　拾二人

一艘 同　寶龍丸　水主　拾二人

佐八御手船之儀佐八役所初之節より勢州神領大湊年寄足立次郎右衞門名代にて佐八仕出之色物江戸問屋へも送り狀等も次郎右衞門名前に認め　公儀向御番所にても次郎右衞門と相達他國にて右船難澁等有之節も次郎右衞門罷越作略仕候由

一右船次郎右衞門名代に罷成候儀は佐八より仕出候荷物積之儀に付　公儀表次郎右衞門名代に罷成

候樣子に承傳候由佐八役所元〆共申候右之品に候哉佐八役所浮銀之內より年々銀二十枚つゝ被下候由

一右之通御座候所舟印は平かなのきの字に御座候由其外船中之道具に本紀の字記し候も御座候由畢竟御國內にては佐八御手船と何も申他所表向之儀は次郎右衞門舟に成御座候

一十三年以前未年下田御番所與力衆より足立次郎右衞門船頭刀を指候はいか樣之品にて候哉と江戶炭問屋へ尋有之候付炭問屋より江戶會所へ右之品相立候處先年より佐八手船次郎右衞門名代にて上乘船頭刀を差來り往來仕候旨與力衆へ申させ于今船頭刀を指し往來仕候由

右御家老宅寄合にて評議之上渡邊周防守差圖にて左之如く指令相成候事

一此度國々二百石積已上之荷舟御改候夫に付佐八御手船二艘之儀被達候趣を以吟味之上御年寄衆へ申達候處彌只今之通足立次郎右衞門名代いたし商舟之內へ入候樣にとの御事候間左樣可被相心得候以上

未十月十一日　　淺　井　忠　八

大　川　善　四　郎　殿

中　村　萬　右　衞　門　殿

延享元子年

此度村方難澁に付依願御救御仕入方取建手質取らせ候付左のヶ條之通勤人幷村役人等不相紛堅相守り可申事

手質條目

一公儀御觸出候品々は手質物に取扱致間敷事

一自然盗物等之類村方之者手質置外方より相知れ候はゝ村役人共より郡奉行中へ相斷作法受させ候筈候間右等吟味兼て村方之者へ示し方行屆可申候事

一手質物限月に至り候得は村役人共より作略致し流質致させ申間敷事

一兩御納所之節畑銀等指支俵物外方へ安く賣拂候節は役所より相改相應之見當てを以銀子貸渡可申候村役人共より手形前を以貸渡候儀は不相成筈

附り模様により納所藏に俵物相詰右見當候て貸渡候儀は其時々見計勿論御仕入方受取切致し藏へ封印可致事

一農道具類手質物に取不申儀は勿論に候其外大鋸前引并大斧之儀も稼道具之儀に付手質物に取申間敷事

一鐵炮之儀作間猪鹿防き道具に付手質物に取申間敷稽古筒抔にて無據筋は隨分下直に取候樣可致事

一鍋釜其他鐵道具類等質物に取申間敷事

一長持戸棚小簞笥箱之類手質物に取申間敷事

一瀬戸物類并本類手質物に取申間敷事

一材木其外味噌醬油之類手質物に取申間敷事

一刀脇差椀之類手質物は下直に貸候樣可致事

一穀物類幷菜種多葉粉拵干鰯類等手質物に取候儀者五ヶ月切に候得共猶月越に不相成様可取計事

右之通

手質之事類を以爰に集記す

文化四卯年十二月通しる

一御仕入佐八在役所々内手質方取扱候役所筋に付無據夕方迄相詰候筋へは自今湯漬代り粥支度致させ候筈候間人數に應し金役より見計差遣し候筈右入用之儀は兩役所御勘定拂之筈御勘定奉行衆へ伺相濟候間費ヶ間敷儀は隨分心を附取計可申事

安政六未年九月

一手質取扱之儀御仕入掛り御勘定奉行より左之通政府へ進達之處伺之通十月十日相濟夫々出張所へ達す

御仕入頭取

御仕入佐八出張役所に此度打廻り御勘定合等取調候處右役所に御救手質貸取扱振之儀近年元極ヶ條に相背け候役所にも有之不都合に付今般別紙之通役所々々へ相達可申と奉存候依之別紙を以御料簡相伺候事

安政六未年九月

御仕入方在役所手質貸十五ヶ月限り之場所へ通詞

高津尾御仕入方 番所共　上柳瀬御仕入方　印南御仕入方

眞砂御仕入方　合川御仕入方　市鹿野御仕入方
周參見御仕入方　江住御仕入方　和深御仕入方
瀧野拜御仕入方　新鹿御仕入方　寺谷御仕入方
嘉田御仕入方　出島御仕入方　箕島御仕入方
三尾御仕入方　寺原御仕入方　小畑御仕入方
神野々御仕入方　鷲家御仕入方

右役所々々其村并近在難澁に付依願手質貸爲取扱候付は衣類十五ヶ月限穀類五ヶ月切利足月八朱にて貸方取計候儀は元極に有之處近年衣類をも五ヶ月限に取扱猶亦手質に取間鋪品をも貸方取計候役所々々も有之甚如何之事にて役所風儀も不宜候付右等之筋は屹度御沙汰も可有之處此度は御用捨を以何等に不及候間已後堅相守別紙ヶ條元極相背不申候樣貸方等取計可申事

（一本アリ）
（〇）御仕入方在役所手質二十五ヶ月限り之場所へ通詞

大野御仕入方　近露御仕入方　高川原御仕入方
西川御仕入方　木本御仕入方

前同文言　衣類二十五ヶ月限と認む

但二十五ヶ月限りにては衣類相傷爲方不宜儀に候はゝ十五ヶ月限取扱可然哉猶村役人へも申見其品追て可達出事

（一本アリ）
（〇）佐八御村木所出張役所手質貸十五ヶ月限之場所へ通詞

勢州佐八御材木所より出張

船津役所　番所共　　崎　役所　同　　天ヶ瀬役所　同

駒ヶ野役所　同　　船木役所　　村山役所

前同文言但衣類十五ヶ月限穀物五ヶ月切利足月一割にて貸方取計之儀は元極云々と記

一在役所々々其村方幷近在難澁に付依願御救御仕入方取建手質爲取候付元極相定有之儀には候得共猶此度左之通増補相定候間勤人村役人等心得違無之様堅相守可申事

未九月

右定書は延享元子年定書之通にして左の六條を増補したるなり依て増補の條のみを掲く

（一本朱書ス定書之内）

一衣類　十五ヶ月限　一穀物　五ヶ月限　一利足月八朱

一流質之儀は限月切より三ヶ月之間置主共幷村役人共へ請戻候様及催促自然請に不參筋は四ヶ月目に賣拂作略可致事

一流質賣損等之儀は全く勤人不行屆之儀に付勿論辨納可致事

一兩御納所之節畑銀等差支候物外方へ安く賣拂候節は役所より相改相應之直段を以銀子貸渡候物は役所之藏へ入置せ候筈に付向後見當貸幷手形を以貸渡候儀は取扱申ましき事

此條は延享の條を改正したるなり

明和元申年五月廿九日

勢州田丸領木良々谷春日谷鳥谷右三ヶ所之楠檜槻諸木は勿論其外在中に生立有之候御船手帳付木不殘佐八方へ相渡候右之内大内山米ヶ谷之内にて楠檜槻は其の儘御船手御用宛に殘置候筈候間右爲山代金四百兩御勝手方へ調達納切にて前段之通自今佐八方致支配勝手次第に仕出させ可被申候以上

堀田藤十郎

立石喜大夫外二人宛

天明四未年三月六日

當春口熊野在々山方仕出し物不捌にて及難澁候付苫幷薪等口熊野周參見浦へ御仕入方出張御買上被成下候樣願出候付爲御救御仕入方へ買上させ此表御仕入方へ相廻させ候右鄕役別紙之通可被取計候已上

天明四未年三月六日

小出平九郎

山田專助栗本金右衞門宛

一苫　百枚に付　山元元銀五匁六分六厘替

一薪（姥目極淺木）　百貫目に付　同　九分五厘替

一輪木　百把に付　同　一匁四分五厘替

右之通夫々山元代銀之一歩口取候筈

木挽賃定

安永七戌四月御城一中御門番所列屋根板仕直候節定

一指急候挽物二人掛りに致し挽候節は長二間巾一尺通八分積に候處「原字不明」二人掛りにて一通挽賃銀一匁二分つゝ拂申候筈尤右之木杉にて有之候

年々在方御用筋材木當て

一栂松十萬才程

内

五萬貳千七百才程　栂　内大角二萬七千二百才 小角二萬五千五百才

四萬七千三百才程　松　内大角三萬五千才 小角一萬二千三百才

巳二月天野川役所より伺同月廿八日申極め書付渡す

御村木水揚弁拼出し賃極

一銀一分四厘　水揚賃　一同一分四厘　拼　賃

〆銀二分八厘　但鵜木下揚拼弁二分三厘

一銀一分三厘　市　賣　一同一分三厘　乗付賃

一同一分三厘　船積之出し賃

右之通御村木水揚拼出し賃共當巳正月より相定申度御了簡奉伺候以上

「元簿年支のみにて年號を記さゞるもの有て考察しかたし蓋し文化度と察せらる」

巳十二月在役所々々へ相通

一大坂賣九月節句後ゟ十二月分迄は其年御勘定に取組尤銀子來不申候共仕切相廻り候はゝ取組候筈

一江戸賣は十一月賣附仕切來候筋右同斷之筈十二月賣は翌年御勘定に取組候筈

炭直段左之通相極候事　　大野役所炭

[一] 三匁四分切手 三匁三分見替　[天] 三匁八分 三匁七分 切手見替　(ス) 二匁八分切手見替共

江住役所

(△) 三匁五分切手見替共　(エ) 三匁(三)分（一本五） 三匁一分 切手見替　(二) 三匁二分 三匁 切手見替

眞砂役所

(マ) 三匁八分切手見替共　(十) 三匁四分 三匁二分 切手見替　(コ) 三匁 二匁九分 切手見替

高津尾役所

(三) 三匁八分 三匁六分 切手見替　(上) 三匁六分 三匁四分 切手見替　(八) 三匁五分切手見替共

因 三匁二分 三匁一分 切手見替　(天) 四匁 三匁八分 切手見替

午正月

一在役所々々買置山板山炭山共山代過銀に相成候はゝ年々別帳に取組御勘定に相成候筈尤株々書分け字名肩書にいたし可申事

一大坂問屋炭藏敷中使賃亂俵入用受込左之通相定候事

一分五厘　　亂俵眞中使賃受込筋

二厘　　一ヶ月一俵に付二厘にて藏敷受込候筈相定

文化七午年十二月

一大坂問屋へ色物船積歩譯之儀毎々賣捌方模樣に寄歩譯之儀正月十三日在役々へ相達可申事

同八未年正月　政府へ進達之處承り置かれ候旨にて御勘定奉行へ御下け

一御仕入取扱向之儀近年御改正被成下以來追々外御用も被　仰付ヶ也に相勤候儀に御座候右はいまた年數も無御座俗に申かねのなる木も無御座御金十分に相備へ右之通御用數夥く候儀にては無御座候得共御繰合御六ヶ敷候付ては少し成共御差寄にも相成他所より見込も宜敷樣勘辨繰合を以相凌候儀に御座候御仕入御用而已に御座候得は外より借入等は無御座先は充實之貌にて其段年々御勘定仕上候通に御座候得共段々外御用多相成繰合兼候儀に御座候尤外御用は本業に障り候故勤人共は一向好不申儀に御座候

一右之通無余儀被　仰付候御用向繰合等を外よりは有名無實之樣に見成候向も可有御座哉此段迷惑仕候成程不殘正金を備へ御用多異候ては無御座無余儀御間を合せ候儀に御座候然れとも金銀之儀は繰合と諸向之助け見込にて正金よりは嵩高に御間をも合せるものに御座候御仕入抔之儀は別て右等の處厚御聞屆置不被成候ては業調ひ不申段々彌增に御用數に相成候ては終には尾を出し可申哉と奉恐入候產物交易非常御手當之儀は厚被　仰出御座候付嘗て油斷可仕樣も無御座晝夜勘辨工夫仕聊手段は存附き上方邊氣受は宜御座候得共何分御用數に追はれ御金無數且時處位も有之外より風說等にも恐れいまた右手段奉伺候場に至り不申候今暫御目長に御覽被成下候はゝ何卒手段相伺候場合に至り申度心掛罷在候に御座候

一右等之趣は改申上に不及各樣へ御委任をも被　仰出御座候得共如何仕候哉近頃下役共手元すくみ業延ひ不申厚被　仰出候御趣意へ至り兼可申哉と心附候に付一と通申上置候何卒此上右等之趣は御明察被成下候間彌御趣意貫き候樣にと御下知を被加下候はゝ一統努力精勤仕らせ度猶亦有增御内達仕候

未九月

一諸木一通　賃銀九分三厘　　一槻　同　同一匁八分五厘
一樫　同　三匁九厘　　一楠　同　同一匁四分
一槻板一間（六分以上）　同　五匁八分　　一諸木廻り物一通　同二匁二分七厘
一槻廻り物一通　同　五匁七厘　　一杉　一通　同　七分
一杉板一間　同　一匁七分　　一松樅板一間　同二匁七分
一栂板一間　同　二匁八分　　一諸木廻り挽一通に付入工二人七分八厘
一入工一人　同　一匁七分五厘

文化九申年十二月

田丸領土屋村之儀難澁に付追々御手入有之候處鍛冶炭直燒いたし松坂相可射和右三ヶ所に限り直賣之儀願出寛政九巳より去未迄差免候處今以難澁得取直不申猶又此度願之品有之調之上當申より來る戌迄十五ヶ年之間前同樣直燒賣之儀指免候筈候間此段役所へ可被相達候以上

文化十酉年十二月定る

吉野川上丸太村木大坂船積運賃銀

長一間より同一丈迄 筏一床に付　四匁三分
長二間細方木　同　六匁五分
同二間八本方木同　八匁五分
同二間四本方木同　十二匁
長三間中より同三間小迄 筏　同　十匁五分
長五間中より同五間小迄 筏　同　二十一匁

松丸太　川上運賃に二分五厘増加名生谷松丸太にても同断

杉欅唐角二間百才に付　二匁
欅角　同

同郡加名生谷丸太大坂船積運賃銀

長一間より同一丈迄 筏一床に付　六匁
同二間九本方木　同　九匁
同二間七本方木　同　十匁五分
長二間半大筏一床に付　十匁
長三間中より同三間小迄 筏　同　十一匁

右野原霊安寺にて筏相からみ候筋

長二間中 同二間小　同　五匁三分
同二間十本方木同　七匁五分
同二間六本方木同　九匁五分
長二間半中より同二間半小迄 筏　同　七匁九分
長四間中より同四間小迄 筏　同　十四匁七分

松角　同

長二間細十本迄方木同　八匁五分
同二間八本方木　同　九匁五分
同二間六本方木　同　十二匁五分
同三間大筏　同　十三匁一分

年中 銀百目に付　九匁増　十月より三月迄 同百目に付　二匁増
但角物は二匁増計

一拾人方之者共御材木幷吉野丸太共市賣代銀納限月左之通尤吉野丸太は歩引なし材木は六歩引
一正月より三月迄　五月納　一四月より五月迄　七月納　一六月より七月迄　九月納
一八月より九月迄　十二月納　一十月より十二月迄　三月納
但吉野丸太は買主より面々受取に罷出候等代銀材木丸太共毎月十五日納　七月は十七日納

市場日定

一正月十一日　賣初　一十二月十九日　賣仕廻
一正月より五月迄九月より十二月迄　晝九つ時賣　・一六月より八月迄　朝六つ半時賣
一毎月市日　朔日十八日　五日廿一日　十日廿五日　十五日
但右之外吉野丸太は時之模樣に應し毎日にも相成候事
一拾人方之者共は市賣之外に買調度品には直樣役所へ罷出直段合之儀は問屋幷役人立合相定候事
一拾人方之者共他所之者共立合せ候儀は勝手次第
一拾人方之者共より根質物差入させ尤仲間申合總受合之手形差入候事
一拾人方幷問屋共御買入木有之節は御用申付候間諸事申合せ隨分手を詰め相働候事

吉野丸太大坂市賣歩引受書

文化十酉年十二月定

一杉檜棒木類　五歩引
一杉檜三間以上中小　同

一杉檜小柱并長もの　同
一杉檜長一間より二間半迄　五歩引／一割引
但末口四寸五分以上／末口四寸四分以上

一杉長一間二間　二つ割／四つ割　五歩引／一割引
一角平物都て材木類　一割引

但鋸目入候分右同断

一諸引もの板類　右同断

并樽丸外材取方に不拘不残一割引

口錢は　正味銀一〆目に付二十五匁
中仕賃は　正味銀一〆目に二十八匁

右之通御座候已上

十二月　　舖屋　喜　一　郎

炭運賃定

高津尾　元二分五厘壹俵に付　二分三厘
眞砂　同　同同

市鹿野　同二分二厘同　二分
周參見　同　二分四厘

江住　同三分　同　二分七厘

右若山廻り

高津尾　一俵に付　二分五厘
眞砂　同　同

市鹿野　同　二分二厘
周參見　元三分五厘同　二分六厘

江　住　　同　　三分

右大坂廻り

右役所に仕出炭若山大坂迨り共運賃銀此度相定候付向後右之名前之御船手へ積方申付右運賃にて積取らせ候筈

正　月

金毘羅丸　柏屋　幾右衛門　　富吉丸　吉野屋　虎　市

住吉丸　土佐屋　藤右衛門　　日吉丸　井筒屋　市太郎

大坂廻し竹運賃一束四分　但竹束本数左之通

尺　一本　九寸　二本　八寸　三本　七寸　四本

六寸　六本　五寸　十本　四寸　十五本　三寸　二十五本

文化十二亥年正月極

若山より大坂積船板運賃定

		一枚に付
長五尋	厚三寸	二匁
	同四寸	二匁八分
	同五寸	三匁五分
同六尋	厚三寸	二匁九分
	同四寸	三匁九分
	同五寸	四匁八分
同七尋	厚三寸	三匁九分
	同四寸	五匁二分
	同五寸	七匁五分
同八尋	厚三寸	五匁
	同四寸	六匁七分
	同五寸	八匁三分
同九尋	厚三寸	六匁二分
	同四寸	八匁三分
	同五寸	十匁四分

文化十二亥年二月十四日大坂町奉行平賀信濃守より大坂御屋敷奉行へ達

一紀州殿領分諸産物之内御直仕入之分代銀相滞候節取立之儀に付先達て御達之趣を以江戸表へ相伺候處此節御下知有之候間御直仕入諸産物代銀當地之もの相滞迄有之候はゝ其度ゝ得と糺之上紀伊殿より御掛同様之品代銀相滞筋に不埒之趣意に候はゝ右之分は滞銀奉行所へ取立役手之向へ相渡可申候左も無之百姓より申立候ても可相済分は滞候もの相手取申立候様可被致候

文化十二亥三月廿四日　　背(候)に　御仕入頭取へ

御國産交易之儀前々より毎々内存寄を以被　仰出候得共兎角御益而已に相泥み或は不行屆にて其事成就不致候付先達て於御仕入方交易之儀勘辨致させ業は各へ御任可被遊旨被　仰出有之追々取掛候得共諸國共不離通之時節柄故專にも難取扱何鳳業に至差支之趣も相見候に付先程能取計見合居度旨先達て申出有之趣尤之儀に付猶彼是御評議之上差支無之様之御趣意

公邊へも御達させ被遊候處此度御達之通

公邊御取扱相濟候間御國産交易一件嗣司農府へ一圓御任せ被遊候條　公儀より之御書付之趣相守此御方御趣意相貫き御國益に相成末々稼方も相立候様厚致勘辨可被取計事

文化十二亥年三月六日（相定候事）

一問屋共へ吉野郡より出候丸太材木類市賣取計せ問屋口錢銀百目に付四匁宛荷主共より問屋へ相渡候儀は跡形之通右口錢之内左之通問屋共より相納させ候事

但若山市賣之節之事

一材木貢代銀百目に付

口銀四匁　内三匁二分八分　問屋口錢役所納

同十三子年七月六日

御仕入頭取

両熊野在々近年諸仕出し物不捌に付山方稼少致難澁候に付椎茸御仕込被成下候得共末々稼方相増御救相成候趣願出候付役人差遣見分爲致候處是迄稼方可相成山々は仕出當時にては大躰山々も伐盡場所に寄椎茸木計り相殘炭木可生立場所へ椎茸爲致候ては炭木生立不宜候付前々より願出候得共御仕入方には取計不仕候得共段々伐盡稼方薄相成炭木生立候頃迄に凌方差支及難澁候付爲稼此節仕込方取計仕候儀に御座候夫に付御口銀別紙割合之通相定させ候樣仕度奉存候此段二歩口奉行中へ御達御座候樣仕度御達申上候

右口銀は椎茸一斗此山元代銀二匁五分但九の割

一町川船賃定

差船一艘賃銀定

若山より	小倉山崎組邊迄	十二匁
同	池田組田中組邊	十四匁
同	粉河名手邊	二十匁
同	丁の町組邊	二十二匁

同　　中組　　二十三匁

同　　橋本迄　　二十四匁

文化十四丑年二月廿日

一件八役所御仕出炭抹香檜縄近年不捌凡越色物多御金子伏込候付其年々捌候程つゝ相見詰め大躰一ヶ年切拂切候樣近頃は手近き山は段々燒盡遠山而已に相成入用も多分相掛り候付買元相減させ候樣役所々々へ御通詞候樣元代急に相減候儀も難出來候はゝ仕入貸筋は羽書にて貸渡させ羽書通用不致場所は錢丁百文を一匁と相定貸方取計候筈

他所貸付

他所貸附金創始之事明記なし大坂出張所は文化十年に設置と雖も是専ら仕出しの物産販賣の爲なるへし左に掲くる大坂町奉行よりの達而且文政六年十一月堺出張所を設置以後大津京都初所々出張所建設の事あれは全く文政七年の初より開始之事と判せらる既に根質物を徴し尚返金遲滯の時は奉行所より取立之特權あれは其確實は世の信用を博し自つから依托金も多く貸借流通の便大に行はれ恰も今の銀行（一種の[illegible]ものか）に均しかりしものか）

文政六未年十二月廿四日

大坂町奉行内藤隼人正殿高井山城守殿平塚勘兵衛へ被相達候御貸方筋御書付一件寫左之通

紀伊殿御貸附金之儀以來武家并町人共より根質其外引當之品を以御貸付相滯候節品々取立方之儀

に付先達て御達之趣を以江戸表へ相伺候處此節御下知有之候間質物引當之品等取立方相滯候節は
奉行所にて取立役手之向へ相渡可申候尤武家より之引當物等は當表にて難取計町人共より引當物
之內にも差支之品有之候間兼て被相心得差支不相成引當之品滯候節は可被申立候

書　取

今日御達被申候御貸附銀に付御引當之品先般御書出有之候處差支之口も有之候付左に御達申候

一綿木綿鉄づく
右は質屋外にて右躰持運相成候品引當等に差入銀子貸借致間敷旨兼て町觸等も差出置候儀も有之
候付差支相成申候

一銅
右は吹銅に相成候を引當に差入候儀は指支無之候荒銅を引當に差入候儀は差支相成申候

一米切手
右は諸藏々米出之限月際限も有之儀に付其砌切手米渡方差縺無之様手堅く御取計に無之候ては差
支相成申候

一砂　糖
右は出所糺儘に有之候はゝ差支無之候幷和製砂糖之儀は當地へ出候斤數高兼て定も有之候付右斤
數內に候はゝ差支無之候

一家質證文

右は貸付銀返濟相滯候節は家質證文銀主へ爲相渡右證文受取候者より質銀濟方願出日限濟方申付候定法に付差支相成申候

右之通御達申候尤書面之外品々との儀は追々御書出之上差支之有無猶又御達申候儀に御座候事

一貸付規則之事創業の際規定ありしは必然と雖も何等の記載なし弘化四未年六月御國御仕入方に於て貸付創始之際元役所より左之條目書を下附したる旨記載あり蓋し一般此條目に準據施行の事と察せらる亦兩に依て集記す

御貸附條目

一御用途御備金御貸附取扱之儀御領分他領共御出入手次を以願書差出させ評議之上引當且身元判元等取調手堅筋に候得は御貸付可取計事

　都て二重貸に不相成樣松坂御用所へ可申合御領分は兩願に可取計事

一御貸附證文認振定法之通入念取置理々に不相成樣公邊御達等に相成候節不都合無之樣に可取計事

一利足之儀　公邊御趣意も有之一割已上貸方不相成事

一返納之儀六ヶ月限に取計再借願出貸延に相成候節利足月踊り等無之旨自然返納相滯候利足元銀へ結込之儀不相成事

一御金御貸渡之節連印之もの幷手次御出入立合せ役人直に貸渡可申事

一御貸附判元調擬越候役人共道中雜用等借主より相賄猶又見分先にて菓子料と唱禮金等受申間敷事

右之節酒肴等差出馳走ヶ間敷儀不相成等自然及時刻に候はヽ湯漬等差出候儀は格別之事

一御貸附御達濟御國々左之通

山城　大和　近江　攝津　河内　播摩　和泉　丹後

但馬　若狹　越前　美濃　伊賀　伊勢

右

一御貸附返納相滯候節精々取立手限り難及取扱筋又は目安受に相成候筋等其所々町奉行所御代官所へ御達取計候事

右被取扱之上にも返納及遅滯候筋は御達下取計之上闕訴御取計可相成事

天保九戌年十二月上方役所々々へ達す

一幸橋御屋敷より貸出し金利朱之事

幸橋御屋敷より出し候御かねの儀は是迄格別に願出趣意も相分候分は六朱七朱半迄貸渡有之右にては御勘定向差支有之向後同所より出し候御かねは月八朱より外は貸渡不申銘々應對之節談可致候譬京都より貸渡候節は右御かね幸橋へ受取に差出可申歟又は爲替に致させ可申歟之處貸先應對之上爲替賃役所々々御勘定拂に不相成樣相心得可申候爲替(員)(原字不明賃カ)向後相止候間其通に心得可申候月八朱之利足は幸橋へ相納其餘取増之儀は其役所々々御益に相立候樣詰中相心得不相紛樣應對作略可致事

天保九戌年五月

一口熊野四番組炭直焼差許之品

口熊野四番組在々必至困窮に相迫直焼直賣御免に成下候はゝ遠山より炭焼出右持稼を以相凌せ可申旨願出右に付眞砂近露幷市鹿野取扱之内共諸仕入銀諸貸込銀等返納之上直焼差免近露眞砂両所は御引拂に相成尤周參見組とは入交之場所にて四番組直焼に相紛周參見組より採炭等有之候ては市ヶ野御仕入方仕出炭御取締難相立且は四番組直焼炭持出場所之儀田邊新庄等へ陸出取計候ては與在々より七八里も有之難引合直焼御免有之候ても凌方に難相成趣にて前野川十二ヶ在之儀は市ヶ野村枝鄕瀧へ持出夫より船積取計申候との品御代官小浦惣內より譯て談之品も有之同所へ番所取建役人相詰させ船積之節立合改極印取計之上日置川丈け積下候筈合川村出炭は同所番所にて右同樣相改候筈右改極印無之分は縱五貫目俵にても取上候筈議定小浦惣內へ懸合相極取計候事

一右直焼御免願出候付併是迄中田邊領商人共仕込之儀に付政府にても御評議被成下飛驒守殿御家老へ御申させも被成下昨酉年十一月御家老より書取差出有之程之儀容易に御藏下へ仕込等不相成筈且又御仕入方引拂相成候に付ては是迄之通仕込いか樣之振に可相成哉との儀大庄屋へ御代官中より申見させ候處最初願立之節仕込方內々申出候銀主共も手を引甚相難候趣に候得共大庄屋渡瀨安兵衛儀は身元も宜者に付諸貸返納筋も同人引受且銘々焼入用繰合之儀も同人相心得罷在候付何分直焼御免被成下候樣との儀御代官達書へ大庄屋共書附相添相廻候付直焼差免に相成右之通に付都て渡瀨安兵衛一己之仕出にて賣捌之儀は田邊新庄商人共へ勝手次第取計尤熊野

内にて賣捌不相成筈議定取計有之候

右之通眞砂初三役所諸貸滯筋共取調役人左之通御代官小浦惣内近露村へ出張夫々直談之上返納相濟候事

御仕入方　淺井千左衛門

立合手代　上芝三左衛門

在方　嶋村又太郎

是は村々庄屋呼出調高猶押方取計滯筋は司農中へ掛合有之不殘納切に相成總納高銀五十八貫八十六匁一分五厘也

嘉永六丑年十二月十二日御勘定奉行より達

一左之組内在々作立之紅花冥加金大庄屋取集在方役所へ納め御仕入方へ差送り之處已來右紅花之儀産物方取扱に相成候付冥加金組々大庄屋共より御仕入方へ直納相成候事

伊都郡　粉河組　名手組　丁之町組　中組

那賀郡　山崎組　岩手組　田中組　池田組

嘉永六丑年十二月御勘定奉行より

松山方　寒天方　米捌方　酒造方　陶器方　爐硝方

右是迄御勝手方にて取扱候得共此度御趣意に付以來御仕入方へ振込同所にて取扱せ候筈間行届取扱可申事

安政二卯年四月廿七日政府より達

御仕入頭取へ

勢州非常當て竹木佐八役所へ囲置候樣先達て相達候事然處右御囲筋昨年致燒失尚又去暮津浪にて流失相成候趣に有之此折柄毎々之御出方に付右等御囲置不取計共火急之節いか程之竹木其所にて相調可申との儀申見御勘定御勝手方申合可被談出事

同年六月廿二日御仕入方頭取へ

一松山方寒天方米糴方酒造方去寅年より之益金年々御仕入方へ納置非常御備へに取計候筈

同年十一月進達

御仕入方元〆共

一

御仕入方之儀三役所見廻役并申談勤之筋出在之節先年は駕籠人足相渡候得共以來駕籠人足は不相渡格式有之元〆迄爲足銀一日八分宛相渡り候筈文化十五寅年相極有之候得共三人扶持取之元〆は右立方取計無御座候處評定所にては三人扶持以上出在之節足銀相渡り候趣に付御仕入方之儀も右同樣立方相濟候樣御取扱被成下候樣仕度奉願候以上

右指令書面達之趣を以三人扶持取迄出在之節足銀相渡可申事

右足銀一日八分宛相立候得共評定所之振合を以都て一步違にて立方可取計事

安政六未年二月

一江戸御産物方を設置す

此比水野土佐守執權之處海防武備之儀盛にして國用多端旁々理財に汲々たれは御仕入方之儀種々調査改革専ら奨勵を行ひ遂に江戸御産物方を赤坂邸内山屋敷に設置し御用人川北惣右衛門を主裁とし江戸御仕入頭取井田要左衛門を頭取に命し紀勢の産物一切廣く販賣の事を謀らしめたり若山は一にして江戸は別派とす慣例に反し問屋を經由せすして直接に販賣收利の增殖を計らんとなせり當時之書類傳らす大帳に記載之もの左の如し

一江戸御産物方取扱品　御産物方頭取進達書

一蠟燭幷棕櫚皮傘

右之品江戸積問屋鑑札下け渡同所御産物方と荷主共送り先と兩方へ勝手次第賣捌かせ御座候右之品向後都て他所積問屋鑑札下け渡江戸上方等へ賣捌候儀も取扱仕度奉存候

一砂　糖

右は江戸御産物方へ積送り賣捌せ御座候

一藍方役所之事

右は是迄御勝手方にて取扱御座候得共向後御産物方にて取扱仕度奉存候

一地藍製之事

右は是迄御勝手方にて世話致し此節より開業可相成積り御座候是又御産物方にて取扱仕度奉存候

右之外品々江戸表より注文次第相廻させ御座候

一御產物之儀は御仕入方第一之取扱にて本業に候處此度御產物方別段御立被成下候付ては是迄御仕入方より諸品山方浦方へ仕込有之候場所之外同所妨に不相成浦村へ同品之類にても下々爲方に相成候品は御產物方よりも仕込取計長崎之外諸向へ二派に積廻させ試申度左候はゝ下々稼相增御產物も手廣く相成可申哉御仕入方にて仕來り之外此度新規に御產物方にても骨折開業仕度奉存候

本文之通御座候得共藥種類は於大坂表御仕入方より賣捌問屋申付有之趣に付同所之外諸向へ積送り候樣可仕と奉存候事

但寒天は當時御仕入方より浦々へ仕込有之儀に付右等へは手差不仕候尤品々長崎へは一圓送り不申都て江戶上方邊へ相廻し可申積り御座候事

一御產物方役所之儀此程御達申上候通り砂糖方役所內へ手輕く取建手代共申付候樣仕度役所一構に不致は下々人氣寄かね申候間早々御聞濟被成下候樣仕度奉存候

御仕入方にて取扱有之品々

一炭	一寒天幷海草共	一唐弓弦	一酒造
一米捌	一紅花	一金海鼠	一懷爐幷藥灰
一椿榧油	一干鮑	一縷糸	一銅
一和藥種幷染草共	一硫黃	一毛綿	一鉛
一蠟燭	一棕櫚皮	一樽丸	一他所鹽
一硝石	一漆木	一白蠟	一椎茸

一木　地　　一松　煙　　一樟　腦　　一材　木
一紙　類　　一陶　器　　一鳥　黐　　一晒　葛

右産物方へ紀勢の物品を陳列し御家中へも販賣之事 信等記憶する處にて紀州蜜柑之如きも直接に關渉を試みたるに未熟之官商百事齟齬數十萬籠の蜜柑は堆積山をなすも更に購買の者なく終に全然腐敗に歸して大失敗を取り時人の笑を招きたりされは二三年にして事廢絶從來之組織に旧復せり

御仕入佐八出張總役所損益調査處分

安政六未年三月

一左之通御仕入掛り御勘定奉行より政府へ進達之處伺之通相濟取立方苛酷に不成樣可取計旨同月十日差圖有之依て達面之通り在々出張所へ達す

御仕入頭取

御仕入佐八天野川三役所在中出張（役）(一本ナシ)所（々々々）(一本アリ)に仕込銀之内不成行にて年賦返納等に相成有之分且細に內譯取計右取立銀若山御仕入方へ正納爲取計備置猶又當時都合能諸品仕出候分幷向後仕込銀共薄利附にて役所々々へ相渡右利分をも御仕入方へ備置右之外余銀之分全く御益銀に相立年々遂勘定益銀高に應し勤人共へ步合被下候筈先達て御書附御下け御趣意之趣承知仕右は兼て申上御座候通出張役所之儀は元祿年中より追々御取建に相成在々不毛之土地難澁之者共爲御救稼せ無利足仕込銀貸下け諸色仕出させ右品物賣買取計年々御勘定相立候儀に付其年に寄御益增減有之難

見留且數ヶ役所之内には御益に不拘御救貸而已致遣候場所も有之事に付去春私共役所々々へ罷越巨細取調仕候處一印別紙之役所々々には御趣意通相貫候儀出來可申と奉存候付二印之通詰役人共へ相達此節より爲取計可申と奉存候尤利足取立并年賦納銀共若山へ相備右銀子を以上方御立用筋元利迄に相片附候樣仕度奉存候猶又三印別帳之役所には此節御趣意通にも難貫御座候付當分是迄之通取計四印之通詰役人へ相達追々御趣意相貫候樣精誠勘弁爲相働候樣可仕と奉存候依之御受旁御料簡相伺候事

「壹印」

海士有田日高兩熊野役所々々若山元請之内無利足年賦并難物相除全當時融通銀へ年五朱之利附にて御趣意相貫候役所々々左之通

出嶋　鹽津　神野々　箕島　湯淺　三尾　上柳瀬
周參見　眞砂　近露　市ヶ野　合川　大野　和深
高川原　瀧の拜　西川　本宮　木本　寺谷　新鹿
大俣　尾鷲　嘉田　長嶋　御仕入産物方　同炭方

〆二十七ヶ所

「此帳面内分勘定書留略」

「壹印之内」

天野川御村木所元請之内無利足年賦并難物相除當時全融通銀年五朱之利足附見詰帳

「帳面内譯留略」

「右同」

勢州佐八役所々々若山元請之内無利足年賦幷難物除置當時融通銀へ年五朱之利附にて御趣意相貫候役所々々左之通

船　津　　二　鄕　　打　見　　村　山　　駒ヶ野　　七日市

右同斷

「貳印」

出　島　　鹽　津　　神野々　　箕　島　　湯　淺　　三　尾　　上柳瀨

周參見　　眞　砂　　近　露　　市ヶ野　　合　川　　大　野　　和　深

高川原　　瀧の拜　　西　川　　本　宮　　木　本　　寺　谷　　新　鹿

大　又　　尾　鷲　　嘉　田　　長　嶋

右二十五ヶ役所御仕入方分

船　津　　二　鄕　　打　見　　村　山　　駒ヶ野　　七日市

右六ヶ役所佐八方分

右役所々々

元〆幷金役共へ

御仕入佐八天野川役所々々御勘定振御改革被　仰出候付元請銀之內是迄年賦取扱濟幷當時相滯返納振申詰中之筋共向後別段に御勘定取組精々行屆致取立右取立銀年々若山へ正納取計當時全

融通之分へ利足年五朱之割合を以若山へ相納候筈別帳見詰書之通相心得精誠御益立候様厚折骨
相働可申候尤其品に寄御賞をも被下筈に付心得違無之様厚勘弁御趣意相貫候様實意相勤可申事

「二印」

那賀郡小畑御仕入方初七ヶ役所々々御仕〔入〕色物薄御益無數候付御趣意之通貫き兼候事

小　畑　　寺　原　　高津尾　　印　南　　江　住　　成　川　　鷲　家

右

「此帳面御勘定書内譯留略」

「三印之内」

勢州佐八方崎役所初五ヶ所御仕出色物薄く且業合に寄御趣意之通貫き兼候事

崎　　船　木　　天ヶ瀬　　大　湊　　佐　八

右

「右同斷」

「四印」

小　畑　　寺　原　　高津尾　　印　南　　江　住　　成　川　　鷲　家

右七ヶ所御仕入方分

崎　　船　木　　天ヶ瀬　　大　湊　　佐八御村木所

右五ヶ所佐八出張所分

右役所々々

元〆幷金役共へ

御仕入佐八天野川役所々々御勘定振御改革被　仰出候付元請銀之内是迄年賦取扱濟幷當時相滯返納振申詰中筋共向後別段に御勘定取組精々行届致取立銀年々若山へ正納取計當時金融通之分へ利足年五朱之割合を以若山へ相納候筈に付見詰爲取計候處其役所々々別帳之通不足相立御趣意難相貫哉に相見右は其土地柄に寄業難相立品々は可有之候得共御勘定合難相立候ては自然手を縮め候より外無之左候ては村方之爲にも不相成儀に付何卒厚勘弁致御趣意相貫候樣取計候はゝ窮民御救之御手當も出來且は勤人とも勤功にも可相成儀に付何分厚心掛御趣意相貫候樣丹精實意に相勤勘弁之上存寄之品可申出事

「前進達に添」

背　張

御仕入方仕込銀高畢竟　　御仕入方役所三十四ヶ所御仕込金銀高

一

金一萬四千八百七十七兩一歩

銀九千四百三十三貫五百十一匁六分二厘

此皆金十七萬二千百二兩一歩と十一匁六分二厘　　但兩替六十目割

右之内

無利足年賦筋

銀三千八百十八貫六百十六匁七分七厘

此金六萬三千六百四十三兩二歩と六匁七分七厘　　右同斷

金貳千六百六兩

御買置山幷網代共

銀七百七貫六百十七匁三分八厘

此金一萬千七百九十三兩貳分と七匁三分八厘

小以

金貳千六百六兩

銀四千五百二十六貫二百三十四匁一分五厘

此皆金七萬八千四十三兩と十四匁一分五厘

差　引

金一萬二千二百七十一兩一歩

銀四千九百七貫二百七十七匁四歩七厘

此皆金九萬四千五十九兩と十二匁四分七厘

內

和歌出島役所初二十七ヶ所當時融通宜筋

金一萬二千二百七十一兩一歩

銀四千七十六貫百六十目一分九厘

此皆金八萬二百七兩一歩と一分九厘

右之分は年五朱之利足相拂候等御勘定相立御趣意之通相定候筋

野上小畑役所初七ヶ所當時御趣意通相貫兼候筋

銀八百三十一貫百十七匁二分八厘

此金一萬三千八百五十一兩三歩と拾二匁二分八厘

右之分は米價高直且御產物出高も無少此節御趣意通相貫き兼候付追々丹精爲取計可申筋

右之通

「前進達に添」

背　張

佐八方仕込金高畢竟　　佐八方役所十一ヶ所御仕込金高

一金三萬六千六百十七兩と十四匁七分一厘五毛

右之內　　無利足年賦筋御買置山代

七千七百六十兩と十二匁八分九厘

三百六兩三歩と七匁六分四厘

小以金八千六十七兩と五匁五分三厘

差引　金二萬八千二百五十兩と九匁一分八厘五毛

内

船津役所初六ヶ役所當時融通宜筋

金一萬八百兩三歩ト七匁九分四厘

右之分は年五朱之利足相拂候筈御勘定相立御趣意之通相定候筋

鯖役所初五ヶ役所當時御趣意通貫兼候筋

金一萬七千四百四十九兩一歩ト一匁二分四厘

右之分は米價高直且御産物出高も無少此節御趣意通相貫兼候付追々丹精爲取計可申事

右之通

「前進達に添」

背張

天野川仕込銀高畢覚

天野川御材木所

一銀千四百四十八貫三十六匁九分一厘

此金二萬四千百三十三兩三分ト十一匁九分一厘　但兩替六十目割

内

二百十四貫七十二匁四分一厘　無利足取立候筋

六十貫目　御買上け山代

八百二十三貫八百八十三匁六分九厘　無利足年賦筋

小以銀千九十七貫九百五十六匁一分

此金一萬八千(二)(一本ナシ)百九十九兩一歩と一匁一分

差引

銀三百五十貫八十目八分一厘

此金五千八百三十四兩二分と十匁八分一厘

右之分は年五朱之利足相拂候筈御勘定相立御趣意之通相定候筋

慶應二寅年十月七日司農府より頭取へ之書面

一口熊野古座組鯨方へ先年其御役所より仕込貸滯銀去弘化二巳年より年々得漁鯨一本に付金二歩二朱つゝ右滯銀之内へ返濟取計來候處御承知之通役所廢止被　仰出候付右鯨方之儀御代官所元に成浦役人并大庄屋共へ引受させ候筈に就ては向後返濟振之儀別紙之通御代官中へ司農衆より御達相成候付右寫差進此段及御申合候以上

田中八五郎

別紙　　口熊野御代官へ

古座組鯨方へ先年御仕入方より仕込取計候節多分貸込殘銀相成有之處去る弘化二巳年より年々得漁鯨一本に付金二歩二朱つゝ右殘銀之内へ二分口役所より返濟取計當時殘高左之通有之趣相違候間向後返濟振之儀猶御仕入頭取へ申談宜被取計事

一銀二百四十七貫七百三十四匁四分一厘　　當時殘銀

南紀徳川史巻之百十二

臣　堀内　信　編

財政第六

御仕入方　二

納金上納

茲に献金及廟閣建築之事唯原簿等散見の分を掲載に止まれは尚遺漏あらんも知るへからす且記録断續支離を免れされは事由不明のもの多し唯大體を概察すへし以下亦之に倣ふあり

一三役所より御勝手方へ御立用に差出納切に相成候金高左之通

一金十五萬八千四百六十一兩

内

四千八百兩　寶暦三戌年納切に相成候筋

十三萬二千四百七十七兩　明和六七兩年右同斷

三千四百十七兩三歩　寛政八辰年右同斷

壹萬七千七百六十五兩二歩　文化元酉年右同斷

右元祿より寛延之頃迄之帳面出水之節水漬りに相成其節之帳面無之候に付相分り不申事

又別項に左の記を掲く結局一事にして内譯を詳にす銀目は六十目立也

御仕入方より御勝手方へ指出納切金銀高

（金拾壹萬六千六百七十兩
（銀二千五百七貫五百二匁　也

内

四千八百兩　　享保十巳年より寶暦四戌年指上切に相成候筋

九萬三千兩　　明和六丑年同七寅年差上切に相成候筋

（一万六千二百三十四兩三分
（千三百九十四貫五百八十目余　　（口前役所御仕入方へ引受候節數銀に相納金候處
（明和六丑年御斷延被　仰出安永五申年納切相成候筋

（千六百四十八兩二分
（百六貫百六十一匁余　　寛政八辰年指上切に相成候筋

（九百八十六兩三分
（千六貫七百（六）十二匁余 一本アリ　　文化元子年御立用被　仰出差上切に相成候筋

天保三辰年四月廿一日定

一御仕入佐八天の川右三役所御積り銀は一番之御備と唱

一御内證方は貳番之御備と唱

一三役所御内證方共年々之御益を別段に積置利倍取斗之儀を三番之御備と唱

天保五午年四月十五日

一金壹萬兩

右　一位樣へ差上候事

此分天保七申年十月四日六千兩同年十二月七日四千兩爲御救宛御下け切相成候旨金澤浦右衛門

より頭取へ申聞大帳へ留記取計

據に天保七年五穀登らす米價非常に高直疫癘流行天下大凶荒を來し翌年に至て饑莩益甚敷湊川凌の御救普請ありたり故に御救宛として下賜ありしならん

天保七申年二月

一　銀六百貫目

右差上同年二月及ひ四月三百貫目つゝ之受取證書御勘定奉行三名連印にて金澤彌右衛門へ渡す

天保八酉年十一月廿八日

（金八百八十一兩二分と
銀百八貫二百十四匁六分二厘

内

八百五十兩也

是は　一位樣思召を以御召船御造作爲御入用差上筋

（三十一兩二歩
百八貫二百十四匁六分貳厘

是は右同斷和歌天神社御修覆總御入費に差出候筋

右之通　一位樣思召之品被爲在松山方積銀之内御手許に差出置候樣御下けに相成候付則金澤彌右衛門證文拂に相成候事

天保九戌年三月

一西丸炎上御手傳金被　仰出に付御仕入方より金貳萬兩差出す

右は當月十日江戸西丸炎上に付萬石已上已下へ御手傳獻金被　仰出御家に於ては御座所向並大奥向共御普請御手傳金八萬三千二百五十兩御出金之割たり依て調金被命提出す此節執政より之書面左之如し

西丸炎上に付御手傳被　仰出候處不一方大金之儀當時之御繰合大に當惑之儀に有之候處其許並井上兵次郎等格別出精相働早速御仕入方より二萬金差出初度御上納之御都合出來之趣江戸へ申上候處大に　御安心被遊至其許初兵次郎等出精之儀と　御喜色之御事候旨此段具々宜申聞との御事候旨此度江戸表より申來候間被得其意右之趣兵次郎初へも宜敷可被申聞候以上

四月廿三日　　　　　　　　　　山中筑後守

金澤彌右衛門殿

天保九戌年五月

一江戸御本殿御普請御入用之内へ金五千兩差出す

天保六未年三月廿一日赤坂御本殿燒失同十一子年八月造營落成本記金員御勘定奉行より之受取證金澤彌右衛門受取旨の記あり

天保九戌年五月廿五日

一御仕入方より御勝手方へ立用金之儀執政より金澤彌右衛門へ達

先達て御仕入方より御勝手へ立用相成有之候金一萬兩之内五千兩御普請御入用に差出候筋此度差出切にいたし殘り五千兩は別紙之通元利五年賦返濟之積に可致旨被談候右之通相成候得は此節別て御都合に相成候間談之通可被取計候右に付手形入替等之儀は御勘定奉行申合宜被取計事

一作之通被取計候段其許初御仕入頭取等格別出精骨折候故之儀に付厚可被申聞事

別紙は差上殘り五千兩を月五朱利にて天保十三寅年迄五ヶ年賦とし元利之内へ毎年七月に五百兩十二月に八百兩つゝ御勝手方より御仕入方へ返濟滿期寅年十二月に至り元利金殘金三百七十二兩二歩二朱と二匁にて濟切へき勘定書也略す

一御仕入局之事　一位老公特に御配慮元掛りを執政山中筑後守支配を金澤彌右衞門井上兵次郎等へ被命又内旨を以別途に利殖融通之方法を謀らせられ收支等巨細筑後守に達し　老公之御捺印を申受け決算を行ふ之を密御用と稱し普通業務之別派たり此事次第に擴張往々利益夥からされは利潤之内より年々左之如く上納且賞與を賜わりしと云ふ

一位樣へ上納　金千三百兩　内　紘五百兩　幕八百兩

金百兩　山中筑後守へ

金百兩　金澤彌右衞門へ

金百兩　井上兵次郎へ

此外御廣敷御用人奥表御右筆表御用部屋坊主御廣敷坊主等へも五七兩乃至少分之下付金を行ふ各差等あり

御用材御普請

按に城郭殿舘橋梁其他國費營築之用材は都て佐八御材木方即材木石奉行の負擔たる成規と判せらる然れ共筆記欠漏詳にしかたし

一文化七午年十月晦日曉七つ時過御下屋敷御燒失に付取扱ひ十一月朔日未明御勝手方より只今罷出候樣申來候付見廻役井上兵次郎罷出候處御下屋敷御燒失跡御圍ひ板五百束杉丸太三百本其外小割物積廻し候樣にとの事に付早速及取計候事夫より追々御急之注文申來丸太板類其外小割物竹等夥敷積廻し候事尤役所に無之木品は夫々買入積廻し候事

一右御燒失に付當分　御藥種畑御住居被　仰出候付御同所御普請御急之注文申來候度々役所より積廻し候ては手行惡敷候付御藥種畑近邊へ役所出張渡し方取扱候方可然との事に付兩御用部屋其外奥向へ掛合候上十一月二日夜同所御揚り場之邊へ小屋掛取繕ひ出張役所相構候事詰役人は手代役人之内五人日用之者十二三人晝夜詰切候事

但頭取初見廻り元〆迄日々打廻り候事尤右出張役所取建候儀元斷甚六ヶ敷二日夜戌刻御了簡濟來候に付即刻大工六七人召連暫時に取建候事

文化八未年正月十二日申究め候事

一御下屋敷御普請御入用材木栂松角丸木渡し之筋牛町大雁木より御場所迄水揚持屆貫目屋頭伊兵衛受負左之通

栂松角百村に付四分六厘

同年正月十五日定

一御下屋敷御燒失に付御普請御入用日向栂挽方之儀に付格別入念させ猶又大材物之儀に付彼是挽方手間取常式挽賃九分三厘にては難儀之趣願出候付此度に限り銀一匁一分に相定候事

文化八未年四月十四日

一　　　　御勘定奉行

江戸　御中屋敷御普請之儀御繰合次第可被　仰出候間御木材之儀可成丈け御領分御山より仕出させ末々樣にも相成候樣此節より手組申付御費用無之樣勘弁いたし取計可申との御事

右仕出方佐八御仕入方へ申付勘弁いたさせ夫々承届御手行宜樣差圖可致候

文化九申年五月廿二日

一御仕入佐八役所之儀從來風儀不宜候處近年惡弊相止め救荒て御備等元祿享保之御趣意に復し補組御手當御船御造作御用且御中屋敷御普請御材木御用引受末々潤にも相成其上御備之餘分を以御普請御用に差上候段不一形之趣達御聽一段之事勤人共厚く褒遣候樣にとの　御沙汰候

一文化十一戌年御下屋敷御殿御再建之時御用材調達す此時御普請之組分あり殿邸庭園誌に記す

一文政十三寅年三月廿四日

和歌山龍院樣御靈屋御造營御用被　仰付

同御靈屋は長保寺に有之雲蓋院には御簡易之事なる處　舜恭院樣特旨を以御仕入方へ御造營を被命本年正月より起工天保二卯年正月落成す御仕入大帳には同御普請之節木挽賃跡方無之取極

云々の事のみにて他に記載なく構造設計且費額等も詳ならす而して常夜燈料御備供料獻備之記あり左之如し

一銀百五十目

右は　南龍院様御靈屋御銅燈籠永代常夜燈御仕入方より差上之儀　前大納言様奉伺候處内存之通永代差上候様天保二卯年正月廿五日被　仰出

御備供料代り

南龍院様御靈屋

年々銀貳拾枚

年々銀壹枚つゝ　　和歌六ヶ坊へ

南龍院様御靈屋勤行被　仰付被下

年々銀五枚　　壽門院へ

南龍院様御靈屋之儀重立相勤候様被　仰付候に付被下

右之通此度　南龍院様御靈屋御造營に付

前大納言様格別之思召を以御内々被遣且被下候付於御仕入方渡方可取計旨被　仰出仍て盆暮兩度に雲蓋院代壽門院へ相渡す　天保二卯二月

一件之通之處天保十一子年三月十五日執政より差圖にて向後御勘定奉行取扱に相成同役へ引渡御靈屋圖面類も不殘引渡と云々

一天保四巳年二月十日
西濱御殿大奥御普請被　仰付
此時頭取へ左之通被　仰出

井上兵次郎

是迄も追々御仕入方にて大造之御用相勤猶又此度右御用筋相勤候段全其方兼々厚く心掛骨折候故と一段之儀　思召候毎々一手にて御用相勤候段大儀には候得共猶此上一統申合精々相勵可申との御事候

一天保十亥年十二月一日
御仕入方にて御馬買上御廐へ可相立旨政府より由比楠右左衞門へ被達
御取締中にて御馬數相減候故御家中子弟稽古都合之爲御仕入頭取内存之通御仕入方にて馬三匹買上御廐へ相立飼料も御仕入方より相賄諸事御馬同樣相心得御家中子弟稽古に相用候樣奥掛りへ申聞候間馬三匹買上御馬預りへ引渡飼料相渡候儀等宜被取計事
右飼料一頭に付一日大豆一升米糠干草若葉等代壹匁三分三頭一ヶ月合三十九匁大豆三（升）［斗カ］之旨御馬預より請求書御仕入方へ差越す
件之通候處嘉永六丑年十二月限にて翌年正月より本途にて取計勘定喰切に成る

一嘉永元申年濱御殿御新茶幷大奥御數寄屋取建被　仰付

蒸汽船購入

明光丸

蒸汽船購入

嘉永六丑年九月大船製造解禁之令出し以來大藩往々外艦購入之事あり藩於ても水野土州執權之時大船製造費として市在へ日錢を課したれ共事遂に行はれす或は君澤形船中軍艦等之製ありしも形ち洋風に擬する迄にて物の用に足らす時勢は追々切迫し大艦之必要愈急也然るに國事多端國用暴費の際なるか故之か購求之事遂に御仕入方へ命せられたり此事御仕入大帳に記載なけれは（他に筆記のもの必有に相違なきも今傳はらす）其巨細を知りかたし唯見聞且記憶之概略を辨す御仕入事務の湮滅せさらんを欲するのみ

一元治元年初て蒸汽艦購入之事を御仕入方役所へ命せられたり時の御仕入頭取速水秀十郎擔當長崎へ出張同所の商賈青木久七なる者の周旋により英人ガラバの持船新造バハマ號蒸汽艦外車長四十一間幅五間深さ三間半馬力百五十なるを洋貨十五萬五千元（どる）にて購求し明光丸と稱し安藤大夫の臣高柳楠之助を推して艦將となしたり楠之助は曾て江戸伊藤玄朴（蘭醫）に從ひ蘭學を脩め其塾長たりしか後函館に赴き前島密（後日本郵便法を開始す遞信）と共に英學及航海術を卒業すといふ此比蘭英之學を修する者さへ實に晴夜之曉星にひとし況んや航海術之如き思ひもよらさる事にて唯幕府の軍艦奉行勝安房守か兵庫に海軍操練所を置き專ら訓練する由を聞人皆奇異之思ひをなしたる有樣なれは安藤家に高柳あるは不測之幸ひとして直に雇入船將とはなしたり而して御仕入手代岡本覺十郎醫官成瀨國助御舟手方福田熊（一本助）輔御勘定奉行支配小普請岡崎熊楠中谷秀助御水主村尾治助及ひ先年亞米利加へ漂流したる尾崎十兵衛等を推撰し又讃州しわく嶋の者にて勝房州の門人（一本にて名ある）乘手と稱する長

尾元右衛門なる者を七人扶持にて雇入れ運轉手となしいつれも長崎へ派出必至に航海術を練習せしめ或は同所製鐵所器械方元木庄藏に就き器械術を修學せしめ尙前島密か長崎に遊學し居たるを器械方に雇ひて頻りに運轉操縦を勵みつゝ頓て江戸上海香港灣界等へも航海するに至れり爾來數々江戸へ往來長州征伐御供にて御上坂征長御總督にて廣島御出陣維新後御上京等皆御乘艦に供し其他戊辰の役大坂の敗兵を救送し江戸常府若山へ移住之際等皆此艦を用ひ急務の至便を謀りし事尠からす終始御仕入方の擔任に屬せり船長は高柳楠之助當に勤務し後中井尙輔太の如きも業熟して船長となれり

ニツポール艦購入

一慶應二寅年八月征長之時戰爭の必用により蒸汽艦令一艘購買の事御仕入方へ被命依て局吏谷口惣十郎及ひ水野刑部長崎に到り靑木久七の周旋に因み外人ゴロウル商社より汽艦ゴルマントル號を洋銀十一万九千五百元にて購入（慶應二年九月六日結約）久七と共に若山へ歸航す然るに御仕入方一同は代價の高價且久七不良の所爲不少との聞へ等ありとて大に不服を唱へ非常の紛議を惹起し遂に御仕入頭取須山與左衛門は上田孝左衛門を率ひて長崎へ出張し事實百方窮究の上ゴルマンドル號賣主ゴロウル商社へ談判弁償銀洋貨五万五千元を渡して（去年買入の契約書存せす知り難しと雖も推し察するかたへにして皆金は渡さゝりしならん故に未た辨償を渡したるもいか此五万五千元は九月限の結約により後若待徹輔出張之時洋銀百枚八十三兩替の積を以金四万五千六百五十兩程を蘭人ボードインより立用ゴロウル商社へ即金渡したる迄なり事は財政第三綱搦の部下に記す）該艦返付の事を謀り更に外商「ボールト」商會より汽艦ニツポール號を洋銀十六万七千五百元（此金十三万七百三十兩程と云ふ）にて購入せり外人を相手に旣に購買結約のものを返還せん事頗る不條理にて至難を極めし趣なれ共談判之如何

等今詳ならす唯返還之結約書のみ存す則左に揭くる如しニツポール艦購入之結約書亦下記の如し
此艦舊名を其儘襲用して爾來明光丸と共に維新前後頻りに非常急須の國用に充られ功力不尠奥州
征討官軍出兵之際には　朝廷之雇艦となれり亦終始御仕入方の管理する處なりき十數万金之大艦
二回迄國帑を仰かすして購入したる御仕入方の盡砕思ふに余ありて前後御仕入方の國費を禆補し
たるの功實に少々ならす是遠くは國祖の遺法に起因し近くは　舜恭公の貽謀によらさるを得んや

コロマンドル戻圭意銀筋寫

紀伊國用として昨年九月蒸汽コロマンドル船其商社より買入候處都合之品に付今般拙者共長崎表
へ罷越委細及賴談左之通り約定取極る

一此度紀州家より洋銀五万五千トルラルを相渡蒸汽コロマンドル船長崎滯港之僃諸道具幷大砲其外
昨年請取候目錄書之通無相違コロウル商社へ引渡又右商社にも請取候儀を承諾致し當二月相渡置
候日本政府奥印證書は可相戻之事を約諾す

一コロマンドル蒸汽船代價拂方に付日本政府奥印之約定書此節可被相戻之處右は譯て(一本無)誤出に付
約定日限より一ヶ月半之内無相違長崎御運上所へ被相戻儀を承諾いたし候もの也

慶應三年卯六月廿二日

上田孝左衛門
清水半右衛門
速水秀十郎
須山藤左衛門

山本弘太郎

コロウル商社へ

茂田一次郎

右之通致承知候

コロマンドル戻に付コロウル横文和解書

昨十月我等の商社より御買入相成候蒸汽ころまんごる船今時御氣に應せさる事によりて紀州太守の士官所望に随ひ左之箇條了解いたし候

一當港碇泊之右蒸汽船武器其他要用附屬品都て我昨十月我等より紀州家士官衆へ相渡候通り備付被引渡候節洋銀五万五千枚之高被相拂候儀を取極候なり

一前條之事件に付存意無之旨書載ある所之證書在長崎紀州家委任の士官より請取且我十月取極候日本政府奥印之證書此日付より四十二日之間無相違長崎政府運上所司農へ相戻候儀約諾致し候者也

於長崎千八百六十七年第七月十七日

コロウル商會

ニッポール船約定書

一方は紀州大守之役人須山藤左衛門上田孝左衛門にして倚一方は長崎居住之商人オールルト商社にして双方之間に慶應三卯年四月廿六日（千八百六十七年第五月廿九日）取結ひし約定書

一オールルト商社は今長崎港内に運輸し來る内車蒸汽船ニッポールを其附屬之諸品砲器共目錄之通

右須山上田へ洋銀十六万七千五百枚を以相讓り引渡す事を約定す右須山上田は其高洋銀十六万七千五百枚を此約定書之日附より十二月を限り右ヲールト商社へ拂入候儀を約諾す

一十六万七千五百枚之洋銀無之節は日本貨幣西洋各國弁用致候金銀を以其時之相場に應し拂入可申候若産物を以相渡候節右品物にて拂入候儀も約諾す

一拂入方遲延致し限月を越し候はゝ一ヶ月三歩之利足を相加へ可申候又十二ヶ月之内拂入候はゝ其月より期限迄之利足を其時拂入高一步二厘五毛つゝヲールト商社より相戻候儀をも取極承諾す

一若右期限迄に兵庫開港有之候はゝ於同所代價可拂入儀も約諾す

右爲證と双方此書面へ致名判置候也

慶應三卯年四月廿六日

須山藤左衛門印

上田孝左衛門印

茂田一次郎印

右致承知候

長崎 運上所

前書金高於紀州家相拂ふ事無相違候依之奥印せしむるもの也

右約定書は洋文と和解書兩通なり且運上所奥印之儀は須山上田兩名より奥書之儀願出る其文意は紀伊殿昨年藝地出陣之砌戰事都合に付同所より役人差越英商ヲールトより蒸汽船取

人之筈兼約定置候手續を以今般右商社ニ別紙之通り約定取極め買入により奥書願出る旨を
記したるなり

ニッポール船賣與狀

一船　名　ニッポール　　一打建場所　ブレックウォール
一屆之港　ロントン　　一打建方　捻仕掛蒸汽
一甲板數　二段幷下段　　一船　形　バルク
一船　皮　鳥の羽重　　一船　品　鐵
一船　巾　廿九尺七合皮算外迄　　一打立人　テームス
一下　段　八十一噸九合　　一帆　檣　二本
一舳　角　　一檣　本式に無之
一船の長　二百四十四尺　　一同　深　十八尺
一甲板下　六百九十八噸八合五勺　　一乘組人幷器械方等住所十五噸三合八勺
〆七百九十六噸一合三勺
一器械室分　二百五十四噸七合六勺　但此分ハ右之内より引去
一屆之噸數　五百四十一噸三合七勺　但前〆高より器械室分を引去候高なり
一機械室長さ三十五尺二合　　一機械數　二個
一蒸汽力　二百馬力　　一機械製作人ホムブリット幷テネント

下名之拙者ドッビリユーゼーオールト紀州侯のため須山藤左衞門上田孝左衞門より前巨細書の蒸汽船ニッポール全代價として洋銀十六万七千五百枚を請取候事を表す依之右船を讓渡せり且拙者右船を讓渡すの權ありて右船は一切訴訟等無之儀を說明す右証として茲に千八百六十七年第五月十八日（卯四月十八日）名判いたし候事ドッビリユーゼーオールト我目前にて於て右ドッビリユーゼーオールト名判致し候事

貌太利太尼亞國士勤方　マルキユス、フロウルス

品川藤十郎譯

卯六月廿三日

伊呂波丸と衝突の難

一既記の如くコンマントル購求紛議之件により須山藤左衞門は長崎にて百方苦心コンマントル號を返還更にニッポール艦を購入せんと計畫をなすに當り彼の青木久七之か妨害を企て奸策至らさるなき由を若山へ建議す於是御勘定奉行茂田一次郎に出張處理すへきを命せらる一次郎は屬吏及ひ御仕入頭取速水秀十郎等を從へ明光丸に乘艦慶應三年四月廿二日紀州鹽津浦出艦之處同夜備中之沖六島邊にて土州藩坂本龍馬（此時谷梅太郎と稱す）輩か乘組たるいろは丸（大洲藩之所有船を借受たるなり）と衝突し該船沈沒す依て長崎に於て談判を開く元來彼れか航海法に反違したるに起因するにも不拘却て我を逆難し大に紛擾を極む時に土佐の海援隊と稱するもの百余名長崎に在りいつれも脫藩血氣の壯漢盛に攘夷を唱へ過激亂暴我を温柔不斷の俗吏と蔑如し奇譎脅迫加之後藤象次郎中島信行等陰險主謀其勢焰當るへからす一次郎大に畏怖し策窮つて獨斷薩人五代才助に謀て中裁を執らしめ遂に金八萬三千五

百余兩を償ふへきを約して歸る執政諸有司其國辱たるを大に怒り直ちに一次郎を罪し更に岩橋轍輔（岩橋萬藏の長男にて近時抜擢御勘定奉行に勤務に登與す）を派遣回復を計らしむるも時機既に失し時恰も幕府大政返上の事起て焦眉之急に迫り談逢に協はされとも償金之内一萬三千五百余兩を減せしめ七萬兩を出して事平くを得たり詳なるは慶應三年の世記に悉せり合せ見るへし（伊呂波丸償金計算等は財政第二納撙大様見詰の條下に記す）

前記明光丸（原名バハマ號）は維新之際負債の爲め荷蘭ボーテイン商社へ入質さし引渡したる處償却濟請戻し明治三年年七月大坂紀伊國屋万藏へ賣渡したり詳には財政部外國債の條に記す万藏は即ち岩橋万藏にて初て郵便船航海法を創立したる者なり

一安政六未年十二月十二日御城表向所々御修覆御用御仕入頭取へ命せらる

圍米

按に　郡中救荒備組備への往昔より貯蔵米の設ありしならん天明七年の大饑府庫を開て兩熊野日高山中等之窮民を賑恤し後熊野長島尾鷲周参見之三ヶ所に米倉を建て年々二百石つゝの救米貯蔵之事　香巖公の世記にあり仁井田長群か東熊野郷備倉記（郡制奥熊野誌に載す）によれは天保五年大饑十一郡合に命し倉廩を開き元々を賑す郡舊倉あり五百石を蓄へ新陳出入云々又豪富に儲し或は貨殖子本合三千兩を得二千石を糶して豫備米となすよしを記せり但奥熊野在勤之時木の本本廳に五百石を貯へ管内各所にも些分之貯米ありて年々新陳交換之慣例なりし熊野は山海之域田圃僅に十分之一二に過きす人民食常に他邦に仰くたさへ内蔵ならさるも一旦暴風あれは糧船入らす米價忽ち騰貴乃至不漁あれは海濱頓飢危險朝夕を安んせさるの状日六郡さ日を同して語るへからす圍米の事實に忽にすへからされは之か起因沿革を詳記せんさ欲すれ共他に見る處なく偶ま御仕入大帳に此記存するも首尾欠漏事實漠然さして不了最惜しむへし

文化八未年二月六日進達

御圍米之儀は御斷申上度奉存候得共左候ては御勝手御繰合御差支に奉存候間可相成丈け可也に圍ひ金米を以七千石都合に圍ひ候樣精々取計可仕候就夫最初見詰之儀は御城下にて繰替賣拂候積にて御達申上候儀に御座候得共　御城下にて賣拂候ては本計米賣捌方に響き御繰合に差支之趣御勘定組頭より申談候付不差支節は申談繰ならては　御城下にて賣捌難相成最初見詰之通には難參西熊野圍ひ米之儀は邊鄙場所柄に付賣捌方多は取扱難仕聊之儀に付御益は右に應し申候御仕入方にて賣捌方手廣に取扱仕候得は先達て委細書付を以申上候通十ヶ年之内には七千石御益を以御備相立候儀に御座候得共前段之通無據御繰合に付內存申上候通には難參候に付一と通御斷申上置候是迄之御益左之通に御座候

巳年分御益　銀二十三貫五百八拾目程

午年分御益　銀十三貫五百三十目程

合三十七貫百十匁余　全御益

一御密々筋暫御用捨之事

一御船御造作之儀御用捨之儀奉願度候得共右御材木之內難得木品も御座候間賣拂候も甚可惜儀に御座候得は其儘圍置可申候間御造作之儀は暫御用捨之事

受取申米之事

米合千十五石也

内

三百二十一石　伊　都　四百十四石　那　賀

四十石　名　草　二百四十石　海　士

右は郡々去申年分御手入宛筋受取申候以上

酉三月　御仕入頭取一札

傳甫御藏奉行宛

右之趣承知候

郡々御代官奥印

覺

一銀

右は去申年分御手入筋於御仕入方備置申候以上

酉三月　御仕入頭取印

別々に　郡々御代官宛

右之通にて手形替相濟年々御勘定は御仕入方より仕上候事

未申年帳面差引増米御手入宛除置筋

一米三百二十一石　伊　都　一米四百十四石　那　賀

一米四十石　名　草　一米二百四十石　海　士

小以千十五石

右郡々御手入筋御代官奥印之御仕入頭取一札を以傳甫御藏より御仕入方へ受取候筈

一右御手入宛十一月晦日郡々之切手直段と俵物問屋直段平し右石替を以御買米に可成

一右御買米代之上へ御仕入方にても相増備置候筈

一右備置之內御手入渡方有之節は御手入之旨趣御代官より相達御仕入方へ相通し御仕入方にても御手入之旨趣行屆見申候上渡方有之筈

覺

一在中爲御手入宛年々本途米之內於御仕入方備置候筋御手入御用有之節は御代官一札へ御勘定奉行衆裏判を以相渡候樣去酉四月相達有之事候得共右は御代官一札を以相渡候筈御勘定奉行衆不遂裏判筈猶又相究候條件之趣御取計可有之候已上

戌五月二日　　　　御勘定所

竹田槇右衞門殿

川口儀三郎殿

文化十三子年八月

一口六郡兩熊野御代官所社倉義倉之類御有物正金銀是迄は夫々御代官所へ預り有之候得共向後御仕入方へ預け同所頭取預り書夫々御代官所へ取置候筈に候尤御手入等有之節は御勘定吟味役中より御仕入方へ元斷相廻し候上御代官一札を以御かね取出追て御勘定之節右預り書とを指引猶殘銀預

り書を以越物御勘定相立候筈候間當時有物取揃へ此節御仕入方へ相渡し預り書に引替可被申候以來年賦等納方有之節にも是又御仕入方へ相渡し右同様取計可被申候尤請拂御勘定之儀是迄之通御代官所にて取計事

八　月　文化十三年か

文化元寅年十月九日

一郡々御備金之儀に付四郡へ左之通相達候旨御勘定奉行より爲心得申來之

伊都郡那賀郡
名草郡海士郡　御代官中へ

郡々御備銀之内貸下け筋年賦返納銀之儀以後御仕入方にては年賦増減に不拘其年々納次第元受に相立此後貸方下け切之無差別其節々御勘定拂に立切候筈候間各よりは受取切一札を以御取出し元返納銀取立之儀は是迄通行届御取計若年延等之儀相願候筋は拙者共にて及取扱候事に付其段御達可有之候右之通に付去る戌年以來村々へ貸下け筋去丑年分迄年賦返納差引殘銀高此節御勘定拂に取計候筈に付右殘銀受取切一札御仕入方へ差入下地差出有之一札と引替候様御取計可有之事

一安政二卯年二月

異國船渡來之節浦組爲手當田丸領浦々へ囲米廻送之儀田丸御代官淺板二左衛門より佐八御村木所へ通知に應し同所囲米廻送之内百俵勢州大湊へ廻したる分同所御藏所出火にて悉く燒失す依て右損失御勘定立方之儀御代官所と御仕入方と論判相決せす遂に同年四月政府へ伺之處本途非常御入

用に可立との指令有之たる旨委細記載有之事
圍米永年履行と雖も是迄非常之爲め廻米等之事其例無之剩へ災害に罹りしを以て互に其責任を
爭ひたる也
右米百俵代
價金五十八兩一歩二朱と六匁二分五厘
此十兩に米十七俵一分替

米捌取扱發端　文(一本政)(化)元寅年十二月記

米捌取扱發端之儀は寶曆三酉年より相始り明和元申年迄在方役所支配に有之候處其節は在方頭取
御仕入方をも兼務に付御仕入方へ引受明和二酉二月より取扱來候事右之通候得は御仕入方勤人へ
米捌御用も相勤候樣にとて急度御通詞は無之候得共役所附之樣に相心得取扱來候由申傳候事
天保十亥年十二月
一米捌之儀向後御勘定奉行にて取扱
由比楠左衞門へ
米捌之儀御仕入方にて取扱候得共向後御仕入方は離れ御勘定奉行にて取扱候筈に候間右一件同
役へ引渡可被申事
一右に付當時御仕入方預に相成有之候益銀は從來御仕入方にて取扱取替等もいたし候譯合も有之

付其儘御仕入方御有物に居置候事

口達覺

由比楠左衛門へ

米刎之義別紙に申聞候通候得共高野寺領登米幷酒改魚俵物問屋運上銀等之取扱は先是迄之通御
仕入方にて取扱候筈之事

米刎方諸帳面背米受拂引渡目録

御仕入米刎方

寛政二戌年より天保十亥年迄
一米刎方御用留但壹番より廿九番迄　二十九冊

文化五辰七月
一米刎仲間列名前帳　一冊

文政二卯年より同八酉年迄
一米刎方諸拂帳　一本一 (二)冊

文政九戌年より天保十亥年迄
一本十
一背物達留　二冊

文政(九戌)年より天保十亥年迄
一米拂手數用讀帳　六冊

文政十一子年より天保十亥年迄
一米御積出し逆裏判押切帳　三冊

天保六未年
一備前米買入御勘元極帳　一冊

文政三辰年十月
一登米下米逆切手押切帳　一冊

文政十亥年より天保十亥年迄
一背米歩一渡帳　二冊

文政十亥年より天保十亥年迄
一背米貫目改帳　一冊

文政十亥年より天保十亥年迄
一背物駄賃拂帳　二冊

天保十亥年
一月々諸拂仕出帳　一冊

寛政十三酉年より文政元寅年迄
一御老中方裥米帳　一冊

天保十亥年
一日記　一冊

同
一所々出張米拵役人筆紙墨渡帳　一冊

同
一諸書附入袋　一

同
一諸受取書入袋　一

同
一背物奉書入袋　一

同
一背米入札入袋　一

一印　形　二

一銀五百八十四匁五分　背米代　納

内五百八十四匁一分五厘　米拵方并背米筋に付諸雑費支拂

差引三分五厘

外に

米貳拾俵　背米有

右之通相渡申候以上

亥十二月　　　　　　　　御仕入方

一十二月十七日政府伺濟

米捌方取扱御勝手方へ引渡に相成候得共寺領登米取締之儀役所にて取計候筈右に付他所酒出入改之儀も米捌方にて取計來候通役所取扱之筈相成候付右兩條は浦組御園米方にて取扱候筈之事

前段之通に付寺領共へ左之通書取を以申聞候事

寺領問屋
次兵衛
文兵衛

寺領之者共直米積登之節役所附け米賣渡候儀元極に有之候處近年來米價高直にて他所米入津差免有之付ては寺領直買筋積登之節右附米等之規則も相崩れ有之候得共別て米價高直にて世上一躰之困窮之折柄に付右附け米規則之處もなんとなく含を以差免有之候得共此度他所米入津指留に相成候ては向後以前之通直買之筋一旦役所藏入取計候筈尤附け米も元極之通相成候筈候間其段相心得寺領之商賣手之者へも申合不相紛樣可被取計候事

十二月

川口御番所へ通詞振

他所米入津差留に付御家中知行米幷御用にて他所米入津取扱之儀是迄御仕入方にて取扱來候處此

度米捌方取扱向後御勝手方にて取扱候筈に相成候事候夫に付浦組御圍米筋幷寺領之者共直買米且他所酒入津地酒積出等之取締は是迄之通御仕入方にて取扱候筈に相成候間右樣御心得其節々元相廻可申候間不相紛樣御心得御取計有之樣存候以上

十二月十九日　御仕入方

川口御番所

浦組備

按に　浦組備とは海防之爲め沿海近傍の地士帶刀人初農夫漁丁を以兵團組織の義により糧食武器船艦を準備し一朝事あれは狼煙を擧て警報し遠近相應して備禦す是國祖以來の遺法にして　有德公最整頓を圖らせ給へり然るに文化四年六月魯西亞人蝦夷地に寇す爾來幕府初諸藩競て海防を唱ふ故に封内沿海近郷に在勤之吏員は甲乙之別なく悉浦組に增編せられたり依、御仕入方には武器購入をも負擔不慮に備へたる也

文化八未年三月　御仕入頭取

二分口奉行

此度浦組筋御增補被　仰出候に付御仕入役人二分口勤人共兩熊野并田丸領海邊へ相詰候者共浦組御用相勤候節に候勤方之儀は御代官聞合急事之節諸事御代官差圖を受させ可申候右浦組筋勤方之儀浦村々出入を人數に應し引繼候筈に候間地場勤筋とても同前之事には候へとも別て人數を引繼候樣之儀は平生末々迄に信用致され候儀に無之候ては申聞候儀をも受用不致事候間其身之行狀は

勿論勤筋正道にして聊も疎まれ候樣之事無之樣心掛候儀專要候間右之趣篤と可申付事

文化七午年二月南熊野へ遣置候事

覺

一侍具足　　百　領

内

八十五領　　錆胴毛綿縅鉢付

十五領　　錆塗 海老胴同鉢付　但小手脚當て共佩楯なし

右は浦組御用當て南熊野御代官所へ五十領つゝ指遣し置候筋

文化八未二月廿七日取扱候事

覺

一侍具足　　四拾領

年號月　　姓　名　印

内

貳拾領　　立作 錆胴毛綿縅鉢附

貳拾領　　立作 黑塗胴同鉢附　但小手脚當共佩楯なし

一番具足　　百　領

内

拾　領　　　　　　　　　　黒塗　海老胴毛綿絨笠付

四十五領　　　　　　　　　立作　黒塗胴同笠付

四十五領　　　　　　　　　同　　鑄胴同笠付

右二口は御用人由比楠左衞門方取扱にて御城御藏へ御預申候筋

嘉永三戌年八月御武具藏へ預け之內侍具足二十領番具足八十領御仕入方へ受取手入取計たる旨記

あり

一嘉六丑年十月十四日浦組御備之內佐八幷松坂詰人出張之節著用之具足不足之旨依達御武具藏へ

預け之內取出し貸渡す

侍具足三領
番具足十二領　　佐八御仕入方へ

但從來具足七領番具足八領御藏に有之付都合侍具足十領番具足二十領に相成旨なり

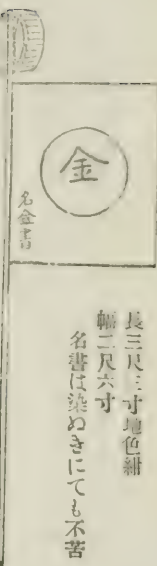
一侍具足　五領　　松坂御仕入方へ

一嘉永七寅年九月十六日印南橫濱御仕入方へも具足二領差遣たる旨記あり

嘉永六丑年九月

一浦組御間之儀尙又此度被　仰出之趣に付御仕入頭取配下御目見以上之面々指物之儀頭取より御書

物方頭取へ問合之處御目見已上は何役にても差支無之旨答有之事

指物幷小印

青皮御獻上之事

寛政九巳年十一月

一有田郡にて出來之青皮午年より年々三斤つゝ　公儀へ獻上候樣於江戸　公儀御勘定奉行中川飛騨守より左之書付相渡候旨江戸御用人より若山御勘定奉行へ申來依て其積に心得青皮に致し宜節製立目方減し不申樣且年々余慶に可相廻旨御勘定奉行差圖により當來年々其通履行三斤の外に用意壹斤つゝ差出す

但し先達相極めたる年々青蜜柑五百つゝ獻上之儀は向後差上に不及との事

紀州青皮之儀來午年より青蜜柑彼地にてむき立干上候て年々三斤つゝ被差上候積相達可申旨對馬守殿被仰渡候付此段申達候

巳十月

青皮（しやうひと通稱す）は藥品に用ゆるよし蜜柑の黄熟に至らさる前剪取皮を三斷し實を去り乾燥したる

御貸扶持取扱

ものにて色純青香氣あり形ち人の如し　幕府何に使用せらるゝ哉信表用局にありし時も年々行事として獻上の事あり維新前迄も然りしと云

御貸扶持取扱之事

一御貸扶持の初りは寶暦十辰年極月より

明和三戌年中貸高	一米二千三百八十石余	知行
同四亥年中貸高	一同二千六百(七)石余（一本アリ）	右同
同五子年中貸高	一同三千百五十七石余	右同

一明和六丑年十月御貸方相止申候

一安永七戌年より同八亥年迄御切米へ御貸扶持貸渡有之

一寛政四子年御貸扶持取扱之儀は傳甫御藏にて取扱候筈相成子十月三日諸帳面同所へ不殘相渡す様に御貸扶持は御家中無役無扶持且貧困之向等知行納米御切米受領迄之間は買入米を要すへきに其手當に差支且市價高直にて困難により御仕入方にて米穀貸與之法を設け知行御切米高に應し貸與の定限を定め面々之請願により貸付し知行御切米收納之季に至り知行所又は御切米渡し元役所にて直接御仕入方へ受取返納せしむ是を御貸扶持と唱へ生計不如意之者は大に利便を得御家中保護之一便法たりし也寛政四年以後は傳甫御藏所にて取扱たるよし近年に至る迄も然あ

りしならん於江戸亦此法ありて小普請之類願之上御勘定所にて取扱ひ芝御藏所（元築地）より御扶持方を借り受御切米にて返納之事維新前に至る迄も行はれたり

一御仕入炭も前同樣之方法を以御家中の需用に供し炭切手と稱する証券を流通せしめ若し代銀滯りたる時は知行御切米にて差押ゆるの慣例也此法古くより行はれたる由なれ共記錄存せす來由を詳にしかたく唯次記の一項あり參考に抄出す該炭切手なるものは他へ抵當にさし入金員借用之融通にも利用し得たるよし也

天保十亥年二月

一御家中炭代納銀種類之事

御仕入頭取

御仕入方金銀取扱之儀は重もに上方取引にて當方にては茶屋納之外多分之出入は無御座且役所にては金銀差別相立取扱致來有之事に付御家中炭代納等金にて相納候筋も有之候得共相場もの之儀に付取扱差支猶又銀札にて相納候筋も有之候得共前段之通取引無數茶屋納には銀札受取不申儀に付御仕入方にても差支候に付右兩樣共相斷せ申候事に御座候夫に付近年正銀拂底に付御家中炭代納筋正銀之外請取不申候ては難儀可致に付以來正銀にて相納候筋は共通に候得共正金にて相納候筋は兩替六十目立を以相場高下に不拘受取方取計せ候樣仕度奉存候御了簡も不被爲在候はゝ御用人中より夫々へ御觸達御座候樣仕度奉存候

亥　二　月

本文政府へ彌右衞門殿より御談相成候處御用人觸之儀は先つ浮置役所取扱は其通相心得納に出候節其品申聞取計候樣政府にては能御承知御聞置に相成候旨被　仰聞候段彌右衞門殿御申聞被成候事　二月十二日

仕入板拂下

安政四巳年十月廿四日

一御仕入方仕出し板御家中へ拂下け

左之通御勘定奉行より政府へ伺相濟〇印之通り御家中觸御用人へ申合

御仕入頭取

御仕入方諸產物御仕出之內板類は重もに江戶上方へ積送り爲賣捌候事に御座候得共此表市中板類近年追々高直に相成候趣に付前段江戶上方送り板之內此表へも相廻させ御家中へ御拂取計代銀之儀は祿高に應し左之割合之通り賄方押差支之有無申見炭切手之振合を以て渡し方取計知行御切米にて押方取計候はゝ御家中之都合にも可相成哉に奉存候仍て御料簡相伺候事

〇印

近年市中板直段高直之趣に付御仕入方御仕出板之內別紙之直段にて御家中へ御拂取計代銀之儀は炭切手之振合を以て左割合之通知行御切米にて押方取計候筈候間入用之向は炭同樣振合を以

好書其支配々々より差出可申候委細之儀は御仕人方可承合事

御宴中渡板代銀高定

一知行千石　銀弐貫目
一同九百石より七百石迄　同一貫八百目
一同三百五十石より二百石迄　同七百目
一知行百五十石より御切米五十石迄　同三百目
一同三十石より二十五石迄　同百五十目
一十人扶持より七人扶持迄　同七十目
一同六百石より四百石迄　同一貫二百目
一同一百五十石より御切米八十石迄　同五百目
一知行百石より御切米四十石迄　同二百目
一同二十石より十石迄　同百　目
一五人扶持より三人扶持迄　同五十目

右之外伊賀以下石高一石に付板代五匁之割合之事

一　板直段定

一杉四歩尺以上一間に付　四匁
一同八寸一間に付　二匁六分
一同九寸一間に付　四匁二分
一同六歩尺以上一間に付　五匁五分
一檜四歩尺以上一間に付　四匁六分
一同九寸一間に付　三匁八分
一同五歩尺以上一間に付　四匁六分
一同八寸一間に付　三匁五分
一同九寸一間に付　四匁九分

板直段比較（墨書は御仕方直段　朱書は町方商店三人之平し直段）

但御仕入板之儀は遠山より肩にて持出させ候付重板之分は山殘りに相成候付自然歩合は當地廻り商方板とは少々薄く候得共直段は余程下直に可有之事

一杉四歩尺以上　一間に付　四匁役所直段　「平し六匁六分九厘」

「此平し直段は町方材木商次兵衛名源才傳三家之直段を取りたる平し直段」

一同八寸九寸一間に付　三匁八分三匁六分　「平し四匁七分六厘」

一同五歩尺以上一間に付　四匁六分　「平し五匁六分八厘」

一同九寸八寸一間に付　四匁二分三匁五分　「平し五匁二分三厘」

一同六歩尺以上一間に付　五匁五分　「平し六匁八分二厘」

一同九寸一間に付　四匁八分　「平し六匁七分六厘」

一同赤六分一間に付　六匁八分　「平し九匁六分」

一椴四歩一間に付　四匁六分　「平し六匁八分六厘」

是亦御貸扶持炭切手と同主義也前記賄方押差支有無云々とは賄方役所と稱し司農府に屬する局ありて御家中官に對する負債あれは知行御切米にて差押へ返納を立しむる也仍て知行御切米にて板代差押ゆるも賄方於て差支なき哉否を照會するをいふ

維新改革

一明治二巳年正月十二日御仕入方を產物方と改稱す

此時南出平左衛門を免し野口太郎助を產物方支配に命せらる

同年二月十五日產物方勤人是迄之通居置役々役料は役所益金を以て被下筈

一同年五月廿五日產物方を廢す

一同年六月六日執政より左之通名草民政局知事へ達す

此度產物方廢止被　仰出候付諸郡へ出張役所は此節役人差遣諸勘定取調相濟候上右役所各郡へ引渡候筈

是迄金米貸付有之分至急可難取立に付追々に取立出來次第會計局へ相納候樣以來諸產物仕込貸方都て各郡民政局にて處置致し出來立之產物は大坂初最寄通商方へ運送取計候筈候間尙委細之儀は會計知局事申合乾度御取締相立候樣可取計事

一此度產物方廢止郡々出張所引拂せ候付諸產物之儀は各郡民政局にて引受此上產物多分に相成候樣可取計は勿論に候得共熊野炭天草を初諸產物之內不手馴之品は是迄取締の業合等會計局產物掛りへ篤と承合鑿取捨討論致し候上向後之手行等ヶ樣々々取計可申との見込の趣早々伺出候樣可致事

一明治二巳年十月廿四日開物局を被置左之通被命

海士郡民政知局事　野口太郎助

開物之儀郡々民政局にて取扱之處當今庶政御改革の折柄地場御用筋多端にて難行屆候付此度別段開物局御取立相成候間開拓之儀郡々民政申合盡力致し十分手行取計可申との御事

取扱場所之儀は是迄之通商局にて取扱候事

一同日名草民政知局事へ達

開物之儀郡々民政局にて取扱追々開地行屆可申候へ共當今庶政御改革の折柄局中地場御用筋多端にて兎角可難行屆付此度別段開物局御開に相成開拓の儀各郡申合戮力致し十分手行取計候樣被　仰出候間郡々にも開産之儀開物知局事申談精々勉勵開地行屆候樣可致事

但鑛山樟腦製之儀は至大之業合に付開物局一と手に相開させ候付各郡にても猶手行の儀下々へも相達宜取計可申事

開物局規則

一各郡にて諸産物苗且開拓に付ては器械等相求度品は民政局より申合候はゝ買調送り方取計可申筈

一大坂初の通商方の儀開物局出張と相改候事

一産物之儀は總て各郡民政局にて相開候筈に付仕込金貸附等之儀は開物局にて引受民政局へ一割二歩の利分を以て貸渡候筈

一開墾及開産之儀は民政局にて取計候得共開物局よりも知事初役人節々各郡へ打廻り開拓之儀厚く申合民政局にて行屆兼候業合は熟談之上開物局にて開成いたし或は民政局にて出來立之物品を買取製作可致品は製し候上賣拂候儀も可有之事

一大坂初出張所取扱之儀は總て是迄通商局規則の通り各郡にて出來立之諸産物は民政局裏判の送

り狀を以輸入候筈尤商業の儀は荷主勝手に賣捌候得とも荷主の願により出張所にても賣捌或は買切爲替貸等の儀をも取計致遣仕切金取立等諸事共所問屋共仕來の業合は勿論總て手行の儀厚世話致し遣し候筈付ては金方に應し口錢爲相納藏式（一本衣）をも爲納候筈

但口錢取立方之儀は問屋共通例よりは半減にて爲相濟候事

一製作所取立百物之製練凡ての工職等廣く穿鑿試驗し諸人へ傳授し又は各部へ入込業合相施候筈

一國產稅金取立之儀は各部にて二分口之納稅も有之儀に付民政局にて處置いたし諸稅增減等は其部にて取扱候筈

一各部へ引渡候產物方出張所之勘定取調有金有物等は引上け前々より仕込置有之候品物及金米貸付等至急難取立品は出來次第通商局へ受取候筈之處向後開物局へ受取可申事

一明治三年午八月三日御都合之品有之開物局被廢候事

右に付同局片付方諸事不都合無之樣可取計旨會計局參事へ達す

一同日公用局參事へ

此度御都合により開物局相止候得とも其業合に於ては益研究擴充可致は勿論の事に付向後何地何局何官に不拘幷士農工商共都て殖產職工貿易等品見込有之輩は巨細趣法書を以て封物いたし各支配へ可差出候左候はゝ政事廳に於て利害得失熟評の上仕入金貸下業合委任可致儀も可有之間此旨爲心得相達候事

右之通被　仰出候付趣法申出候はゝ支配にて無滯封物之儘直に政事廳に可差出旨局々へ達置

之事

江戶御仕入方

江戶御仕入方の事は前卷既記の如く初は八丁堀に設置後濱町に移り安政三年四月深川小名木澤邸に轉し同六年三月又深川万年橋邸に移轉す職員は若山より在勤仕出之木材炭等物品の販賣幕府納炭の事を管理し兼て貸金利殖の事を謀る嘉永安政の比已降は專ら江戶政府へ直接禀議處理しつゝありたり

一慶應三年八月十五日　幕府の允許を經時之頭取山崎主馬担當當邸に於て當百錢鑄造の事を創始頗る利潤を得たり然るに僅々七八閱月にして維新の瓦解に遭遇官軍入り來り鑄錢器械は無論荒吹の資財迄悉皆沒收せらる（事は貨幣の部に詳也）隨て貸金亦土崩不測の損失を釀したりといふ時擾亂に際し成行の事實詳ならす而して明治二巳年二月廿八日に至り東京府より左之通り達しありたり

紀伊中納言家來へ

其藩國產陶器其外代金納方相滯り候者共舊政府町奉行所に於て取立候以來引續き於當府も取立渡遣處宮堂上方貸付金之儀も政府より取立方被廢候義に付右代金之儀以來於本府取立候儀は廢止候間相對を以取立可申候尤是迄差出有之證書は勿論取立高等取調の上追て可差戾事

巳二月　　東　京　府

一別紙之通市中へ布告致候間爲心得相下候事

二月　　東京府

別紙

申渡　　組々世話掛名主共

尾張紀伊水戸三家貸附金爲替金等滯り候分於當府取立申付候處自今右金子相對にて可取立旨右三家へ相達候に付ては市中の者とも無滯濟方いたし候樣末々者迄不洩樣可申通候

巳二月

前文中國產陶器類云々とあれ共藩に於て此比陶器製產の事なし恐く御三家同一に布達尾張陶器を主としての文ならんか

一書に左の數記あり事由不詳なれ共參考として追記す

文政十二丑年九月豐田九右衛門抱屋敷向後江戸御仕入と唱候事

九右衛門は豪商御仕入方御用達にて金融等の功を以て士族に被召出知行を賜ふ三田田町に住居御參暇等には御小休所として臨邸ありたり

天保二卯年六月十八日大川筋御漁獵之節濱町御屋敷御仕入方へ御立寄

弘化五申年六月江戸濱町御仕入方の儀向後若山持は離れ以前の通り御勘定奉行支配可致事

同年十二月十二日濱町御仕入方の儀向後濱町御勘定方と相唱可申事

在々御仕入方

在々御仕入方

紀勢御領中在々御仕入方なる者は五六十ヶ所に及ひ其局每土地々々に應し救恤仕入之方法成規乃

至收支之計算其他細雜之事記載之簿冊元より完備に相違なかりしも維新變革の際散逸し偶ま和歌山藩廳へ引續の分ありしも同廳火災之爲めに燒失僅に奥熊野長島日高郡高津尾の分のみ煨燼の間に殘れり（察するに他局に亦是と大同小異にてありしならん）爰に兩卷を抄錄して一般の概略推考之料に備ふ

長島御仕入方諸取扱向極書元帳

元祿十五年年發端

奥熊野長島組長島御仕入方

一御救在々　前山　大原　江龍　古里
　　　　　仲桐　十須　海野

按に　前山仲桐大原十須江龍の五ヶ所を赤羽五ヶ在と唱へ長嶋浦の北赤羽谷にあり信當て奥熊野に宰たりし時其地を實踐せしに恰も窮谷無人之境に齊しく田園皆無實に驚くへきの慘情を極めたり事は郡制之部奥熊野志在郡日記に載する如し宜哉元祿の古此救恤の法を設けらる若し此設なかりせは五ヶ在之民何そ能く生を後世に維持するの幸を得んや

一手質貸利足月八朱　　貳拾五ヶ月限り

（安政四巳年比より自然と廢止）

一穀物質利足右同斷　　五ヶ月限り

「右同斷」

一炭取扱之儀は御改前後同樣之事にて御持山にて仕出候儀に無之庄主附之取扱にも無之五ヶ村へ永年炭山御（一本貸）買）渡し有之出炭厘掛りを以山代取立候筋尤山代二分五厘積立置一ヶ年宛〆銀高を以年限中割合納之株も有之先つ御直燒同樣之取扱にて燒賃駄賃等も役所より拂ひ遣し候事

但御改正後文化九ニ月迄山代二分五厘つゝ取立候処同三月より三分宛取立有之内五厘は五ヶ村炭焼焼銀へ取立候筈御料備済に相成有之事

文政十亥年改替

一仕出し炭貫元代一俵に付一匁九分（己後改め元二匁一分の処安政五午正月より直増二匁三分）

「以后改正表

年度	俵白炭一俵	内わけ山代	同駄賃	同焼賃	同道橋	櫓込一俵	内わけ焼賃	同山代	同駄賃	同小出し	同道橋
元治元子年より	貫元二匁四分五厘	四分	五分	一匁四分五厘	一分	貫元二匁九分五厘	一匁四分	三分	四分五厘	七分	一分
同年十二月より	同三匁三分	四分	八分	二匁	一分	同三匁五分	一匁六分五厘	三分	七分五厘	七分	一分
明治元辰正月より	同五匁二分	一本一匁（五分ツヽ）	一匁	二匁六分	一分						

」

文政十亥年改替

一炭焼賃一俵に付一匁二分

（亥九月調　焼賃二匁六分　内焼賃一匁二分　山代五分　道橋入用一分）

右同

一炭駄賃一俵に付四分　　但焼賃駄賃共山代三分共元代に籠り有之事

御改正之比より

一炭御口銀一俵に付六厘一毛　但山元代五分五厘　九の割（判代銀百目に一匁つゝ）

御改正の比より

一炭厘掛り一俵に付二厘五毛「弘化三年午七月十三日より三厘五毛に改め後七厘に成る」

一御納米年々請取山方拂幷小賣共取計尤拂方模様に寄年々受取方増減有之致不足候節は御圍米受取

御買入米等も取計候事

米三百五十石　　天保二卯年受取

文化七午より改替

一亂俵欠足し炭　　三十五俵

右同

一役所御構内地年貢

米一斗九升二合　　但定免五つ一分畑米直段にて銀納

右同

一墨筆紙定銀四百十六匁四分「慶應元丑年より定銀二口共倍増立方に相成る」

文化七午年より改替

一桶輪替小買物定銀三十七匁

御改正之比より

一役所炊兩人年中骨折候付被下銀十五匁宛

同
一赤羽谷五ヶ村庄屋共炭一俵に付一匣つゝ被下

同
一古里海野兩村庄屋肝煎へ炭華あみ方致世話させ候付被下銀十五匁宛

同
一赤羽谷五ヶ在御納所貸毎年十一月貸渡翌年三月納
　銀五貫八百五十目　　但利足月八朱

同
一海野浦御納所貸文化元寅年より十匁相減其後同斷毎年十一月貸渡し翌年五月納
　銀四百八十目　　但利足月八朱

同
一赤羽谷五ヶ在へ組割小入用金毎年十一月貸渡し翌年九月納
　金三十兩　　但無利足
　内
　　拾兩前山村　　八兩仲桐村
　　五兩大原村　　六兩十須村
　　一兩江龍村

當時止株

一赤羽谷五ヶ在海野共六ヶ在之外左之在々へも御改正後文化五辰年より御納所貸取計同十二亥年迄御貸渡有之候處翌十三子年より相止候事
銀二貫八百五十目　但利足月八朱五ヶ月限返納
内
四百五十目　島勝浦　三百目　白浦
四百目　三浦　三百目　道瀬
五百目　海野浦　六百目　長島本町
三百目　長島新町

一役所用水渡井掛入用毎年左之前々より立來り有之事
銀七十六匁六分
内
二匁六分　此松木二本　但一本一匁三分かへ
三十九匁　此大竹十三本　但一本三匁かへ
二十七匁　此大工九工　但一工三匁かへ
八匁　此日雇四工　但一工二匁
小以

年賦貸之株
御改正之比より

一赤羽谷五ヶ在牛馬御貸大原村分は御改正後貸方不同有之候處文政六未年より馬三匹之御貸渡に相
成有之元返納方之儀は山代二分五厘宛預り銀を以返納相立候事

金五十五両二歩　　但無利足三ヶ年賦

此牛七疋　　馬十四疋

右之内

馬五疋　牛二疋　前山村分

馬三疋　牛三疋　仲桐村分

馬三疋　　大原村分

馬二疋　　十須村分

牛二疋　　江籠村分

一赤羽谷五ヶ在之内仲桐村領上郷炭持方貸之儀は天明六午年御仕入方相初り享和三亥年迄十八ヶ年
御役所相續有之候處駄賃方賤銀御正之節取立難相成段及御達御承印濟に相成候株金十四両一歩ニ
円匁

一寛政十三酉年長島浦井筒屋善右衛門へ御貸付金右利足年八両宛は同浦嘉左衛門年賦銀之内へ相納
文政元寅年濟切候付右元金七十両は天保二卯年より五ヶ年賦に御了簡相濟年々十四両宛相納候事

金七十両也

内

十四兩　天保二卯年納　十四兩　同　三辰年納
十四兩　同　四巳年納　十四兩　同　五午年納
十四兩　同　六未年納
右皆濟也

一手形貸先年五ヶ村年賦筋株々多納方に付難澁願出候筋御改正翌辰年越高四十貫七百七十九匁二分
有之候處年々山代銀預り二分五厘積立銀之內より取立候筋當卯年へ越高
銀六貫九百五十七匁
內
八百四十九匁五分　天保三辰年納　六百九匁五分　同　四巳年納
二貫三百六十七匁　同　五午年納　四百十二匁　同　同　年納
四百十二匁　同　六未年納　四百十二匁　同　七申年納
四百十二匁　同　八酉年納　四百十二匁　同　九戌年納
四百十二匁　同　十亥年納　四百九十四匁　同十一子年納
百六十五匁　同十二丑年納
右皆濟也

一九木浦鯨方年賦之儀は御改正翌辰年越高二貫百五十四匁六分三厘有之候處文化五辰年より同八未
年迄二十八匁宛相納同九申年より二十四匁宛當時より同樣相納候筋當巳年へ越銀高

銀一貫五百六十三匁二厘

内

二十四匁　天保三辰年納　二十四匁　同　四巳年納

二十四匁　同　五午年納　二十四匁　同　六未年納

二十四匁　同　七申年納　二十四匁　同　八酉年納

二十四匁　同　九戌年納　二十四匁　同　十亥年納

二十四匁　同十一子年納　十五匁　同十二丑年納

浦方難澁願之品有之當丑年より十五匁つゝ取立候筈御了簡相濟

二百八匁　同十三寅年より弘化二卯年迄納

殘銀一貫百二十四匁二厘

三十目　辰巳兩年分納

殘銀一貫九十四匁二分

三十目　午未兩年分納

殘銀一貫六十四匁二厘

六十目　申酉戌亥四ヶ年分納

殘銀一貫四匁二厘

七十五匁　子丑寅卯辰五ヶ年分納

殘銀九百二十九匁二厘

一赤羽谷五ヶ在炭方古差引貸文政八酉年迄人別殘銀高四十一貫四百七十二匁四分七厘有之候處文政九戌年五百四匁九分一厘人別十五人分取立同年殘銀四十貫九百六十七匁五分六厘に相成其後左脇書之通に取立當巳年へ之越高十七貫百七十九匁六分八厘

内

九貫五百七十一匁五分六厘　去辰年へ越高

一貫六十六匁　天保三辰年（十二月）納（一本ナシ）

但五ヶ在人別より年々取立

差引

銀八貫五百五匁五分六厘當巳年へ越高

「此株巳より天保十一子年迄年々一貫六十六匁つゝ取立皆濟に成る」

十一貫二百九拾四匁七分二厘　去辰年へ越高

二貫六百二十目六分　天保三辰年納

但山代五厘増にて月々取立筋

差引

銀八貫六百七十四匁一分二厘

「下け紙此株取調候得共津浪之節帳面流失いたし手續相分り不申併本文之通一ヶ年に二貫五六百目つゝも相納り候筋に付無間も皆濟相成候得共全く手落に相成候事と相見へ申候」

年々炭出高賣高

下げ紙　年々受挿年久數所にては欠帳も有之
亦は受挿越高等雜突合場所も有之候事

年號	炭出高	內譯 右は前年ゟ越高	內譯 左 現在出	賣高
文化三寅年	六六〇三二俵	二五四〇二	四〇六三〇	四三二三二俵
同　六巳年	七二四〇七	二二四二七	四九九八〇	／
同　八未年	七七一八三	二一五三五	五五六四八	四七四六九
同　十一戌年	六一二八七	一八二九一	四二九九六	／
同　十三子年	六七五三三	二三〇六七	四四四六六	五三三七七
文政元寅年	七五三〇一	一四二〇一	六一一〇〇	／
同　三辰年	六六六九七	二四七一[illegible]	四一九八三	四九四四五
同　五午年	六九〇八八	二〇五一九	四八五六九	三一五三五
同　七申年	六七八一四	二〇九三六	四六八七八	五〇四一五
同　九戌年	五二一六七	一二七七七	三九三九〇	四〇二八五

年號	炭出高	內譯 同上（右）	內譯 同上（左）	賣高
文化四卯年	六一四三五俵	二二六〇〇	三八八三五	四三七七九俵
同　七午年	七二三二〇	二三三九〇	四八九三〇	五〇七八五
同　九申年	六八八一二	二九七一四	三九　九八	／
同　十二亥年	五一二〇二	一二七〇二	三八七〇〇	二八三三五
同　十四丑年	六七二九六	一四一五六	五三一四〇	五三〇九五
同　二卯年	八六四二八	二九二二六	五七二〇二	六一七一五
同　四巳年	六五四五四	一七四五二	四八〇〇二	四四九三五
同　六未年	七八六二一	三七五五三	四一〇六八	五七六八五
同　八酉年	五七六四二	一七三九九	四〇二四三	四四八六五
同　十亥年	五五九七〇	一一八八二	四四〇八八	四〇一三五

同十一子年	五七〇一二	一五八三五 四一一七七	四二四五五
天保元寅年	八七六三五	二九八三五 五七八〇〇	六一八三五
同三辰年	六八〇五七	一六三九五 五一六六二	四九八三五
同五午年	七〇三二七	二〇二〇四 五〇一二三	五〇〇八五
同七申年	五一五二二	一五三四（五）一本三 三六一七九	三三八三五
同九戌年	三一〇三六	六（九）八カ六六 二四四七〇	一八六五五
同十一子年	三三四五五	一二〇五〇 二一四〇五	二四〇〇〇
同十三寅年	三二五三一	一〇六五八 二一八七三	一八一〇一
天保十五辰年弘化元	三四七一二	一一九一二 二二八〇〇	二二八一五
弘化三午年	三四〇三三	八四四九 二五五八四	一六五五〇
同五申年	四三九五〇	一九三二九 二四六二一	三二七六五
嘉永三戌年	四〇四〇六	一一八三八 二八五六八	三一一七八
同五子年	四一八七九	六三四八 三五五三二	三二一九五

同十二丑年	六七九〇〇	一四五五七 五三三四三	三八〇六五
同二卯年	六八一七五	二五八〇〇 四二三七五	五一七八〇
同四巳年	六九八八九	一八二二二 五一六六七	四九六八五
同六未年	六九一四八	二〇二四二 四八九〇六	五三八〇五
同八酉年	四二七〇一	一七六八七 二五〇一四	三六一三五
同十亥年	三四五七五	一二三八一 二二一九四	二二五二五
同十二丑年	三〇五七五	九四五五 二一一二〇	一七〇一七 二八〇〇俵海中捨
同十四卯年	三九〇六七	一四四三〇 二四六三七	二七一五五
弘化二巳年	三四四三四	一〇八九七 二三五三七	二五九八五
同四未年	四三五一四	一七四四八 二六〇六六	二四一五〇
嘉永二酉年	三八七二三	一一一八五 二七五三八	二六八八五
同四亥年	三七九〇四	九二二八 二八六七六	三一五五六
同六丑年	四三九三七	九六八四 三四二五三	三〇七八（九）一本五

安政元寅年	四四四四七	一三一五二	三一二九五	二四三八〇
安政二卯年	四〇九九四	二〇〇六七	二〇九二七	三二二四五
同　三辰年	三〇二二五	八七四七	二一四七六	二〇七三五
同　四巳年	三三二九九	九四九〇	二三八〇九	二〇三四三
同　五午年	三九二七八	一二九五六	二七二二二	二四一三五
同　六未年	四〇八八四	一五一四三	二五七四一	二七六五八
萬延元申年	四〇〇六七	一三二二六	二六八四一	一七一五三
文久元酉年	四七二〇一	二二九一四	二七二八七	二九三二五
文久二戌年	四〇一三八	一七八七六	二二二六二	二八二九四
同　三亥年	二八一八八	一一五四四	一六六四四	二〇八七五
元治元子年	一八三〇四	七三一三	一〇九九一	一一九一五
慶應元丑年	二二四六一	六三八九	一六〇七二	一三〇三五
慶應二寅年	二五七三五	九四二〇	一六五〇九	一五九八五
同　三卯年	二六九五二	九七五〇	一七二〇二	二〇八六六
明治元辰年	二二九八三	六〇八六	一六八九七	六六三五

年々米受拂　同前 下げ紙

内譯の越は前年より越米　本は本途米　入は入津米買入也

年號	米買上高	内譯	賣米高
文化三寅年	三五〇、〇〇〇〇石	〇	二五〇、〇〇〇〇石
文化四卯年	五一四、五七〇八石	〇	四七八、七三〇八石

同 六巳年	四四〇、〇〇〇〇	〇	四一一、三〇〇〇
同 八未年	四〇九、五三五一	一一、二〇〇〇越 三五〇、〇〇〇〇本 四八、三三五一入	四〇九、五三五一
同 十酉年	三六五、一九七六	八、〇一五〇越 三五〇、〇〇〇〇本 七、一八二六入	三六五、一九七六
同十二亥年	三五〇、〇〇〇〇	〇	三五〇、〇〇〇〇
同十四丑年	四三一、六四〇〇	〇	四三一、六四〇〇
文政二卯年	三五八、〇八四〇	六、三一四〇越 三五一、七七〇〇本	三五八、〇八四〇
文政四巳年	四一三、〇〇〇〇	六三、〇〇〇〇入 三五〇、〇〇〇〇本	四一三、〇〇〇〇
同 六未年	三五〇、〇〇〇〇	〇	三五〇、〇〇〇〇
同 八酉年	三九五、五〇〇〇	四五、五〇〇〇越 三五〇、〇〇〇〇本	三九五、五〇〇〇
同 十亥年	四〇六、〇〇〇〇	五六、五〇〇〇越 三五〇、〇〇〇〇本	四〇六、〇〇〇〇
同十二丑年	四五〇、〇〇〇〇	二〇〇、〇〇〇〇入（一本越） 二五〇、〇〇〇〇（本）	四五〇、〇〇〇〇
天保二卯年	三八〇、〇〇〇〇	三〇、〇〇〇〇入 三五〇、〇〇〇〇本	三八〇、〇〇〇〇
同 四巳年	三〇一、五三〇〇	一九〇、九三〇〇越 一〇〇、〇〇〇〇本 一〇、六〇〇〇入	三〇一、五三〇〇

同 七午年	三七八、七〇〇〇	二八、七〇〇〇 三五〇、〇〇〇〇	三六七、五〇〇〇
同 九申年	三五〇、〇〇〇〇	〇	〇
同十一戌年	三七五、四六〇〇	〇	三七五、四六〇〇
同十三子年	四一〇、五〇三〇	二七、一五〇〇越 三八三、三五三〇本	四一〇、五〇三〇
文政元寅年	七八五、六六三〇	三五〇、〇〇〇〇丑本 一九、四四一〇越 六六、二二一〇入 三五〇、〇〇〇〇寅本	七八五、六六三〇
同 三辰年	三九一、一六〇〇	四一、一六〇〇入 三五〇、〇〇〇〇本	三九一、一六〇〇
同 五午年	四五二、〇〇〇〇	一〇二、〇〇〇〇入 三五〇、〇〇〇〇本	四五二、〇〇〇〇
同 七申年	三九一、五〇〇〇	四一、五〇〇〇越 三五〇、〇〇〇〇本	三九一、五〇〇〇
同 九戌年	三五〇、〇〇〇〇	〇	三五〇、〇〇〇〇
同十一子年	四五〇、〇〇〇〇	二〇〇、〇〇〇〇越 二五〇、〇〇〇〇本	四五〇、〇〇〇〇
天保元寅年	三一〇、〇〇〇〇	四〇、〇〇〇〇越 二〇、〇〇〇〇入 二五〇、〇〇〇〇本	三一〇、〇〇〇〇
同 三辰年	四〇八、三六七〇	一二三、二〇七〇越 四六、一六〇〇入 二五〇、〇〇〇〇本	四〇八、三六七〇
同 五午年	二六七、三三〇八	二〇〇、〇〇〇〇本 六七、三三〇八入	二六七、三三〇八

同　六未年	二〇〇、〇〇〇〇	一九八、一一三四本 一、八八六六役所仕切	二〇一、〇〇〇〇
同　八酉年	二七一、六三二六	一三七、八七四七越 一〇三、六九九〇越若山延し 四〇、〇三八〇入	二五六、八〇七八
同　十一子年	二二一、〇三三七	一二一、〇三三七越 一〇〇、〇〇〇〇本	二二〇、六七五五
同　十三寅年	一〇九、八四三〇	三〇、三九九〇越 七九、四四四〇入	八一、九六六〇
弘化元辰年	一〇五、五六二〇	二〇、八四七〇越 七七、〇九二〇入	七〇、四四〇〇
同　二午年	一一三、四一三〇	一九、九〇六〇越 九三、五〇六〇買高	八三、五二三〇
嘉永元申年	一一九、〇五七〇	一四、九三〇〇越 一〇四、一三七〇買	一一八、〇三八三
同　三戌年			
同　五子年	二三四、六六〇〇	○	二(五)四、六六〇〇（一本二）
安政元寅年	一七九、九七二〇	○	一六八、四六八〇
同　三辰年	一七三、五二〇〇	八四、八〇〇〇越 八八、七二〇〇	一五七、五〇〇〇
同　五午年	一〇〇、〇〇〇〇	○	同高
萬延元申年	一五五、〇〇〇〇	○	同高

同　七申年	四〇一、八八六六	一、八八六六越 四〇〇、〇〇〇〇本	二七三、九九一九
同　九戌年	二一四、八二三九	一四、八二三九越 二〇〇、〇〇〇〇本	九九、九八九〇
同十二丑年	一三〇、五七二三	一〇、四六四八越 一二〇、一一五〇入	一〇〇、一七六三
同十四卯年	六九、一六六〇	二七、八七七〇越 四一、二八九〇入	四八、三一九〇
弘化二巳年	一三〇、五三一〇	三五、一二三〇越 九五、四〇九〇巳買高	一〇〇、六三五〇
同　四未年	一二九、八九〇〇	二九、八九〇〇越 一〇〇、〇〇〇〇買	一二四、九六〇〇
嘉永二酉年			
同　四亥年	二一〇、八二八一	一三、三〇八一越 一九七、五二〇〇買	二一〇、八二八一
同　六丑年		○	
安政二卯年	二四三、八八二五	一一、五〇四〇越 二三二、三七八五買	一五九、〇八二五
同　四巳年	一〇九、五五〇〇	一六、二〇〇〇越 九三、三五〇〇買	一〇九、五五〇〇
同　六未年	一五〇、五六〇〇	○	同高
文久元酉年	一五五、〇〇〇〇	○	同

文久二戌年	二〇七、〇〇〇〇	〇	同　高
元治元子年	一三〇、〇〇〇〇	〇	同　高
慶應二寅年	二一一、二〇〇〇	八〇、〇〇〇〇納	買同高
明治元辰年	一三六、四〇〇〇	八〇、〇〇〇〇納	同　斷
同　三亥年	一六四、四〇〇〇	〇	同
慶應元丑年	一六三、八〇〇〇	八〇、〇〇〇〇納	買同高
同　三卯年	一本 一〇三、四五〇〇 (三一、四五〇〇)	八〇、〇〇〇〇納	同　斷

年々手質貸高

年號	銀高	金成高
文政八酉年	銀五貫五十三匁四分四厘	此八十四両と十三匁四分四厘
同　十亥年	同四貫七百八十四匁六分四厘	此七十九両二歩と十四匁六分四厘
同十二丑年	同九貫百八十三匁三分六厘	此百五十三両と三匁三分六厘
天保二卯年	同六貫百八十目四分八厘	此百三両と四分八厘
同　四巳年	同三貫九百五十六匁一分六厘	此六十五両三歩と十一匁一分六厘
同　六未年	同三貫三百三十七匁六分	此三十八両三歩と十二匁六分
同　八酉年	同二貫百二十五匁九分二厘	此三十五両一歩と十匁九分二厘

年號	銀高	金成高
文政九戌年	銀六貫四百六十四匁六分四厘	此百七両二歩と十四匁六分四厘
同十一子年	同七貫三十九匁六分八厘	此百十七両一歩と四匁六分二厘
天保元寅年	同七貫二百六十五匁六分八厘	此百二十一両と五匁二分八厘
同　三辰年	同四貫五百五十七匁一分二厘	此七十五両三歩と十二匁三分二厘
同　五午年	同三貫二百四十六匁七分二厘	此五十四両と六匁七分二厘
同　七申年	同二貫九十匁四分五厘	此三十四両三歩と五匁四分五厘
同　九戌年	同一貫九百三十七匁八分八厘	此三十二両一歩と二匁八分八厘

年号	金額	内訳
同 十亥年	同一貫八百三十七匁四分四厘	此三十両二歩さ 七匁四分四厘
同十二丑年	同二貫百八匁一分六厘	此三十五両さ 八匁一分六厘
同十四卯年	同二貫二百五十六匁	此三十七両二歩さ 六匁
弘化二巳年	同三貫九百二十二匁五分六厘	此六十五両一歩さ 七匁五分六厘
同 四未年	同四貫八百二十目(八)(一本六)分二厘	此八十両一歩さ 五匁六分二厘
嘉永二酉年	同一貫五百七十三匁五分	此二十六両さ 十三匁五分
同 四亥年	同六貫五百五十六匁五分	此百九両一歩さ 一匁五分
同 六丑年	同二貫八百十七匁四分	此四十六両三歩さ 十二匁四分
安政二卯年	同百五十五匁六分	此二両一歩さ 五匁六分
同四巳年	同百十三匁五分	此一両三歩さ 八匁五分 但三両[illegible]

年号	金額	内訳
同十一子年	同二貫二十八匁四分八厘	此三十三両三歩さ 三匁四分八厘
同十三寅年	同一貫百九十二匁九分六厘	此三十三両さ 十二匁九分六厘
同十五辰年 弘化元	同二貫六百目六分四厘	此四十三両一歩さ 五匁六分四厘
弘化三午年	同八貫八百六十三匁六分八厘	此百四十七両二歩さ 十三匁六分八厘
同 五申年 嘉永元	同五貫四百八十二匁五分	此九十一両一歩さ 七匁五分
嘉永三戌年	同三貫八百九十六匁二分	此六十四両三歩さ 十一匁二分
同 五子年	同三貫四百三十四匁五分	此五十七両さ 十四匁五分
安政元寅年	同一貫四百六十二匁五分	此二十四両一歩さ 七匁五分
同 三辰年	同百十匁	此一両三歩さ 五匁

年々炭運賃拂

年号	金平し	内訳
文政七申年	金平し十三両	十三両二歩 冬 十二両二歩 夏
同 九戌年	同 十一両三歩	十二両二歩 冬 十一両二歩 夏
文政八酉年	金平し十二両二歩	十三両 冬 十二両 夏
同 十亥年	同 十二両	十二両一歩 冬 十一両三歩 夏

年	値段	冬・夏	
同十一子年	同　十一両	十一両三歩 十一両一歩	冬 夏
天保元寅年	同　十四両三歩	十五両 十四両二歩	冬 夏
同　三辰年	同　十二両三歩	十三両一歩 十二両二歩	冬 夏
同　五午年	同　十六両		○
同　七申年	同　十三両三歩		○
同　九戌年	同　十四両一歩		○
同十一子年	同　十四両		○
同十三寅年	同　十四両		○
天保十五辰年 弘化元	同　十三両二歩		○
弘化三午年	同　十四両二歩二朱		○
同　五申年 嘉永元	同　十(三)両一歩（一本五）		○
嘉永三戌年	（一本同）(同平し十四両二歩)		○
同　五子年	同		○
安政元寅年	同		○
同　三辰年	同　十四両		○
同　五午年	同　十六両		○
萬延元申年	同　十五両二歩		○
文久二戌年	同　二十両		○

年	値段	冬・夏	
同十二丑年	同　十三両三歩	十四両一歩 十(三)両二歩（一本一）	冬 夏
天保二卯年	同　十三両三歩	十四両一歩 十三両二歩	冬 夏
同　四巳年	同　十二両二歩		○
同　六未年	同　十三両三歩		○
同　八酉年	同　十四両一歩		○
同　十亥年	同　十五両		○
同十二丑年	同　十四両		○
同十四卯年	同　十三両三歩		○
弘化二巳年	同　十三両二歩		○
同　四未年	同　十四両三歩		○
嘉永二酉年	同　十四両二歩		○
同　四亥年	同		○
同　六丑年			○
安政二卯年	同　十四両二歩		○
同　四巳年	同　十五両		○
同　六未年	同　十四両三歩		○
文久元酉年	同　二十両二歩		○
同　三亥年	同　十四両二歩		○

同 四子年 元治元	同 十七両	○
慶應二寅年	同 二十六両二歩	深川行二歩増 二十七両
慶應元丑年	同 二十五両 深川行二歩増	二十六両 冬
同 三卯年	同 三十一両二歩	○

年々御益

年號	
文化三寅年	金三百四十六両二歩ゝ六匁八分四厘
同 五辰年	同四百二十七両二歩ゝ四匁七分三厘
同 七午年	同五百四十一両二歩ゝ四匁一分五厘
同 九申年	同二百四十八両二歩ゝ五匁一分四厘
同十一戌年	同五百四十一両一歩ゝ四歩(一本五 二)厘
同十三子年	同五百九十九両三歩ゝ二匁八分二厘
文政元寅年	同二百九十一両二歩ゝ十一匁三分七厘
同 三辰年	同四百三十七両二歩ゝ十二匁七分六厘
同 五午年	同三百三十六両ゝ六匁三分七厘
同 七申年	同三百四十両一歩ゝ七匁二分七厘
同 九戌年	同二百九十二両二歩ゝ十匁四分六厘
同十一子年	同五百十八両三歩ゝ十三匁六分六厘
天保元寅年	同五百九十一両二歩ゝ二匁六厘
文化四卯年	金五百四十三両二歩ゝ(一本一 三)匁四分六厘
同 六巳年	同四百六十両一歩ゝ七分六厘
同 八未年	同三百四十七両三歩ゝ二匁三分九厘
同 十酉年	同五百三両一歩ゝ六匁五分六厘
同十二亥年	同三百五十七両一歩ゝ八匁六分四厘
同十四丑年	同四百四十四両二歩ゝ十匁五分八厘
文政二卯年	同四百三十両一歩ゝ七匁八厘
同 四巳年	同四百二十四両ゝ六匁六分七厘
同 六未年	同三百両二歩ゝ四匁七分七厘
同 八酉年	同三百六両ゝ八分六厘
同 十亥年	同三百七十七両二歩ゝ六厘
同十二丑年	同三百六十六両二歩ゝ六分五厘
天保二卯年	同五百四十五両ゝ十三匁一分九厘

同　三辰年	同五百二十一兩二歩ト七匁八分九厘
同　五午年	同三百九兩ト八匁四分二厘
同　七申年	同三百六十一兩ト一匁八分二厘
同　九戌年	同三百十八兩二歩ト十匁七分七厘
同十一子年	同四百二十四兩三歩ト十匁三分八厘
同十三寅年	同三百八十二兩一歩ト一匁七分五厘
同十五辰年 弘化元	同四百十三兩一歩ト十三匁九分五厘
弘化三午年	同三百三十一兩ト五分八厘
同　五申年 嘉永元	同六百六十二兩三歩ト十三匁二分五厘
嘉永三戌年	同四百九十三兩二歩ト三匁三分
同　五子年	同二百三十一兩二歩ト十一匁二分五厘
安政元寅年	同二百二十五兩ト十三匁六分八厘
同　三辰年	同二百五十兩二歩ト二匁七分
同　五午年	同四百三兩一歩ト二匁九分七厘
萬延元申年	同二百二十六兩ト十二匁一分三厘
同　二戌年	同五百九兩ト六匁三分九厘
元治元子年	同六百二十六兩一歩ト八匁六分六厘
慶應二寅年	同六百六十七兩二歩ト五匁八厘
明治元辰年	同百四兩ト十匁三分五厘

同　四巳年	同六百兩三歩ト十二匁七分六厘
同　六未年	同四百二十七兩ト三厘
同　八酉年	同二百七十八兩ト七匁四分七厘
同　十亥年	同百二十四兩二歩ト六分二厘
同十二丑年	同二百九十五兩ト九匁五分五厘
同十四卯年	同六百二兩一歩ト七匁七分
弘化二巳年	同五百二十六兩一歩ト十一匁一分三厘
同　四未年	同四百七十八兩二歩ト九匁二分一厘
嘉永二酉年	同四百九十三兩二歩ト三匁三分
同　四亥年	同三百五十三兩ト十一匁一分六厘
同　六丑年	同三百七十五兩三歩ト十三匁二分五厘
安政二卯年	同三百三十兩二歩ト十二匁三分二厘
同　四巳年	同四百四十兩ト九匁三分一厘
同　六未年	同五百十五兩一歩ト十二匁一分八厘
文久元酉年	同三百七十一兩ト十匁六分四厘
同　三亥年	同八百三十三兩一歩ト八匁一分八厘
慶應元丑年	同七百六十七兩二歩ト八分九厘
同　三卯年	同六百六十九兩一歩ト四匁五分八厘

一下越方より島村土手問屋迄下し艜賃

炭一俵に付四分二厘　内　二分八厘 下越方より船津中継問屋迄
　　　　　　　　　　　　一分四厘 船津より土手迄

一原書天保十子年七月より追々直増を掛紙にて付着あり然れ共大凡四分六七厘に止り文久四子年は九分元治元丑年は一匁四分に登り同年十二月以后左の如し

慶應元丑十二月より増

一俵に付艜賃二匁五分五厘　下越方より舟津（一本濱の瀬）（舟津濱）の瀬迄

慶應三卯十一より三割下け　同上一匁七分五厘」

但本文艜賃文化三寅年御改正之節より文政二卯年迄四分八厘文政三辰年より同十亥年迄三分九厘同十一子年より天保二卯六月迄四分一厘同年七月より四分二厘右之通段々仍願相増候事

天明五巳二月問屋申付る
一嶋村土手問屋藏敷　問屋　八三郎

天保十五辰三月問屋申付る
一名屋浦問屋藏敷　問屋　作右衛門

嘉永二酉正月申付
一濱野瀬浦問屋藏（一本アリ 屋）敷　問屋　茂吉

但慶應元丑八月より炭一俵に付銀二分「覺に下地六厘」

炭一俵に付七厘　一俵に付六厘

右六貫三百目俵仕出し候節は七厘つゝ下け遣し有之候處五貫三百目俵當時仕出し候付一厘つゝ相減させ有之候事

五貫三百目俵仕出しは天保十二丑十月より取計候事

但本文藏敷之儀は御改正已前より若山迄り炭運賃一俵に付二分五厘に相定右之内五厘藏敷二分運賃と相成別段藏敷遣し無之處文化十一戌年より運賃二分に相定藏敷五厘つゝ船積之節々下遣候處文政九戌年大水にて川並悪敷船付場より炭藏迄手遠に相成二厘増之儀願出翌亥三月より本行之通相増候事

一御口銀炭一俵山元代六分九の割　判代十匁に六厘（慶應元丑年より 銀十匁に付一分つゝ）

一燒印炭亂俵欠足年中十五俵（外に十二俵下越方分立來候事）

一墨筆紙其外定銀百七十八匁三分一厘（慶應二寅年より 銀三百五十六匁六分二厘 諸品高直に付 倍増立方相成候筋）

一桶輪替小買物定銀三十（一本三 五）匁（慶應二寅年より 銀七十目 諸物高價に付 倍増立方相成候筋）

一役所地年貢米一斗六升七合（同年 銀二十目 下越方分定銀 右立來有之候處本行倍増）

外に　小入用畑米銀とも十五匁余

但石替相場幷小入用等年々増減有之相定かたく候事

右屋敷地主忠兵衛と申者難澁にて御買上之儀願出天明六年極月代銀六百五十目にて買上候事

一本斗米高津尾分三十石下越方分三十石都合六十石つゝ年々請取炭仕入幷小賣取計候事

本銀返證文高津尾役所に有之

本斗米高津尾下越方共年々請取米候得共天保十一子年より相止候事

本斗米先年之通高津尾下越方都合六十石弘化三午年より受取候筈御取扱相濟候事

同米八十石　内　五十石　高津尾分
三十石　下越方分
右は先々受取方増減有之候得共安政元寅年より年々本行之通受取來有之事
但御改正之節より文化十二亥年迄百六十石つゝ兩役所へ受取候處段々減石に相成仕出模様
に寄年々増減有之事

一若山迯り炭運賃一俵に付二分
一俵に付二分二厘
右天保九戌十二月より二厘相増本行之通御聞濟に成る
一俵に付二分五厘
右文久元酉二月御聞濟に成る
同二分五厘
外に三分當時増拂
同一匁二分
是は時宜に寄増減有之事

一大坂迯り炭運賃一俵に付二分五厘

一土手より高津尾迄錢登賃百目に付二匁五分

一高津尾より下越方迄錢登賃百目に付一匁二分

一船津村中繼問屋若右衞門
但御改正之節船津村倉助と申者相勤候處病氣に附文化八未正月問屋差免同月彌助と申者へ申
付有之處依願文化十四丑六月問屋差免同年七月若右衞門へ申付有之事
附中繼問屋藏敷は別段遣し不申船津村より土手迄下し賃
一分四厘之内にて前々より五厘つゝ藏敷代りに相成有之事

一山地組小家村定吉所持山にて材木請負仕出し仕度旨海士郡木本村文三郎と申もの依願天保十五
辰二月御聞濟相成同年三月より手初取懸り候事

右に付仕込銀利足五朱にて拜借仕度冥加納之儀は材木一拂に付一匁五分つゝ相納申度との
儀御料簡濟
右爲根質物木本梅原兩村之內
田地一町四反三畝十九歩
高二十四石五斗四升二合五勺　　凡直積り十貫目
「本文村木仕出方二三四年之間業取計其後相止候事」
一仕出炭下越方より持運ひ賃錢百貫文つゝ月毎入用爲登駄賃高津尾より下越方迄錢百貫文に付銀
拾二匁つゝ尤前に相記し有之事
一銀七十目也
內　四十二匁 此燒印十二挺　高津尾分 但一挺三匁五分つゝ
　　二十八匁 此燒印八挺　下越方分 但一挺右同斷
右之通前々立來り有之事　尤御聞濟有之事
安政六未四月改濟
一下越方番所天明八申年七月相初候事
但上初湯川村愛川村願にて同所奧山にて炭仕出手初候付下越方中納屋に取計寛政三亥年同所
茂右衛門所持之地面借入番所取建同四子年中山中組在々十七ヶ村より手質取扱之儀願出同五
丑年より高津尾同樣手質取扱相初候事

寛政十二申七月三十井川村より差上

一杉山三ヶ所　　三十井川村領栗又山之内

一ヶ所　本谷口　此杉八百本　二尺廻より五寸廻迄

一ヶ所　兀　上　此杉百五十本　二尺廻より五寸廻迄

一ヶ所　　此杉五十本　八寸廻より四寸廻迄

右山之儀は寛政四子年三十井川村庄屋次郎右衛門村總山へ杉苗八萬本植付候筈にて御かね二貫七百目余無利足十五年賦に貸渡候處同人品有之追放に相成右返納村方より相納候處返納相滞年賦年延に被成下候樣願出冥加之爲右杉山差上下苅等村方より可仕願にて年賦相濟候事

右三ヶ所天保四巳年三百六十二匁入札拂取計同年御勘定に取組候事

當時取扱無之分

一寶暦五亥年頃より山地組在々へ人參植付手入取計候處天明年中に相止候事

一寛政十二申年萵仕入貸取計大坂寺島産物方役所へ相送り候得共享和年中より相止候事

一炭庄主龍田八左衛門熊野川嘉助瀧頭專三郎へ銀一貫五百目つゝ稼方仕入銀として利足月八朱にて年々十二月貸渡十月取立に取計候處年々銀高相減し文政二卯年より貸方相止候事

一炭見替買之儀文化八未年高津尾村定右衛門と申者願出無據相開候付見替買取計候處其後同人庄主に相成見替買止候事

一下越方仕出炭上越方中納屋受拂同所庄主彌左衛門へ申付有之處文政五午年差免右中納差引拂出

炭下越方役所にて取扱候事

山地組在々年賦銀之儀享保十八丑年茶摘飯料并田作仕附として銀札貸渡候處返納數年相滯寶暦三酉年三十五ヶ年賦に相成候處又々返納相滯寛政六寅年永年賦願立五十年賦に返納御了簡相成候事

文化三寅年御改之節殘高

一銀十五貫百十九匁九分四厘

內

銀六貫百三十一匁五分五厘　文化三卯年より文政五午年まて納

文政六未年返納相滯翌申年在々難澁之品にて返納浮置之儀願出難澁相違も無之相聞候付未年より五ヶ年之間半納之筈御了簡相濟

銀壹貫二十一匁九分一厘　文政六未年より同十亥年まて納

文政十一子年より五十年賦割合通取立候事

銀八百十七匁六分　文政十一子年より同十二丑年まて納

天保元寅年返納相滯翌卯年在々難澁に付當分浮置之儀願出格別之品を以寅年より十ヶ年之間半納之筈御了簡相濟

銀二百四匁四分五厘　天保元寅年納

同二百四匁四分五厘　同　二卯年納

同五百七十八匁二厘　同三辰年より同八酉年まて

記中庄主(しやうぬし)とは地の便宜により村内等身元ある者へ炭仕入金を貸與し所持の田畑宅地山林等を根質物即抵當に取り都て御仕入方の規約を遵奉炭焚き仕出しの業務を負擔せしむる者を云株となして定員あり明き株なけれは新たに申付す兩熊野に通し皆庄主と稱す一方言の如し

炭方庄主名前幷根質物

元簿炭方庄主及船積問屋の住所名前且其者等より差入たる根質物田畑山林の明細書を載す今之を略す

仕出炭賣買見詰

印	炭	元代	諸掛り内譯	江戸若山賣代	同替へ	差引利益
(天二)	一俵	買元代 二匁三分 諸掛り 一匁(二)〔一本五〕分九厘 〆三匁八分九厘	炭方入用 三厘 下し艜賃 四分二厘 藏敷 七厘 御口銀 七厘 江戸入用 一分三厘 運賃 八分七厘 但十四兩二歩	「江戸 四匁一分四厘」	「兩に 十四俵半夏冬平し」	二分五厘
(八)	同	買元代 一匁七分八厘 諸掛り 一匁五分九厘	〆三匁三分七厘	「江戸 三匁六分四厘」	「兩に 十六俵半」	二分七厘

印	品	買元代・諸掛り	〆・諸入用	若山		
(大)	同	買元代 二匁三分 諸掛り 六分 〆三匁一分	三厘 炭方入用 四分二厘 下し[illegible]賃 七厘 蔵敷 七厘 御口銀 二分 運賃 一分 若山入用	「若山 三匁五分」		四分
(八)	一俵	買元代 一匁七分八厘 諸掛り 八分	〆二匁五分八厘	「若山 二匁九分」		三分二厘
[因]	同	買元代 一匁三分 諸掛り 八分	〆二匁一分	「若山 二匁五分」		四分
(大)	同	買元代 二匁八分三厘 諸掛り 三分九厘 〆三匁二分二厘	三分 運賃増拂 一分 [illegible]賃増拂 三厘 同 三厘 炭方入用 七厘 御口銀 六厘 問屋蔵敷 二分五厘 若山送運賃 一厘 若山入用	「若山 三匁六分」		三分八厘
(八)	同	買元代 二匁三分三厘 諸掛り 三分九厘	〆二匁七分二厘	「若山 三匁」		二分八厘
[因]	同	買元代 一匁七分三厘 諸掛り 三分九厘	〆二匁一分二厘	「若山 二匁五分」		三分八厘

御改正後炭買元代高下

年號	㊅印	㊇印	㊤印	㊆印	因印	仝印	無印
文化三寅年	二匁三分	二匁三分	二匁五厘	○	一匁九分	○	○
同　六巳年	○	二匁二分五厘	一匁九分二厘	○	一匁四分五厘	○	一匁八分八厘 一匁五分八厘
同　九申年	○	二匁二分五厘	二匁二分二厘 一匁九分二厘	○	一匁九分五厘 一匁六分五厘	○	○
同十二亥年	○	二匁二分五厘	一匁九分(三)厘 一本二	○	一匁六分五厘	○	○
同十四丑年	二匁三分	一匁九分五厘 一匁七分八厘	一匁九分二厘 一匁七分五厘	○	一匁六分 一匁四分三厘	○	○
文政元寅年	二匁三分	一匁七分八厘	一匁七分五厘	○	一匁四分三厘	○	○
同　三辰年より 同　七申年迄	二匁二分	一匁六分八厘	一匁六分五厘	○	一匁四分(三)厘 一本九 申年一匁三分に成	○	○
同　八酉年	二匁二分	一匁六分八厘	一匁六分五厘	○	一匁三分	二匁九厘 但五貫目俵	○
同　九戌年より 天保元寅年迄	同	同	同	○	同	二匁五分	○
天保二卯年	二匁三分	一匁七分八厘	○	○	一匁三分	○	○

「右元代一俵に付二分つゝ直増
右炭直増之儀は此節世上炭捌方景氣宜候付依願子十二月分より御料簡相濟候事世上不景氣に相成候得は何時にても下た地之通り引下候筈庄主中へ議定致し有之事」

年號	㊅印	㊇印	㊤印	㊆印	因印	仝印	無印
天保十二丑年	三匁	二匁二分	○	○	○	○	○

一右六ヶ俵翌寅年切にて仕出し無之事一

天保十二丑年	二匁五分	一匁九分八厘	○	○	○	○	○

五貫三百目俵仕出し願出十月より焼出し候事尤貫上直段は六貫三百目俵同様御用済相成有之候得共目方も減有之儀付下た地直段へ引付け有之事

天保十四卯年	○	二匁 五貫三百目俵	○	○	○	○	○
同　十五辰年	二匁四分	一匁九分	○	○	一匁四分	○	○
安政五午年	二匁八分三厘	二匁三分三厘	○	○	一匁七分三厘	○	○
文久二戌年十月ゟ 同三亥年二月迄	四匁三厘	三匁一分三厘	○	○	一匁八分三厘	○	○
同三亥年三月ゟ 同　六月迄	三匁七分三厘	二匁九分三厘	○	○	一匁八分三厘	○	○
同年七月より	四匁五分三厘	○	○	三匁七分三厘	二匁六分三厘	○	○
元治元子年三月	四匁八分三厘	○	○	四匁二分三厘	○	○	○
同　年四月分	五匁四分三厘 内 五匁 元代 四分五厘 艜賃	○	○	四匁七分三厘 内 四分三厘 元代 四分三厘 艜賃	○	○	○
同　年十一月分	七匁五分	○	○	六匁	三匁二分	○	○
同二丑年二月より	七匁三分	○	○	五匁八分	三匁二分	○	○
慶應元丑年八月ゟ	八匁五分	○	○	七匁	三匁七分	○	○
同三卯年十月より	五匁九分五厘	○	○	四匁九分	二匁五分九厘	○	○
同四辰年六月より	六匁八分五厘	○	○	五匁六分五厘	三匁	○	○

明治元辰年九月ゟ	十三匁五分	○	○	十一匁	○	○	○

「但元五貫三百目俵之處當分四貫五百目俵仕出
御聞濟に相成候事」

同年十一月分より	十八匁五分	○	○	十六匁	○	○	○
同二巳年正月分ゟ	十六匁七分	○	○	十四匁四分	○	○	○

年々炭出高幷賣高

年號	炭出高	越高	賣高
文化三寅年	一六九七七俵	八四二〇俵	「一二二七二」俵
同 五辰年			
同 七午年	四八二九	一〇六四二	
同 九申年	一〇一七二	八五四六	「六二四(七)」一本六
同十一戌年			
同十三子年			
文政元寅年	六三七五	四六八四	「四四一〇」
同 三辰年	九〇六八	七六九八	「八二七九」
同 五午年	七六六〇	一三一六六	「八〇〇〇」
同 七申年	一〇六五九	一〇六二八	「一〇七一〇」
文化四卯年	一三九五一俵	一三一二五俵	
同 六巳年	六〇〇二	一二六四七	「八〇〇八」
同 八未年			
同 十酉年	六〇一一	一二四七一	
同十二亥年	七八八〇	九四一四	
同十四丑年	六〇六〇	二〇七四	「三四五〇」
文政二卯年	七四四九	六六四九	「六四〇〇」
同 四巳年	八二七九	八四八七	「三六〇〇」
同 六未年	六六六七	一二八二六	「八八六五」
同 八酉年	九〇〇一	一〇五七七	「九七九九」

同　九戌年	一三七四一	九七七九	「一三九七二」
同十一子年	一三一二〇	一六三一四	「一一五二三」
天保元寅年	一五五一八	一四一七六	「一五六七四」
同　三辰年	一六〇三三	一五三三九	「二〇〇二〇」
同　五午年	一六一一〇	七二一二	「一二一九五」
同　七申年	一五六五四	一七一〇七	「一九五二三」
同　九戌年	一五八二二	一一二七五	「一二六三五」
同十一子年	一四一五一	一二二八四	「二二七五四」
同十三寅年	二〇二三〇	五二一六	「二〇二三四」
弘化元辰年	三六〇九五	二一〇四八	「(三)九八九」一本二
同　三午年	三三八四七	一二五〇五	「三七三九一」
嘉永元申年	三一三〇五	一三九一三	「三六一三七」
同　三戌年	四九七九一	三〇〇四四	「三三七〇七」
同　五子年	三三九七八	三八一〇七	「四八八二二」
安政元寅年	一五五六六	二九六七九	「二八九二一」
同　三辰年	九二八五	八九(七)六一本六	「一二三一二」
同　五午年	一三五九八	三八九五	「九〇八〇」
萬延元申年	二二五五四	九七一五	「一六六五五」
文久二戌年	一一五一五	七六三六	「一五〇四四」

同　十亥年	一七一七二	九五四八	「一〇四〇六」
同十二丑年	一三四〇九	一七九〇一	「一七一三四」
天保二卯年	一三〇六九	一四〇二〇	「一一七五〇」
同　四巳年	一二〇一三	五九五二	「一〇七四八」
同　六未年	一五七〇六	一一一二七	「一〇七二六」
同　八酉年	一二〇五九	一三二三八	「一四〇二二」
同　十亥年	一三五三八	一四四六二	「一五七一六」
同十二丑年	一五五四八	三六八一	「一四〇七四」
同十四卯年	三八九六八	五二一二	「二二七〇〇」
弘化二巳年	二一〇九九	一七七五六	「二六三五〇」
同　四未年	三七六二九	八九六一	「(三)三二〇」一本五
嘉永二酉年	六一六四二	九〇八一	「四三七〇七」
同　四亥年	四三五六五	四六一二八	「五一五八六」
同　六丑年	二四二三二	二二二六三	「一七八一六」
安政二卯年	九一九九	一六三二四	「一六五四七」
同　四巳年	八九五五	五九四九	「一一〇〇九」
同　六未年	二〇一四九	八四一三	「一八八四七」
文久元酉年	九〇〇七	一五六一四	「一六九八五」
同　三亥年	七六六〇	四一〇七	「五四〇〇」

元治元子年	六八五六	六三六七	「七一八三」
慶應二寅年	六四〇三	七四一一	「七二六四」
明治元辰年	六三四一	四(七)〔一本九〕六八	「五〇六三」
慶應元丑年	七五五九	六〇四〇	「六一八八」
同　三卯年	八八一一	六五五〇	「一八四八三」

年々米賣高

年號	賣高	年號	賣高	年號	賣高	年號	賣高
文化三寅年	百六十八石	同　四卯年	百六十六石	同　五辰年	百六十六石	同　六巳年	百六十石
同　七午年	百六十石	同　八未年	百六十石	同　九申年	百六十石	同　十酉年	百六十四石七斗一升四合
同十一戌年	百六十石	同十二亥年	百六十石	同十三子年	百二十石	同十四丑年	百二十石
文政元寅年	百三十石	同　二卯年	百三十石	同　三辰年	四十五石	同　四巳年	四十五石
同　五午年	五十石	同　六未年	四十五石	同　七申年	六十八石五斗六升	同　八酉年	七十石
同　九戌年	八十八石	同　十亥年	百四十八石九斗六升	同十一子年	七十七石五斗五升	同十二丑年	六十六石七斗六升
天保元寅年	七十一石六斗四升	同　二卯年	六十石	同　三辰年	六十石		

「天保十亥年迄本行之通受取來候處翌子年より御趣意有之相止候事」

年號	賣高	年號	賣高	年號	賣高	年號	賣高
弘化四未年	六十石	嘉永元申年	六十石	同　二酉年	六十石	同　三戌年	八十石
嘉永四亥年	八十石	同　五午年	百三十一石八斗	同　六丑年	百五石	安政元寅年	八十石
安政二卯年	八十石	同　三辰年	八十石	同　四巳年	八十石	同　五午年	八十石
同　六未年	八十石	萬延元申年	八十石	文久元酉年	八十石	同　二戌年	八十石

年號	石高
文久三亥年	八十石
元治元子年	八十石
慶應元丑年	八十石
同　二寅年	八十石
慶應三卯年	八十石
明治元辰年	八十石

年々手質貸高平し　一朱書ハ貸高之内下越方分也一

年號	貸高平し	年號	貸高平し	年號	貸高平し
文化十三子年	銀十四貫九百二十目	文政元寅年	銀十七貫五十目	同　二卯年	銀十六貫六百八十目〔一朱六百十五匁〕「十貫(七百十匁越方)」
文政三辰年	同十七貫三百(五)〔一朱三〕十目「十〆七百二十目」	同　四巳年	同十九貫四十目「十一〆三百七十目」	同　五午年	同二十一貫百三十目「十〆(五)〔一朱六〕百六十目」
同　六未年	同十九貫八百九十目「十〆二百八十目」	同　七申年	同十七貫九百九十目「十〆二百目」	同　八酉年	同十五貫八百三十目「十〆六百九十目」
同　九戌年	同十五貫五百三十目「十一〆五百目」	同　十亥年	同十四貫五百三十目「十〆百九十目」	同十一子年	同十二貫七十目「八〆六百二十目」
同十二丑年	同十一貫三百六十目「八〆八百三十目」	天保元寅年	同十一貫八百目「八〆七百九十匁」	同　二卯年	同十一貫三百三十目「八〆八十目」
天保三辰年	同十貫七百二十目「六〆七百四十目」	同　四巳年	同十一貫四十五匁「八〆四十二匁」	同　五午年	同十四貫三十五匁「十〆三百二十五匁」
同　六未年	同十五貫二百七十八匁「八〆七百八十四匁」	同　七申年	同十四貫八百八十八匁「八〆七百七十五匁」	同　八酉年	同十七貫六百三十三匁「十二〆三百五十目」
同　九戌年	同十六貫百四十三匁「十〆九百二匁」	同　十亥年	同十五貫五百四十九匁「八〆九百八十六匁」	同十一子年	同十二貫五百目「六〆九百五十目」
同十二丑年	同九貫四十七匁「五〆二百三十五匁」	同十三寅年	同六貫八百九十目「四〆七百八十八匁」	同十四卯年	同六貫九百七十目「四〆八十四匁」
弘化元辰年	同八貫二百九十九匁四分「三〆五百六十二匁五分」	同　二巳年	同九貫三百五十三匁五分「四〆二百七十八匁」	同　三午年	同十一貫二百卅一匁五分「四〆五百七十四匁」

年號	御益
同　四未年	同十五貫百八十四匁五分「六〆三百五十二匁五分」
同　三戌年	同十九貫九百四十六匁「七〆五十八匁」
同　六丑年	同十四貫九百四匁五分「六〆九十一匁」
同　三辰年	同十四貫三百七十四匁五分「四〆五十一匁」
同　六未年	同十三貫七百二匁五分「三〆二百卅六匁五分」
文久二戌年	同十一貫二百廿九匁五分「五〆九十七匁」
慶應元丑年	同四貫八百十七匁五分「二〆三百十一匁」
明治元辰年	同五貫五百二十五匁五分「二〆七百四十五匁」

年號	御益
嘉永元申年	同十八貫七百廿七匁五分「八〆六百七十三匁」
同　四亥年	同二十貫百八十三匁「七〆五百七十一匁」
安政元寅年	同十七貫八百六十九匁「四〆六百八匁五分」
同　四巳年	同十一貫九百三十五匁「二貫七百七十三匁五分」
萬延元申年	同十六貫五百五十七匁五分「四〆二百九十五匁五分」
同　三亥年	同九貫四百六十六匁「三〆六百二十一匁」
同　二寅年	同十貫八百十四匁五分「二〆三百目五分」
同　二酉年	同二十貫四十五匁「七〆五百五十二匁五分」
同　五子年	同十六貫八百八十一匁「五〆五百十二匁」
同　二卯年	同十七貫七十五匁「五〆八百十三匁」
同　五午年	同十二貫六百廿八匁五分「二〆四百九匁」
文久元酉年	同十五貫八百七十三匁「三〆八百八十一匁」
元治元子年	同五貫百三十五匁五分「二〆七百卅九匁五分」
同　三卯年	同九貫四百七十九匁五分「二〆二百六十目五分」

年々御益

年號	御益
文化三寅年	銀七貫七十九匁二分四厘
同　五辰年	同二貫五十五匁一分六厘
同　七午年	同五貫八十七匁一分六厘
同　九申年	同三貫五百五十目七分九厘
同十一戌年	同七貫九百七十七匁六分二厘
同　四卯年	銀五十七匁六厘
同　六巳年	同三貫六百四十八匁五分一厘
同　八未年	同四貫八十九匁三分七厘
同　十酉年	同五貫百七十六匁七分五厘
同十二亥年	同三貫八百六十九匁六分六厘

年	額
同十三子年	同三貫二百十三匁四分九厘
文政元寅年	同一貫六百四十一匁六分四厘
同　三辰年	同二貫三百九十五匁三分
同　五午年	同一貫六百九十二匁八分九厘
同　七申年	同九百四十一匁五分八厘
同　九戌年	同四貫三百九十七匁一分四厘
同十一子年	同一貫二百十四匁七分九厘
天保元寅年	同四貫二百三十一匁二分五厘
同　三辰年	同三貫六百三十七匁五分二厘
同　五午年	同一貫二百三十六匁五厘
同　七申年	同一貫八百一匁五厘
同　九戌年	同四貫二百八十七匁四分四厘
同十一子年	同(五)貫四百七十八匁三分七厘
同十三寅年	同三貫五百七十六匁八分三厘
弘化元辰年	同七貫二百五十九匁七分六厘
同　三午年	同十六貫四百五十八匁九分一厘
嘉永元申年	同二十四貫七百七十一匁三分四厘
同　三戌年	同五貫四百九十目三分九厘
同　五子年	同十一貫四百四十八匁四分七厘

年	額
同十四丑年	同四百九十九匁九分三厘　損一
文政二卯年	同二貫六百二十八匁六分八厘
同　四巳年	同一貫三百二匁四分六厘
同　六未年	同一貫六百二十八匁六分七厘
同　八酉年	同二貫三百五十目八分二厘
同　十亥年	同四貫九十四匁五分八厘
同十二丑年	同四貫二百七十目六厘
天保二卯年	同四百四十五匁一分
同　四巳年	同二貫七百三十一匁九分八厘
同　六未年	同一貫八百九十三匁五分六厘
同　八酉年	同六百六十一匁六分二厘
同　十亥年	同六百八十一匁一分七厘
同十二丑年	同一貫七百五十六匁三分
同十四卯年	同三貫六百六十三匁六分七厘
弘化二巳年	同八貫七十九匁七分九厘
同　四未年	同二十一貫二百七十四匁四分七厘
嘉永二酉年	同二十四貫六百四匁三分
同　四亥年	同十二貫三百三十八匁八分九厘
同　六丑年	同六貫九百五十三匁六分三厘

安政元寅年	同二貫九百十五匁五分四厘「損」
同　三辰年	同四貫八百四匁八分八厘
同　五午年	同六百二十五匁一分「損」
萬延元申年	同二貫三百十七匁九厘
文久二戌年	同三貫三百十四匁八分四厘
元治元子年	同六貫四百目五分一厘
慶應二寅年	同八百三匁二厘
明治元辰年	同十二貫五百十五匁九分七厘
安政二卯年	同七貫五百三匁三分七厘
同　四巳年	同五百六十四匁三分三厘
同　六未年	同二貫七十三匁三分九厘
文久元酉年	同二百三十二匁四分四厘
同　三亥年	同十一貫八百九匁(五)(一本三)分八厘
慶應元丑年	同四貫百六十二匁一分四厘
同　三卯年	同九貫四百六十二匁九分三厘「損」

年々江戸積運賃

年號	何月積	炭運賃
文政七申年	二月積	十三兩二歩
同　十亥年	九月積	十四兩一歩
	三月積	十四兩三歩
	九月積(一本十一)	十五兩
天保三辰年	十(二)月積	十四兩二歩
同　五午年	(正月積)一本ナシ	(十三兩)一本ナシ
	八月より積極月迄	十四兩より十五兩迄
同　七申年		十五兩三歩より十六兩迄
同　九戌年		十五兩
同十一子年方 同十三寅年迄	積送りなし	
文政八酉年	十一月積	十四兩
天保二卯年	十一月積	十五兩
	三月積	十三兩二歩
同　四巳年	九月より積極月迄	十五兩
同　六未年	正月より積極月迄	十六兩
同　八酉年		十五兩方十六兩迄
同　十亥年		十五兩
同十四卯年		十五兩二歩より十六兩二歩迄

安政六未年伺當時休業之事

高津尾御仕入方出張　下越方番所

天明八申七月發足
日高郡中山中組

一御救在々　上越方　下越方　原日浦　三十井川　川原河　熊野川　皆瀬
上初湯川　初湯川　阿田木　笠松　串本　井谷　愛川　彌谷

一手質物　利足月八朱　十五ヶ月限

一穀物質　利足同斷　五ヶ月限

一仕出炭梅印幷買代厘掛繩貸藏敷等高津尾元役所に委細有之通

一本斗米三拾石つゝ高津尾元役所より年々受取炭仕入幷小賣取計候事

一張紙に天保十一子年より請取不申候付賣買無之事
安政三辰年より以前の通三十石充受取候事

一墨筆紙其外定銀　百四十八匁四分九厘　慶應二寅年より二百九十六匁九分八厘

但炭仕出模樣に寄年々石高增減有之事

一桶輪替小買物定銀二十目　同　四十目

一役所地貸米八斗　地主　茂右衛門

但寛政三亥年地面借受番所取建同年九月地受相定時相場を以相拂候筈屋敷貸上け證文下越方

番所に有之事

奥熊野本宮組　本宮御仕入方

一寶永三戌年發旦

一炭山雜木代無利足にて貸渡月々出炭俵掛りを以一俵に付三四分遠近之差別にて取立候事

一板山立木代も同樣無利足にて貸渡月々出板厘掛りを以取立候事

一炭板小割類諸仕込賃之儀は都て無利足にて貸方取計右仕出色物賣拂代銀を以取立候事

一御圍米取計置本宮十一ヶ在之者共へ時相場を以小賣取計之事

一御納所銀村々より依願年々貳貫二百八十目充貸方取計利足月八朱毎年十二月貸五月限取立候事

一猪鹿垣飯米爲御救年々十石七斗充村々へ貸方取計毎年十二月貸渡翌年十月時相場を以取立候事

宮戸
成川　御仕入方
鵜殿

新宮領

一元祿九子年發旦

一御圍米取計置年々新穀詰替之節右米本宮へ積登時相場を以三ヶ月延にて炭板方庄主共へ賣下け取計候事

一板炭木諸木買上け代之儀は都て前同樣無利足にて取計月々出板炭厘掛り且俵掛りを以取立候事

一板炭仕込かし之儀も同様無利足にて貸方取計仕出品賣立代銀を以て取立候事

奥熊野木本組　木本御仕入方

元祿十五午年發旦

一手質物貸方之儀は利足月八朱二十五ヶ月限穀物質利足同斷五ヶ月限にて取扱來候事

一漬質貸之儀は村方依願米穀并山方出色物見當利足月八朱五ヶ月限にて貸方取計之事

同心地　長原村　桃崎村　神の山村

上ヶ地　井出村　瀬戸村

與力上ヶ地　上市木村

新宮領　有馬村　阿田和村

右之村々より手質物持參候はゝ貸方取計候事

新宮領色川組　小色川御仕入方

小匠出張所共

一天明三卯二月發旦

一炭山雜木代無利足にて貸渡取立之儀月々仕出炭俵掛りを以一俵に付三四分遠近之差別にて取立候事

一銀米并鹽噌仕込貸は都て無利足にて取計月々出炭買上け代を以取立候事

一小匠出張役所取扱之儀都て小色川同樣之事

熊野三山御寄附金貸付所

熊野那智新宮本宮之三社御修繕費として享保六丑年十一月朔日　有德公より特旨を以て金參千兩御寄附同七寅年四月日本國中總勸化　公儀觸被　仰出尚又願により同十巳年七月朔日再ひ日本國中總勸化　御免　淨圓尼公（有德公御生母）御初よりも御寄附金ありたり（三山御寄附金發旦の事は政事府享保廿一辰年五月の附込帳と云に詳なり）後京坂に於て富闔興行の事をも公許是等の益金に依り修繕の方を維持し來る即ち其金質左の四種に區別して經理せり

御寄附金　勸化金　再勸化金　富益金

後文政天保年間四種積金の內一萬兩を引分け他に九萬兩を加へ合十萬兩を資金とし江戶に於て貸附利倍の事を三山社家共より　幕府へ請願許可を得たり於是貸附所を本町へ設置し廣く貸付の事を創始す後築地邸に移る同邸堀田家へ御相對替となりしより芝邸に轉し同殿內に於て執務す依て芝三山方貸付所と稱す（今の芝離宮は其跡なり）是れ三山貸附所の濫觴と云依て藩より頭取元締手代等を置かれ一切を管理す又京坂奈良堺等へ出張所を設置し漸次貸出を擴張し以て旺盛に至る江戶の如きは大小の侯伯等大に之を便とし續々借入を競ひ金融開達を來す殊に負債者違約の時は直ちに寺社奉行に訴へ其裁決を受くるか故毫も損失の患なく確實信憑すへきを以て人々爭て預け金をなす又歷々の諸侯市井商賈へ金融依賴は名義に關し（官家宮方等の貸付所ありしも固より微々乃至高利酷薄賴むにたらさりしなり）又は國邑懸隔一時の急需

に應しかたく或は公務を缺くの恐れあるを一通の證券忽ち事を辨するを以て（別に抵當を要せす）大に至便とし加薩大藩の如きも依賴し來て貸借頻頻隨て預金も增殖し利潤亦不尠譬へは今の大銀行の如きの有樣なりし依て執政府は是を直轄に付し獨立理財の一局となし其利潤の內を提出せしめ執政之を直封金庫に秘藏し御封金と稱して萬一に備ふ又會計局非常切迫の場合には三山方より直接臨時立用せしめし事あり則近時に在ては左の如し

金貳萬兩　文久三亥年御勝手方へ立用

金三萬兩　慶應元丑年八月同斷

金二萬兩　同　二寅年十月同斷

此他遺漏あるや不詳

戊辰の急には該御封金を三萬三千兩余開封して國用に供し彼の江戶常府三千人餘に紀勢へ移住の際も專ら此御封金に據て處弁を得其他三山方にて洋船數遠丸購入等の事ありて甲乙財政を補助する事不尠然るに維新に至ては全然瓦解に歸し公私莫大の損失を負荷す時運の大變に際したれは勢ひ不得止ものと雖も御家中差加へ金の如きは正しく藩債に可屬を以元關係の有司等百方苦慮之內藩政となり藩廳會計局へ締切交涉精密調査元三山貸付方より面々へ渡し有之預り金證書を會計局へ納付せしめて藩債に立仮証書を渡し明治三午年壬十月に至り左之通り各預け金主へ會計局より布達す

口上覺

東京三山貸付所近年不融通にて差加金割渡金差支候品に付會計局へ引受無利足年賦に割渡し候筈にて同所へ差加金證文先達て差出有之候事右は御繰合別て御六ヶ敷折柄に付急々割渡の見留附兼候付當分浮置候筈候得共仮證文の儘差置候ては何れも不安心に可存に付格別の譯を以て來未年より三十年賦割渡候筈此度本證文に引替候條前段之趣厚く相心得可申事

右に依り明治四未年より無利足三十年賦毎年十二月中割合可相渡旨和歌山藩會計局の本證券を交付せり

然るに後廢藩置縣となり明治四未年十二月大藏省より各地方管下に於て舊諸藩へ金穀調達之者共其時より返濟の期限且利足等の約定明細取調證書寫相添へ至急大藏省へ差出可申旨布達あり又明治五申年再ひ舊藩へ調達金滯分認差出可申旨布達により其筋に於て精密審査調書提出百方盡力交渉の末遂に明治九子年二月に至り滯利金を引除きたる元金額に對し五十年賦年二朱利付舊公債證書を下附せらる

一三山貸付方の成立固より一朝一夕の故に非す貯蓄貸借の金額損益の如何等簿冊散逸關係の者既に物故今や辨知の方なし唯經歴の大概を略記するのみ

南紀德川史卷之百十四

臣 堀内信 編

軍政第一

御軍令

按に慶長十九年十月大坂冬御陣の時俄に御陣觸ありて新規に御陣の用意それ〳〵の御定め番指物等迄萬事大形其日に一々御定めありとあれは第一に軍令を定め給ひし事知るへし而して今傳はらす此軍令は寛文十年七月と記せり蓋し同七年　龍祖御退隱　清溪公繼させられし故此年更に改定ありしならん故に末項　隱居方雇候士卒云々　賴宣旗は大中黑五本但纒なしさし給ひしにて隱居方とは即ち　龍祖御自身の事大中黑五本纒なしとは旌旗の條　龍祖御退隱の時御附御旗奉行關根又左衛門より御旗大纒の事伺ひ上けたるに符合せるなり

此軍令信か擬するもの三本あり悉く異同を免れす且つ魯魚の誤多く殆と適從に惑ふ畢竟從來秘密の間に謄寫覗謄交互轉傳によるものか今彼此對照參酌暫く解しやすきに從ふ

一本年支を寛永十年癸酉七月と題するあり左京大夫君は即ち　源性公也公は寛永十八年に誕し給へは此理ある事なし永、文、のの誤り必せり

定

一先手之儀前後之次第鬮取に仕六隊之內一日替に先掛可仕也勿論時により下知にて可定一隊之內大番組も一日替に先を可掛事

一武者推之儀六里七里を一日之路と定但時により遠近之儀下知次第に可仕事
一推行中にて止め具立時は假令川中險阻之所と云共次第々々に急度可立留事
一推前に敵不慮に出候共其近き一隊二隊防戰外之手者急度立て堅め一人も不可助合物主番頭役人の下知を可相待事
一六隊之者共定之通段々推行一頭を先を抽打間敷候能き地形にて待合せ旗本共に七隊陣着迄間不置可推行事
一舟越橋渡總て節所を過る時は跡先之押を可置其押は弓鋏砲張出し馬上皆下敷唯今敵に向如く仕諸手相渡濟迄備を不可亂勿論川越節所を過る時は其(頭イ次)之隊は前方に踏止て堅其場へ不可行重猶以我人數既に節所を越候とて後陣を不待合先へ不可推行次第繰に可仕事
一推前備立にをいて物語雜談友を呼合高聲小歌物語高笑ひ堅停止たり縱親子兄弟を見掛候共互に可爲無言事
一推行道に脇道を求て往還を仕り行列を不可亂幷川越舟渡にて前後を相論不可仕使番目付等指圖可仕事
一鎗鋏砲弓之者共假初にも主人組頭を不可離殊に鎗の室(さや)火繩玉藥決拾等の小具足迄落し失候輩は當座に可爲討棄勿論主人物頭迄も不心掛に可處事
一弓鋏炮之足輕は如備定其手一隊切に可推行事
一推行に鳥獸俄に飛走り乘馬等取放候とも堅行儀を立不可騷其組頭柏子木五つ可打段々に諸手柏子

木を可合陣小屋備之内同前なり餘の手にて氣つかい無之樣にとの事

一推前に一里一度宛立留用所可相達也其間には草鞋はきかへ馬の口洗せ沓打替候事堅く不可仕勿論上下共に腰付水筒令用意酒屋店屋へ不可立入若令違犯は急度可所重科事

一一備之物主と云共辨當幷茶弁當堅不可持めんつう水筒自身腰に不可離勿論胄をは馬添に手鎗一所に可爲持甲立に不可立忍の緒結ひ付る物なれは俄に甲を着る時手廻し惡敷事

一鎗弓鐵炮一つにからけ馬に附又は一人に多く爲持候はゝ可爲曲事但歸陣は格別之事

一推前之次第一番に旗二番に弓鐵炮物頭三番に大番頭同組預り鐵炮四番に寄合與頭五番に大組六番に自分預り足輕自分騎馬次に手道具七番物主老中八番乘替雜人小荷駄等也敵地無心元時は一番に弓鐵炮物頭二番に大番組次に寄合次に與力三番大組四番自分弓鐵砲と行列を立へし備なりに推時は物頭之跡に旗可推事

一人數を夜推にする時は一隊の内先と跡に炬火可燃なり月夜には火を不可持伏奸有時の爲投松火數多持せ隱し炬胴火用意し敵出ると聞は燃立推前馬次幷隊備へきもの也勿論先へは案内忍之者段々に遣し注進可遂敵有時は貝柏子木を打立鐵炮を打て跡先へ可知す事

一在々放火燒働之儀しまり一隊を丈夫に立早く手廻して禁へし煙先を見て敵出る時の爲如此の事

一出陣には私宅より物の具し指物さし甲迄着してまかり出るなり推行中に甲脫可爲持時は使番目付左右次第之事

一物頭は一備切寄合大番與力次に自分の又者騎馬何れも一組切に馬次を可定也物主番頭年の正月上

旬に寄合相極書記家々人々に書付を可渡置事

一馬に沓かけさせ或は馬に用所叶させる時は馬主道脇へ乘のけ事濟て元の馬次へ可乘込事

一宿々陣着之次第先宿端手前に段々に立堅め小荷駄雜人を先へ入宿陣々に手配相濟候とき使番目付相改相圖の貝を鳴へし其時武者は段々に可推入事

一野陣小屋取之前に備一番に鐵炮物頭其間に弓物頭其次に物主の大旗立堅め其跡に騎馬下立馬を跡に疋せ道行の次第に小屋取可仕也小屋割相極候はゝ下知次第に面々の小屋場へ可行尤兵粮は朝より晩迄のを調人々に可持事

一小屋場定て夫小荷駄後れ暮に及はゝ迎さして馬上十五騎鐵炮二十挺三十挺指添悉く冑にて迎に可參事

一家中上下共に夫人足の外は若黨仲間鎗持小者迄も鎧可着馬の口取鎗持は小具足胴丸にても可着事人々の心掛也羽織は人々の心次第相印相言葉は當分に可申付候羽織も勿論の事

一推前陣中歸陣迄も喧嘩口論拔魁大酒博奕幷無下知に武具を脱馬の鞍取る儀堅停止也勿論宿陣野陣にても無用所に互に問見廻陣中往還堅法度也荷物解散し油斷不可仕事

一無下知して陣屋へ不可入亦陣拂候時も無下知に小屋具取拂尤放火堅不可仕事

一役人にてなき者旅推前備所にて濫にて横行仕り餘情ふり空儀勢覊布禁制也若於相背は可爲切腹事

一使番物見聞次第注進に戻り候者一二三四の圖取して前に可相定若稼之爲先に居留り自分之働を心掛令遲參大事之注進無之候はゝ其身は不及申妻子迄も斬罪名跡を可斷絕候若其身討死仕候はゝ妻

子不殘成敗可申付事

一使番母衣之者の指圖は一手之物主も可用也其善惡に付相談可仕事

一皆朱之鎗玳瑇之鎗具足羽織母衣着幷母衣片袖の鎧無赦免叢堅禁制たり勿論頭々も下緒。打出し。いろは。蠅取。糸立。挑灯。石五輪。地黄猪。將棊之駒。制札。撞鐘。根卷。杖つき。鳥居。そほろ。酒はやし。手桶。浪頭。俵。等之位の指物、無赦免叢堅禁制之事

一一隊切に又者騎馬十騎二十騎出入して夫小荷駄可召連具中に夫小荷駄を立跡先を可乘也家中役長柄役弓鐵炮を備々切に警固可附尤一戰之時は總小荷駄一所に集り小荷駄奉行下知可仕事

一陣中備之内馬放るか内方騷敷には柏子木五つ打へし火事出來ならは貝計可吹敵出こ注進あらは貝と柏子木こ一度に鳴しつゝ攻かけて打立皆々へ可知事

一篠陣にて俄に敵出る由外聞謾物見注進あらは物主番頭小屋にて貝を吹柏子木を幷打へし一番貝に武具立二番貝に面々小屋前に手鎗を持馬を前に立靜却而下知を可相待事

一何れ之隊も一手を三分にして一組宛物具し馬に鞍置二時之内急度揃居て急事の時可取合何れも如此致し二時替に晝夜を可相勤事

一陣小屋四方の木戶口約束之手印を以て可致出入事

一陣中にて己か役所之外不可出入若夜白に不寄軍用にて罷出候はゝ定紋の挑灯を燃物具一縮し手鎗指物腰付迄も隨身可仕下々草鞋掛只今打立樣に仕可罷出敵際遠きとてすはたにて往還仕は見合次第侍は刀脇指を奪下々は可爲打捨之旨夜廻之役人に申渡候事

一總軍中相觸落し候輩は直參又者に不依無心掛之第一也頭々能念入不落失樣に可申渡事

一馬取放し火事出來は小屋中打込に仕死圖をさらせ二人つゝ可令成敗事

一陣中上下共に酒宴高聲門立辻立禁制たり物頭番頭は陣屋の前に張番を置往來を可改若胡亂之族は可召執事

一在陣中下人共架之改入通令停止候歸陣之後可任所存事

一忍之者晝は休夜は張番に加り一番奸二番奸と限へし張番も一二と伴ふて段々に注進可仕殘る忍は陣所之外詰り々々に構へし張番外聞之番代もいかにも忍やかに可仕夜半替一時代り其頭々可爲下知事

一小屋出打立前には一番貝にて起て兵粮支度し二番貝に物具にて馬引出し小屋前に並を作り三番貝に可推出事

一推前にて下立候時は馬を跡に引付備にて下立候時は物主下知之所へ悉く馬を寄一所に可置事

一大將自身乘出し物見する事有へし指圖之外は一人も不可出其砌近々と見付大將と存候とも備々又者迄も下馬禮儀堅不可仕勿論不可騷次に一手の物主番頭陣場取備立又物見に乘出候とも無指圖輩同道堅停止之事

一合戰之時備立は何れの手も直先に鐵砲弓其次旗其次騎馬組付自分馬上其次物主一手の旗本を堅預足輕には備之物脇に立へし役長柄役旗其次には乘馬又同勢也役弓鐵炮は胴勢の左右の手先に可立者也

一一手之脇備も眞先に鐵炮弓其次は旗其次は大番騎馬其次に番頭並に加屬之手寄と可立其次は乘馬又者雜人胴勢也番頭預り足輕は備之兩脇に立一隊中の役長柄役弓鐵炮は胴勢の警固として左右可立物主番頭母衣使番乘廻下知可仕事

一物前兵粮遣ひ馬に物飼候はゝ腹帶〆沓開き上帶忍緒しめ草鞋を直し太刀からみ以下身支度仕指物小旗のこはせを〆鎗太刀之目釘を濕し候樣下知可仕事

一鎗長け二つ三つに詰よせ弓鐵炮にて打倒候とも合戰は大事の儀に候條高名を心掛首取に備を不出樣に堅下知可致候勿論打鋪候時敵掛り來ると云とも物主番頭無下知以前立起へからす掛り指揮掛り貝の時一同に鎗を入可き事

一備之中物主番頭と使番母衣目付と物見役の供番計馬に可乘其外は不殘下立備の行儀を可作事

一敵味方之相色合戰を取組を見合せ掛軍待軍考勝負之得失は物主と番頭大組と母衣使番と相談にて可極也目付は其中分了簡の善惡を勸へ剛臆と智と愚と無私可致言上事

一供番は一里二里先へも乘拔地形之善惡備之立所を見積先手一備立と二の先三番脇鎗を懸引自由可得地形を見積尤物前にては敵之備の相色掛り塩と可拂所を見分其備物主番頭に申聞せ合戰の樣子を母衣使番目付に申談勝利の物見可勤第一也尤敵の可掛か掛間敷か引敵か陣取敵か夜討來か朝込可有色か詳に可見屆考常にも心に可掛事

一使番は物主番頭の談合相手也尤母衣は大將の名代なれは兩役共に合戰の本勝も負も此役次第なり物見自分之考とを以合戰の指引物主番頭と談合仕掛引可仕事

一番頭之組頭尤寄合の組頭は物主番頭手負討死仕候はゝ其一組を下知仕役也縱物主番頭討死仕候とも組頭下知して其組を勵し合戰を可相挑也互に掛引之位見切一戰を可取組事

一縱物主番頭臆し候て可掛時をぬかし又早く立候て卒爾に働させ掛引其圖をはつさせ候は母衣使番と組頭之越度なれは少も油斷不可仕事

一懸指揮之時は如何樣之惡所成共可懸縈指揮之時は勝負最中成共一手之旗本へ縈へし兼々家々之軍法なれは敵の首取に掛り候共其身越度に不可有事

一物際近々と成或は旗を取直し足輕幷武者を繰通し物主番頭使番それ〳〵に下知之馬乘廻敵方之備にも色めき渡り候共此方之備は靜に仕り懸指揮を振か懸貝を吹か此二つの外に不可懸事

一鎗は一番二番迄高名は三番首迄に相極候其外は品々に極て甲乙可有也城乘も一番二番三番迄に可相極但し本の鎗草詰幷繼鎗と吟味可有事

一相討は敵働は助太刀仕候共首は初太刀之者可爲高名但し大事之虎口烈き鎗下にて敵つかへえたるを推拂ならは鎗合る輩の突伏たる鎗下は鎗脇に續者共其首を可取若等之合る軍鎗下の高名に心を入大事の虎口を亂候儀不覺之至也鎗を合則敵を突崩し候より上之手柄此外に不可有事

一或は高名を實見に入ん爲又は手負死人を擧ると號し勝負未決内大事之物場を不可退初より終迄役場を不離可抽戰功高名手柄の儀は物主番頭母衣使番目付遂糺明致言上之條其物主番頭組頭等を指置旗本へ首持參候儀可爲乙度其組の物主番頭不取次高名は許容不可成候但一番高名か勝たる首にて物主番頭指圖にて旗本へ持參候は格別事

一懸口勝負前に手負死人を不可除引擧時擧歸事
一懸口に指物武具落候はゝ乙度にあらす除口に落し候はゝ乙度也總て都て落安き道具に定紋不可付後難可出事
一組付大番等大事之物場に向候はゝ一足も不退物主番頭と一統に可遂討死事勿論たり若はつし候て見捨し棄去し候輩は妻子從類共に同く可遂誅戮又物主番頭は已か組下手勢は不及申他の備にても及難儀候所見捨し候者切腹可申付事
一陣中にての申分あらは互に堪忍仕敵前之稼にて甲乙を可極也勿論上下共に他人之忠を讒傍翼を不可出拔就中奪首拾首似首仕候はゝ逆候よりも恥辱なれは歸陣之以後磔に懸縛首を可切條無疑事
一刈田小屋落し薪林取は五人組にしても數いかほとゝ都合しそれに弓鐵炮を付て大角を示し時取を定可遣之分捕亂妨取其所にて割符し日高に可罷歸事
一推前にて不審成所へ草枝に行事に本手と請手と可遣事
一陣小屋にて夜討朝込日中之早懸有も其當る一陣之勢防戰其外は無下知已前不可出合壓備を設け外の敵を可相待事
一働之善惡甲乙幷褒美之義淺深共に其物主番頭之申次第に仕候條萬事令隨順下知指圖不可背事
一陣中は事少を以第一之覺悟とせり道具已下不可持運玉薬弓鐵炮兵粮味噌塩以下の外は無用之餘情道具堅停止也一手之物主たりと云共定梅一具之外梅折鋪乘物籠等堅禁制可仕五百石三百石以下小身者は猶以梅家具挾箱兵粮鍋箱以下急度令停止子細は船越川渡にては一人にても手明第一也其上

手負出來人少に成候はゝ可爲難儀間鍋兵粮塩味噌之類は荷蓆に包人夫小荷駄に可附也道具多けれ
は國出に人不足して川越に手明無之して迷惑可仕間此旨組中へ可申聞事

一兵粮米壹升五合麥粉一升干味噌一合燒塩五勺合二升六合五勺つゝをうちかいに入て下人不殘腰付
に仕り馬取沓籠持は大豆一升つゝ腰に付候樣に急度可申付也めんつうには飯を入同腰に可爲附若
小荷駄不續時の爲如斯也付たり陣雨紙二枚指繩一長け鍋一つ白米一升大豆五合干味噌一合燒塩五
勺を輪束にかけ小荷駄の口をさらすへし乘替馬には片幕陣雨紙五枚白米五升大豆五升結合て鞍坪
に打かけ可牽旨堅可申渡事

一物主番頭より始て白米五合めんつうに飯を入うちかいに認鎧之上に腰付に可仕也剝諸士猶以如此
手弓手筒先乘根來總足輕不殘白米一升めんつうをうちかへに認腰に可付事

一賴宣光貞自身腰付飯両附候間下々堅可守其旨也古來之名將勇士皆以如此勤之由就中　權現樣第一
に右之通被遊條謹而可致承知誠に大河險阻を踰て夫小荷駄不續時は矢たけに存候共身疲力盡て働
事不可叶尤至極成古法なれは今以條目書記急度令下知所也堅其旨可守事

一小屋口坪數は物主ごいふごも狹く相渡候間武具兵粮之外持參仕間敷事

一宿陣へ着候はゝ十五町を境さして八方を乘廻り敵附之所溝川の淺深繁田切道橋深田塘陰馬の掛場
の善惡宿陣を離ては勢屯場所以下を能々伺て森林等大方目付の心印して小屋へ歸夜に入は敵付の
方へ待伏を構させ外聞艱物見可出事

一陣小屋一組切には寄合可慰也其時は物具指物爲持小屋には馬幷下人打立候樣可指置也宿より面々

のめんつう持参夫にて振舞之飯を可請食終て其めんつうに重て飯を所望し腰に付る様に認置て後はいつまても悠悠と語慰へし不意に敵出る時直に打立へき事

一小屋前には宿札長一尺横四寸に仕り竹に挾み大字に名書仕可立置書之内は指物張立小屋前に飾事

一風吹物冷夜は總軍物具して馬引立手槍推立側に置可罷在下々も身支度勿論事

一陣中夜廻宵と暁と兩度宵亥子暁は巳寅の時取寄合大番使番大小姓十人組等出合にして三十人頭は目付二人也孰れも甲冑を帶し手鎗持一人宛可召連三十人二手に別れ兩方より廻り先にて手を合せ行違て廻り納初之勢屯候て一所に成り人數改め小屋へ可歸廻り候内に怪者有は生捕品により打棄之儀勿論たり夜廻り役人無言にて目付計改て通るへし物主番頭の役所前にては夜廻りは誰そと改へし其時目付名乘て可通事

一近習打込にして陣廻として十五人夜白不時に可廻改也時により　賴宣光貞も交り廻事可有本廻り番夜廻にも自身加りて廻る事可在之條役所々々油斷不可仕事

一夏は二日冬は三日の兵粮を一度に焼せ塩を振て不損様にして可用也不意に敵へ推懸兵粮の煙を一同に立れは敵に知るゝゆへ如斯事

一陣小屋にて總軍より物頭三組つゝ火の番定一日一夜つゝ可相勤一組は火元へ立渡り火を消一組は四隣へ立渡りて雜具を取出し一組は取出したる道具を可為警固付り營中失火之時は諸軍物具して鉄炮火繩を掛け役所々々へ急度備を可儲事

一役長柄役弓役鉄炮は其一組より一日替にして三人支配人を附胴勢に可立也尤本長柄は其組中より

奉行を定下知可仕也物主之纒は其頭自身に可有尤役旗も其所に可立番頭之旗を初諸役旗は皆胴勢に立其支配人を可附馬驗は其身の備に立進退之目印と可成事

一推前にては五本旗五幣の小纏共においねさしに可仕諸手之旗も同前也備を立合合戰之時は旗馬印共に腰皮にて指可申候大旗をおいねさしに仕は半町とも走ること不罷成候

一朱の大四半白丸之纏は晝夜張立る物也中黑の旗と葵の丸の白旗は或は夜討朝込日中の早懸の時相圖を定候條其旨は組頭之輩能承無油斷樣に組中へ可相示事

一直參又家中共に甲の前立物三寸より五寸迄の金之丸也直參は指物地に金の丸又家中は淺黃地之四半に金の丸但し相印直參も組々之違あり別紙に書出し候事

一麾は目付使番迄可爲持但し略法のさい也或は止のさいは手柄次第に赦免可有事

一總足輕家中の役足輕迄淺黃の二本しない但し先乘組は白しない朱の餅の紋下に頭の定紋有委細別紙に書出し候

一隱居方雇士卒相驗あり但し指物前立物は替りなし左京大夫家中相印一等の事

一賴宣旗は大中黑五本但し纒なし

左京大夫は頭黑に白き葵の折敷附五本之事

右之條々堅可相守其旨若於違犯之輩は可處嚴科者也

寛文十年七月

御軍役定

藩士從軍の時召具すへき歩騎從卒在夫の人數皆祿之高下に依て定數あり之を御軍役と唱ふ此定則は御書物方に秘藏して公示せす故に藩士加祿又は轉職等の時直ちに御書物方頭取に就き指揮を請へは頭取は定規の人數書を付與するの成規也騎馬歩行は戰騎戰卒也雜人は隷僕及ひ在夫をいふ知行取は己れか所領地より在夫を直徴し切米取は御勘定奉行より在夫を支給するの制なり然れ共昌平年久敷一回も從軍の事なし後元治元年征長の事ありしも兵制一變總して無用の兵具雜人停止せられ此御軍役にはよらさりし也

一平士は百石に二人増頭役は百石三人増

一二百石十八人内歩行二人雜人六人鎗一本

一三百石十二人歩行三人雜人七人鎗一本

一四百石十四人歩行四人雜人七人鎗一本鉄炮一挺

一五百石十六人歩行五人雜人七人鎗三本内長柄一鉄炮一挺

一七百石二十人歩行七人雜人七人鎗三本内長柄一本鉄炮一挺

一千石二十六人歩行十人騎馬一騎鎗四本内長柄一本雜人七人鉄炮一挺弓一張

一千三百石三十二人右同斷

一千五百石三十六人歩行十一人馬一騎鎗五本内長柄二本雜人十八人鉄炮三挺弓一張

一千八百石四十二人歩行雜人十二人騎馬二騎鎗七本長柄三本鉄炮五挺弓二張［一本アリ］（一歩行ノ人員ヲ欠ク）

一二千石四十六人歩行十三人雜人十三人馬三騎鎗八本長柄三本鉄炮五挺弓二張

一二千五百石五十六人歩行十五人馬四騎鎗十本内長柄四本鉄炮八挺弓二張雜人十五人

一三千石六十六人歩行十八人雜人十八人馬五騎鎗十二本鉄炮九挺弓三張

一三千五百石七十六人歩行二十人馬六騎鎗十三本鉄炮十一挺弓三張（雜人ノ人員ヲ欠ク）

一四千石八十六人歩行廿四人雜人二十三人馬七騎鎗十五本鉄炮十二挺弓四張

一四千五百石九十六人歩行二十六人雜人二十七人馬八騎鎗十五本鉄炮十四挺弓四張

一五千石百六人歩行廿人雜人三十人馬九騎鎗十七本鉄炮十六挺弓五張

一五千五百石百十六人歩行三十人雜人三十人馬十騎鉄炮十六挺鎗十八本弓五張

一六千石百二十人歩行三十四人馬十一騎鉄炮十八挺鎗二十本弓五張雜人（雜人ノ人員ヲ欠ク）

一六千五百石百三十六人歩行三十四人鎗二十本鉄炮二十挺弓五張馬十二騎

一七千石百四十六人歩行三十六人馬十二騎鎗二十本鉄炮二十挺弓五張

一七千五百石百五十六人歩行三十六人馬十四騎鉄炮二十二挺鎗二十四本弓七張

一八千石百六十六人歩行三十八人馬十五騎鉄炮二十三挺鎗二十五本弓八張

一八千五百石百七十六人歩行四十二人馬二十一騎鎗二十六本鉄炮二十六挺弓九張

一九千石百八十六人歩行四十四人馬二十七騎鎗二十七本鉄炮二十七挺弓十張

一九千五百石百九十六人歩行四十六人馬二十八騎鎗二十八本鉄炮二十八挺弓十一張

一一萬石二百六人歩行四十八人馬二十九騎鉄炮三十挺弓十九張（鎗ノ員數ヲ欠ク）

一二萬石五百人歩行六十六人馬三十騎鎗四十本鉄炮五十挺弓二十四張

一三萬石六百人歩行七十七人馬四十騎鎗六十五本鉄炮七十挺弓三十張

右旗は千石より一本

按に　右御軍役定は次に延寶三年御定と略は同一の如し然れ共少違ありて且粗也或は延寶三年前の御定なるや今考ふへからす暫く疑を存す

軍役定延寶三年卯年

延寶三卯年より

御軍役御定書

石高	人数		内		
二百石	一拾人	内	歩二人 鎗一人	雜六人	
三百石	一拾二人	内	歩三人 鎗一人	雜七人	
四百石	一拾四人	内	歩五人 鎗一人	鉄炮一挺 雜七人	
五百石	一十六人	内	歩七人 鎗三人	鉄炮一挺 弓一張	
六七百石	一二十人	内	歩七人 鎗三人	鉄炮一挺 弓一張	
八九百石	一廿四人	内	歩九人 鎗三人	鉄炮一挺 弓一張	
千石	一廿六人	内	歩十人 鎗五人	鉄炮一挺 弓一張	馬一
千百石より三百石迄	一卅二人	内	歩十一人 鎗五人	鉄炮三挺 弓一張	馬一

一千四百石より五百石迄　一卅六人　内　歩十一人　鎗六人　鉄炮四挺　弓二張　馬一

一千六百石より八百石迄　一四十二人　内　歩十二人　鎗七人　鉄炮五挺　弓三張　馬二

一千九百石より二千石迄　一四十六人　内　歩十三人　鎗八人　鉄炮六挺　弓二張　馬二

一二千石より二千五百石迄　一五十六人　内　歩十五人　鎗十五人　鉄炮八挺　弓二張　馬二

一二千六百石より三千石迄　一六十六人　内　歩十八人　鎗十八人　鉄炮九挺　弓三張　馬三

一三千百石より五百石迄　一七十六人　内　歩廿二人　鎗十三人　鉄炮十一挺　弓三張　馬三

一三千六百石より四千石迄　一八十六人　内　歩廿四人　鎗十五人　鉄炮十二挺　弓四張　馬四

一四千石より五百石迄　一九十六人　内　歩廿六人　鎗十六人　鉄炮十四挺　弓四張　馬四

一四千六百石より五千石迄　一百六人　内　歩廿八人　鎗十七人　鉄炮十五挺　弓五張　馬五

一五千百石より五百石迄　一百十六人　内　歩三十人　鎗十八人　鉄炮十六挺　弓六張　馬五

一五千六百石より六千石迄　一百廿六人　内　歩卅二人　鎗二十二人　鉄炮十八挺　弓五張　馬六

一六千百石より五百石迄　一百卅六人　内　歩卅四人　鎗廿一人　鉄炮二十挺　弓五張　馬六

一六千六百石より七千石迄　一百四十六人　内　歩卅八人　鎗廿四人　鉄炮廿二挺　弓七張　馬七

七千百石より五百石迄
一百五十六人　内　歩卅八人　鎗廿四人　鉄炮廿二挺　弓七張　馬七

七千六百石より八千石迄
一百六十六人　内　歩四十人　鎗廿五人　鉄炮廿四挺　弓八張　馬八

八千百石より五百石迄
一百七十六人　内　歩四十二人　鎗二十六人　鉄炮廿五挺　弓九張　馬八

八千六百石より九千石迄
一百八十六人　内　歩四十四人　鎗二十七人　鉄炮廿七挺　弓十張　馬九

九千百石より五百石迄
一百九十六人　内　歩四十六人　鎗二十八人　鉄炮廿八挺　弓十張　馬九

九千六百石より一萬石迄
一二百六人　内　歩四十八人　鎗三十人　鉄炮三十挺　弓十張　馬十

一貮萬石　内　馬二十　鉄炮五十挺　鎗四十五人　弓二十張

一三萬石　内　馬三十　鉄炮七十挺　鎗六十五人　弓三十張

一物頭組頭貮百石より上百石に二人増

一又家中之鎗出すは三百石以上は出す筈

但し御軍役之外也

一番頭　大組　普請奉行　供番頭　奉行　旗奉行

旗一本つゝ

此外頭分は千石以上旗一本

一弓鉄炮は高二百石にても一挺つゝ

一使番供番横目弓役二百石より百石に三人增
右騎馬役之積

御軍役御定に付小知行切米之者下人召連候數幷御內意之覺

〇延寶八申年八月極

一寄合大番總て騎馬之者知行切米扶持方高百五十石に不足之者は百五十石之都合御金被下候筈也
一切米二十石以下之者は十五人扶持已下之者幷十五歲より內之者大老行步難叶者可爲御留守組事
一騎馬之者知行百五十石以下御切米六十石以下にても下人七人たるへし
一奧表御小姓御膳番奧之番御小納戶立等之御近習大小姓詰合番夜居番は知行切米百五十石に不足之分は御借馬也自分之下人は六人たるへし
右之外官祿輕き者猥りに騎馬之數に不可入事
一輕き諸役人番外小寄合御鷹匠鳥見本道外科物讀之類知行百五十石以下切米六十石已下之者兼て騎馬之數たるへからす
但し品に寄り其節馬に御乘可被成候者も可有之事
一騎馬にて無之者知行百石切米四十五石迄は下人五六人切米廿石已上三十石迄下人三人二十石以下之者は下人一兩人たるへし
但し小知行切米にても自分之働を以て馬に乘るは可爲格別事

一町人役者等軍勢之數に不可入但御軍用に入候職人等之名計り御帳に可書事

陣中小屋割定

一百石一間半　二百石に二間　三百石に二間半

一四百石に三間　五六百石に三間半　七八百石に四間

右千石迄割をさしの小屋と言千石より上は高割とて高を書立二割引也

一二千石に高九間小屋つめ六間二尺口

一三千石に十三間半九間二尺余　（原本小屋つめの事なし恐脱か）

一四千石に十八間小屋つめ十二間半

一五千石に二十二間半小屋つめ十五間余

一六千石に二十七間小屋つめ十八間

一七千石に三十一間半小屋つめ二十二間半

一八千石に三十六間半小屋つめ二十五間半

一九千石に四十間半小屋つめ二十八間余

一一萬石に四十五間小屋つめ三十一間半

一二萬石に九十間小屋つめ六十三間

一三萬石に百三十五間小屋つめ九十四間半

一四萬石に百八十間小屋つめ百二十六間
一五萬石に二百二十五間小屋つめ百五十七間
一六萬石に二百七十間小屋つめ百八十九間
一七萬石に三百五十間小屋つめ二百二十間余
一八萬石に三百六十間小屋つめ二百五十間
一九萬石に四百五十間小屋つめ二百八十三間
一十萬石に四百五十間小屋つめ三百十五間
一二十萬石に九百間小屋つめ六百三十間
一三十萬石に千三百五十間小屋つめ九百四十五間
三十萬石より上の小屋割如右高割出し三十五萬石
右之小屋つめ之所を高にして又其余三割をはりに割付る此外天下之割とて御旗本之小屋割は小
替りあり

天下の小屋割

一九百四十五間を三分一にとる時は表三町十三間也後へ十二町三十間也右の間を四分一にとる時
は表二町三十六間余也右之間を四分一にとる時は表二町三十六間余也四分に割の時は後十三町
余なり
一表口九百四十五間に後へ六十間人數一萬人立並也此積を以て後へ十六たんに並也

一表口一間に歩行者二人宛馬乘一騎つゝなり一段之間二間七分宛間たあり

一八陣之間三町四十間四方一つに合八百八十間なり中之陣六十間を右之八百八十間に合て一陣之四角に一間者也角に合五間在之也總て九百四十五間是表口の門なり後へは六十間也此内に數一萬人立並なり

按するに右小量制之中此外天下の制さあるによれは御家の御定なるやされ共三十萬石云々さあれは　公儀の御定にさも疑わる今如何んさも判しかたし

旌旗

大坂冬御陣の時、慶長十九年十月一俄に御陣觸ありて新規に御陣の用意御定め番指物迄一　小野出雲守内相談の上御好を承り安藤帶刀も御尤さ申相定め則申渡し其時御好の色品今に替らすこの事冬御陣の條に既記の如しされは總して此時御制定に係るもいにや御拜領は七本及び中黒の御旗をはしめ御家中番指物等諸旗は間從來傳ふるもいあり蓋し御書物方に保管最秘密に屬し僅に他見を禁せられたり聊御由緒等の次第を略記し末に其圖を掲く

一白及び中黒御旗中黒御幕

御書付龍祖御自記(日誌)に曰く十月上旬中黒の幕幷七本の白旗を賜慶長十九年也

御譜略に曰く御幕初て殿樣駿河にて御仕立させ被成候は慶長十九年四月四日より取かゝり同七日出來仕候右四日の日より何も精進仕七日の曉魚類出申候加藤吉左衞門御幕仕立申よし此時御幕一對出來申候由

右は慶長元年三月御歸の時岡村加兵衛留守に有之由申上る但是は中黒の御幕にては有之間敷候あふひの御紋の御幕初て御仕立させ被成候時の事たるへきと御意被遊候

一又曰く三日（慶長十九年十月）神君御手自　公へ中黒御幕幷白旗七本を賜ふ（中黒の御幕の儀は子細有て加藤大隅に被仰付駿府二の丸にて急き仕立何も方のなも新しく仕立）此御旗は將軍家へ被進通り葵の丸附たる七本也幕の中黒は　公新田家の紋を續て大坂へ發向し給へと仰せありしと也此時義直公へ引兩の御幕幷頭黒に白き葵丸附たる旗五本引兩は義直卿足利家の紋を續て尾州へ歸り大坂へ發向し給へ（一本る）（その）由

按に（岡村嘉兵衛は駿河にて　神君へ來仕後　龍祖へ被召出知行二百石にて御臺所頭を勤務す御入國の節御供にて紀州へ罷越し承應元年三月病死す）

一大君言行錄及ひ祖公外記に御陣觸あつて尾州公へは頭黒に白葵の丸付たる御旗五本御纏白御紋付たる朱の大四半金の笠の御馬印二引の御幕被進　賴宣君へは黒き御紋付たる白はた七本中黒の御幕御馬職は昔柴田勝家かしるし見事に被　思召候とて金の五幣を被進七本の白旗は秀忠將軍家と御同意との御事也尾張の御母儀阿龜殿は御前へ御出右兵衛佐殿御兄にて候に色品替り候御旗を被下御弟の常陸様へは江戸の將軍様御同様の七本の御旗を被進候しとは無曲御事常陸様へ被進候程ならは御兄にも候へは右兵衛佐殿へも可被下事にて候と泣くとき御恨み申上候に　東照宮御顏色違ひ爾々の譯をも不存女の差出たる事を申候と御叱成され候云々とあり

一大御纏　（附御家中紺地四半金の丸の事　御持弓筒白しない寸尺の事）

大君言行錄に曰く大坂冬御陣前に　賴宣君大纏は朱の六幅懸の四半に白き丸なり賴宣君御物語に權現様御意には四半物折懸に紋付るは上の横手の方へ紋の上りたるか格好よし我白丸の朱の四半

も白丸事の外上へ上けて致を可書旨御差圖也出來候て淺間(せんげん)の社にて四半を張らして見たるに白丸上へ上りたるにて殊の外見事也　權現樣には數々の旗しるしを御覽成され格好を鍛錬なり家中の紺地四半金の丸も上へ上け候て附へしと御意なり其時我持弓持筒六組の白しないに朱の黒餅の紋の小はたも長七尺也是は　權現樣十八の鐵炮頭の白しないの尺を寫したる也以來寸尺を不可違と御意也御先乘の物頭或軍學者の言を聞足輕のしないの尺長過ると申候を御聞廣の御殿へ御成りの時御門番に出たるを御覽にて先乘同心のしない尺長過たりといふ者有之由あれは　權現樣十人の御鐵炮のしないの寸尺を寫したる也　權現樣御定め寸尺を長過たりとの批判は推參なりと御叱り也云々

一又曰く寛文七未年五月　龍祖御退隱の時關根又左衛門渡邊六郎左衛門御附御旗奉行被　仰付又左衛門御旗は大中黒御馬印は五色の五幣に極め申候大纏は何と成さるへきと奉伺候へは大纏は　中納言殿纏を我も可守候得は此方に入らす帶刀對馬丹波長門同前に先を可致何事も候はゝ帶刀對馬丹波長門に先はさせえし何時も乘越て一戰し手並を見せ候はん間大纏は不入と被　仰候

一金幣御小馬驗

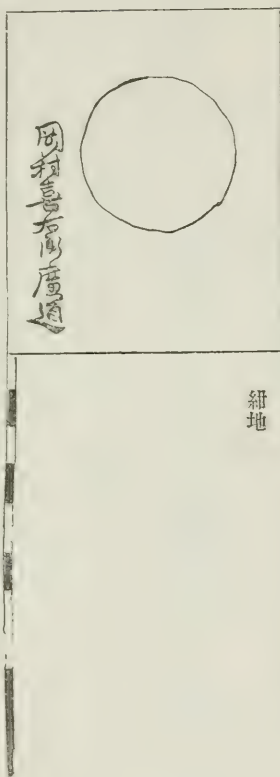
大君言行錄に曰く御馬印には昔柴田勝家かしるし見事に被　思召候とて（一本ナシ）神君樣より金の五幣を進せられ候と云々　慶長十九年大坂冬御陣の條

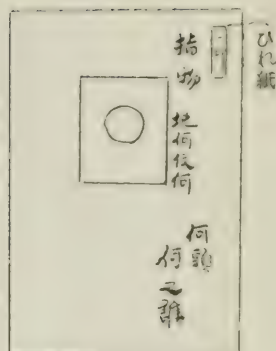
按に金幣御馬標數種今に御保存の内に朱幣の小形なるあり寛文七年　曾祖御退隱の時御旗奉行關根又左衛門何ひに御馬印は五色の五幣に極め候云々といふによれは御退隱後とか或は何等かの時に應し五色を用ひ給ひし事か今は唯朱幣のみ存し御由緒記載のものも見へす詳にしかたし且金幣の内一本は明治十年二月加藤清正侯所用大身槍片鎌槍旗日の旗と共に東京帝國博

物館へ御献納當時同館内に陳列せられあり

一御家中指物（さしもの）

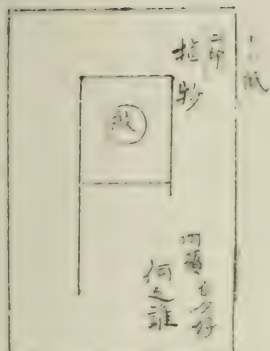
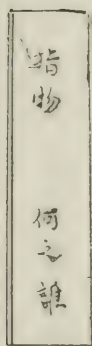
頭役以上は總して自分好み指物を伺を經て免許也御目付は（一本ナシ 頭役以上の職なれとも）役指物也諸士御目見以上一般は紺地金の丸を成規とす尤役々により形狀又は小印の別あり詳なるは圖式の如し故に平士新任轉職等の時は一七日の内に新任の役指物を御書物方頭取へ圖形寸法等を問合の上自製す地合は龍（一本門 紋）絹を用ひ菲盤縫にて丸及ひ姓名實名は金泊すり込なり

但姓名實名の書樣は總して字を連續せしむる習ひ也仮令は左の如し

一頭役及ひ同格役に就任すれは左の伺書を御書物方頭取へ提出允許を經て自製す

用紙美濃半枚に認三つ折に疊み上包をなす四半の竪横寸尺は記さす定法ある故也尤四半に限らす面々工夫の意匠自由なり然れ共天下禁制十九品等を襲用はならさる也

此處へ左の如く認
自分好又は父持傳候筋
又父相用候筋

半紙一枚を二つに折包む

上ハ包

指物
何之誰

一親幷先代用る筋有之候はゝ當代も其儘相用候筈

但し先代用る筋有之處新規自分好を用候儀其家に不得止故障無之而は不相成事

一當代初て頭役と成り先代用候筋無之候はゝ一印二印共自分好と認候事

一父持傳へと認候は父は不用唯持傳へ候筋に候事

一伺出候節一印之方相用度若差支有之候はゝ二印之方用ひ度との儀申添伺候事

一伺書延引可及時は左之書付出す

何　之　誰

私儀此般何御役被　仰付候に付早速指物繪圖差出可申之處少々穿鑿之品有之候間延引可相成候右之段御含置可被成下候以上

月

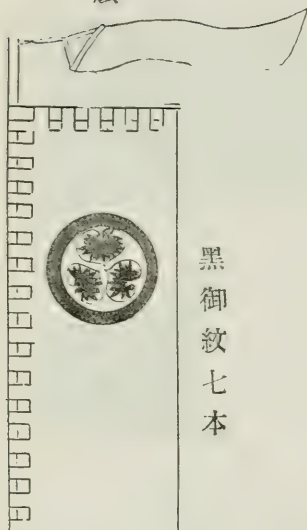
一職役居付にて格式のみ昇進之時は是迄之指物其儘用ひ度との儀を申出る

一御家中又者陣羽織

大君言行錄に曰く去る軍學者の存寄にて御家中又者の陣羽織の事を申上其者の好にて淺黃木綿の袖なし羽織出來するに殊の外見苦しく中々着用難成樣子田屋菊右衛門淡輪新兵衛芦川權太郎抔申候と有る事御耳に達し先其通りにして置へし紀州家中又者羽織はいか樣なりとて何事ぞ事ある時敵方より似せて着用忍ひなと入たる時此方には彼の羽紙無用にいたし敵の紛れ者ゑり出し一つの術の本ともなる事總て大軍に對の羽織を着せぬそやと立花左近眞田伊豆物語也と御意なり此後また羽織次第に無用になりしとなり

旌旗之圖

總して軍事に關するものは御秘事と稱し一切御書物方の管司に係る故に同司の原簿固より窺ふへからす且維新の變散逸傳はらすといへり歷世中諸職廢置合併の事になきに非されは或は新定潤色の事もありしや沿革の如何知るに由なしと雖も彼の大坂冬御陣の時御制定以降二百五十余年間一回たも軍旅の事なく上下の士元帥の大旆は那樣なるや實際を知らす個人の旌旗家に備ふるも唯正月具足開き暑中風入れ等に開展する迄に止り全くは儀式的具の觀を免れすして高閣に束ね置きし有さまなりし此大平無事に當り特に祖宗の遺制を變更すへき必用を認むへきに非らさるは自から知り得へき也されは（圖する處のもの皆該冬御陣新定と異同なきを信すへし（一本大体に於ては近世に至る迄敢て異同なかりしを知るへし））司局の原簿散逸さ雖も幸ひに私寫の數本存するあり（蓋し御書物方奉職の者窃に私寫秘藏せしものか）（一本ノリ此圖是に憑て製す）此數本或は天明間の職名に該當するものあり或は寛政四五年職名多數變更後に該當するあり又は私寫轉傳の爲にや甲乙精粗を異にし是彼詳略一ならすして頗る適從を認めかたき感なきに非す仍て寛政四五年後と認むる分に基き數本を對校以て補闕修正を加ふ冀くは漸全きに庶幾らんか

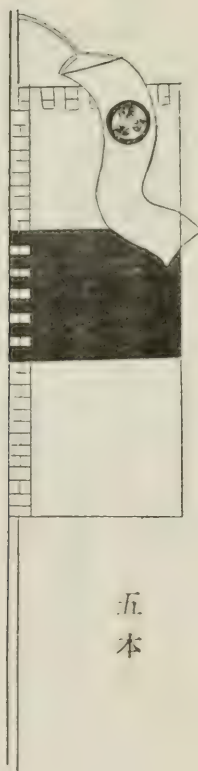
因に記す歷世御嫡子御庶子御生誕御七歲迄は每歲端午に御幟（のほり）祝ひの御儀式あり此時御廣敷御玄關前に白御紋及ひ中黒の御幟を建設せられ壯觀を極め（弓鉄炮槍長刀吹流し甲人形菖蒲刀等諸武具數多陳列せられ）諸士の拜觀を免さる信亦　当千代公（穆徳公御事）辰次郎君（憲章公御子）の御時拜觀を得たり御幟は七本の御旗中黒の御旗に象りしものと雖も最巨大御幟竿の竹は尺以上のものにて御抱鳶數十名にて上け下し（をなす程也武家一般男子ある端午節句の俗禮に準せられしは幕府も亦同しかりし也）（一本全く軍用とは殊別のものなりし）

旌旗御定

大御纒

大四半七尺
四方
朱地白餅

御旗

黒御紋七本

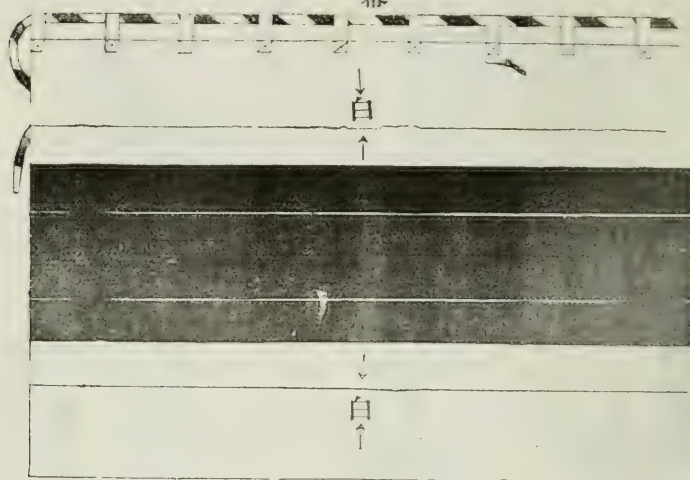
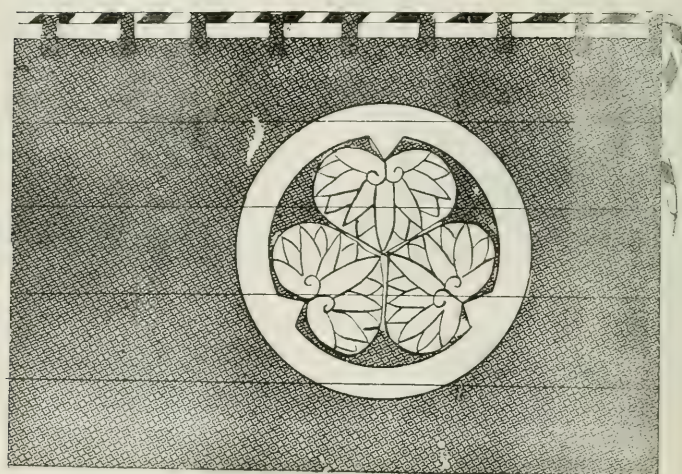
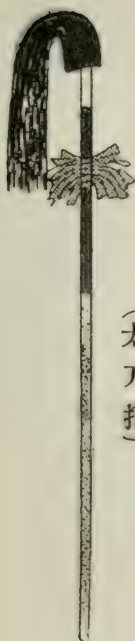
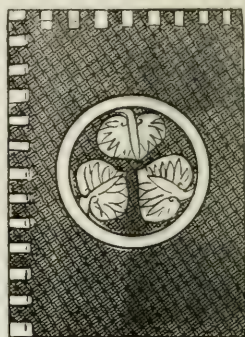
白地黒葵出し
白きまねき

御旗
中黒

五本

御小馬印
金之幣

一に（竿[一本柄]）茶色

中黒御幕

御船幕
赤地白葵

御長柄白鳥毛杉なり

御船印
御召船幷
御召替印

赤地白葵

御召替

御召小早
御供關

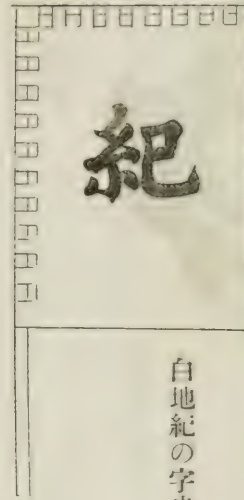
赤地白

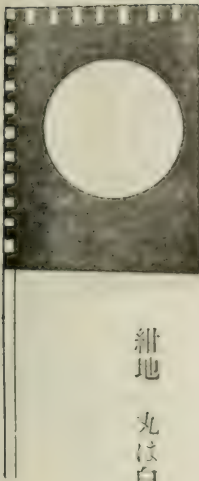
御船印

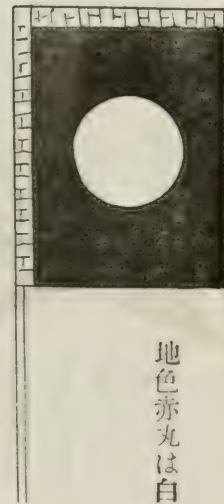
赤地

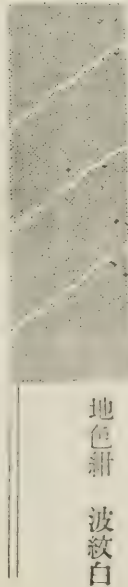
同断赤地
吹貫白餅
角取紙
數多

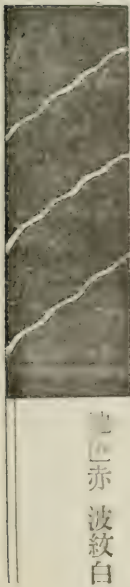
御供關船印

紀

白地紀の字赤

御小印

紺地　丸は白

御小印

地色赤丸は白

同

地色紺　波紋白

同

地色赤　波紋白

同

地色紺　丸は白

同

地色赤　丸は白

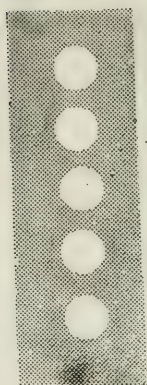
小關弁惣
荷船印

地色紺
字は白

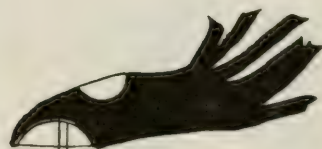
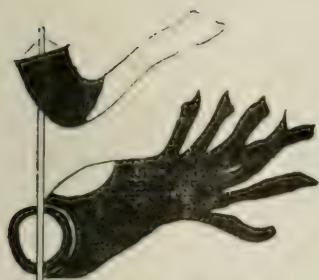
役指物

（御指物）金禿麾
盃麾より下に付

御目付　御使番

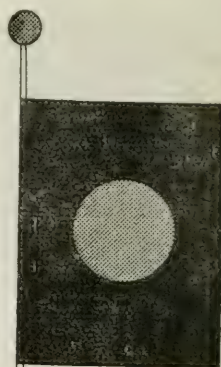
御腰幌

白地金の地

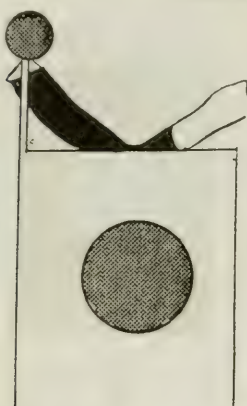
紺地吹貫
金の丸元赤
末白のまねき

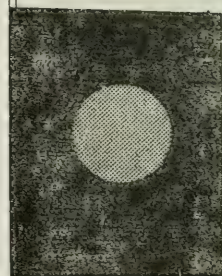
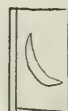
御供番組頭

御供番紺地吹貫
金の丸組々の印
吹貫より下に付る
名書きあり

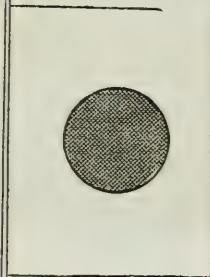
御小姓組紺地彎口
金の丸名書あり

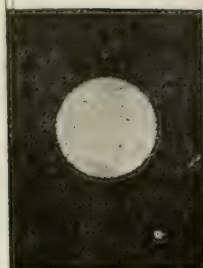
紺地彎口金の丸

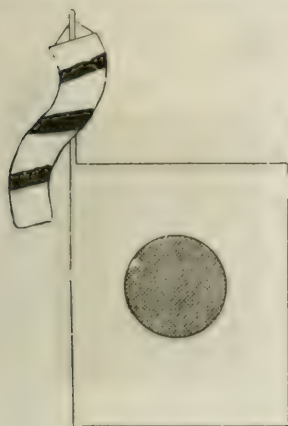
棹本に御老中一等印付る

寄合紺地四半金の丸出し金の天目名書あり

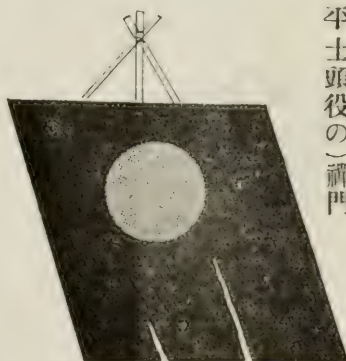
寄合組頭

淺黄地金の丸出し金の天目元赤末白のまねき
一本白地金の丸に作る

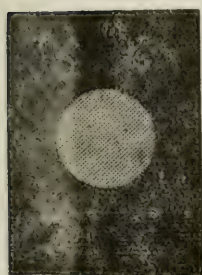
横須賀大御番

紺地金の丸四半名書有出し白き小颯籟銀の半月棹本に組頭の印付

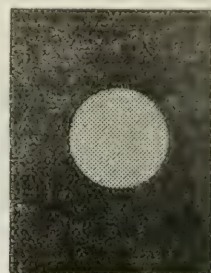
同組頭

淺黄地金の丸四半出し白の小颯籟銀の半月組頭の印棹本の方赤

駿河大御番

紺地金の丸四半
出し不定掉本に
組頭の印付る

同組頭

淺黄地金の丸
四半出し白赤
段々のまねき

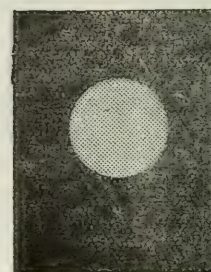
一本御家中
(平士頭役の)禪門

頭役禪門は頭役自
分指物出し小さき
紺地金の丸段簾
名書あり

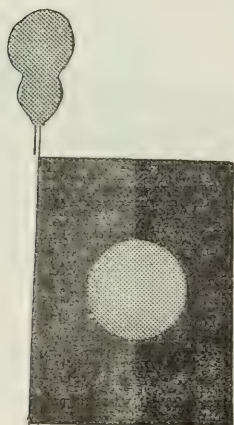
一本御勘定吟味役
(添奉行)御普請奉行
御勘定頭御作事奉行

(出し其時の大
奉行印付る)
紺地四半金の丸
名書あり(白吹
貫輪六寸但御作
事奉行は黒吹貫)

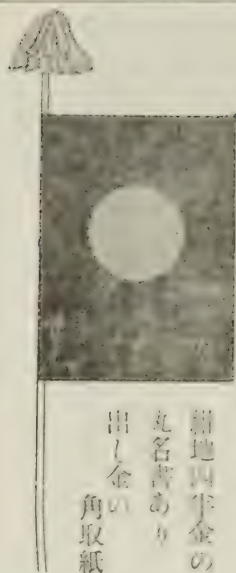
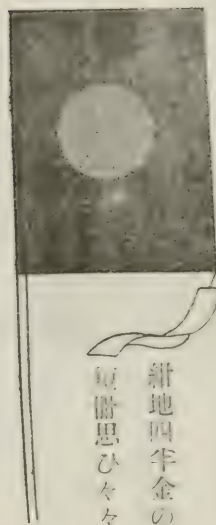
御腰物奉行
御具足奉行

つま先房金
紺地四半金の丸
名書あり

大納戸（一本アリ元方御金）奉行
一本拂方御金
（大金）奉行

つま先房銀
紺地四半金の丸
名書あり

御書物奉行
御膳奉行

つま先房白
紺地四半金の丸
名書あり

御同朋

紺地四半金の丸
名書あり
一本アリ
（出し金の瓢簞）

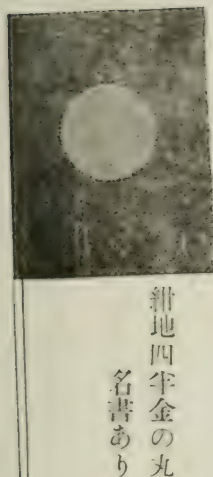
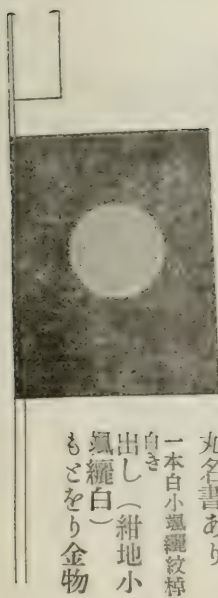
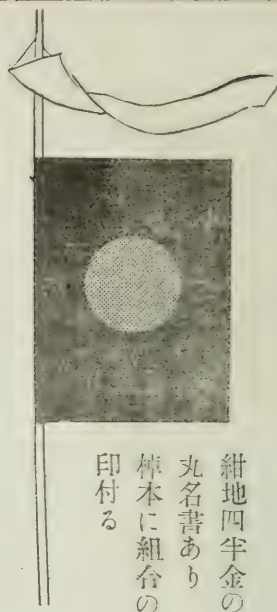
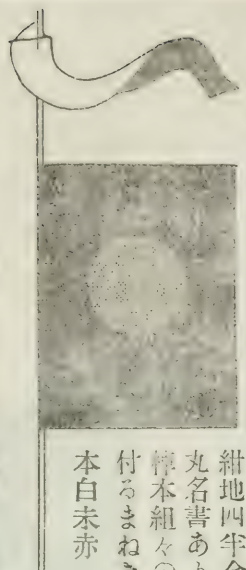
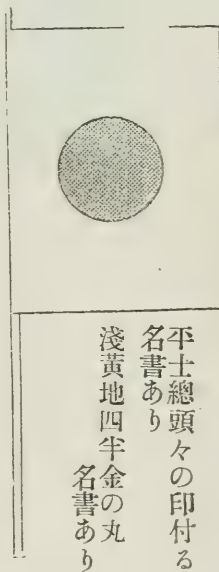
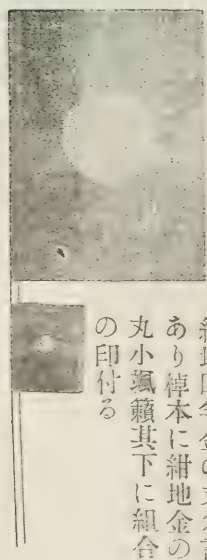
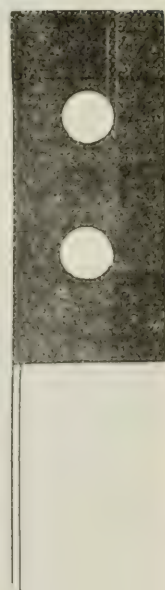
一本御小人頭
（御中間頭）

紺地四半金の丸名書あり
出し金の角取紙

一本御馬預
（御馬役）

紺地四半金の丸
名書あり

御祐筆

紺地四半金の丸
短冊思ひ々々

御鷹匠醫者儒者
一本御數寄屋頭
外科（茶道）

紺地四半金の
丸名書あり
一本白小颯纙紋棹
白き
出し（紺地小
颯纙白）
もさをり金物

新御番
紺地四半金の
丸名書あり
棹本に組合の
印付る
同組頭
紺地四半金の
丸名書あり
棹本組々の印
付るまねき
本白末赤
（詰番は出し無之指物は右同斷）

御家中役長柄
かす毛杉なり　太刀打黒ぬり
御家中騎馬
御定なし出し主人の印付け
平士總頭々の印付る
名書あり
淺黃地四半金の丸
名書あり
御書院番
紺地四半金の丸名書
あり棹本に紺地金の
丸小颯簱其下に組合
の印付る

御射手役
紺地金の丸颯簱
名書あり

番頭以下頭役の嫡子
颯簱名書あり
白地金の丸

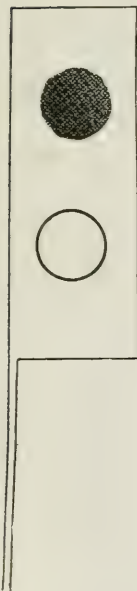
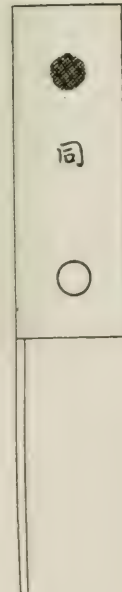
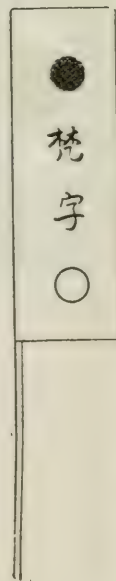
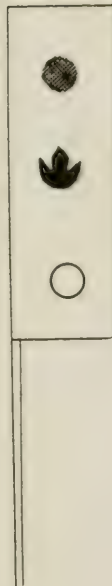
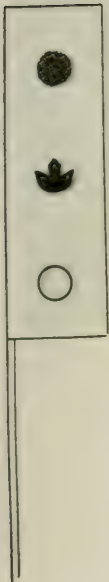
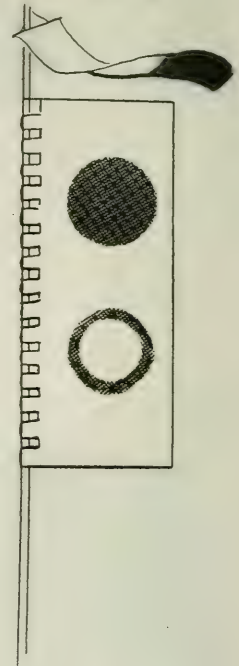
（御小納戸奉行）
（此指物一本に御小納戸奉行とす按するに天明間及ひ寛政以後御役順に該職名なし又一本御小納戸の指物とするあり御小納戸は次記の如く御小姓同斷にて赤房あり指物廢止に至る迄も然りとす何等の誤謬なるや更に糾せされとも暫く原本のまゝを存す）

御膳番（御召）御具足奉行
奥之番（中奥御番御近習
御書物奉行）
紺地金の丸名書あり
地練絹幅しなゐ竿長曲尺
五尺

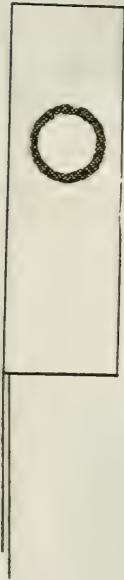
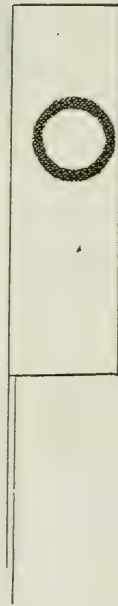
紫皮

一本御小姓
（奥御小姓表御小姓）
一本シナヒ赤地名書あり茜金の
櫛形名書金
但名書は染抜にても不苦
（地同しなひ赤地名書あ
り黄金の櫛形）
（近時は御小納戸御膳番奥之番
同斷但房色にて區別御膳番房白）

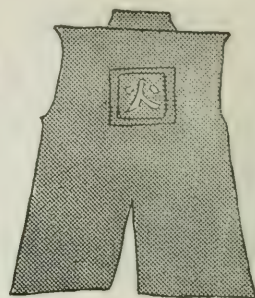
（長三尺七寸前後）

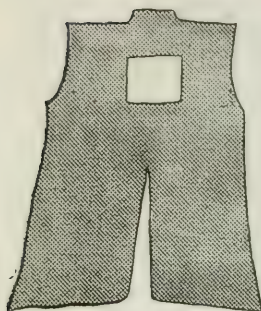
御持弓御持筒組
白地上の丸赤下の丸紋所

根來同心
淺黃二本颯纈上朱の餅
下黑く頭々の紋中に
不動梵字

御老中組御留守居組
一本町奉行組物頭組御留守居組
寺社奉行組（惣組同心）
地淺黃二本颯纈上の丸朱下
の丸黑く頭々の紋

山家同心
淺黃二本颯纈上の丸朱下
黑頭の紋所中に山の字

（御家中役旗
地淺黃上朱の餅下
の輪の内に家々の
紋付る）

御家中役足輕二本共（家々の紋付る 地淺黃にしない）
一本淺黃地二本塩額朱輪の内家々の紋

小十人役羽織　金の笠（一本ナシ）
猩々緋かすためん(か)袖なし羽織

御歩行
茜の組

同組與頭　上同斷
（一本襟　白か萌黄）（白らしや襟かはり）

（組但與頭）（一本同組頭）
（上に同斷萠黄か淺黄か襟かはり）（一本上に同斷襟白か萌黄）

總同心　地こくらこい淺黄襟あさき
長三尺紋の大さ一尺二寸

（紋内總地と同し）

御小道具頭　　御挾箱頭
御犬牽頭　　　御駕籠者頭
御馬奴頭
地こくら淺黄よりこく襟同斷紋大さ
五寸四方
白色紙也

（一本に石たゝみに
小紋付るもあり）

一本伊賀
（御藥込）　地同染樣上に同し
後兩脇に山道を付る紋大さ上に同し

根來同心（一本地淺黄襟同）（地同）長さ三尺
紋如圖

一本に如此

御持弓（同心）[一本アリ]　御持筒（同心）[一本アリ]

一本地小倉長三尺こい淺黄ゑり淺黄紋差渡し一尺二寸

（地長同地こい淺黄襟淺黄）

一本如此

（御道具小頭）[一本御小道具之者]

地（同）[一本上下]長三尺二寸　中淺黄ゑり同白（半ゑり）[一本ナシ]

紋の内一入こく

御小道具者

一本濃淺黄襟淺黄長三尺

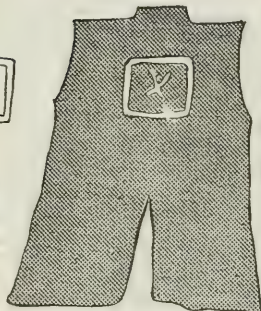
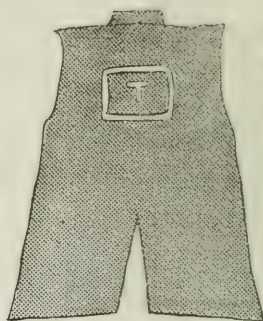
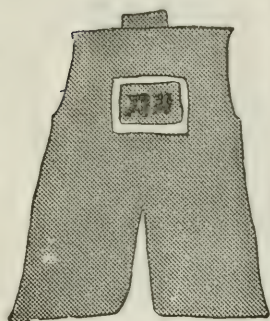
地上毛綿（長同但同地白き半襟）

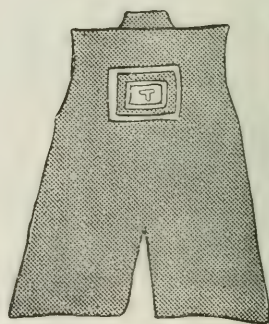
紋の内一入こく

一本御小人目付　御小人押

（押之者）

地同中淺黄一入こく惣地立たてわく

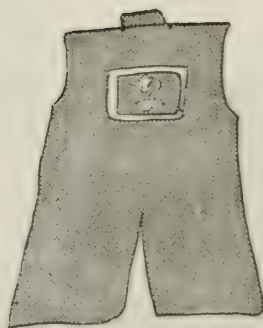
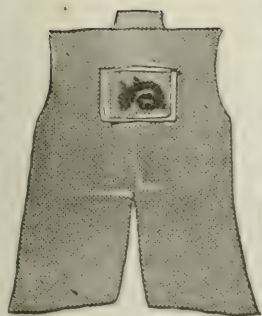
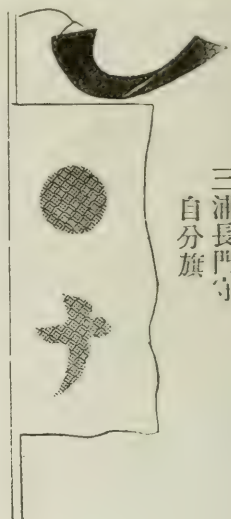
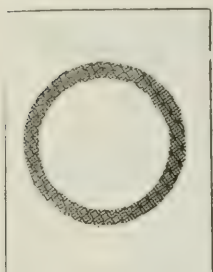
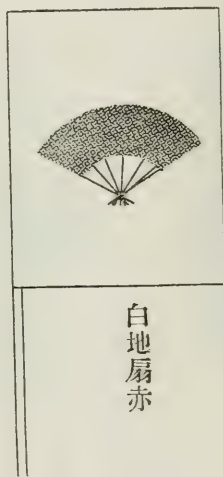
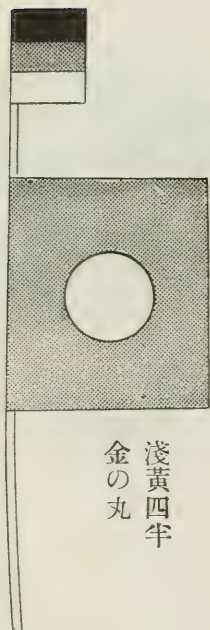
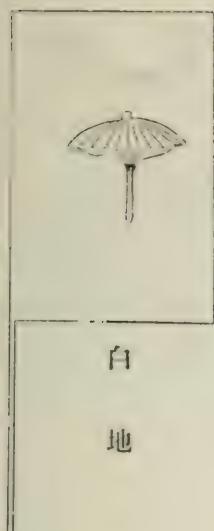
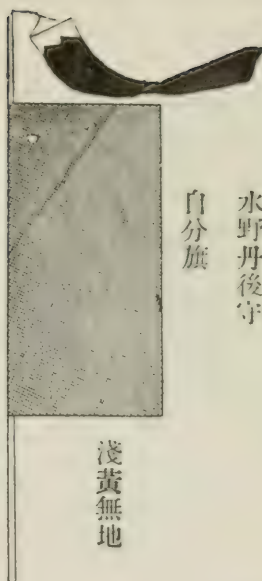
小紋付立作大さ常押はをりの如く

御小人御中間
地上毛綿色中淺黄ゑり同
紋の内一入こく長三尺

一本御中間
(御扶持人足)
地中毛綿長三尺色淺黄ゑり同紋大さ
一尺二寸

文字色黒染色一入うすし

一本御長柄の者とあり
(御駕籠者　御馬奴)
地同長同色淺黄襟同紋の内一入こく

山家同心
地上毛綿長三尺色こい淺黄
ゑり(黄)紋の下巾一寸五分の横山道付る

後二布に付け前に不廻萬如本
(山家同心由緒舊記に地合はんかいとあり)

一本御口之者
（御長柄の者）
地中毛綿長三尺色中淺黄ゑり同
紋の内一人こく

黒 紙
地同 長同 色淺黄ゑり同
紋一尺二寸紋の内紺

御持長柄の者 御旗指
地同 長同 色同 ゑり同（紋内如本）

一本御中間
御貸（人足）
地同長二尺三寸色淺黄ゑり同
紋（一本字紺大さ 大字紺差渡）二尺二寸

（五家御家老）
三浦長門守
自分旗
大馬印
白地輪赤
小馬印
金
同
自分差物
白地扇赤
家中騎馬
浅黄四半
金の丸

水野丹後守

自分旗

淺黄無地

大馬印

白地

小馬印

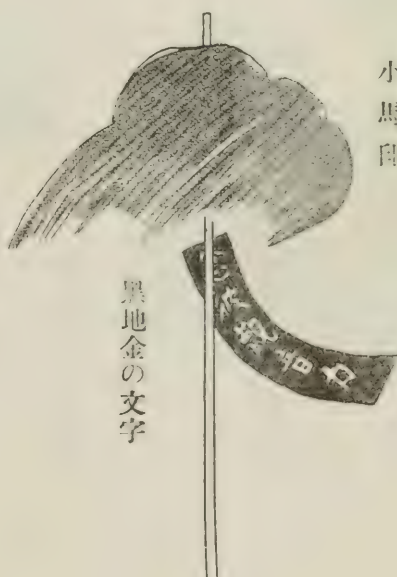
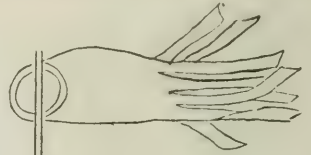
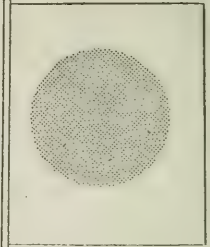
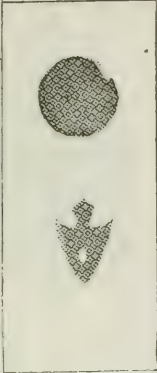
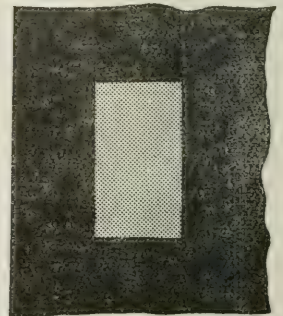
黒地金の文字

自分差物

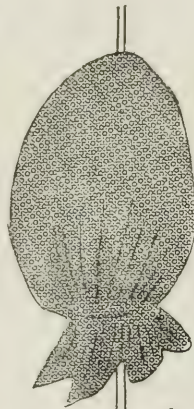
淺黄地紋黒

家中騎馬

淺黄金の丸

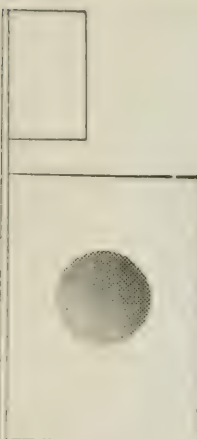
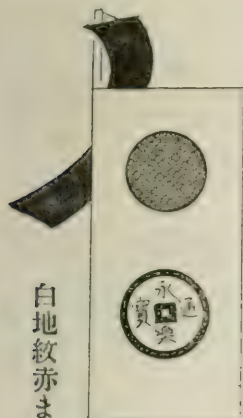
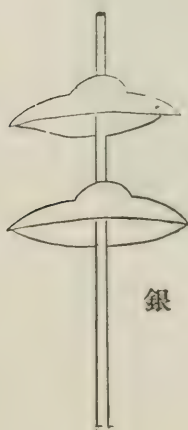
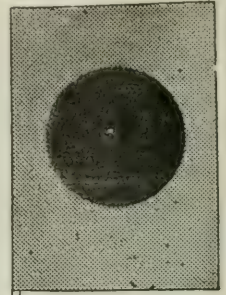
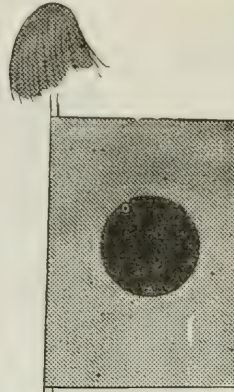
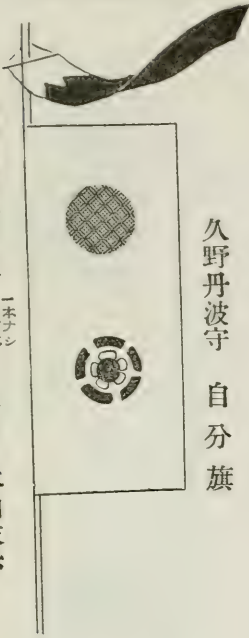
安藤飛騨守
自分旗

地淺黄紋赤
赤まねき赤

大一本馬印（纒）

地赤中金

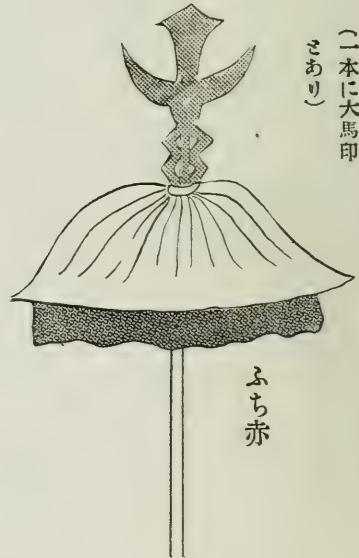
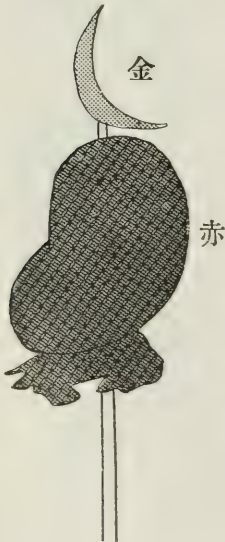
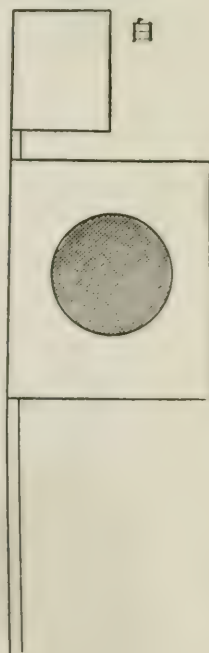
小馬印

赤母衣

自分差物

地赤紋金

（家中騎馬）
淺黄母衣金のほこ
一本田邊
（横須賀）與力
地淺黄金の丸
水野大炊頭
自分旗
白地紋赤まねき赤
大馬印
水
小馬印
銀
差物

新宮與力
（淺黄金の丸）
家中騎馬
（淺黄金の丸）
久野丹波守　自分旗
淺黄地上赤丸下（一本ナシ 放）まねき　本白末赤
小馬印
（一本に大馬印さあり）
ふち赤
自分差物
金
赤
（赤母衣）

家中騎馬

淺黄四半金の丸

又一圖

（五家御家老の分は前圖と重復と雖も頗る異同あり且藪九郎太郎等數家の分あるを以て掲載す元來御書物方頭取の秘密に屬し他見を禁したれは内檢密寫の間に誤謬を生したるか將た代々の意向により特に變更する所ありしか詳ならず暫らく參考に供ふ）

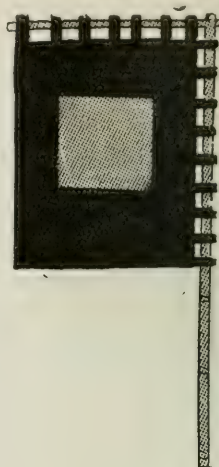
右一本に左の如し

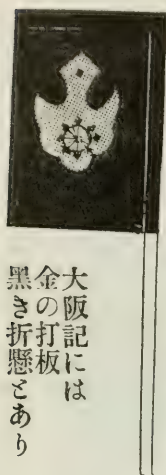
一に左の別卷を添たるあり五家御家老の分は重複の惑あれとも色彩等不同あれは參照に掲く蓋し時により少しく變更する處ありしか御家老及ひ大番頭等の門閥家筋より不尠而して藪九郎太郎安藤忠兵衛山高庄右衛門松平九郎左衛門の四家のみ掲けたるは其故不詳且各家の通稱官祿等に因て考察を下すに此圖式恐らく元祿寶永間のものを傳寫したるならん

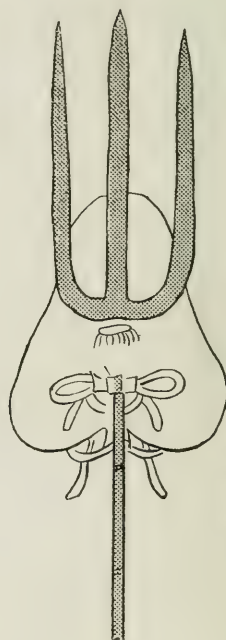
安藤帶刀　役旗淺黄上に朱の餅下に黑にて打板

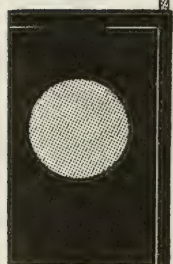
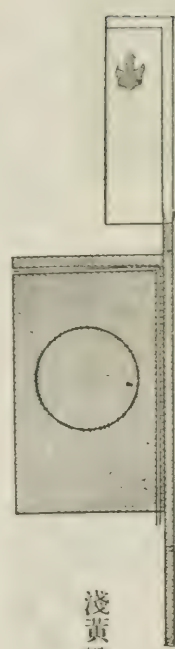
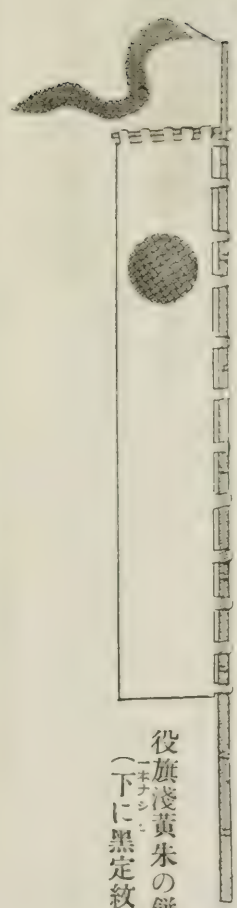
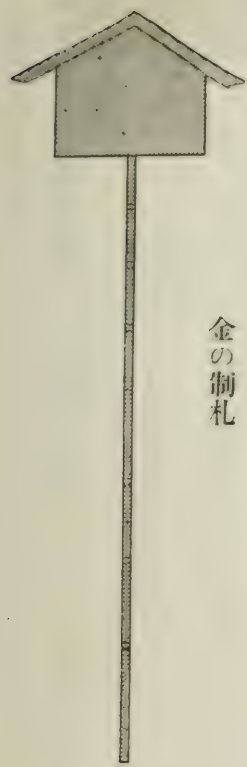
打板黑にて
りんぼう白

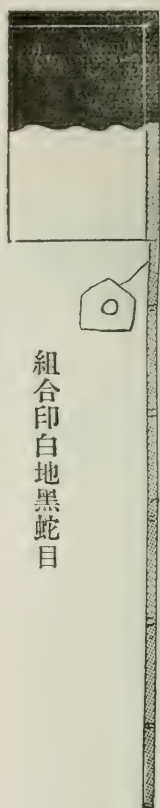
旗數五本

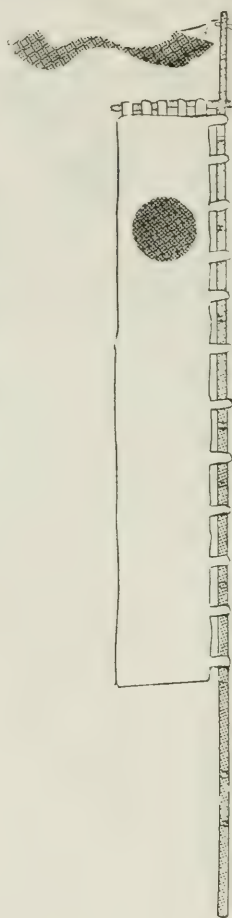
大馬印　赤地四半に金の角

小馬印　赤地母衣張

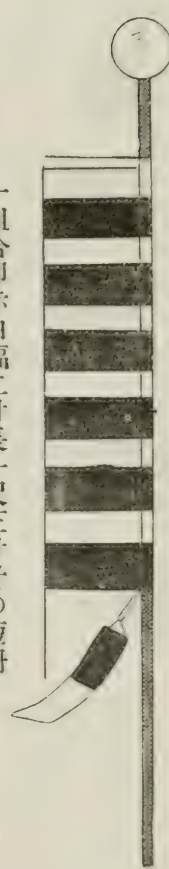
差物　赤地幟半に金にて打板

大阪記には
金の打板
黒き折懸さあり

母衣　白ちゝらに出し金にて三本天衝緒も白

目付役の者出し小四半に白赤石たゝみ

淺黄
幟半金の丸

家中の出し小颯纒金の打板
淺黄幟半
藪九郎太郎
役旗淺黄朱の餅
（下に黒定紋）
馬印
金の制札

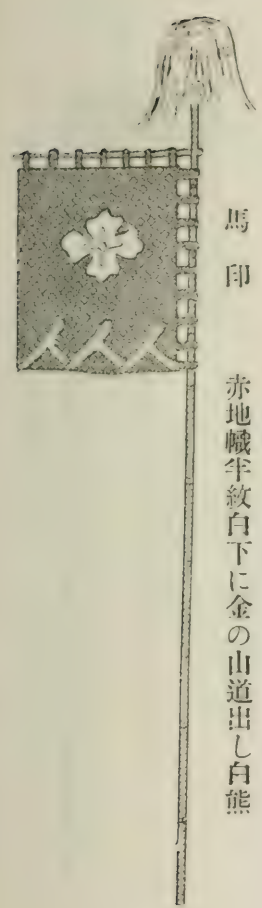
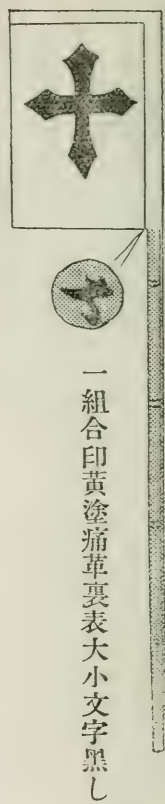
自分差物　幟半波頭の切留

組合印白地黒蛇目

安藤忠兵衛　役旗地淺黃朱の餅（下に黑定紋）

馬印　赤白段々上出し猩々緋のだんご

自分差物　白黒段々の颯（纜）〔一本纈〕

一組合印赤白幅二寸長一尺三寸計の短冊

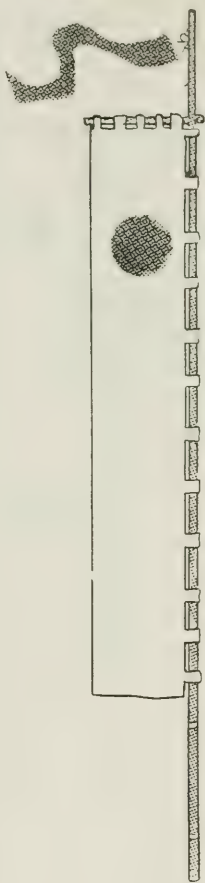
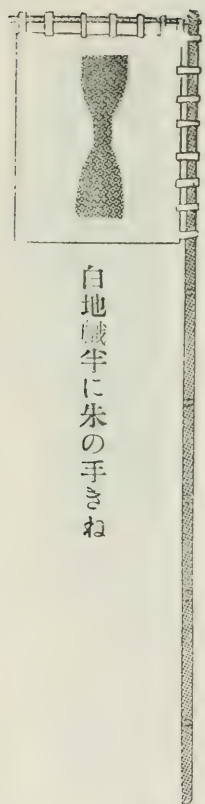
山高庄右衛門

役旗地浅黄朱の餅（下に黒定紋）〔一本ナシ〕

馬印　赤地幟半紋白下に金の山道出し白熊

自分差物　白幟半黒十文字

一組合印黄塗痛革裏表大小文字黒し

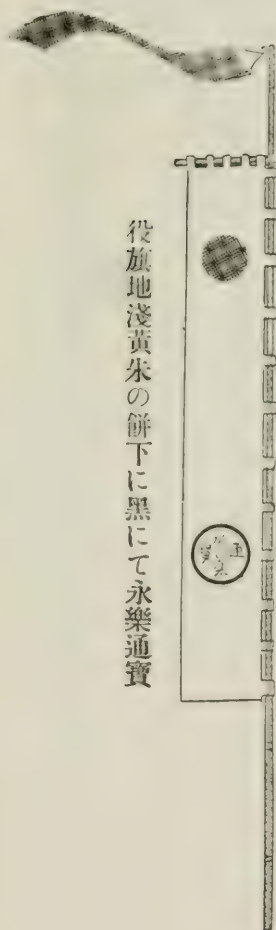
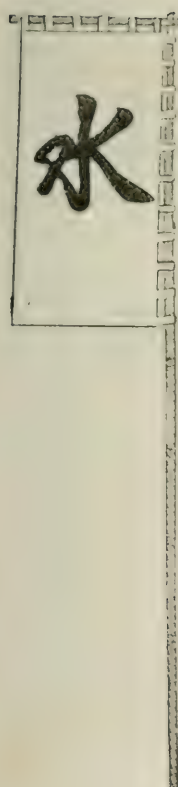
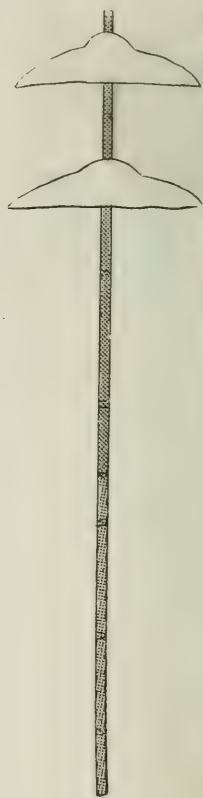
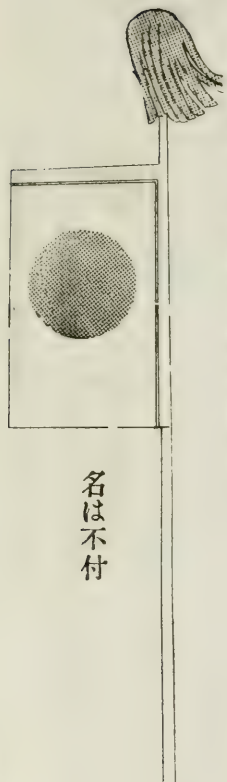
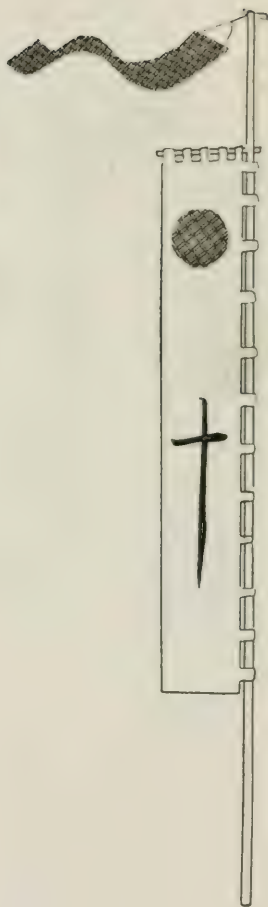
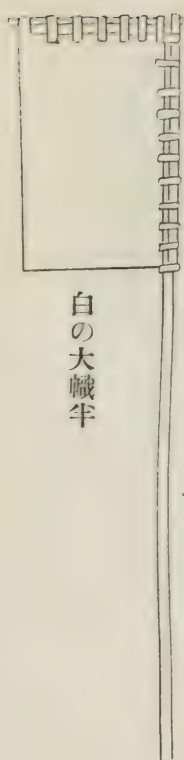
松平九郎左衛門　役旗浅黄朱の餅（下に黒定紋）（一本ナシ）

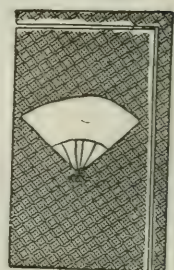
馬印

白地幟半に朱の手きね

自分差物　紺地颯纈に金の手きね

一組合印金の瓢箪

水野淡路守
三浦水野兩家昔今替る由

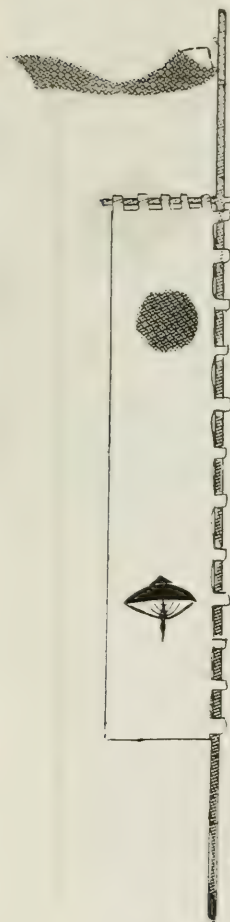
役旗地淺黃朱の餅下に黑にて永樂通寶

大馬印　白地四半に黑にて水

小馬印　銀の二蓋笠
自分差物　白旄
家中差物　浅黄金の丸出し朱のさい
名は不付

三浦遠江守
役旗地淺黃に朱の餅下に朱の十の字
大馬印
白の大幟羊
小馬印
金の挑灯

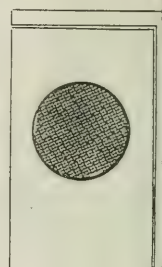
自分指物　赤地の四半に白の開き扇

家中差物　淺黄金の丸出し白赤段々小四半

（名は不付）

水野平右衛門　役旗淺黄朱の餅下に黒開き笠

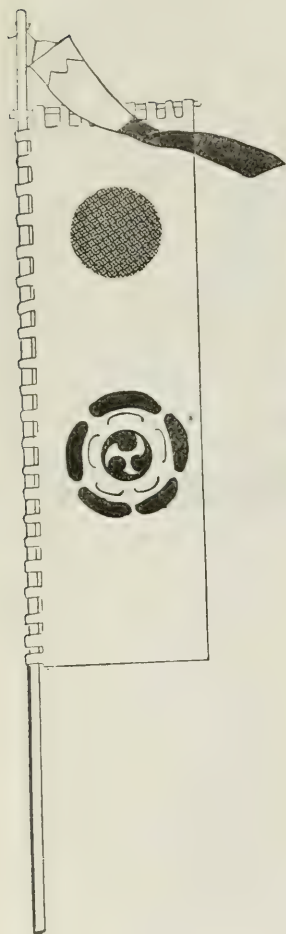
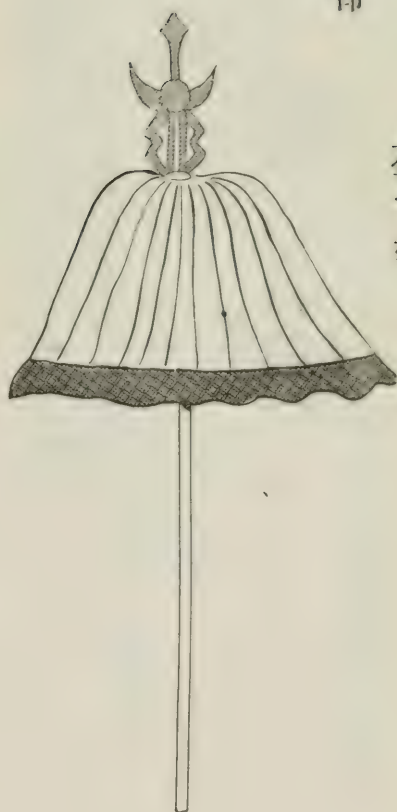
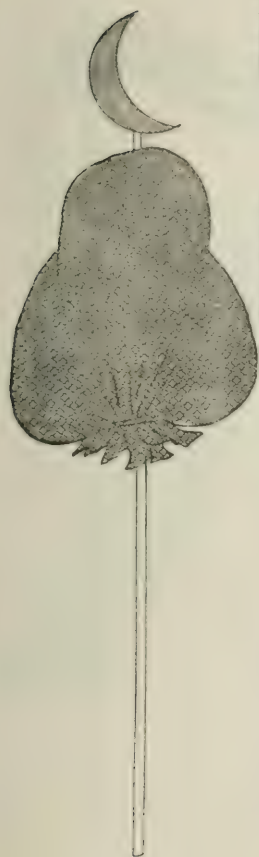
大馬印　白地幟竿に黒き開き笠

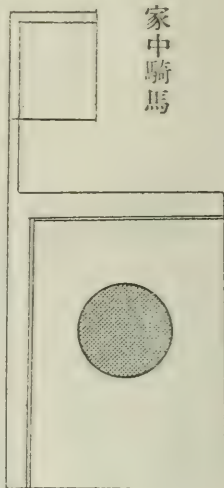
自分差物　淺黄の颯纏に黒の開き笠下に永樂錢

小馬印　黒き麾に金の經文出し朱のさい

家中指物淺黃金の丸出し赤き吹貫

名は不付

久野和泉守　自分旗

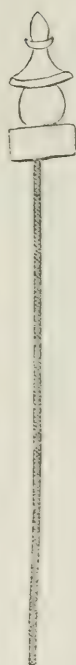
淺黃地上赤丸下紋

まねき本白末赤

小馬印
上金ふち赤
自分指物
母衣赤月輪金

家中騎馬

淺黃四半金の丸出し白

—左の圖は本藩に不限天下禁制の背旗にて由緒ある家の外用ゆる能はず（藪九郎太郎馬印金札の如し）頭役諸士自分指物何出の時參照の爲め御書物方頭取局に設置ありしならん—

十九色禁制之指物　（寛文軍令に記載のもの）〔一本ナシ〕

駒金

五輪白

池田三左衞門後見田宮次郎左衞門差之次郎左衞門さしたるは金の五輪下にからのかしら付在之由五輪は作り者也後入道して降円と改

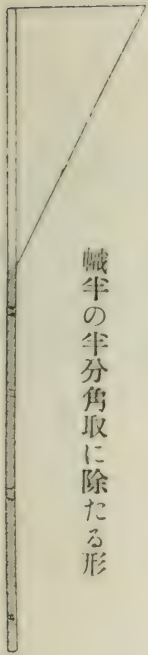
伊呂波金地白

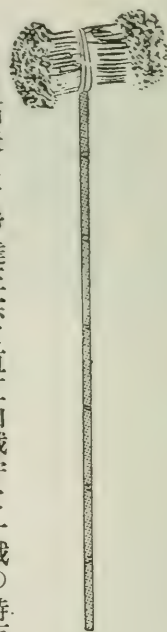
細蒲乱

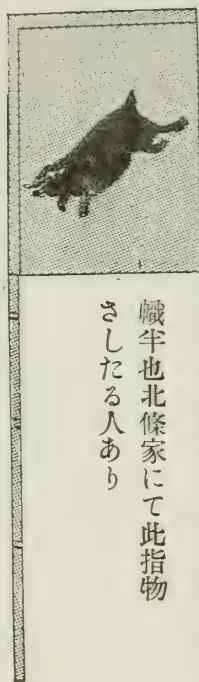
藁一把程むすびたる儀也

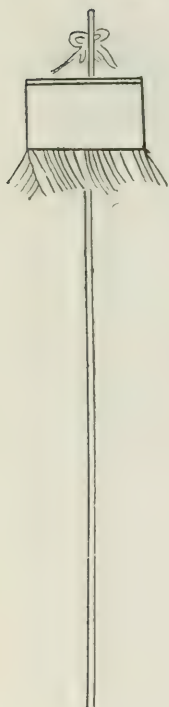
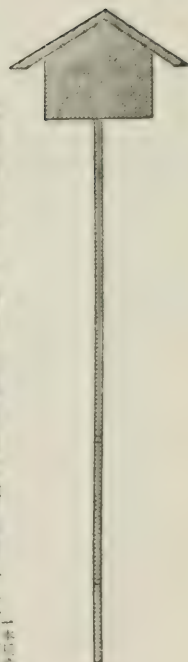
鐘金

大坂若江表にて合戰の時片倉小十郎金の鐘の指物也

杖突白

幟半の半分角取に除たる形

酒林

白石表にて伊達正宗と直江山城守と一戰の時西法院と云ふ
法師武者酒林の指物をさす此（西法院は朱かいの鎗）赦免之士也
一本法師武者は皆朱の鑓

猪　黄の四半に猪黒

幟半也北條家にて此指物
さしたる人あり

打出し白

制札金

大坂若江表にて伊井兵部鉄炮大將長澤十(左衛門)(一本ニ無)と云士金の制札指物さす紀州にて横須賀番頭藪九郎太郎馬印也

根巻

女のかもしなり

糸立

むしろの様なる者也いとたてと申て立は麻糸横は藁にてうつかろきもの也

手桶白地に金　大坂にて杉原常陸介小纒也

手桶の作りもの也又は四半に紋にして付る

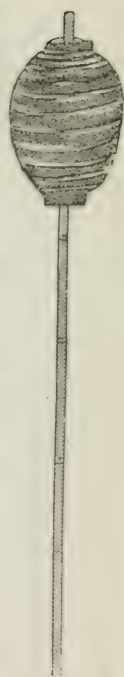
關ケ原御陣之時渡邊忠左衛門金の手桶の指物をさす又是は尾州渡邊半藏さしものの由

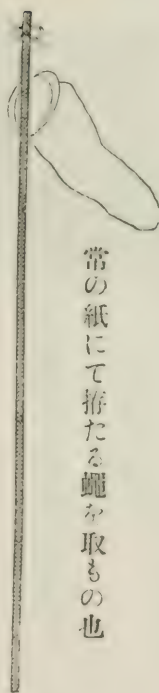
波頭
金色に波白

四半紋又は作り物立波也

鳥居白に朱

四半の紋也

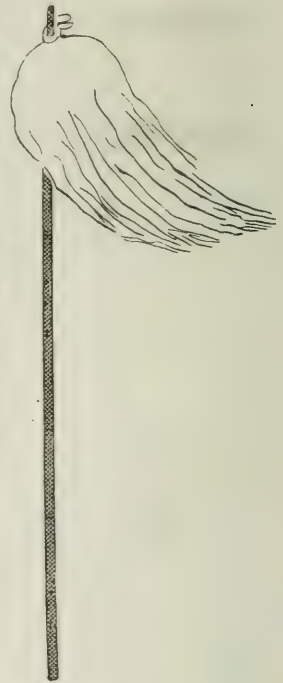
挑灯

甲斐信玄家の士さす一ツより段々七ツ迄さす由之小馬印の始也
大坂道明寺合戰の時秀賴方古澤十右衛門と云士金の三ツ挑灯を指たる由

蠅取白

常の紙にて拵たる蠅を取もの也

關ヶ原御陣の節伊井兵部馬印金の蠅取又大坂にては眞田左衛門馬印也

俵

則一俵タワラ也竿に付る由

唐の頭白

家康公御所持の由獅子の頭をはきたる者の由

歌に

家康にすぎたる者が二つある

からのかしらと本田平八

と讀たるからの頭は右御所持の頭也の稀なるもの也

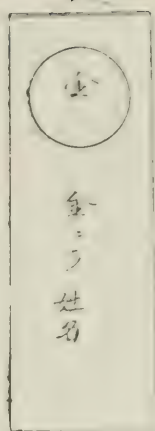
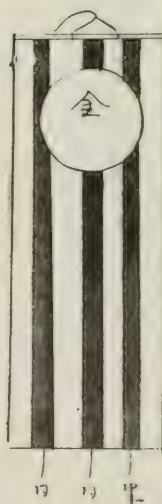
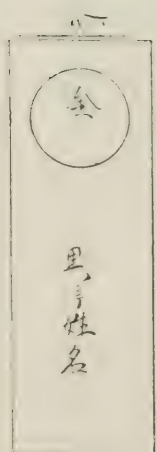
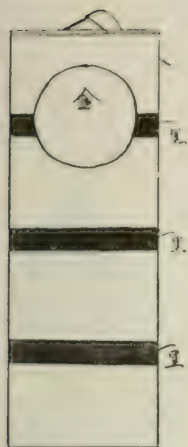
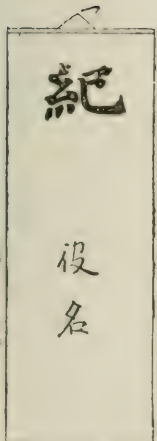
今世間にて云は白熊をからのかしらと云人あり

（以下指物廢止の事、一本には旌旗の圖の前にあり）

指物を廢止袖印を用ゆ

慶應二寅年六月長州再征御總督して藝州廣嶋へ御出陣數次戰爭の實驗互に炮戰のみにて刀鎗用をなさす旌旗は却て敵の目標となり最も無用の長物に屬し了る依て大に兵制を改革上下悉く銃隊編成せられたり於是同年九月廿六日を以左の通發令あり

向後頭役以上以下指物相止御家中一統袖印相用候筈に付別紙之通可被相心得事　但自分出來之筈

別紙　何れも白絹地　長一尺巾四寸五分　金丸指渡三寸

右袖印と稱すれ共肩に結ひ付たる也當時諸藩に在ても悉く背旗を廢し袖印を用ゆる事一般となれり戊辰征東官軍と稱するは金欄の小裂を肩に結ひ居たり

一慶應三卯年正月再ひ左の之通被　仰出
向後頭役以上（一本ナシ以下）指物相止御家中袖印相用候筈相成候付右頭役以上袖印之儀年寄衆にても差別無之事
右袖印へ姓名認振之儀は姓名實名認候事
　　卯　正　月

有德公御軍備

家中武具馬具兼て嗜雖有之數年に相成用之程無心元候間此度改可申付候左之通出銅取立二十ヶ年貸付候て具足等銘々應寄量おさし出來候はヽ上にて預り土藏へ入置武具奉行へ預置可申候はヽ末々迄安心之事に候依て割合左之通出銅可申候尤不足之所は上より相出可申候
一七十石より九十石迄　　金三步
一百石より九百石迄は百石中り　　金壹兩
一千石より　　金拾兩
一千石以上は銘々手前にて用意可然候乍去銘々支度出來候はヽ書付を以一度披見申度候後々の儀爲安心也

此度武具馬具致出來候はゝ總家中人數二三男迄改置可申候尤七十石已下へは上より具足相渡可申候下々は勿論の事に候

右の如くにより武具馬具の奉行下役人迄增員を被　仰出たり

按に　嘉永七寅年七月江戸御家中具足所持なき面々祿高に不拘一ヶ年金三歩つゝ除金取計右を以年々具足十領つゝ新調毎春鬮引を以下付すへしとの布達あつて二百三十一人へ年々殿中に於て鬮引を施行ありたり此遺法によりしものか

一出陣の節同勢之者へ不殘酒爲給相祝可出事第一也金色銚子も間に不合故樽を持出し上戸には食椀にて一つゝ中戸には汁椀にて一つゝ下戸も少しつゝ爲給可申候酒は血氣を同し勢氣を增験氣を丈夫にしておくれを不取也

一子孫に至り萬一亂世にも相成候はゝ領内の力者を撰み何百人も召抱可申候本陣の側に劔術の者十人鑓十人弓五人鉄炮十人可差置也右へ力者五十人或は六尺七尺の樫の棒銘々爲持可申候萬一敵より夜中忍ひ押懸候節急に追拂候には寄付者有間敷也出陣の節右人數不離本陣可致守護候

一軍用に梅干二斗つゝ毎年圍置可申候萬一亂世等之節出陣之砌一人に付一粒つゝ爲持可申候咽の乾を留る事妙也火事場尚以宜敷也數年に成候はゝ古きは給候て新きを取替置可然也必以無失念樣に向々へ申付爲拵置可申候

一田にし二斗つゝ毎年爲取鹽漬にして能く干し是も年々圍置可申候陣中にて汁菜に致し候には一握三人分に成申由殊に給候日は飢不申由なり

一大小一通つゝ毎年調爲拵圍置可申候寸尺左之通刀長さ二尺一寸より三尺五寸迄脇指右に准し拵は

赤銅陣拵たるへし右代金大小にて拾兩つゝにて出來候樣可申付右金子納戸より差出可申候九寸五分是又調置可申候是は拵は入不申事に候數代共調候には及申間敷候家中銘々所持有之事故不足の者へは萬一之節寄量相應之大小遣候はゝ適手柄も可有事也自分勤中計も調候はゝ可然事也末々主人たるもの心付次第の事に候

一金子五百兩つゝ軍用金にいたし家老用人相封印にて土藏へ納置可申候

陣矢四百本つゝ每年可申付候

鉄炮玉大筒より小筒迄千つゝ

煙硝二斗つゝ合置可申候

右之通自分勤中每年申付圍置可申候子孫に至り申付候儀は勝手次第自分覺悟に申付候間跡を繼申付候方有之候はゝ尙大慶に存候何事も軍用貯に圍置事に候間不斷の用ひ決て有間敷事也

一合戰は大勢小勢に不寄と言事軍談物にも間々見へたりいかにとなれは政事の善惡に依ての事と知へし兼て主人政事能き時は小勢にても士卒一命を不盜一心決定して主人の馬前にて働を見參に入れんと向ふ時は不勝と云事有間敷也是を一騎當千の兵とも可言也大勢にても其時の主人政事不宜時は銘々身帶役と計り心得無據出る迄にて兎や角當日をすり暮す事也依て平日は兎も角も萬一亂世にも相成候はゝ其時取騷くへき事なり俄に政事相直し候共急に一統にはなりかたき事なり可有心得事に候

一所々土藏計有之貯米も丈夫に無之樣相聞へ候甚油斷之至候粮は軍用第一の品に候粮米不足にては

無勝利事共專ら古記に見へたり亂世に無之共作毛不熟飢饉等度々有之事に候此貯方一朝一夕の心掛にて出來兼候事故儉約誠情申付る事にて候必も平常有物と心得致油斷候事は以之外之事に候兵學教方は是等之事重に可有之候

右は御自書紀州政事鏡同政事草より抄錄す

軍法

按に幕府の世諸家皆專用の軍法あり即ち軍謀軍略を初め陣列行軍海陸攻守の法斥候巡邏の心得小屋割小荷駄の事旌旗音具の制裁甲冑武具の用法出陣凱旋の儀式等より將卒一騎一分の細節雜禮に至る迄各流派をなし之を專門に傳へ一家をなす者を軍學者と唱へ恰も弓馬槍劍術に同しく一伎術に見做されたる也御家にては甲州流を御採用にて即ち宇佐美三郎兵衛（甲州武田家の侍大將宇佐美駿河守定行後裔）橋爪萬右衛門（甲州士橋爪左近之丞子孫）名取三十郎（甲州先手名取又市之丞正俊子孫）の三家を世々軍法家に定められ宇佐美流は御流儀と唱へ君上の御軍法とす又御代理采配を勤る迚代々團扇御免の特命あり且代々御書物方頭取（軍事奉行の事）に任し帷幕の參謀然たり橋爪流は御家中の軍法且御役談を司る名取流の所司詳ならされとも時々騎立（長篠長久手三方ヶ原關ヶ原等古戰の陣形圖面に引合せ陣列の勝手を施す作戰の状を講義するを騎立と云此騎立と金鼓樂とは當流の特色とす）親覽の事ありたり橋爪名取の二流は藩士の師範役として門人教授をなし亦御書物方をも勤務す結局軍師と稱せられ軍陣の事は一切之に糺すを式法となせし如し然れ共御秘事と稱し門人と雖も神文血判して他言他見せさるを誓ひし次第なれは門人以外の者は御家軍法の如何を知る者なし官又公布したる事もなき也

一三流家傳の軍法書冊頗る巨多の由いつれも六韜三略視して他見他言を許さす然れ共信竊かに二三を內見するに元來（〔一本刀槍接戰時代の古戰より〕は戰場を實驗鍛錬古老の實談口授等に起り漸次潤色附會）編綴し來て孫吳八陣の說又は陰陽五行星宿を配し曲節附會或は一騎一卒の儀式等に膠泥し（〔一本ナシ〕堂々たる三軍を繰縱する的の事所見なし）且つ武人多くは無學不文殊に隱語充字（あて）を交へ難澁殆と讀むへからす之を（一子相傳と唱へ口能く暗誦すれ共文義字句自つから解し得す〔一本世々相傳口暗誦するも字解する能はす恰も藥舖か家秘の藥法を傳へ來るに似たり〕）焉そ軍謀軍略の沙汰に及はんや然るを軍師參謀とし濟來れるは治平の世軍事絕へてなかりしか爲也

（嘉永癸丑亞米利加軍艦渡來の時江戶海岸守備の爲め海濱に邸ある諸侯は幕府命あつて其邸へ出兵せしむ信亦我か芝邸へ出張警衞す時に橋爪流の軍學者は海岸の庭前に數個の竹束を建設す竹束なるものは武者繪草紙に見しのみにて初て實見せり蓋し之を以て渠軍艦の砲擊を防禦せんとの軍略ならんかと吃驚せし事あり其手腕以て察すへし）

一橋爪流御役談の事同家の家譜に記載あり其略左の如し

當流の書物　南龍院樣御覽被遊候處其中に役々の心得之儀有之候に付御役談制作仕候樣被　仰付候に付則制作奉差上候處御意に叶ひ候處は其儘に被遊不用之處は御消し不足の處は御墨入被遊出來仕候右に付御役々懇望の筋へは御役相應の巻を添へ傳授仕候且又御備立の圖被　仰付出來仕候又御軍用御用御書物御用被　仰付云々

又　舜恭公御代の同譜に

別て御世話被爲在御役談御備立等委敷出來且武役之向々は月々寄合其席へ出席御役談幷に御役相應の巻を添て傳授仕候云々

と記せり即ち武役軍役の章程職規を講義傳習するものにて武官上下の士は月々同僚を會し流師の

教授を受け新任轉職の時は必す師家に就き新就の役談を受るの成規なり役々の巻各自に秘し傳はらされ共唯御小姓組の巻のみ存す左に掲て一例を示すへし

一御小姓組御役談

使役是は御役名を云　（御小姓組元御使役と稱したり）

逢全　是は誰も其勤る御役を無故障全くさくるやうにとの思召の御文也

利通本末門　利通とは其事毎に的當する事を云譬へは雨に蓑笠饑に食を用る如を云本末門とは本門と末門との二つなり本門の貌は惡きやうに見えても成て善を云たとへは良薬口に苦く金言耳に逆ふ如きを云末門とは善きやうに見へても成て惡きを云たとえは小兒に甘き食物を多く與て病氣の發する如きを云門とは善惡二つを見分る門口也

利通三十人を以常は顯明之使者役軍旅は軍使を勤る中役之本門也

利通とは役儀に叶ふ人三十人を十人つゝ三組に分る平常は顯明の使者役とははつきりと表立御使を勤る事也其外御供にては御堅めを本として何等若非常の事ある時は其取計を心得置亦當番の節は無油斷若非常の事ある時は御番所を堅く守り指圖を受け働き又指かゝりたる時は見計て取合働へし軍旅とは軍發の節を云此時は軍使として御使を味方内へ勤め亦敵方へも勤るを云其外敵の様子戰場の善惡陣小屋場の善惡等を見切る事也中役とは右を勤るあたりなるそと也

逆末門とは藏闇の討手撿使經營等は役儀の相違也

そうあんの討手とはひそかに忍て法を背者を討事を云撿使とは善惡に付て其場へ立合事を云經

營とは普請にかゝり亦は納米取立の類を云ふ是等は役義の末門也
是迄は上の掟の本末門也故に此役儀之愼都て有之
右に云本末門は本定の所あり次に亦々改て三の本末門を述る也
愼とは誤て改るの心にあらす遂全利通本末の心得に叶やうにとの心を云總て御役談は　君意に
隨て作るかゆえに謙退の詞を除く
一曰假令利通相違と云共　仰を不背不過を以愼の本門也
時により利通に相違する共　命を背事毛頭なし場により御側守なれ共御先へ行て取計亦は御供
を離れ外の働を御下知ある時は本役に違共速に其所に至り取計働勤へし指かゝりたる時は御草
鞋御馬の沓迄もかゝる類ありたとえ御下知なくとも見計て都合よくなるやうに働は忠義也併本
役取計事を此方より奪取て手柄にせんとの心得にはあらす故に不出過やうに心得へし其見計は
言句紙上に出難面々の心掛にあり況や於軍旅や
這末門とは役儀にあらさる事も成越んと欲する也
此前に云如く利通違ふ共命により場により勤働と云に付て何事も我手柄にせんと命もなく場合
も善き圖に不至に指出かましく働勤とする時は本役を缺き人には惡みを請の害あり
二曰常は自國他國險難平易本道筋他所之風俗急難見聞を嗜む本門也
自國とは御國を云平生自國他國共けんなんとは足場惡き難所を云平易とは足場よき所を云ふ本
道筋とはほんみちなり其里數丁數或は山の高低けんい又は川の大小淺深等を計るへし又他所の

風俗を兼々見覺聞繕をく時は急事發る節に至て取合勤る事成やすし

這末門とは別徑奇道之隱所迄志す也

べつけいとは脇道を云きこうとは木伐り柴刈等の往來道を云かやうの所迄心掛て見計事にはあらす

三曰心底の風俗近添使番目付役に等默然こ而辨舌を嗜む本門也

心底の風俗とは心持身持を云近添使番とは御使番を云目付とは御目付を云是等の役儀も同し心得にてもくねんとは何事も物靜に落付てするなり辨舌とは能辨を尊むにあらすたとひ不弁なり共向の人心によく分明させるやうに云をよしとす

這末門とは利口長言禮式繕操るは家風不相應也

利口とは口賢を云事なり長言とは短く云てすむ事を長く云事なり其外衣服髪容迄を異樣にきわめなこするは御大家の風にあらす唯不目立しつとりこして威有て不猛の風俗をよしとす

さて軍旅の時は其法有之也

軍發の節は御軍法出るなり然共兼ての心掛なければ御軍法不分明にて急用調かたきことあり故に兼て內調を重んする也

以　上

右本文は即ち御役の卷にして一種異樣の奇文なり註釋なければ何人も解し得へからす此註釋は軍師の講演する處にて役々をして此口授の儀を暗誦習熟せしむ故に役の卷本文丈けを授付し註釋書は記して與へすこ也所謂秘事こ稱し師範家の價値爰に在りしならん獨軍學者のみに非す弓馬槍劔炮の如きも其允可狀の類概れ此例なりし也

甲冑着用之次第

武（一本器等）具之事

武器甲冑之事區々成規細則あつて枚擧に勝へす一二記錄の存るものを揭く

一母衣（もろ） 御目付は禿（かむろ）の指物相用候儀に付母衣用候儀は無之事

一尻鞘 虎豹の類は都て不相成熊毛の類は大御番頭以上不苦事

右嘉永七寅年二月御書物方頭取久保田源藏へ問合之答

一畫尻鞘　　一鹿皮尻鞘　　一水豹尻鞘

（一本ナシ 一小具足とは何々を申候や） 一毛沓（熊毛の外に候は丶相用候ても不苦や）

右慶應元丑年五月御書物方頭取寺内藤次郎へ問合候處左之通答

元來尻鞘は太刀に用候品にて鎧着用之節相用　上にも御式等の節は御用被遊御實用には上け不申殊に虎豹の尻鞘は至て重き品にて大將軍之器に有之　上に御用被遊候に付御同樣にては如何に付御見合可然と先年政府御問合之節御答申上有之候間右に準し御心得御座候樣

一小具足は具足下之儀に御座候

一毛沓の儀は大將之器にて軍禮の時鎧着の節相用少將の輩は不用候　御家にても御年寄迄は相用御書物方頭取は　思召にて相用候事

甲冑着用之次第

一番　下帶　　二番　草鞋掛　　三番　汗取

四番　股引　五番　小袖　六番　草鞋鉢巻
七番　用袋　是迄を鎧下と云又具足下共云
八番　脇當　九番　佩楯　十番　胴
十一番　小手　十二番　上帶　十三番　太刀搦
十四番　冑忍緒

● 用意之品

陣扇　疊紙　鼻紙　藥　水筒　腰兵粮

指物は門を出馬面を我家の方へ向我請筒に家來に指せる也

鎧下の具製作

下帶　夏は麻冬は絹と雖も好に任す前の垂れの左右に紐を付是を結び合せ頭に掛る垂の落る事なし染色は黃栢を以てす

草鞋掛　紺の木綿の苧さしの足袋を用ゆ

汗取　麻を以常の繻袢の袖なき如くに製し黃栢に染る

股引　地を木綿にて膝より下を袷にし膝より上を單にして襠を取左右に相引を明て常の股引よりは膝のふくらみを多す

肌小袖　地木綿にして常の衣類の如くに製し左右の袖の底に小紐を付前の紋所の邊に小紐を付け結び合する時は小手袖となる製も折返し腰の邊に三所紐を結び合する時は半着となる又水中の爲袖の底水ぬきの穴をあくる夏は單冬は袷

草鞋　草鞋は製作品々あれ共不用よきわらを能くあく出して木綿のかせ糸を交作る也

鉢巻　鉢巻は麻一巾長は凡五尺尤人に依て長短あるへし染色は水淺黃を用ゆ

用袋　二つにして一つは金入の切を以て常の留守袋の如くに製し左右に紐を付る也一つは小倉うんさいの類を以て前の如くに製する也

（此外宇佐美流具足着用等之事）（一本具足着用の事は宇佐美流軍法書に詳也）文武學制の部に詳記す

一太平の世軍事の沙汰は全く御役議制立各流の軍學講義又は正月十一日の具足祝等全く席上の談のみにて練兵調練抔絶へて無く尤弓馬刎の武術は武士の本職とて修業盛也しも戰爭抔は又と有るへき事とは上下擧て思ひよらさる有さま也し然るに嘉永癸丑米國軍艦突然渡來以來海防の說勃興振武の策勵朝令暮改遂に練兵の事初て起る所謂西洋調練高嶋流下曾根派の如き世に盛んなりしも頑固の古習は是外夷の術也日本は日本の流ありと兎角に厭忌の躰なりしかは宇佐美三郎兵衛を江戸に召し下し御流義調練を開始せられたり（西洋調練は曩に開始せられありたる也）

此時三郎兵衛へ家傳の軍學は　神祖御趣意在れ共向後學ひ度内存之向へは傳授可致異船防禦に付ては　公邊にても御宗祖御制禁の品依時勢追々御改革有之事に付篤と可心得と諭達あつて初て御秘事を解かれ該調練開始に至れる也又橋爪流調練も開始せられたるなり

是に於て御家の軍法も初て窺ひ得へし甲州名家嫡流の軍配は如何に目さましからんと衆競て屬目するに旌旗鬪鑼貝鐘大鼓序破急を放て行軍陣列は魚鱗鶴翼に敷かれ大將馬上に「かゝりませー」「打敵ませー」の號令を傳ふれは先鋒の銃卒發炮弓手之に續き拔けは槍刀吶喊接戰を擬し鬨聲三呼凱旋畢る簡單無味百演一轍（其（一本蓋））意外に驚きたり橋爪流調練亦少差を見す之を他藩和流調練に照し見るに亦一模型論に堪へたり畢竟和流軍法なるものは治平後座上の憶測構造に成立ち區々たる一騎前の舊法を固守して到底三軍を統御し操縱自在變幻活動の節制規律なく又時勢應用の改進攻窮なとも知らさりし者と判せられき宜也幾くもなくして和流調練は皆廢滅に歸したり

南紀德川史卷之百十五

臣　堀内信　編

軍制第二

親征出兵一

按に大坂冬の役　龍祖御十三歳　神祖と共に駿府より御出陣翌歳夏の役亦同し是　龍祖無始無終の親征にして爾來二百七十五年間干戈不動親征の絶無は無論也　當公に至て征長の事起り總督將軍の大任に被爲當たりされは親征の終始は　龍祖と　當公に歸す而して　龍祖は御弱年　神祖に御陪隨從軍に被爲備所謂御部屋住の御軍旅　當公は内外列藩を督して國家の安危天下向背の機を被爲荷たり彼時は戰亂を視る朝餐より易々事とし此時は夢にも戰場世界を知らさる也加之外は士氣阻喪侯伯皆顧慮を擧ふ然るを内三軍を督し國力を耗す齊しく親征にして古今終始の懸隔雲壤啻ならさるものあり深く察せさるへけんや出兵に至ては島原一揆高野騷動の如きは出兵と稱する程の事に非す大和賊徒追討は實に國初以來初ての出兵にして國史に大書すへきもの也續て文久以降に在ては警衛乃至出兵の事年一年に頻煩東西奔命殆と寧日なし大小輕重事同しからさるものありと雖苟も尋常事に非されは同しく兵事部に纂し親征と併せ年次に隨て叙述す

大坂冬御陣

一慶長十九寅年十月朔日の朝京都板倉伊賀守よりの飛脚駿府に着大坂逆心彌露見之注進也俄に御陣觸あり　公は皆新規に御陣の用意それ〳〵の御定め番指物等迄萬事大形其日に（一本て一々）御定あり公御十三歳御陣に御立之儀何も方悦ひて其用意有之水野出雲守なと內相談の上御好を承則申渡す古帶刀も御尤と申たる御事共にて今に其時御好み色品不相替となり

信按に　尾州義直公は御歳十五歳共に御從軍被　仰出故忠吉卿の人數不殘召置かるゝか故軍制をも古制を兼夫々に定め給ふ水戸頼房公は御十一歳にて駿府御留守居を畏り給ひし也

一三日　神君御手自　公へ中黒御幕幷御白旗七本を賜ふ

詳なるは旌旗の部に記し爰に略す

同日　神君より御使にて內々被　仰付たる　頼將卿の御具足は出來參りたるやとの御尋也未た參らさる旨を申上る處彌急き申樣にと飛脚を被遣

是は　公御年十三ゆへ御具足召申樣にとの思召にて春の比御具足被　仰付樣にと　上意ありたるに付右御尋ありしなり

一十月十一日　神君駿府御立　公御供にて御發向

廿一日　神君佐和山へ御着其夜具足屋岩井　公の御具足を持參す　公御悅有て此段御直に被　仰上途中成る間留於二條其御沙汰可有との　上意なり

一十一月十一日於二條御具足御召被遊　神君御自身の御肌着を以ゑりをまわさせ給ふ　此御服は大き成に依て御戴きあ

（りて内々仕立置たる御ゆきにあひし御肌着を召給ふ）小き御具足にて御小手も細ければ左の御手を具足の左の袖の内迄御さし入被為召たる躰に被成　神君も十二の御年鎧初被成たる段を被　仰出色々御念入たる御悦の御詞ありて御召させ被為成

　此御具足は黒きに紺糸にてぬいのへに芝引のけさんうるみ朱也御肌着は花色にちらし御吉例の如く御喰つみ計の御祝也（うちあわひ　かちくり　こんぶ）

一十一月十五日　神君二條を御出陣奈良へ御越中（房左〔一本高畑〕）近所に御一宿　公御供にて奈良へ御通り上意にて義直卿御同伴にて奈良春日社所々名所緩々と御遊覽十六日法隆寺に御宿十七日是より何れも物之具を堅め御備押にて住吉に御着陣　公は今日初めての御備押なれは一入珍敷思召いさみありて行列に御世話をやかせられ申の下刻に住吉へ御着其晩御長物を快くぬけ申迄御試み其後御腰にさいを指せられなから御前へ御出只今御押付の由被仰　神君御機嫌にて御側へ近く御寄り被成候樣にとの　上意にて武者ふりよきと御ほめありて御具足着用の（〔一本〕利）方なとこまく〵と御相傳あり夫より御陣へ御歸り也　公は社務か隣醫師安立か明き家に御宿陣也住吉に御在陣之内駿河にて御直に被進たるきぬたの御筒にて御慰に大形日々に其邊へ御出鳥を打せられ毎度獻上し給ふ

一公は極月四日の晩より攝相濟迄毎夜御具足はた御もゝ引を召し夜明れは御ぬきあり人皆不知し其後阿部野の原へ御陣替との御事にて　義直卿　公何も御陣場を請取られ御小屋之御用意有之内にはや茶磨山に御陣屋出來に付天王寺へ御押付ありて御陣取被成候樣との御事にて極月四日に天王

寺へ御陣替あり　義直卿と並ひの御陣場也

一總攻之時は御先へ被遣被下候樣にと　公御願之段御次てことに御耳に達せらると雖も總攻之御評定無之内に扱ひに成たり此時帶刀參りて扱ひに成申由申上る　公被聞召扨々あつかいに成たるか御中直らせられ天下の爲には目出度事也然れとも御身の上には御殘念とて御手を打せらる帶刀左樣には何とて被仰哉と申上御意に先日二條にて具足御着せありて武將の量あるとの御稱譽を此度是非御目の前にて御詞を合すへしと朝夕心懸たるに其事むなしく成るとの御事也帶刀申上るは御尤なる儀に御座あれ共末たつほむ花にてましませは此後いか程の事にか御逢可被成也其時御意にはいや左樣にてはなし十三の年は二度なしとなり

此御詞承りたるほとの者は帶刀を始め皆々後迄感し奉ると也

十二月廿五日　神君二條城へ御歸陣也　公幷　義直卿　將軍に從て大坂に御越年也

一慶長二十卯年正月六日　公大坂より京都に歸り給ひ廿七日京都より駿府へ歸り給ふ已上御譜略を摘要

大坂夏御陣御出陣

一慶長二十卯年四月四日　神君駿府御出發　公御供數日尾州名古屋に御逗留

御年譜私記に三月下旬秀頼又叛逆の由京都より注進あり於是御陣觸ありと云々

一同十八日京都に到り給ふ　神君此間二條城にて　將軍家幷執政の輩に軍議あり　公幷義直卿御出座本多上野介帶刀隼人は御次の戸の際に着座仕　公御先手へ被　仰付被下候樣にと御望あり　神

君とかふの上意なく　將軍家の御顏を御覽被成　將軍家もにこ〳〵と被成候て　神君の御顏を御覽ありて御快然の躰にて御會釋あり本多佐渡守はさなたへも障らさる樣に御挨拶申上る時に　公佐渡守に御向ひ只今　南御前にて此事不究して可成義不定なる挨拶也と被　仰其時　神君上意には惣して御先へは御先手段々に被遣に依て御用心成能物也今度之儀成御押前に御跡御用心被成にくき物也依之御子孫方を御跡に被爲置也及合戰時は御先へ立られ御取かひ可被遊旨也　將軍家被御そゝは此上は御諚に任せらるへしとの御事にて佐渡守其趣之御あいさつ申上候由

五月五日二條御出陣　公門内に御駕を懸られて御座あり帶刀一人は馬に乗り咲ぬきの小馬印計馬の鵠に首蓮場川の川端をあなたこなたへ乗り廻り御人數行列の次第を申渡し追付御出馬なり　神君御供多勢なれは順々に備押すかくて道のはかゆかす漸曉方に星田河州に御着陣なり

六日御逗留との御觸也夜明る時分御小屋具なと請荷ひ參たるを御聽させらるゝ所辰の刻計りに帶刀より步行之者を以て御先手より敵出たるよし申來に付　神君御押出し被成たるとの由申上る以上中略摘要　御出のよしをよはゝるへしと被仰付御小屋近き所へは御直に御よはゝり則御出馬ありて諸勢も押す也細道にかゝり先勢つかへ今晩また路ははかゆかすして曉方平岡に御着御小屋も不出來故帶刀かかくのたうに御しんなり候帶刀はかき紙一重へたて四五尺程のつきたしに休みて前に火をさもししらかをぬき巾を御覽ありて御感被成

七日は　神君住吉へ御押被成との御觸あり其次第は　神君御旗本の御跡勢次に　義直卿御人數彼是共に多勢なる故押勢つかへ道のはかゆかす　公御せき被成横須賀組へ何とて早く押不申哉と御

使被遣こいへとも御先勢つかへ申故可仕樣無之油斷は不仕こ申上る無是非所々にて御休あり然所に八尾の川向の堤を北の方へ小荷駄共の通るを御覽して御尋ありけれは大坂への近道有之て參り申也是は先手の者共并あんさい衆の小荷駄共なる由申上る是に御心附せられ朝比奈惣左衞門を召て今日御合戰は可有か有間敷か目利仕れ御合戰有之に於ては幸是に近道ある間可被成御座この御事也惣左衞門申上るは今日ははや晝なれは大坂への道を積り見申にヶ樣の備押にては晩に及へし他國の御働を晩をかけて被成儀則以て有間敷儀こ奉存也其上今日は住吉迄御着陣之筈成間御合戰今日にて有間敷由申上る且又　神君御旗本共何れも住吉の方へ行に付右の八尾堤を跡に被成住吉の方へ御押也扨　神君へ　將軍家より天王寺へ敵出申間合戰可被成こ御使參に付　神君も住吉の方へは御押不被成候に天王寺表へ御馬を向られ右の御樣子なる間早々押せらるへしこ　公并義直卿へ御使被遣　公へも間宮左衞門被　仰付戸田金左衞門方迄越此趣金左衞門申上る御心得被成たるこ御返事ありて御先手へした者御使を被遣　急き申樣にこの御事なれこも尾州の御手つかへたる由申來に付尾州の御手へ押詰せり立る樣に可仕旨小野田長兵衞を御使にて横須賀の手へ被　仰遣又重て豐田文四郎をも同しく御意にて被遣處何も畏たるこ御請は申こいへとも先々の諸勢つかへ何共可仕樣無之油斷は不仕旨申上るに付てさらは二行を三行にもたゝみ參る樣にこ　御意にて御急き也夫より一里も御押有へきや良暫ありて　神君より内藤主馬御使に參馬上にて申達す御口上には　神君今日住吉へこ御押被成之處敵出るに付て御先手は敵に向ひ備を立るの由申來に依て俄に今日の御合戰に相定たる間早々御押付有へし御待被成この旨也　公御請には畏たり御先手敵に

向ひたるは定てはや御合戦は初り申へし二三里隔此御左右承りし事なれは人數引具しては何さて手に合可申哉此上は一人なり共馳付可申と被仰内にはや御馬をはやめられ行列を御破り御人數の内をも御乗りわけ御急ありて御かけ出被成處へ義直鞭より御使河野孫兵衛馬上にて御口上申上るは先は合戦初りて手前にも敵とにらみあひて待申間早々御押あるへしと也　公御返事に敵とにらみあひて御待あるもの哉早々合戦初らるへし只今參り打破り可申と少々あらき御返事被仰　公御少年なから馬をよく召たる故本道を左にして田溝堀共なく直に大坂へと御馳也さきに惣左衛門に御尋被成時小荷駄共の通りたる道をゆくならはさく御押付可被成ものをと御悔事被　仰其方へ御馬をはやめられ御急故御旗御馬印は續かす其時御旗奉行茂野善兵衛參り申上けるはケ様にかけさせられては可續様無之此上は私も御供可仕と申上る　公仰らるゝは其方一騎供仕りても詮なし日比被　仰付たる旗奉行は何の爲そ旗に疵の付ぬ様に仕事肝要なる間いか程にもいたし旗を押付參れとありけれは奉畏由にて御旗の所へ歸る堀溝多くしてあなたこなたへと御供の者共も思ひ／＼に道を見立かけいそく也三浦長門守は御先へ參見て參らんと申上時に仰らるゝは方々自焼の煙にて大坂の城は見へす只今御供の内に爰元の方角存たる者一人もなし長門守は大坂へも參御使に被遣候事ありたる間推量も餘の者よりはよかるへし是ほと人數にも構ひなく一騎かけにていそく處に方角ちかひ遲々いたしてはせんなし其方推量になり共御案内申御相談のため御供可申との旨也中略　長門守其儀に伏し御供仕る夫よりも十町餘り御越之處三四町はかりも御左の跡の方に白地に葵の丸の御まとひ押行を御覧し扱は道いそかせられたる甲斐有とて御悦被成半道余りも御越あ

る時頓て天王寺の邊にて可有と見へたる所何れの人數か大勢西東へ一面に見ゆる是は御先手か若御旗本か何方の通りにて可有哉なとゝ續て參る者共に御意被成なから御乘付ある處に鉄炮五六挺ほとの音聞るやいなやどつと先より大人數崩れ來るを御覽せられ敗軍勢と見ゆるそ御手の者能ふみとめよと御下知ありて御馬をけたて〱被成時崩懸りたる者共は勿論こたへたる者共迄不殘ぬきつれ申に付御側に罷在る者共御太刀ぬかせらる樣にと申上る敵かましき者未た見へさるにとの御意なり其後御馬のさきへ崩懸り申によりひきよう者共かへせ〱と御太刀ぬかせられ左右へ御はらひ被成御馬の前に崩來る者共左右へなきれたり此折節望月治左衞門御腕ぬきはかけさせられつるやと呼はりても聲は御前に聞へさるに依てしかたを致したるを御覽し御手をふりあけさせられ是見よとの　御意也長門守は御右の少手さきへ下りたち長刀を持踏こたゆ出雲守は馬上にてこたゆ其外何かに十騎には不過といへとも御馬の左右に附てかたくこたへたりにけ來る者多人數なから左右へ分れ崩れ行　公則御馬のむきたるまゝに御押とほし天王寺の築地のきわへ召付らる時に帶刀參合たり帶刀を御覽し合戰はいかゝと御尋有けれは面白き事御座ありつるか最早果申と申上る扨は合戰相濟たる哉と御草摺を打せられ扨は過たるかと御詞を御かへし御殘念不過之御樣子也帶刀申は　神君頓て是に被爲成由申上る則茶磨山へ御越被成る處板倉內膳坂中にて御近習衆主人はかり通り其外は此ふもとに止まるへしと人をとめもみあふ所へ押わけ〱御上り成るを內膳見付奉り殊之外早く御越也　神君只今御上り故又者は勿論御近習の外をはおさへとめ申間御供小勢にて御上り被成へしと申に付御供二三人にて御上り直に　御前へ御出之處　上意に合戰は過

たり御待被成たるに今少しはやくは面白事を御見せ可被成ものとの御事也　公御請に御なさけなき上意なり御先手を望み申たるに三里余りも御跡に置せられなから左様に被仰事また私なれはことそ是程にもかけつけし也中を飛可申様は無御座とて余り御せき被成御落涙の容体を　上覧ありて尤也　上の御違ひ也其方道理也との御事にて　公の御ぐしを御なてありて今日是非とも御約束之通御取かいあるへしと思召たる處思召の外に敵もろく間もなくして手に御合せ不被成事御了簡の外也最早堪忍あるへしとおなため其外色々御詞あり其方今の様子即鎗なりとの　上意なり扨先喉の乾へきに湯を参らせよとの御事にて折節　神君御弁當より御勝の御湯を上りたる其御器にてとの　上意也　公御覽ありて是は御常器にて候と御辭退有けるを不苦と達て　上意にて御湯をまいり夫より去年の御陣所へ御越有様にとの御事にて去年の御陣所天王寺へ御越此時漸方々より御人数集る　義直卿も御急きの由なれとも本道故しはらくありて茶磨山へ御越御目見あり茶磨山にて水野出雲守罷出老たるも若きも今　公の御振廻の様成るは御座有間敷奉存也私申上る分にては左程に御思召間敷間人々に御尋被遊へしと申上る　上意は宰相は左様に可有との御事也

八日　神君二條へ御歸　九日　公將軍家に從て二條に御歸

八月四日　神君に從て二條より駿府に歸り給ふ以上譜略

嶋原一揆

寛永十四年十一月九日松倉長門守勝家之領地肥前國島原に於て切支丹之徒亂を構ふる由注進達する

を以九州大名へ御暇被下早速〔一本討手として板倉内膳正へ御目付石谷貞清を差添〕（上使御使番松平甚三郎）被遣同廿八日御三家方御同道御登城御老中物語られ松平伊豆守信綱御目付戸田左門氏鐵を被遣由也然るに賊徒防戦強く翌十五年正月十日之城攻に板倉内膳正重昌討死城落去せすとの注進同十二日に達す御譜略所書左の如し

正月十二日　公幷水戸侯尾陽侯之御館へ御越御老中も被出御老中被申候今度九州にて板倉内膳討死に付松平右衛門佐細川越中守有馬玄蕃頭鍋島信濃守立花飛驒守等可被遣旨也尾陽公被仰は既に被仰候は御尤之事也某今年非番なる間可被遣との事なり　公被仰は左にあらす紀州は西國之手向きにて其上船手なれは某を可被遣と也酒井讃州被申は誠に今度松平伊豆守戸田左門に船御借に付奉書も出申たると也　公被仰は船はいか程も用意あり殊に紀州は船多き所なれは重ても御用に可立となり又被仰は重て上使として伊豆左門同前之輩遣されは内膳如くに可有之間身躰宜き御家門之内可然也左あらは右申如く手向にて舟手なる間某可參と也　尾陽公又被仰は非番なる間兎角可參との事也　公重て被仰は旧冬既に大炊讃州に物語し置たると也老中何れも御尤之由被申伊豆守方より一左右次第に可被遊との事也即諸軍勢幷船之行列等被　仰付同廿日上使阿部豊後守被來上意之趣今度九州へ被遣たる兼松彌五左衛門罷歸九州之樣子替儀無之付如何にも靜に仕自滅せしめんと思召之旨也　公御答に御尤之御事也乍去九州諸大名之内の者共若耶蘇宗門之徒有之事も有へき哉其子細は先年大坂に一向宗之門徒籠城之時信長被攻之といへとも寄手之内に同宗數多有之故久敷手間入申由今度九州之諸大名共攻申とても歷々御家久敷大名共自身かせき申程に不仕しては成る間敷事なれは兎角某を爲御名代被遣可然との旨也此後落城之左右あり

前記之如く諸軍勢幷船之行列被　仰付とあれ共公然御陣觸れ乃至御手配り等命せられたるもの見る處なく唯先發の御主旨なる哉或は　上使等御見廻之義なるや諸士之内左之面々は出張を被命たり

長尾勘兵衛　岡久三郎猪之助　吉田三右衛門　山中作右衛門
中島勘兵衛　荒木十右衛門　岡崎治左衛門　黒木與一左衛門
戸田與市　向井五郎八　芦川權太郎　森角左衛門
畔柳五郎右衛門　稻生長兵衛　片桐市太夫　山本市右衛門
市川甚右衛門

右等之面々被遣何れも手合せ長尾勘兵衛山中作右衛門は最軍功を顯し片桐市太夫は石川左門手にて討死又勘兵衛其外少々つゝ手負たる由三月十一日には迎舟して永井八左衛門同十七日に手負之代りして松井與八堀田右馬被遣迎船御扶持方共丈夫に持越し候樣にと色々忝御意先きに爲迎荷船七艘指越候へ共此度關四艘差越し手負之面々は直に有馬へても罷越しゆる／＼養生可致御沙汰云々と戸田金左衛門より長尾勘兵衛へ宛たる書面に見へたり　又祖公外記には左の記有

寛永十四年丑十二月七日より翌年正月迄西國島原へ被遣候水主合二萬三千百六十一日半此人數四百五十人同五月歸國此年二月九日肥後肥前にて買置候米貢拂不申樣にと廻船へ被　仰付

又井關又助三男六助四男彥三郎五男孫四郎兄弟三人共父又助へ一封を殘し置出張松倉長門守手に屬し六助彥三郎共討死孫四郎のみ歸國軍功により新規五十石に被召出の事其家譜に記し又名草郡栗栖村地士鳥居万五郎は天草陣に騎馬にて御供出願允許せられたるに　御出馬なき故自分

に參度と再願之處何れも不遣由にて參不申抔の舊記も見へ大坂の役後武士無聊に苦しむの際事こそ起れり爰そ一と稼き處と地士の輩迄も此さまなれは御家中子弟等思ひ〳〵に志したるも多かりしならん天草陣に關する條は如斯なるのみ

高野騷動及明國援兵を乞ふ

一正保二酉年高野山學侶方行人方公事に付　幕府より上使安藤右京之進初御條目申渡して出張若違背も可有之哉と若山より人數出張高野山下通路を警固（隣國よりも數百騎出張と云）せられ頗る騷擾せりと（言行錄南陽語叢）慶安二丑年にも高野山之訴訟連年未た止まさるを以て　上使松平出雲守等被遣御條目申渡の事あれ共人數出張之事見へす

一正保三戌年十月廿八日幕府奉書を以明國李自成之亂鄭成功使を長崎に來し本邦の援軍を乞ふ軍勢を可被遣哉との御相談あり　公は御無用に可被遊旨御答あり　將軍家尤に思召事止みたりと諸略に記し又言行錄には此時　公には異國より日本へ加勢を乞ふ事　本朝の面目也　公方家御身寄之者西國には我等一人なれは總大將に命し給はゝ大慶不過之と御老中迄御願望被　仰入させ紀州へも陣用意被仰越眞鍋眞入齋宗伯は已前朝鮮征伐の時大明と度々合戰せし覺有は御供に可被召連との事也眞入齋は老後の思ひ出に戸を異國に留めんものをといたく悅ひたれ共御加勢の事止になりと記し兩記矛盾する所あれ共他に筆記を見す全く御陣觸等はなかりしな（一本りらん）

（一本ナシ）一元祿五年六月高野山行人派と學侶派との爭論再發（去年爭論起り　幕府裁許ありたれとも服せさる也）一山紛亂す江戸より寺社

奉行大目付御目付等出張僧徒千有余人を橋本に下し六百廿七人を流刑に處せらる若山より御家老奉行物頭諸士同心多人數繰出し非常を警戒し六十人者初地士共等人馬を具し橋本驛へ馳集る强て出兵といふには非され共一時は騷擾大方ならさりしと云）

一安永五申年十月高野寺領農民新田竿入の事より數千人徒黨人家を破却し亂暴を極め登山强訴を企つ高野山より急報鎮靜を請願に應し伊都那賀兩郡の地士帶刀人等二十名許を派遣鎮定せしめらる別に出兵の事なし

京坂非常の時派遣人數

京坂非常の時派遣豫定

一弘化二巳年二月京坂近邊非常の節可被遣者左之通被　仰出

輕き時水野丹後守　朝比奈惣左衛門　下條伊兵衛　金森孫右衛門　加納平次右衛門

右月代りに定置可罷越候

大番頭一人組共　御先手物頭二三人組同心共　御目付一人

御使番一人　浮組寄合七八人

重き時は右の外左之通御人數増可被遣候

澁谷儀兵衛　松平八輔　菅沼半兵衛　成田彌三右衛門

岡野平太夫　戸田金左衛門　村上與兵衛　正木五郎右衛門

有「木」（一本永）左門　大御番頭二三人組同心共　内一人つゝ此順に可相勤

右役人申付候節明番可遣小役人抔は見積り可申付事

一京都近邊之儀は勿論大坂邊之儀をも所司代可受差圖若大坂非常之儀有之所司代へ伺候間も無之節は先大坂御城代へ伺其上にて間も有之時は所司代へ相屆可申候

口上

其邊何々之儀有之樣承候若　御城近邊御番等にても被　仰付候ため家來可差遣哉ヶ樣之節は得御内意可任御差圖旨兼々申付候抔との口上にて可有之哉其節之品によるへき事に候得は兼て御定難被成人數之儀も其節之樣子によるへき事候得は時に至り差引可仕候以上

右菊之間詰へ山中筑後守申通之

大和逆徒追討

文久三亥年八月長州の攘夷家大和　行幸を企十三日矯　勅を發布藤本鉄石松井謙三郎の徒は先つ畿内の地を取て根據となさんと中山侍從を奉し　御親兵浪士等百五十人許りを從へ旗を立甲冑を着し同月十七日五條に赴き御代官鈴木源内を襲ひ殺し陣屋を燒拂ひ亂暴狼藉之旨注進頻りなれは直ちに軍事の取扱を以て物主水野多門三手幷菊之間詰御家老一の手二の手番頭三の手應援人數を引卒參政監察軍（務）〔一本勢〕方初役々附屬伊都郡橋本驛へ出張和州五條へ繰出し續て山高左近代て物主となり尚日高郡山之保田熊野邊勢州路等へも出兵賊天の川辻に據て二三之小戰あり後潰崩九月に至て事平く世之を天誅組の亂と云賊自から呼んて天に代て誅戮を行ふと稱せしによる

大坂島原の役以來二百數十年間干戈動かす合戰といふ者繪草紙より見し者なき世の中に旗皷を張り甲冑を裝ひ戰爭とは云へ其實兒戲に類せしも當時之騷動大方ならす上下唯忌懼驚怖之間に曠日彌久種々の珍談亦尠からす畢竟賊の自潰を幸としたる如し事の顛末は世史第二十八卷に詳記あれは爰には其大要を摘載す

一八月十七日夜浪士百五十人計五條御代官所を襲ひ直ちに御代官鈴木源内初用人元締手附等六人を斬殺梟首にかけ陣屋を燒拂ひ　勅命と稱し當年貢の半はを減し京百姓たるへきを命し五條櫻井寺に屯集

一（一本アリ）橋本地士某曰く八月十八日夜賊將吉村寅太郎は單騎橋本御殿に來り橋本熊吉なるもの面會應接其由即刻若山評定所へ注進す依て柴山太郎左衞門一隊を率ひ廿一日申刻橋本に着陣せり事倉卒に出るを以て庶民騷擾負擔爭て僻村に逃れ遁く是より先豫め事變あるを察知にや若山より令を發し須田組及地士數十名をして大和河內の國境を警衞せしむと云々

又曰く柴山太郎左衞門牙營を國境に置き銃兵を下兵庫及河瀨村に散布之處廿三日賊兵池田內藏太なる者馬に騎し賊兵四名を具し下兵庫に到り藩主に謁て　朝旨を述んと云御代官太田政助會見不弁依て驛人に托し荒卷左源太代て果斷快答退かしむと

一八月廿二日夜浪士凡五十人計高野山へ登り止宿皆戎衣を着赤地に白菊御紋の旗を立たり山內大に狼狽す

一日不知賊徒五十人計高野山へ登り十人程學侶方悉智院へ入込其余旅人宿に罷在萬一山中立籠り亂

妨も難計に付早々人數御差出可被成旨閣老より達しあり

一八月廿五日京都守護職松平肥後守より大和領左之各藩へ早々人數差出取鎭尤飛道具相用不苦旨布達す

松平甲斐守　植村駿河守　織田攝津守　片桐石見守

織田筑前守　永井信濃守　柳生但馬守　藤堂和泉守

一八月廿六日曉賊徒千人計和州高取植村出羽守城下へ押寄大小砲を以て攻撃城兵應戰賊大に敗走天の川辻へ楯籠る

一八月廿七八兩日に寺領地士不殘高野山へ登山之處賊既に退散鎭炮にて切所々々を固め夜中野川口へ押出したる途中狼狽同士討を起し相殺傷或は山岳に逃れ隱れ崖谷へ陷落負傷の者あり

一八月廿八日夜津田楠左衞門組農兵を催促廱生津越より登山和歌村法福寺一手も登山楠左衞門手へ賊一人を召捕人數不足により坂西又六一手登山を促す此際監察も登山す

一八月廿八日京都守護職より

一揆蜂起之趣追々達　天聞嚴敷追討可致旨以野々宮宰相中將被　仰出候事

紀伊中納言殿　松平肥後守容保

一八月廿八日物主水野多門初總軍伊都郡橋本驛へ出張廿九日和州五條へ繰込同晦日二見村賊川向へ寄せ來る進擊を指揮すと雖とも諸軍動かす多門痛心恐怖夜中竊に乘船軍を捨て若山へ逃る大番頭初大に驚き爲す所を知らす御用人荒卷左源太翌日より發狂して割腹自殺混雜いふ計なし

（一本アリ橋本の地士某談に此時童謠あり曰く

敵の首一つもみづの卑怯もの二度と再び來てはたもんな

又

天誅か柴山よせて火をつけて水野かせいてとふごう治る

世人は水野を逃多門と稱せりと云巷說に荒巻左源太は水野と兵法を激論す多門語塞るの余り逃走せり左源太亦割腹す）

一八月廿八日京都幕府より布告

中山公達之由浪士相交多人數具足着抜刄鎗長刀を携ひ河州路にて　勅命と僞り武具馬具等かり受和州路へ立越御代官陣屋等放火及亂妨藉全く徒黨一揆を企候者共に付取鎮方嚴重に大名へ被仰付候事に候間右徒黨之者寺社在所等へ立入如何躰に欺き誘ひ候共被惑間敷候若心得違右に徒黨致候者有之候はゝ嚴重に可及沙汰候

一八月廿九日坂西又六人數を引卒高野山へ登山翌晦日着具口々を固む同夜半長野七郎左衛門組も登山

一八月晦日夜五條櫻井寺本陣に於て京都御座所より派遣之横幕長衛を間者と疑ひ刺殺す

信曰横幕長衛は元小島榮吉と稱し江戸御作事方下奉行にて常に信か家に往來せり頗る活氣之者にて文武を嗜み有志之士に交る然れとも磊落不覊俗吏賤役を潔とせすして唯武場に奔走勤務を怠れり時勢日々艱難に赴き京師騷擾之聞へある等自から禁する能はすして遂に江戸を脫走若山へ入り名を横幕長衛と改め浪人中倉田績の因を以て加納平次右衛門に仕ふ然るに平次右衛門は親戚等より時勢柄斯る麁暴の者後患計るへからすと忠告あるを以て止むなく暇を與へたり此比紀泉國境堺橋に於て復

讐の助太刀をなしたる事あり于時大和の變起り京師二條城へ馳付齋藤櫻門に依て意見を叩く櫻門元其人を知り頗る壯となし且追討兵の優柔遲々たるを憂へ水野大炊頭へ謀り窃に追討督責の内旨を傳へ且其動靜を窺しめんと堅く其粗暴を戒め派遣したり長衞皙然踊躍直ちに軍に赴き傲然大將に面せんと云ふ形裝異狀擧動可怪を以て大番の士等賊の間者と疑ひ應對中不審の上は灰吹を強く叩くへく之を合圖に捕ふへしと示し合せて大番組頭堀内六郎兵衞面接す長衞大に其怯弱を責め言論過激に涉り且六郎兵衞初を蔑如す於是彌間者と妄斷灰吹を叩きしかは側らに在る松下藤太郎突然槍を以て刺殺衆大に勇みたりといへり歷々の士多數圍繞而も能く事實の彈糺をもなさす味方の一孤士を刺して自負誇勇の色あるは亦一奇の談柄なり信長衞の微衷を憐み後年櫻井寺に墳墓の有無を捜索せしめたれ共絕て知る者なし

一後年水野忠幹子(元大炊頭)信に語て曰く横幕長衞の事は全く予か失策也故は長衞は血氣粗暴之性あれは一人を附隨はしめんとせしに長衞は顧みすいつしか獨行せり果して一人と共にせは非命の横死はさせましきを今一層の注意たらさりしを悔むと云々

一日不知荒卷左源太代りて金澤彌右衞門(御用人也)に五條出張を被命附屬若干を召具出張す

一御目付より陣中條目を令す

軍陣之要は一致一同之和熟肝要に付何事も堪忍を本と致し短氣ヶ間敷儀無之樣可致事

一人和は第一に候得共一和泥み物事行成に致し威權無之ては不取締に可相成付恩威相兼候樣可致事

一隊長たる者配下之仕落は自分之仕落と相心得諸事愼密に取計可申事

一押前之節は成丈け雜人相省き行伍を整途中不作法無之樣可致事

一宿陣之節は何時敵より襲來難計付臨機應變之覺悟夢にも忘れ申間敷事

一粮米焚出し方へは前以人數高觸出差掛り增減無之樣可致事

一在夫又は繼人足にても猥りに打たゝき申間敷候下民愁怨を抱き候ては敗れの基に付末々之者共

へも能く申付置可申事

一天誅組の者と見掛候とも多人數無之候はゝ成丈け搦捕獲に殺害無之樣可致事

一十津川之村民共天誅組へ一味之者而已にも無之付假令召捕候とも其精實委細に糺し可申事

右九ヶ條之趣堅相守可申事

亥九月

一九月朔日賊徒吉村寅太郎より水野大炊頭へ左之書面を贈り來る

去年尊藩横井次大夫等脫藩之御僕兄分京都に詰居奔走致候分を以追て僕上京委細承其後貴藩正義之面々より水野大炊父土佐之前非を悔上尊　天朝下育小民志乾度相立居候上は自今以後諸藩有志方掛念不致樣との噂有之候由承居候故年突然一筆啓上致候然は去月十三日
御親征之御沙汰有之候處中山前侍從卿畿內に賊徒致輻輳居候上は
叡慮貫徹之程無覺束被　思召諸藩有志之士を被召連大和河內等之奸賊を征し義士を募り　御幸
供奉之爲御下向既に佐山侯高取侯に使者被差出候條奸吏鈴木源內を誅し正邪糺明の基本被建掛候處豈計同月十八日曉逆賊松平肥後守　有栖川親王宮殿へ銃砲數十發致し直に宮門に亂入し挾
主上正義之公卿方を悉く貶し候由實に大逆無道三尺童子と雖も不耐血(淚)(一ニ泣)候雖然私慾に迷ひ右に同意之公卿并諸侯も不少趣仍て彼賊徒等種々僞勅書を出候故既に歸服致居候高取侯却て我中山公の軍に發炮し御藩又大軍を出張大和之國民を惱候是如何なる間違に候哉過日前侍從卿より兩度使者を被差出頗不都合左候時は　朝敵御一味之事歟　君公之御家他に異候得は當時　勤王

之魁となり大功業御立被成　大樹公之罪をも償忠孝兩全之御事と奉存候此頃僕病て十津川郷民來り雜談中　公之勇節にして寛大なる事を談就て前日之御赤心の談に信服す而當今　公默而不陳は何之見所哉仁義之人を賊徒に陷事天下之不幸僕不耐遺憾病間不省失敬呈愚書候頓首百拜

中山侍從卿御隨從
土佐　吉村寅太郎

文久三年九月朔日

水野大炊様

一九月五日左之通京都に於て達す

菊之間　山高左近

於大和領及亂妨候逆徒爲討留橋本邊に可罷越旨被　仰付之

相備附屬引纒出立之事

左近九月九日未剋橋本驛へ着陣之よし也

一同日於京都左之書付被相渡

先達て以來一揆蜂起之義に付不被爲安
宸襟討手之義被　仰出候得共捷報無之猶豫之形に相見彌以被惱
叡慮候策略之次第も可有之候得共嚴重申付寸刻も早く打捕鎭靜有之候樣昨今再度以野々宮宰相中將被　仰出候間急々退治被達　奏問度候事

九月四日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　松平肥後守容保

紀伊中納言殿

一九月九日左之通　天朝より被　仰出に付早々在所へ可罷越旨於京都水野大炊頭へ被命

水野大炊頭

熊野三山御警衛之儀兼て　御沙汰候處頃日浮浪之士僞稱

勅使於川上七色村邊放火亂妨有之候旨撤枝宮被及言上候依之大炊頭早々歸國熊野三山御警衛

賊徒追討可有之　御沙汰候事

九　月

一九月十八日安藤徹丸へ左之通被命

菊之間席　　安藤徹丸

和州一揆追々不穩趣相聞候に付此節早々在所へ可罷越旨被　仰出之

一今回之出兵人數及ひ追討之始末書幕府へ提出するもの左之如し是に依て概況を知るへし

一の手

大番頭　柴山太郎左衛門　　先手物頭　北條宗四郎

同　(一本作東)使熊三郎　　目付　中島勘右衛門

軍學者　妻木加左衛門

右總勢三百三十人余最初領分橋本邊迄出張夫より左條へ進み賊徒と吉野川を隔及砲戰富貴村へ進

み兵を分ち嶋之首大日川之賊兵を抜き天の川辻へ攻寄候事

二の手

大番頭　木下次郎四郎　寄合組頭　二上左仲
小普請支配　九鬼四郎兵衛　先手物頭　村井彦次郎
同　川合善太夫　目付　長坂主馬
使番　榊原忠次郎　軍學者　橋爪武之助
同　小倉惣兵衛

右總勢四百五十人余五條櫻井寺へ軍を進戀野村へ陣を移一の手後援致し候

三の手

城代格大寄合　井關彌五助　大番頭　金森金十郎
先手物頭　彥坂幾之丞　同　村河紋九郎
目付　村上小十郎　使番　小野杉右衛門
軍學者　有本式部

右總勢三百九十八人余橋本へ屯一の手應援之爲二見村へ進み後一の手と合天の川辻へ出張致し候事

中軍

家老　山高左近　寄合頭　寺村左衛門
先手物頭　小笠原金三郎　目付　淺井縫殿助

使番　川上七郎　軍學者　本崎傳八

右總勢五百人余橋本并高野山之間へ往來諸軍之總督致し其後鷲家村にて賊徒討留候事

副軍

小姓組番頭　稲葉彌左衛門

右總勢二百人余領分橋本へ屯熊野へ出張十津川郷へ入込候事

副軍

大番頭　坂西又六　供番頭　富田甚左衛門

先手物頭　木村楠次郎　目付　田代楠大夫

使番　小島彦右衛門　勘定吟味役　大藪新右衛門

同　清水九輔　根來頭　平井瀧右衛門

軍學者　吉田金平

右總勢三百五十人余高野山を守衛後に熊野勢州へ出張致し候事

副軍

大番頭格　長野七郎左衛門

右總勢百人余高野山守衛致し十津川郷へ進入致し候事

副軍

頭取　津田楠左衛門　一向宗　法福寺道龍

右總勢三百八十人余高野山を鎭護し富貴村にて賊徒と九月四日朝暮兩度接戰致し十津川鄕へ進入致候事

軍務方

城代格軍役方頭取 金澤彌右衛門　勘定奉行 小出平九郎

勘定吟味役 夏目源次郎　目付 三宅源五左衛門

目付 岡田甚太夫　同 葛西左平太

同 室內膳

右總勢百三十人余高野山幷橋本五條十津川之間に往來軍資周旋之外臨時救應致し候事

押之兵

城代格大寄合 松平八輔　先手物頭 中川信濃

目付 宮本作左衛門

右總勢二百人余大和國境領分有田郡山保田組上湯川へ出張致し候事

押之兵

小普請支配 畔柳甚左衛門　先手物頭 柴山又右衛門

目付 大澤(五)百次郎 (一本アリ)

右總勢百八十人余大和境領分日高郡へ出張致し候事

押之兵

先手物頭　中島吉兵衛

右總勢七十人余家老久野丹波守手勢申合勢州田丸へ出張致し候事

押之兵

大組　山中篤之助　先手物頭　筧　平三郎

目付　志賀彌三左衛門

右總勢百二十人余勢州へ出張致し候事

右之外水軍を以て長州より賊徒へ致應援との風聞に付加田以南海岸へ押之兵差遣候事

家老　水野大炊頭

右在所新宮へ罷越手勢を以口々相固宮社爲御警衛本宮迄出張脱走之浪士四人生捕先手大和及勢州路へ相進の候事

家老　安藤徹福丸

右所在田邊へ罷越手勢口々相固候事

文久三年亥十月

右壹通

一揆追討手續

八月十八九日之比天誅組と相唱候賊徒共百五十人計中山前侍從を主將と致し何方より歟泉州堺へ着船河内路を越和州五條を相襲御代官所亂妨櫻井寺へ楯籠り追々人數も加り兵粮軍器等取集候趣

注進有之候付不取敢少々之人數領分橋本邊迄差出置候得共賊徒共

勅命と申立候趣に相聞且京都よりは鎭撫可致と之　御沙汰に付其節差當り遲疑致し居候得共彌亂賊に相違無之段相見留且は其後京都よりも進伐可致と之　御沙汰も有之候付彌決定致し八月廿九日一の手柴山太郎左衞門之一隊同所へ押寄候處賊徒共同所を引退き天之川辻之山塞へ引籠り要害を賴木炮を居付柵逆木を設け陷穴切込石木之放ち物等切所に仕掛有之付踈忽に取掛り候ては不覺之儀も可有之付一旦右櫻井寺を宿陣に致し五條を鎭定致し居候處明る晦日同所二見村川向へ賊徒再ひ押寄候付炮戰を以擊退け九月三日同國中村へ亂妨致し可申謀知致し候に付同所出張同六日山險を凌き高野寺領富貴村へ出張いたし候事

一九月五日法福寺道龍之手外に津田楠左衞門之手高野寺領枝ヶ藪より富貴村へ押出し曉方兵粮を遣居候折柄賊軍不意に進み押寄鐵炮打掛候付此方より打出し一人賊首と覺敷者を打倒候處賊共肩に掛引去候に付同所山上へ陣取居候處同夜中數百之松火にて押寄來富貴村へ放火致し候に付此方も大小炮打出し候得共暗夜之儀命中候哉否は難相分味方も着衣具等に玉跡附候者も有之候得共怪我は壹人も無之事

信曰く法福寺隊は人數凡五六十人計臼炮三臺を携ふ服裝は白木綿筒袖背面に義烈と記し鐵鉢卷に袴を着け意氣凜々として登山せりと目擊の某語れり

一九月十二日一の手之内堀内六郎兵衞初法福寺道龍先に進み富貴村より鳩之首と申所之賊壘へ押寄候處賊兵共旗を飜し待掛居候に付大小炮打掛候處賊兵共不殘散亂いつれへ歟行衞不知付賊壘燒拂

鐵炮一挺旗一流分捕致し同十三日右人數之内大日川と申所之賊壘へ乘入賊兵一人討取四人生捕申候十四日兵を休明る十五日天の川辻巣穴へ可衝支度致居候處藤堂勢天の川辻へ進向之樣子斥候之者見切注進有之候に付直樣進發堀内六郎兵衞炮術指南長谷川大藏弟子法福寺道龍等先登に進み間道より押寄賊方防禦出張之場所白石嶽迄驀直に駈着其間二十間計に相迫大小砲連發手限及戰爭候處堀内六郎兵衞は指物持二之腕被打抜候得共ひるみ不申一同散々及苦戰賊兵矢玉盡き候歟遂に退走致し候に付駈登り賊壘を奪ひ天の川辻を纔に四五丁計見下し候處折節藤堂勢も本道より同所へ火を掛進登り候に付則人數差向候處最早賊徒は十津川奧へ引退候に付一旦高野山へ軍を返し夫より追々十津川山中へ進入候事

一賊徒勢州路へ切抜候との風聞有之候に付家老山高左近人數引纒同所へ罷越候途中同廿五日和州鷲家村に致宿陣候處前夜同村之內鷲家鄉と申所へ出張之井伊之手へ夜討有之右之賊徒猶山中に籠り居候趣申合越候付早速人數手配致し山谷を分ち探索致し候處果して浪士共打出候に付味方左之者共賊徒三人討留雜兵二人召捕分取之品種々有之味方的場喜一郎と申者右賊徒と及苦戰終に討死致し候事

一右一揆鎭靜に付十月廿五日諸手揚取候得共肝要之口々等今以張番差置有之候事

一金澤彌右衞門より報告書左の如し前記と參照以て詳なるを得へし

金澤彌右衞門

和州邊浪士一揆追討に付出張先對陣且接戰等之ヶ條左之通

但御軍役方頭取主役にて出張之事に付始終一騎立働候儀無之故誰々證人と之儀不認出候得共其場にて御目付中初諸役一同見認可有之候事

和州吉野郡天の川辻賊寨へ差向有之一の手柴山太郎左衞門三の手井關彌五助兩軍後援之爲物主左近殿へ隨從伊都郡戀野村迄進み諸隊之駈引豫備等取計九月十四日一三兩軍を以賊寨可相襲之筈評決に相成候比兩軍へ藤堂家より打合有之十五日同時に襲撃之約定に相成候處右十四日同家人數已に相進み候に付一三兩軍も致進發候處賊寨同家より燒拂候得共物主初高野寺領富貴村迄押行候處天の川辻へ同家屯集十津川鄕へも逆路遮隔に相成有之且寒の川十津川兩鄕へ賊兵追々逃散致候趣に付我藩御人數は右脫走之前途へ差向候方上策に可有之尤敵地へ進入に就ては數十里之切所兵粮運方手行爲取計第一之儀に付拙者附屬在方吉田源之右衞門神前丈之助且一の手軍學者妻木加左衞門へも利害申見させ夫是及評議候上一三兩軍を高野山へ先繰上け物主本陣を橋本驛に張り賊兵彌西南に走る歟或は東北へ逃歟之動靜を試らひ候事

一同十七日右賊兵之動靜も諜知致候趣有之先拙者一人高野山へ登り續て物主全軍を迎ひ同山口々を巡察し一三兩軍を同山大瀧口之嶮路より寒の川十津川兩鄕へ進せ同山警衞之坂西又六一と手又熊野路沿海へ繰出し猶又若府へ早使を以御談申上候趣も有之處宮地久右衞門同山へ御差向物主被　仰合之趣と致符合候に付物主全軍之內先鋒等之小隊を留め同山警衞に差置物主初龍神越之嶮路を熊野へ進發可相成處兵粮軍輸等不便宜にて押前却て遲緩に相成不都合之趣申立向も有之物主初一同三日分兵粮面々に相携ひ物之具も自身脊負候はゝ可然と諸隊へ可及敎示折柄賊兵

和州北山郷より勢州或は南都抔へ落行と之趣諜知致し候に付勢州川俣通熊野路へ押行賊路を遮隔して可追捕と評決し同廿二日全軍下山同夜橋本驛に一泊直樣勢州路へ進發之筈にて同廿三日全軍に先立御領分界待乳峠迄押行候比葛西左平太馬にて追駈來り今日進發之儀異論有之候間橋本驛へ立戻り今一應可及評議旨物主之命を傳へ候得共賊之動靜も難計候間前途へ差急候方可然と之儀押て申立右峠にて暫時見合候處無程全軍進發に相成同夜和州御領分越部驛へ着陣之節去廿日賊徒六七人外に人足十二人駕一挺具足一荷鎗一筋にて北山郷より宇陀郡宇陀邊へ脫走致し右は中山前侍從にても可有之歟尤其節御領分鷲家驛より一里外隣鄉を通行いたし候事に付大庄屋辻四郎三郎共趣聞込追駈候得共相後候趣に有之猶又北山郷より伯母嶺越追々賊兵相廻候由にて當驛に警衛之井伊家人數へ郡山邊に退舍之同家三の手人數差加り　公領鷲家口村且木津峠等へ（昨今）(一本ナシ)追々出張相成候趣大庄屋秋山次郎申出候に付同人を以井伊家へ爲掛合諜知之趣聞取其上地理諳熟之者呼寄承試及評議候得共賊兵可來筋へは井伊家より人數夫々差向有之此方より壓倒に相成候ても不都合に有之併鷲家（口）(一本谷)之儀は右鷲家口村より一里計上之手にて嶮岨相隔候得共敵路へも近く御領分之事に付他藩へ何等斟酌も無之此所にて策略も可有之と軍議相決し同廿四日未明進發鷲家驛へ着陣致し大庄屋辻四郎三郎呼寄承試候處昨夜聞取候通隣鄉要路は都て井伊家之人數にて警衛有之彌壓倒難相成候に付夫々見切注進之者差遣置候處鷲家口村井伊家陣所へ夜討有之趣注進に付全軍一同着具にて起立鷲家驛四面警固せしめ驛外東の方山手間道筋へ駒木根又助弟子銃手同下之入口へは吉川源五兵衛弟子銃手木津峠へ渡邊門九郎森彌太郎初銃手差

向け注進役松尾正作山本善藏兩人見切に差遣候處北山郷より脫走之賊徒右井伊家陣所へ襲擊致し候間及防戰賊首五級外に一人討殪し其余驅逐し最早賊徒一人も無之同所は人家少く候故臨時に兵粮炊き行屆兼居候趣正作等申出候付物主急に命令ありて此方に用意之兵粮取整させ再ひ正作善藏を以て相運候處同藩船橋吾人應答に出深く奉謝候趣申述候由前件之次第に付同所へ援兵差向候にも不及此上は山谷に賊徒逃込可有之哉探索之爲同夜より同廿五日銃手之人數鷲家驛近邊山々探索致し候折柄同驛より東南三四町計山林に疑敷者一人徘徊致し候儀谷越乾度見留候間奥村立藏申出吉田源之右衛門神前丈之助等申合させ猶又物主御手人をも差加嚴敷驅立させ候處勝野五兵衛弟子一隊鷲家峯を越て二十四五丁伊豆尾村十一丁計手前に一旦潜伏して伺察するに人足躰之者兩人來り候付召捕及詰問候處天誅組より人足に役せられこねと云所迄荷物を荷ひ只今歸り之由右浪士等は伊豆尾村庄屋方に有之趣及白狀候に付右庄屋居宅一丁程手前より鬨を揚て連發巳に近寄鎗を可入時主の庄屋成者飛ひ出候に付召捕候處過刻浪士來り今日宇陀へ可相越之處右途中へ紀州之人數に迫られ此風体にては難遁候間武器類預け間道へ之案内相賴と之事にて若彼是申立候はゝ家內夷滅せらるゝの勢に付無余儀任其意候旨申候に付右預り置之武器類分捕致し又二手に分れ双方より萩原村へ間道を押行岩本谷迄至り候處宿駕一挺見受候に付銃發鎗を入候處其中空虛に候得共いつれ近邊に潜伏可有之と其邊草叢へ連發遂に一人之賊徒を殪し得て右駕に乘せ來る此賊は總裁松本謙三郎に有之扨又渡邊門九郎初之銃手は鷲家驛より十二三丁計東にて大庄屋辻四郎三郎一と手に出合山谷を探索するに遙に谷を隔て人影を見留五十目玉を

初小銃無數打立木津峠へ向ひ進寄候處俄に炮響有之敵か味方か試らい見るに井伊家の人數に付則互に探索之模樣打合せ是より先途は同家へ任せ近邊之山谷を彌及探索駒木根又助弟子は最初鷲家驛東出口より二三丁龍泉寺之傍にて門九郎等之砲發を聞共に砲發續て門九郎等に追付間道を固め猶又南出口へも廻り小橋を渡り二丁計往て鷲家口村へ之間道を固め一旦本陣へ揚取宇治田石右衛門弟子銃手且物主御家來松村六左衛門手之銃手は鷲家驛より十四五丁東に出伊豆尾萩原南村へ之間道且中街道へ之間道四辻に在て合圖を定め夫々へ分れ探索するに六左衛門手之銃手之内人影を見留味方へ知らせ一同心得八方に分れ打立に具足一領外に荷物一荷林中に捨置たるを分捕し彌探索する中に宇治田石右衛門弟子之銃手的場喜一郎同隊を離れ只一人林中へ進入候處賊徒を見留四辻より一丁計本街道進出賊徒兩人討て出るを待受進寄及炮發候得共丸中無之已に敵相迫候付刀を抜合致苦戰候得共數ヶ所之深手にて及討死本文的場喜一郎は十八九歳にて苦戰いたし候を同村之者家之内より覗居候處賊徒兩人打出候節喜一郎之外に味方も有之候處不殘逃去候に付喜一郎も早く逃れは宜き手に汗を握り覗居候處喜一郎少しも恐れ候樣子無之兩人に向ひ切て掛り及接戰候得共賊大之男にて兩人に切立られ終に討死致し可惜若者誠に惜き事といつれも申合ひ候由賊兩人は刀を振り本街道を驛內へ驅來候を村越増右衛門見受注進に付拙者初同宿之面々幷家來共進て可討取と起立候處へ賊一人兩刀を振廻し續て又一人同く驅來を家來坂部甚藏右六間進て銃發致し候得共人家之軒下へ逃避し直に甚藏へ討て掛る同人銃を投捨鎗を合候得共淺手負鎗を取落候處立花匯齋取支へ是又淺手負家來高田熊助銃發致し候得共丸中無之賊は兩刀を振て同裏家甚七宅表口より驅入直に二階へ飛上り掛候に付奥村立藏鎗を以支へ續て栢木國助椎川三十郎鎗を入其外一同突立候に付表口へ引返し候處駒木根又助弟子銃手瀨戶八十輔驅來炮發致掛候儘

鎗を投棄無二無三に組付淺手負なから挑會候處へ川上七郎駈來鎗を以突留る今一人は表口より飛入候時甚七所持之長押に有之鎗を手早く取り裏座敷へ廻り林楠之丞へ突掛り同人淺手負鎗を握り引合折柄寺社分陸尺利右衛門二階より死の様を打賊は鎗を放して表座敷へ飛入一同四面より討て掛る處へ川上七郎家來花光伊右衛門駈來鎗を合續て甚藏左より飛掛り刀を以腮より肩へ七八寸切下け討留る其節甚七宅表口より銃手等駈付家內へ連發致す右討留候賊は總裁藤本津之助主從に有之尤物主は本陣を被出臨機之指揮有之此上不意に山谷より討出候儀も難計殊更當驛地理甚不要害にて溝川筋三ヶ所へ柵を爲結警衛且探索被申聞及暮候に付山々谷々二十ヶ所余にて篝を焚かせ物主初役々打廻り終夜野陣を張り夜を明し同廿六日にも滯陣にて時宜に寄進擊之心得に候處隣鄉は井伊家より警衛致し御領分鷲家邊は最早賊徒潛伏無之徒に在陣之場にも有之間敷且熊野勢州路より却て橋本驛邊は賊徒脫走も難計趣追々內聞有之付全軍一旦同驛へ揚取相成將又若山表より兼て申合越候趣に付て昨日一戰捷報之儀等是非一應及口達且御料簡相伺可申品も有之長坂主馬申合賊首三級分捕品等夫々爲認早駈にて橋本驛迄罷越同廿七日引纏人數等同驛へ殘置早駈にて　御城へ罷出晝夜詰切同廿九日午尅御城より直に發足十月朔日橋本驛着同九日高野山へ相登御人數揚取等之儀及作略同十日下山橋本驛着同十一日岩手驛迄揚取候處若山より被仰越候品有之猶又直に橋本驛へ相詰同廿九日若山へ揚取候事

本文鷲家驛より橋本へ揚取候儀無謀之樣に相聞候得共同所邊御固之儀は素と井伊藤堂家より人數配有之此方に於ては熊野路より稻葉彌左衛門嚴敷押來り候に付一揆共いつれへ打て出候

も難計御人數半分高野山へ爲固殘置半分通引連物見と稱し川俣通熊野路へ押出し候積にて先月廿三日越部一宿之節同所秋山次郎申出候には廿日比鷲家口村より六田邊へ浪人六七人脱走之趣右に付井伊家人數追々鷲家口村へ出張之趣も承知翌廿四日鷲家驛へ到着致候處同夜鷲家口村井伊家固場へ夜討有之趣寅之剋比注進有之急場へ行掛り且御領分鷲家驛之近村にも有之旁廿四日夕より廿六日朝迄井伊家へ援兵之心持にて滯留之折柄總裁之者兩人討取此上我手より探索致し候ては井伊家へ壓倒之姿に相成將又橋本驛より繰出し有之御固所も夫是無心元候付井伊家へ打合之上一と先同村へ揚取及評論候手續に候事

十月

討取召捕候賊徒左之通

賊軍總裁之由　松本謙三郎

右之者九月廿五日於鷲家村山中山高左近之者鐵炮にて討候事

賊軍總裁之由　藤本津之助

右之者同日鷲家村へ討て出候付川上七郎家來若光伊右衛門と鎗で合金澤彌右衛門家來坂部甚藏と申者刀にて討留候事

賊徒一人　姓名不詳

右之者津之助同樣討て出候節炮術方瀬戸八十輔と組討候處川上七郎鎗にて突留候事

同一人　同斷

右之者九月八日津田楠左衞門家來大野木俣と申者外兩人召連高野寺領天狗見之陣所より見切に出候處途中中原村にて二十人計の賊に出會其中頭取躰之者一人討て出候付召連候者鐵炮を打掛候處中り不申木俣直樣相進討留候故殘兵不殘逃去候事

右之外和州永田村安兵衞と申者賊徒高取へ押寄候節及ひ大日川にて藤堂勢と戰爭之節格別に相働候者之由相聞候處九月十三日大日川へ責寄候節殺戮致し申候

外に攝州池田村朝七と申者賊之間者を相働候に付八月晦日和州二見村邊にて召捕申候其他雜人共夥敷召捕候得共別段認出し不申候事

高野寺領筒川村住高野山三方院納所學侶方俗役人　山本實之助

右之者和州十津川出生之由賊徒へ致内通味方を襲擊之策有之趣相聞候に付高野山内にて坂西又六出張持明院へ呼寄津田楠左衞門一と手之内にて召捕候事

本多伊豫守領分河州錦部郡長野村米屋吉兵衞事　東城庄之助

河州石川郡富田林村百姓甚右衞門悴德次郎事　中村次郎

右九月十八日和州十津川鄉より紀州牟婁郡口熊野々中村間道にて召捕候事

松平主殿頭家來常府　保母建

松平伊勢守家來常府　船田彦次郎

板倉周防守家來龜太郎事　原田一作

大久保加賀守領分河州法善寺鄉士兵左衞門悴　田中(梓)[一本梓]之助

松平美濃守領分筑前三笠郡隈村鄕士
吉田重藏

河洲石川郡富田林村
爲次郎養子
辻郁之助

本多伊豫守領分河洲錦部郡早田村鄕士
水野小隼人

小隼人倅
水野英太郎

右九月廿三日日高郡山地組小又川村幷同郡坂本平にて召捕候事

討留

土州安藝郡羽根村九藏倅
嶋村省吾

右之者九月廿八日鷲家村大庄屋辻四郎三郎ゝ申者土兵召連殘黨探索之節於小石村討留候事

右東墟庄之助初拾人之者共夫〻一ゝ通吟味取計有之候得共先達て不殘京都町奉行中へ差送り有之者之儀に付其品別段認出不申候事

本多伊豫守領分河洲安宿部郡
嶋川清三郎

同
同向田村
浦田辨藏

右之者共家老水野大炊頭領分にて召捕一ゝ通吟味爲致候處一揆頭立候者にても無之無余儀連累之者之由申立候に付京都へ差出否之儀同所町奉行へ爲及掛合候處差出候に不及旨挨拶有之候付恩威相立候樣申諭候上追拂候事

右之通幕府へ提出

一九月廿日大和國御代官支配所當分之內御當家へ御預被成候旨　幕府より被　仰出

右に付小出平九郎（御手筒頭格御勘定奉行申談勤）へ右御預所御用重に相勤當分同所へ引越可勤旨同月廿一日に被命たり

一同廿八日御預所爲受取下役召連同所へ出張すへき旨左之面々へ達す

御目付　室　内膳

小出平九郎

御勘定吟味役　大藪新右衛門

一九月廿二日水野多門御役御免知行三千石之内千五百石被召上屹度愼可罷在旨被命

一同月廿八日大和國御預所大御番頭初一組可被差遣旨御書物方頭取へ達す

概略右之如くにして漸く平定に歸したり本記之外賊徒姓名錄及ひ十月十日十津川鄕鎭靜巡行して京師より御使被遣諸藩警衛人數高野山へ登山に付取計方且藤本津之助松本謙三郎所持品分捕等之事ありと雖略す詳なるは世史二十八卷に載す

一同年十二月六日和州浪士一揆追討被　仰出速に士卒差向加征殊に頭立たる者共を打取不日鎭靜之條

叡感不斜猶可慰士卒忠志被仰下候事との御賞於京都傳奏野々宮殿より御書付被渡

一同月廿八日大和出陣之山高左近御使番川上七郎大御番組頭堀内六郎兵衛戰死の御徒的場正左衛門一類及ひ藤本津之助を討取たる芝御藏手代左五郎悴瀨戸八十助金澤彌右衛門家來坂部甚藏川上七郎家來花光伊右衛門等へ恩賞を行はる世史に詳なり

一元治元子年四月廿八日大和國賊徒追討の御賞として　公方樣より御鞍鐙御拜領被爲在

御人數之內戰死の者へ御賞して銀二十枚被下旨仰出さる
山高左近へは御賞して時服三拜領被　仰付たり
一同年二月五條御代官所へ援兵の事左の　幕命ありしを以て警報の時は國內非常準備一二三の手を差向けらるへきに決す追討と別事と雖も節に因て附記す

紀伊殿御城附へ

中村勘兵衛御代官所和州五條表之儀此後萬一異變等有之節は援兵之儀勘兵衛より申越次第急速御人數御差出被成候樣兼て手當被成置候樣可申上候

右於江戶閣老被相渡之勘兵衛は鈴木源內の後任者なるへし

一大和晃徒の人名及び殘黨京師の獄に繫かれ翌年二月十六日十九人死罪に行はれし事等世已に詳記せり其內の一人於獄中竹皮を以筆さなし自書さいへる一篇世に傳ふるもいあれさも頗る厭ふて揭けす畢竟大和一揆の起因は攘夷の僻見に迷溺併せて倒幕を企しもの也　抑昨年六月　勅使大原三位東下　將軍諸侯を率ひて上洛攘夷を議すへしさ迫り十一月には三條實美を　勅使に下し早く攘夷を決し諸侯に布告せよさ責め更にも角にも京師は尊攘浮浪過激の徒公卿を煽動專橫暴行を逞ふし長州の勢焰は洛中を傾く當春　將軍家上洛の末遂に攘夷の　勅を止むを得さるに奉戴諸侯に布告し東歸し給ふ於是總裁春嶽侯は周旋にて諸國一橋公は將軍家に代り攘夷の所分をなすへしさの命に　關東下向さ覺悟より行わるへきに非されは表を捧けて後見職を辭せらるる時に英國公使は生麥殺害件償金の要求を嚴談重せされは忽ち開戰に及はんさ主張又長州にては攘夷期限也さて五月十日赤間ヶ關通航の外國艦を突然砲擊攘夷の實行を爲たりさいふより京師の攘夷家は勢益氣焰を極め頻りに　勅諚を擁保し洋艦さ見れは有無をいはす擣擴砲擊せよさ公卿を嗾教さなりて諸藩の奮揚を督迫其狀狂犬の人さへ見れは嚙付んさするか如く過激暴戾停止する處なく果ては　御親征を請ひて大和行幸を企是機に乘し大和に事を舉んさ謀りしもの也夫れ晃徒等の滿腔は飽迄攘夷鎖國を皇國無二の盡忠さ認め開國和親を唱ふるは不共戴天の國賊大奸さ信したるは近時北淸の義和團匪に髣るる攘屠そ而して今や邦人團匪か自から其國家を危ふする事曖昧愚を嘲て措かす若し團匪なし、貴國我を嗤ふさ雖も當時貴國に其人ありさ知られ而かも國務大臣の歷々者中にも我

流の泰斗と仰くへき壁行大人現存に非すやと詰問を受けなは必然顔色なかるへしと思はる然るを今日日本の開進を單に持て生れ出たる如くに誇稱する者なきに非す偶々團匪の事あり感慨禁しかたく聊贅言を附記す

大和浪士獄中の書　（一本此の項なし）

五事の患起てより今に十二年天下議論紛々として和戰歸着大に艱めり然るに今日に至りては幕府和親交易を主とすると云とも朝廷日々謀議し玉ふ處は只戰の一途にして攘夷の外に議論有る事なし去れは是非なく　幕府にて其實は行はすと云へ共既に表立攘夷の布告も有し上はたとへ斯期限を誤り歳月を因循すると雖表は　幕府も攘夷の論に歸着す去れは天下今日にては最早和交の論を主とする者は有間敷きなり然るに　幕府の攘夷は只表に立たる而已の名目にて悉皆欺罔の奸計なり其二三を云んに先善もあれ悪しくもあれ此十余年攘夷の　叡慮は普天率土に照り渡りて白日の照明たる如く匹夫匹婦に至る迄誰一人も知らさる者なければ初めは和交を非議とするは暴威峻刑を以て必殺を事としたる程の　幕府なれとも天下億兆には隱れさる事を奸察し其上一昨冬　勅使三條姉小路兩卿關東に蒞んて掃攘の嚴　勅を行はれしにより少も狡猾詭詐の幕吏輩も堂々正々の兩卿に畏伏せられて是非なく攘夷の　勅詔を名にはかり尊奉せり但期限は　將軍上洛の上　言上を名として其場遁に　勅答をしたりけれ共元より到底奉　勅の意はなく纔て一橋越前上京やかて　將軍も上洛せり偖期限の事段々評議ありて彌期限一決して五月十日と治定せり無據　幕府より其由諸大名を始め滿天下へ布告して万々末々の者迄此十日を攘夷の期限と云事飽迄承知せり去は長州抔は既に此日を誤またす攘夷先鞭を着けたり然るに　幕府今度の期限依然たる欺罔にしてさきに水戸中納言將軍目代の命を蒙りて東下しつゝいて一橋中納言重き　勅命を奉して攘夷の爲迚下たるか江戸へ着するや否や唯一言大小幕吏一人も同心する者是無しと云を以辭下して即今迚も攘夷の事行れ難く其のみ成らす英夷贖金の事は縷々　朝廷より仰含られたる趣をも用ひす又小笠原圖書頭獨斷と云名を以て渡し與へたり此水戸一橋抔云人々　將軍一族連枝の身として何より重き攘夷の　勅命を帶ひ將軍の代官として　勅詔を奉行せしに幕府役吏同心するのせさるの論あらんや是程の大義よし同心せさらんには立所に兩三人を誅戮して違勅の罪を正さんに臆病第一之幕吏聾肢慄して　勅意に遵奉すへし然るをゝめ／＼と同心する者なしと云て討死を覺悟して東下なしたる程の一橋實に此一擧にて千万歳の國体維持すへき無此上大切の　勅命を辱めて事濟むへきや婦人小兒と雖も其不可なるを知るこれ程の筋合を辨へさる一橋水戸抔にあるましさすれは是れ固より悉皆詭詐の謀略より出たる事にて同穴の幕吏不同心をも正さす不知顔して天下を愚にする手段なり如此奸智幕府中の人の最も長する也去れは此より先に總裁春嶽の出奔も老中小笠原の東行も皆引通相計たる詐策なり偖此の一橋の言上五月十九日到來して則ち翌日　奏聞有　朝廷にても殊

の外御憤りにて　朝議夜に入り姉小路殿退出の途中にて賊殺せられて卒去し玉ふ事共あり此も又大に疑はしき事たり偖將軍余り　朝廷へ申譯無を口實として自ら小田原迄發向し一橋水戸召呼關東の情實糾し奸吏共を罰し速に攘夷の成功を　奏聞すへき由を疏しやかに申し望めり假令一橋水戸は　朝廷を欺く共　將軍自らこゝに奮發せんにはよも詭詐の策略にはこれ有ましきとて是を許容せられたり扨又此時小笠原圖書頭關東にて攘夷不行事實　言上の爲逆火急に上京せしか内々不容易大逆の密策有之由水戸家來會津家來より忙言上により伏見より追返され淀に滯留其内情彌無紛に付速に可處嚴刑旨幕府へ　仰下されしに幕府命を奉せすかりに大坂城代に預置たり小田原迄下向の上奸吏共罰し可申旨　言上しなから眼前小笠原の如き大逆賊を嚴刑の命を正さす是不信の事により偖既に攘夷に從事するに於ては忽に夷船接海に入冦も計り難京都の近要武備の手薄にては叶ひかたし是又自ら斷擒して偖後に東海道より發向の旨　言上にて六月九日計ひをほせて先つ大坂へ發向し俄に蒸氣船にて江戸へ脱走せり　將軍に於てはよも左程に詐はりはあるましと思の外其十六日歸府して高枕安眠せり意外と言も余りの事共也又小笠原來月到り大坂より江戸へ脱走せしよし幕府の主從

此間憚る事ありてか元本に拔き在之

かくの如き詐虚欺罔詭詐商策のみにて眞實奉　勅の意毛頭無之事鏡にかけて見より偖明了たり初より攘夷　詔勅を拒んて奉せさる時はさし付て違　勅の罪のかるゝ所なく天下億兆目前する所如何共しかたければ先つは攘夷の事奉　勅の名を標し天下の耳目を愚にしてさてかやうに千變萬化一日々々と其時違に因循遷延して其内には時を得折を伺ひて如何樣とも嫁謀詭計を以て朝廷を愚し奉り正義を陷害し　聖聽を欺蒙し奉り果は横濱のみを鎖港して東西兩港とか長崎一港とか或は交易渡來は停止して、外夷　朝貢とか偖此外にもいか程も名目を替へて終には攘夷の　叡慮を立こかしに誑ひ奉る新三幕四の故智を用る内心今より見へ透たるを其素謀なかくして聽と表ては攘夷名目を標て武備の談判いと期限を延し以て行か幕府眞面目にりさて幕府の素謀如此い上徳川氏征夷使たらんはさは決して攘夷の大義行はれさるまし抑外寇の事最初癸丑年墨夷來航の時より既に確乎として立させられたる　叡慮とて　朝議とたとに天地淪落すとも攘夷の　聖策か變動せらるましければ十余年間段々事を分け手を盡して　君臣和の名目を立て飽まて徳川氏をして攘夷い　詔勅を施行せしめらるへきとの　朝議實に三百年來無操御付託なしなかれたる手續を以て幕府中立させらる何所迄も不臣違　勅の逆節を効させましくとの　思召なるを却て彼より好てその思召離れ奉り謂ゆる君臣御合体と云名目を彼はすてゝ只外夷と合体して器械風俗まて彼を師と尊み我國の眞武をすてゝ不用よく〳〵武運に盡果たる徳川氏なるを偖も委任武將と　思召賴ませられたる深重至厚の　叡慮を露有かたしと思はてかほと至大

天恩を仇を以て視奉る幕府の心腸と名附言はんやたとへかたく徳川氏を　思召はとてこの上　祖宗の天下に代させられかたしとすれは幕府いかほと外虜と親めはとて其儘におかるへきや於是は斷然として開港攘の外夷を　親征せらるへきの外は有間敷若外虜親征御旗一たひ動かは徳川氏とても今日の罪名と云ひ從來天下を我物に成したる不臣の罪は自らのかれさるを知るへし是則　朝廷攘夷の大義上徹下確乎として動かさる處の　御決策なるへし故に幕府の恐るゝ所は只　親征の事なりとてこの　親征の議を專ら主張せられたるは三條公長門參議父子とゝり幕府より此人々に目を注ゝ始終　朝廷の爲め眞忠を盡さるへきはこの卿此家と云ふ事熟々奸察したるなりとて如何成秘計密策の行はれしにやさしも精忠無二の此卿報國一途此家忽ちに斥罰せられ剩へ三條公以下の人々は庶人に廢せられ長州の野心を以て目するに至る事かけにも有ましき事なり是にて　親征は姑く息みたり然れ共　朝廷攘夷　御決策は少も動かせられまじく然れは　親征の御結局は明瞭たる事にして是れこそ天下臣民共に畏みたる　光明至大の　叡慮なりされは今日　將軍再上洛し　親王大臣要路にあたりて共々に一時如何成評議謀略ありてこの十余年間　朝廷にて維持せられたる攘夷ゝ大綱紀一たひ弛ふとも眞實欺くへからさるの　叡慮は前に論辨せし如く又幕府如何に面をかへ顏を改めゝ如何成新議を以ゝ欺とも攘夷の念は秋毫もこれなく只々　天子聰明をくらまし奉り天下の正義を斥んとの險謀狡詐なれはゆめ〳〵見混へて大議を誤る事勿れ

天津日をおほふ大樹もしはしにてつひに枝葉も枯はてぬへし

天津日の御蔭によりて榮ふとは知らすや松のしたりかほなる

右者於獄中以竹皮爲筆認之

長州征伐一

按するに元治元年七月長州（松平大膳大夫）の臣國司信濃益田右衞門介福原越後等寃を訴ふと稱し兵を率ひて入京せんとす　文久三亥年八月十八日長州攘夷論　暴徒公卿と謀り大和　行幸を企攘夷御親征を名とし討幕の旗を擧んとせしに　朝議忽然一變長州父子　勅勘を蒙り七卿を誘ふて國に遁る爾來長州人入京を禁せらる此事深く憤懣皆廟堂の奸臣　勅を矯め主人を不義に陷らしむ故に其寃を　闕下に訴ふる也と聲言したり

朝廷幕府百方誠諭する處あれ共更に服せす益兵を進め嵯峨天龍寺山崎に據り遂に十九日を以　輦

下に亂入　禁闕へ發炮す於是會津薩藩を初諸侯の兵奮て討伐長兵大敗走り逃れ洛中悉く兵燹に罹る　朝廷直ちに征討の　詔勅を下し幕府天下に號令尾張前大納言卿を總督大將に命し征長の事を擧く總督府は藝州廣島に臨み其罪を糺す此時諸侯の兵は四境に迫れり長州大に懼れ三反臣の首を斬て軍門に謝し大膳父子寺院に蟄居罪を待つ於是總督府復命して兵を解き處置を幕府に委す之を長州初征とす然るに幕府の閣議總督之處置を不滿とし論議紛擾長州亦内亂起つて國論一變竊かに軍備を整へ兵器を外國に購ひ陰に薩藝等と合同專ら防戰に汲々たり幕府之を聞て再征の兵を起す此時親藩列侯其不可を建議する多しと雖も幕府之を納れす而して江戸京師の閣議多くは差惑遂に將軍家進發大軍華城に淹留將士皆鬪志なし偶英佛米蘭の軍艦攝海に入り先期開港を迫る　朝廷惑亂論議鼎沸將軍家辭職東下の議を惹起す此際頻りに長州父子乃至老臣末家を召せとも時機遷延の策を取て一つも應せす勢ひ問罪の師を向けさるを不得に至りしも討手の大藩概ね離背傍觀就中薩州は公然抗命の書を捧け逆徒の激文を諸藩に傳へて不逞を表示す既に開戰を令して井伊榊原は戰はさるに敗れ石州路大敗濱田落城小倉亦陷る孤軍固く守て屢勝を制せしは獨り我か大野の軍あるのみ夫れ征長の事前後三年に涉り征討の大軍一歩も敵地を踏む能はす斯る國難の折に加へ　將軍薨去　主上崩御天地は俄然闇黑世界と成り果干戈終に熄みたりと雖我德川氏に在ては假令は彼の關ヶ原役反對の地位に立しと一般にて爾來幕府は日に月に否運逆境に陷り終に戊辰の變あるも皆此一擧に胚胎せさるなし實に德川史上輕々視すへからさるものなり長州征伐之事世記既に編述せるも彼れは專ら本藩に係るを主とし他は略する處あり軍制を編するに當ては御總督上總して軍事

の態勢を掲けさるへからす故に細大蒐錄すと雖も尙資料に乏しく遺漏亦尠からす或は世記と重複を免れす乃至折中節略宜しきに從ふものあり

一元治元子年七月廿三日長州征討の　勅書出る

松平大膳大夫儀禁入京候處陪臣福原越後を以て名は歎願に託し其强訴國司信濃益田右衞門介等追々差出候處以寬大仁恕雖扱之更に無悔悟之意言を左右に寄不容易意趣を含既に自ら兵端を開き對禁闕發炮候條其罪不輕加之父子黑印の軍令條授國司信濃全軍謀顯然候條旁防長に押寄速に追討可有之事

右　勅書を幕府へ下し賜ひ長州の父子の官爵を剝奪猶　有栖川親王鷹司殿父子は長人を庇保せられし廉を以て入朝を停め給ふ幕府亦長州松平の稱號幷將軍家諱の一字を召上らる

一同日京都閣老を以左之通り被　仰出

紀伊中納言殿

前文　勅書全文略す

右之通り從

御所被　仰出候付大坂表御固之儀は是迄之通御心得只今より堺表へ御人數御差出軍備嚴重相立大膳大夫以下罷登候者有之候はゝ速に誅伐可被致候尤御固之儀は大坂表は松平讃岐守井伊掃部頭松平土佐守西の宮は藤堂和泉守酒井雅樂頭松平遠江守兵庫表は松平兵部大輔松平修理大夫堺表は岡部筑前守被　仰付急速人數差出候樣相達幷從

御所被　仰出候趣も相達候間夫々へ御指揮被成候樣可被申上候

一七月廿四日諸藩討手左之通被　仰付たる旨閣老より渡す

松平相模守
阿部主計頭
松平修理大夫
松平右近將監
板倉周防守
伊達遠江守
立花飛驒守
松平出羽守
松平安藝守
細川越中守
龜井隱岐守
奥平大膳大夫
松平美濃守
松平肥前守
松平備前守
松平阿波守
小笠原大膳大夫
脇坂淡路守
松平隱岐守
有馬中務大輔

長州征討　勅諚略す

七月廿三日

右之通從

御所被　仰出候に付御追討有之候間速に軍勢國許へ相揃置差圖相待可被申候尤從彼妄動致し候は丶不待差圖口々より撃入誅滅可被致候

但寄手之攻口幷攻懸候日限は御決議次第可相達候事

一八月六日於江戸牧野備前守を以長州御總督被　仰出

松平大膳大夫家來共兵器を以奉劫

朝廷不屆至極に付速に御征伐被成候付ては諸大名へ追討被　仰付候依之紀伊殿には今般被　仰付候諸藩之總督御心得諸事御指揮被成候樣尤松平越前守副將被　仰付候間被　仰合早々御追伐可有之旨被　仰出候段本多能登守上京之節相達候筈に候間爲心得相達候

一諸道攻口左之通りと被　仰出

山陰道　石見國へ參集

一の先「因州鳥取三十二萬五千石」　松平相模守

二　「石州濱田六萬千石」「石州津和野四萬三千石」　松平右近將監　龜井隱岐守

中軍（一方を統る）「雲州松江十八萬六千石」　松平出羽守

後備「作州津山十萬石」　松平三河守

遊軍「作州勝山二萬三千石」　三浦備後守

山陽道　安藝國へ參集

一の手「安藝廣島四十二萬六千石」　松平安藝守

二　「備後福山十一萬石」「備中足守二萬五千石」　阿部主計頭　木下備中守

三　「備前岡山三十一萬五千二百石」　松平備前守

中軍　總督　四道之總軍を統る

後備「備中松山五萬石」「播州龍野五萬千八十九石(余)（一本ナシ）」　板倉周防守　脇坂淡路守

四國 伊豫松山へ參集

一の先 「阿州德島二十五萬七千九百石」 松平阿波守

二 「伊豫宇和島十萬石」 伊達遠江守

中軍 「伊豫松山十五萬石」 松平隱岐守

後備 「讃州丸龜五萬千五百石余」「伊豫今治三萬五千石」 京極佐渡守 松平壹岐守
一方を統ろ

九州 筑前へ參集

一の先 「薩州鹿兒島七十七萬八百石」 松平修理大夫

二 「筑前福岡五十二萬石」 松平美濃守

三 「筑後久留米二十一萬石」「筑後柳川十一萬九千六百石」 有馬中務大輔 立花飛驒守

同 小倉へ參集

一の先 「肥後熊本五十四萬石」 細川越中守

二 「豐前小倉十五萬石」 小笠原大膳大夫

三 「豐前中津十萬石」 奥平大膳大夫

四 「肥前佐賀三十五萬七千石」 松平肥前守

長州御征伐に付ては書面之通相心得去月廿四日相達候國許へ揃置候軍勢致進發來月十日迄に屹度其所へ參集可被致候

但人数多少之儀は高に應し精兵强卒差出雜人は可相成相省可申候

一八月八日長州征伐御總督被　仰出

於江戸紀伊殿家老衆へ

松平大膳大夫御征伐に付總督之儀紀伊中納言殿へ可被　仰付義之處　思召之御旨も被爲在候に付尾張前大納言殿へ被　仰付候間爲心得相達候

一八月廿一日長州征伐御進發之節御旗本御後備被　仰出

左之上意書於江戸阿部豐後守を以被　仰出

紀伊中納言殿

松平大膳大夫爲御征伐御進發之節中納言殿には御旗本御後備御心得被成候樣被　仰出候間格別被盡忠勤候樣にとの上意に候

（一本ナシ 右壹通）

本多美濃守

松平丹波守

內藤備後守

松平大膳大夫爲御征伐御進發之節御旗本御後備被　仰付之

右之通被　仰付候間可被　仰合候

一八月廿五日長州征伐　御進發御供御出願

公方樣御進發被　仰出候付客數華城守衞而已にては此度之大擧に洩れ武門の身に取り不安次第殘念之至に付攝城守衞は嚴重に備へ置御供御先鋒を奉畏度との旨也
（一本ナシ全文世記に掲く）
一九月十日初て御軍時奉行を被置小出平九郎津田楠左衞門に被命
右大坂城に於て拜命兩人は共に御書物方頭取にて當節軍制改正御用を被命同所天神橋邸別局にて取調中也
一同月征長に付一と手之御人數別段御差出被成度旨於江戶御願立之處十月十三日を以御尤之儀に付早々石州路へ人數御差向委細尾張前大納言殿へ被仰合軍目付へも御打合被成候樣にと差圖あり
御進發御旗本御後備被　仰出候へ共右之外に一と手の人數御差向臨事の御用相勤させ度昔年天草一揆之節も一手之人數被差出候付て之御願意也
一九月十九日御出陣御手配之儀御家老初諸頭役々へ御直に被　仰付右已下夫々へは御軍奉行申渡す
御先手總督は安藤飛驒守に被　仰付たり
一出陣心得書を布達す
今度御出陣に付若山より大坂へ御呼寄之面々へ於若山左之通布達す
一兵具雨具干飯吸筒等之外無用之物相省き成丈け身之廻り輕便に致し可申一手之物主と雖も弁當幷茶辨當等不可所持兵粮水筒自身腰を不可離事
一衣服之儀具足下或は常服にても勝手次第相用ひ袴は裁付又は伊賀袴取交相用不苦事

但陣羽織用意致し可申火事具禮服は用意に不及事

一着具之儀は具足鎖帷子其他面々之好みに任せ勝手次第之事

一指物之儀用意致候に不及臨時に一統へ袖印相渡候事

但頭幷組頭及頭役御供番其外諸同心之儀は指物用意致し可申事

一人夫渡し方之儀是迄よりは省略致し統て組付之筋五人に兩人爲小遣人夫相渡候筈に付下人は一切召連申間敷事

一物主初頭組頭之分及御供番は人夫不相渡候付武具器械等下人に爲持可申事

但無用之下人召連申間敷事

一諸役所勤之向一人役之筋は一人に人夫一人相渡り候儀も可有之候得共仲間有之筋は成丈け組合他役にても組合候て差支に不相成分は組合之上右之割を以人夫相渡り候事

一御年寄之外駕籠釣らせ申間敷事

一九月廿三日大坂城御發途廿四日若山御着城

將軍家御進發之節は華城へ御入城に付ては幸橋天神橋邸之內へ御轉可被成處手狹にて多人數之勢揃ひも難成付一旦御歸國總軍之駈引等御試み　將軍家御着坂之節御上坂總軍は御國許より繰出し尤先陣は無程繰出すへき旨前以　幕府へ御達之上本記の如し

一十二月廿八日毛利大膳父子伏罪に付諸軍陣拂之儀御總督尾張前大納言より布告し給ふ

御家より之出兵は翌年正月八日藝州陣拂同十六日若山へ歸陣す毛利世子長門は既に兵を率ひて

多度津へ到り敗報を聞て急き陳謝の書を奏し尙七月十九日の事は全く父子の知らさる處仍て三人の者は末家に押籠め父子謹て國に蟄居罪を待つの意を再應陳謝す適々英佛米蘭四ヶ國の軍艦長州へ向ひ戰端を開く此厄に乘し討伐は武門の道に非すとの議あつて時日遷延十月に至て尾張越前の兩總督は大坂城に諸侯を會し攻伐の策を議せらる西鄕吉之助旨を受て岩國に赴き吉川監物に就き大義利害を說きたるに監物大に服し山口に至て大膳父子を說得す此時に當て討手の諸侯は兵を率て四境を圍み既に長防二州を呑むの勢ひあり十一月二日吉川監物は家老吉川結城を使して降を總督の軍門に請ひ十二日福原益田國司三老を斬り首級を呈して謝罪す十九日總督府は長州父子及三末家伏罪の誓書を徵し脫走五卿を薩筑兩肥久留米の五藩へ分配山口城破壞萩城開散の命を傳ふ十二月五日各藩を總督本營に會し長州處置の意見を謀るに各說ありしと雖も結局十二月五日長州父子は家老毛利隱岐を總督府に出し悉く如命奉行の旨を告け伏罪の誓書を捧く於是總督府家老石河佐渡守及ひ幕府の監察戶川伴三郞に監視を命す兩使十九日山口城破壞の狀を監査し廿日に萩に至て實驗を行ふ長州父子は菩提所天樹院に蟄居其夜世子は佐渡守の旅館に來て自ら罪を謝す兩使廿七日廣島に歸て二州全く鎭定の旨を復命依て總督府には追討の諸藩と協議あつて諸隊に凱陣の命を傳らる

一元治二丑年正月十五日長州服罪長防鎭靜に付御進發御後備御免被　仰出　將軍家御進達無之此上長州御處置は於江戶被　仰付旨なり

一四月朔日塚原但馬守御手洗幹一郞を以被　仰遣たる趣旨於長州違背之時は速に再征將軍家御親發

の旨被　仰出

幕府内閣にては尾張總督府の長州處置は寛に失し幕威に關すと不滿を抱き京都江戸の幕閣亦議協はす本年二月に毛利父子を江戸へ引致すへき使として大監察塚原但馬守監察御手洗幹一郎を長州へ派遣す此時長州にては五卿を五藩へ引渡の事より過激黨と保守黨之間に內亂を起し暴徒の魁高杉晋作等は四境の兵解くるを待て兵を擧け馬關を襲ひ保守黨を倒し糧食兵器を奪ひ勢ひ當るへからす遂に山口に打入り大膳に迫て悉く保守黨を戮し以て藩論を一變せしむ然る上は幕府の再征必然と覺悟し兵を各地に配置し盛んに兵備を修めたとへ長防二國焦土に歸するとも飽迄敵抗すへしと誓へりといふ

長州再征

一元治二丑年四月十六日將軍家御進發に付御旗本御後備被　仰出

去る二日御進發御供御願立に依て也同時に華城守衛御免も御願立之處御後備により御願之通本日相濟

一同年四月廿一日　將軍家御進發勢揃行軍　上覽として駒場野へ御成に付御陪觀被遊

昨廿日御進發日限五月十六日と被　仰出たり

一慶應元丑年（四月晦日改元）五月十二日

思召之旨被爲在征長御先手御總督被　仰付

右御總督之儀は形勢一層至難に迫り不容易御重任　尾州公には先きに御盡力又此回は最前德川

玄同公へ被　仰出も有之御兩公には御齒德も備り若輩之及さる處と御辭退被遊たれとも右御兩公には無御據御差支に付强て御勤可被成旨被　仰出

一同月十五日御登城御座之間にて御總督之儀　上意之上御差之御脇差御拜領

一閏五月四日江戸御發途明光丸に御乘艦九日紀州和歌浦へ御着艦

將軍家には五月十六日江戸御進發に付御着坂迄に大坂へ御出張可被成旨御達之上本記の如し

一是月御軍令を發布三軍の部署を定められ且つ荒濱に於て行軍を實撿あらせらる

征長御出陣御軍令

一今度相示し候軍令は　權現樣より　南龍院樣へ御傳へ被遊候　御旨を斟酌致し候條々に候間篤と畏り可申者也

一軍中は事少を以て第一の覺悟とす必要の兵器の外無用の道具堅く令停止也一手の物主と云へ共弁當并其弁當堅く不可持面桶水筒手飯は必す鎧の上に腰付に可仕候

權現樣　南龍院樣右之通に被遊候間茂承にも兵粮腰付に致し可申の條謹而可致承知候大河を隔險阻を越て小荷駄不續時にやたけに存候とも身つかれ力盡て働事不可叶間急度令下知所也堅く可守其旨事

一着到の節諸隊伍列の次第を整へ城内に建置候隊印札の下に折敷出貝の相圖を可待候尤時刻の期限に後れ候輩は可處法事

一金鼓旌旗の相圖を以て進止座作の約束を定候上は推前物前戰ひの駈引右約束を背候輩は可處法事

一總軍兵器の損し等に不心附物前に不覺を取又は合印兵器等落し候は心掛なき第一也尤可處法事

一晝夜共推行前後左右に物見を段々に差出し注進を遂へし敵ある時は晝は相圖の旗を動し夜は流星を用ひ後先へ可知事

一推前備立等に於て物語雜談友を呼合高聲高笑堅く停止たり縦親子兄弟を見掛候共互に可爲無言事

一舟渡川越險阻森林敵不意を襲節は供番之相圖にて總軍折敷て下知を可待事

一推前に一里に一度つゝ立止用事可相達其間に草鞋取替馬の口洗はせ沓打替等致し置申へし若推行中人馬共用を足候節は傍に退き相濟て元の伍列へ相加り申へし隊伍を亂し猥りに横行致し候輩は可處法事

一宿々へ着陣の節先宿はつれに段々次第を立固小荷駄雜人を先へ入れ宿陣の手配相濟候時目付使番相改相圖の貝を吹へし其時武者段々に推入へし野陣小屋取之時は諸隊備を立固小屋割相極候上下知次第に面々の小屋場へ行へし尤宿々幷小屋の善惡申間敷事

一宿陣へ着候はゝ供番十五町を境として八方を乘廻し敵之寄すへき所溝川之淺深切れ道深田橋堤馬の駈場都て土地の善惡宿陣を離れて屯の場所等能々伺之森林等に目印を建置歸るへし夜に入れは伏兵騤物見し置へき事

一敵地たり共民屋を燒田を苅野を荒し竹木を伐取或は押買押取堅く可爲禁制事

一陣中に於て打寄酒を飲婦女を近寄候事可爲嚴禁事

一軍中に私の仇なし相互に親睦し諸事勘忍を旨とし可申候萬一堪忍いたし難き儀有之候はゝ頭隊長

へ訴出へし若喧嘩口論に及候はゝ双方共可爲切腹事

一陣中にて馬不放樣堅く守へし若放し候時は拍子木五つゝ打て總陣へ知らすへし尤主人口附共可爲越度事

一陣中物頭當番を相定陣門を守へし出入の輩は約束の印鑑を以往來すへき事

一陣中諸頭の内三組火の番を定め一晝夜つゝ可相勤一組は火元にて火を防き一組は四隣に立分れ雜具を取出し一組は取出したる道具を警固すへし諸軍は武具し役所々々に急度備を設くへし尤火を失し候輩は可處嚴科事

一陣中毎隊一手を三分して一組つゝ武具し馬にも鞍を置二時替りに晝夜を相守るへし夜中俄に敵出るよし注進あれは物主番頭の小屋にて貝を吹拍子木をならへ打へし一番貝に武具着二番貝にて銘々小屋前に立靜りかへつて下知を可相待勿論風吹物すさましき夜は總軍武具して油斷すへからさる事

一陣中夜廻り宵と曉と兩度宵は亥子曉は丑寅大番小姓組書院番新番小十人出合にして三十人頭は目付二人なり何れも武具し手鎗持一人つゝ召連へし二手に分れ兩方より廻り屯所にて一所に成人數を改め小屋へ戻るへし廻り候内怪き者あれは生捕品に寄討捨の儀勿論たり夜廻り役人無言にて目付計り改て通へし物主番頭軍事奉行物頭の役所前にては夜廻りは誰と改むへし其時目付名乘て通る可事

一近習より陣廻りとして夜晝不時に廻り改むへき也時に寄茂承も交り廻る事可有之本廻番打廻りに

も自身代りて廻る事可有之條役所々々油斷不可仕事

一茂承自身物見する事有へし差圖の外は供一人も不可出尤下馬式禮等不可仕次に一手の物主番頭軍事奉行陣場取備立又は物見に乘出し候共無差圖輩は同道堅く停止の事

一敵の謀計見出に於ては其頭々へ密に申出し他言堅く致間敷候若敵の間者等搦捕候はゝ速に物主へ差出すへし手前にて拷問等致申間敷事

一小屋出打立前に一番貝に起て兵粮支度し二番貝に武具して馬を牽出し小屋前へ出並を作り三番貝に可推出事

一供番は一二里先へも乘拔地形の善惡備の立所一番手二番手三番手の脇鑓迄掛引自由を得へき地形を見積り尤物前にて者敵の備の得失勝負之相色掛りしほと可扣の處とを見分目付使番に申談勝利の物見を可勵事第一也尤敵の可懸か不懸か引敵か陣取敵か夜討に可來か朝込有へき相色か詳に可見屆也常にも心に掛へき事

一備の中物主番頭軍事奉行目付使番供番計り馬に乘へし其外は不殘下立備の行儀を可作事

一戰の時は總小荷駄一所に集め小荷駄奉行下知可仕事

一使番物見間次等の注進一二三四の次第を相定へし若自分の働きの爲居留り大事の注進遲參に及ひ候はゝ可處嚴科事

一物主番頭をくれ候て可懸時をぬかし又は早く立候て卒爾の働を致させ懸引其圖をはつさせ候はゝ使番と組頭の越度なれは少しも油斷仕間敷事

一無下知して恣に自己の働をなし軍令を犯し候輩武勇拔群たり共可處嚴科事

一掛指揮の時は如何樣の惡所成とも懸るへし纏指揮の時は勝負最中成共一手の旗本へまとふへし敵の首取掛り捨候共其身越度に不可有事

一陣小屋にて夜討朝込宵込日中の早懸有る共其當る一隊の兵防き戰ふへし其外は下知なき以前出合へからす堅く備を設け外の敵を可相待事

一鎗丈け二つ三つに詰寄鐵砲にて打倒候共合戰は大事の儀に候條高名を心掛首取に備を不出樣に堅く可致下知候勿論折敷候時敵懸り來るといふ共物主番頭無下知以前に不可立起懸指揮懸貝の時一同に鎗入へき事

一諸頭諸隊長兵士の功罪を詳にし賞罰を公に言上すへし若私意の取計有之に於ては可處嚴科事

一或は高名を實驗に入ん爲又は手負死人を舁ると號し勝負未決内に大事之物場を不可退初より終迄役場を離れす可抽戰功名手柄の儀は物主番頭軍事目付使番糺明を遂け致言上の條其物主番頭組頭等を差置旗本へ首持參の儀可爲越度其組の物主番頭取次さる高名は許容不可成但一番高名か勝れたる首にて物主番頭の差圖にて旗本へ持參は格別の事

一懸口勝負前にて手負死人を不可取除人數を引揚候時可舁歸事

一組付大番頭等大事の物場に向ひ候はゝ一足も不退物主番頭等一枕に可遂討死事勿論たり若はつし候て見殺棄殺候者は嚴敷可遂誅戮又物主番頭は己か組下手勢は不及申他の備にても難儀に及ひ候處見殺候はゝ切腹可申付候大番頭並諸頭若討死致し候節は各組頭の分其組を下知し備を勵し合戰

を可相遂事

一上下共に他人の忠を盜傍輩を不可出拔就中奪首拾ひ首似せ首仕候はゝ逃候よりは恥辱なれは可處重科事

右之條々堅く可相守若於違犯の輩有之者（一本ナシ）（隨罪の輕重）可處嚴科者也

慶應元年閏五月

御名御花押

按するに　昇平三百年に近く天下干戈の事を知らす殊に軍機密なるを貴ふの余弊は敢て秘すへからさるをも特に秘して血判誓約他言他見を嚴禁の習慣をなし故に寛文の軍令さへ誰知る者なかりし也然るに征長の事起て幕府軍令を公布す隨て本記の如く發令せられたり蓋し寛文令に基き幕令に照し時勢適應の制定ありしならん　幕府の令左の如し　參照に備ふ

御軍令條々

一今度毛利大膳爲征伐進發に付旗下並諸軍勢萬事相愼不作法の儀無之樣下々に至迄入念可申付事

一喧嘩口論堅く令停止之若違背の輩有之於ては理非を論せす双方成敗すへし或は親類縁者の因を存し或は傍輩知音の好に依り荷擔の族是有に於ては其科本人より重かるへきの旨急度是を申付へし自然用捨せしむるに於ては後日相聞るといへとも其主人重科たるへき事

一軍中相討堅禁制たるへし若止事を得す相討する時は慥なる証人を立可申事

一先手を差越仮令高名せしむるといへとも軍法に背く上は重科に處すへき事

但先手へ相斷すして物見に出へからさる事

一子細なくして他の備へ相交る輩於有之は武具馬具ともに是を取へし若其主人異儀に及はゝ可爲

曲事事

一人數押の時不可騎道の旨堅可申付猥に通輩は曲事たるへき事

一地形又は敵の機に應し時宜の指揮可有之間此旨兼て可心得事

一降人生捕候者猥に不可殺害候事

一諸事奉行人の申旨不可違背候事

一時の使として如何樣の者差遣すといへとも不可違背事

一持鑓持筒は可爲軍役の外長柄差置持すへからさる事

但長柄の外持たするに於ては主人馬廻り一本たるへき事

一陣中に於て馬を取放すへからさる事

一田畠作毛を苅取或は竹木切り取る事堅令停止附押買狼藉すへからす若違背の族有之をいては可爲曲事事

一小荷駄は右の方に付可相通軍勢に交らさる樣兼てより堅可申付事

一舟渡の儀他の備に相交らす一手越たるへき事

一下知なくして陣拂並人返の儀一切停止事

右條々堅く可守此旨此外载下知狀者也

慶應元年五月四日

御黑印

御下知狀

覺

一御軍役の人馬員數の儀は慶安度御定の通に候得共大小銃は增加可致事勿論に候事

但弓隊の儀は勝手次第たるへき事

一御行列前後の次第堅可相守若猥なる輩有之に於ては曲事たるへき事

一御先手の大名一日代り可相勤候右に准し毎隊の先鋒も申合番代り可相勤候事

一押前の時用事有之行列を離れ候はゝ其趣其筋へ相斷器械僕從は其場へ殘し置用事終て速に馳付行列に馳付へし若病人有之節は慥の證人相立其筋へ斷置可申若證人又は斷なくして後れ候者は嚴科に處せらるへき事

一押前の時山谷森林等の所は敵方より伏兵可有之も難計間諸隊心附通行致すへき事

一騎馬の者用所有之時は必す馬を脇へひかせ用を調へ追付乘へき事

一馬に沓掛させ候節は道脇へ乘のけ沓をかけ本の馬次へ並ひ乘へし其後如前乘入るへき事

一馬はりつく時は後の馬脇道へ乘のけ前の馬次へ可乘其後追付可乘入事

一乘馬は小荷駄とも持主の名前何番隊と申事相記し候札立髮の邊へ結付可申事

一軍中に於て若馬を取放す者は過料を出させ口取は其品に寄可爲沙汰事

一御陣中物靜に可致候たとへ何樣の儀有之といへとも下知なくして立騷くへからさる事

一御宿陣にて毎夜四方へ篝火を焚き御先手番兵の者二三人にて遠見番相勤可申篝火之人夫は陣場奉

行より差出薪は御代官より差出可申事
但御宿陣四方にかきらす毎隊にて焚候も不苦候事
一毎夜寢す番は一隊を十分の一の心得にて寢す番致し巡邏懈怠なく相勤可申事
但頭支配は節々相廻り毎隊の番兵も是に准し晝夜守衛専一の事
一御陣中火の用心油斷あるへからす尤火薬の儀は別て入念取扱晝夜に限らす番兵嚴重附置相守可申
若過ち有之節は曲事たるへき事
一御陣所跡に麁略の儀無之樣毎隊諸向隊長の面々急度心附組支配下に至迄嚴重可申付事
一陣中味方の變を聞或は敵の様子を聞候者は晝夜に限らす早速其節訴へ可申事
一夜討並忍の者警衛無油斷可相嗜敵方の樣子は晝夜に不限穿鑿致し其樣子に依り差圖の次第有之へ
く間諸向遠見幷聞者は懈怠なく相遣し置敵の樣子相探らせ可申事
一諸向並頭支配は勿論下々に至迄公用なくして互に往來致し候儀無用たるへき事
一謀書矢文捨文張訴有之節は目付候人其儘にて大小御目付へ相達し可申事
一銘々得道具勿論御貸渡し相成候器械損失有之節は早速其筋へ可申出若器械損失の爲に後れを取候
儀有之に於ては曲事たるへき事
一落人の儀は男女幼少の者に限らす即刻搦取差出へし若し隱し置もの有之に於ては曲事たるへき事
一陣中に於て傳染病相煩候者有之節は小屋内に差置申間敷早速其旨其筋へ相斷薬用手當可申付事
一御出征中は親族忌服受くへからさる事

但父母の忌は三日勤番可相除事

一毎（朝）（一本旦）夕七時御本陣に於て大小御目付より合詞合印を諸向頭支配主人へ申渡し即刻諸向幷面々の組支配下々の者へ申渡すへき事

但時宜に依り本文に拘るへからさる事

右之條々於違背の族は隨科の輕重可被處嚴（科罰カ）の旨依　仰執達如件

慶應元年五月四日

周防守

伊豆守

豐後守

伯耆守

和泉守

美濃守

雅樂頭

三軍部署

前軍

總督　安藤飛驒守

手勢

頭役騎馬三十七人　同步行立二十人　士分　百九十一人　徒　六十二人

御預同心四十五人　刀指平中間共百四十一人　力士　十一人　獵夫七百七十五人

總〆千三百八十一人

大御番頭　富田甚左衛門　大御番組頭共廿八人　同助　廿五人
大御番頭　佐藤宇右衛門　大御番組頭共廿八人　同助　廿四人
大御番頭　土生廣右衛門　大御番組頭共廿六人　同助　廿六人
大御番頭　菅沼九兵衛　大御番組頭共廿九人　同助　廿三人
御先手物頭竹田弁五郎　同心　廿六人
岡山勘解由　同心　廿六人
川合善大夫　同断
岡見庄兵衛　同断
松平三郎太郎　同断
御目付　葛西左平太　久世三右衛門
同助　小倉惣兵衛　吉田三九郎　大（津）（一本浮）五百次郎　小笠原次右衛門
御徒目付六人　御小人目付五人　御小人押假役共　十人　御用廻二人
御使番　岡見市郎　三上甚大夫　西川又太郎　山田彌作
奥御右筆　一人　御用部屋書役　一人　御供番　四人
御鐵砲奉行助　一人　御鐵砲方役人助共四人　御藥礎　八人
鐵炮細工人　四人　御醫師　三人　弟子　一人
大炮隊長　大草幸之助　大砲隊肝煎共五十二人　遊兵隊同共　廿四人

小荷駄警衛銃手隊々長　林　淺右衛門
橋爪流　軍學者　五　人
陣屋支配　宮本孫之丞　清水九輔
陣屋掛　六　人
小荷駄支配愛宕直左衛門
傳法御藏奉行　一人
手　代　五　人
御口之者初旗持等　三十六人
同心初　十八人
六　尺　二　人
「總計　二千百十八人」
（一本アリ御）中　軍
橋本六郎左衛門（一本アリ殿）
山　兵　四十人
有本左門（一本アリ殿）
大御番頭　芦川甚五兵衛
同心一組　十三人

小荷駄警衛銃手隊肝煎共　三十一人
音貝役　三　人
元〆初　廿九人
小荷駄掛　九　人
手代初　六　人
在夫取締　一　人
大工諸職人六十一人
御軍事方役人　一人
「内　戰士千八人」
同　心　廿　人
歩兵隊長世話役共四人
大御番組頭共三十四人

名取金蒼藥世話　二　人
小買物方初六尺等　廿八人
御代官　一　人
胡亂者改　一　人
町與力　一　人
同認物勤　一　人
山兵頭取　二　人
歩　兵　九十人
同　助　十八人

大御番頭　松平六郎右衛門　大御番組頭共三十人　同助廿一人
同心一組十三人
御小姓頭　江川左金吾　斉藤政右衛門
御小姓頭取七人　御小納戸頭取二人　御小姓十三人
御小納戸十九人　同々様勤二人　御小姓目付二人
御小姓同心七人　伊賀十六人　坊主十五人
六尺十五人
御用人奥詰隊長並　宮地久右衛門　小浦惣内
表御右筆御書方二人　同日記方二人　表御用部屋書役四人
同吟味役一人
宮地久右衛門一隊　奥詰三十一人
小浦惣内一隊　同三十人
江戸　同十五人　奥御供方六人　常御供六人
御書院番頭　富永平十郎　御書院番組頭共十六人　同助十人
御小姓組番頭　山名主殿　御小姓組頭共十九人　同助八人
御軍事奉行　中村廣人　小出平九郎　宇佐美三郎兵衛
附人三人　坊主三人　御軍事方十人

六尺　四人

新御番頭　堀田右馬丞　新御番組頭共廿七人

小十人頭　加藤彌右衞門　小十人組頭共廿七人

御旗奉行　二人　御旗同心　廿人　御旗方　廿人

御中間　三十人　諸隊旗持　五十人

御鎗奉行　一人　御鎗方　五十人　手代り　十人

御持筒頭　丹羽彌平太　同心　二十人

同　堀田竹之助　同心　廿人

同　海野兵左衞門　同心　廿人

同　豐島半之丞　同心　廿人

五十人組之頭　戸田孫左衞門　同心　廿二人

御徒頭　宮地權右衞門　御徒組頭共三十七人

御目付　長坂主馬　有本式部　堀内六郎兵衞　野口駒五郎

御徒目付　六人　御徒押　六人　御目付方認物勤二人

御小人押　十人　御小人目付　十人　御用廻り　五人

六尺　二人

御使番　杉浦彌五左衞門　長谷川甚兵衞　牧野内匠　小笠原金三郎

岸和田八十郎　小野田竹次郎

御醫師　十二人
與御右筆　二人
御鐵炮奉行　一人
細工人　四人
御召御具足奉行一人
御同朋　二人
御道具支配　二人
同代り御中間百八十五人
御馬賄手代　二人
御臺所頭　一人
御臺所人　六人
御鷹方　廿一人

御納戸頭　橋本彦兵衛

六尺　三人

大砲隊長　鈴木忠大夫

鶴鴿御伺受　廿人

弟子　四人
御用部屋書役　一人
御鐵炮方　四人
手代　二人
坊主　七人
御小人頭　一人
御馬預　五人
御口之者初　八十人
御臺所見廻役　一人
御賄人組頭共　七人
御納戸御番　二人
御仕立師　三人
大砲隊　五十人
入子砲打　十五人

儒者　二人
御供番　六人
御[illegible]　九人
六尺　一人
六尺　四人
御小人　百五人
馬醫　二人
御駕頭　一人
御臺所人組頭　一人
小間使初　三十三人
坊主　二人
抱大砲隊　十八人
中上り銃隊　廿六人

常上り同　廿六人
殺手隊長　廣井奥右衛門
同隊長　田中右中
遊兵隊肝煎共十九人
軍學者　六人
小荷駄奉行坂部惣太夫
六尺　三人
御中間頭　一人
傳法御藏奉行　一人
六尺　一人
拂方御金奉行　一人
陣屋奉行三木五郎兵衛
陣屋掛　五人
同本役　一人
同同心　五人
司農配下取締在夫取締兼勤　二人
小荷駄警衛　二人

殺手隊　五十二人
殺手隊　四十九人
弓手隊々長共廿六人
音貝役　九人
小荷駄支配　一人
御貸物方助　二人
御中間方役人　二人
御藏元〆　三人
拂方御金同心初四人
陣屋支配　二人
大普請方元〆初八人
大普請同心組頭一人
御作事元〆初　廿人
手代　八人
同步兵　四十人

遊兵隊肝煎共廿七人
遊兵隊同　四十三人
小荷駄掛り　九人
御勘定同心　二人
御中間組頭初四十五人
升取　一人
持人　四人
付人　一人
同貝吹　四人
同見分役　一人
御大工頭助共　二人
胡亂者改代役　一人

天文方　二人　試物　一人　蘭學者　一人

名取流金瘡藥用世話　二人　流星御用　三人

江戸より奇兵隊

引經（御用人文武場總裁）栗生兵助

（先手物頭文武場頭取）牧彌藤次　文武場勤　一人

武藝者

大嶋流　六人　外山流　四人　田宮流　五人

金田流　二人　西脇流　六人　竹森流　三人

一傳流　五人　關口流　四人　竹内流　三人

西洋流

頭取肝煎　十一人　大砲隊　十四人　銃隊　四十八人

鼓手　五人　御醫師　一人　表御用部屋書役一人

文武方認物勤　一人

「總計　二千二百七十一人」　「内戰士千五百三十八人」

（一本アリ）（御）後軍

總督　水野大炊頭（一本アリ）（殿）

手勢頭分　廿六人　目付　三人　使番　二人　兵士　二百十八人

與力　十五人　　同心　七十九人　　足輕　百六十人　　中間口附五十五人
從者　七十五人　　在夫　三百五十八人　　諸職人　　馬　十二疋
「總〆九百七十五人」

御軍事奉行向　笠　三　之　助
御軍事方　三　人
同認物勤　一　人
坊　主　一　人
六　尺　三　人
小普請支配小　笠　原　庄　大　夫
小普請組頭共五十一人
同　高　木　兵　大　夫
小普請組頭共五十一人
御目付　海　野　九　郎　七　田　中　勘　八
助　岡見四郎兵衛　黑田左兵衛
御徒目付仮役共　五人
御小人目付　五　人
御小人押　七　人
同　仮役　三　人
御用廻　二　人
御使番　大　畑　善　次　郎　駒木根伊織
御供番　二　人
御用部屋書役　一人
陸　尺　一　人
表御右筆御書方一人
陸　尺
御鐵炮奉行助　一人
御鐵炮方　三　人
御藥礑肝煎共十二人
細工人　四　人
御醫師　三　人
大砲隊長　淺　井　縫　殿　助

同申合勤　中嶋欽一郎　大砲隊　五十一人　名取金瘡方　二人

音貝役　三人　鉦鼓　三人　小荷駄警衛殺手隊　廿四人

同銃隊　二十一人　陣屋支配　一人　同掛り　四人

下役　三十人　小荷駄支配　五人　同　十一人

御賄人　二人　小間使初　十五人　御金手代　二人

御金才領小役人二人　御代官助　一人　地方手代　四人

胡亂者改代役　一人　御口之者組頭勤廿五人　傳法御藏奉行　一人

手代初　六人　大工幷諸職人五十二人（程 一本ナシ）　諸隊旗持　二十人

「總計　千四百四十二人　内　戰士七百七十人」

「總軍合五千八百三十四人

但兩家之外は在夫從者共除之

内戰士二千三百十九人」

慶應元丑年藝州御出陣前和歌山荒濱に於て

御先備押前

（押前とは行軍の事人數押の義也相備へとは本藩の士として先鋒安藤家へ附屬隊也總て職名御の字なきは安藤家の家士也）

下目付一人　相備御供番　伊藤馬之助　斥候　一騎　徒目付一人　目付一騎　（一本アリ 旗五本）
下目付一人　　　　　　　　　　　　　　　一騎　徒目付一人

（一本ナシ 旗五本）　大馬印 馬印旗奉行一騎　大炮八門 打手五十人　大炮隊頭 一騎馬旗

御先手同心一組　岡山勘解由騎馬　籏　御先手同心一組　相備御先手物頭 川合岡右衛門騎馬

籏　御先手同心一組　相備御先手物頭 柴山又右衛門騎馬　旗　御先手同心一組　相備御先手物頭 平井藤右衛門騎馬

旗　御先手同心一組　相備御先手物頭 鮎澤隼人騎馬　旗　相備銃隊 大御番廿人　旗　同鎗手隊 大御番廿人

相備大御番頭代り 田代七右衛門騎馬　旗　同銃隊 大御番廿人　旗　同 同 大御番廿人　旗　同鎗手隊 大御番廿人

旗　馬印　相備大御番頭 菅沼九兵衛騎馬　同御使番 山田彌作　同軍學者 橋爪万右衛門　同弟子 木村三左衛門
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　同弟子 吉田金平

同弟子 神野八郎太郎　相備御目付 吉田三九郎 騎馬 下役　御預り同心 二十三人　指揮役 一騎　家老役旗 御預り同心 二十三人　指揮役 一騎
橋爪武之助
山田信之丞

先手番寄合二十七人 同三人騎馬　馬印 家老一騎 大御番頭代り　目付一騎 屬役　足輕廿五人　物頭一騎

鎗手隊廿人　同頭一騎　徒十二人　同頭一騎　手筒　手弓　小馬印　五本の鎗

鎗遣五人　小傘印　三番貝八人 相備軍貝役三人　軍事頭取一騎　馬印　家老一騎　長刀

近習頭一騎　籏　安藤飛驒守 騎馬　側御用人二騎　使番一騎　醫師 儒者 軍事方 右筆 書役 武具方 坊主　持鎗二本

側鎗一本　濟具　小銃隊廿一人　同頭一騎　物頭一騎　鎗手隊二十人

目付一騎 屬役　一小荷駄掛り一 一本ナシ 役人　小荷駄奉行　役旗　山兵十六人　同頭一騎　鎗手十五人

馬印　小荷駄奉行家老一騎　相備 奥御右筆　同 表御右筆　同 御醫師　同 御用部屋書役　御鉄炮奉行 下役共　小荷駄支配 同

相備 陣屋奉行 下役共　同 御軍事方書役　御目付久世三右衛門 下役

慶應元丑年藝州御出陣前和歌山荒濱に於て

御本備押前御行列

御供番騎馬
三刀屋平七郎　同　成田八大夫　御使番騎馬
岸和田八十郎　御目付騎馬
野口駒五郎

小銃隊
赤旗　大御番組頭
丹羽五兵衛　小銃隊
同　大御番十二人
大御番十三人　殺手隊
白旗　大御番組頭
代り室四郎右衛門

殺手
同　大御番十二人
大御番十三人　大御番　同心組頭　同心七人
同心七人　大御番頭
騎馬
芦川甚五兵衛

同勢　歩兵隊
赤旗　歩兵隊六十五人
歩兵隊六十五人　歩兵隊長
宇治田彌左衛門　手勢　御年寄

騎馬
有本左門　同勢　御徒目付　御徒押
御徒押　御小姓組　騎馬
細井善助

御旗奉行　騎馬竹内弁五郎　大馬印　同心一人 同心一人　中黒御旗二本　同心二人 同心二人

御紋付　御旗七本　同心七人 同心七人　御旗奉行　騎馬牧村悌次郎　御鎗方廿五人 同廿五人　騎馬御鎗奉行 川上七郎

赤旗　大炮隊 同　同肝煎小林貫 同松村紋右衛門　大炮隊長 騎馬鈴木忠大夫　赤旗　御秘所御筒受 西郷丑蔵初

赤旗　江戸大炮隊 肝煎遠藤忠介　同小銃隊 同森本庫次郎　白旗　同殺手隊 同妹尾宇平次　騎馬隊長牧彌藤次

赤旗　小銃隊御持筒　同心組頭　同心十二人 同心十二人　御持筒頭 騎馬海野兵左衛門　小銃隊赤旗

御持筒　同心組頭　同心十二人 同心十三人　御持筒頭 騎馬丹羽彌平太　旗　御持筒同心組頭

同心十二人
同心十二人
御持筒頭　騎馬 堀田竹之助
小銃隊 赤旗
御持筒同心組頭
同心十二人
同心十三人

御持筒頭　騎馬 豊島半之丞
殺手隊 白旗
肝煎 石野傳一
同 堀口文右衛門
殺手廿五人
殺手廿五人
殺手隊長　騎馬 廣井奥右衛門

殺手隊 白旗
新御番組頭　飯田彌一郎
相川彌右衛門
新御番十二人
新御番十三人
新御番頭　騎馬 堀田右馬之丞

殺手 白旗
御書院番組頭　松下彦右衛門
的場喜左衛門
御書院番十二人
同　十三人
御書院番頭

騎馬 富永平十郎
殺手隊 白旗
御小姓組與頭　吉田主馬
原田權之助
御小姓組十一人
御小姓組十一人

御小姓組番頭 騎馬 山名主殿　　御小人目付　　同押　　三音貝　　同 音貝方　　御軍事方　御軍事方

銃隊赤旗　銃隊赤旗　　肝煎 關木根又市郎　同 糸川兵大夫助　　小銃隊 赤旗　　御徒組頭　　銃手御徒十二人　銃手御徒十三人

御徒頭 騎馬 小田金吾　　小銃隊 赤旗　　小十人組頭　　小十人十二人　同 十三人　　小十人頭 騎馬 加藤彌右衛門

赤旗常上り打　赤旗中上り打　　肝煎 和田作内初二十六人　同 南方雄之進初二十六人　　弓手隊 白旗　　弓手十二人　弓手十三人　　弓手隊長 騎馬 河村彌八郎

御供番 夏目次郎兵衛　御供番 佐野圭左衛門　　三音貝　　同 音貝方　　御軍事奉行 騎馬 宇佐美三郎兵衛　　御軍事方 同 御馬印

御小姓組
御小姓組
騎馬 小關正部
同 木野龜楠
御用人
騎馬 栗生兵筋
御召御具足奉行
土肥太郎兵衞
御目付
御使番

騎馬 堀内太郎兵衞
騎馬 杉浦彌惣右衞門
長谷川勘兵衞
御長刀
御同朋
同
中奥御番
同
御刀筒
同
同
御側向騎馬
御側向騎馬

奥詰隊
同
御馬預
同
同
(一本ナシ)
(同同同
同同同)
御
御小姓
御小姓
御側向騎馬
御側向騎馬
中奥御小姓

中奥御番共
御馬預り
御馬預り
奥詰隊
奥詰隊
奥御供方
御小姓
御膳番
同同同同同
同 同
奥御供方
御小姓
御膳番
同同同同同
同同同
同 同
御小納戸頭取
御小納戸
御小姓
御小姓頭取
同同同

御側向騎馬
御側向騎馬
御小鎗
奥醫師
奥詰醫者
御目付
常御供役
御使番
騎馬 長坂主殿
牧野内匠
小笠原金三郎
常御供
常御供
十文字御鎗
御雨傘
御手傘
御直鎗

御床几御荷

御挟箱

御蓑箱

御茶辨當（御數寄屋坊主）

御水箪笥
御水箪笥

伊賀
伊賀

御馬印之内
此所ニ押候事

奥御右筆組頭 騎馬 茂田一次郎

奥御祐筆

表御右筆
御鷹匠組頭

御書方
日記方
御鷹匠
御鳥見共

御鐵炮奉行
御小姓目付
表御用部屋書役
表御用部屋吟味役

御軍事方書役
御具足奉行
御目付方
馬醫

表醫師
天文方
金蕃方

御軍事奉行 騎馬 中村廣人

御小姓頭 騎馬 江川左金吾

同 同 齋藤政右衛門

御用人 同 宮地久右衛門

同 同 寺内藤次郎

御用人 同 小浦惣内

御小人押
御小人押

御道具支配
御小人頭

御挟箱
御挟箱

押之御長柄
押之御長柄

御馬預り
御馬二疋
御馬縮り
御厩方之者

白旗 殺手肝煎
殺手

堤嘉市郎

惣同勢

殺手
白旗

肝煎 河野幾之助
同 川口龜次郎

隊長

騎馬 永田隼人

小荷駄支配

小荷駄方諸役人
小荷駄方諸役人

小荷駄奉行

騎馬 坂部惣大夫
同心

拂方御金奉行
小荷駄方
傳法御藏奉行

白旗 殺手

肝煎 柳原平馬
同 大石民助

隊長

騎馬 田中左平

陣屋奉行

陣屋方役人
陣屋方役人

陣屋奉行

同心
同心

騎馬 三木五兵衛

陣屋方 御徒目付
陣屋方御小人目付

御徒押
御徒押

御供番

騎馬 大須賀五郎左衛門

御供番

騎馬 野呂權大夫

御使者

同 小野田竹次郎

小銃隊 赤旗

大御番組頭
吉見喜左衛

小銃隊大御番十二人　　役手　白旗　　大御番組頭　貫志二郎右衛門　　役手大御番十二人
小銃隊大御番十二人　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　役手大御番十二人

大御番　同心七人　　大御番頭　　騎馬　松平六郎右衛門　　同勢　　赤旗　　大炮方
　　　　同心組頭　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大炮方
　　　　同心七人

郷兵三十人　　郷兵隊頭取　　田口右衛門八　　手勢　　御年寄　　騎馬　橋本六郎右衛門
郷兵三十人　　　　　　　　　西郷彌左衛門
　　　　　　　　　　　　　　中村龍次郎

同勢御徒目付　　御徒押
　　　　　　　　御徒押

幕府衰亡論に　將軍家進發の條に記して曰く今度の御進發は關ヶ原御進發の吉例に依らるへしと沙汰發布ありて金扇の御馬印な事け其昔三河武士と世に知られたる勇士の末孫たる旗本勢共物具旗指物麗はしく用意して供奉したれ共二百八十年間の太平に慣たる肉食の紈袴子弟にて事の用に立へき者は數多しとも見へさりしと信四月廿一日の駒場野勢揃を窺ひしか眞の所

論の如く思はれたり和歌山の此行軍亦幕府に擬せられ且つ平素鹵儀の體をも折中新たに組織せしならん御定め軍役の通りには非らさる也頗る猛斷を以旗指物抔幾分か省かれしも猶所記の旌旗は力士輩之を捧け竿頭より二本綱を張り兩人して左右へ牽き行きしさ（也[一本ナシ]古風想ふへし）（且つ[一本アリ]弓手隊槍手隊三音貝乃至御長刀簑箱御刀筒なんさ恰も御參府御旅行然たるを免れさりしは未た銃炮接戰の世界を嘗めさる以前迚偵かの軍學者流にも古風の習慣脱却し得さりしものか是其當時に在ては勢ひ止を不得諸藩の兵制も亦然りしさ聞へぬ）

一閏五月十八日若山御出陣和歌出島浦より御乘艦申中刻大坂木津川沖へ御着子刻幸橋邸へ御着座

前軍總督安藤飛驒守は十七日出發後軍總督水野大炊頭は十九日船にて出發す

一將軍家には同月廿二日御入京御參內廿三日迄二條に御滯城廿四日御發途廿五日大城御入城

一御出陣に際し御留守法令を被　仰出左之如し

出陣中家中一統殊更神妙に致し留守大切に相守可申候國元穩ならされは出張之鋭氣を挫くものなれは諸事氣を付鎮靜を第一に心掛可申事

一火之元猶更大切に心掛可申事

一出陣先之儀を色々風説訛言等有之候とも妄に驚動致し間敷候萬一虛言飛語を以衆心を動すもの於有之者取調之上可處嚴科事

一打寄酒を飲及遊行ケ間敷儀一切可爲禁制幷音曲令停止候事

一喧嘩口論堅く令禁止諸事堪忍を旨とすへし若心得違右等之儀に及ひ候はゝ双方共に可處法事

一家中之者初出陣之供致し自然婦女老幼のみ留守致し候筋は盜難等之患無之樣四隣より念入氣を附候樣萬一不慮の變有之候節は互に近隣より應援致し可申其旨篤と可心得事

一町中に與力幷同心晝夜打廻り候間其旨可心得事
　但町々晝夜張番を置胡亂者有之節拍手を打可申筈
一城内出入之儀は一之橋關口之外は〆切に致し置候樣申付置候間其旨相心得事
　但萬一出火非常之節は格別之事
一三の丸門々之内京橋口廣瀨口湊橋口之外〆切に致し候樣申付置候間其旨可心得事
　但出火非常之節は格別之事
一町中は木戸を打往來相改通し可申事
一辻藝幷芝居相撲等總て人寄之事は勿論可爲嚴禁寺社會式祭禮等は成丈愼密に致し可申事
一領分境本道間道幷津々浦々猶更嚴重に取締他所者入込候儀念入取調可致事
一城下入口衝要之場所へ晝夜不怠番兵居置出入取締可申事
一浦々遠見之儀猶更嚴重に申付置候間異變沙汰有之候とも猥に動搖すへからさる事
一非常之相圖於有之は何時にても早速定置場所へ馳付下知を相待可申若心掛薄く油斷致し時刻に後れ候者は可爲曲事事
一家中初末々に至迄時々内聞役人差出取調させ可申候間不行狀無之樣厚心掛可申事
右之條々於相背は隨罪之輕重嚴敷可處法者也
　慶應元年閏五月

昭和七年十月五日印刷
昭和七年十月二十日發行

南紀徳川史 自第百八巻 至第百十五巻

編輯者 堀内信

發行者 和歌山市宇須町三百七十八番地 山崎順平

印刷者 和歌山市新堀四丁目三番地 福本芳太郎

印刷所 和歌山市新堀四丁目三番地 福本印刷所

No 358

第十二回配本

發行所 和歌山市宇須町三百七十八番地 南紀徳川史刊行會
振替口座大阪四五八五二番